THE CENTRAL REVIEW

中央公論

春期大附録號

第廿八年第五號　第貳百九拾號

故田岡嶺雲譯並註

和譯漢文叢書

新時代の最大要請は時間と勞力との節約也

本叢書は此要請に應じたる者也

●全十二冊完成 總クロース堅牢美本

原文の一字を換へず且懇切明晰なる註釋を加へたる者

●内容裝釘等の詳細見本は郵券二錢を要す

第一編 和譯老子莊子 正價壹圓 郵税拾貳錢

第二編 和譯韓非子 正價壹圓廿錢 郵税拾貳錢

第三編 和譯戰國策 正價壹圓廿錢 郵税拾貳錢

第四編 和譯荀子 正價壹圓 郵税拾錢

第五編 和譯史記列傳 上下二冊 正價各一圓卅錢 郵税各拾貳錢

第七編 和譯七書 附鬼谷子 正價壹圓 郵税拾貳錢

第八編 和譯淮南子 正價壹圓廿錢 郵税拾貳錢

第九編 和譯墨子列子 正價壹圓拾錢 郵税拾貳錢

第十編 和譯春秋左傳 上下二冊 正價各一圓卅錢 郵税各拾貳錢

第十一編 第十二編 和譯東萊博議 正價壹圓卅錢 郵税拾四錢

◎批評◎

『譯文の簡淨、註解の明晰、亦嶺雲に非ざれば倣し得ざるの持色あり』（東京朝日）。『これならば譯と云ひても原文の妙を損ぜず且つ今の青年にも讀易からん』（萬朝）。『想ふに是れ譯者嶺雲の學と識との他に超卓せるに因るなるべし』（日本及日本人）。

戸川秋骨先生譯 ▼上下二冊總クロース金字入美本▲

エマーソン論文集

上卷正價壹圓四拾錢 下卷正價壹圓貳拾錢 郵税各一冊拾貳錢

【五版】上卷目次 ●歴史論 ●自特論 ●保償論 ●靈法論 ●戀愛論 ●友情論 ●細慮論 ●勇壯論 ●大靈論 ●圓環論 ●智力論 ●藝術論

【再版】下卷目次 ●詩人論 ●經驗論 ●人格論 ●性法論 ●進物論 ●自然論 ●政治論 ●名目論 ●改革論

高橋五郎先生譯【十一版】

ベーコン論説集

總クロース全一冊 正價一圓二十錢 郵税十二錢

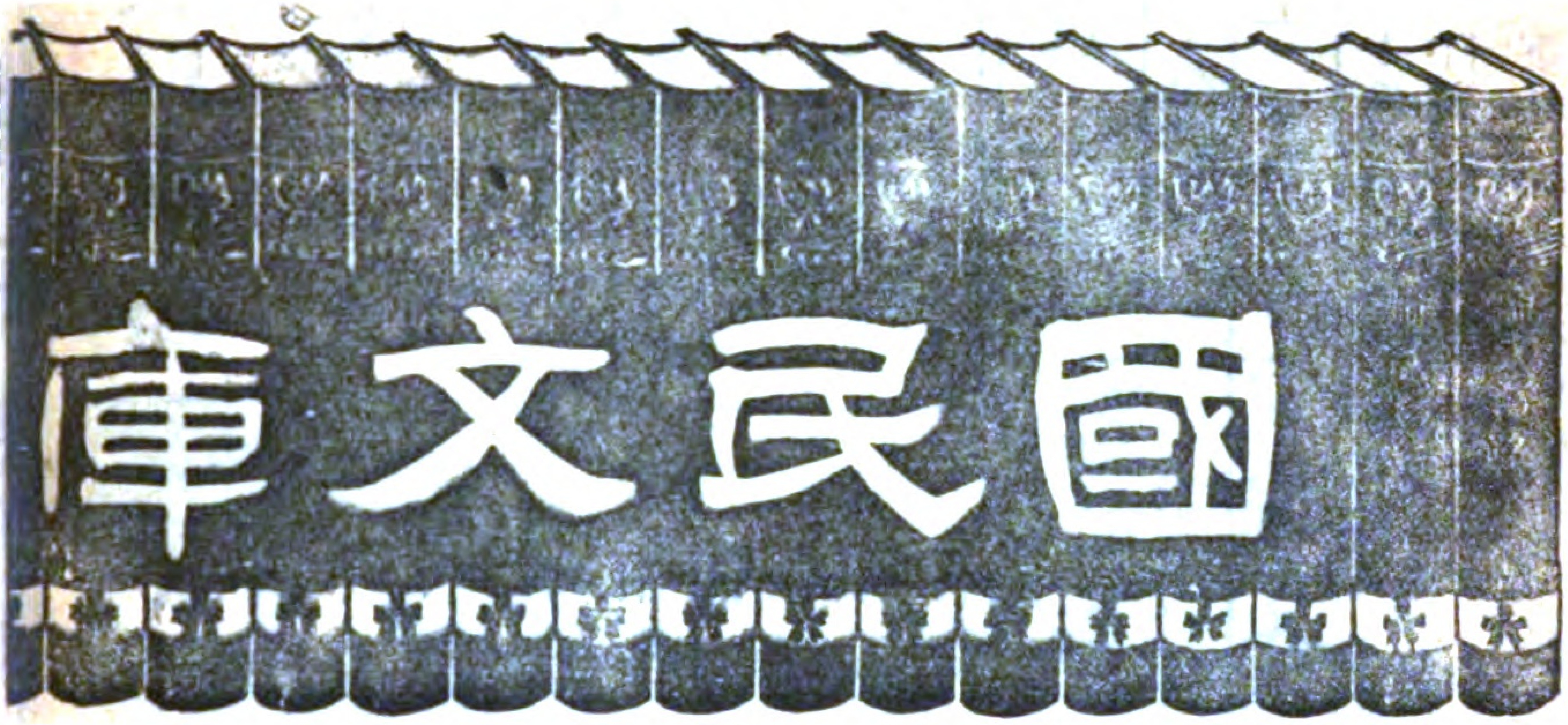
世界論文集中の珍として三百年來學者の爭て愛誦する所、全篇五十八の名什、句々金玉『之を讀む二十回、讀む毎に新意味を發見し來るとは眞なり、以て處世經たるべし、以て思想辭典たるべし』。

（前付の一）

發行所 東京神田區雉子町 振替東京七九九五番 玄黄社 全國書店賣捌

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

◉申込期日 四月三十日限



駸々滔々日に新事物に趁るは現下の趨勢也。然れども若し舊を捨てゝ新たゞ是れ喜ばゞ、國に歴史なく、世に綱紀なく、人に個性なく、唯泛々として流萍の根なきと選ぶ所なけむ。温古知新は識者の覺悟也。況んや文藝の傑作物に至りては千古常に新たなるをや。譬へば之を我が和歌俳諧に見るも萬葉の古調は新派歌人の典範にあらずや、芭蕉蕪村の正風は新派俳人の師表にあらずや、古を知らずして今を語るは昧者の事也。今本文庫は遍く歴史、稗史、小説、戲曲、傳奇、和歌、俳諧、隨筆等に亘りて、三千年來我國民の血肉を成せる日本文學の名著傑作を網羅し、加ふるに選擇の嚴正、校訂の精密、挿畫の秀麗、裝幀の雅美堅牢なる等、當代無比の叢書たること世に定評あり。而も既に配本を了へたる一萬有餘部、數十萬の册子は全國需要者の大部分を滿たしたるが如かりしも、尚本文庫の聲價を認めて之が重版の希望者益々多きを加ふるを以て、茲に更に國民文庫三十六册の第四版、及び續國民文庫十八册の第二版の刊行を企て、而して之を以て斷じて最終の刊行たらしめんとす。若し夫れ校訂、印刷、挿畫、製本等の大改善の上に顯はるべき本會が絶大の努力は、如何に至つて乞ふ本會の從來採り來れる方針に徵して之を察せられんことを。

尚云ふまでもなく、正編三十六册は日本文學のオーソリチーたるものは盡く之を網羅し、續編十八册も亦傳世不朽の名著を蒐めたるものなれば、二者孰れを藏せらるゝも、書齋、家庭の珍寶たるは勿論、若し夫れ兩者兼れ藏せば、天下の至寶、至樂何者か之に若かむ。

略規

◉國民文庫 菊判大本三十六册――會期滿二ヶ年――會費毎月金貳圓廿錢（送本料は別に申受く）――入會金貳圓（但最終の會費の內に補充す）――配本は貳ヶ月に三册（一册金壹圓四十六錢餘に當る）――裝幀中村不折意匠

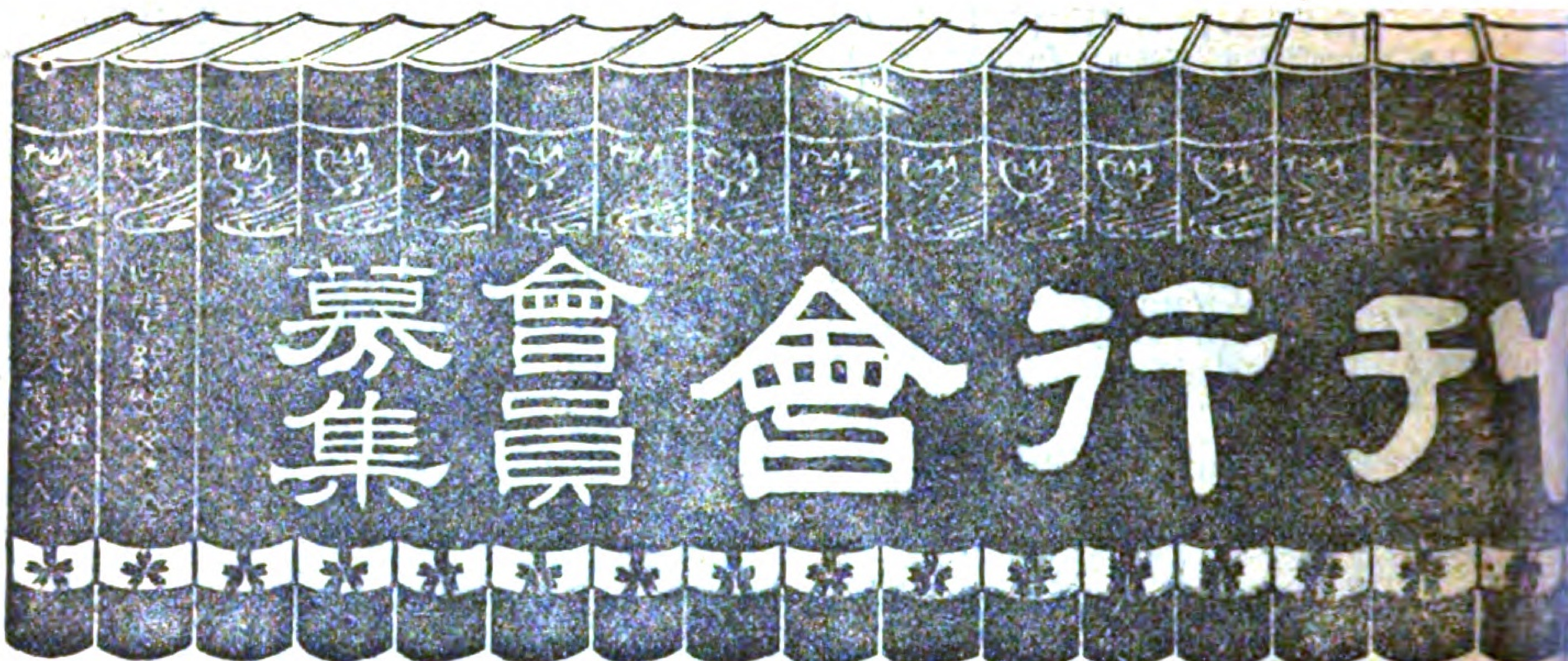
◉續國民文庫 菊判大本十八册――會期滿壹ヶ年――會費、入會金、毎月の配本數等は同上

評議員（イロハ順）

芳賀博士　萩野博士　(故)畠山健　上田博士
山路愛山　松井教授　(故)藤岡博士　(故)小杉博士
朝比奈知泉　佐々博士　(故)本居博士　關根博士

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



○詳細規定及見本は御申越次第進呈

本會會員中の著名の人士及學校等の一部（次第不同）

[illegible]院
東京帝國大學
東京高等師範學校
東京美術學校
東京高等工業學校
東京女子高等師範學校
學習院女學部
文部省圖書課
齋藤海軍大臣
山本農商務大臣
渡邊宮內大臣
後藤新平君
仲小路廉君
三島彌太郎君
志村源太郎君
岩崎小彌太君
澁澤榮一君
三井八郎右衞門君
住友吉左衞門君
豐川良平君
山本條太郎君
第七高等學校造士館
上杉茂憲君
渡邊國武君
安樂兼道君
鶴原定吉君
尾崎行雄君
菊池大麓君
山川健次郎君

[illegible]司公爵
德川侯爵
三條公爵
近藤廉平君
曾我祐準君
村井吉兵衞君
床次竹次郎君
寺島誠一郎君
早川千吉郎君
藤堂高紹君
松平乘統君
二條公爵
青山幸宜君
小松謙次郎君
日比翁助君
高村光雲君
海野勝珉君
佐々木勇之助君
岸清一君
朝吹英二君
柳生一義君
桑木嚴翼君
瓜生外吉君
矢野恒太君
大澤謙二君
芳川顯正君
古河虎之助君
川崎金三郎君
德富健次郎君

木戶侯爵
橫田國臣君
佐藤進君
寺崎廣業君
和田英作君
山內萬壽治君
肝付兼行君
嘉納治五郎君
坂本俊篤君
常陸山谷右衞門君
[illegible]村歌右衞門君
松本幸四郎君
高田實君
金子堅太郎君
佐竹侯爵
伊集院公使
松崎藏之助君
濱田玄達君
山之內一次君
德大寺侯爵
藤山雷太君
內田嘉吉君
井上匡四郎君
寺尾壽君
伊東祐亨君
久原房之助君
山口鋭之助君
高松豐吉君
島津公爵

東京市神田區
小川町一番地

國民文庫刊行會

（電話本局七三二一番　振替東京一八五七二番）

信用なき出版と卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

元帥伯爵伊東祐亨閣下題辭
陸軍大將伯爵黑木爲楨閣下題辭
陸軍步兵大尉侯爵西鄉從德閣下序

（新刊）

戰場二十年

滿州六之屯保正康玉軒大人書簡
山岡子爵家　追武會編著

菊版總クロース
美装函入
定價金壹圓廿錢
小包送料金八錢
支朝臺樺三十錢

後の鐵舟山岡子爵大に感ずる所あり、人の止むるを肯かず、日露の役に陸軍通譯官として從事す、素より決意の子爵非戰鬪員の身を以て、單身敵陣に突入し或は日本馬隊を率ゐて全軍の心膽を寒からしめし事幾百回、子爵素より筆硯の士にあらずと雖、陣中能く戰爭の裏面内情を忌憚なく記して十三卷の日記を有す、爾來憚る所あつて函底に秘する事八年然れども是れを永遠に埋むるに忍びず遂に此の書を編す、今や漸く秘密裡に埋沒せられんとする同役の裏面内情は、本書に依つて初めて世人の知る所となる、本書は即ち既出戰記と全然其の描寫を異にせるものにして多くの新事實は讀者をして戰慄せし哭め泣せしめ抱腹せしめて悲壯淋漓たるものあり。戰爭の大活畫!!!戰爭の大秘史!!!

發行所　東京神田西小川町一丁目　振替口座東京二〇四五五番（電話本局四五四七）　盛文社書店

「明治教育思想史」「大英國の教育」著者
「帝國教育」主筆
冷泉 藤原喜代藏先生著

人物評論 學界の賢人愚人

最新刊

◎菊版六百五十餘頁總クロース全一册 定價壹圓八十錢 送料内地金十四錢

教育界第一流の人物評論家たる著者が學閥學派に超越せる身を以て教育社會の表裏を爬羅剔抉し教育行政界、議政界及び學術界の現存人物約四百名の頭臚を大膽痛快に活殺して賢人愚人と俊才鈍才との面目を紙上に躍如たらしむ眞に是れ學界唯一の照魔鏡にして一讀失笑傍人を怪ましめ再讀快哉を叫んで教育社會の實相に通曉せしむ。

宮内省御藏版

勅撰 國民經典 幼學綱要
全一册箱入美本 定價壹圓五十錢

勅撰 三千年史 大政紀要
全一册箱入美本 定價壹圓六十錢

藤原喜代藏著（再版）

大英國の教育
全一册約一千頁
定價金參圓

發行所 本郷區千駄木町五七番 文教會
發賣所 神田區小川町十八（振替一四一四六番） 大野書店

幸田露伴博士編著（川村精雄書伯裝幀）

日本精英

菊版洋裝本綴美麗紙數壹千六百餘頁

全二冊函入

正價金五圓

特價金四圓

小包料 內地二十四錢 臺灣、朝、清五十錢

特色特價提供期限 大正二年五月十日

特價提供

山秀水清是れ我國の精英なり、其間に生れて名聲を後昆に傳ふべき人、是れ我國の眞精英也。本書は此眞精英たるべき偉人英傑千有餘名の逸話を蒐集す然れども漫に逸話を蒐集したるものといふを已めよ。古來の碩學が畢生の文才を注いで偉人英傑を傳したる金聲玉振の名篇より更に最も趣味ある個所を拔萃したるものなり。或は之を碑文に取り、或は隨筆に取り、或は自傳に取る其取捨の方法一定せず。之れ先生博學の致す所たり而して先生本書を編著するに數萬卷の古書斷篇に身を沒頭して幾十の門生を督し二年の歲月を費して成るの勞苦を營めらる。以て先生空前の大名著述とすべく、亦此種出版界の記錄を破りたるものといふべし。いま上に內容の特色を列記す。

內容特色

■神武以還維新に至る迄其人物の歿年順を追ふて列序す

■人名辭書の如き乾燥なるものにあらず、又單なる逸話集の如き膚淺的のものにあらず

■天皇・大臣・英雄・僧侶・神官・操觚者・畫家・任俠等あらゆる方面を網羅す。而して娼や妓や氣骨あるもの其間に赫灼として時に妖艶の美化を開くあり。

■文章は最も名文にして最も趣味あるものを取る。而して可及的其傳すべき人物に最近き人の名作より取る例へば藤原鎌足は惠美押勝の家傳を取り、平將門は將門自身の陳狀に取り、武田勝賴は理慶尼の記文に取り、直江山城守は自身の『答豐光寺書』に取りたるが如し。すべて其人物の面丰風采を遺憾なく傳へんことを期す

■神武以還の文章の變遷を見るに於いて大文學史たるべく、各時代各人物の面丰風采を窺ひ得るに於て大裏面的歷史たるべし

■本書に要せられたる參考書數萬卷

此故に何人も一本を購ひて家寶とすべし。殊に日本の精英に接し以て教育家の資料となること多大なるを以て全國各小學中學校より注文山の如く來る

（前付の六）

發行所 東京市本鄉區龍岡町 振替東京三〇五八番 電話下谷四〇七九 電話下谷一六七二 聚精堂

P. A. J. DAGNAN BOUVERET



A PORTRAIT

中央公論



春期大附録號
廿八年第五號
第二百九十號

憲政擁護の理義

(一)

舊臘廿一日を以て成立したりし桂内閣は、今年二月十一日を以て辭表を提出し、同廿一日裁許を得たるまで、在職僅かに六十三日間のみ、從來の内閣中未だ曾て是より短命なるはあらず、而して其の後を承くるもの、西園寺侯に非ずして意外にも山本伯也、山本伯二月十二日を以て大命を拜し、政友會と折衝を重ぬる十日、幾多の曲折を經て二月廿一日夜始めて其の内閣を組織し得たり、十二月五日西園寺内閣總辭職を爲せし以來、僅々七十八日、未だ三ヶ月ならざるに三たび内閣の更迭を看たり、實に政治上未曾有の急變と稱せざる可らざる也。

此の政變に於て、總ての政事家皆大なる負傷を爲さゞるは莫し、西園寺侯は事を處する無性にして、且つ政黨首領として部下を統率する威信なきことを表白し、上は勅諚を遵行するに堪へず、下は一黨を率ゆる力なくして、竟に全く政界より死するに至れり、其の慘害を受くるの大なる、蓋し第一に擧げざる可らず、名聲世界に知られ、有爲の政事家として許されし桂公も、此の政變の激勢を奈何ともする能はず、時局を收拾する能力なきを證して、一敗殆んど地に塗れたり、西園寺侯に亞て最も重傷を負へりと視ざる可らず。

憲政擁護なる名稱の發明者たる岡崎邦輔氏を始め、氏と共に閥族討滅を絶叫して一時天下を風動したりし犬養毅、尾崎行雄の諸氏に至りては、殆んど常勝の月桂冠を戴けるが如きも、其の實また大なる負傷者たり、看よ、岡崎氏は其の三十年來の政友と別離し、多年愛撫せる政黨を捨去りて、形影煢然、僅かに二十幾人の少數者と別壘に據るの外なきに至れるに非ずや、尾崎氏に至ては、何のため多年の情誼を捨てゝ進歩黨を去り、單身飄零伊藤公の傘下に潜入せりや、當時の初心を點檢して、而して今岡崎氏等と進止を一にし、退きて舊友たる國民黨にすら入る能はざるを思はゞ、豈寒燈影薄くして轉た前途の荒寥を嘆ぜざらん、犬養氏は初め大石氏より政友會に賣らるべきを切言して再三諫止されしを聽かず、邁進奮闘したるも半途にして政友會に賣られ、其の志を成す能はざりしのみならず、大石以下多年の舊友に去られて、左なきだに少數なりし國民黨は彌よ小となり、脱黨者相亞ぎて僅かに四十幾人を存するのみ、假令尾崎岡崎の一派と合同するも、尚ほ七十人を保つ能はざらんとす、之をしも失敗といはずし

て何とか曰はんや。

政友會に至ては、松田、原の兩氏漸く其の威望を減せんとする傾向あり、殊に脫會者多くして其の唯一の誇たりし多數黨の實を喪へるに止まらず、地方の民心漸く平らかならずして、黨中正さに群疑滿腹の狀態にあり、折角山本内閣を擁立したるも、却つて民心に離叛せられて、漸く崩落の運に向ふもの丶如し、況んや西園寺侯去つて而して之に代る人物を得ず、前途益々蕭條の感なきを得ざるをや、政黨として最も重大なる怪我を爲せるは此の黨也。

斯くして有らゆる政事家政黨を負傷せしめたる政變は、抑も如何なる性質のものぞ、所謂憲政擁護閥族打破なる運動の眞の理義は如何、苟くも政局の眞相を研めんとするもの、冷靜に且つ仔細に之を考慮するを要す。

（二）

我が國に憲法なくば則ち止む、苟くも憲政ある以上、努めて之を擁護せざる可らず、國體を紊亂する不逞の徒に非ざる限り、誰か敢て之に異言を挾まんや、且つ閥なるものは停滯瀦溜して病痾となれる也、學閥も黨閥も軍閥も、有らゆる階級の閥は悉く之を打破するを要す、況んや藩閥をや、政權を私する薩長藩閥をや、犬養氏等の唱導する藩閥黨閥の打破は閥族其のもの丶外は、何人も之に異存なき也。

然れども犬養、尾崎、岡崎諸氏の運動其のものは、果して理義の一串して渝らざるものありや否や、諸氏は戰ふて勝たざりしと雖も、成敗利鈍素より顧みる所に非ずと稱す、殆んど諸葛亮が漢賊兩立せざ

るの意氣を挾むに似たり、洵に壯烈純忠なるが如きも、仔細に點檢すれば、其の主張する所に透徹せざるものあり、試みに看よ、桂公は身自から政黨を組織するとを公表し、閣僚たる加藤男(外相)、大浦子(内相)、後藤男(遞相)を始め、仲小路(農相)、若槻(藏相)、柴田(文相)の諸氏皆黨員となり、純然たる政黨内閣主義を實行するとを聲明せるに非ずや、然かも憲政擁護派は之に滿足せず、依然目するに閥族内閣を以てし、議會開議の劈頭に不信任案を提出し、其の施政の良否を視ざるに先つて、早く之を勦滅せんとを唱導し、『是れ主義の爭ひ也、政策政綱を問ふの遑あらず』と主張したりしに非ずや、山本伯は一武弁として君國に奉公すべきを誓ひ、進んで政黨員たるを肯んぜず、世依て目して薩閥の巨頭と做すに拘らず、突如天邊より落下して内閣組織の大任を擔當し、政友會より松田、原、元田の三氏を引きて閣班に列せしめ、更に高橋(藏相)、奥田(文相)、山本(農相)の三士をして急遽政友會に入らしめたるも、之を桂公が内閣の首班に立て自から一黨を組織して其の主と爲れるに比すべくも非ず、然かも桂内閣を閥族と稱する以上、少くも山本内閣も亦閥族なりと爲さゞる可らず、論理上必然の結果素より疑を容るゝ餘地なき也、隨つて憲政擁護派の之に對するや、義宜しく桂内閣に對せしと同じく、最先に不信任案を提出して之と決戰する所なかる可らず、然らずんば理義に於て終始一串する所あらざれば也。

然るに憲政擁護派の山本内閣に對するや、敢て初頭より不信任案を提出せず、或は内閣の政黨主義なるや否やを問ひ、或は官制改正の意圖なきやを問ひ、太だしきは國防問題、税制問題を質問し、其の爭ひを主義より一轉して政策の上に移したるものゝ如し、是れ桂内閣に對して『素より主義の爭ひ也、政

策政綱の爭ひに非ず」といへるに視れば、實に太だしき逕庭あるに非ずや、乃ち理義に於て明白に一串透徹を缺き、寧ろ著るしく矛盾撞着を示すに非ずや。

國民を覺醒せしめて眞に憲政擁護閥族打破の大義を實行する誠意あらば、一時の成敗利鈍を顧みず、理義を一串して一身之に殉ずる至純の精神なかる可らず、彼の憲政擁護派が理義の根本に於て先づ此の矛盾撞着を敢てして慚つるなく、世間また毫も之を怪む莫きは、吾人の私に驚駭を禁ぜざる所とす、嗚呼斯の如くんば、憲政擁護閥族打破の眞價夫れ幾許ぞや。

諸葛亮は漢賊兩立せざるを以て、成敗利鈍を顧みず、身自から魏の大軍と戰ふて終に五丈原に死せり、若し僅かに一の上表を以て其の言を壯にするに止まらば、後世誰か其の純忠に泣くものあらんや、唯だ其の言を實行し、一身之に殉ぜしがために、永く懦夫をして起たしむるのみ、彼の憲政擁護派の人々にして、單に口舌の雄たるに止まる如くんば、抑も何の顏あつて能く天下眞骨頭あるの士に見ゆべきや。

（三）

少しく過去に溯りて一瞥するも、吾人は憲政擁護運動の餘波に就て大なる疑惑を懷き、今に至るも渙然氷釋するに至らざる也。

憲政の要は法治の實を擧ぐるに在り、自他の權義を嚴格にして苟くも漫りに相侵犯することなきに在り、萬機を公論に決するの精神を以て、總ての政爭を公明寛大ならしむるに在り、然るに憲政擁護派の主張の峻烈なる、其の反對者に下すに有らゆる惡名を以てし、國民の感情を煽して能ふ丈け憎惡を強く

するに力めたるを以て、群衆の激昂は恰かも佛國革命時代の調子に近く、幾んど法治の實を失はんとしたりき、看よ、輦轂の下に在ては、其の悦ばざる所の新聞社を包圍し凌辱し、器物を破壞し、太だしきは放火の凶事をも敢てせんとし、其の餘波、警察署を襲擊し、電車をすら要擊したりしに非ずや、言論機關を壓迫するに暴力を以てし、竟に交通機關をも迫害するが如き、凶險殆んど其の倫を絶せりと謂ふべし。

京都、大阪、神戸等に至ては、更に之より甚だしきものあり、即ち反對代議士の家屋を襲擊し、無辜の家人を凌辱し、或は其の門戸を汚し、或は其の牖戸を破壞すると連夜、個人の名譽を蹂躙し、治安秩序を無視すると實に其の極に達す、夫れ法治の實を喪ふこと斯の如くにして、憲政の眞髓果して那邊にありとするぞ。

眞に憲政擁護の至誠ありて、他の非立憲を憤慨せば、躬自から立憲的に公明の態度に出づるを當然とす、人の名譽を毀傷し、家屋を破壞し汚損するが如き凶險なる行動は、全く憲法々律を無視したるもの也、啻だに非立憲の太だしきのみに止まらざる也、凡そ斯の如きは、憲政擁護運動直接の結果に非ざること勿論也、彼の外國新聞の評せるが如く、都市の住人が凶險なる暴行を爲し易き結果に外ならずと雖も、憲政擁護派の人々が其の言議を峻烈にし、反對者の名譽を無視したる責任は斷じて逭るべからず、況んや各都市を通じての凶行に對しても、動もすれば却つて得意の色を示すが如き形迹こそあれ、同志を訓誨し警戒したることは幾んど未だ之あらざるをや。

（四）

地球の峻急驚ろくべき大運行が、地上に生々する吾人々間の殆んど知覺せざる間に行はるゝが如く、國家社會の大なる改革も、知らず識らずの間に實行せしめて、後より顧みて殆んど阿然たらしむるが如きは、實に經世の妙諦たり、我が大化の大改革は、其の初め殿中に於て一の凶横なる大臣を戮したるに止まりなりき、維新の大改革も、兵禍の慘殆んど西南役よりも甚だしからざりき、歐洲列國の多くは、血を流し屍を積みて辛ふじて憲法を獲たりしも、我が國は君民和協、太平を謳歌する間に其の欽定發布を看たりき、政治型式の一變して政黨政治となるが如き、また多くの紛擾を覩ずして之を實現せんことは、經世の士の心より希望する所なるべし、吾人は故に桂公の如き「藩閥の末兒」（是れ公自からの言なりといふ）が自から進んで政黨を組織するを歡迎し、寧ろ之を善導して以て其の大成を期せんとす、百方妨害して之を一種の畸形兒たらしむるが如きは、心あるものゝ爲に非ず、眞に憲政擁護の至誠ある志士は、知らす如何の感をか懷ける。

大正の新政を以て第二の維新と做し、大に憲政の効果を擧げんとする洵に良し、然れども維新なるが故に必らず紛々擾々を重ねざる可らずとなし、強ひて峻烈なる議論行動に出づるは何の心ぞや、勝海舟と西郷南洲とが談笑の間に江戸城の授受を了せしを覩よ、德川氏の處分を寛大にしたりしを思へ、當時若し勢ひに乘じて江戸城を屠らんと欲し、慶喜必らず誅るべしと做さば、其の結果は如何の狀たりしとするぞ、大正の維新も亦官民和樂、祥氣瑞々の間に擧げんとは、純忠至誠の士の希ふ所ならざらんや、

況んや不世出なりし先帝の陵土未だ乾かず、世は現に諒闇の間にあるをや、又況んや東洋日に多事にして、隣邦の事、殊に關心を要する秋なるをや。

吾人は素より憲政擁護閥族打破に反對するものに非ず、否、天下何人も之に異存なきのみ、唯だ冷靜に理義を昭らかにし、極めて公明寛大に、眞に立憲的に和平の間に之を遂行せんと欲す、漫りに隣邦の革命運動に摸倣し、若くば遠く佛國革命時代の亂調を佩ぶるに與せざるのみ、偉大なる改革を遂行するに、一波をも鏃蕩することなきは、是れ我が國體の精華にして、國民の共に誇とする所、歷史は能く之を證するに非ずや。

（五）

理義よりいへば、彼の憲政擁護派なるものは、山本内閣に對しても亦桂内閣に對するが如く、一擧塵戰せざる可らざる筈也、是れ前に論ぜし所の如し、然れども吾人の山本内閣を視る、猶ほ桂内閣の如し、凡そ憲政の要は政治の型式に拘泥せんよりは、政治の性質に重きを措き、是を是とし非を非として以て政治の進步向上を期するに在り、憲政擁護派の人若し昨非今是といはゞ、吾人また之を可とし、政治上の爭議をして峻烈過酷ならしめず、努めて公明寛大にして以て眞に憲政の要道に進まんことを勸告せんと欲す。

抽象的に何人にも異言なき旗幟を飄へしながら、其の議論を峻峭苛烈ならしめて國民の感情のみを激發し、徒らに政局を紛糾せしめ、其の結果總ての政黨と政事家とを死傷せしむるが如きは、實に大に考

慮を要す、思へ、バルカンの形勢復舊せば、歐洲列國の手は轉じて我が東亞に伸びん、隣邦の形勢は實に岌々乎たり、經世の士、切に省みざる可らざる也。

兒戲の如き政戰

（一）

政友會が第三次桂内閣と妥協せんと欲して、心中私かに之を期待せるも、桂公に其の希望なかりしがため、竟に尾崎、岡崎の諸氏に追隨し、心ならずも彼の憲政擁護閥族打破の運動に參加するに至りしことは、今や蔽ふ可らざる事實也。

山本内閣は、謂ふまでもなく薩閥と政友會との聯立内閣也、首相山本伯が黨人ならざるがために、政友會員たる松田、原、元田の三氏は頗ぶる不如意の地位に在り、乃ち聯立といふと雖も薩七政三の割合に過ぎず、然れども妥協の名によりて他人の内閣に盲從するよりは聊か可なりとすべく、所謂一夜漬の黨員たる高橋男、奥田、山本の三士を優待して、永く黨員たらしむるを得ば、更に一層妙なるべし、唯だ閥族打破の名分に對しては、天下を見るべき顏無しと雖も、之を忍ぶは政友會の特長也、目的の爲には手段を擇ばざること、實に自由黨以來の特色にして、昨是今非、必らずしも理義に拘泥せず、實利を趨ふて苟くも之を逸せざること、其の從來の本領なれば也、然るに政友會が近時動もすれば名分に因は、

れ、其の面目を蔽はんがために、山本内閣に對して諸種の希望を出し、延きて兒戲に齊しき政戰を現ぜるは、心ある者の噴飯を禁ぜざる所なるべし。

（二）

彼の憲政擁護派に屬する國民黨及び政友俱樂部は、山本首相に對して（一）政黨内閣主義を執るや否や、（二）陸海軍大臣を現役將官に限るを以て憲政の運用に支障なしとするや否や、（三）文官任用令を改正するの意思なきや否や、（四）陸軍二個師團增設を實行するや否や外一二件を質問し、特に第二第三の兩項を以て極めて重大なる問題と做し、而して政友會また内閣及び自黨の安危存亡の決する所なりと稱し、諸種の會合を催して内閣に迫る所ありき、蓋し此の四項は、曾て政友會が桂内閣に肉迫したりし所にして、一より三までの各項は政友會の主張と稱せられ、而して其の第四項は即ち西園寺内閣傾覆の唯一原因と唱へられて、政友會の極力反對せし所のもの也。

然れども質問者の特に力を注ぐ所の問題は、果して政治上の重要問題なりや否や、陸海軍大臣を現役將官に限るの制を撤去し、普通文官を任命し得るとするも、次官以下各局長其の他の僚屬が多く軍人軍屬なる以上、一の文官大臣あるも之を奈何ともすべからず、唯だ有力なる内閣、有力なる首相ならば、優に陸海軍を打へて意の如く經綸を行ふを得べし、論より證據、西園寺侯は二個師團增設案を固執せる一陸軍大臣を抑ゆる能はずといひ、上原陸相辭職後其の後任者を得がたしと稱して内閣を瓦解せしめたるも、桂公は多く聲色を動かすことなくして陸軍を抑へ、木越中將を擢んで陸相たらしめしに非ずや、

海軍の元帥以下大官聯合してストライキ的運動を試みたりしも、僅々三四日間に之を鎭壓し得たりしに非ずや、之を抑ゆると否とは、內閣殊に首相の力量如何に在り、制度の如き必らずしも多く問ふの要なきのみ、否、假令大臣のみを文官とするも、次官以下總て今日の如くならば、西園寺內閣の如きものは之を奈何ともすべからざるのみ。

此の事實を觀ずして、單に制度其のものゝみを改むるに由て、直ちに憲政の効果を擧げ得べしと做すは、是れ實質を問はずして、單に型式の變換のみに重きを措く支那人一流の見解と同じきのみ、支那人は淸朝を亡ぼして帝政を共和政に一變したるも、事實其の人民の被むる直接の効果は如何、共和政と帝政と、幾んど寸毫の差違なきに非ずや、區々たる陸海軍大臣の任命制限を以て、憲政の運用に支障ありと做し、之を以て重要なる政治問題と爲すが如きは、寧ろ兒童の見解のみ、吾人は以て陋なりとす。

文官任用令に窮屈の個處あるや言を俟たず、然れども之を改むる何ぞ多くの面倒あらん、技術官の行政官たる門戶を閉塞するが如き、勅任官にすら特別任用の除外を存せざるが如き、政府をして恣に地方官を易置せしめて、縣治紊亂の端を啓かしむるが如きは、宜しく之を改むべし、然れども是れ勅令を以て實行し得べし、何ぞ堂々たる政治問題と爲すに足らんや、且つ文官任用令を現在のまゝとするも、實際多少の不便不都合あるに過ぎず、憲政の運用に支障あるが如きことは斷じて之あらず。

吾人は事々しく此の質問を爲すものゝ眞意を解する能はず、殊に此の質問に對して相當の答辯を爲すに非ずんば、一黨の安危存亡に關すといふが如きは、更に解すること能はざる所也、政友會近時名分を

失ひ理義を紊して頗ぶる物議を招けるがために、之を回避する一手段として、此の官制改正問題を提へ來りしならん、其の志眞に官制改正に非ず、唯だ改正の名によりて以て我が黨の主張行はれたりと稱し、由て物議を免かれんと欲するのみ、乃ち山本伯たるもの輕く之に答へて其の局を結びて可なるのみ。

然るに山本伯が苦心慘憺、政友會と應酬を重ね、辛ふじて質問に答へたるも、其の答辯甚だ模稜なるが如きは、吾人の一笑を禁ぜざる所也、吾人は伯が政友會の後援を藉りて內閣を組織するに方り、此の種の問題をすら協定し置かざりし事實に徵して、今更其の苟合の意想料に太だしきを愕くのみ。

(三)

陸海軍大臣を現役將官に限るも、現行文官任用令を存置するも、素より多くの損益なし、之を以て政治當面の大問題と爲し、彼の憲政擁護派が更に再質問書を提出し、太だしきは由て以て內閣不信任の理由と做さんと欲するが如きは、果して何の心ぞや、國家の利害名譽に大關係ある外交上の問題にも非ず、國民の休戚安危に關する財政上の重要問題にも非ず、經世家の輕淡に視るべき小問題を捉へ來つて大問題と做し、政府も政黨も、互ひに靑筋を張り血眼と爲つて相爭ふが如きは、實に吾人の解せざる所とす、夫れ斯の如き度量識慮を以て政局に立つ、知らず國家を奈何せんとするや、吾人は玆に於て私かに深憂なきを得ざるのみ。

政友會が斯の如き問題を以て天下を欺むき、以て其の名分を紊せる失體を蔽はんとする、亦太だ陋也、而して山本伯が斯の如き小問題に囁嚅して明らかに語り高く言ふ能はざる亦頗ぶる怯也、區々たる官制

の改正の如き、以て淺薄なる愚俗を瞞すべし、具眼者を欺むくには足らず、否、今日の如き兒戲に齊しき政戰にのみ出頭し沒頭するは、識者の憫笑するよりも、寧ろ國家のため私かに痛歎する所也。（以上三月十二日稿）

公論

新政黨の首領たる 桂公の政治的經歴

無名氏

緒言

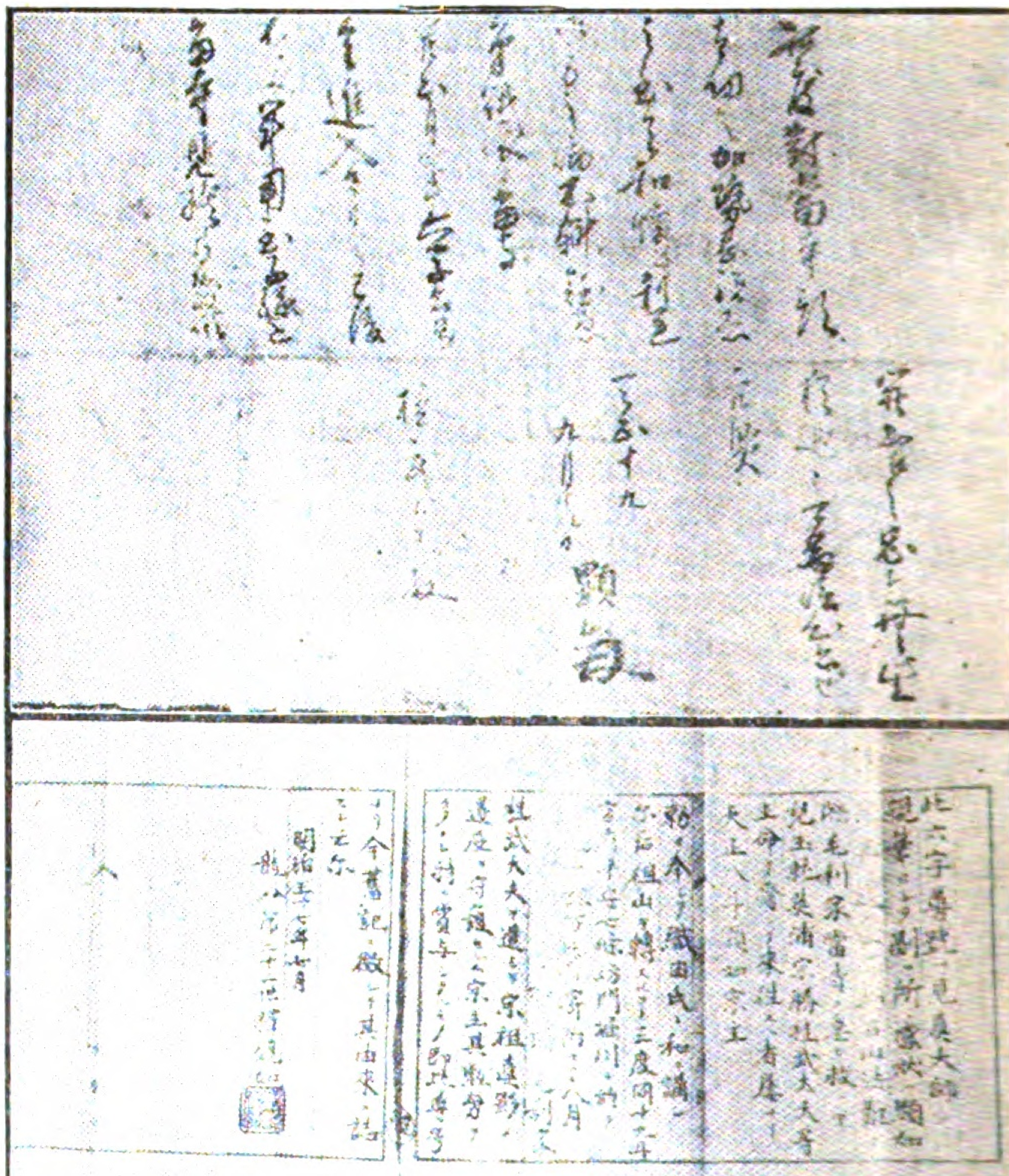
アントニーは言うた。予は該撒を葬る爲めに來た。頌德表を捧げる爲めに來たのではないと。予も亦桂公の政治家としての功績を述べ立つるが目的ではなく、只新政黨の首領として我國民が受取るべき桂公は何物であるかといふ事を語らんとするのである。未然を察せんと欲せば既往を觀よ。予が古き物語も畢竟新らしき需要に供せんが爲めである。

兎にも角にも今日に於て桂公程、個人として世間より、より多く注意を拂はれたるものはない。予が見る所を以てすれば、彼は凡俗界に於ける嫉妬の結晶體である。彼ほど憎まれたる者もなく、又彼ほど誤解せられたる者もない。即ち伊藤公の盛時と雖も之に加ふることが莫からうと思ふ。之も彼に取つては一種の名譽税であつて、當人としては別に苦情をいふべき理由もないかも知れぬが、社會に取つては少からざる損失である。政治家は社會の共有物である以上は、愛憎は別として、少くとも其眞相を審かになし置くとは、敵に取つても味方に取つても大切ではあるまいか。予は必らずしも予の語る所を以て、純一公平の觀察とは保證

せぬ、併し予の爲むる所は此れである、而して予の信ずる所は、此れである。

公の家系と家庭

桂公は弘化四年十一月廿八日長州萩に生れた。家は百廿五石を食む中士である。彼の系圖は、文學的兵法家大江匡房を出し、黑幕的政治家の標本といはれたる大江廣元を出したる大江家であつて、毛利家とは同宗である。廣元十代の孫桂左衛門尉廣澄が桂家の祖であつて、公は其の十一代目の相續者である。彼の祖先の一人桂武太夫は、實に毛利家の侍大將として、本願寺の石山城に、加勢に赴いて居る。當時、本願寺顯如上人よりの感狀は、今尚ほ公爵家に傳へて居る。只だ爾來追々微祿して中士になり下つたのであらう。



父は桂與一右衛門といつて最も辛抱强き人であつた。彼は右筆より檢使に轉じ、又大檢使に轉じ、江戸に往復すること廿五回の多きに及んだといふ。官吏としては、循吏であつたらうと思はる。家庭に於ては極めて溫良の主人であつて、絕えて其の妻子に向ても、疾言遽色した事はなかつた。母は中谷氏にして極めて凛々しき、勝氣のある、常に人後に落ちることを嫌うた人

であつて、家計は饒かと云ふにあらざりしも自から倹約を旨として、他を扶け他に奉ずるには極めて厚かつた。且つ又極めて耐ゑ忍ぶことの強き婦人であつた。父は常に公に向つて、我等は斯く小身者にて一生を送るが、汝は桂の家にて生れたれば――父は石部家より桂家に養子に行きし人なれば斯く言ひしならん――せめて使番をも勤むる身ともなれかしと言ひ勵ましたりといふ。又母の如何なる性格であつたかを知るべき一の事實として茲に語れば、或時桂公が學塾の歸途學友と爭ひ、其友が刀を以て立ち向ひたれば、公は其刀を取り上げ之を家に持ち歸り、再び游泳に赴かんとするに臨み、母に向つて、何人が來り請ふも此刀は決して返し賜ふなと申し置きたるに、果して前の友の家より使して、今日お宅に家の伜が刀を置き忘れたれば御返却下されたしと申し來つた。母は左様なるものは我家には御坐らぬとて之を刎ね附けたるに、使はイヤ其刀は貴家にあるに相違なしと申しゝかば、母は刀はあるが、此刀は我子が持ち歸つた刀て、何人にも渡すなと申し殘したと言ひ放つた。轉て又其家より使して前に忘れたりと申せしは全く我子の虚言てあつて實は本日途中にて甚だ不都合の事を致し、令息の爲めに奪はれたる次第なれば、誠に以て面目次第もなけれども今更ら致方なし、殿かに豚兒を戒め懲しめ置き候へば何卒枉げて返し賜はんことをと詫び來りしかば、母は武士は相身互ひ也。此上は何とて否み申すべきとて、將來を戒めて其刀を返し與へ、公が歸宅の後に其旨を告げたりといふ事である。之て此母が尋常の人てなかつた事が思はるゝ。それも其の筈てある。彼女の父即ち公の外祖父は、村田清風四天王の隨一と呼ばるゝ中谷靜心翁である。彼は村田清風を助けて藩政の改革に最も勗めた一人てある。其人物の如何は吉田松陰の武教講錄の一節を讀めば分る。

家兄（家兄とは、松陰の兄、杉梅太郎後に所謂民治翁）云門の歳已明倫館再興余初めて職官を得て館中の吏たり因て故の中谷翁を見る翁嘗に舊田太翁に嘱し再興の事務を理す翁云はく俗吏多く甘ふ當番缺くとも非番請るなと此の語の心は兎角事を處す

れば過誤も出來る者なれば大抵は人に讓りて己れ事を爲さゞるが如くし功名を求めす過誤を免るべしとの意なり然とも吾意獨り以て然らずとす當番の缺くべからざる因なり乃ち非番と云とも亦敢て自ら暇逸せざるこそ精勤とも奉公とも云へし事を爲さずして過誤を免るゝは何ぞ事に錬れて過誤なきに若かんと家兄深く以て然りとす是より官事を處する務めて人後に落さらんとを志すと云へり余も亦明倫館再興の事に因て初て翁を知る書生多く翁の大體に通せずして俗習多きを譏る然とも余翁の言論を見るに動すれば即ち古義に合ふ且其事を處して精勵なる如き今世の吏余未た其比を見す自ら云ふ人と約して未た嘗て人に後れす大抵人に先つと半時許なり官府に登る亦未た嘗て人に後れず壯歲以來夜臥未た嘗て二時に過きす即ち起て事を處す事なければ必す一事を假設して是を思ふと余辛亥の歲東遊公駕に從ひ翁と仝行す翁毎夜宿に着き多くは官事を理す事畢り一睡し即ち起て裝を束れ座睡するのみ翁常に云ふ武士たる者は人の爲めに寢首を掻かれては澄ぬと也と是を以て熟寐の時と云ふも一呼必ず醒む蓋し翁心性常に醒々故に能く斯の如し他なし是を以て官事に當るのみ然とも是獨り官戒のみに非ず武士道の錬磨亦實に玆にあり。

我が信ずる所を傍若無人に行ひ、一度志を立つれば必らず之を貫徹せずんば止まず計數に明らかに打算に長じ、實行力に富み、精力過絶老いて益々盛んなるが如き、桂公の一生を終始する性格は、少くとも此外祖父の血に負ふ所があるかとも思はるゝ。靜心翁は天保改革の際村田清風が、其言の容れられざるを以て職を罷め、三隅山莊に歸臥するや翁は彼を追跡し、涙を揮つて國家の重事を談じて三晝夜に及び、寢食爲めに廢した。流石の清風も其誠心に感じ、再び出てゝ政務を見るに及んだのである。翁は一生の中に三度迫塞せられ三度拔擢せられたといふ位に其身生には波瀾の多き人であつた。而して其最も理財の事に長じたるが如きは後來其外孫たる公が財政の上に特種の手腕を振つた事を聯想せしむるに足るのである。

維新前の桂公

王公將相寧ろ種あらんやと言ふ者あれども、彼は全くの草莽の民ではなかつたのである。固より彼も成上り者には相違ないが、嘗て成下つた者が又成上りして其成上り方が度外であるといふ丈けである。然しながら何れにしても彼は長州人である。長州には長州氣質があり、薩摩には薩摩氣質がある。人は薩摩を斯

波留多に比し長州を亞雅に比するも、果して其當を得て居るや否や疑はしい。薩摩人は斯波留多人に比すれば、より多く文學の嗜みもある、長州人は果して亞雅人程に美と歡樂とを愛好するや否や。彼等は恐らくはそれ程の餘裕はなかつたてあらうと思ふ。毛利家は嘗て山陽山陰を領したる大大名てあつた。二道の大大名が僅に長防二州の大名となつたのてあるから、彼等が經濟的壓迫を蒙りたるは餘儀なき次第てある。それと同時に精神的壓迫を蒙りたることも亦餘儀なき事情てある。それて長州人には如何なる英雄豪傑でも何となくコセ〳〵したる氣質がある。薩摩人には如何なる詰らぬものても、何處やら應揚に見ゆる風采がある。彼の如きも長州に生れたからには長州氣質を全く蟬脫することは出來ぬのてある。然しながら關ヶ原以來一種の彈力は、長州人の、少くとも志ある長州人の頭には宿つてゐた、殊に彼の生立ちの時代の長州は、尊王攘夷の本家本元てあつて、彼は實に其雰圍氣の中に呼吸し生息し、成長したのてある。彼は十四歳にして西洋式の練兵を習はんと欲して齡尙足らざるを以て先づ太鼓の打方を練習し、十七歲の時には藩の子弟と一團を組織し大隊組と名づけ、馬關の攘夷に向ひ、やがて御前詰となつて世子元德公に隨從し、上京の途に就たが、禁門役の敗報を聞いて途中より引き返した、十八の時には扈役に擢んでられ、二十歳の時には、石州口に赴き、中隊長の職を執つて幕兵と戰ひ、やがて又山口に歸つて扈從役となつたが其志てなく、動ゝすれば有爲の志氣抑ふべからざるものがあつた。藩公之を洞察して今より俗務に從ふを要せず、須らく學事に勉強すべしとの命を傳へられたから、公は恐懼措く所を知らず誓つて此恩遇に酬ひんとて學業に勉强したといふ。

慶應三年德川將軍政權を朝廷に返上する前特に藩公の命を受けて上京し、西郷隆盛に面會し、いよ〳〵將軍政權を返上し、毛利公父子位官を復せられ、父子の中速かに上京すべき詔勅を下されたれば、公は其詔勅を奉じて木梨精一郞と共に急遽山陽道に向つて出發した。當時幕兵は神戶兵庫の間に屯し、物騷至極てあつ

たが、夜を冒して明石に向ふ途中、舞子の邊より覆面頭巾を被りし異體の侍二人、彼等と前後して早駕籠にて同じ道を下るものがある、之は油斷ならずと思ひ、明石驛にて端なく出會はし、イザといはゞ臨機の處分をなさんとしたるに、其一人は木梨の面識あるもので馬關攘夷の際に馬關に來りたる水戸の浪士某とて新選組に加入したるものであつた。そこで態と近傍の旅店に伴ひ、共に饗宴をなして、彼等が充分酩酊したるを待ち、二人は間に乘じて山陽道を急ぎ行き、加古川驛に近きし時、木梨が申すには、こゝで彼等を待ち受け處分せんには如何にといふ。公は答へていふに、我等は重き使命を帶びたれば、使命を全うするこそ今日の本務なれと百方木梨を慰諭して備中矢掛驛に到着したが、此邊は元、毛利家の領國であたつが爲めに、自ら長州藩士を待つこと懇切であつた。暫らく憩ふ際に、果して二人は追及し來つた。其時長州の兵の一部は尾道に駐屯してゐたから公は木梨と計つて、此二人が福山に行かんといふのを、强いて尾道に誘ひ、尾道にて處分を終り、首尾よく詔勅を澤公に傳へて其任務を果したといふ事である。公が事に臨んで徐ろに全局を洞り、從容として其機宜を制するとは此一事に於てもトせらるゝのである。

序ながら更に公の性格をトすべき他の事實を添へて置かう。それは彼が慶應四年即ち明治元年四月藩兵の第四大隊第二中隊の長に任ぜられたる時の事である。此中隊は藩兵の最も壯年を以て編成せられたもので、實に厄介なる中隊であつた。最初の中隊長は本藩にある時統御の道を失して割腹した。二回目の隊長は神戶にあつて又た統御の道を誤つたから今回更迭することになつた。而して彼は此中隊を率ゐて九條大納言の奥羽鎭撫總督として派遣せらるゝを守衛すべく赴かねばならぬ事になつたのである。彼は實に厄介なるものに引掛つたのである。然るに如何にして之を統御したがといふに頗る面白き話がある。當時此中隊は神戶より大阪に移轉してゐた。彼は京都に居つて其の隊長たる可き命令に接した。然るに隊の總長——下士官の頭——

ーは彼を迎へんが爲めに京都にやつて來た。此男が乃ち統御し難き一人である。彼が申すには、某は貴官を來り迎へんが爲めに上京した。夫々準備も整うたれば明朝早天隨從して大阪に下るべしといふ。そこて公は之を承諾し、イザ翌朝出發となつてもなか／＼足を擧げず、遲刻に遲刻を重ね、半日ばかりも待ちぼつけさせて後、イザ之より發程すべしと申し渡したるに、總長は大に怒り、今朝未明に出帆すべき筈なるに、半日も遲れて出發とは其意を得ずと敦圉きかけたれども、公は風に柳にて一向打合はず、高瀨川より三十石船にて淀川を下る間に追々妥協し、如何なる點が統御に困難なるか、有體に語り聞かせよと詰り、船の大阪に着する頃には、彼は却て公の味方となり、一切の內情を白狀し、畢竟其困難といふは隊長を隊中より自選せんとするにあり、而して隊士等は今の補助長官なる某を隊長として選擧し、之にて各自の威福を恣にせんとする積りなりといふ事が分明した。そこて公は先づ下士以上を集め、其希望を聞き、一々之を悟して遂に彼の意に從はしめ、全隊の兵を集めて最も強硬なる反抗者てありし者をして軍令狀を讀み聞かしめ、其處て首尾よく事務引繼を卒ひ、奥州に出發したのである。當時彼は僅かに廿二歲の壯年であつて、其思慮の老成したる此の如きを見れば、彼は必らずしも早熟の男でないとはいはれぬのである。

以上の二例は彼が政治家としての性格を語るべき大いなる資料といはねばなるまい。蛇は一寸にして人を呑む氣象がある、公が後日の大成も略ぼ之によりて察せらるゝてはないか。奥羽に於ける彼の戰功については委しくいふまでもない。當座は無我夢中で九條總督を護衞して海路より松島に上陸し、仙臺に乘り込んだが、サテ其仙臺の向背が定らず、會津は已に四境の守を固め庄內も亦已に其藩境を超えて兵を出し、奥羽各藩情僞一ならず。彼は澤副總督の護衞として山形に至り、或は單身福島方面の偵察に赴き或は大館、能代の間を彷徨し、或は秋田より院內口に進み、新庄を奪ひ且つ奪はれ或は越後口に赴き、該地の官軍と聲息を通

し、其の艱難辛苦と功績とは彼が凱旋の後に、酒肴並びに御太刀料として金百兩を下賜せられ、賞典祿二百五十石を賜はり、更らに藩廳より十ヶ年々金三十兩を賜はりたることを以て證明せられるのである。此一事が即ち彼の戊辰の役に於ける戰功を語つて餘りあるものと思はれる。

彼の最初の洋行

凱旋後間もなく彼は一書生となつて洋行せんことを企てた。彼が洋行は一朝一夕の夢ではない。彼が幼(いとけ)なき時彼の叔父中谷正亮――靜心翁の子にして彼の母の異母弟――は彼に當時出版せられたる坤輿圖識を開いて、地球は此てである。世界は斯の如きものである。西洋型の船舶は此通りであるなど〻、折に觸れて之を語り聞かせ、又彼の父の隨員にて久しく江戸の藩邸に在勤したるものが、其土産に海外人物小傳と題する繪草紙などを持ち來りしを見て童心(おさなごころ)にも自ら歐羅巴諸豪傑の事などを知り、遂に之が元となつて其志を起したのであらう。彼は奥羽戰爭に赴く前已に此志を以て、其先輩木戸、廣澤諸氏に計り、廣澤氏の助言によつて三條公の令弟を伴ひ、大阪神戸を漫遊しつゝある際、伊藤公と神戸に會見し、其志を告げたるに、公は之を賛成すると同時に、此事たるや寧ろ縉紳家の子弟を勸め之が隨行をなすこそよけれといひければ、公も實にもと悟り、其運動をなし、三條公の令弟留學と極りしも隨行員は彼にあらずして却つて三條家に縁故ある某であつた。そこで彼は餘儀なく其志を中止したる際、例の第四大隊第二中隊の司令官となつたのである。さて凱旋の後大村氏が申すには貴所等の御苦勞は誠に察するに餘りある。然しながら之は只一段落であつて我日本の治平を計らんには先づ兵制を改革しなければならぬ。それには兵權の統一が第一である。然るに之をなすには將校の教育より手を着けねばならぬが、之には當座の必要に應ずるのと、永遠の計畫を立つるのとの二樣に區別せねばならぬ。當座の方は大阪に靑年舍を置き、變則の教育を施し。永遠の方は横濱に語學校を設き、先づ語學より初め、六年を期して歐洲に留學せ

しむることゝせねばならぬ。君も多年の宿志であれば此永遠の計畫に身を投じては如何といふ話であつたから彼は一議にも及ばず之に同意したのである。當時變則の青年舍に出身したものが、今日の參謀總長子爵長谷川好道や軍事參議官子爵大島義昌などの徒である。

扨彼はいよ／＼其志を齎らして本藩に歸り、其目的を達せんが爲めに官を辭し、江戸に赴く途中、京都にて大村に面會して其志を告げ共に前途を契り、其翌日彼が大津驛に宿泊せし夜、大村は端なく刺客にいたされたのである。神ならぬ身の知る由もなく、彼は意氣昂揚として東海道を下り、箱根の温泉に入浴中の木戸に面會し、初めて此兇變を聞き、實に人生の果敢なきに驚いたのである、然もいよ／＼初心の通り横濱の語學校に一書生として入校することになつた。固より覺悟の前の事なれば兩刀を脱し、髮を斷ち、其佩刀は油紙包となして人に托しいよ／＼語學の初歩から初めたのである。語學敎官は佛國騎兵課副官にて生徒を敎ふるに頗る嚴格てあつた。然し彼は非常の決心を以て、如何なることをも耐え忍び勉強しつゝあつたのであるが、明治三年の夏此語學所を大阪に移し、之を陸軍幼年學校と改稱した。而して當初大村の計畫した事も校の移轉と共に一變し、此學校に在つては到底洋行の目的を達することの出來ぬといふ事が分明となつた。そこで此上は退校するに若かずと彼は決心し、大阪なる幼年學校に至つて未だ一週間を經ざるに假病して陸軍病院に入つたのである。處が固より健康體なれば、如何に入院しても醫員は病氣と診斷する筈もなく、遂に病院にある三十日に及びしも要領を得なかつたのである。そこで彼は或夜密かに病院を拔け出で、院長緒方惟準に向つて其宿志を述べ、是非共病者なりとの診斷書を與へんことを懇請したるも彼はなか／＼聞き入れぬ。然しながら公の熱心なる請要は遂に彼を感動せしめて、漸く其診斷書を得た。扨之を以て退校を届出てたけれども、其退校が又なか／＼容易でない。特に山田顯義の如きは、かゝる理由て退校するに於いては到底再び軍職に就くこと出來ぬから、是非退校を思ひ止まれ

と忠告したれども公はなかく聞き入れず、出來ぬならば出來ぬてよし。予は是非退校して歐洲留學をなすべしと申立て、遂に其志を達したのである。彼が志を立てゝから之を貫くには如何なる困難をも厭はず、終に遂げずんば止まざるの性格は此一事でも或は證明せらるゝかと思はるゝ。かくて彼は我賞典祿を藩廳に收め、之を學費として明治三年八月、大山公、品川彌二郎の諸氏と相伴ひ、米國を經由して英國に赴き、それより佛國に留學する積りてあつたが、恰かも獨佛戰爭中てあつて、寧ろ獨逸に赴く方然るべしとて遂に伯林に赴き、青木周藏、佐藤進等の助力を得て、直ちに語學に從事することゝなつた。

彼は語つて曰く、第一回の洋行中に予の得たものゝ重なる一は、豫備少將パリース氏の家に寄宿して其敎育を受けた事であると。此人は千八百六十六年普墺の役に聯隊長として戰功あり、又軍事學上有名なる著述も多き人てあつて、其人物の方正嚴格なる、公が其感化を受けたることの少からざるは固より公の自認の如きてあらう。

彼の歸朝と再度の洋行

彼は三年有半伯林に留學し、明治六年十一月歸朝の途に就いた。彼が歸着したる時には恰かも征韓論の破裂したる當座て、彼は取敢へず其先輩木戸公の家に高等食客となつた。彼がいふには同鄕の先輩にて最も私淑したるは木戸侯てあつて、軍事上については大村益次郎に負ふ所少からずてある。彼を石州口にやつたのも木戸侯てある、又奥羽にやつたのも木戸侯である。木戸侯は常に彼を引立てゝ呉れた。

偖、彼は明治七年一月初めて陸軍大尉として奉職したのである。彼は此時初めて山縣公と直接に接觸したのである。山縣のいふには、君も大尉では不滿足であらうが、今日は陸軍も稍々秩序立ちたれば初叙は大尉以上とすることは六つかしいから辛抱せよとのことてあつた。彼がいふには、御尤もである。それならば何故に某を少尉に任ぜられぬか。秩序とあれば少尉の方が相當てあると逆襲した。そこて其後は大尉以上に初任せ

られたものは一人もなかつた。然しながら彼は何れかといへば、洋行の爲めに其仕途は餘程儕輩に後れて居る彼に一歳の年長者たる三浦(梧樓)の如きは明治四年には已に大佐てある。明治十年には陸軍少將旅團長として一方口を受持つて居つた。彼と同年なる鳥尾の如きは明治四年には已に少將て、十年には中將として大本營の仕事を一人て切り捌いて居た。それに比ぶれば彼の進歩は寧ろ遲々たりといはねばならん。後來彼が餘りに榮進したのを見て、彼は當初より頓々拍子に進んて行つたものと思ふかも知れぬが、事實は餘程相違して居る。彼は早熟、中頓、晩進てある。

彼の陸軍との關係は明治七年一月より初つた。彼の新智識は忽ち當時の陸軍省の利用する所となり、彼は自ら建白したる參謀局の設置と共に其重要なる事務を執ることゝなつた。

七年六月少佐に進み

かくて彼は臺灣征討やら、清國に關する葛藤やらの間に於て我國内の事情を審悉し、明治八年三月獨逸公使館附武官を拜命し、四月を以て再び獨逸に赴いた。此公使館附武官なるものも彼の建白によつて出で來つたものてある。此留學は彼に取つては暗中模索てなく、最も有効なる成果を齎らした。彼は恰かも目的を定めて其目的に應ずる爲めに修養したのてある。彼は先づ自己の立場を考へて普魯西の軍事行政の研究に從事した。之が爲めに普國第三軍團の監督部に附き實施演習をなし、大いに得る所あり、傍ら伯林大學に通學して法律經濟等一班の講義を聽き、軍事行政の研究上必要なる課目を修めた。然るに彼の在外中には前原一誠の亂、神風連の亂等あり、續いて日本の南北戰爭ともいふべき西南の役が出て來つた。彼は此重大なる役を座視する能はず、進退について山縣陸軍卿の指揮を乞うたが、其書は鎭定の後に達したる由にて、歸朝するに及ばずとの指令に接したればいよ〳〵其研究を繼續してゐた。而して彼は、十一年五月大久保卿の兇變の爲めに歐洲漫遊中なる井上侯の歸朝を促し來りたれば、侯の誘引に任せ相率ゐて歸朝したのは同年の七月てあ

つた。

公の陸軍時代

之より彼は陸軍省にあり、山縣陸軍卿を助け、參謀部に勤務して其研究したる所を實地に應用し、明治廿九年公が臺灣總督に任ぜられ、政治時代に入るまで前後十九年間は、公の陸軍時代ともいふべきもので、我陸軍が公に負ふ所の多大なるは、山縣公を除けば恐らく他に其匹少なかるべしと思はるゝ。

元來公の本意は軍事行政にあつたけれども參謀本部の組織の必要の爲めに其の事務を執ることゝなつた。公は田を行くも畦を行くも、行き着く先は同じものと思ひ定め、參謀本部の事務を執つたのである。處が一方には伊藤公の憲法取調の爲め洋行するあり、日本もいよ／＼明治二十三年より憲法實施と議會開設といふ事を目標として軍事上に於ても夫々改良進歩の必要は段々相迫り居るも、サテ其軍隊を率ゆべき將校の智識は如何といふに、頗る遺憾の點あるを以て、公は先づ其幹部ともいふべき人を歐洲に留學せしむべき意見を上申し、遂に其意見が採用さるゝと同時に、陸軍卿自ら之に赴くべしといふ事になつて、公は陸軍大佐參謀本部局長として大山陸軍卿に隨行し、十七年の初め三度歐洲に渡航した。而して此洋行が陸軍の双壁ともいふべき桂、川上の關係の初まりである

桂と川上との比較

當時川上は近衞歩兵聯隊長であつて、所謂實地派の代表者であつた。公は參謀本部局長で學理的應用派の代表者といふても差支あるまい。彼等は未だ大佐であつたが、當時に於て、將來帝國の陸軍を左右するものは此二人であるべく識者の眼に映じたのである。茫漠たるが如くして其實は頗る炯眼なる大山は陸軍の將來が此二人にあることを知り、併せて自然に放任する時には、二人の衝突は必らず免れず、然る時には、彼我共に傷き、帝國の陸軍を如何せんといふ場合に立ち至るかも知れず。されば今日より兩人を提携せしむる外はあるべからずと考へ、豫め其積りにて兩人を隨行せしめたのであらう。處が二人共さる者である。彼等は

忽ち其意味を合點し。如何なる場合でも兩人は決して喧嘩せざるべし。我陸軍は兩人の頭肩に荷ふべしと決心し、互に分業を定めたのである。彼は川上に向つて君は軍事を擔當せよ、予は軍事行政を擔當せんと。茲に船中に於て誓約が成立し、明治十七年の二月横濱を解纜するより、兩人は船室を共にし、歐洲巡回中も殆んど房室を同じくし、彼は出來得る限りの便宜を川上に與へ、いよ〳〵其交情を親密ならしめた。當時の同行者中には、或は旅費を溜め込みたる連中もありたる由なれども。彼等兩人は有る丈の金を使ひ、桑港を出立して横濱に向ふ時には、漸く衣兜に數弗を剩すのみにて、借金して歸朝したと云ふことであつた。當時兩人共元氣旺盛の絕頂であつたから、夫れも其の筈であらう。而して明治十八年二月歸京し、同年五月兩人少將に任ぜられ、川上は參謀次長に補せられ、彼は陸軍總務局長となつていよ〳〵其誓約を實行する第一着手となつた。

序ながら茲に一言して置くが、桂と川上は年齡も同年である、少佐より大將に至るまで進級も同時である殆んど兩人は形影相伴うて居たのである。どつちがエライかといふ問題は勢ひ起らざるを得ないが、それは見樣によつて自ら異つて居る。

機敏といふ點にかけては桂は到底も川上に及ぶまい桂も決して鈍物ではないが、然しながら川上の機敏なることは殆んど電氣の作用の如くあつて、何人も及び難からう。辛抱強いといふ點に於ては殆んど五分々々であるかも知れぬ。桂は辛抱強いのが取得であるが、川上も折れる所には折れ、屈する所には屈し、曲る所には曲り、其辛抱強い事は決して尋常でない。タクト(手練)の點に於ては如何であるか。之れ又容易に軒輊し難くある。伊藤に面會すれば十人の中で三人位は非常に感心するけれども三人位は何となく侮辱された感じをなすものがある。山縣に會へば十人が十人只何となく氣の詰るが如き感じがするであらう。處が桂にせよ、川上にせよ、十人に十人、百人が百人、殆んど愉快なる感じを以て歸らないものはあるまい。殊に川上

のタクトは桂に比すれば極めて鮮かである。その下に使はるゝものは、彼の爲めならば骨も身も惜まぬといふやうになる。彼は人才を皷動するに殆んど一種の妙技を持つて居た。政治上の趣味は兩人共濃厚であつたが、經濟的思想は恐らくは桂の壇場であらう。同じ鐵道に熱心しても、川上は最も多く軍事的の方面より考へたが、桂は寧ろ經濟的方面から考へたかも知れぬ。經綸の才に至ては、學問の素養があり且つ其遺傳境遇等の關係よりして恐らくは桂の方が增してあらう。然し川上も決して無經綸の男ではなかつた。日清戰爭、日露戰爭の如きは彼の腦中に常に描かれたものであつた。只一は之を行ひ得たるも、他は之を行ふに遑あらずして倒れたのである。それで最後に勝敗を決すべきは體力である。若し川上の倒れたる時に桂が倒れたならば、桂は只一個の陸軍大臣に過ぎなかつたのである。桂の發達は寧ろ川上の死後である。此點に於ては固より比較すべき材料もなければ比較すべき理由もない。詰り地金の厚いといふ點に於ては桂の方が增してあらうと思ふ。要するに川上は軍人的政治家で桂は政治家的軍人と云ふ可きであつたらう。

議會開設前後の桂公

話元に戾つて、當時陸軍には幾多の不平の團體があつた。學派よりいへば從來佛蘭西式を使用したものと獨逸式によつて得たるものとの差別があつた。又一方には實地派といふべきもの、他方には又學理派といふべきものがあつた。中には月曜會などゝいふものがあつて、陸軍内の一種の政社ともいふべきもので、陸軍の不平組なる新智識を網羅し、之を指揮操縱するには不平軍人の魁たる三浦、曾我等があつた。そこで陸軍は桂川上の兩人に取つて決して錦の蓐ではなかつた。恐らくは彼等兩人が其異數の拔擢、進步、勢力の爲めに他の嫉視の中心となつたかも知れない。特に薩人たる川上が薩人中に敵を持ち長人たる桂が長人中より喜ばれざりしが如きは不思議に似て不思議にあらずだ。然し上には山縣、大山の一致あり。下には彼等の協力あつて兎も角も多くの困難を排して、日本は佛式とい

はず獨逸式といはず、日本式の陸軍を爲し、參謀本部も　陛下に直隷する儼然たる一の機關となり、軍事行政も彼の思ふ通りには改革が出來ざりしが、兎も角彼の意見の通り統一的、經濟的に赴き、又此際監軍部なるもの出て來り、兒玉伯其參謀長となり、專ら陸軍の敎育方面を司り、三人鼎立、着々其目的を達することを得た。かくて彼は明治十九年三月には陸軍次官となり、いよ／＼廿三年帝國議會の開設の準備に掌鞅した。凡そ明治十八年より廿三年に至る陸軍各種の條例規則等一として彼の力を印せざるはない。彼が三回の洋行も全く酬いられたりといふべきである。

彼は第一帝國議會に於て陸軍省の委員となつた。豫期の如く衝突は豫算案から初つた。一時非常なる危機に迫つたのである。八百萬圓の節減、六百萬圓の節減、節減の相違で民黨相互の間にも衝突が出來、容易ならぬ形勢であつた。然るに六百萬圓の節減にて兎も角も第一議會は通過したが、其中で陸軍省の所管より削減したのは其廿分の一、即ち僅かに三十萬圓であつた。之は彼が陸軍豫算を擔當する議員を自邸に招ぎ、其黨派の如何を問はず丁寧に之を說明し、單に豫算に止らず我陸軍の目的を根本的に說明し、彼等をして安心して陸軍の要求を容れしめたによるのである。彼は當時に於ては僅かに一次官であつたが、已に議院政治家として其の手腕を發揮すべき萠芽を示したのである。

扨明治廿四年内閣更迭と共に髙島子爵が陸軍大臣となるや、彼は第三師團長に轉職したが、軍隊附となつたのは、陸軍に入つてより之が初めてある。彼は一躍して師團長となつたのである。彼が師團長としての働きは先づ岐阜愛知の震災事變に於てあらはれたのである。彼は此事變に際し臨機の處分をなし直ちに兵を出して名古屋市及其附近の保護に任じたのである。

彼が今日に至るまで名古屋を第二の故鄕となし、名古屋人が又彼を同鄕人の如く親む所以は職として之が爲めといふのも過當であるまい。彼は此處置の爲めに進退伺をなした。而かも大臣は却て之を適當の處置と

なし、拜謁を賜ひ、親しく其狀況を奏問した。彼は又市民と軍隊との親密を計り、其父兄をして安んじて子弟を兵營に送らしむることを勉めた。廿五年、廿六年は彼が自ら計畫したる機關の活動を、師團長として實驗する時代であつた。

日清戰爭當時の桂公

扨いよ〳〵明治廿七年の日清開戰となつた。彼は其友人川上が參謀本部次長として專ら其事に當るを知つて居つたが爲めに、書を送つて自ら出征せんとする希望を述べた。川上も固より其事を諒とし、彼の師團はいよ〳〵第一軍に編入せられ、出征の命を受けた。彼が仁川に着したのは九月十日であつて。若し尋常ならば彼の軍の來着を待つて平壤攻擊はなすべきである。然るに第五師團長は利かぬ氣の野津である。彼は桂が第三師團長として山縣軍司令官と共に仁川に到着したるを聞きたるに拘らず、否寧ろ聞きたるが爲めに却て軍を進め、其來着を待たず、平壤攻擊をしたのである。彼の師團中にて之に參加したるは僅かに佐藤正の率ゆる元山支隊の十八聯隊であつた。然し彼は其償ひを鴨綠江の戰爭に取つた。彼の鴨綠江を渡つたのは十月廿五日であつて、日本兵にて先登に淸國に入りたりのは彼の兵である。彼はそれより虎山を占領し、安東縣に入り、民政廳を設け、他日の侯爵小村が其長官となつた。彼が政治家的資格は到る處に發揮せられた。淸國の境に入るや先づ人民を慰撫し、奪掠を禁じ、民政廳をして其保護の任に當らしめた。かくて彼は山縣司令官の命によつて、獨立して北進の途に上り、十二月十三日には海城を占領した。之が所謂海城籠城の初まりである。當時大本營の意見は冬籠りであつた。然し彼は此場合冬籠りすることの得策でない事を實見した。而して山縣司令官の意見も同樣であつた。そこで彼は此大膽なる軍略を取つたのである。彼が如何に用意の周到であつたかは、一摑みの炭、一束の薪秣も價を拂はずして徵發することを禁じたのでも分る。如何なる家に宿泊するも必らず宿泊料を拂つたのである。又彼は海城の中にある耶蘇敎會を調べて衞兵を附して

之を特別に保護した。又牛莊にある宣教師には一書を送つて、其文明の軍必らず疑惧を抱く勿れといふ事を告げ知らせた。我等はこゝに遼東平原に於ける大戰鬪なる何瓦寨の戰鬪を語らざるべし。此事は寧ろ戰史に讓つて玆に米國宣敎師マッケンジーなるものが牛莊より彼に送りたる書簡の一節を掲げんに、

「海城に於ける小生の財産並びに代理者に對して御懇篤の御保護致し置かれ候段偏へに感謝奉り候さりながら更に深く小生の感覺致し候は今回の開戰以來日本帝國軍隊の運動は實に仁義を本とするの一事に御座候此義に就き小生の親友としては深く感謝を表し又基督敎家としてはかゝる敎化の全く缺立せる支那に日本帝國の書を讀聽するを見て深く滿足に存じ候。」

とある。海城の籠城は殆んど蔚山の籠城ともいふべきものであつた。前には宋慶の幾萬の兵あり、兵站線は動もすれば後ろに絕たれんとす。其七十五日間の籠城は隨分難儀且つ退屈てあつたに相違ない。而かも此の籠城は軍人としての彼に取つては少からざる名譽てある。彼は凱旋の後、普通ならば男爵を授けらるべきに彼のみは戊辰の戰功をも合せて子爵を授けられた。而かも此戰役の結果彼は殆んど不起の病に罹つた。而して廿九年に至て漸く其健康を恢復した。斯くの如くにして彼が軍人的生涯が一段落を告げた。

臺灣總督と政治家としての第一步

時恰かも臺灣は軍政を改め民政を布く事になり、彼に於て適當なる臺灣總督を見出したりとして當時の首相伊藤公及び拓殖務大臣高島子等より彼を勸め遂に廿九年六月二日を以て第三師團長を免ぜられ、臺灣總督に新任せられた。彼は六月十日伊藤首相、西鄕海相と共に臺灣に赴き延いて厦門地方に向ひ、八月を以て歸京し、いよく臺灣統治の方針を定め、其意見書を提出した。之は餘り長いから玆には掲げぬが、其目を擧ぐれば、行政機關の擴充、警察力の擴充、衞生行政の振作及び阿片處分、航海擴張、鐵道、道路、築港等に關することであつて、彼が政治家的經綸の才を證するに足るものが少くない。只彼が自ら之を行ふの機會を得ずして後人をして之を行はしめた丈けが彼に取つても恐らく一つの遺憾てあらう。

彼が政治的生活の初まる矢先に端なくも第二伊藤内閣は瓦解した。之は彼に取つて非常なる打擊である。然るに之に代る松隈内閣なるものは如何といふに、半ば政黨内閣の臭味を加へ居ることゝて當時の元老連中も頗る之には心配し、殊に山縣の如きは、此場合せめて陸軍部内なりとも政黨輩に掻ぎ擾されぬやうにしたいとの一念より、幸ひ元老會議に於て松方が彼を陸軍大臣に推薦したしとの發言をよき潮合となし、松方の意を承けて彼に其相談を持込んだ、思ふに彼は獨逸留學の當初より陸軍行政を唯一の主眼として研究したものであれば、陸軍大臣となるは平昔の志を遂ぐるに相違なき事で、彼にとつて滿足であるべきであるのに、彼は之を引受くるに頗る躊躇した。第一は彼が臺灣總督となつて、僅かに二ヶ月も經つか經たぬかの事である。第二に松方内閣の大立物たる高島子が拓殖務大臣に滿足せずして陸軍大臣たらんとすべきは彼が豫想した所である。然しながら山縣は半ば壓迫的に忠告を試み、彼も此上は　陛下の御信任次第異議なき旨を返答し、山縣も滿足し、其旨を松方に通じ、松方よりは山縣に、お陰にて滿足である、此上は桂子爵に面會し、重任を擔當せられたるを謝し、併せて將來の事を協議すべしと申し送つたのである。然るに思ひきや、彼はいよ〳〵事實を確むる爲めに松方に面會を申込んだのに、松方は、本日といへば午後といひ、午後になれば明朝といひ、明朝赴かんとすれば餘儀なき事情があるから改めて此方より案內すべしといふ。案の如く間違はいよ〳〵出來たのである。淡泊なる松方は高島は依然拓殖務大臣で滿足すると思うたに相違はない。そこて半ば長閥の心を慰撫する爲めに山縣と相談して桂を陸軍に持込まうとしたに相違はない。此點に於ては何等松方の誠意を疑ふ所はない。然しながら高島はそれて安心する男ではない。彼は自ら陸軍大臣たるべく松方に申込んだのである。サテ如何にせう。高島は伊藤内閣にあつて伊藤内閣を毀した張本人である。松方の方よりいへば松方内閣創立の殊勳者である。松方は果して此殊勳者の注文を無視することが出來るか。高島

の注文を聞かんとすれば山縣への義理が立たず、山縣への義理を立てんとすれば高島の注文を退けねばならず、そこで松方はいよ〳〵進退維れ谷まる場合になつた。之と同時に桂も亦折角其心肝を砕いて臺灣の爲に試みんとしたる計畫を抛ち、先輩の意志に從つて陸軍部内に其平昔の志をなさんと欲したる決心を無にし、全く虻も蜂も取ることの出來ぬ苦境に迫つたのである思ふに如何に辛抱强き彼でも此場合に於て彼が山縣、井上其他の諸元老に喰つて掛つたのは決して不思議ではあるまい。彼は實に憤慨した。恐らく之が彼の一生一度の憤慨であらう。松方は固より彼に會ふ面目がない、山縣も勿論である。かゝる場合に調停の妙を得たる井上さへも如何に彼を宥めんと欲するも到底其術盡きて自ら影を隱すことゝなつた。

彼は從來不健康に加へて之が爲めに非常に心身を勞したからして遂に腦病を發した。そこで彼は大磯に閑臥し、伊藤、陸奥などゝ舊を話し新を談じ、冷眼世上を視て、いよ〳〵臺灣總督辭任の表を奉つた。其の表には事情有之とある。此の事情が所謂る云はぬは云ふにいや勝る事情である。而して其結果は磊落なる高島と直談の上に相互の意志を疏通し、他日君の位置に代るものは恐らくは我ならん。其時は又互に相けて渝ること莫るべしと談笑の間に別れ、彼は衞戍總督の閑職に就き以て徐ろに政變の來るを待つてゐた。

序に一言して置くが彼は決して舊き怨を久しきに蓄ふるが如き事はない。彼は當時松方に對して多少不快の感を抱いたに相違はない。彼が松方に面接して辭職の事を告げたるも松方一人にては安心ならずと態々西鄕を立合せた程であつた。然し第二山縣内閣の組織に際して彼は自ら山縣の使者となつて松方に赴き其入閣を勸誘し、脫然として其手を握つた。

初めて陸軍大臣となる

待ち設けたる如く松方内閣は三十年の十二月に總辭職をなし、同年十二月廿九日内閣組織の大命は伊藤公に降つた。固より最初の相談相手は彼である。彼と伊藤とは已に閑地に於て其の準備をして居たに相違はな

い。是に於て彼は此内閣を組織するには西郷の留任を必要とし、伊藤公と相談の上、自ら十二月卅一日を以て西郷を沼津に訪問し、三十一年の元日には西郷と同車して大磯に至り、伊藤公と三人合議こゝに彼は陸軍大臣となり、西郷は海軍大臣の職に留任するといふ相談は成立つた。

　第三伊藤内閣は不幸短命にして畢つた。戰後の財政は地租增徵の止むべからざるを以て政府は其案を提出した。之が爲めに衝突して議會は解散となつた。伊藤は自ら政黨を組織せんとして種々の障礙に會ひ遂に果さず、而して板垣大隈の聯合は成り、自由黨も進步黨も各々解黨して憲政黨なる一大政黨を組織した。當時の勢は昨年の暮に於ける所謂憲政擁護の運動なるものに比すれば更に優勢のものであつて、凡そ草も木も憲政黨に靡かぬものがない有樣であつた。氣早き官僚抔は、乍ち欵を通じた程であつた。そこで總選擧はしたものゝ、伊藤の腰は之が爲めに拔けた、彼は遂に辭職の止むべからざることを持出した。桂たるもの何ぞ之に同意せんやてある。彼は山縣、井上、大山等に向て伊藤公が此の内閣に踏み止らないのは致方がない。此上は元老内閣を組織せよ。大山公が陸軍大臣たるを承諾せらるれば予は甘んじて次官となつて働くべしと申し出した。然し元老輩の意見も煮え切らず、而して伊藤は形勢の非なるを見、且つ元老殊に山縣輩の意見擧動に慊らず思ひ、御前會議の結果、遂に辭表を奉ると同時に板垣大隈を推薦した。之が六月二十四日の事てある。

　若し日本の政治史として見れば其幕は短かけれども隈板内閣は最も面白き一段である。然しそれは本文の目的でない。只大隈も板垣も餘りに早く内閣が落ち掛つて來たので吃驚した。政治上の事は機が後れてもいかず、機が熟しないでもいかず、殊に機が熟せない前には、勞多くして功少く、動もすれば他人の爲めに火中の栗を拾ふといふ事になる。伊藤が憲政黨の旗上げをなしたと同時に、殆んど同時に、内閣を打かけたのは大隈板垣を困らすといふ意志はなかつたかも知れぬ

が、事實は彼等にとつて一方ならぬ有難迷惑であつた。迷惑は迷惑であるがお受けはせねばならず。そこで内閣は出來は出來たが、こゝに一つの問題は桂及び西郷が陸海軍大臣として留任を仰付けられた事である。當時川上の意見は、桂が寧ろ桂冠して、陸軍大臣選任の困難を、大隈板垣等に感ぜしめ。隈板内閣が、未だ組織せられざる以前に、躓かせしむる積りであつたらしい。併し桂は寧ろ此に反して其儘大命を奉じて踏み止まり徐ろに後圖をなさんとしたのであらう。川上が桂に向てこの事を談ぜんとしたるに、却て桂の口より早や御受けをしたと聞いて、それではよしと、談はそれに歸結した。機敏なる川上は、決して愚痴は云はなかつた。併し大隈内閣の倒れたるに川上の與りて力ありしは、知る人ぞ知る。陸海軍大臣の留任は、先例もあることとてあつて不思議てはないが、彼等の所謂政黨内閣から見れば、異分子が内閣の眞中に横つて居るのであつて政黨者流の眼から見れば恐らくは獅子身中の虫であらう。殊に其虫が西郷といふが如き芋虫のやうな大いなる虫と、桂の如き蜈蚣のやうに多くの手足を持つて居る虫であるからなか〳〵容易の事ではない。親任式御擧行の前に於て、桂公は西郷と共に大隈板垣と内大臣待從職幹事寄居の席に會し、我等は異分子として此内閣に列するからには、前以て必要なる問題を決し置かねばならぬ。閣下は果して軍備縮少の方針ではないか、又戰後經營については異存なきかと駄目を押し、大隈は一々其通りであるといふ事にて、そこで親任式も擧行せられ、此れにて兎も角も大隈内閣は成立した。

隈板内閣に於ける彼

然し彼は當時より到底自由進歩兩派が長く一致することの出來ぬことを豫期し、西郷と打合せ、西郷は成るべく進歩黨側に立ち、彼は自由黨側に立ち、兩人にて兩派の間を調停もし若くは操縱もしたらしく見ゆる。サテ此内閣の事は暫らく措き、所謂尾崎文相の共和演説問題なるものが出で來つて其後任がいよ〳〵兩派確執の動機となり、板垣の方よりは靑木子爵を推薦

したゞ大隈側では青木は寧ろ自由黨臭味の男であるからとて近衛公爵を推薦した。然るに板垣側では之は進歩派の人であるからとて不承知であつた。板垣の如きは西郷さんなり桂さんなり兼任しては如何と迄發議した。閣議は固より一致す可き様もなかつた。而して大隈は獨斷にて遂ひに犬養毅を推薦し。是に於て板垣は到底此の内閣に立つを得ずとし、辭表を奉り、遂に内閣總辭職となつたのである。然るに西郷が大隈から辭職の相談を持ちかけられ、一議にも及ばず予も亦辭職すべしと申し、由を聞き込み、彼は西郷に向て其不可なるを說き十月二十九日に大隈が辭表を懷ろにして參内するや、彼も西郷と共に宮中に至りたるに、大隈は彼に向ひ自ら辭職の旨を告げしかば、彼は之に答へて尤もの事である。寧ろ其の早からざりしを憾むのである。然し陸海軍大臣は特に　陛下より留任を命ぜられたるものであるから、閣下と進退を共にすべき譯ではない。此旨了承せられたしといひ、西郷は又、前日は共に辭職すべしと申したれど桂陸軍大臣の申分誠に理りあれば予も亦思ひ止るべしといひ、大隈も今は爲かなく苦笑して諦めたといふ。兎角鹿兒島人の無頓着にして拘らざることは之でも明白である。公は此間に於て恐らくは政黨の學問をも少からずなしたであらう。兩黨の主もなる人士と直接に交際し、其强點弱點等について見る所あり、知る所あり、且つ究むる所あり、而して自由派とは種々な緣故よりして結ぶ所あつたに相違はない。之は恐らく第二山縣内閣に於ける肝膽相照の動機の一となつたであらう。

第二山縣内閣に於ける彼

有體にいへば伊藤内閣の後には山縣内閣が出來べき筈であつた。只半ケ年足らずの間隔を置いて出來たのであつて、固より怪むに足らぬ。然しながら如何に兩黨は分裂しても、山縣内閣なるものは殆んど何等の黨與も持つて居らぬ。いはゞ軍隊の真中に丸腰で出掛くるも同樣である。元來山縣内閣の成立に與つて最も力あるは固より公である。彼は事實に於ける山縣内閣の參謀長であつたらう。實は清國漫遊中の伊藤公

は已に上海まで來てゐたから之を待つて內閣を組織するのも遲しとせなかつたのである。然し伊藤が歸つて來れば行掛り上再び大隈を推すこと丶もなり、大隈は又自由黨は去つても進歩黨一手で多數を制し得るといふ恃があるから決して之を辭せぬ模樣であつた。そこで寧ろ伊藤の歸朝せざる中に組織した方がよからうといふ事で、極言すれば、寧ろ伊藤の歸り來らざるを奇貨として成立したというても差支あるまい。然し伊藤が此內閣に向て虛心坦懷其援助を與へたるは伊藤の大を爲す所以として識認せねばなるまい。

公の献策に基いたるや否や、そは明言する限りでないが、山縣は內閣を組織するに際し、彼を介して星亨を待つに司法大臣を以てし、又伊東已代治を待つに農商務大臣を以てした。然し星は自分一人政黨を脫けて出て來る譯に行かず、又伊東は伊藤公に氣兼して遂に之を受けなかつた。山縣は寸前暗黑何の賴む所なしと申したるも、實は當初より提携を豫期して居たに相違ない提携の結果は山縣內閣をして多年の宿題であつた地租案を――年限附てはあるが――通過せしめた。戰後の經營も之が爲めに幾分か達せられた。それと同時に提携の代償として種々の面倒を持ち込まれた。凡そ山縣內閣の功臣を擧ぐれば一方では桂、他方では星亨であらう。此兩人微りせば、恐らくは其功を全うすることが出來なかつたであらう。

次の議會も提携の惰力で兎も角も通過した。そこで明治卅三年の春になれば山縣公はいよ〳〵辭意を洩らして來た。彼の意は桂であつた。桂を相續者とし推すことであつた。此相續問題といふ事については桂は數年前より其先輩に向て隨分議論をした事がある。諸公は其年齡に於て何れも大いなる等差はないが、諸公のいよ〳〵舞臺を退かる丶時には、誰が相續者となるか、陸軍にてはそれ〳〵順序も立つて居るが、政治の局面に於ては殆んど之を見ぬ。其邊の事は先輩たるものは豫め考慮を廻らすべきであらうといふことを論じた。而して此論は忽ち山縣より逆に彼に向て、今度は君が受け前であるといふやうな語氣を洩らした。彼は

之を眞面目なる事として聞いたか聞かなかつたか、其邊の事は分らぬが、此相談は伊藤、井上、西郷、松方邊にまでも傳はり、其事が伊藤の口より端なく或部分に洩れ、其爲めに隨分異論を呼び起した事があつた。然るに其れと同時に義和團事件が起つた爲めに其話も一寸沙汰止みとなつた。

北清事變に於ける彼

所謂三十三年團匪の亂に對しては彼は當時の內閣中最も持重主義を執つた。兒玉などは一方に於ては殆んど此機に乘じて南清に手を伸さんとしたが、山本權兵衛等の反對、伊藤、井上等の反對で、事成るに垂んとして破れたのである。然るに彼は北清事件に對しては當初より成るべく持重の態度を執つた。彼は出來得べくんば海軍で用を濟ましたいと思うた。何故なれば、一度び陸軍を持ち運べば其撤兵は容易でないからである。然るにいよ／＼危急となつたが爲めに彼は福島支隊を派遣した。彼は福島に向つて言つた。お氣の毒だが君は保險料として行くのである。此小兵を提げて死んでも決して國家に損はない。後はカブールがクリミャ戰爭に際して一聯隊の兵を出した故智を學んでかくしたのである。彼が思ふには初めより大兵を出せば、一方では日本は生意氣である、專橫である、野心があるとの非難、攻擊、嫉妬を招ぎ。他方では犬の骨折、鷹の功名といふが如く、自ら損して列國に利益を配當することゝなるから、出來得る限り手控にしたのである。然るに列國の要求止むを得ず、最早日本が足を擧げても何人も異存の申手がないといふ場合を見て第五師團を派遣し、併せて別に二個師團の動員をなすの計畫を立てた。

政友會內閣成立當時の彼

話變つて、彼は多年の勞苦の爲めに宿痾たる腦病を發し、靜養を必要とする場合になつたが、北清事變も略ぼ落着を告げんとする際に於ていよ／＼伊藤の近年來の幻像たりし政友會の組織は成つた。山縣の辭意は之が爲めにいよ／＼決したのである。恰かも三十三年九月十五日は政友會發會式の日であつた。超えて廿日

に至り山縣首相は葉山に靜養したる彼を招ぎ、翌廿一日彼は首相に面會したるに、いよ／＼辭職の意を洩らした。彼は固より異議のあるべき筈もなければ、此訓示的相談に全意し、只彼一身にとつては此際は置土産として彼を伊藤に殘し置く事丈けは御免を蒙るといふ事をいひ、彼も亦病の故を以て辭表を捧呈した。山縣内閣はいよ／＼九月廿六日を以て總辭職をしたが、伊藤内閣は容易に出來上らない、伊藤は辛く十月十九日を以て其第四内閣を組織し、彼に向つて面會を申込んだから、彼は廿一日靈南阪なる伊藤の邸に於て面會し、其事情を縷述し、後任の出來るまでは留任することを承認した。其時に　陛下は侍從職幹事岩倉公爵を葉山の別邸に遣し給ひ、左の勅語を賜つた。

「目下の狀況一日も陸軍大臣の缺員を許さゞるを以て此辭表は一先づ返附す又病氣の趣は親しく聞し召されたり充分靜養すべし又葉山にあつて靜養するは苦しからず只其職に留るべし」

かくて彼は聖旨に從ひ靜養し、いよ／＼十一月の半ばになり、内閣施政の方針も略ぼ定りたれば彼は重ねて辭表を呈出し、又伊藤にも其旨を通じ、三十三年十二月廿三日を以て彼は陸軍大臣の官を解かれ、兒玉は彼に代つて陸軍大臣兼臺灣總督となつた。彼は斯くの如くにして三十年間殆んど一日の如く官職にあつたが此日初めて休職の恩命を蒙つたのである。

彼は七ヶ月間葉山に閑居してゐたのである。其間は全くの漁翁村老と混し東京に出づるとさへ僅かに一兩回であつた。彼の一生の間此の如き閑日月は蓋し絶無僅有であつたらう。最早彼の健康も之が爲めに恢復したれば彼は豫ねて心掛けたる歐米漫遊の志を果さんと欲し、殊に醫者が海上旅行は身體保養に最もよろしかるべしとの事であつたが爲めに三十四年四月東京に出て、久々にて伊藤公に面會し、曾て辭職の際に申し、如く此際漫遊の志を果さんといふことを告げ、伊藤は又最も然るべし、予も亦及ぶ丈けの助力をなすべしと答へ。サテ、伊藤の申すには三十四年度の豫算も甚だ實行に惱めり、それは勘定合つて錢足らず、歳入に於

て到底實行覺束なしとの事であつた。彼は之に向て、現内閣は公の與黨によつて組織する内閣であれば一號令の下に何事も諾るべし。經費不足すれば自然の手心にて繰り述べる如きは決して難きにあらじといひ、其儘相別れ、同月下旬再び上京し、伊藤に面會したるに、伊藤の申すには三十四年度歳計の實行の困難といふは、實は公債支辨の事業であつて、公債募集が六づかしいからであると。彼がいふには、それなれば左程六づかしい事ではない。公債支辨用の費目といへば詰り事業費である。事業費であれば民間に於ける商賣の資本も同樣である。當座の借入でも出來れば内國債でも出來る、又外國債を募ることが出來ると論じた然し當時の財政當局者渡邊國武子は頻りに歳計の困難なることを遠慮會釋もなく世間に發表して居つたから公債を外國市場に募ることは隨分面倒であつたに違ひはない。

扨彼はいよ／＼外遊の仕度をなし、葉山より東京に出て來りたるに、五月十六日井上は電話にて彼に急に面會したいと申し込んだ、彼は已に伊藤の内閣の更迭を知つて(五月二日伊藤公辭表捧呈)之が爲めに元老會議の數次開かれたることを承知して居るが爲めに恐らくは此問題に關することであらうと思うて面會した。處が井上の申すには、元老會議の結果遂に自分を後繼の任に當てるといふ事になつたが、然し自分が考ふるには、寧ろ君が適當であると思ふ。そこで若し君が與存さへなければ自分も一省に當つて君を助くるであらうといふ。藪から棒の談判であつた。彼は此談判に對してそれは以ての外である。殊に我内閣に長者たる御身を閣僚とするが如きは常識もて出來得るものでない又自分は内閣組織の力もなければ望みもないが、侯も亦成るべく此重任に當らない方が然るべしと思ふ。それは侯が平常の氣象を知て居るが無遠慮に申せば兎ても侯として成功覺束ないと思はるゝからであるといひ尚折角の思召とあらば懸案として明日まで熟考すべしといひ、いよ／＼翌くる日再び侯を訪ひ、自ら其任に堪へざることを申しゝかば、井上侯も此上は致力なし

とて、然らば拙者其任に當るべし、君閣僚となつて我を助けよと申された。そこで彼はそは然るべからずとて侯を諫め又自ら入閣するは事實に於て——當時兒玉伯陸軍大臣たり——二人の陸軍大臣を作ることゝなり恰かも前松方内閣に於ける覆轍を踏まんことを恐るゝ旨を告げ、話はそれで分れたのであるが、敢て之が爲めといふでもなからうが井上内閣組織は遂に事止みとなつた。

かくて二十三日松方侯は突然夜に入つて彼を訪ひ、申すには善後策甚だ困難てある。かゝる事にて宸襟を惱まし奉るは畏多し。依て拙者元老會議の結果代表者として此大任を擔當せられんことを勸誘せんが爲めに來つたといふ。又翌廿四日の夜は井上侯來邸して再び勸誘する所あつた。そこて公は儼然色を正ふして、公等元老に於ては　至尊の御寵信も厚ければ、相互に斯る相談もせらるゝも妨けなかるべし。されど元老以外の者に向て斯る相談を仕向け、若し万一　聖慮に副はぬ場合には如何にせらるゝとて詰りしかば、流石の井上も憮然として悟る所ありしものゝ如くして去つた。而して越えて廿六日の午後宮中よりお召あり、彼に向て刻下容易ならざる時機に陷りたり、汝に内閣組織を命ずとの大命が降つた。然し彼は　陛下に向て此御沙汰は暫らくお預り申上げたいと存ずる。其故は臣が考ふる所にては伊藤公が内閣を繼續するは最も必要てあつて又難局を料理するには伊藤公の力に籍らずしては益々困難なるべしと存じ奉る。幸に　陛下の御許を蒙らば之より大磯に赴き、親しく留任を勸告せんことを懇願し奉ると奏聞せしかば、　陛下も之を聞召したれば、直ちに御前を退出して大磯に赴き、右の理由を敷衍し、午後七時より十時に及び、又翌朝八時より再び其事を談じ、伊藤公に留任を勸告し、公に其意あらば自から閣僚の一人となりて、公を補佐す可しと諮りしかど終に要領を得ずして午前十時歸京し、參内して臣不敏にして伊藤公と談論するも其目的を遂する能はず、此上は　陛下伊藤を召され、親しく留任を命じ賜ふの外あるべからずと申上げ、かくて　陛下は此事を御聽

納達ばされ、伊藤公を召させ賜つたから、公は廿八日の夜に入つて品川より下車し、三田の桂邸を訪ひ、今回のお召は何事にや、自分は甚だ怪む所なり。先きに別るゝ時に予が後任の命を受くるの外致方なしと予が明言せしにあらずやといふ。そこで彼は伊藤に向つてお召になりたる顛末を語り、兎に角參內して聖旨を承るべしといふ。然るに伊藤公は謁見の上堅く辭退し、却て彼を推薦したが爲めに彼は廿九日の午後より重て宮中より御召あり。彼が參內すると伊藤公先づ宮中にあつて申すには、只今留任の御沙汰を蒙つたがお受けをしなかつた。後任は桂子爵に命ぜらるゝやう上奏した。到底子がお受するより外はなからうといふ。そこで天顔に咫尺しいよ／＼其命を拜したのである。

彼は此際　陛下に向つてかく申上げた。從來內閣の組織は臣が先輩たる諸元老にのみ勅命を降し賜つたが今日初めて後進たる臣に此大命を授け賜ふ。臣は誠心誠意聖恩に酬ひ、國務に努力せんこと勿論に候へども　陛下亦いよ／＼不肖の臣をして聖明の餘光を仰ぐことを多からしめ賜はらずば到底此重任大責を全うすることを得ず、故に今後は一層萬機に御精勵を乞ひ奉ると申上しに、有難くも御嘉納せられたといふ。

第一桂內閣の出現

扨之にていよ／＼三十四年六月二日第一桂內閣は出で來つたのである。然るに彼が內閣を組織するについて恐らくは最も多く意を用ひたのは海軍大臣であらう彼は豫め此方面の困難を察してゐたに相違はない。川上の沒後薩摩の武權の代表者としては陸軍でなく、海軍の山本權兵衞であつた。山本は第二山縣內閣以來彼と仝僚であつたが、伊藤內閣の時には、彼も山本も辭職の積であつたのに、山本は伊藤の懇談によつて其儘留任した。元來桂山本は、長薩軍人として相匹の位置てある。而して其の政治家としての資望も餘りに懸隔ないのである。そこで此際山本の留任といふ事は幾分か困難の問題てある。彼は豫め此事を憂慮したから、內閣組織のお受けをなすに先んじて西鄉と此事を相談した。濶達なる西鄉は其方面は自分が心得て居ると快

く引き受けた。いよ〳〵權兵衞と直接談判をなした處が、權兵衞種々の理屈を並べて一寸同意さうもない。そこで兩人相携へて西郷に赴き、彼は此上は致方がない。已にお受けを申上げた上は組織せねばならぬ。甚だお氣の毒であるが侯爵自ら海相となつて頂くより外はあるまいといふた。處が流石に權兵衞である。それを聞いたや否や慨然として宜しい、無條件で引受くるといふて其儘留任することになつた。それで世間では海軍擴張が權兵衞の留任條件であるといふて居るが、それは條件ではない。海軍擴張は寧ろ其結果であつて原因ではなかつた。斯くの如くして彼は五十五歳で第一回の總理大臣となつた。

何人も桂内閣を眞面目に受取るものはなかつた。其閣僚でさへも自ら勇み進んで之に應じたものはなかつた。加藤高明の如きも留任の御免を蒙つた一人である。殊に桂公と最も親密の關係でありイザといへば互に力ともなり合ふべき伊東巳代治さへも公が大命を拜しの一番に内務大臣を捧げられたる時に、彼は伊藤に氣兼したのであるか若くは桂内閣の前途を危んだのであるか、案外にも之に應じなかつた。のみならず逆まに彼に向つて御身が内閣組織はチト早過ぎはせぬかと忠告した。其足元が此位であれは外の評判が、或は山川に出來たから明智の天下も同樣三日内閣であらうといひ、若くは緞帳役者から出來たから緞帳内閣であらうなどゝいふたのも強ち無理とは思へんのである。彼も陸軍大臣としては手に入つたものであるが、何をいつても武辨の出身であつて、一般行政については多少未熟といはねばならず實は折角組みにしたものも應しなかつた位であれば些か心細く感ぜぬでもなかつたであらうが、彼は如何なる時でも樂天的であつて常に其希望を失はず、又其希望を達する勇氣を失はぬ男であるから、兎も角も遣つて除けやうと決心したであらう。

世間が斯く冷遇したに拘らず、彼が總理大臣となつたのは必らずしも不時の拔擢といふ譯でもない　伊藤公は明治十八年四十五歳で首相となつた。黑田伯は明治二十一年四十九歳で首相となつた。山縣公は同じく

二十二年五十二歲で首相となつた。松方侯の如きも人は老成といふてゐたけれども首相になつたのは五十七歲てある。五十五歲の總理大臣は明治十八年第一伊藤內閣より大正二年山本內閣に至るまで歷任首相の平均年齡てある。

（備考）

	出生	首相	年齡
伊藤公	天保十二年	明治十八年	四十五歲
黑田伯	天保十一年	明治二十一年	四十九歲
山縣公	天保九年	明治二十二年	五十二歲
松方侯	天保六年	明治二十四年	五十七歲
大隈伯	天保九年	明治三十一年	六十一歲
桂公	弘化四年	明治三十四年	五十五歲
西園寺侯	嘉永二年	明治二十九年	五十八歲
山本伯	嘉永五年	大正二年	六十二歲
平均			五十五歲

且つ彼は後進とはいへ年齡からいへば左程の後進でもない。彼と伊藤公との年齡の相違は伊藤と井上との相違と殆ども同じである。伊藤井上が同道行て世に立ち得るに於ては彼と伊藤と同道行て立ち得ない譯はない。只出身の遲速の爲めに一方は元老であり、一方は第二流の政治家として社會より取扱はれたのである。且つ彼が世の中より冷遇せられたるは單に其第二流政治家たるばかりではない。誤解は常に彼の一生に伴ふて居る。只時と場合に於て其誤解の方面が異る丈けである。當時に於ては彼は巧慧なるハイカラ武人として認められてゐたのである。彼か首相たる器度ありとか、經世家的見識ありとか、難局を料理すべき大手腕ありとか認めたものは恐らくはなからう。或者は彼を目して小才子というて居つた。甚しきは或者は彼をサーベルを提げた幇間といふてゐた。詰り元老の腰巾着となつて小刀細工をする位が關の山と思うてゐたものが少くなかつたのである。然るに大政治家伊藤公が一代の大政黨政友會を率ゐて遂に成し能はざりし政局を引受けたなどとは滑稽とやいはん、盲蛇とやいはん。誰も之を眞面目に相手にするものがなかつたのも強ち無理

とはいはれまい。然しながら此世間から買ひ下げられた事は彼にとつては寧ろ仕合せであつた。誤解は誤解であるが、寧ろ彼は其誤解に帆を掛けて進んで行つたのである。

財政整理と日英同盟

桂內閣の難局は內に於ては財政の始末である。外に向つては政黨に對する關係である。極めて單簡に內の話をいへば、伊藤內閣は豫算實行難の爲めに倒れたる內閣である。少くとも當時三千七百萬圓ばかりの不足を補充せねばならぬ焦眉の急があつた。そこで其資金を外國に仰ぐべく企てたが、元來日本の財政を悲觀的に吹聽した後尻であるから、固より募れやう筈がないいよ／＼十一月になつて其事が出來ぬといふ事に定まつた。そこで彼は閣僚に向つて最早や進退谷つた。此上は辭職をするか若くは他に財源を見出すか外に途はないといふ事を明言した。處が當時の閣僚は何れも其意を諒とし、殊に山本が卒先して海軍より若干の金を見出し、續いて陸軍も全樣、其他の各省何れもそれ／＼整理繰延をなしたが爲めに三日の間に三千八百萬圓の不足を補ふに四千餘萬圓の金が出來た。そこで彼は之を其の必要に應じてそれ／＼處置し、必要以外の金は元に戻し之にて一先づ形を附けたのである。然るに茲に誠に仕合せの事は、此三日內閣の壽命を保險すべき一の意外なることが出來た。そは何であるかといへば日英同盟の締結である。

日英同盟の締結については話すべき事が澤山ある。然し主として本題を離れてはならぬから、主人公たる桂公を中心として語るであらう。それと全時に第一に明白になすべき事實は、世間では桂公は伊藤公と約束して日露同盟を企て、其爲めに伊藤公が出掛けて居る中途に伊藤公を出し拔いて日英同盟を締結したといふ風說の全く誣妄であるといふ事である。今其事實を語るであらう。

日英同盟締結の眞相

明治三十四年七月十五日に倫敦なる林公使（林董伯）より、英國に於ては日英同盟を結ばんとする傾ありと

電報が來た。越えて十七日に又英國のさる高貴なる御方にも仝様の意があるとの電報が來た。そこで桂公は之は重大なる事と思ひ、種々考慮の上八月三日金澤なる伊藤の別邸に赴き、伊藤公に會見し、かく〳〵の電報來れり、公の意見は如何といふ事を問ひ、互に意見を交換した。伊藤公は兎も角も考へて置かうといふ事て其儘別れたが、翌八月四日は伊藤公の方より葉山なる桂公の別邸を訪ひ、茲にいよ〳〵話の歩を進めた。其要領は今茲に委しく語る必要はないが、若し其同盟が彼我對等であり、我も彼を益すると仝時に、彼も我に利する所少からざるに於ては必らずしも避くべきてないといふ事に歸着し、伊藤公は自ら筆を執つて其綱要を掲げた程であつた。そこで日英同盟については最も先きに其消息を知り且つ意見を交換したのは首相以外では伊藤公である。然るに其後井上侯が國府津よりの書簡によれば、伊藤公も米國まで漫遊するといふ事てあるが、此機會に乘じて之を歐洲まで延長せしめては如何との事であつた。固より異存あるべき筈もなければ公は之を賛成し且つ伊藤公の漫遊については多少の盡力をしたに相違はない。いよ〳〵出立の間際となり、公は伊藤公を主賓として、仝鄕の先輩山縣井上を自邸に迎へ、懇談的離宴を張つた。時に伊藤公は例の調子にていはるゝには、今度位氣樂なる旅行はない。自分は全く無責位の位置にあれば、今度は思ふ存分にやつて行く積りであるといふ事であつた。處が山縣公は之を聞き尤め、それでは困る、當局の人が困る。其の事の國際問題に關するものは獨斷を容さず固より當局者と打合せもし、相談もすべきであるといふた。處が伊藤公はそれでは御免を蒙る、此度の旅行は必らずしも自分から强いて行かうといふのではない。然るに事々物々掣肘せられては堪るものでないといふ事であつた公は之を聞いて穩やかに言ふには、予も諸先輩の指導によつて不肖ながら此大任を負うて居る以上は、苟も予が知らずして國家の大事が措置せらるゝなどいふ事は到底堪ふべき事にあらず。願はくば此意を諒とせられたしといひ、話は兎も角もそれにて落着し、而して

三十四年九月十八日に伊藤公はいよ〱横濱を解纜したのである。

當時伊藤公に如何なる經綸があつたかは、伊藤公は更らに一言半句も當局者たる桂公に向つて語つた事はない。唯伊藤公が亞米利加を經由して英國に赴かず佛蘭西に到着し、それより一氣呵成に露國に赴きたるを以て、扠は何かの魂膽があつたといふ事が猜せられたのである。此一事は伊藤公と桂公との政治的交際に爾後少からぬ影響を與へたる誘因であるから、茲に之を特筆して置く。

偖小村侯は三十四年九月二十一日に北京公使よりして桂内閣に入り其外相となつた。爾來幾多の折衝を經たが、兎も角も日英の相談が追々進んで來た。之と同時に伊藤公と露國との相談も又多少進行したのである。

此方に於ては種々の逕路を經ていよ〱最終の會議とも云ふべき會合が同年十二月八日葉山の桂別邸に開かれた。之は山縣、西郷、大山、松方、井上、山本、小村等であつて、彼等は此手を換え品を代へて他人より氣附かれないやうに忍びに忍びて集合したのである。そこで大體の議を決し、いよ〱その意見に調印せんとする場合になつて、獨り井上のみは遲疑した。彼がいふには、此事は伊藤は知つて居るかと。そこで桂公は、固よりである。現に此座（坐の欄間には、『長雲閣　爲桂相國　博文』の額を掲く、是れ實に同月同日此坐に於て公の揮毫したるものと云ふ）にて八月四日伊藤公とは打合せをしたのであるといふた時には井上は實に意外の顏をした。實をいへば伊藤井上は日露協約を内々相談して其爲めに恐らく伊藤公も出掛けたのであらう。聞けば山縣公も少しは感附いてゐたといふ事である。只當局者たる桂公は全く知らぬが佛であつた。そこで井上は今は此迄なりと同意を表し、且つ外務省の暗號を借り電報にて伊藤に向け右の次第を紹會したのである。處が葉山會議の結果を上奏に及んだがお手元には伊藤の方より暫らく調印御見合せ然るべき旨電報にて直接上奏してあつた。そこで陛下は更

に元老に向て再議を命じ賜へしが、何れも前議の外他意なかりしかは再び其旨を伏奏するに及んだ所遂に聖斷によつて日英同盟は成立したのである。實に此の聖斷こそ古人の所謂る惟斷乃成に該當す可きなれ。

そこで此事件についィ桂公が伊藤公を賣たといふべき理由は毛頭ない。伊藤公も固より桂公を賣る積てはなかつたらう。然し出立に際して之を桂公に洩さなかつたのは如何なる理由てあつたか、そは伊藤公にあらざれば知ることが出來ない。兎にも角にも七月四日葉山に於ける伊藤公の案が其儘日英同盟の條文とはいはれぬが、少くも伊藤桂の協定したる案が其基本となつたてあらう。又伊藤公の聖彼得堡に於ける運動が牽制運動となつて、豫て遲鈍なる英人の神經を敏捷ならしめ之が爲に日英同盟の機を初め、且つ我要求を容れしむるについ、多少の秘訣があつたと觀察することが出來る。それて伊藤公は日英同盟に全く關係ないといふ事は虛僞てあるが、其れと同時に公の志は寧ろ日露同盟であつたといふ事も明かてあらう。而して若し日英同盟に於て伊藤公の功ありたりとせば、そは恐らくは怪我の功名てあらう。即ち公が日露協約を遂げんと纏りたる結果が、意外の邊に反響したる爲てあらう。此の日英同盟に關して、當初より始終一貫桂公と其の意見を一にし、之を閣外に於て翼成したるは實に山縣公てあつた。此同盟は日本の世界に於ける位置に非常なる關係があるのみならず、將來日本の外交政略にとつて一つの中樞となつた。而して內閣にとつては此一事は少からざる威信を加へたのてある。其調印は三十五年一月三十日倫敦に於てし、之を發表したのは同年の紀元節てあつた。

第一　桂內閣と政友會

扨政黨との關係については少からざる困難があつた。元來桂公は政友會の前身ともいふべき自由黨とは山縣內閣以來、否大隈內閣以來淺からぬ緣故を持つてゐた。されば其緣故からすれば、又伊藤公が桂公を推薦した關係からすれば彼等は桂內閣を助けぬまても之を敵視することは出來ぬ筈てある。處が事實はさうてな

かつた。有體にいへば彼等は政權に近かんが爲めに伊藤公に近いたのである。處が伊藤公が彼等を率ゐて內閣を組織して僅に一議會を經、僅かに半年を過ぎた許りで其の內閣が瓦解したとなつては彼等の怨靈の宥めやうはない。そこで當時の總務委員の一人尾崎行雄氏の如きは一身四體の使ひ分け演說をした。尾崎氏は三十四年十月十二日政友會東京支部會に於て演說していふに、個人としては現內閣に對し善意もよく惡意もなし。政黨員としては超然內閣たる桂內閣に對しては惡意を有せざるを得ず。總務委員の一人としては伊藤總裁の訓戒を奉じて善意を以てするの外なかるべし。而して院內總務としては多數代議士の意見に從はんのみと。一般の調子は之で分るのである。桂內閣も隨分之には手古摺つた。併し種々の方便交涉にて辛やく妥協案は成立ち政府の方では豫算案を撤回し、政友會は同時に償金特別會計法案を撤回し、政府は衆議院の豫算查定の大體に全意を表し、且つ行政財政の整理を決行するといふことを約束し、政府は淸國償金を普通歲入に繰入れ、公債支辨事業を普通會計に移すの目的を遂し、政友會は行政財政の整理の約言を握り其局を結んだのである。然し此妥協は桂公にとつては固より苦き經驗であつた。

伊藤公は三十五年の春世界漫遊を終へて歸つて來た。其の總選擧には、政友會は依然絕對的過半數を占めた。露國の極東に於ける經營はいよ〳〵高手的となつて來た。そこで政府は日英同盟の結果として八萬噸の海軍を增加すべき計畫をなし、之が爲には山縣內閣時代に年限附にて增徵したる地租を其の滿期後其儘据ゑ置くべく計畫を立てた。伊藤公も當初は之に反對せざるのみならず、先づ致方はなからうといつてゐた。政府は固より世界の大勢に精通したる伊藤公の事であるから左もあるべき筈と思うてゐた。同年の秋より冬の初めにかけて九州に於ける大演習に行幸があつた。桂公もお伴として出掛けたのである。彼は熊本にて病に罹り、其儘熊本に暫時病臥した。此間に意外の變は來た。それは政友會の代議士中には地租繼續に不同意

を唱ふるものがあつて、先づ井上侯を動かした。今日の地方費の増加は限りもなく、地方の疲弊底止する所を知らぬ。此際に地租増徴を据置くが如きは民力の堪ふる所ではない。速かに年限の終ると共に減税せねばならぬと。而して此論は不幸にして伊藤公をも動かした。彼は、遙かに此消息を聞いてゐた。山縣公は頗る憂慮に堪へず彼の歸途を神戸に要して計る所があつた。然し遂に要領を得なかつた。彼が海路東京に歸つたのは十一月廿八日であつた。然るに翌廿九日には伊藤公より電話を以て面會を求め、三十日午前九時より山本海相、曾根藏相立合の上官邸に於て會見した。伊藤公がいはるるには自分は海軍擴張は異議なきも地租繼續は反對である。此旨承知ありたしとの事であつた。然しながら十二月五日は已に議會召集の日である議會を眼前に控へて此際政府の計畫を變更する譯にも行かず、遂に双方の主張を以て各々議會に臨むこと、なつた。然し彼は如何にも殘念に思ひ、此意見の衝突の爲めに併せて伊藤公との交誼を害するを遺憾とし、

翌日は伊藤公を麻布の私邸に訪うた。時恰かも西園寺侯が公の邸にあつて彼と立ち代つて歸つた。彼は伊藤公に向つて、意見の不一致は致方がない。公事は公事私交は私交。願くば之を混同せず、尚從來の如く交誼を忝うしたしとの意味にて今日殊に訪問したのであると告げた。伊藤公は勿論である。此の場合は致方がない。何れ議會に於て衝突の上機會があれば又其際に何とか工夫もあらんといふ事であつた。而して公が伊藤公の邸を辭せんとするに際し、伊藤公のいはるるには今夜大隈伯と駿河臺なる西園寺侯邸に於て會合の約束があると。そこで桂公が申すには然らば閣下には大隈伯と聯合せらるゝや、伊藤公曰く議會では自らさうなるであらうと。そこで彼も慨然として伊藤公の邸を辭した。而して熟ら思ふ自分は後進者として何等政黨の後援をも有せぬのに、天下の大政治家と仰がるゝ伊藤大隈の二老が二大政黨を率ゐて予の孤軍に當るといふは如何に愉快なる事であるか。勝敗は兵家の常である負けても遺憾はない。必らず他日を期して彼等をして

一泡吹かせんといよ〳〵決心の臍を堅めた。

然るに翌日は案の如く兩老政治家會合の結果として政友進歩は各々大會を開き、伊隈兩黨首領は各自の黨員に向つて演說し、對議會策の方針を訓示した。政府は同時に閣議を開き、いよ〳〵決戰することゝなつた。かゝる次第なれば解散は覺悟の前てあつたが、然し衝突の上は機會もあらうといふ事てあつたから、開會中兒玉臺灣總督に依賴し、熱海に靜養したる伊藤公を訪問せしめ、何とか調停の道はなきかと計りたるも遂に畫餅に屬したのてある。これは伊藤公の政黨に及ぼす威信の缺乏によつたのてあるか、將た伊藤公彼自身も左程まて調停に熱心ならざりしが爲めか。そは知る所にあらざるが兎も角も彼等は海軍擴張には反對せざるも地租繼續には反對との事て、遂に解散となつたのてある。

解散後の妥協

明けて三十六年伊藤公は一月二日葉山御用邸に行啓中の皇太子殿下(今上陛下)に伺候せられたる歸途、飄然として葉山の桂別邸を訪問した。磊落なる伊藤公の事てあれば、顏を見るや否や、實に君はひどい事をしたといふた。かくて種々雜談の末、此儘には時局捨て置き難し。森日更に相會して善後の策を協議すべしといひおいて去つた。これは政友會との妥協回復の端緒てあつて、之に關しては山縣公は實は一方ならざる骨折をなし、遂に此上は政府は地租繼續を撤回し、之に代ふるに公債を以てし、海軍擴張をなすべしといふことを根本とし、之によつて妥協は成立つたのてあるが、當分之は秘密となし置くべしとの伊藤公の希望てあつたから、内閣大臣以外には殆んど誰も知るものがなく、そこて政友會は盛んに政府を攻擊し、又政府側ては之に對する報復運命をなし、いはゞ頭と頭とは合一しても其下は尙戰爭最中てあつた。

陛下は海軍大演習又は大阪内國勸業博覽會開會式等の事につき、京都に御駐輦あり、供奉したる公は暫時東京に歸り、種々の用務を形附け、再び大阪に至らんとて京都まて來りしに、兒玉總督は京都まて出て迎へ

實は御身が阪地を去りし一週間に形勢一變し、伊藤公は片言を以て訴を斷じ、非常なる立腹である。此儘になし置けば折角の妥協も水泡に歸する外はないとの事てあつた。そこで彼は此上は直接伊藤公を見て其疑團を解くの外なしと思ひ、大阪茶臼山なる伊藤公の寓所を訪ひ、其事情を縷說し最早や此上は妥協の發表をなすより外なしといひ、其翌日即ち四月廿日博覽會開場式には伊藤公桂公馬車に合乘して之に臨んだのである。其時が時まで政友會員は申すに及ばず、世間でも兩人を政敵として認めたのであるから、同車して博覽會場に臨んだ事は少からざる注意を惹いたのである。而して幾許もなく妥協の事は世間に知れ渡り茲に段落を告げたのであつた。然るにいよ〱臨時議會となつては、妥協條件丈けは行はれたが部分攻擊は相變らず行はれ、平田農相、菊地文相の如きは其槍玉に上り、隨分桂内閣も痛手を負うたのである。然しながら海軍擴張は兎も角も之が爲めにいよ〱行はるゝ事となつた。彼は此際に於ても妥協の最も苦き經驗をしたのである。

日露戰爭の開始

話轉じて明治三十六年は内治のみならず、外交に於ても實に重大なる年であつた。露國は三十三年の團匪事件を利用し、滿洲を占領していよ〱居直り强盜をなさんとする狀態を示した。加之朝鮮を壓迫し進んて馬山浦を占め、日本海を掩有せんとする勢を示した。四月八日が第二撤兵の時期であつたが、其時期は全く無視せられて、之を實行せぬといふ報知が北京なる内田公使より報導せられたのは實に四月十九日であつて、彼が伊藤公と同車して博覽會に赴いたる前日てあつた。此上は我より露國に向つて談判を開始するの外なかるべしと決心し、先づ其根本主義を定むる事とした。そこで彼は伊藤公と共に小村外相を伴ひ、廿三日山縣公を無憐庵に訪ひ、茲に其意見を極めたのである。

此際滿洲問題にて露國と談判を開始するは、我にとつて誠に利益ある問題である。若し單に朝鮮を問題として露國と協定せんとせば勢ひ朝鮮を兩國の間に一割

前の多少は別として一分割せねばなるまい。然るに事の行掛りが滿洲である上は、我は彼の滿洲に於ける優越權を認むると同時に、彼をしても我の朝鮮に於ける優越權を認めしむる。滿洲に於ては讓るべき丈けは讓るも致方なし、朝鮮に對しては全部讓歩せざるを以て根本義とせねばならぬ。之が桂公の提案で世間でいふ處の無隣庵會議の綱要であつて、日露談判の根底となつたものである。

然るに其間には臨時議會もあり、又例の思ひ設けぬ珍客黑鳩公將軍の來朝もあり。いよ／＼對露談判開始の聖裁を請ふ可く御前會議を開きたるは六月二十三日であつた。其當日決定したる要目は、無隣庵の根本義の如く、日露兩國は互に韓國又は滿洲に於て現に保有する各自正當の利益を認め之が保護上必要の處置を取り得るといふ事であつて、此目的を達する爲めには萬難を排してゞも行くといふ事であつた。

偖其翌日は彼は特に山縣、伊藤の兩公を官邸に會して申すやう、いよ／＼日露談判を開くといふ事になつては之れ政局一轉の時機である。熟ら考ふるに、かゝる大事件については、不肖某の到底よくする所でない。詰り兩公の中何れにか然るべく大局を擔ひ給ひ、不肖ながら相當の職に就き涯分の力を盡すであらうといふ事であつた。然るに兩元老は之を聞て以ての外である。今日斯くの如き事を聞くの必要なしといひ捨てゝ何れも退去せんとした。そこで彼がいふには、此上は致方なし、予も出る所に出て予の決心を申上るの外はなし何れにてしも兩公を煩はすの日ある可し請ふ諒せられよと。其翌日會議を開き、右の顚末を告げ、閣僚何れも彼の意を諒とし、同時に辭任せんといふ事になつたから彼は之を携へて謁見を乞ひ奉つたのである。然るに　陛下には上奏の旨を聞召され、直ちに御沙汰を賜つた。卿は葉山に至り病を治すべし、各省大臣等は總理大臣不在中殊に各自の職責を專念し、遺憾なきを期せよ、總理大臣の辭表は留置き、爾餘大臣の辭表は總理より各自に返戾すべしといふ思召であつた。そこで公は右の次第を閣僚に告げ、葉山の別莊に赴き靜

養を旨とし、恩命の到るを俟つてゐたのである。然るに閑臥十餘日にして德大寺侍從長より病を押して速かに歸京すべしとの電命があつた。又山縣松方の二老より歸京の際は公の自邸に於て面會したしとの連名の電報があつた。そこで歸邸すれば最早や兩老は待ち受けてゐた。彼等の申さるゝには現下の政況は是非御身の留任を必要とす。政局の變化に至つては伊藤公を樞密院議長に任命あらせられんとする内定である。云々といふ事であつた。公は答へて曰く、兩閣下の盛意了承す然し予は　陛下より歸京の御沙汰を蒙りたれば先づ拜謁の上聖意を承り其上にて兎角御返事致すべしと申述べた。而して當日の午後拜謁したるに、陛下は此際病を押して留任すべし。卿が意見とする元老の全力を以て國家重要問題に當るには別に思召があるといふ事を親しく仰せ聞かされたのである。御前を退き伊藤公に面會したるに、公が申さるゝには、若し君が留任せぬといはゞ予は强いて就職を辭退せねばならぬといふ事てあつた。そこで一方に於ては伊藤、山縣、松方、諸元老は何れも樞密院に入り、彼は政府を改造して共に力を併せ、いよ／＼對露問題を解決すべく準備をしたのであつた。

世間では伊藤公の樞府に入りたるを見て、恰かも彼の陰謀かの如く認めたるものもあつた。然しながら當時の事情は實に容易ならぬ前途を見込んだ時局であつてなか／＼狂言處ではない。實際内に於ては元老、當局者の一致を必要とし、廣くしては擧國一致を必要としたのである。其際に於て最も骨折つたのは山縣公、松方侯であらう。井上侯も實は樞府に入るべきであつたが侯は種々の關係上固く辭したが爲めに入ること丈けは免れたが、然し元老として全く同一の步調を取つたのである。而して西園寺侯は、伊藤公と其の位地を交代し、西園寺侯が樞府議長より出てゝ政友會總裁となつたのである。

内閣改造の結果、平田、菊地、芳川の諸相は去り、兒玉伯が内務大臣兼文部大臣、曾根子が大藏大臣兼遞信大臣、清浦子が司法大臣兼農商務大臣といふ役割て

あつて殊に兒玉、曾根、清浦の三大臣は行政整理委員となつて盛に大鉈を揮つた。露國との談判はいよ〳〵小村侯が引受けてやつて居つた。此談判の事は委しく語る必要はないが、實は彼等は果して此談判が首尾よく遂げ得るや否やといふ事について充分なる考慮をしておいたのである。有體にいうて見れば日本が朝鮮を取つて了へば露國は南滿洲に安閑として居る譯には行かぬ。朝鮮を全部取れば日本は鴨綠江を超えて直ちに側面から滿洲を衝くことが出來る。其場合になれば滿洲は南北に中斷せられて了ふ。それで滿洲の全部を取るといふ場合には、勢ひ朝鮮まで手を出さねばならぬのであつて、露國が朝鮮の東海岸より南海岸に手を伸ばして馬山浦を軍港となさうといふのも理りあるのである。馬山浦は蒙古が日本を征討する時も軍港としたもので實に危險千萬の話である。それで如何に此方より滿洲に於ては讓つても其代りに朝鮮全部を露國に讓らしむるといふ事は決して容易の業ではなかつたのである。それで出來得る限り平和的の解決をなすと同時に萬一の覺悟は談判の當初から極めたのは論を俟たんのである。露國の方では固より眼中日本はなかつたのであつてなか〳〵相手になつて呉れなかつたのである。初めは大同江を堺として行かうといふ事になつた。次には鴨綠江を中心として其兩岸に中立地帶を作らうといふ事であつた。何れにしても初めより朝鮮については石一つ土塊一つも彼に讓らんといふ根本義の我目的を達するには頗る困難であつたのである。

然るに當時意外の僥倖があつた。それは河野廣中が議長となつて勅語奉答文に政府彈劾文を挿んだが爲めに解散になつた一事である。之れは實に不意打であつた。が此不意打の結果政府は意外にも仕合せをしたのである。それが三十六年十二月十一日である。此爲めに政府は何等の障礙なく一方には日露談判がいよ〳〵困難なるを見て之に對する非常の準備をすることが出來たのである。即ち臨時支出を要求して樞密院の諮詢を經て京釜鐵道の速成の爲めに臨時費を出し、同時に京釜鐵道を官設としたのである。政府は何處までも猶

を破って欠にも戰爭などいふことを口には出さながつた。然し此非常の手段には多少威附いたのである。最早政府も決心したのであるといふことを悟つたのである。それで露國の方てはどうてあるかといふに、最初から日本を馬鹿にして掛つてゐた。韓國領土の一部たりとも日本が之を軍略上の目的にて使用することは出來ぬ、又北緯三十九度以北の同國地方を中立地帶にするについては頑として動かない。而して一方には頻りに大兵を極東に送り、イザといへば我を威嚇せんとしたのてある。我は何處までも讓歩したけれども如上の二件、即ち中立地帶と軍略上の目的に使用してはならぬといふ事は、根本義に於て到底一致することが出來ぬから、右の意味合を最後の提案として露國の再考を促したのてある、然るに露國の方てはことを左右に托して容易に返事をしないのてある。そこて遂に最早や致方ないといふことてあって戰端を開くことになつた。

温言確意彼をして我が眞意を解せしむ可き最後の通牒を露國に送つたのは三十七年一月十三日てある。右の相談會は三田の桂邸に開いたのであつて、其相談者は山本海相、小村外相、寺内陸相等であつた。其時彼は恰度インフリエンザに罹り三十九度以上の熱てあつた會議濟んて打臥したに四十度以上を越へそれから約二週間病氣をして起上つたのは二十二日てある。然るに露國から何等之について回答が來ないから二十四日謁見をして意見を上奏したのてある。

第一若し向ふから同意して來たら其儘の事、若し反對をいふて來たら戰端を開く外はない。若し多少こちらの事を容れて來たら、忍び得らるゝものなら廟議を盡して決定することてあつた。其後又約一週間になつても何等の返事が來ず、とう〱一月も空しく過ぎたのてある。最早致方なしと二月四日御前會議を開き、そこていよ〱開戰の議を決した。戰端は斯くの如くして開かれたのてある。

日露戰役と其結末

戰時中の事は委しく茲に述べる必要はない。陸海軍

の事は各々其當局者がある。彼が最も其心を配つたのは何であるとかいへば、國内に於ける人心の統一、又中立國に對する好意の維持、又帝國の擧動が國際法上に何等の牴觸することのないやうにする事、殊に内外宗教の關係については最も注意をした。露國の宗教者の日本にあるものに對しても殊に保護を加へ、且つ一切の行動に於て、國際法上惡例を後に殘すことを避け、世界の同情を失はざる事を努め、又内地にある宣教師などに對しては此の戰爭や正當防禦上止むを得ぬ義戰であることを知らしめ、彼等の善意を得んとしたのである。此戰爭は固より擧國一致の骨折である。殊に聖天子の御稜威て功を擧げたのてあるからして專ら誰の功といふべきてはないが、當局員たる彼の功績は何人と雖も之を無視する譯には行くまい。元老が彼の内閣を助けた事は固よりてあるが、之を助けしむるについてはなか〳〵容易の事てはなかつたのてある。元老といへば何れも自惚は強く、我儘てはあるし、なか〳〵後進の彼のいふ事を一々敬服して聞くといふ譯てはないのてある。彼が之に對する苦心の容易でなかつたといふ事は察するに餘りあるのてあつて、第一桂内閣は元老の後見の下て出來又元老の後見の下て運んて行つたのてあるが、然し或意味からいへば彼が巧みに元老を操縱したといふ事もいひ得るのてある。

斯くして所謂講和問題は出て來たのてある。講話といふ事についても一言する必要があるが、戰爭の根原は朝鮮てあるからして、此目的さへ遂ぐれば先づ最初の、又最主たる目的は遂げたのてある。此上戰局を我より好んて擴大する必要はない。何れかといへば露兵を朝鮮以外に驅逐した後は、戰爭の速かに解決することを希望したに相違はない。そこでいよ〳〵小村が全權委員としてポーツマウスに赴くについては、どういふ訓令を持つて行つたかといふ事を茲に一言する必要がある。

此講和條件の根本義は三十八年の四月廿一日の閣議て極つたものてあつて三つある。

第一は朝鮮を全然我自由に處分するといふ事

第二は滿洲より露國の軍隊を撤退せしむるといふ事、其場合には此方にても撤兵するとは勿論の事、

第三は旅順大連の經營、東清鐵道は哈爾賓以南、又關東洲の租借權を我の手に收むる事。

此三つてあつた。されば同年六月三十日閣議て決定し七月五日御決裁を經たる全權委員に對する訓令ては如上三つの事が絕對的必要條件としていうてあるのである。其他例へば軍費の賠償、沿海岸の漁業權とかいろ／＼加つて居るが要するにそれらは附帶條件てある處がポーツマウスの條約は確かに必要條件の目的を達したといひ得るのである。勿論哈爾賓が長春になつた位の事はあるけれども、概してさういひ得るのてある況んや半ばとは云へ、樺太を取りたるをやてある。それてポーツマウス條約は我にとつては初めから目的としたものを達したのであつて決して之を失敗といふ事は出來ぬのてあるが、當時連戰連勝に慣れた所の人心はなか／＼此位で安心したものでなく、又政府も盛んに人心を鼓動して、毫も國力が疲弊したとか、講和が必要だとかいふ內兜を敵には勿論、味方にも知らせなかつたが爲めに、人心の激興した事は必ずしも怪むに足らない。寧ろ當局員は群集の怨を冒して國家の秘密を鄭重にし、又群集の怨を冒して國家の目的を達したといふことを識認してやつて然るべきてあらうと思ふ。桂公の本領は卅七年二月四日開戰の日よりも、卅八年九月五日燒打の日に於て、寧ろ發揮せられたのである。然しながら戰爭て異常なる人氣を得た內閣は、講和て異常なる不人氣を來たし、必らずしも之が唯一の原因といふ事てもなかつたが遂に日露戰爭の段落が著くと同時に第一の桂內閣は辭職したのてある。

第二桂內閣の出現

桂公が何故に西園寺侯を後任に推薦したかといふ事については多言を用ひず。ポーツマウス條約に於ける衆論沸騰、國論紛擾の際に、西園寺侯が政友會員に向つて其贊成演說をした事て分る。要するに一脈の消息は兩者の間に通じてゐたに相違はない。而して何時も

内閣更迭の際は種々の葛藤あり、面倒あつて、元老會議や詮定や、揩つた揉んだの結果辛やく出て來る例であるが此際に於ては何等元老の容喙を用ひず、兩人立談の際にて一切の事は決したのである。斯くの如くにして桂西園寺の政治的關係は續くが如く斷ずるが如くにして今が今まで繼續せられて居るのである。

第二桂内閣は實に明治四十一年七月十四日を以て成立したのである。當時に於る桂公は已に威信中外に轟く一大政治家であつた。之を第一桂内閣の當時に對照すれば殆ど螢と星との相違がある。第二桂内閣に於ける桂公は日英同盟の締結者である。日露戰爭開始前より講和に至るまで始中終を一貫したる大宰相である。最早や彼に向つて何人も鼎の輕重を問ひ得る者はない伊藤公でも山縣公でも功績といふ點に於ては彼以上を望むことは出來ぬ。そこで其内閣は固より元老の後見など、いふ必要のある筈はない。而して公は内閣組織の當初に於て、自ら政綱を作り之を上奏し、之を元老及び閣僚に示し、之によつて着々進行したのである。只此際一言するは其政綱の中に斯くの如き事をいうて居る。「外は列國の交誼を全うし、内は民心の墮落を救ひ財政の紊亂を理め、民力の發展を期する等是れ皆當今の急務にして而かも亦總て容易の業にあらず某等不肖を以て此至難の責に當る。只至誠至公、信を國民の腹中に置かんことを期するのみ。故に其帝國議會に對するも黨派の異同によつて苟も合はず、又苟も拒まず、其己れと見を同じうするものは喜んで之れと共にするも、苟も國家の公を忘れて私に黨し、漫りに勢力を籍て壓迫を加ふるに至ては假令幾回解散を行ふも敢て辭せざる所也。」と之が彼等の決心であつた。即ち文句通りに解釋すれば、之は超然主義の福音である。然し幾回解散するも辭せずなど、は、言ふは易く行ふは難し現に議會開設以來の内閣で引續き二回解散したるものは僅かに第二伊藤内閣が二十六年十二月解散し、翌年六月臨時議會を解散した許りで、而かも二回解散の後は伊藤内閣は當然瓦解すべきであつたが、僅かに韓國出兵の爲めに、日清戰爭の爲めに其命脈を維持したの

である。そこで桂内閣も決心はしたものゝ果して之を實行し得るや否やといふことは固より覺束なき事である。然しながら彼等は兎も角も此決心で赤裸々で乘り込んだのである。此れは必らず財政整理で、天下の人心を繋ぐ可き抱負があつたからであらう。

第二桂内閣の成績

第二桂内閣の成績を擧ぐれば第一は財政問題である第二は韓國の併合である。第三は條約改正である。其他隨分事も多いが先づ此三者について概略陳述するてあらう。

(一)財政整理。元來西園寺内閣は總選擧の結果、絕對的過半數を制したるに拘らず、遂に倒れねばならぬ羽目に立至つたのは、内は財政問題に困み、外は商工業階級の望を失うたからである。切言すれば不景氣は西園寺内閣を倒し桂内閣を迎へたのである。そこで當面の必要は此要求に應ずることてある。桂公が武人出身たるに拘らず自ら大藏大臣を兼任したるが如きは其全力を豫め茲に用ふる決心であつたといふ事はいふまでもない。世人は陸軍大將が大藏大臣となつたのを見て不思議と思ふが、我等は寧ろ桂公が陸軍大將となつたのを不思議と思ふものである。彼は偶然の行掛りより武官となつたけれども政治は彼の殆んど先天的生命であり、又嗜好であり、本領である。武官の如きは畢竟自然の傾向に反したものといふて差支ない。それであればこそ彼は武官でありながら軍事行政を專門に研究したではないか。彼が財政に於ける手腕は、彼の外祖父中谷靜心翁の衣鉢を殆んど自然的に相續したといふても差支あるまい。當時の經濟界を見れば、日露戰爭の餘波を受けて實に疲弊困憊の極に達して居た。戰爭の費用は十八億圓である。募集した公債も十五億圓に達して居る。歲計は膨脹した。增稅で足らぬから公債を募集して陷缺を補うたのであるが、それでも政府は豫算の實行に困難を感じたのである。經濟界は財政の壓迫の爲めに尙更困難を感じ、そこで實業界は、西園寺内の無策無能に愛相をつかし、其爲め更迭ヶ來たしたのである。そこで彼は財政經濟の整理と公債信用の回復

とに全力を注いだ。乃ち三年間に亘る桂内閣の施設を擧ぐれば左の目的を達したのである。

一、歳計上歳出入の均衡を維持する方針を定めたる事、

一、未募集公債全部の募集を中止し、又極めて特殊なる場合の外當分新規公債募集せざることゝなしたる事、

一、公債償還資金を增加し毎年少くとも五千萬圓を償還することゝなしたる事、

一、租税の公平を計り、國民の負擔を緩和し以て國力の培養を計る爲めに國庫收入に於て約一千五百萬圓を減少せる減税的税法整理を實行したること

一、公債市價騰貴と民間の金融著しく緩漫を告ぐる機會を利用し四十三年一月以降低利公債借換の事業に著手し已に借換を終りたるもの五億圓に上り之が爲めに國庫の利子支拂額約三百萬圓を減少したる事

一、地方金融の改良を計るの目的を以て公共團體耕地整理組合及び産業組合等に對し低利資金を融通するの政策を取りたると同時に勸業銀行、農工銀行に關する法規を改正し以て地方に對する資金の供給を圓滑ならしめたる事

概していへば此通りであるが、少くとも第二桂内閣は財政々策に於て成功したのである。西園寺侯が退れたとて桂が出たればとて無いものはない。有るものはある。然し經濟は數字と共に又心理的作用を要するものである。桂の非募債的廣告は世界の市場に帝國公債の信用を厚くした。固より慧眼なる桂公なれば日本も當分借金なして濟むべきてものでないのは百も承知てある。然しながら取らんと欲すれば先づ與へよである。大いに借らんと欲すれば少しも借らぬといふ立て前が必要てある。吾人は此消息に於て桂公の苦心を諒とするものである。世上の論者或は之を目して誤魔化しといひ、遣繰りといふ。然し誰が帝國の財政を料理したとて此れ以上の事も又此れ以外の事も出來る筈がない。

(二)韓國合併」については特に一言する必要がある。桂公は世上の認めて臨機應變的政治家となす一人である。甚しきは主義もなければ主張もなく、當座當座を瞞過するに巧みなる政治家以上に値踏みせられて居らぬ事もある。然しながら彼は一の目的を立つれば必ず之を遂げざれば止まぬといふ男である。我等は寧ろ其執着の甚しきに驚くものである。又時として目的を達せんとするの餘りに手段を選ばぬ危險はないかと心配する程である。目的其物に至つてはなか／＼容易に放下する事はない。彼の朝鮮に於ける如きも其一である。彼は自ら滿洲に出征し、而かも海城に籠城したるに拘らず、馬關條約に於て遼東半島割讓の事を贊成しなかつたのである。取るはよいが如何にして之を守るか、用ふるかといふ事については彼は寧ろ國力の足らざることを危んだのである。然しながら朝鮮其物については彼は當初より一定の見識を持つてゐた。彼が廿九年の夏暫時臺灣總督を拜命したる時、其意見書中にて北守南進論を唱へた。當時に於てさへも彼の北守南進は朝鮮を加へての北守南進であつた。只無暗に朝鮮以外に手を出さぬといふ意見であつた。そこで三十七八年戰役中に於ても如何にして朝鮮を手に入るゝかといふ事については彼は少なからざる心配をしたのである。即ち三十七年二月二十三日の日韓議定書の調印も又同年八月二十三日の日韓協約も、同年十一月十七日締結したる日韓新協約も、事實に於ては只韓國併合の目的に向つて歩一歩づゝ進めたのである。只朝鮮を保護國として永久に存在せしむべきか、若くは之を帝國の一部に合併すべきかについては隨分疑問もあつたのである。統監として朝鮮に赴きたる伊藤公の如きも此問題については頗る思慮を惱まされたのであらう。單に日韓兩國のみならず又第三者の關係もあることてあるからなか／＼樂には行かぬのである。然るにポーツマウス條約に於て露國は最早や韓國を日本が保護國となすことに異存はなく、又三十八年八月十二日調印せられた改訂日英同盟約款にも同樣の明文があれば、帝國が第三者を憚る餘地は頗る少くなつたので

ある。然るに幸にも四十年の夏に至り韓國皇帝が海牙に密使を送つた事が暴露せられ、之が爲めに當時の西園寺内閣は前條約に一歩を進めて全然保護の實を擧ぐることゝした。若し當時に於て合併を企てたならば或は成就したかも知れぬ。或は此れが適當の潮合てあつたかも知れぬ。然しそれは今より論ずべき事ではない。かくて第二桂内閣となつていよ／＼其歩を進めたのてあつたが、伊藤公の如きも四十二年の春頃に至ては――其の時機は姑らく別として――最早や結局は併合の外致方はなからうといふ意見に一致したらしく思はるゝ。然るに公は同年十月二十六日に哈爾賓に於て一韓人に狙撃せられ爲めに非命に斃れ、四十三年五月には曾禰子爵に代つて寺内伯統監となり、七月廿三日赴任し、八月二十一日併合條約の御裁可を得、同日二十九日詔書の煥發と共に併合條約は公布せられたのである。斯くの如くにして明治六年西郷南洲の征韓論破裂以來、廿七八年役三十七八年役の主因となり、遠くは又二千年來我國史的懸案たる日韓の關係は是に於て全く解決せられたのである。而して之を斯くなしたるは固より聖天子の御稜威てあるは申すに及ばぬ事ながら臣下として最も多くの信用を得べきは――直接併合の役目は、寺内伯が當りたるにせよ――恐らくは桂公てあらう。公は終始一貫之に向つて渝らなかつたのである。

(三)條約改正。の事については多言に及ばず。四十四年七八月の間に於て列國との通商條約何れも滿期となるが爲めに其前年廢棄を通告し更に改正したのてある。之れは當時の外務大臣小村侯の功多きに居ると雖も、首相たる彼の力亦少からざるものてある。之と同時に幾多の外交上の問題を解決したのてある。日米協定は四十一年十一月に行はれ、日露協約は四十三年七月に於て更新擴張せられ、日英同盟は四十四年七月を以て更に改訂の上十年間存續することゝなり、其他日清、日露の懸案の解決したる等枚擧に遑あらぬことてある。

政友會との情意投合

斯く舉げ來れば第二の桂内閣は恰かも無事平穩、思ふ所意の如くならざるなきやうてあるが、其實は決して然らずてある。第一の議會即ち廿五議會は西園寺内閣との受授上漸く通過した。第二の議會も面倒てはあつたが解散の必要は無かつた。然し廿七議會には少からざる苦心をなしたのてある。凡そ議會あつてより以來、解散なくして三回の議會を無事に通過したのは第一西園寺内閣と第二桂内閣のみてある。其他は二回までは經たが其以上には出てなかつた。内閣が更迭ぜねば議會が解散せらるゝといふ事が殆んど極つた運命の如くてあつた。そこて桂公は其政綱には所謂解散を幾回繰り返してもといふ如く、解散を賭して掛つたかといふに又しかする能はざる事情もあつた。何となれば若し衝突する場合には韓國合併も、之に關聯する幾多の緊急勅令も悉く議會の爲めに否認せらるゝ危險があつたからてある。否、其危險は殆んど事實にあらはれんとしたのてある。此れは實に帝國の威信に關する大問題てある。そこで桂公は自ら西園寺侯の所に飛び込み、此國家を奈何せんとする問題を提げて侯の決心を叩いたのである。其結果として所謂情意投合なるものは行はれたのである。山縣内閣ては肝膽相照といひ、第一桂内閣ては妥協といひ、今回は情意投合といふが、浪花の葦は伊勢の濱荻で、名目は兎も角も、政黨に向て何物かを餌し、其代償として我目的の幾部を通過せしむる方便に過ぎないのである。彼は此時閣僚を率ゐて精養軒て政友會の幹部及び議員と表向きの會合をした。彼は口を開いて、明治も四十四年となり時代變ずれば之に處するの道も亦變ぜざるべからずというた。政友會は穩健なる政黨てあるから、之と提携して國家の利益を伸張せんといふた。詰り彼のいふた事を綜合して見れば殆んど山本伯が即今の議場て答辯したものと大差はないのてある。彼は止むを得ずして斯の如き言を吐いたのてあるか、又は彼の思想が變化し、進展し、發達して斯くの如き事を言はしむるに至つたのであるか、そは予の知る所てないが、兎も角も彼は斯く明言した。而して情意投合の結果は彼等の

國家經濟上最も必要と認めたる廣軌鐵道案さへも犧牲とすることゝなつた。當時の議會は隨分波瀾多き議會てあつた。南北朝問題の如きは最もデリケートなる問題てあつて、普通の內閣ならばかゝる問題て當然倒るべきてあつた。彼は此問題について深く決する所があつて上奏したが幸に　陛下の聖斷によつて解決したのてある。又此問題の外に議會問題てはないが、彼を最も苦しめたのは幸德事件てある。我等は今日に於ても之をいふを憚るが、彼は實に此問題についでは人の知らぬ心配をした。彼も當時に於て已に社會政策の等閑になすべからざることを考へた。濟生會の如きも全く彼の進言より出たの……てなくば、彼も其主もなる發案者の一人てあらう。斯くの如くにして彼は宛も豫定の退却をなしたるが如く、野を淸め陣を撤し埃一片剩さす奇麗に片附けて去つたのてある。

有體にいへば彼は目今何等辭職せねばならぬ必要がなかつた。若し解散を賭する覺悟があらば彼は優に今一議會を通過することが出來た。然し彼が骸骨を乞ふたのは何故てあらう。人は情意投合の結果餘議なき義理てあるからといふものもある。然し事實はそれよりも寧ろ多少の餘力と餘地とを剩し、悠々として退陣すべく考へたからてあらうと思はれる。蓋し彼の辭職は彼の友人側にも少からざる驚駭を與へたのてあつた。多くの人は彼が辭職を期待しなかつたのてある。斯くの如くにして重て桂對西園寺の關係は出て來た。即ち西園寺は再び首相となつた。而して其なつた當座の態度は少からざる意外の感じを桂に與へたに相違はないそれは從前西園寺が內閣を組織する際には、殆んど桂を一種の顧問とした程てあつた。然るに今回は顧問は愚か相談もせず、通告もせず、否引繼いだる事さへも挨拶せず、寧ろ之に逆行した傾がある。桂も玆に至て情意投合の果して繼續するや否やを疑ふたのも無理はない。

彼の外遊と先帝崩御

當時公が辭職の際に奉りたる上奏文を見れば公は「疲憊の心身を養うて以て奉公を他日に期し敢て後賢

の地をなすは即ち臣が龍恩に報ひ奉るの道なるを信ず」とある。之は辭職の眞意を說明して餘蘊ないものである。彼は全く政界を見捨てたのではない。國家の大事があれば自ら飛び出すは奉公の道と信じたに相違はない。然しながら後賢の地をなすことも豫め慮らねばならぬことも考へてゐたのであらう。而して彼の胸中にある後賢の隨一は、恐らくは寺内伯であつたらう。

却說彼が明治四十五年後藤男と相伴うて明治三十四年來企てたる歐洲漫遊と出掛けたのは保養が目的てあつて、其副產物としては多少得る所あらんと欲したのであらう。固より政治以外無一物の彼であれば其旅行が風雅でもなく洒落でもなく、政治に初まり政治に終ることは想像するに難くないが、然し彼は伊藤の如く特殊の目的を有したと推定することは出來ぬ。露國に於ては日露協約の如何なる程度まで行はれ得べきかを見、獨逸に於ては彼の第二の故鄕ともいふべき地に於て故人を尋ね、懷舊の情を催うし、佛國に於ては佛國の多きに苦みつゝある資本が如何にして東洋に輸入せらるべきかを見、英國に於ては日英同盟の締結者としていよ〱其盟を溫めんと欲したのであらう。然し彼は何等特別の使命を有せなかつたのである。而して此世界的漫遊の結果が、彼の世界的政策の輪廓を作ると同時に、又外より内を見たる國内的政策に多少の變化を齎すべきは、彼の敵も味方も皆豫期したる所である。

然るに萬事に幸運なるべき彼は非常なる不幸に遭遇した。之は彼一人にあらず、帝國全體の不幸であるが彼にとつては更らに其大なるものがある。それは　明治天皇陛下の崩御である。彼が露都に着するや否や陛下御不例の悲報は彼を待受けてゐた。其後の事は言ふに忍びんのである。

反桂（アンチ）の空氣と彼の內府入

扨、彼は元氣沮喪して歸京し、先帝の柩の前に慟哭すると同時に山縣と西園寺は彼に向つて進二無二內大臣たるべく迫つたのである。彼等は口を揃へて、今日の所で否應いふべきでない。只御身の一諾を得るまで

である。萬事は已に解決して居るといふた。之を否むことは彼にとつては殆んど不臣の如く覺えたのである。そこで彼は終に之を承知したのである。之は彼にとつては非常なる誤りであつたらう。少くとも其一身を處する上に於て斯く思はるゝのである。彼は何故に之を固辭せなかつたのであるか。德大寺公は四十年來　陛下の左右に事へたる老臣である。山縣公は威望中外に蕭く老臣である。彼は此等の人に向て讓るべきが當然であらう。否彼は讓つたてのある特に山縣公に向て讓つたのであるといふ事である。然しながら何故に堅く讓らなかつたのであるか。固より　新帝の常侍輔弼の臣としては彼は適當てあつたてあらう。政治上の經驗に於て彼が如きもの幾人かある。彼は舊知識も新知識も相應に備へて居る。又先帝の御寵遇に於ても年と共にいよ〳〵優渥を加へ、御病床に於ても常に彼の事に宸慮を勞させ給ひ、彼の旅程などゝ御病臥中に拘らず屢々御下問あらせられ、且つ彼について常に聖意の篤かりし事は御病床に侍したるものゝ親しく見聞したる所にして、彼はかゝる事を非開するについてもいよいよ身の措く所を知らなかつたのてあらう。されば彼が献身的に山縣西園寺等の勸誘を聞き、恩命を拜したのは彼にとつては餘儀なき事情もあつたらう。然し之は實に彼にとつて非常なる失策であつた。彼は如何にアンチ桂の空氣が世間に濃厚であつたかといふ事に氣附かなかつたのてあらう。否少しは氣附いても、斯くまてあらうとは思はなかつたてあらう。實は第二桂内閣の下半よりアンチ桂の空氣は頗る増長したのである。彼一身の上からいへば彼は眇たる一武辨である。處が三十四年首相となつて以來日英同盟の功によつて伯爵となり、日露戰爭の勳によつて大勳位侯爵となり、更に韓國併合の功によつて公爵に陞敍せられた。彼の勳功よりいへば必らずしも過當といふべきてもなからう。他の公爵大勳位とても彼と功勞を比較して悉く彼以上といふ事は出來ぬ。否多くの場合に於て彼は立役を勤め、他は脇師てあつた。要するに彼は國家の膨脹と共に彼の一身も膨脹したのである。然し世の中は理窟よ

りも感情てある。彼が從來世間より餘り少さき物として誤解せられた結果は今日に於ては餘り大きな物として誤解せられて來た。而して其中間の差が即ちアンチ桂のよつて生ずる所以であつた。彼は只至當の道行を經て、至當の位置に上つた事丈けを自覺して俯仰天地に愧ぢる所なしと思うてゐたに相違はないが、世間は此僥倖兒め！　此大成金め！　生意氣も程がある。驕慢も程がある。いでや彼の頭を叩いてやらうと思ふものも少くはなかつたに相違はない。殊に第二桂内閣は商工業者と最も親密の關係を保つてゐたが、すべての商工業者と親密であるといふ事は實際不可能の事てあつて、一方に親密なるものがあれば一方には自然疎遠なるものも出て來るのてある。然るに親密なるものは恩と思ふべき事もそれ程恩と思はぬが、疎遠なるものは怨と思ふべからざる事までも怨と思ふのは世の慣はしであつて、之が爲めに多大の累ひを受けたに相違はない。且つ又數年來薩州の元老は半ば凋落し、いはゞ長州繁昌の世の中であつて、此長州の繁昌は彼一人て代表した譯てもないが、世間は長閥に對する反感を以て直ちに彼の上に加へて來たに相違はない。彼が餘り大きくなり過ぎた結果、彼の後見役たる元老も從來の如く圓滿の關係でなかつたかも知れぬ。殊に第二桂内閣の後半に於ては彼は縱横發揮、我が意のある所を振舞うたが爲めに眼中元老なしと邪推せられたかも知れぬ。當初より此通りてあればそれも致方がないが、第一桂内閣に於ける彼が如きに對比すれば老人等の釋然たらぬのも幾らかの理由ありと見らるゝ。そこで彼は要するに四面敵中にあつたのである。彼が餘りに大きくなり過ぎた結果は、殆んど總ての物を敵となしたのである。そこでアンチ桂の空氣は彼が内閣の下半期よりいよ／＼濃厚を加へ、辭職したるに拘らず、無官の一老書生たる彼の上に尚渦卷いてゐたのである。云はゞ辭職の手續が餘りに鮮て萬事に抜目なかりし爲め却て愈よ反動の雲を起したのてある。洋行が半年も續けば多少此黑雲が散じたに相違はないが一ヶ月も經つか經たぬに歸つて來ては固より黑雲は依然としてあつた

のである。然るに彼は內大臣となつた。是に於て世間の多くのものは彼が自ら好んでなつたと考へた。內大臣といへば普通の人は百人一首で覺えた儘の官名で、いはゞ雲上人である。彼が雲上人となり、宮中の雲深き所に入つたといふ事は、畏れながら彼は古の攝政關白の仕事をなすのではあるまいかと疑ふたものもあつた程である。奇貨乘ずべきであるから彼の政敵は縱橫無礙に之を彼に向つて有害的に惡用したのである。斯くの如くにして彼れは多年築き上げたる政治的生涯を衆怨群謗の中に葬り去るべく餘儀なくせられたのである。

二師團問題と第三桂內閣

吾人は記して玆に至れば彼の爲めに頗る同情に堪へんのであるが、然し彼も男である。自ら蒔いたる種は自ら刈るより外はないのである。不幸は決して單獨のものでない。一の不幸は必らず他の不幸を伴ふものである。彼が內大臣を奉職して居る中に端なくも二師團問題は出て來つたのである。此問題の可否については今玆に論すべきでないが、然しながら桂公が此問題の首唱者でもなく又利用者でもなく、只傍觀者であつたといふ事丈けは保證することが出來る。有體にいへば桂公は第二內閣に際して此問題を延期した當局者であつた。彼は陸軍出身であれば、軍事を疎略にする心配はないが、財政の點を考へ之を延期したのである。そこで今日に於て此の問題が出て來るといふ事は彼は直接何等相關せざるも困つた事であると思うたのであらう。西園寺侯が此問題について山縣公に依賴し、山縣公が其れを引受けながら西園寺侯を賣り、終に西園寺內閣辭職の止むべからざるに至つたといふ事は政友會側の語る所であるが、事實はさうではあるまい。山縣公側からいへば嘗て西園寺侯より左樣なる依賴を受けたることはなく、却て此方より西園寺侯に向て警告したる事があつたけれども西園寺侯はそれを聽き容れず、遂ひに救ふべからざるに至つたというて居る。要するに西園寺と山縣の間には互に謎を持出し、彼等銘々の勝手に之を解釋し、而して最後に至て互に理窟

を述べ合うたのであつて、今更ら之を判讀する事は苦むが何れにしても西園寺侯は政局の困難なるを見て、事ろ此俗界に人氣ある問題を捉へ、之が名目として辭職したる方が利益であると見て取り、當初は陸軍側より多少强要せられたれども中頃よりは逆に陸軍に立向ひ、陸軍をして此案を撤回せしめざる以上は最早中間に調停の餘地なきに至らしめたのである。極言すれば陸軍は此問題の爲めに逆まに政黨者流に致されたのである。彼等は戰爭に於ての駈引は上手かも知れぬが、かゝる政治上の駈引に於ては百練の士たる政黨者流にかけては素人たるを免れんのである。イザ其結果となつた。西園寺の辭職は政友會側に於ては寧ろ待設けたる事であつたが、元老等に於ては驚愕であつた。西園寺は如何に去らんとするもなか／＼政黨者流は容易に去るまいと彼等は思うてゐたに相違はない。然るに忽然俄然辭職となつたからには其後の始末を著けねばならん。そこで何よりの問題は西園寺の留任である。山縣公は之を自ら元老會議の代表者として西園寺邸に赴き、誠心誠意之を勸告したのである。然し西園寺の眼中には山縣は正面の敵である。總ての敵でなしとするも主もなる敵の一人である。爭でその事を聽くべきや。却て御身之に當られては如何。御身當ること能はざれば桂公より外に人なかるべし、餘の人であれば自分も助くるに迷惑するとまで申添へたのである。そこで山縣公も此難局を始末つくるは自分であるか桂であるかといふ事を考へたのであらう。世間では西園寺侯の後に來るべきは早いか遲いか何れにしても寺内伯であらうというてゐた。然るに元老會議は寺内伯を起さずして、却て松方侯を起さんとしたのである。之は何故であらうか。元來政府が陸軍問題で倒れたから此倒れたる後に陸軍の代表者たる寺内伯を引張出すといふ事は到底時局を收拾する途でないと思うたからであらう。又西園寺侯が桂公ならば兎も角も餘人では之を助くるに苦むというた事も其理由の一となつたかも知れぬ。何れにしても第一は松方侯に赴いたのである。然し侯は辭した。山本伯も辭した。平田子も辭した。

剩す所は山縣公と桂公との兩人である。已に兩人となれば此上山縣公を煩はすべき筈はない。そこで桂公は自ら出てねばならぬ破目となり、終に出て來つたのである。而して之が又桂公にとつては非常なる失策であつたらう。

桂公が辭したればとて日本が暗闇となるでもない。公は衆怨群謗の犧牲となり宮中に入つたのであるが、如何に國家の必要とはいへ、未だ半ヶ年も經たぬに出て來るといふ事は何となく不謹愼なる感じを與ふるのである。元來宮中に入つたのが間違であるが、入つてから思召とはいへ國家の必要とはいへ、俄かに飛び出したのも亦間違である。公が永久に宮内官たるべきや否やは別問題として此際公が出て來たのは公の一身にとつて誠に遺憾といはねばならぬ。公はアンチ桂の上塗りをしていよ／＼其渦卷く黑雲を呼び起し、捲き起したるのである。斯くの如きが悧巧なる政治家といふべきであらうか。世間が桂公を悧巧といふは少し買ひ被つたのではないか。彼は固より最も常識に富む政治家であるが、何事も容易く思ふ傾向がある。いはば常に多く光明の點を見て暗黑面を見ない癖がある。己れが斯くある如く人も亦斯くあるべしと思ふ癖がある。所謂此難局を救ふは我を捨てゝそれ誰ぞやといふ決心で自らは如何に社會が己れを待つかといふ事を研究する必要もなく、諸元老の勸むる儘に三度其內閣――不幸なる其內閣を組織するに至つたのであらう。

敵を知り己れを知るは百戰百勝といふ。然るに桂公はよく己れを知つてゐたが敵については大いなる油斷があつた。桂公は正直に西園寺侯を信じ且つ其言を信じたのである。西園寺侯は桂公に向つて二回までも御身でなければ予の後任は六つかしいといひ、又斯く陛下にも申し上げた。さうして如何に元老連の勸說なればとて速かに承知しては宜しからず。最後になつて承知するがいゝとまで桂公に向つて入智惠をした。そこで桂公は西園寺侯は此方より依賴せぬまでも此議會を通過するに於て相當の助力を與ふるに相違ないと思うたのである。一議會過ぎた後のあとはあとの事と彼

は考へたのである。實をいへば彼は一つの大いなる經綸を持つて居つた。若し第二桂内閣を中途に於て辭職せず持續するに於ては彼は之を行はんと欲したのである。それは大袈裟なる財政の整理である。彼は財政に少からざる興味を持つてゐた。其案は已に彼の胸中に熟してゐた。然し之を自ら行ふには内閣の改造を必要としたが爲めに寧ろ之を西園寺侯に讓つたのである。然し其經綸は依然として胸中に蟠つてゐた。それで機會もあらば之を行うて見たいと思うてゐた。彼は何れの財政家に向つても鬼門たる陸軍に向つて大斧を施すべき意見を持つてゐた。而して彼は必ず之を成し遂げ得べしとの自信を持つてゐたのである。彼は權勢には汲々たらぬが仕事には汲々たるものである。彼は少年の場合お扈從役となつてゐても兎角心が外に移つて、其爲めに藩主の諒察する所となり。扈從役を兼ねながら其の勉學を許されたのである。彼は實に忠誠無二の心を以て　新陛下に奉仕したに相違はない。又　新陛下の御信任も君臣魚水以上であつたに相違はない。然れども毎日八時に家を立て宮中の生活をなし四時頃まで宮臣として奉仕するは六十よりも七十に近き彼にとつては多少の苦痛であつたに相違はない。而かも常住慣れに慣れたものならば兎も角も彼か如き者にとつては少からざる壓迫を彼の心身に加へたに相違はない。彼は三年の總理大臣よりも三ヶ月の内大臣にて實は疲せ衰へたのである。されば彼か宮廷より出でたのは彼にとつては渡りに船といふ程ではないが、自分が　陛下に盡す最善の道は寧ろ彼にあらずして此れにありと思うたかも知れぬ。詮じ來れば最初に宮廷に入つたのが間違ひといふべきである。

處が西園寺は彼が思ふが如く彼について思はなかつたのである。第二西園寺内閣成立の當初に於て西園寺は殆んど事實に於て情意投合の斷絶を示して居る。之を幾分なりとも繼續したものと思うたならば之は公が自惚とはいはねばならぬ。若くはお心よしといはねばならぬ。固より政友會側にも公を斯く思はせたものも少くはない。然し西園寺は左様ではなかつたのであ

る。詰り西園寺の眼中には桂は協力者でなくして寧ろ競爭者であると見たのである。而して桂が彼此指圖がましき事をなすのは己れに取つて僭上の沙汰と考へたらう。何れにしても桂に向つては釋然たらなかつたのである。そこで彼が極力桂を内大臣に勸めたのは、世間でいふ如く政敵を封じ込めたのでなしとするも、少なくとも厄介物を取り除けたと思はぬでもなかつたらう。而して苦しき時の神頼みにて二師團問題について彼は桂の居中調停を期待してゐたに相違はない。然るに桂が彼の期待に應じなかつたことは、桂も亦同腹中の陰謀者であると猜定したに相違はない。桂の側よりいへば出來得る丈けは助力もなし、調停も試みたのであるが、原は之に同意しても西園寺が一向に取り合はなかつたといふてこぼして居る。何れにしても、其理由は理由として西園寺は桂を以て、西園寺内閣瓦解の首惡といはざるまでも其張本人の一と認めてゐたに相違はない。然らば彼は何故に桂を後任者に推薦したか。世間では之はお前が遣りたければ遣れといふたといひ若くは英國政黨内閣では、反對黨を推薦するが當り前であるから其通りにしたといふけれども二つながら聞えぬ話である。何故なれば桂以外では助くるに困るといふ事であれば、桂なれば助け易いといふ事になるではないか。遣りたければ勝手に遣れといふのとは譯が違ふ。又英國では如何なる場合にも内閣が更迭する時には下院に多數を有する政黨の首領に組織を命ぜらるゝが憲法上の習慣である。後任者を推すとか推さぬとかいふ必要は決してないのである。推しても推さぬでも多數政黨の首領が總理大臣となる譯である。時としては同一の黨派で首相の更迭する場合があるが、其時には　天皇の諮問に對して答ふる場合もある。然し諮問なければ其儘に過ぎる事もある。例をいへば虞翁も自由黨内閣の首相を罷むる時に、心密かにスペンサー伯を擬し、御諮問あれば伯を以て答ふべき積りであつたが何等の御諮問もなく、ローズベリー卿に大命が降つたといふ事である。そこで英國の例といふのも當て嵌らぬのである。然らば何が故に西園寺は斯く表裏反

援のことをなしたかといへば我等は選擇に苦むのである。彼も一時此も一時といへば之れ迄である。

政友會論

政友會と桂とは永き間の腐れ縁である。第二山縣内閣以來、否隈板内閣以來、未だ政友會なる名の出て來らざる前より桂と緣故があつたものである。敵といふよりも疎遠なる親類といふ位である。中には牛を馬に乘り換へ西園寺を桂に乘り換へんと企てたものも少くはなかつた。而して近き將來に桂公は内閣總理大臣兼政友會總裁となるであらうといふ事を豫期したものも政友會内には皆無ではなかつた。かゝる次第であれば桂公は如何なる事があつても一度内閣に立てば、燒木に火が附くと云ふ事は豫期したに相違はあるまい。然るに火が却て意外の邊に向つて附いたのである。我等は少しく玆に政友會なるものを研究する必要がある。

政友會は下には地方の團體があつて、上に總裁がある。總裁を助くるに原、松田の兩首領があり、中に幹部がある。處が政友會の總裁と黨員とは頗る親密でない。政友會黨員は西園寺總裁を見ることは同盟の人間としてよりも寧ろ一種の神様として居る。これは尊敬するといふ意味よりも敬遠するといふ意味である。西園寺は至て平民的の人のやうであるが、それは彼が自ら好んで附かする場合に於てさうである。彼は何人に向ても對等の交際を許さぬのである。彼が如何なる事を考へて居るか、思うて居るかといふ事は希臘の巫女がアポロの神意を伺ふよりも難くある。肝心の原、松田でさへも御沙汰の降るまでは何とも神慮を計り知ることが出來ぬのである。此神秘的行經が少からざる勢力を總裁としての彼の身に持つて居る。人を率ゆるの道は、率ゆるものと全く混和するか、否らざれば斯くの如く隔絶するかの二つである。西園寺は確かに隔絶に於て成功して居るのである。例せばパーネルの如きも亦其一人であつたらう。斯る神秘の意見を受けて、其當面の執權者たるものはいふまでもなく原である。原は元來役人出身で、いはゞ官僚系の氣習を備へて居る骨頂である。そこで從來妥協の徑路は西園寺、原及

び野田卯太郎といふ事になつて居る。其他のものは傍系である。自ら策士を以て任じて居る岡崎邦輔の如きも政友會の高等政治に於ては殆んど門外漢となつて了つたのである。若し妥協の本家本元といはゞ岡崎の如きも其一であらう。彼は實に妥協屋の老舗である。山縣内閣の時に於て最も妥協に勗めたのは、政府側では桂であり、黨派側では彼であつた。彼は一方に星を握り、一方に己代治を握り大いに其手腕を揮うたのである。然るに物換り星移り、星は逝き、己代治は隱れ、原敬の時代となつた。原は陸奥門下の一人で岡崎とは同門である。彼等は爾汝の關係である。處が何故か原敬は岡崎を用ひぬのである。之は用ふるに足らぬからであるか、抑々力餘るのであるか、將た別により適當なる人あるが爲めであるかは知る所の限りでないが、つまり用ひぬのである。そこで岡崎は原に對して不平といふべきか、若くは高等幹部に對して不平といふべきか、兎に角政友會の正流派には頗る快然たらぬのであつた。彼は常に言うた。妥協が何の利益がある？只政府の爲めに御用を勤むるのではないか。幸ひ内閣を取つたとて其内閣で何等政黨の政策を行ふことも出來ず、詮じ來れば老ぼれの獵官者兩三名を馬車に乘するまでの事である。かゝる詰らなき事をせんよりも寧ろ民黨聯合をして官僚派を根帶より覆すに若くはないと。當年の妥協屋は斯くの如くして民黨の急先鋒となつて居たのである。さればアンチ桂の空氣は充滿し、天下の長閥に對する憎惡心は殆んど其極點に達し、自から智勇辯力ありと信ずる者轗軻不遇の者野望ある者若しくは理想的夢幻者空中樓閣者陰謀者好亂者其他あらゆる各種の勢力相抱合するに際し、之に向て恰個の題目を與へんか、天下風靡すべきである。席捲すべきである。斯くの如くにして憲政擁護の火は燃え出したのである。

予は誰が放火者であるといはぬ。然しながら政友會にして動かざる限りは斯くの如き事に立ち至る筈はない。國民黨の如き――少くとも其一部の如きは、常に之を口にしてゐたのであつて、もう何人も飽き果てゝ

ゐた。然し平常藩閥の擁護者であり、自ら穩健秩序的の政黨を以て任じたる政友會の中心より此運動が出て來るに於ては、謹厚なるもの亦斯くの如きかて、天下を聳動したのも強ち不思議てはあるまい。而して之が何人の劃策に出てたかは明言する事は出來ぬが、岡崎唱へて尾崎和した位の事は間違はあるまい。

我等の聞く所によれば尾崎行雄氏の如きは此運動の當初に於ては頗る躊躇した。それは彼は何時でも運動の先驅となつて、イザといへば獨り先方に取殘され、獨り轉びをせねばならぬ窮境に立ち至つた事が一再ならぬからである。爰に懲りて膾を吹く。彼が憲政擁護運動にウカと乘らざりしも又理りありてあらう。彼は言うた。運動は結構だが黨の幹部が之を承認せん場合に於ては再び幹部と衝突せねばならず、予も成るべく黨と行動を共にしたいものであるから其邊の事を篤と確めて置きたいものであると。然し岡崎はかゝる懸念を無用とし、盛んに煽つたのである。彼は如何に黨の幹部なればとて此際默々たるべき筈はない。如何に西園寺侯が桂公と行掛りあればとて其胸中を察すれば、まさか此際眞面目に桂内閣の御用を勤むる計りが本意でもあるまい。講和談判の最中に大阪城の天主目掛けて井伊本多が大砲を打ち込んだのは、表面こそ家康の命令には背きたれ、家康の腹の底に立つて見れば、是ある哉〳〵と首肯いたてあらう。憲政擁護も其通りである。イザ打ち立てよと彼等は犬養と通謀し、何事にも不平である新聞記者を語らひ、事あれかしと待ち構へて居る浮浪輩を役し、いよ〳〵運動を起したのである。

政友會の各團體は幹部の意志を計り兼ね斯くては所謂彼等が從來取り來りたる穩健の行動に反する。さりとて幹部が高手的に壓し附くる時は黨の平和を害する虞があるからして先づ、幹部の意志を確め場合によりては双方の調停をなさんものと各團體の有志それ〳〵評議をして松田、原に向て此際幹部の腹のある所を打明けて貰ひたし、左なくば銘々勝手の行動をなし、黨の政策の上にも由々しき變調を來すべしと警告したる

に二人の首領は、さればなり。暫らく俟たれよ、正直にいへば我等とても總裁の趣意か分り兼ぬるなり。最早總裁の沼津よりの歸京も目前にあれば其上にて兎角の返答はなすべしとて其事は其儘になつたといふ。之は定めて眞相であらう。當時の狀勢からいへば政友會ば何れの方角にでも引張つて行くことが出來たのである。多少の異論は何れにしても起るべき筈であるが、總裁の意志次第では穩健にすることも出來、過激にすることも出來たのである。處が總裁と原、松田との協議は成立つた。而して其旨は傳へられた。其傳へられた所によれば、今度は總裁は非常なる硬派であつて、何等掛念はない、擁護運動差支へなしといふ事であつた。各團體の總代者の憂慮したのは、寧ろ一方には岡崎、尾崎派の過激運動ある時に於て總裁が例の調子で穩健一點張りて、只高壓的に押しつける時には如何なる波瀾を生ずるも知れず、そこで同じ押しつくるにも多少の斟酌を加へ、双方の意志を疏通するの必要がありと認めて、幹部に打合せたのであつたのに、其返答は意外にも尾崎、岡崎の運動を公認し之を助成する傾きになりたれば、今は彼等も天下晴れての御免の運動で、遂に憲政擁護會に謹厚の長者たる松田も出て來、岡崎に代つて妥協屋の金看板を掲げた野田卯太郎までも出て來ることになつたのである。此際最も意外に感じ、且つ最も當惑したものは恐らく原敬であらう。或は曰く、尾崎の運動は直接に西園寺より依賴せられたものなりと。之は眞僞の程は保證の限りでないが、何れにしても憲政擁護の發起者は西園寺でなくとも、之を煽り立て、政治的一大火事たらしめたるものは西園寺である。春秋の筆法を以ていはゞ桂を首相に推したのも西園寺であつて、桂に不信任案を投じたものも西園寺である。桂内閣を破壞したのも西園寺である。之については何如に巧妙なる詭辯家も恐らくは辯解の言葉はあるまい。只何處までもお目出度いのは桂である。桂は從來の成行に考へ、西園寺の言葉を信じ、如何に憲政擁護の運動などゝいうても、高の知れた浮浪人の仕事であつて、政友會の幹部は何處までも所謂穩

健なる擧動をなすてあらう、且つ豫算に於ても此際西園寺内閣の豫算其の儘踏襲する時に於ては、彼等は義理にも之に反對する譯には參らざるべし。さすれば當面の議會は兎にも角にも通過すること容易ならんと思ひ込んだるこそ一生の不覺なれ。

第三桂内閣の困惑

扨桂はいよ〳〵十二月二十一日に内閣を組織した。其時には已に政友會の意氣は不信任案まで進んで來たといふ事は分明てあつた。西園寺は何處までもずるく構へ、知つて知らぬ振り。見て見ぬ振りして、黨員の爲すに放任するといふ事も略ぼ見當がついてゐた。然るに桂内閣は果してそれだけの敵を計る見識があつたや否や。我等の遺憾と思ふは、第一、桂内閣の人選であつた。今更ら彼此いふのではないが、此人選は單に反對黨のみならず、公平なる第三者をして多くの滿足を與へなかつたのてある。今更ら言うて返らぬ事てあるが、貴族院にも頓着なく、衆議院にも頓着なく、只餘りに自己の家の子郎黨のみを以て組織したのてあつて、いはゞ桂一人が大臣の格てあつて、爾餘の大臣は——大浦、後藤、加藤等は別として——概ね其書記官若くは秘書官位の相場てあつた。内閣統一の上からいへば之も至極結構てあるが、眼前に大敵を控へて奮戰決鬪すべき内閣としては些か物足らぬ感じがあつた。固より其の實力實材に於ては、其中には手腕家も有たらう、併し世間の豫望には何となく慊らぬ感じがあつた。而して殊に遺憾てあつたのは海軍問題てある。此問題は桂公に於ても多少慮つてゐたに相違はないが、彼ほどに海軍の反抗を招かうとは思はなかつたのてある。齋藤海相が留任を好まなかつたのも餘儀ない事てある。最早海軍の擴張は豫定の事實として已に注文も發し已に事業に着手して居る際に於て陸軍のお相伴として延期せられて溜るものてない。固より憲法論などを持出して違憲などゝいふ論もあるが、かゝる議論は急の場には役に立たぬ。然し桂の調和的力量を有する手を換へ品を換へて、九百萬圓支出すべきものを六百萬圓となし、一應之て齋藤の面目も立ち内閣の財政計

書も差支ないといふ事になつた時に、豈圖らんや、海軍のストライキは公然出で來つたのである。而かも其ストライキが眇然たる將校でなくして、伊東井上の元帥連から東郷、山本、上村等の大將連に至るまでといふ事に至つては、桂內閣の爲めに惜むよりも寧ろ海軍の爲めに惜むべきであらう。此上は桂も內閣組織を抛つより外はないのであるが、遂に齋藤留任の勅語によつて其局を結んだのである。

陸海軍大臣留任の勅語は今に初つたのではない。桂も此勅語を頂戴し、西郷も頂戴し、寺內も頂戴して居る。のみならず西園寺の如きも首相として亦頂戴して居る一人である。然しながら時が時、場合が場合であるが爲めに、此勅語は天下の人心に甚深なる印象を與へ、憲政擁護の運動に油を注いで來た。

話元に戻るが、桂公の內大臣を罷めて內閣組織の大命を拜した時の勅語も亦同樣である。若し最も詔勅若くは勅語の降下を奏請した政治家があればそは伊藤公である。當時伊藤公が屢々袞龍の御袖に隱れたといふ非難があつたが、伊藤公の政治歷史には詔勅及び勅語が經緯して居る。之に比すれば桂公の如きは數ふるに足らぬのである。然しながら桂公は伊藤公でない。大正元年は明治二十年代若くは三十年代でない。其變遷を察する時には政治家たるものは徒らに先例を追ふを以て滿足すべきではなからう。只事實をいへば二個の勅語共桂公が奏請したのでない丈けは明白である。常識を以て考へて見ても自らを推薦した勅語を自ら奏請すべきものでない。事實をいへば第一の勅語は元老——山縣公——が奏請した結果とより外思はれない。公は時局を委詳に奏上し、此上は臣か桂かをして其局に當らしめ賜ふより外なかるべし。臣は決して難きを避くにあらざるも、世間よりは老朽と認められ、頑迷と排せられ又陸軍問題に關係ある者と猜せられ、加ふるに老齡病羸任に堪へず、仰ぎ願くは　陛下の內廷の臣たる桂をして時局收拾の任に膺らせ玉へと奏上したであらうとより外は推定せられぬのである。第二の勅語は已に一應は齋藤海相も留任することになり、內閣の組

緒已に成りたる後に於て端なく此ストライキ起り、爲めに齋藤海相も留任の意志を飜すに至つた以上は、桂公も最早や大命を奉還するの外なきを以て彼は又此事情を具して推薦したる諸元老に語り、諸元老は此上は聖斷を仰ぐ外なしとて遂に右の奏請に及んだのであらうと思はれる。固より之が爲めに桂公が何等責任を言ひ逃るゝの必要はないが、事情は恐らく右の通りであつたらうと思はれる。何れにしても出來ない前から斯く不幸であつた所の新内閣は、出來てから不運に陷つたのも止むを得ぬ事であらう。

我等は今茲に桂内閣の沒落史を委しく語る必要はない。然しながら兎も角も其梗概丈けを述べて置かう。

新年の議會は一月二十一日に集つた。而して二月五日まで停會せられた。之は豫算案が出揃はざりし爲めといふ事であつたが、實は已に其場に不信任案でも飛び出さんとする形勢であつたから、多少人心を緩和する目的もあつたであらう。然るに二月五日の議會に於てはいよ／＼不信任案は出て來たのである。此上は解散の外致方はないのである。いはゞ議會召集前より議員は解散を賭して來たのである。又解散を賭すべしと公言して居たのである。いはゞ解散は彼等の要求であつた。從來解散といふ事は政府が議會を嚇す言葉であつて、議會が政府を嚇す言葉ではなかつた。然るに今回は逆になつた。此場合は政府たるもの只其形勢を甘受して之に順應するの外はないのである。然るに再び停會の命は下つた。吾人は茲に至て桂公が如何なる場合と雖も甚しき事をなすことを好まぬ人であるといふ事を證明する事が出來る。彼は平和の手段を行はるまでは成るべく其手段を採るのである。百計盡きても尚殘りの一計はなきかと之を吟味する人である。再度の停會中に於て彼は如何にもして時局を平和に解決せんと考へたのである。固より彼は止むを得ざれば解散と決心し、解散の理由書の如きは已に彼の衣兜の中に收つて居つたのである。之は彼自身の考へであつたか若くは他の進言者があつたか。世間では新歸朝者たる加藤高明男が英國に於て先帝崩御の際は特に新帝の勅諚

によつて兩黨間に暫定平和が協定せられ、兩黨間に蟠る大問題について圓卓會議の開かれた例もあれば諒闇中ではあり大正維新の今日に於て解散などを見るは不祥である。寧ろかゝる方便もがなといふ事を注意したといふ說もある。或は曰く此間政友會最高幹部の密使と稱する者桂公に抵り哀願的に何とか穩便の手段はなきやと云ひ、既に提出したる不信任案は今更ら引き込む譯にも參らず何とか天皇陛下の事でも願はれ間敷やと云ひ。又た加藤男にも同樣の相談を持ち掛け遂に此が動議となつて此の一齣の喜悲劇は出來たと云ふ說もある。何れにしても桂公は自ら西園寺侯と會見して、問題を決着すべく加藤男を使として申し向けたのである。處が西園寺侯は寧ろ之を希望せなかつたらしい。而して出來得べくんば原松田と共に面會せんことを答へたらしい。而して桂公よりは此會は國家の要務に關することであるから私邸に於てせず首相官邸か若くは貴族院内の大臣室に於て公然面會すべし。又た友誼的の會見であるから他人を雜へず兩人差向といふ事であつた。之が二月八日の午前である。然るに西園寺侯は約束をなしつゝ、更に改めて本日は政友會に出席する用もあれば到底面會の時間なし。明日なれば何時にても差支なしと重ねて通告した。然るに桂公は時局一刻も猶豫すべきにあらざるを以て是非本日中に前約の如く面會したしとの事で、遂に同日四時首相官邸に會見することゝなつた。我等が聞く所によれば西園寺が應接間の扉を開いて桂の顏を見るや否や誠に相濟まぬといふ事を繰り返したといふ事である。それは何れにしても桂は西園寺に向つて、昨年拙者が大命を拜受したるは閣下も贊襄の意を表せられたる次第である。然るに拙者の内閣組織が非立憲の行爲であるといふ理由を以て閣下の率ゐらるゝ政友會が國民黨と聯合して不信任案を提出するに至つたのは如何にも意外千萬である。元來今日は諒闇中でもあり。此際に議會を解散するが如きは最も避くべき事であると思ふ。且つ決議案の如きは何等現內閣の政策に基かずして只感情の末に奔つたばかりのものであるに、之が爲めに昨年總選擧をした

國民に向つて再び總選擧を以て煩さんとするは如何にも忍びざる所である。そこで若し閣下に於て昨年末の退閣を遺憾とし更に自ら其衝に當らんとする御希望あらば、事固より大權に屬するも献替の責任を有する予の範圍に於て閣下の爲めに其道を取るは、予が決して吝かなる所にあらず、且つ陸軍問題の如きは現時と昨年とは事情を異にし居るが爲めに後繼内閣の累とならず、又自分に於ても微力を以て其便宜を計るべしといへしに、西園寺侯は毛頭未練なし、今日に於て後繼内閣引受の準備もなければ又其意志もなし。然しながら不信任案提出は適當の理由あるにあらざるも、騎虎の勢最早や奈何ともし難しとて頗る心配の樣子であつた此際に加藤の所謂英國の例などの話も双方の間にあつたといふ事である。然るに翌九日西園寺侯は加藤男に向つて、いろ〳〵と盡力をしたが此際不信任案撤回の如きは力及ばずといふ旨を答へた。而して其外に如何なる話があつたかは予の與り知る所ではない。但だ桂公は參内して目下の政況を奏聞し、西園寺侯も同日午後參内を命ぜられ、時局收拾の勅諚を賜つて退出したのである。其夜駿河臺の西園寺邸に於ては大評定があつた。國民黨の犬養までも召喚せられ。勅諚を奉ずべきや否や。所謂恭順派と非恭順派の間に隨分議論があつた。尾崎、岡崎、犬養等の意見が何の邊にあるかは問ふ丈けが野暮である。且つ西園寺侯が如何なる程度まで盡力したかはそれ又我等の知る所でない。只西園寺侯は同日の午後勅語を拜受して歸る場合に綸言汗の如し豈之を奉ぜざらんといふて歸つたといふ事であるが、如何なる程度まで之を奉じたのであるかは予の知る所ではない。

山本伯政界に出現す

扨いよ〳〵二月十日となつた。其朝西園寺侯より加藤男に報じていふには、勅諚の一件に就ては、昨夜以來盡力中である。本日午前十時代議士會が開かるゝについては自分も之に臨み、力を盡して御沙汰に答ひ奉る筈である。本日の衆議院は休會となるてあらうと。休會とは議會自ら休むなり。即ち絕對的過半數を有す

る政友會が其代議士會に於て衆議院の開議時刻まで不信任案撤回の議を決し能はざるべきを以て熟考の時間を與ふる爲めの休會の意味であるべく解釋せられたのである。併し事實は全く之と齟齬したることは後の話で分明である。

話代つて當日の午前八時半頃意外の珍客は三田の桂邸に舞ひ込んだのである。それは何人であるか。山本伯權兵衞其人である。彼は第一桂內閣總辭職――明治三十八年末――以來全く政界とは緣を絕つてゐたのである。昨年の冬內閣持廻りの際、彼に持ち來りたるに彼は怫然色を作して曰く、時局を毀したのは元老である。毀したものが收むるが當り前である。然るに緣も因りもなき予に向つて此責任を持ち掛くるとは何事ぞとけんもほろゝに之を拒絕したのである。然るに思ひきや、此日彼は前約もなく突如として茲に來り現はれんとは。彼は行なり桂公に向つて、昨年以來　新帝を擁して威福を恣まゝにし、甚だ以て怪しからぬ次第であるといひ、最早や此際政權に戀々たるべき時にあらず、須らく現位置を西園寺侯に讓り、平和に時局を解決せよと忠告したのである。桂公は　新帝を擁し威福を恣まゝにするなどゝは閣下の口より出すべき事にあらず、昨年以來如何に我等が孤忠を抽んでたるかは閣下も宜しく諒とせらるゝ所であらう。然しながら予は他の推薦より大命を畏み、止むを得ず此位置に就きしものであるから決して權勢に戀々たるものでない。現に西園寺侯に向つてもかく〳〵の話もしたのである、然るに西園寺侯自ら其の意志もなく準備もなしと答へられ、目下時局收拾に盡力中であるといふたのである。そこで山本伯は然らば自ら西園寺侯と會見して斡旋すべしとて近傍なる松方侯邸より自働車を借り受け、之に乘じて飄然として政友會本部に赴き、侯と會談して再び首相官邸に桂首相を訪うたのは午前十時頃でもあつたらう。

扨山本伯は西園寺侯と如何なる談判をなしたか。彼は遂ひに西園寺侯を說き勸めて後繼內閣を組織すべき確答を齎らして來得なかつたのである。詰り此點に於

ては要領を得なかつたのである。只彼は桂公に向つて唐突に自分は西園寺侯を助けて見やうといふのみである。助くるとは如何なる意味であるか、桂公も玆に至つて其意を計り兼ね。目下西園寺侯は御沙汰を奉じて盡力中であれば閣下が助けやうといつても此事の成行中には手を附くべき機會がなからうといふた。そこで山本伯はそれでは先刻西園寺侯にいうた言を取消すべき事があるから勝手ながら使者を借用したしといふたそこで伊藤文吉男を政友會本部に遣して其意をいはしめたに、侯は伯の取消しは一部か全部かと反問した。然し伊藤男は其內容を知らねば固より答ふる所がなかつた。此往復の際に政友會は早くも滿場一致前議固執議會に突貫するに一決した。此に至りて西園寺侯の本日休會の豫告も全く水泡に歸したのである。諺に佛頼んで地獄に入るとは、此事であらう。政友會は山本伯の本部に西園寺侯總裁を訪問したるに氣勢を得最早解散はなきものと斷定し、卒然として此に至つたのである。そこで桂首相は此上は西園侯に賜りたる勅諚奏請に對し其責を引き、辭職の決心を告げたのは多分十二時四十分頃であつた。之が即ち第三桂內閣の辭職の顚末である。

桂內閣の瓦解を評す

之より少しく講評に取り掛らう。公平に論ずれば今回の桂內閣の總辭職は物になつて居らぬ。遡つていへば桂內閣なるものが本來物になつて居らなかつたのである。英語に might have been といふ言葉がある。それは若し斯くもあつたならばどうであつたらうか。斯くしたならば斯くあつたかも知れぬと、所謂取り逃した魚の太さを計り、死んだ兒の年を數へ、破約した女房との情交を考ふるなどゝいふ未練がましきものゝなす事であるが、我等も其顰に倣ひ、少しく考へて見るであらう。

桂公は已に政黨主義で立つと明言したのである。政黨主義であれば不信任案提出の場合には總辭職をするか、解散して輿論に訴すより外の策はない。若し停會して反省を促すといへば一度で澤山である。二度もす

る必要はないのである。總選擧を以て國民を累はすは忍びざる所であるといふけれども國家は一人の國家でない以上は國家的必要に際しては、國民を擧げて其事に任ずるは止むを得んのである。國家の爲めには戰爭さへもするではないか。憲法上解散が止むを得ずとあれば解散も亦致方ないのであつた。然るに今回の不信任案なるものは桂公も明言した通り未だ何等の政策を行ふに遑あらず、內閣が出來るや否やの不信任案である。かゝる案に對して總辭職をするなどゝいふは政治家としても如何にも自信力の少い事である。斯くの如き感情的の案であれば反省を促すもよいが、促しても聞かなければ解散をして國論に訴ふるの外はない。而して其の結果若し內閣に不利ならば其時に辭職するも遲からぬのである。それは國民の不信用の爲めに辭職するのではないか、かく不信用を受けつゝ內閣に立つは輔弼の責を盡すに於て缺くる所あるからである。然るに事茲に及ばず停會に次ぐに停會を以てしたのは却つて反對の氣焔を挑發したのではなかつたらうか。且つ西園寺侯との會見も桂公の側よりいへば駄目を推す手段であつたかも知れんが、西園寺侯が桂內閣に對して好意を有せざる事は最早明白である。此上は議場に於て相見ゆるの外に其道はないのである。然るに何處までも從來の行掛りに執着し、會見を申込んだのは思慮周密といへば周密であるが、過ぎたるは尙及ばざるが如しではなかつたらうか。殊に勅諚の問題である。之は西園寺侯から持込んで來たのであらうか若くは他の方面から持込んで來たのであらうか其奏請の責任者は桂公である。然るに公は何が故に斯の如き責任を取らねばならぬ必要を感じたのであるか。豫て常識に富む桂公としては、餘りに非常識ではなかつたらうか。何故なれば元來不信任案の根本主義が桂公が詔勅を濫用したといふ事である。然るに其不信任案を撤回すべく勅諚の下降を奏請したのは之れ醉客に向つて酒を强ゆるも同樣ではないか。詔勅、勅諚の區別は勿論ではあるが何れにしても其時の首相が其責を負ふべきである。然るに葛藤の最中目前に其實物敎育を示すに至つ

たのは如何に伊藤公の先例があつたとはいひ、斯くの如き先例をかゝる場合に用ふるは決して智者のなすべき事てはなからう。且つ山本伯の來襲について準備なかりしは致方ない事てはあるが、然しながら其時に向つて何故に目下西園寺との關係は斯く〳〵の行掛りあり、折角の御好意てあるが、此行掛りの濟むまてはお控へを願ふ、尙一段落を告げたる後には充分御身の忠告も承り又拙者の意見も開陳するてあらうと、一先づ此御面攻擊を刎附けなかつたか。勅諚を奏請して而かも山本伯をして容喙せしめた結果は、政友會に時ならぬ百萬の援軍を與へ、勅諚不恭順派をして勝利を得しむる一の動機となつたのではなからうか。人は惡口して桂內閣は雪隱の中で首を縊つたといふて居る。然し彼の場合には、總辭職の外はなかつたかも知れぬ。けれども立憲的運動として最も立派にいへば、何故に二月五日に解散を奏請せざりしか。若し否らされば、五日十日の間に於てせざりしか、十日に於ては辭職するも遲し、解散するも遲し、何れにしても遲いのてあるが、寧ろ其場合に於ては總辭職の方が政策の宜しきを得たてあらうと思ふ。何となれば此が爲めに攻守其勢を變し、新局を開展したからてある。蓋し第三桂內閣總辭職が恰かも明治三十一年に於ける第三伊藤內閣の總辭職と同樣の結果を來たし、其準備も用意も充分整はなかつた山本伯をその局面に立たしめ、瞬く間に原彼兩告其地を代ふるに至つたのは、思ひ設けぬ總辭職の副產物てあつたかも知れぬ。

桂公の政黨發起

桂公が政黨の首領となつたのは決して禪宗坊主が魚屋の亭主に早變りしたものではない。元來桂公は其出身以來政黨趣味の最も豐富なる人てある。第二山縣內閣に於ても、彼の政黨趣味は軍服ては包み切れぬ程てあつた。現に當時に於ては彼は外を武官にして內を自由黨にして居るものてあると猜したものもあつた。彼は黨派の驅引や又黨派其物についても先天的趣味を有してゐたのてある。彼が手を政黨に染めなかつたのは欲せざるてはなく能はざるからてあつた。能はずとい

ふは彼は陸軍の現役武官であつたからである。彼は藩閥の長く保つべからざることも百も承知してゐた。藩閥趣味は彼に於ては最も冷淡である。川上操六が薩摩人でありながら同縣人の或者に容れられなかつた如く彼も長州人でありながら長州藩閥の或者からは餘り信用されなかつた。それは彼等が仕事と人才とに急にして、藩閥擁護に不熱心だからであらう。彼は又其生涯の四分の三を官界に送りたれども、寧ろ吏臭に遠ざかつて居た。彼は貴族院に會とか倶樂部とかいふ名稱であるが之も亦視察の如何によつて一種の政黨と選ぶ所はないと思うてゐたかも知れぬ。何れにしても政黨の憲政に於て止むべからざる丈けは百も承知してゐたのである。但問題は借馬的に必要の當座賃錢を拂うて之に乘るか、將た之を我馬として乘るかの如何について考慮を費やしたのである。彼が最後の決心をなすべき時機は武人を以て晩節を全うするか。將た政治家として全うするかの一てある。若し前者ならば彼は已に現役の大將てあつたから或機會に於ては參謀總長となることも出來たらう。又元帥となることも固々期し難き事では無かつたらう。否、明治三十三年彼は病の爲めに陸軍大臣を罷むる頃には當時の參謀總長大山公は苟くも桂が望むならば何時でも位置を讓るといふ事を明言した程である。然し彼は參謀總長も望まなかつたし又强ひて元帥となる事も希はなかつた、彼は第二桂内閣總辭職の際に其軍職は待命となり、昨年十一月廿八日を以ていよ／＼後備役に編入せられた。そこで彼は最早何等の障礙もなくなつた。十字街頭に於ける彼の針路は已に決定せられたのである。彼は武官として晩節を全うするよりも、寧ろ政治家として全うすべく決心したのである。而して已に政治家として立たんとすれば藩閥内閣の最後の政治家としてよりも立憲的大政治家として掉尾の活動をなすべく考へたに相違はない彼は武人としても、政治家としても、財政外交各方面に皆相當の効果を發した。只彼の歴史を飾るべき一つの缺乏は憲政に對する彼の貢獻である。彼れは是に於て自ら政黨を組織し、立憲政治家の晩節を飾るべく最

彼の決心をなしたのではあるまいか。

　彼が政黨に對する考へは一朝一夕に初つたのではない。彼に親しきものは十數年間晝となく夜となく此問題は常に彼の腦中を往來したるを知つて居つた。只問題は彼が何時之を決心するか、何時之を發表すかといふ事であつた。彼が政黨の首領となるに最も自然的途行は政友會の總裁となる事であつた。事實をいへば政友會は西園寺に厭いて來たのである。原の如きも西園寺が餘りに我儘に、餘りに獨裁的に且つ餘りに不勉强なるに閉口してゐたのである。獨り桂に走ることは好まぬとも黨と共に奔ることとなら、之を好むものは原のみてはなかつた。それて若し機が熟すれば、桂が好むにせよ好まぬにせよ、政友會の連中は總裁の黃袍を以て彼の身に加ふることは、必然とはいへないが略ぼ其れに近かつた。彼もそれを知らぬではなかつたが、只漫然と政友會の婿養子になるには彼は餘りに自負心が強かつた。單に自負心のみならず、かくする時には、小糠三合の譬に洩れず率ゆべき彼が事々物々率ゐらるゝ事にはならぬかと懸念して、如何に容易な事が彼の好む所なればとて、ウカウカと其話には乘るべくもなかつた。然し方法は二つてある。政友會に婿入しなければ自ら政黨を發起することてある。自ら政黨を發起することは一通りや二通りの骨折てないといふ事を彼は知つて居る。伊藤の經驗に徵して知つて居る。されば彼も之を決心するにはなか〳〵億劫てあつた。然し世間では彼が洋行から歸れば必らずそれに出るてあらうと推察し、洋行せぬ前から其土産の品定めに心を焦したのも少くなかつた。然るに洋行は　先帝の崩御と共に中絕せられ、彼は宮廷に入り總ての事は殆んど畫餅に歸したのである。然るに政局の急轉は三度彼を首相の位置に置いたのである。之れ恰かも彼にとつては多年企てたる所の志をなすの時てはなかつたらうか。後備役となれば軍人が政治に携ふべからずといふ懸念はない。天下皆公議輿論を以て來り迫るに我獨り藩閥とか官僚とかいふ狹き範圍に於て防禦するといふことは時代遲れてはないか。彼が豫て覺悟したる立憲政治家の晚節

を全うするは此一時ではないか。彼を思ひ此を思へば彼は此際新政黨を發起したといふ事は不思議でもなく不自然でもなく、當り前の事である。只從來砂の中を潜つて來た水が偶然に表面にあらはれ出たから世人は當座の面倒免れに桂が一夜作りの甘酒同樣の政黨を作るであらうと思ふのは餘りに彼を見縊つた話ではあるまいか。彼が之を畢生の事業とすべしといふ事は形容でもなく懸値でもなく、實に正直正銘の事であらうと思ふ。

彼は第一内閣に於ては兎も角も腕試しにやつて見たのである。第二内閣に於ては豫め超然主義を以て其抱負を行はんとしたのである。第三内閣に於ては蓋し政黨主義によつて最も鞏固永久なる内閣を作り、其經綸を行はんとしたるに外ならない。政黨は恐らく單に經綸を行ふ機關のみならず經綸其物の一部であつたと思はる丶。只事意の如くならずして、嘗て先例なき短命の内閣なりしが爲めに其目的は遂せざりしも政黨其物の立場より考ふれば總辭職は彼れにとつては却つて仕合であつたかも知れぬ。何となれば彼が在職中に於ては政黨は客であり、國務は主である。而かも一旦職を離るれば全心全力を政黨の爲めに抛つからである。彼は大いなる妥協家であり、久しき妥協家であるが爲めに、最もよく妥協の苦き經驗を嘗めたのである。抱負もなく、經綸もなく、只一時の苟安を偸取する丈けならば妥協も苦しくはないが苟くも抱負あり經綸ある政治家にとつては妥協程苦痛な事はない。何故なれば、我思ふ事の全部は愚か、半分も行ひ得ぬからである。如何なる彫刻師も片手のみで作つて片手を切り落して置くといふ事では其藝術的良心を滿足せしむることは出來まい、政治家も同樣である。彼も屢々此苦痛に遭遇したのである。そこで政黨を作る事も固より苦痛であるが、妥協の苦痛に比ぶれば愉快なる苦痛として彼は之を採つたのであらう。彼は薩長藩閥が已に末期であるといふ事を知つて居る。官僚などいふものも大きい顔をして居るけれども其實は溫室の中で育つたものでいはゞ獨活の大木であつて、活戰場の激鬪には役に立

たぬ事を知つて居る。又尊王愛國の思想は上より下に及ぼすべきものでなくして、下より勃興すべきものであることも知つて居る。詰り今後の政治上の活力元氣は之を少數の階級に求めずして國民の中に求むべき事も知つて居る。彼は如何なる場合でも學ぶ事を忘れては居らぬ。そこで彼は六十七歳の今日に於て新政黨の組織を思ひ立つたのは彼に於ては相當であらう。虞翁の如きは七十七歳(數へ年の七十八歳)にして初め愛蘭自治案の運動を開始したのである。彼が政黨發起に比して年齢よりすれば十一歳後である。今日に於て彼が此決心を發表したのは未だ必ずしも遲れたりといふべきではなからう。

政黨首領としての桂公――結論

我等は長き旅程を辿つて辛やく本題に到着した。けれども到着して見れば最早や多く言ふべき事がないのみならず、又其必要もないと思ふ。何となれば一切の問題は巳に如上の記事によつて明白であるからである然しながら結論として更に一言を費やすてあらう。

桂公は政黨の首領として成功すべきや否や、それは時の運である。何人も之を請合ふ事は出來ぬ。然し政黨の首領として資格を有するや否やといへば殆んど理想的に近しといつても過當であるまい。桂公を敵視して居る政友會の或者てさへも首領としては實に惜しき人であると恰かも我物を人に奪はれたるが如く今尚未練を殘して居る。又國民黨を脱け出して來た連中も實に思ひしに優る好首領であるといつて居る。敵も味方も殆んど此點について異論はない。其のない理由については尚少く開陳して見たいものと思ふ。

政黨の首領も政黨其物の性質によつて大いに相違がある。自由黨の初期の如き疎枝大葉、只自由の開拓を以て任ずる場合では或は坂垣伯の如きも適當であらう。又政治思想普及せざる時代に於て放言高論一世の智勇を推倒するが如き場合に於ては大隈伯の如きも適任かも知れぬ。又法を定め章を作り、憲法とか法律といふ問題が眼前に蟠つて居る場合に於ては伊藤公の如きは固より其人であらう。然しながら政黨其物が實際的と

なり、今日でも明日でも、苟も其の機會さへあれば廟堂の上に立つて其經綸を施し、一切の行政機關をして其宜しきを得しむるをいふ、所謂外交財政其他一般行政に對する手腕技倆を必要とする今日に於ては誰か今日の老政治家中桂公の右に出づるものがあらう。單に政黨とのみいへば漠然てあるが今日の政黨即ち大正二年度の政黨としては桂公の如きは恰かも待構へたる首領といふべきてあらう。此點から考へて見れば、桂公の政黨發起は早からず遲からず恰かも其時を得たというてもよからう。

のみならず、政黨の首領として且つ一般政治家として桂公の特色を語れば長所もなり、短所もある。然し乘除して見れば如何に桂公を好まぬ人でも之を八十點以下に落するとは出來ぬ。好む者からいへば滿點に近いといひ得るてあらう。桂公の特色は平凡なるにあり何處までも平凡なるにありだ。其容貌風采言語擧動、如何なる點から見ても、當人自らも豪傑と思うて居らず又人にも豪傑と思はせない。何處までも平凡なる一市民である。彼の容貌はポンチ家の好材料であつて如何に描き畫工も彼のポンチを描いて失敗するものはない。彼に懇意なるものは桂公といはずして多くは大黑といつて居る。大黑とは其顏が何處となく大黑樣らしく福々しく見ゆるからてある。大山公は嘗ていふた事がある。桂は馬に乘れば立派な男だが歩行すれば如何にも小さく見ゆると。公は胴以上は充分に發達して居るが、足は寧ろ胴に比して短いやうに思はれるのである。其の體格の如きも軍人らしき何等堂々たる所がない。而して別に邊幅を飾るでもなく又飾らぬでもなく殆んど容貌風采の如きは無頓着の極てあるが爲めに何等人をして異常の感を起さしむるものはない。世には無頓着を以て大いに頓着して居るものもあるが、公は飾るとも勉めず又飾らざるを以て飾ることも勉めず、殆んと自然に放任して居る。其の邸宅に於て人を引見し、諄々として語る所を見れば之れが天下の大局に立ち、天下の大任に當り、天下の大事を決し、天下の大功を立てたる大政治家とは、如何に贔屓目に見ても見

ぬのである。而して此平凡が一切の桂公を貫く特色であつて、此特色が公を社會に繋ぎ、黨與に繋ぐ所以であつて、公が立憲的政治家たり、又黨派の首領たるに適する、職として之に因ると思ふ。

立憲政治家とは改めて講釋するまでもなく、社會より無暗に進みもせず、又餘りに遲れもせず、社會に於ける一般思潮の潮先きに乘じて巧みに之を誘導するものである。そこて餘りに理想家、餘りに先見家、大見識家は立憲政治家としては適當てない。彼等は強いて社會を自己の處へ惹き附けんが爲めに無理をする。無理をするは立憲政治家てはない。又頑迷者流も反對の意味に於て同樣てある。桂公の如きは社會を是非共我理想まで引張つて行かねばならぬといふ必要も感ぜず、又社會を何處までも我が落附きたる所に引止めて置かねばならぬてもなく、恰かも社會と同樣に進み、又同樣に動いて行きつゝあるのである。

公に取るべきは其思想の平凡にして其手腕の非凡なるにあるのである。所謂尋常の思想を運ぶに非常の手腕を以てするとである。若し之を逆にして其思想非凡にして其手腕平凡ならんか。それこそ失敗政治家に適當なる資格てある。此點については公と伊藤公とは些か異る所がある。伊藤公は公に比すれば理想を有して居た。又先見も或程度までは有してゐた。然しながら其實行の手腕に於ては或は公に及ばなかつたと思ふのである。そこて政黨の首領としては恐らくは桂公の方が伊藤公よりも其の資格を備へてゐるらしく思はるゝ。

政黨の首領としての公の缺點は演說に餘り巧みならぬ事てある。然しながら其缺點は公は座談に巧みなるが爲めに補うて餘りあるのてある。公の座談は恐らくは天下一品てあらう。特に人を見て法を說くの一事は公の獨得の擅場てあらう。勝海舟の如く警句を吐くてもなく、又伊藤公の如く議論を吹き掛けるでもなく、又大隈伯の如く相手に向て演說するでもなく、實に平々凡々たるものである。滑稽もなく機智もなく、波瀾もなく、抑揚もない。然しながら、蜘蛛の網を張るが

如く、又苟の皮を剝くが如く、說去り說來るの間に何人をも首肯させねば止まぬのである。然しそれよりも尙多しとすべきは聽き上手なのである。語る事の巧みなる人は聽く事の拙い人が多い。然るに桂公は語る事も巧みであるが、聽くことは更に巧みである。如何なる愚論愚見でも何等倦怠することなく之を平氣で聞き流すの術に至ては殆んど何人と雖も驚く所である。虎翁は愚論を辛抱して聞いたと言て其辛抱力を褒めるものもあるが、公は殆んど其愚論を樂んで聞いて居るが如くある、そこで愚論にせよ賢論にせよ、公に向て語らんと欲するものは當初は僅に一端を語る積りで說き出すと。公の聽き上手に乘せられて十分十二分まで傾け盡して、歸る時には我が持つて居る意見は悉く公の所に土產として殘し置き、其代りに公の意見を悉く我物として持ち歸るといふ事が殆んど十が十まで間違なき事になつて居るかと思はれる。兎に角公が聽き上手といふ事は政黨の首領として非常なる强點である。又之と仝時に公の氣取らない事も一つの特色である

世間では伊藤公も平民的であり、西園寺侯も平民的であるといふて居る。然り、或る部分丈けいへば其通りであらう。伊藤公の如きは護衛の警部と玄關に陣取つて悲職に己れを忘れて居る場合もある。又浴衣掛で腕捲りをして書生と議論を鬪はして居る場合もある。かゝる場合は確かに平民的である。然し若し何人でも公を仝等に取扱ふたらば如何であらうか。それこそ大變であらう。公は如何なる場合でも、己れは英雄であるといふ事を忘れた事はない。公はすへての人に對しては平民的であるが、自分丈けは別物として考へて居る公の眼中には他の元老も一書生も左までの區別はなからうが、然し公と他の元老とさへも大いに區別があつたのである。又西園寺侯の如きも茶屋や遊山場に於てはイザ知らず、其自ら標置する點に於て何人も其周圍に近くことが出來ぬ程である。然し桂公に至ては何等氣取る所はない。如何なる場合でも殆んど平氣であるかの如く見える。之と仝時に其自然の愛嬌なるものが又黨派の首領と

して最も弱點であるかも知れぬ。其愛嬌は實に何ともいへない愛嬌である。虞翁の如きも交際社會に於ては誠に愛嬌のある人であつて、其爲めに翁を憎むものは宴席にて翁と面會することを努めて避けてゐた。何故なれば一度翁に面會すれば長く翁を憎むことが出來ぬからであつた。然しかゝる愛嬌があつても虞翁は兎角物事に熱中する人であり、一度考へ込んだ事があれば目の前に懇意の人があらうが無からうが、殆んど堂々と其中を押し分けて通り、又總ての事に記憶のよき男でありながら、人の顔を記憶するといふ事に最も乏しかつたが爲めに多くの黨員を怒らせ、味方となるべきものさへも敵に驅りやつた事も少くなかつたのである然るに桂公は決して愛嬌を惜まぬのである。萬遍なく振り撒くのである。顔面記憶術に於ては果して遺憾なきや否やは知らぬけれども、熟面の人でも生面の人でも調子を合せることは極めて巧みである。

それと今一つは天性人を好むといふ事である。公は一日來客なければ殆んど無聊に堪へぬといふ人である公が人を好むは魚が水を好むが如くある。惠默遜か人は只人を思ひ、人を描き、人の中に住むといふて居るが、之は恰も桂公を説き明かしたものである。苟も時間さへあれば何人にも面會する。其面會たるや、しやうことなしではない。好んで面會するのである。固より公でも人間であれば忙しい時や疲れた時には、せうことなしに面會することがある。然し一度人の顔を見れば最早や心氣爽然として如何に疲勞したる精神でも急に新たになつて行くのである。之も亦政黨の首領として最も適當なる一であらう。

公が人を見るの明ありや否やといふ事については或人は然りといひ、或人は左程ではないといふ。然し如何なる人でも、人を見るの明といふものは決して容易の業ではない。西郷南洲の如きも屢々小人に誤まれたのである。誰でも自己の意見に同一なることを持込めば、信用すべきものでないものまでも信用するは人間の弱點である。桂公とても人を見るの明に於て遺憾なしといふ事は出來まい。然し公は本來愛憎の心が少い

のである。或は情の少い如く愛も少いかも知れぬ。然し何れにしても總じて人に對して殆んど一視同仁てある。そこてあれ丈け長く政界にあつても桂公の身邊に特殊なるお氣に入りとか腰巾着とか何とかいふもはないのてある。桂公の身邊には、豐太閤に於ける。石田三成もなければ、伊藤公に於ける伊東巳代治もない。幕賓とか、股肱とか特殊の關係の者は殆んどない。只適材を適所に用ふる事のみを心掛けて居るので、其用ひ方について誤あるかも知れぬが、心地の公平は、眼識の缺乏を補ふて餘りあるかも知れぬ。又爲めにする事あつていふ議論と公平無私の議論とを聞き分る位の聰明は固よりあり、本物か贋物かを見定める位の眼識は相應にあり、兎に角彼が如き位置にある人としては先づ他より誤らるゝ事の少い方てあるかも知れぬ。或は桂公の身代りとなつて討死する者は、澤山ないかも知れぬが、多數を制する上については却て之が都合よいかも知れぬ。

人を取扱ふ術に至ては殆んど人巧盡きて天巧に近しというてもよい。人を使ふ上についても自分が勉强家てあり、殆んど勉强以外に樂みのない人てあるから、且つ疲るゝといふ事を知らぬ人てあるから、部下に對して思ひ遣に深いといふことは六つかしいかも知れぬが、然し其仕事の成績についてよく之を認めて吳れるから部下は喜んで働くてあらうと思ふ。然し何れにしても人扱ひに至ては部下のみならず、敵を扱ふ事も、味方を扱ふことも、中立者を扱ふ事も極めて妙であつて、一度手を觸るれば觸るゝ所春を生ずといふ程である。此點に於ては伊藤公などは到底も公の側に寄り附くことは出來まい。

公には多少の稚氣はある。然し所謂虚榮心なるものは極めて少い。必要の前には何時にても己を屈する事を意とせんのてある。他人の威張る事も好きてはないが自分の威張る事は尚嫌ひてある。それといつて殊更ら威張らぬ風をする事も決して爲ない。如何なる場合ても有體てある。明惠上人の可有樣の三字は公の常に行ふ所てある。公は何時も平衡を保つて居る。それて

其御機嫌を窺つて後、意見を陳述するの必要はない。伊藤公の如きは朝氣あり晝氣あり暮氣あり、なか〳〵其の天氣を窺ふことが容易でなかつたのである。御機嫌のよい時には愛嬌もあり、元氣もあるが、一度、御機嫌のわるい時には客に向つて相對しても一言もいはず。笑つて答へずならば辛抱も出來るが、厭な顏をして相手にせない時には如何に豪傑の前に出てたればとて、爲めに感觸を害せずして歸ることの出來ぬのは普通の人情である。公に於ては殆んど此事がない。桂公に會つたものは敬服せないまでも胸糞をわるくして歸るものは恐らくあるまい。

又公の一つの長所は調停の名人なる事である。感情や愛憎の爲めに大局の打算を破るなどいふ事は公にとつては決して出來ぬ事である。物事の見渡が早くつき思切りがよく、而かも一通りの工面もあり、人を扱ふ事も上手であるから其結果として調停の名人たることは間違もない。殊に公は議論の爲めの議論を好むことはない。戰闘の爲めの戰闘を好む事はない。よく〳〵の必要がなければ、議論はせんのである。止むを得ぬにあらざれば砲火は開かんのである。そこで敵に對するにも極めて戰線を狹くするは公の軍法である。如何なる場合でも戰ふと同時に講和の事を考へて居るのは公の本色である。然し之が爲めに中途半端の事をなす事を以て足れりとするのではないが、兎も角も必要以外にまで戰闘を長びかすことは公にとつては罪悪と思うて居る。そこで敵を窮追することはない。役にも立たぬ痛手を負はすことがない、何人とも何時でも手を握ることの出來るのは公の本色である。

又公は當てになる人である。政治家は如何なる人でも或程度までは臨機應變である。殊に立憲政治家は社會の風潮を利導して行くものであるが爲めに殊に臨機應變家とならねばならぬ事もある。然し公は一度思ひ込んだ事はなか〳〵罷めぬのである。厭くとか倦むとかいふことは公にとつては殆んど見出されんのである。只時の調子によつて多少の變化はあるが當座の出來心や一時の發憤の爲めに激變するなどいふ事は殆ん

どないのである。そこで公と共に歩く人は只曲り角さへ氣を附くれば外に何等の心配はないのである。只曲り角に於て公は何れの方に動くかといふは多少注意する必要があるかも知れんが、一旦其道を歩き出すと道のある限りは歩くのである。そこで公と共に政界に立つ者は極めて安心してよろしいのである。其仲間を置き去りにして自分勝手に行動するが如きは公に於ては殆んどないのである。

公の長所をいへは財政外交等であつて、何れかといへは法制の如きは寧ろ興味の少い方である。公は立法家よりも行政家である。理想家よりも實際家である。讀書の如きは何れかといへば餘り好物ではない。若し公が今少し讀書でもしたならば、何となく上品となるてあらうが、然し之は公には殆んど望むべからざることである。公は讀書する時間があれば寧ろ談話をして居るのである。公の學問は目よりも寧ろ耳にある。書物の上で世間を眺めずして世間の上で書物を眺むるのである。此點に於て公と伊藤公とは大いに異つて居る。

伊藤公は總ての嗜好中に於て政治が最であつたが、然し其外に讀書もすれば詩も作り、書も書けば碁も打つ山縣公の如きも謠曲、仕舞、和歌等の趣味もある。然し公は何處までも實用家である、書物も實用的に新聞は讀むが、其他のものは餘り讀まぬ。又歌なども偶に作るが之も寧ろ實用的といつてよからう。さりとて園藝を嗜むでもなく、遊藝を好むでもなく、貨殖を念とするでもない。殆んど政治に始まり政治に終つて居るのである。

一つの缺點をいへば、公の手腕によれは、圓き卵でも四角に截ることが出來るのである。一度失策をすれば其失策を上塗りして却て一つの成功とする手腕がある。そこで思慮周密なるに拘らず。時としては餘りに輕易になり過ぎる事がある。十二分の準備をせずとも其場で大概の事は遣り附くるといふ自信力が多いが爲めに不慮の失策をすることがある。又樂天的であつて苦しい時には雪隱の中で鼻唄を歌ふといふが如き立て前で極めて思切りもよく、常に光明の方面のみを見て居る

傾がある爲めに、世間で雜事と思ふ事も自分で氣輕く考へ、其爲め時々調子を取り損ふ事もある。元來最も常識に富んで居る人であるが、此樂天的性質と自己の手腕を信じ過ぎるとによつて傍人より是れは、非常識の行動に陷り、時としては返しすのつかぬ失敗を來すことがある。

人の桂公を非難する主なる點は、其の誠意の缺乏と云ふ事である。成程桂公は凡骨たるが如く見ゆると與に、俗物らしく又た輕薄漢らしく見ゆるのである。總ての言語動作が手輕く且つ氣輕きは、周圍に人の近き易き利益あると與に、斯る誤解を生ずるは餘儀なき乘除であらう。併し政治家の誠意なるものは、其の言行の一致如何によりて之を判定する外はないのである。此點に於ては桂公は言必信行必果とは申し難きが其の言行の無責任でない事は明白である。公は其の公約を放擲したる事は決してない。其の政友に對しても不信の事は曾て見出さぬ。多少の稚氣あるが爲めに、若干場當りを好む癖があるから或は之を以て誠意缺乏と云ふかも知れぬが、それは餘りに酷評ではあるまいか政治家を律するには政治家に共通なる標準を以てせねはならぬではないか。併し慾を云へばせめて宋名臣言行錄でも讀んで貰いたいのである。

公は勇氣があるや否やといふ事は苟も公について考ふる人の疑問とする所である。然し深く公を知るものは、勇氣は實に公の中樞的性格の一であるといふ事を疑はぬ。勇氣にも種々の勇氣がある。公の勇氣は總ての物を捨てゝ掛る勇氣である。のるかそるかの決心の勇氣である。捨身の勇氣である。之は公が思ひ切りのよいのと、樂天的性格より來る勇氣であつて決して蠻勇ではない。從つて又其爲る事も往々にして傍若無人の事もある。之は自分では當り前と思うて居るのであつて、只傍から傍若無人に見ゆるのである。いはゞ無頓著である。若し公が今少し腹黑くあつたならば容易に公爵などにはならなかつたであらう。公の眼中からすれば侯でも公でも別に多くの差はなかつたらう。只公となつたが爲めに幾ら反桂（アンチ）の氣焰を挑發したのであら

うか。しかく考へて見れば公爵の代價は餘り高價ではないか。若し物事の勘定を知る人であれば此を以て彼に代へぬであらう。こゝらで見れば公の長所も短所も自ら赤裸々に分るのである。

世間では桂公を評して、其肉を伊藤とし其骨を山縣にしたる混生動物と云ふ者もある。何れにしても公が兩先輩に負ふ所の多大なるは、爭はれぬ事實であらう。最近十年は、公は山縣派の相續者として、受取られたのである。併し公が山縣公と相知りたるは明治七年頃にして、伊藤公とは慶應末期頃より懇親であつた。伊藤公は明治四十年桂公が皇太子殿下――今上天皇――韓國行啓供奉に際し、京城に於ける自己誕生の祝宴に桂公を招き、其の席上にて演説をなし桂公を以て四十年來の友人と呼び暗に自己の相續者たるとを標示したのである。併しながら伊藤公が桂公の苦手たる如く、桂公も亦た伊藤公の苦手であつた。明治三十四年より四十二年迄の明治政府史の一部は、兩公折衝の歷史と云ふても差支ない。桂公は伊藤公の長所を模範としたるよりも、或は其の短所を殷鑑とし、公の經驗を取りて、直ちに自家藥籠中の物となしたとも少くないと思はるゝ。山縣公が桂公に於ける關係は、軍事上に於ては固より緊密であつたに相違ない。併し人物としては公は山縣式には出來上つて居らぬのである。山縣式の型には公よりも、寧ろ寺内伯が能く嵌るらしく思はるゝ。有體に云へば、伊藤にあらず山縣にあらず桂には自から桂式があり又た桂流がある。譬へて云へば山縣公は山の聳へたるが如く、伊藤公は海の涵すが如くある。桂公は恰も長江の水の如く濁流滔々として何等の奇觀なきも遂いに海に達せねば休まざる概がある。「一日に十里の道を行くよりも、十日に十里行くぞ樂しき」とは、公の自詠である。乃ち春來融け出してる雪嶺の雪が、七八月頃漸く漢口下流の洪水となると同樣である。公は奇闢の頭腦に缺くとも、適用の手腕餘りあり、重厚の資質乏しきも、堅忍の氣象は溢れたり。少數の崇拜者を吸引せざるも、周圍の人心を攬るに拔目なし。桂式の桂式たる所以は此の邊であらう。

政治家としての公を見れば我等は如何にも英國の大宰相ウオルポールを聯想せずには居られんのである。彼は何等人をして豪傑らしく覺えしめずして、豪傑以上の功業をなしたのである。彼は世間より野卑、陰謀の政治家といはれても、而かも國務經營の上に無比の功績を立てたのである。彼は功名を貪り財貨を好むといはれたけれども死後には却つて借金を餘したのである。彼は其内行を愼まなかつた爲めに社會の非難を受けた事もあつた。然しながら彼は實に英國の憲法史に特筆せらるゝ立憲的大政治家であつた。彼についてモルレー卿が語つた所を見れば左の如してある。

國家の公議に參贊して指導の地位に立たんことを志す者の宜しく具ふべき資格三あり、第一判斷力の穩健着實にして且至深徹底なること(明)、第二時務に通曉し該博明確なること(識)、第三意思の力强剛にして操守堅正なること(節)是なり。是れ皆爲政の根本にして而してウオルポールは皆之を具へたり、夫の區處操縱の術の若き亦爲政の有力なる一助たる可く、亦必ず具へざる可からざる所ならん、而かもウオルポールが國王の信賴を博して機務に參劃し、下院に無限の勢力を得、また國内の輿論に對し惜らくは未だ之をして事毎に睥然として順從せしむるに至らざりしと雖とも亦能く之をして己れに趨向せしむることを得たるは、其の專ら區々操縱の術を恃み、若くは甚だ之れに重きを措きたる結果に非ずして、其の能く時務を識り政治の大體を捉へて措置宜きを制したる結果ならんずんばあらず。

之は悉く桂公に適用すべきや否や、寧ろ今後十年を待つて判ずべきであるが、我等は公にして健康が許すならば恐らくは我政黨の首領としての其成功も疑なるべしと確信すべき理由があると思ふのである。

縱談一過、今其の筆記を一讀するや、文字結構兩ながら頗る意に滿たざるものあり。然も若し之を改作せん乎、更らに縱談を繰り返さざる可らず。仍て一二誤謬を訂正し、餘は悉く本來の面目を存す。若夫れ其の内容に至つては、予の所見を卒直に吐露したるに止る。

大正二年三月念夕　無名氏

桂公年譜

弘化四年(一歳)十一月二十八日、長門國萩平安湖(ヒヤコ)に生る　幼名壽熊
父　桂與一右衞門　時年三十四
母　中谷喜代　時年二十三
嘉永六年(七歳)森田與次右衞門の塾に入り習字素讀修業
安政三年(十歳)中谷正亮より箕作省吾譯弘化二年版坤輿圖識三卷を與へらる

同四年（十一歳）岡田玄道に就き句讀學を修業
同五年（十二歳）[illegible]を上田[illegible]に受け[illegible]傳を讀み通讀す
萬延元年（十四歳）[illegible]大鼓を修業、中谷正亮に經書を學ぶ
文久三年（十七歳）千城隊に加盟し歩兵第二小隊長となり馬關の攘夷に從ふ▲世子元徳公御前詰となる
元治元年（十八歳）明倫館歩兵塾に入る世子元徳公の扈從役となる
慶應二年（二十歳）歩兵第二大隊第二中隊の補助長官となり石州口に出陣▲戰後明倫館文學寮員外生となる
同三年（二十一歳）藩主の特命に依り上京し西郷吉之助と國事を謀る▲王政復古毛利公父子復位に就き詔勅を捧持し木梨精一郎と共に歸藩▲三條公等筑前より歸京の途次三田尻より同船十二月二十入日京都に到る
同四年（廿二歳）正月四日特別任務を帶び歸藩▲長藩第五大隊を率て出京▲第四大隊第二中隊司令官となり大阪に下る▲四月奥羽鎭撫總督護衞として松島上陸奥羽各地に轉戰、八月參謀添役となる▲（九月明治と改元）、十一月二十五日東北平定の功を奏し凱旋
明治二年（廿三歳）萩に歸省父を喪ふ▲六月二日賞典祿二百五十石御下賜さる▲横濱兵部省語學所に入り佛語修業
同三年（廿四歳）八月二十三日横濱出發、自費洋行の途に就き米國を經て英國に到り獨逸伯林に渡る
同四年（廿五歳）パリース陸軍少將に就き軍事學研究
同六年（廿七歳）十二月下旬歸朝
同七年（廿八歳）一月十三日陸軍大尉に任ず▲第六局分課勤務、兵語辭書編輯掛▲六月十日少佐に進級、參謀局諜報提理、十二月廿八日參謀となる
同八年（廿九歳）三月三十日獨逸公使館附を命ぜられ四月出發伯林に到る▲八月墺國兵備視察
同十一年（卅二歳）七月十四日歸朝、參謀局諜報提理勤務▲八月十三日兼任太政官少書記官、法制局勤務▲十一月廿一日任陸軍中佐、十二月七日參謀本部出仕▲十二月十四日參謀本部管西局長を命ぜらる
同十二年（卅三歳）七月二日海岸防禦取調委員兼任を命ぜらる
同十三年（卅四歳）三月三十日兼任太政官權大書記官
同十五年（卅六歳）二月六日任陸軍大佐、法制掛兼勤
同十六年（卅七歳）十二月廿五日大山陸軍卿に隨行歐洲差遣を命ぜらる
同十七年（卅八歳）一月十六日横濱出發、伊、佛、獨、澳、露、英、米の各國巡視
同十八年（卅九歳）一月廿五日歸朝▲五月廿一日任陸軍少將、補陸軍省總務局長、參謀本部御用掛兼勤▲七月廿七日[illegible]組織取調委員を八月廿二日國防會議々員を命ぜらる

同十九年（四十歳）三月十六日任陸軍次官
同廿一年（四十二歳）十一月十六日兼任理事、陸軍省法官部長被仰付
同廿三年（四十四歳）三月廿七日補陸軍省軍務局長▲六月七日任陸軍中將▲十二月四日明治廿四年度[illegible]政府委員被仰付
同廿四年（四十五歳）六月一日補第三師團長
同廿七年（四十八歳）八月四日充員令下り、二十九日名古屋出發、九月四日仁川着、第一軍編成[illegible]開城、平壤、義州を經て滿洲に渡り各地轉戰、海城にて越年
同廿八年（四十九歳）鞍山站、牛莊、田庄臺に轉戰し休戰後六月二十日大連出發、廿五日名古屋に凱旋▲八月二十日功三級金鵄勳章並に年金七百圓及勳一等瑞寶章を賜ふ▲征淸役軍功顯著並に[illegible]の戰功に依り特に子爵を授けらる
同廿九年（五十歳）六月二日任臺灣總督▲十月十四日依願免本官補東京防禦總督
同三十一年（五十二歳）一月十二日任陸軍大臣▲九月廿八日任陸軍大將
同三十三年（五十四歳）十二月廿七日依願免本官
同卅四年（五十五歳）六月二日任內閣總理大臣▲六月六日法典調査局總裁被仰付▲三十三年淸國事變の功に依り旭日大綬章を授けらる
同卅五年（五十六歳）二月廿七日依勳功特陞授伯爵
同卅六年（五十七歳）十月十二日兼任內務大臣
同卅七年（五十八歳）二月二十日免兼官
同卅八年（五十九歳）七月三日臨時兼任外務大臣、十月十八日免兼官
▲十二月十四日兼任文部大臣
同卅九年（六十歳）一月七日依願免本官並兼官、補軍事參議官▲一月八日特に前官の禮遇を賜ふ▲四月一日敍大勳位授菊花大綬章
同四十年（六十一歳）九月二十日皇太子殿下韓國御渡航供奉被仰付▲九月廿一日依勳功特陞授侯爵
同四十一年（六十二歳）七月十四日任內閣總理大臣兼大藏大臣
同四十三年（六十四歳）六月廿二日兼任拓殖局總裁▲八月廿九日韓國併合成立勅語を賜はる
同四十四年（六十五歳）四月廿一日依勳功特陞授公爵▲五月五日免兼拓殖局總裁▲八月廿一日濟生會々長に囑託さる▲八月三十日依願免本官并兼官
同四十五年（六十六歳）七月六日外遊の途に上り露都に到りたる際明治天皇崩御▲（七月三十日大正と改元）八月十一日歸朝、十三日任內大臣兼侍從長▲十一月廿八日後備役に編入▲十二月十七日內閣組織の大命を拜す▲十二月廿一日任內閣總理大臣兼外務大臣
大正二年（六十七歳）一月二十日新政黨組織公表▲一月三十日免兼官▲二月十一日辭表奉呈、二十日依願免本官二月廿二日特に大臣の禮遇を以てし元勳の優遇を賜ふ勅語あり

新しき女の爲に辯ず

「東京朝日」記者　楚人冠

△先づ弱者の爲めに辯じ
△女優女流音樂家青鞜社及新眞婦人を論じ
△雜誌「ニコ〳〵」に傍杖を喰はす

其一

天下の弱者を虐ぐるや久し。頼るべき縁がなければ、才も施すに所なく、勢に就かねば、理があつても通らぬ。家の貧しい者、身分の低い者、病める者、老いたる者、滔々たる弱者は盡く强者の爲に壓倒せられ蹂躙せられて、何時頭の上る折あるべしともおぼえぬ。如何さま斯の如きはおしなべての世の習、獨り今日ハ日本に之あるを怪しむに及ばぬと言ふかも知れぬが、怪しむに及ばぬとて、打捨ておくべきことではない。凡そ世の中の文明に進むといふは、畢竟弱者の地位の高められ行くことであつて、人間の歴史といふは、是れ弱者が其の押へられた頭を持ち上げんとして、且あせり、且もがいた次第を叙したるものに過ぎぬ。政治上の弱者が死物狂ひに騒いだが爲めに、世に立憲の制度は生れた。精神上の弱者が、其の慰安を求むる努力から、此に宗教發達の歴史が出來た。弱者を認識し、弱者に同情し、弱者を扶掖し行く所に、其處に世界の開け行く道筋が見えるのである。斷じて打捨ておくべきことではない。

今の日本に於て、弱者の最も虐げらるるもの、女に過ぎたるはなく、女の最も虐げらるるもの、新しき女に過ぎたるはない。夫れ虐ぐるといふは、いぢめることである。意地の惡い姑が嫁をいびるが如く、理も非

も聞かずに頭からくさして掛るのである。惡い者を惡いと、正面から開き直つて難ずるなら聞えた。生しておいてならぬ者を、眞向から一撃を加へて叩き潰さうといふのなら、それも聞えた。唯併し、やつかむ、冷かす、ケチをつける、何とはなしに惡い者のやうにして了ふに至つては、甚以て怪しからぬ。新しい女といふものが何でそんなに惡からうか。いさゝか御意得たい。世の中は古い女ばかりでも困る。凡て女に限らず、何事も夫から夫へと、新しいのを〳〵と追つて行くうち、次第に人間が了解せられて來るのである。昔から人間は隨分樣々のことを考へもし又行ひもした。併しながら人間にはまだ〳〵餘力がある。末竟に限りのあるかないかは知らぬが、兎に角人間には、其の今日までに未だ考へざるを考へ、行はざるを行ふのポテンシヤリチーを持つてゐる。之が此の後如何なる思想如何なる動作となつて現はれ來るかは、未だ俄に見當のつくものではないが、此等が次へ〳〵と現はれて、愈々其の究竟の發現に達した時、此處に漸く人間の如何のものたるかゞ解釋され、人間の自然界に生じた意義が明められて來るのである。隨つて其の究意の域（若し斯の如きものに何時かは達し得べきものとせば）に達する迄に、朝に一個の新しい思想を加へ、夕に一個の新しい動作を加ふるは、次第に一歩を此の域に進むる所以であつて、人間が人間を知るに近づく道途である。假に神學者の口吻を學んで言はうなら、神が人間を作る時之を作る所以の神意があつた。此の神意は人間には分らず、神も明には示さなかつた。唯人間が追々に進み行くに隨つて、神意は各種の方面に現はれ來つて、初めて片鱗から片鱗へ神意の頭や尾を知るやうになつたのである。例へば人間は社會を形成した。乃ち人間をして社會を形成せしむるといふのが、神意の一つであると知れた。又例へば人間は國家を形成した。乃ち人間をして國家を形成せしむるとが、神意の一てあつたと知れた。斯く知れて後、人間が群居的の動物、政治的動物であることが分つた。此の後更に人間が何う變つて何う進んて、何時になりて神意の頭や尾から其

の全體が殘りなく發現せられて、人間本來の面目が淨裸々赤裸々に露はれて來るか、夫れは分らぬ。夫れは分らぬが斯くなる迄に、人間の一擧一動が何れか皆、神意を解釋し行くものに非ざるはない。即ち人間の思想行爲が方面を新しくして出れば出る丈け、多種多樣にして殆んど其窮まる所を知らざる神意の幾分かづゝが窺はれて來るのである。若し之を極めて通俗なる語に改めて、假に之を文明といふならば、新思想新動作の次を逐うて出て、人間の思想動作が益々多岐多方面に渉るだけ、之が文明に進み行くものと言ふことが出來る。此の意味を以てして、新しい女も亦一歩を文明に進め行く神意の一發現たることは疑を容れない。

新しい女が何て惡からう。新しい女は古い女に依てのみ代表せられてゐた女の他の半面を明にしたものである。之が出て女が何な動物であるかといふ問題に多少の解釋を加へた。畢竟新しい女に依つて、女の新しい方面が發現されたのである。一塊の鑛石も其儘に見ては、名もなき土くれとより受取れぬが、割つて碎いて細かに分てば、鉛も出る銅も出る、金も銀も出ぬとは限らぬ。最後にいよ／＼用ひ所のない滓と思つたものでさへ、取りやうに依つては、其の中から何さまざまの金が出て、ある限り出て了つた後やつと此に此の一鑛石の全含有分が知れる。新しい女が銀か銅かは知らぬが、兎に角女といふ鑛石から出た或種の鑛物に相違ない。たとひ之が土であつたにしても、土が分れて出た爲に、後に鉛が殘つたか銅が殘つたかゞ見易くなつた。夫だけても一種の便利を與へた勘定になる。新しい女とて決して冷笑に附すべきものでない。

其二

試に此の新しい女が如何に取扱はれてゐるかを見たい。其の第一例として、先づ女優から擧げて見る。

同じ女のことをいふにしても、婦人といへばやさしく聞えるが、女子といへば如何にも男まさりに聞え、婦女子といへば、何だか輕侮の意を含む。女人といへば抹香臭く、女性といへば、後鉢卷に薙刀でも持つて歩く人のやうに取れる。用ひた漢字の字義に斯ほどの

相違があるかないか知らぬが、日本では、慥に違つた意味に使ふ。女優とて其の通り。字義は同じかも知れぬが、自ら女役者なる者とは違ふ。

昔から有つた女役者に對しては、格別の論もなかつたが、改めて女優なる者の生ずるに至つて、忽然として世間は喧しく言ひ出した。今日迄の女役者なる者は女許りで何もかも辨じやうとするのであつて、男に迄女が扮した。夫と反對に今迄の日本の芝居では、通常は女を男で勤めた。永年さう仕來つて居ればこそあれ、一體は兩つながら不自然極まるものであつて、今此處へ女にのみ扮すべき女優が出て來たのは洵に自然の發達である。殊に從來の女役者といふは無學文盲の低級な藝人たるを以て甘んじてゐた者に過ぎなかつたが、新に出た女優に至つては、相當の地位に在る人の家から出たのもあれば、然るべき教育を受けた者もある。其の志とても低級な藝人た底に安ぜずして、首尾よくば、士君子に接して恥ぢざる底の藝術家たらんことを期して居る者ばかりである。斯の如き者が自然の趨勢に促されて出て來た以上、大に歡迎し、大に奬勵し、出來るものなら大に扶掖し助勢して、其の發達を遂げさせてやらんことを期すべきである。所が弱い者と新しい者とに對して殆ど些の同情を持たぬ酷薄なる世間は、初から之に對して冷笑の眼を向けた。成程歡迎は多少されたが、夫は藝術の方面からしたのでなくして、女といふことに一種の興味を感ずるすきごゝろからに過ぎなかつた。奬勵も少しはされたが、之は孰も商業的の意味を以てして居るものに非ざるはなかつた。之を扶掖し助勢する者に至つては、至つて少數の識者に過ぎずして、其の識者なる者も、之によつて却つて世の嘲を招いた位である。

晩かれ早かれ、日本にも創まるべき筈の女優が今日始まつたとて、冷笑すべき理屈は更にない。況や之に根も葉もなきことを言ひ立てゝケチをつくるに至つては、つくる人の氣が知れぬ。相當の家の娘があんな眞似をしてと能く人は笑ふ。畢竟藝術の貴さを知らぬ舊思想の呪咀である。一廉の教育を受けた者が仕事もあ

らうに女優とは嘲けるのも屢々聞いた。恐らくは役者を河原者と心得て芝居を文盲の徒にのみ委すべきものと心得たに相違ない。我等は此の點に於て森律子等が率先身を挺して、衆人非議の間に敢然其の所信を貫いた意氣込を壯とせざるを得ない。而して誘惑の多い此の種の職業の中に在つて、根もなき噂こそ兎角は立て、未だ曾て明に其の體面を傷つけたことを聞かぬ點は、えらしと言はざるを得ない。

言ひ立てれば、成程今の女優にも様々の弱點はある。さりながら創業の際は何事も大目に見てやつて然るべきである。幼いから其方の道にのみ仕付けられた世間の俳優から見て、急仕組の伎藝の俄に進まぬのは當然てある。けば／＼しい風をして歩くとて罵る者もあるが、廣告の爲なら女優以上のけば／＼しい風をしたりさせたりする輩が世間にいくらもある。藝妓のやうに宴席に出るとて喧しく言ふのも聞くが、人氣商賣をする者の招かれゝば宴席位に行くのは當然である。夫が惡いなら、斯いふことを一も二もなく女優の方で峻拒して、猶且つ世間の人氣の落ちぬやうに、人氣の方から改造して世間の方で出直すが宜からうぢやないか。

此種の惡言を唯私人の世間話にのみ聞たのなら、われらも強て餘計な憤慨な事としやうとは思はぬが、堂々たる天下の新聞紙雜誌が衆愚の意を迎へて、得たり賢しと、此の種の記事に憂身を窶すから全く困る。今日まて諸々の新聞紙雜誌に隨分女優に關する記事が出たが、其の藝術に立入つての批評は丸で其中の萬が一て、大々多數は畢竟つまらぬ人身攻擊てある。其の又人身攻擊も、材料が單純極まる一本調子て、女優が男と何したとか斯したとかいふに止まる。我等の記憶する所によれば、今日まて或女優が樂屋で泥坊をしたとかいふ記事一つを除けば、其の他の一切の女優に關する記事は盡く男女の關係てあつた。夫も突留めて慥な所を書いたならまだしも、多くは人の噂世間の風評に尾鰭をつけて、幾度々々幾度も同じ事を、違つた所で繰り返すに過ぎない。われらは女優の記事の新聞紙に顯はるるのを見る毎に、又かと許り一には女優の爲に氣の毒

に思ひ、二には其新聞紙の品位の爲にも氣の毒の感に堪へぬ。

帝劇の事に當る人々に聞いても、又われら尊信する同社内の演藝に關係ある記者から聞ても、帝劇の女優なんどは、大抵相當の報酬を受けてゐて、淫を鬻いて迄其體面を保つの要はないとのことである。隨つて帝劇の女優は比較的品行方正て世間に傳へらるゝやうなものてないと聞いてゐる。夫にも拘はらず最も不品行なるものゝ如く世間に吹聽せられて居るのは帝劇の女優てある。女優たる個々の女の不徳の致す所といへば夫までだが、女優といふ一の新しいインスチチユーションの上から言ふと、悲まざるを得ない。

女優が男に惚れたなら、惚れたて宜いてはないか。そんな事を喋々しく新聞紙に書くには當らぬてないか。男と女とが惚れるとか惚れられるかいふのは、男女間の當然な事て、テニスンの何かの詩の中に『女の男に惚れるのは女の美德の一つ。』と迄書いてある。斯いふ平凡な出來事は我等とて幾許もあつた。誰にもある。誰にあつたとて皆私の事てある。惚れた揚句に惚れた同志どんなことしやうとも、そんな事は當人同志の勝手て、夫々岡燒半分世間て彼此いふのは大にお世話の甚しきものてある。成程惚れもせぬ男女の間に唯金を貰つたゞけて淫を賣るといふのは、善い事てない。併し之とても世間に類のないことてもあるかのやうに今更事珍らしげに言ひ立てるには及ばぬ。特に女優だからとて大袈裟に言ひ立てるのは、畢竟其の事が珍らしいのでなくて、女優なるものが珍らしいからてある。言ひ換ふればわれらが此の篇の初に言つた通り新しいから虐げるに過ぎぬ。われらは藝妓に關してさへ此の種の事を新聞紙に書き立てるのは、新聞紙の品位を汚すものと心得てゐる。況んや、扶掖し助勢して相共に其の發達を期すべき女優に對して之を言ふが如きは、藝術を無視するにも程があると信じてゐる。

女流の音樂家に對しても女優同樣世間は之が待遇に隨分酷薄を極めた。元來音樂家美術家といふが如き者は、詩人文人と同じく大抵神經の鋭いものであつて、

人一倍世間の批評を氣に病むものである。成るべく其の心をいら立たせぬやう、成るべくさく〳〵した思をさせないやうに彼等の心を平靜ならしめて、初めて彼等も調子づいて來るのである。われらが何でもない新聞紙の原稿を書く時にだに氣を腐らせては筆の運べぬことが多い。夫よりも更に込入つた更に精神を抖擻してかゝらなければならぬ仕事に在つては尙更さうである。油が乘るといひ調子がつくといひ、氣が向くといふが如きは皆一切の妄念を絕ち紛々たる世俗の累を離れて上のことで、片方では淫蕩と罵られ、片方では不身持と嘲られて、さながら初心の擊劍家が無暗と他が道具外れを打つて得々としてゐるやうに、藝術の批評とは沒交涉なる身持や品行を矢鱈に攻擊せられては、歌も機嫌よく歌へるものでない、踊りも身に泌みて踊れるものでない。

われらは此の意味を以てして柴田環女史に同情を注がざるを得なかつた。柴田環女史は日本に於ける歌劇の創始者であつて、彼が兎角の世評に頓着せず、大膽にも之を帝國劇場の舞臺に試みた功績は、飢を凌んで道を說き生を賭して新學說を唱導した古聖賢古碩學と、大小の差こそあれ、其の趣に似た所が大にある。凡そ今日文明國と稱せられて多少音樂の發達を見るべき國に歌劇あらざるはない。自分は生れて初めて之を巴里に見て、斯の如きものが何時になつたら、日本にも出來るだらうかと危んだ。一齣の義太夫を大きな男が語るだに顏を顰め色を赤め、身を前後左右に搖り動かし、伸びても見つ屈んでも見つ、さま〳〵の狂態を演じて、辛く望みの聲を出し得る日本の聲樂界に、彼の歌劇役者が朗々と歌ひながら、平氣で樣々の身ぶりを行ふの餘裕を何して期し得られやうと自分は思つた。所が自分の斯く思つて後兩三年ならずして、環女史は兎にも角にも「蝴蝶」の舞を演じた、次では「熊野」となり、更に進んでは「釋迦」となつた。創業の際とて元より之が日本の歌劇と誇るに足るべき程のものでは萬々なかつたが、夫にしても日本に於けるオペラの基礎は此處に出來た。之が追々に發達して眞個の日本の歌劇

の種となるべきものと、わられは且つ祈り且つ祝したのである。さりながら世間はさう見なかつた。世間は例によつて出る毎に嘲笑冷罵を浴せかけて、しよげ返る環女史を見て、手を拍つて喜んだ。而して一個の聲樂家としての環女史に半文の價を認むるを許さかつた世間は、女史が情夫と切れたとか其の父に監禁されたとか、新嘉坡に逃げ出したとかいふ愚にもつかぬ市井の一些事に對しては、內閣の更迭以上の大事の如く取沙汰もし書き立てもした。何處まて分らぬとぞやと自分は情なく思つた。

原信子にしても今現に同じ目に遭つてゐる。彼が伊太利のザルコリーに連れられて上海に行つた時も、某外人と秘な關係があつて、其の揚句に捨てられたとか金を捲き上げられたとかいはれた。上海から歸つて初めて帝劇へ出た時も先づ試演をやらせて、旨く行けば環女史の後繼者にするのてあつたが、人氣がないからお拂ひ箱になつたといはれた。其の頃彼が友人の聲樂家何がしといふのは伎倆拔群、ともすれば信子の右に出さうてあつたが、一夕之れが信子と會食してから、何(どう)したものか、件(くだん)の何がしの聲は忽ち潰れて了つたと、て左ながら信子が毒藥ても盛つて其の敵を仆したかのやうに傳へられた。其の外彼の一身に關しては隨分醜惡千萬な評判も立てられもし、今も尙立てられて居る。殆ど此の可憐なる半成の少聲樂家に對して、一點の同情ある言葉を聞いたとはない。斯く迄にせずともとわれらは屢々思つた。上海て男に誑(だま)されたのが眞實とすれば、夫は若い娘にありうちの失策て、誠に氣の毒なと言ふに過ぎぬてはないか。唯人氣の爲のみの故に帝劇の試驗に落第したといふなら、之も實に氣の毒なとてはないか、學校の中て精々四百五百の生徒の間にしか知れ渡らぬ時ても、試驗の落第といへば恥かしいものて一寸人に面を合されぬ位。ましてや之は一般公衆の前て老先長き少女が落第させられたと聞いては、苟も同情のある限り、見て見ぬ振をしてやるが當然てある夫を面白可笑しげに吹聽しまはるが如きは沙汰の限りといはざるを得ない。若し毒を其の友に盛つたといふ

一事に至つては、是れ正しく彼を刑事上の一罪人と認むるのである。夫ならば宜しく事實を確めて之を獄舍に投ずべきもので、輕々しく何れともつかぬ噂を立てて變な心證を一般に與へんとするは不德極まる。評判にも事を缺いて、毒を盛つたなどゝは、餘りとして餘りである。

新しき女を論ずるに當つて逸すべからざるは、例の青鞜社一流の女傑である。元來人類の間に於ける女の位地、其の男子に對する關係如何は、千古容易く解くべからざる問題であつて、昔から婦人の間に起つた各般の運動は、何れか之が解決に貢獻せざるはない。遠くは希臘の昔高加索の地方に起つたと傳へらるゝアマゾンの一團も其の一なり、近く英吉利て喧しいサツフラジエツツも亦夫てある。青鞜社一派の行動も亦微力てはあるが婦人問題を解決すべき一個の新しい運動たるとは疑を容れぬ。戰勝の餘威世界の一等國の伍伴に列したとかね〴〵誇つてゐる今日の日本に、斯ばかりの新運動を容認するの餘裕がなくて何ならうか。青鞜社の或者が五色の酒を飮んだとて頻に騷ぐ。謂ふ所の五色の酒とは靑きはペツパミント、赤きはマラスキノー、黃色なるはベネヂクチンかキユーラツの事だらうが、此等は何處でも大抵女の飮むにきまつた酒である。夫を珍らしげに言ふ者は、己れの世間知らずを披露する者である。靑鞜社の或者は貸座敷へ上つて娼妓を買つたとて盛に非難される。成程貸座敷へ上るなどは、餘り結構なことゝも覺えぬが、婦人の或方面を研究する爲に必要なといへば夫ですむ。更に切り込んでいへば、男子が娼妓を買ふよりも、女子の之を買ふ方が罪はない。女子が買つたとて之を男子が買ふよりも更に大なる罪惡のやうに言ふのは間違である。其外情死をしかけやうが、女優にならうが、演説をしやうが、坐禪をやらうが、「鴻の巣」へ通はうが、夫等枝葉の小事は棄てゝ一應眞面目に彼等の主張を聞いてやる位の雅量を持つてゐても宜い。言ふが如く女は解放せられざるべからざるものであつて、解放せられたる女子は當然男性的の享樂を是認さるべきものといふと共に、一貫したる論理

の徹底したものがあるなら、演說も坐禪も情死も亦宜し、われらは先づ根本の理屈から聞いて行きたい。

高い聲でも言はれぬが、女は當然今日の壓迫せられたる位置から解放さるべきものと、自分は確信して居る。女が其の位地を自覺しなかつた間こそ無理も通しては來たが、一體女子は男子から隨分身勝手な束縛壓伏を受けて來た。之を脫して女が自我を主張せんとするのは、尤もである。斯の意味を以てした女子の運動は大に認めてやらなければならない。難をいへば其の運動に多少極端な處があつて、保守派の眉を顰めしめるが、夫にしても日本の新婦人の運動は、英國のサッフラジエッツのやうに、郵便函を毀したり窓障子を破つたり、宮殿に火を放つたりするよりは遙に勢力もない代りに、やり方も穩やかである。極端といふは何事にも物の初には免れ難い所で、此に極端な新派が出れば、彼方に極端な舊派を促し催して、其の末何時しか追々とやゝ穩健に近い中正派が出る順序になる。古めかしい例だが、振子(ペンデュラム)の極端から極端へ振り動かされて行く間に、少しづゝ／＼垂直に近づくやうなものである。ヘーゲルの所謂「正」と「反」とが出て此處に「中」が出る。「中」の又「反」が出て、今度は其の間に「中の中」が出る。斯くして世の中が次第に中正に進み行くのである。其の着手當初に於て多少の極端に傾くが如きは憂ふるに足りない。

現に英國で亂暴千萬なサッフラジエッツの婦人選擧權獲得運動が起つて、パンカースト夫人などが騷いてゐると、一方にはクローマー卿やカーズン卿の經營で男子から成つた婦人參政反對同盟が出來、別にジャージー夫人ロブスン夫人などの、婦人にして婦人の參政に反對する連中が又一團を組織して、此等兩個の反對同盟が一昨々年の春相合して國民的反對同盟となつた。其の又同じ參政派にもミリタント派とアンチミリタント派と相異なつたのもあれば、フォーセット夫人やピリントングレーグ夫人などいふ同じ仲間ながら毛色の違つたのがある。

日本の新しき女の運動にとて、此の種の反抗は出て

來るに相違あるまいと思つてゐるうちに果して青鞜社一派の婦人に對する「新眞婦人」運動といふものが出て來た。發企者の顔觸を見ると、豫言者宮崎虎之助君の細君がある、昔の社會主義者西川光次郎君の夫人がある、新宗教て賣れた木村秀雄君の女房がある。此の外に「無我の愛」の大將伊藤證信君の妻朝子夫人も加はる筈であつたのが、少し意見が相違するとて、途中てぬけた。孰れにしても青鞜社の連中とは餘程趣のかはつた新婦人てある。青鞜社を文藝的のものといふなら、此の新眞婦人の一團は大分宗教的てある。青鞜社の中には一寸歩み合ひ悪さうな各種の婦人を集め得たと同じく、新眞婦人なるものも、人目には折合のつきさうにも見えぬ各派の人々を集めてある。新眞婦人は青鞜社の演説を聞いてから、其の世を害し俗を毒するを憤つて新に立つたものだといふが、恐らくは遠からずして、此の又新眞婦人を憤つて立つ所の新なる運動が起らうぞ。取りかへ引きかへいろ〳〵と出て來る中には、追々善い者が出る。善い者が出れば悪い者は自らなくなる。新婦人ても何ても來いと、自分は樂觀してゐる。如何なる種類の新しき女を見ても決して悲觀するには及ばぬ。

凡そ階級の爭、古くは貴族と平民との間に起り、中頃にして富者と貧者との間に盛になつた。夫が近頃更に一轉して男と女との間になつて來た。弱者の地位にある者が其地位を自覺して來ると共に、强者に對する反抗を企つるのは古くから定つた自然の勢てある。如何に贔屓目に見ても、今日まて男は女を輕んじ過ぎた。さうと悟つて女が喧しく言ひ出したのも無理はない。此の時に當つては、われら男の方から、寧ろ自ら進んて、其の讓るべきを讓つて、女をして其の志を成さしむる位の雅量を示したい。

其三

東京に「ニコ〳〵」と唱ふる雜誌がある。「ニコ〳〵」などいふ權威のない愚名をつけるに見ても、其の知慧のなさ加減が知れるが、世には此の雜誌の賴と聞けば可笑しくもないに態々笑顔を作つて其の寫眞を雜誌の

巻頭に掲げさせて、而して間接にニコ〳〵倶樂部會頭牧野元次郎及其の經營する不動貯金銀行の廣告に使はれてゐるお人好しが澤山ある。賣笑婦といふ語は之まて屢々聞く所てあるが、賣笑記者賣笑論客賣笑實業家に至つては、われ初めて之を雜誌「ニコ〳〵」に見た。

牧野元次郎君は一銀行家てある。彼が多少の金を持ち、多少の幅を財界に利かしてゐる一强者てあるが爲の故に、天下は斯の如く彼に媚ぶるのてある。

今一つ此に擧げたい例があるが、故あつて之は見合せる。要するに當世は强者に媚びて、弱者を虐ぐることになつてある。强者に媚び弱者を虐ぐるやうな腑甲斐ない眞個の弱者をこそ、虐げて以て恥を知らせてやりたい。

（完）

西園寺侯の違勅問題を辯じて誠意なき政界の紛擾を慨す

伯爵　大木遠吉

西園寺侯が上陛下より詔勅を賜うて、而も其責を全うし得なかつたとは即違勅である、其罪決して輕からざるものありとして、それに就いての議論が所々に沸騰してをるやうてあるが、果してそれが違勅てあるか否か、吾輩は玆に一言辯じて見やうと欲する。

最初桂前首相は其内閣の成立の當時及び其成立後に於て、頻りに天皇を累して詔勅を濫請した。此事たるや憲法の精神に背き、憲政の大義に悖るものなるが故に、桂内閣に對しては信任する事が出來ない。又詔勅濫請の責任の所在を明確にせねばならぬと言ふので、

衆議院大多數の一致せる意見を以て、二月五日の議場に於て尾崎行雄なる立法府員が不信任決議案を提出した。而して其大勢たるや大多數を以て通過せんとする有様てあつたが、其時桂首相は休會の詔勅を奏請して事無きを得た。

西園寺侯の違勅云々はこれから始まつてをる。

吾輩は先づ此事から一言せねばならぬと思ふ。即其當時議會に於ける尾崎氏の演説は――私も其時傍聽したが――要するに天皇と雖も必ずしも過なきを保すべからず。若し過ちありし場合は輔弼の任に在る者其責に任ぜざるを得ず。獨逸の宰相ビューロー伯は、皇帝の演説に對しても責任を負ふといふ事例を引證して、其責任の在る所を問ふた。ところが其當時議場ては稍耳新しき語を喝破した爲め、不敬とか不都合とか不屆とか叫ぶ聲が大分聞かれたやうてある。先づ第一に是れから評論せざるを得ない。

吾輩を以てすれば、尾崎氏の精神の有る所、不敬ても不都合ても何ても無いと思ふ。由來日本は永く天皇を以て神也といふ言ひ習はしを以て今日に傳へて來た。成程日本の國體の淵源は萬邦其例に絕するは事實てある。さりながら謂ふ所の神は所謂宗教者が目して以て神也といふ其萬能の神とは違ふ。宗教者の神は想像てあり、非實在てあつて、宇内を主宰する一種の靈妙なる假定てある。即現存する人類相互の神は孰れの邦國と雖も通有なる人道てある。是れが確立は蔽ふべからざる事實てあつて、人類が萬物に冠絕したる證左てある。森羅萬象の秩序が整然として一絲亂れざるを觀ては、廣く宇宙を統宰する主宰者有るを信ずるに至るは當然てある。吾輩も心私に、神佛の名稱奈何に拘らず、複雜なる森羅萬象を統一せる狀態に於てはイカサマ主宰者の存在を信ずる一人てある。是れは人道の通義に背反して存在する者てはない。銘々暗默の中に偉大なる制裁者、偉大なる力、靈力の有るを信ずるのてある。斯く一種卓越したる靈物の存在を指して人は之を神と呼ぶ。然しながら現人に於て天皇は神也と言ひ、萬智萬能にして過誤なしと言ふが如きは失當の言

てある。素より日本の君主は外邦の君主と其成立の淵源に於て異るが故に之を神的君主と言ふは可也。日本の君主は確に一面に於て神様的てあるとは何人も認むる所の事實てある。然しながら其萬世一系の皇室を戴き、天壤無窮の皇運を扶翼すべきは我國民の本分であると言ふ其意味は決して神様なるが故に迷信的然りと謂ふのてはない。殆ど神様に近い徳を具有せらるゝ故に辨別的然りと謂ふのてある。今日の世の中に在つて君主が此宗教的哲學的見地から認めたる宇宙の主宰者統治者と同一てあるなどと言ふは牽强附會にあらざれは阿諛諂佞の辭てある。決して彼等自稱愛國者の言を以て誠意の披瀝てあるとは言へない。玆に於て天皇と雖も時に或は御過ち無きを保すべからずと言ふは否定するを得ないのてある。玆に於て輔弼之臣が重任と重責とを有する所以てある。謹んて之れを過去の歷史に徴するに、後醍醐天皇は英邁の君主に在せしが故に皇室の式微を慨せられ、兵馬の實權を陪臣の爲めに何時迄も簒奪的に専有せらるゝを憂ひ玆に建武中興の事業を擧げさせ給ふに至つた。然るに第一の目的が貫徹せらるゝと同時に政治に怠らせられた形跡がある。甚だしきに至つては阿諛諂佞の者を拔擢し、硬骨直言の士を遠ざけて、民の疾苦に其愛撫が甚だしく徹底しなかつたが爲めに、折角の大事業も中途て挫折するの已むなきに至つた。此現象は君主と雖亦御過失のあらせられたる證左にあらずして何ぞ。宜なる哉、源親房は神皇正統記に於て、切に中興偉業の貫徹に至らなかつた原因を天皇の過にあると直言してをる。民心を總攬するは民の疾苦を察せなければならぬ。然るに一時の成功に安んじ大計を誤つたものてあると直言憚らず今も尙明瞭に其文字は傳へられてゐるてはないか。而も今日天下何人か親房を目して不敬不臣の輩とする者がある歟、否天下舉て親房に赤誠國を憂慮するの餘りてあると認めてをる。逆賊足利の一輩てすら親房の忠誠を認めて居るてはないか。彼は實に忠言を以てするのみならず、終始一貫王室の爲めに努力した人てある。之に反して坊門淸忠の如き君寵を辱うしたる侍臣は上意

を迎合し、只管旨に忤はんことを怖れ、極めて柔順に、君命唯是れ従つたのである。而も後世の史家は之を諂佞の臣とし、世人も亦其佞臣たるを否定するものはない。其れ即一人の手を以て天下の目を蔽ふ能はざる證據である。

只茲に注意すべきは、如何に議員は院内に於ける言論に對し院外に於て責を有せずと雖、尾崎氏たるものが公開の場所に於て、あれまでの演説を爲す場合に當つては、餘程周到なる注意を要したといふとである。即ち語氣に於ても、態度に於ても十二分に愼重なる道を採らねばならなかつたのは勿論である。而して其精神のある處が一般によく徹底する様に努めねばならなかつた。單に君主も人なるが故に云々は頗る語の足らざりし憾みがないではない。然しながら其精神の存る所は不敬でもなく不臣でもない。精神の在る處を顧みずして漫りに言葉の末節を捉へて不敬不臣といふならば、北畠親房は不敬不臣の甚だしきものと謂はねばならぬ。又其際議會の形勢は何うであつたか。之を不敬不臣と感じた者が果して何人あつたであらう。是れ恐らくは、爲めにする所ある者の牽强附會の邪論若くは羅致陷穽の毒説に過ぎないと思ふ。

斯くて次の議會は十日に開かれたが、五日の形勢は依然として存續し、不信任決議案は殆んど危く通過せんとする狀況に見えた。斯くの如くにして大正新政の第一年に當つて物論洶々囂々として滿都湧くが如く、全國に亘つて物狀の騷然を致すに至つたのである。茲に於て聖天子は宸襟を惱ませ給ひ、騷然たる物狀を鎭定すべく元老にして柱石の臣、且つは大政黨の首領たる西園寺侯を召させられて、御下問あらせらるゝに至つたのである。尤も此御下問と言ふとに就いては自ら議論もあらうが、吾輩は堅く然か信ずる所のものである。之を詔勅、又は勅語といふが如き一般國民に關係を有つ所の御言葉と同一視するとは出來ない。かゝる場合に國家柱石の臣を召して、徐ろに御内談のあらせ給ふは日夕有り勝ちの事であらうと拜察する。素より樞密院官制は御諮詢に答へまつるの府である。然しな

から　天子の御思召に因つては之を措いて外に尋ねさせ給ふを遮ぐるものではない。茲に國家の柱石にして元老、且大政黨の首領たる西園寺侯を召させ給うて、洶々たる現時の狀態を鎭定することを諮り給ふに至つたのである。是れ西園寺侯一個人に對するお言葉であつて、國民全體に交涉を有つ詔勅とは自ら其類を異にするものであることを吾輩は深く信ずるものである。恐察するに　天子と雖も平素種々なるお言葉を下し給ふてあらう。故に此場合は勅命を天下に宣布し給ひたることは其性質に於て異る者がある。之を拜聽する者に於いても詔勅を拜したる場合とは異り、必ずしも叡旨を其儘畏み奉らねばならぬものではなく、寧ろ社稷を念とするものは須らく自己の赤誠を吐露して、叡慮を安んじ奉らねばならぬのである。是れ即社稷之臣の取るべき道である。此場合西園寺侯たるものは須らく、今日の現狀然く宸襟を惱ませ給ふべきにあらず、憲政治下に現出すべき當然の現象にして、憲政治下にあらざれば、爲政の當局者に對して不滿足を表する方法は動もすれば干戈に訴へ、內亂を紛起するに至るも、單に言論の沸騰を見るのみなるは、全く憲政の賜である。若し憲政無くして今日の如き狀態を釀したる場合、强いて之を壓服すれば愈々反抗を招き、反抗と壓迫と相擊する所內亂の閃光を發せない共限られないのであるが、今日は幸に憲法の認むる不信任決議案の提出を見るのみの事なれば、陛下の御軫念あらせ給ふは誠に恐察に餘りあれ共、大體に於て毫も聖慮を惱ませらるゝに及ばず。事茲に至つては議會を解散して更らに民意を參酌遊ばさるゝ乎、或は又現總理大臣たる桂太郎の任を解除遊ばさるゝ乎、此二途の外に道なき事を奉答し、而して後任總理は素より陛下の御鑑識あるに依る事は申すに及ばず。乍去其後繼內閣たるや欽定憲法の條章を恪守するは勿論、善く憲法の精神に遵由せざる可からざる事を懇ろに献替し奉るべきであつたと思ふ。已に決定せる勅命を天下に宣布せられたとは其性質を異にするが故に、斯くお答へ申上げて毫も差支ないと吾輩は信ずる。然るに侯は聖旨に副ふべく努力せんと心得、

自己が組織たる政友會に交渉して撤回若くは修正を圖つた。是れ吾輩は遺憾ながら西園寺侯が其見解を誤つたものと思ふ。何故ならば所謂燎原の火は直ちに消し止むるを得ない者である。當時議會の形勢は方に遼原の勢であつた。いかに盡瘁すればとて口舌を以て變化せしむることは出來ない。然しながら若し是れが天下に宣布せられた詔勅であれば、遼原の勢であらうが何であらうが、之れは別問題として更らに其本源に遡るの必要ある事は言ふを俟たない。左すれば紛糾の上に更に紛糾を重ぬる者である。當時民論の沸騰を見るに至つたのは、そこに熟慮すべき理由が有り根據があつたのである。此理由原因を審かにせずして、漫りに口舌を以て鎭定せんとする時は、何等かの反應あるを免れない。國家の柱石たる者は宜しく其因由の有る所を察して禍を未然に防ぎ、不祥なる反應を起さしめざるやうにすべきである。是れ國家の重きに任ずる者の本分であつて、當時を處置するに此見解を以てしなければならなかつたのである。元來內閣不信任決議案の通過せんとしたのは、總ての方面に於ける桂公の行爲の甚だ當を得ざるに對する國民の公憤、愛國の至情に依るものである。是れ適法なる理由といはざるを得ない。然るに之を慮らずして猥りに抑壓する事は出來ない。又若し西園寺侯に對する御下問にして、普通の御下問的言葉にあらずして詔勅又は勅語といふ如きが國民全般に關係する大命なりしとせば、侯が違勅の責を負ふや否やの前に、桂總理大臣が更らに詔勅濫請の最大なる責に任ぜねばならぬ。此の罪責たるや甚だ重大なる問題を惹起すべき性質のものにて啻に身政府の要所を去つて在野の人となることのみに因つて解決せらるべきものではないと思ふのである。

故に吾輩は當時の事はどこ迄も御下問的お言葉であつたと恐察する。然らば此場合單に西園寺侯の能不能を論議するは可也。之を違勅といふが如きは失當の言である。況んや西園寺侯は政友會に對して徹回又は修正の緩和方針をつ採たことも事實であるに於て、只貫徹し得ざりし不能を責むるは可なりであるが、之を以

て違勅とすることは出來ない。之を違勅として責むるは敵は本能寺に在りで、或一黨を呪ふ爲めの評言であつて、奇怪極まる曲事である。西園寺侯自ら其無能を自覺して、自から引決するは可なりであるが違勅なりとして之を强ふる理由が何處にあるか。凡そ斯くの如きは黨内に於ける侯の勢力の厚薄深淺を測る所のものである。侯自らにして、其職に在る尙可也とあらば、而して黨員が除名もなさず引退をも迫まらずとせば、侯に對する政治道德の論難は別として第三者が直接如何ともすべき餘地を見出さいのである。

然るに或新聞の說に依ると、之を建武の際の出來事に比して、尊氏九州の兵を率ゐて天子を襲ひ奉らんとせし時、天皇は武臣に命じて應戰の御沙汰を下し給ふた。正成見る所ありて、其不得策なるを思ひ、宜しく皇居を移して暫く其鋭鋒を避くべきことを建議した。然しながら叡慮は之を採用し給ふに至らずして邀戰を命じ給ふた。是れ即大命である嚴命である。正成宜を畏みて湊川に防戰し、武運拙く戰死の最後を遂ぐるに至つた。今西園寺侯は大命を奉じて叡旨を貫徹するを得ず。是れ君命を辱めたるものであつて、違勅の罪、何ぞ死を以て陛下に謝し奉るの擧に倣はざるやと言ふのである。是れ甚だしく大體を誤つたる觀察であると謂はねばならぬ。武將が一度逆賊の侵略に逢ひ、畏くも大命を拜したる以上、譬ひいかなる事情ありとも一命を捨てゝ君命に副ひ奉るべきは當然の任務である。而して正成の建策は軍略である。後醍醐天皇の叡慮も亦軍略である。之を今日憲政の治下に於て政論の沸騰より生じたる現象に就いて、親しく國家の休戚と繫す臣下に御下問の有りたるとは其場合を異にし其性質を異にするのである。是れは個人たる西園寺侯に對する御諮詢である。只其場合侯の採るべき途は自ら別にあつた。然るに侯は叡慮を慰め奉らん爲めに一時の彌縫、姑息の手段を採つたとは返す〴〵も侯の爲めに取らざる所であるが、それあるが爲めに違勅と呼ばはり、君命を辱しめたる者と罵り、喧々囂々の論を爲すは、政治上の敵本主義であつて、醜陋なる心事を遺憾なく暴露した

るものであると謂はねばならぬ。

更に遡つて政友會を觀るに、彼等が頭首と戴く總裁且つは一面國家の柱石たる西園寺侯が物論を鎭定せんとして、不信任決議案の撤回又は修正を試みたる際に方つて、極力之に應ぜざりし所以のものは、其目的たるや必ず責任内閣の樹立即政黨内閣の組織せらるゝにあらざれば國家將來の大計を誤るものとなしたが爲めてあらうと信ずる。國家將來の隆運を圖る爲に其目的を貫徹すべく、總裁の勸告を却け、其慰撫に耳を假さなかつたのであらう。誠に天晴雄々しき武者振と謂はなければならぬ、然るに何ぞや。舌根尚未だ乾かざるに蒼惶として政黨以外に超然たる山本伯の脚下に趨り、之と妥協し之と握手して内閣を組織するに至るとは。今日の事は純粹を貴ぶのである。厭ふべきは混成てある。混成にては如何なる經綸ありとも、決して遺憾なく實行することは出來るものではない。或は曰ふてあらう、紛糾せる時局を兎も角も拾收せん爲めに不本意ながら妥協するに至つたと。果して然らば何故西園寺侯が鎭撫を謀りし當時に於て應ぜざりしぞ。天下の物情騷然たるを致したるに付ては政友會も亦一半の責を分たねばならぬ。然るに政友會より二三者を出して國務大臣の椅子を攫得せしめ、以て政黨内閣樹立の名を裝はんとするも、其實質に至つては天下億兆の耳目を蔽ふとは出來ない。見渡すに今日の政界、名を愛國の至情に藉り、口に憲政の濟美を唱ふるも、多くは羊頭狗肉の策を以て切りに政權を苟くもせんとする陋心に外ならぬ。一片耿々の誠意は覓めて之を何處に得らるゝものぞ。吾等は今日の西園寺侯の苦衷のある所を察せずして、猥りに之を違勅と呼ばはり其罪を問ふ者等の鄙陋陰險を叱責すると同時に、政友會が此憲政上容認すべからざる罪惡を敢てせる罪を問はねばならぬ。否吾輩は此不眞面目にして不謹愼なる政界の現狀がいかに國家の前途を誤り、國民の歸趨を惑亂せしむるかを思うて、國民と共に之を慨せざるを得ないのである。

權兵衛大臣を憐む

耕堂迂人

山本内閣は成立するや直ちに議會に攻め拔かれて甚だ難澁せるものゝ如し、吾人は山本伯に對して寧ろ同情の念に堪へざるなり。山本伯が一介の武辨にして立憲政治に對する理想の缺乏せるは今更論ずるを待たず、斯の如き人によりて組織せられし内閣が、今日の如き政策を提げて起ち、陸海軍の官制改革と、文官任用令と、總て民論の希望する所を有耶無耶に附し去らんとするは、固より吾人の看過す可らざる事に屬す。然れども斯の如き内閣を出現せしめ、斯の如き政策を實行せしむる者は政友會なり、政友會なくんば山本内閣は成立せず、政友會なくんば山本内閣は斯の如き政策を主張する能はざるなり。是に於てか吾人は政友會最高幹部の不逞を惡むに急にして、山本伯其人を責むるに遑あらざるなり。否寧ろ天下の情勢を詳かにせずして、思はざる難局の山に乘り揚げたるを憐れまざる可らざるなり。

元來政界今日の忌むべき情勢を助長し、政府部内と地方政界等に士君子をして顰せしむべき幾多の弊害を作りたるは、桂系の官僚と政友會となり。吾人は桂公の老猾なるを惡むと同一の程度に於て、政友會の背德不信無主義無定見なるを責めざる可らざるなり。否憲法に於て議院の權能認められたる以上、桂系の官僚をして橫暴を極めしめたるの罪は、議院に絶對多數を占むる政友會が其の憲法上の權能を行はざるに歸せざる可らざるなり。然らば桂系の橫暴は政友會有るによりて甚だしかりしものと謂ふべく、政友會は實に其の地

方を攪亂せし罪の全部を負ふと同時に、中央政府が横暴を逞しくしたる罪の大部分を負ふものなり。山本伯は一介の武辨固より政界に爲すあるに足らず、今迄桂公と結托して國政を玩弄せし政友會は。再び此の武辨の人を擔ぎ來りて其私を逞うせんとするか。

世に傳へらるゝ所の如くば、山本伯は守錢奴なり、海軍の樞機を握り、船艦の製造、軍器の注文等によつて私腹を肥やすものなり。現に伯が伯の直系と認めらるゝ山内某と共に天下の富豪たる事實は爭ひ難き者なり。斯の如き人をして内閣の主班たらしめ、海軍の樞機と共に、國政の樞機を握らしむ、世人が之を目して天下の不祥事となすは當然なり。然れども吾人は山本伯に於て桂公に勝り、政友會ハ最高幹部に勝る一點を看取する者なり。其の錢を愛し利を愛する點に於て桂、後藤の一黨及び政友會の最高幹部なるものは山本伯と同罪なり。然れども少くとも山本伯は幾分か然諾の重んずべく、詐譎百出するの耻なるを知るもの丶如し。此點に就て吾人は山本伯を敬すること、桂系の二三子、政友會の最高幹部以上ならざるを得ざるなり。現に今回内閣組織の當初より、山本伯と政友會と取組むに就て、政友會の山本伯を欺きしとは、山本伯の政黨を蔑如せしより甚しかりしを蔽ふ能はざるなり。吾人は此の憲政の理想に乏しく、政界の實狀に疎き一介の武辨が、無耻厚顏なる政友會最高幹部の詐譎にかゝりて苦悶しつゝあるを憐れむ者なり。

吾人の確かめたる所によれば、二月十二日西園寺侯が原、松田兩氏と共に、山本伯に後繼内閣の組織を慫慂するや、三氏は實に山本伯が絕對無條件にて超然内閣を組織し、政友會より三大臣を人質に呈するを承諾せしものなり。斯の如き超然内閣などを希望する山本伯の時世後れなるは固よりなりと雖、嘘吐かぬとのみを以て武士の面目は足れりとする舊人物其者の心事を以てすれば、決して不都合を働きしに非ざるなり。原松田兩氏は現に嘘を吐かざるを以て唯一の看板となす山本伯と超然内閣組織を約束せし者なり。然るに老猾なる彼等は一方に於て國民黨と黨内硬派との反對の

氣勢熾んなるを看取するや、却て之を利用して閣臣の入閣を希望せり。斯の如き希望の現るゝは山本伯に於て寧ろ案外なりしならん、然れども乘りかゝりし船の是非もなく、山本伯は差支なき閣臣の入閣まで漕ぎつけたり。更に曰く官制改革、更に曰く文官任用令改正、是れ固より國民の希望なりと雖、政友會にして最初の約束を重んずるならば、此國論を防ぐ可き楯となつて山本伯の爲に盡すべき筈なり。若し昨の山本伯との約束の非なるを悟り。今の國民の輿望に副ふの是なるを知らば、速かに山本伯と提携を斷ちて内閣を破壞すべきなり。然るに政友會の爲す所は例によつて例の如く、硬派の面を被る愚劣なる幹部の走狗を使嗾して、幾分か山本伯に迫るの氣勢を作らしめ、一方は國論と妥協し、一方は山本伯と妥協して、是もなく非もなく、國家の大問題を有耶無耶に葬り去らんとす。吾人は山本伯が憲政の理想なきを侮ると共に、政友會が徒らに政權に接觸せんが爲に、斯の如き舊時代の一武辨を欺き至して、更に國民を愚弄するを惡む者なり。

政友會が山本伯と結ぶには、始より詐謀手段を用ひたり。山本伯は武辨、憲政の理想に至りては毫も之を胸裡に貯へずとするも、他の詐譎を憤る點に於て吾人と讓らざる者なり。是を以て伯は既に原松田兩氏に含むと甚しく、政友會大臣の意見は一として閣議に用ひらるゝなき實狀となれるは、聊かも之を怪むなきなり。然れども威嚴を持して正面より他を壓するの力は、固より山本伯は原、松田諸氏に勝らん、然れども詐謀手段を窮境に施して、彌つぎ〳〵に綱渡りをなすの一事に至りては山本伯は到底原松田二氏が多年の手錬に及ばざる者なり。今に山本伯の施政着々政友會の利益と衝突し、斯くて原松田二氏が政黨内に於ける地位の保ち難きに至らば、必ずや次の綱渡りに取掛るべきは疑を容れざるなり。桂公若し稍々胸襟を披きて、彼等を容るゝの大度量を示さば、彼等は必ずや、國民黨を賣りて山本伯を迎へしが如く、今度は山本伯を棄てゝ桂公に降るべし。而して二三領袖が大臣となりて、地方利益問題の取次だに勤むれば、之を以て足れりとなす腐敗

せる政友會員は、又々不平の聲を偽り立て、外間を衒ひ、甘んじて桂公の傭兵たるに至るべし。然らば吾人は山本伯が、天晴れ立憲の大宰相たるべかりし機會を逸して、政友會最高幹部の爲に短かく苦しき夢を見せられ、國民嘲笑の標的となりて倒れ去るべきを憐まざるを得ざるなり。若し夫れ政治の善惡は之を度外視し、單に海軍を擴張してコンミッションを着服せば、之を以て一切萬事足れりとなすが如きあらば、吾人は其愚劣を憐むと共に、其の國を賊するの罪を責めざる可らざるなり。（三月十三日稿）

「人形の家」とイブセンの作劇術

島村抱月

（一）

哲學と詩、眞實と夢とは人間に離れない二つの靈魂である。二つながら美しい靈魂となつて我等の生涯を彩つて行く。そこに藝術があり、そこに生命がある。

藝術は常に若き心に生まれ、道徳は常に老いたる心に生まれる。二つは永久の不調和である。

イブセンは一生涯老いたやうで若い人であつた。彼れの生活はくすんでゐた。併しながら彼れの生命は常に藝術の表白となつて若やいでゐた。やゝともすれば人を老いしめんとする哲學と眞實とが彼れの壯年期藝術の基調となつてゐると共に、晩年期の藝術は却つて詩に還り夢に還つた節奏を多く有してゐる。而して其の『ヘッダ、ガブレル』（一年おくれてはゐるが作風は前期のもの）『建築師』と、哲學と詩との基調の轉換期には、かのゴッセンサッスの戀愛事件が挿まつてゐる。六十二歳のイブセンと十八歳のヴヰンの小娘との

戀が、この老詩人の上に不思議な運命を齎らして漸く老いんとした彼れの心に、華やかな夢の世界をよみがへらせた。「建築師」以後の作を彩れるものは此の夢の世界である。彼れの死んだ年に、相手の婦人の請ひにより、イプセンの發見者ともいふべき批評家ブランデスが公けにした手紙によつて、この秘密が世に知れたのである。ゴッス氏が趣味ある筆でこの間の事を叙してゐるから、下に先づ之を譯出して見る。

（二）

千八百八十九年のシーズンに、ゴッセンサッスにゐた避暑客のうちに、十八になるヴヰンの少女でエミリー・バルダハ孃といふのがあつた。よく公園の隅のきまつた共同椅子に腰をかけてゐたが、或時かねて崇拜してゐるイプセンがそこを通ると、大膽に微笑を呈して見せた。すると不思議にもその微笑は酬ひられて、イプセンはいつか彼の女の傍に腰をかけてゐた。女の宿所もすぐ知れ、其の宿の人たちにもすぐ紹介せられるやうになつた。其の家の食堂には、窓腰掛があつて香ひの高い花の叢がこんもりと陰を投げてゐる、そこで果てしない會話が交へられた。此の挿話は不思議なことである。其の情は本當とも思へないほど譯の分からない、深く／＼自然な眞實なものであつた。九年の末に二人が別れたまで、恐らくこの老人と小娘とは、二人の關係がお互の上に何んな意味を持つてゐたか知らなかつたであらう。けれども若さは遂に復讐して勝利を得た。バルダハ孃は間もなくヴヰンから手紙をよこして、もうずつと靜平になりました、ずつと獨立して、とう／＼幸福な氣持にまでなれました、と書き送つた。之に反してイプセンは斷腸の思ひで、嬉しかつた時のことを思へば身も顫へるばかり、喜びと絶望とに心を掻き亂されてゐた。

彼れが自分の「王女」と呼んでゐたバルダハ孃のあれまでにこの老詩人を魅して了つたのは謎である。彼の女は決して媚を賣る婦人ではなかつたらしいが、其の危險な魅力を彼れの足元に投げつけ、其の精神の美を解き放つて彼れの上に注ぎかけた。イプセンはまた愼

み深く經驗を失はない範圍で、幸福をしみ〳〵と身に受けた。イプセンが、或る若いノルウエーの文學者にこの時の事を話した言葉に「おゝ、君、愛することはいつても出來るが、私は愛せられたのだから、仕合せもの〻中の仕合せものだ」と言つたさうである。餘程たつて後、彼れの力も段々衰へかけた七十の誕生のとき、バルダハ嬢へ送つた手紙には「ゴッセンサッスのあの夏は、私の全生涯の中て最も美しく、最も調和した部分てした。私は殆どあの時の事を考へないやうにしてゐるが、それても他の事は何も考へません。あゝ！ 永久に！」と書いた。彼の女の面影が一行々々の文字の間に香ひの如くつきまとつてゐる。『建築師』をば、さすがにイプセンも送つてやることを躊躇したが、女が寫眞を送つて來たのに『オランジアの王女』と自ら署名して、作中の少女ヒルダは自分の事てあると大膽にもきめて了つてゐるのを見て、感觸を害したといふことてある。も少し氣がきいてゐたら、そんな事は避くべきものてあると思つたからてもある。疑ひもなくバルダハ嬢は今では專ら自分の空想に媚びることに氣を取られてゐるに反して、イプセンは尚ほ全然愛に囚へられ魅せられてゐた、女に取つては面白半分てあることが、彼れは生死の問題てあつた。

（三）

晩年のイプセンも、戀愛にかけては斯やうに若く、斯やうに初心てある。是れは一面には彼れが比較的多く女を知らなかつたためとも見られるし、一面には老いて道德的氣分に支配せられかけてゐる好老爺が、孫よりも若い少女と戀をするのてあるから、自然あんな風に純粹な初心狀態に還つたのてあるとも見られる。

併しどちらにしても、此のときのイプセンの、女に對する感情は極めて純粹なものてある。而して彼れの女性觀が一代を通じて好意的、理想的、純粹的てあつたことも信じられる。たゞ一人『ヘッダ、ガブレル』のヘッダを除けば、イプセンが描いた女性はすべて女性の美しい方面が主になつてゐる。『ロスメルスホルム』のレベッカのやうな、物凄いところのある女てすら、

全體の上からはその美しい方面が主になつてゐる。ましてその他の女は、すべて善良な純粋な女性である。ノラも、アルヴヰング夫人も、エリーダも、ギーナもヒルダも、イレーネもみなさうである。

而してこのイブセンの美しい女性には、常に二種のタイプが混合したり、別々の人になつたりして存してゐる。一は思想の女、若しくは思慮分別の女で、一は感情の女、若しくは優しい溫情の女である。この兩型は、ひよつとすると、一方が新しい女で一方が舊い女といふ風にも見えるが、必ずしもさうは限らない。同じ思慮分別の女でも『人形の家』のリンデン夫人は新しい女とは言へないが、『幽靈』のアルヴヰング夫人や『海の夫人』のエリーダは、其の實行してゐる事柄こそ舊くとも、精神に於いてたしたに自覺以後の新しい女である。彼等の抱いてゐる煩悶は新しい女の煩悶である。之に反して『ヘッダ、ガブレル』のテヤ『鴨』のギーナ等は優しい溫情の女として同時に舊い女たることを免れない。舊くして美しい女である。

（四）

イブセンの女性の兩型を一つにして、而も之を前後半生づゝに明白に對照せしめたのは、言ふまでもなく『人形の家』のノラである。それと共に、『人形の家』はまたイブセンが社會劇に於いて女性を中心に取り扱つた最初のものであるから、言はゞ之が彼れの女性觀を築き上げた第一歩である。彼れの女性觀の手習を此の作でしたものと見てよい。イブセンが婦人問題をスケッチから、素描から、構圖から、書き上げて行つた順序が、『人形の家』で最もよく窺はれる。殊に近年出版せられた此の作の草稿から見て行くと、一層明かに其の徑路が認められる。

大體に於いてイブセンの社會劇が現實に立脚してゐることは否みがたいが、それと共に其の現實味には後の或作家などに比して、どこか大まかな鈍みを持つた所がある。是れが彼れの現實的作品としての弱みでもあり强みでもある。蓋し彼れは其の劇の場面や出來事や人物の言動を、部分々々には實地に見聞し經驗した

範圍から取り集めて來る。けれどもそれ等を一つに陶合する藥劑の中には多量の哲學と詩とが這入つてゐる。空想とは言はないが、現實以上のものが交じつてゐる。彼れの作の根本動機が單なる空想や即興であつたら、固より近代藝術として何等の價値もないものになる。イプセンが其の劇の動機として摑んでゐる所は、彼れみづからの生活若しくは之と最も密接の利害を有する社會から感得して來たものに相違ない。たゞ彼れは之を自分の詩若しくは哲學、就中哲學の液に浸して保存して置く。從つて再び之れを取り出して使用する場合には既に多量の哲學の臭ひを帶びてゐる。イプセンみづからのものになつてゐる。是れが彼れの作中の現實味をして、他の一層鋭角的な現實的作家に比して鈍角的ならしめる所以である。それと共に、彼れの作の強大な深奥な壓力はこの鈍角的な所から發して來る。稍大まかな併しながら決して架空でない所の底力を感ずるのがイプセンの作の特色であつて、此の點がやがてストリンドベルヒとも違ひ、ショーとも違ふ所以である。此等の作家には現實的鋭角はあるが、詩の光でつゝかれたやうな感味である。棒でなぐられたやうな感觸はイプセンにあると思ふ。彼れが『社會の柱』で書き『鴨』で書いたやうな男子の煩悶、たとへば表面生活と裏面生活との不一致から來る破綻の悲劇のやうなものは、多數の近代人がみな色々の形で經驗してゐる所である。イプセンも亦た必ず其の影を自分の生活に持つてゐたであらう。けれどもそれが果たして『社會の柱』や『鴨』にある程度までの經驗であつたか否かは疑はしい。世には自分の經驗以下のものを書く作家もある、經驗と一ぱい〳〵のところを書く作家もある、經驗以上を書く作家もある。イプセンはむしろ經驗以上を書いた。併し其の「以上」は空な思ひつきの「以上」ではない、練りに練つて造り上げた哲學である。こゝに彼れの力と特色とが存してゐた。其の練りに練つて行くところに彼れの作の發展があるのである。

一方から言へば、現實の外形はずん〳〵變化して行く。作中に捉へた現實味が此の方面に於いてずん〳〵

と舊くなり鈍くなつて行くことも忘れてはならない。いかに現實的な作者のものでも、年代を經れば、少しく鋭敏な觀察者の眼には鈍みを持つて來るのが見える。トルストイの小說でもイブセンの劇でも此の運命は免れない。また作者が人間である限り、到底造化と同じやうな無縫の天衣を仕立てることは出來ない。どこかに手細工の縫目が見える。イブセンに於いても、ストリンドベルヒに於いてもショーに於いても、この破綻はある。此等の理由が相寄つて、イブセン作の外形的現實に鈍みを持たせ、延いて其の内部生命たる作の根本動機にまで非現實の影を投げかけるのである。

要するにイブセンは以上の意味で現實と理想との奇なる結合の上に其の殿堂を築いたものと言つてよい。

（五）

婦人問題はイブセンが社會劇の初期の中心題目であると共に、之れを擴げて戀愛問題とすれば、それが個人の上、家の上、社會の上に及ぼす運命は、殆ど全部の彼れの作を支配する題目である。更に之れを擴げて單なる愛の問題とすれば、それが直に彼れの哲學の全部である。人生のすべての紛糾は、愛によつて解決せられた時が最も正しい解決である。

婦人問題を戀愛といふ廣いものに還さない前の特殊現象、たとへば結婚とか婦人の獨立とかいふ問題を主にした第一が『人形の家』である。この點から言へば、此の作こそ純粹な婦人問題の劇として、啻にイブセンの諸作のみならず、近世のすべての劇中に別格の地位を占むべきものである。

もつともイブセンみづからは、此の作を單なる婦人問題劇と呼ぶことを好まないであらう。また藝術の上からも、問題劇といへば數學の課題のやうなものと誤解せられるのはなさけない事である。眞の藝術が問題を提出するのは、そんな淺薄な意味ではない、むしろ深い藝術はすべて問題を提起すると言つてもよい。人生の結論は到底分かる筈が無い、しかも我々は知らず〳〵のあひだ永久に之れを探し求めてゐる。この求めに觸れるところに問題が生ずる。其の觸れる途の婦人

問題であると、宗教問題であると、戀愛問題であるとは問ふところでない。であるからイブセンみづからも、千八百九十八年五月ノルウェー女權同盟會の席上に於ける演說に「私は此の女權運動といふものが實際如何なるものであるかといふことすら、十分明白に承知してゐないのであります。私にはそれが一般人間の問題であると考へられるのです。私の著作をよくお讀み下すつたら、其の事はお分りにならうと思ひます。勿論女權問題も他のすべての問題と共に解決せられることは望ましいのでありますが、それが問題の全部でないのであります。私の仕事は人間の描寫にあつたのでございます。」と言つてゐる。「人間の描寫」、これがあらゆる意味に於いて、就中現實的藝術の最高題言である。

ではイブセンは全く問題といひ、哲學といひ、思想といふやうな事を離れて『人形の家』を書いたかといふと、決してさうでないことは明かである。彼れが此の作の素描として書いた「近代悲劇のおぼえ」と題するものを見るとそれがよく分かる（この文は嘗て島村民藏君が一二年前他の雜誌に獨譯から譯出したことがあるが、茲には英譯から譯出する）其の緖言と見るべきものに、當時作者の考へてゐた思想の骨組が次の如く書いてある。

（六）

凡そ精神上の法則に二種類ある、二種の良心である、一は男子に、而して他の全然異つた一は女子に。彼等は互に相理解しないで、實際生活では女子は男子の法則によつて判定せられる、さながら女でなくて男であるかの如く。

劇中の妻は如何なるものが正で如何なるものが邪かといふことの觀念を得ずして終る。一方には自然の感情、一方には權威といふ信念があつて、全然彼の女を方向に惑はしめる。

現在の社會では、女子は女子自らであることが出來ない。現在の社會は全然男性の社會であつて、其の法律は男子によつて編まれ、其の裁判は男性の見地から女性の行爲を判定する。

彼の女は僞署をした、そしてそれを誇りにしてゐる。夫に對する愛で、夫の命を救ふためにした事だからである。然るに此の夫は名譽といふ平凡な主義から法律の方に身かたをし、男性の眼てその問題を取扱ふ。

精神的葛藤、權威といふ信念に壓せられ惑はされて、彼の女は自分の子どもを育てる道德上の權利と能力との自信を失つて了ふ。苦悶。近世の社會の母は、或種の昆蟲のやうなものである。種の繁殖の義務を果たしさへすれば去つて死んで了ふ。生の愛、家庭の愛、夫子供及び家族の愛。所々に女らしい思想の破綻、心配と恐怖の突然の回歸。すべてを彼の女一人て堪へなくてはならない。破裂は必然不可避的に近づいて來る。絶望、葛藤、破壞。(クログスタッドは不名譽の行ひて裕になつたが、今やその富も助けにならないて、名譽を回復することが出來ない)

以上がイプセンみづから作つた思想の筋書てある。之れによつて彼れの婦人哲學も想像することが出來るし、婦人對社會、婦人對男子の問題も窺ふことが出來る。たゞそれが後の完成した作ほどに充實し展開してゐないだけてある。

(七)

此の緒言のあとに『人形の家』三幕の場面と仕組みとを略記し、そして本文三幕全部の草稿をつけてある。其の草稿と、完本として公にせられた劇とを比較して見ると、第一、第二幕すなはち自覺以前のノラが雲雀の如く栗鼠の如く跳ね廻つてゐる所から、僞署してこしらへた借金に苦しめられながら、尙夫に對する愛の爲にした事だから、夫も身を捨てゝ自分を救ふと言ふてあらう、そこが美しい人情と人情との奇蹟てある、と信じてゐるまでの所は、草稿と完成本との間に非常の相違がある。たゞ第三幕、ノラが自覺して以後の對決、すなはち全篇の眼目といふべき思想の所は、多少の字句の相違の外殆ど全く草稿のまゝてある。思ふに『人形の家』は、此の第三幕を目的にして、イプセンの胸中に先づこゝだけが明確に出來上つてから書かれた

ものか、それでなければ、青き〱して茲に達して、殆ど一字も動かすべからざる結論が彼れの婦人哲學の上に生じたのかである。

其の中で唯一ケ所此の劇の最重大の句として有名なノラの言葉が草稿にはまだ出て來ないて、刊行本にはじめて現はれてゐる。即ち夫ヘルマーが「――けれども幾ら愛する者の爲だつて、男が名譽を犧牲には供しない」といふのに對してノラが「それを何百萬といふ女は犧牲に供してゐます」といふのてある。古來何百萬の女の男に對する不平を此の一句て言ひ現はしたものと評せられる。その句が草稿を書くときにはまだイブセンの頭に浮ばなかつた。其の代りに極めて露骨な喧嘩口調て「私は死なうと覺悟してゐたのてす」といふ自分の前の言葉をついて「そしてどうなつたかといふと、禮を一つおつしやるぢやなし、情のある言葉一つかけるぢやなし、私を救つて下さる考か糸すぢほどもあるぢやなし。たゞ叱りつけて――父まで引合に出して嘲弄して――けちくさくびく〱して――たより無い者を殘酷に罵り立てゝゐらつしやる」と言はせてある。此の句と前の句とは、深さから言つても、品位から言つても、比較にならないほどの相違である。斯うしてイブセンの思想は劇を作ると共に段々練れて行つたのてある。

啻に思想のみてなく、『人形の家』を舞臺の上に活かす劇的技巧も、第一、第二幕に於いて草稿と完成本とは著しく違つてゐる。例へば第一幕の初め、ノラがパン菓子を隱して食つたり、ランクやクリスチナの口に頰ばらせてやつたりする邊は、ノラの性格の一面を説明すると共に　舞臺の上に豐富快適な調子を加へる効果があるが、草稿てはパン菓子などは全く用ひられてゐない。また第二幕の終りから第三幕に亘つて、此の劇の舞臺的色彩の中心となるものはタランテラ踊てあるが、之れが草稿てはまだ全く出てゐない。て、唯僅に『ペール、ギユント』の中の歌を歌ひピアノを彈ずる位の事があるばかり。若し『人形の家』からタランテラ踊又び之れに附隨する衣裳や音樂や振諸やを省いたら、

如何に落寞たるものであらう。是等はみな推敲のあひだに發展して行つた作劇術である。其の他人名の變更や小さい仕草の增減等は煩を厭うて茲に擧げない。

最後に『人形の家』全篇に通じた落想である所の「私はあなたの人形妻になりました。ちやうど父の家で人形子になつてゐたのと同じことです」といふ思想は、この作の草稿の出來るよりも十年ほど前の「青年同盟」の中に早く芽ざしてゐた。其の第三幕でゼルマが夫及び舅に對していふ言葉に「あゝ、なんて殘酷な目に私を遭はしたのでせう！　恥とも思はないで――あなたがたみんなで！　いつも貰ふのは私の役目で、與へるといふことはついぞなくて、私はまるで、あなたがたの間にまじつた貧民のやう、ついぞ私の所へ來て犧牲を出せとおつしやつた事がない、私は何をする力もないものになつてゐました。……どんなにか私はあなたの困難、あなたの心配を、唯一滴でも分けて欲しいと思つたでせう！　けれども私がそれを言ふと、あなたはたゞ笑つておのけなさる。私を人形のやうに裝はせて、ちやうどあなたが小供とお遊びなさるやうに私とお遊びなすつた。あゝ私はどんなにか、あなたの負擔を分けて貰ひたいとあせつたでせう！　どんなにか熱心に、人生の廣い、高い、盛んな方面に望をかけてゐたでせう！……」といふのが即ちそれである。批評家ブランデスが指摘して、別の大作を成すに足る思想だと言つたと傳へられるのは即ち此の一節である。イブセンもたしかに是れから出發したに違ひない。

附記　本號には「マーテルリンクと藝術及人生」を寄稿する筈であつたが、材料の都合で間に合はず、此の稿を以てそれに代へました、尙マーテルリンク論も成るべく急に書くつもりです

抱月生

全帝國に瀰れる政治的覺醒を善導して眞正なる立憲的國民を作るの方策如何

憲政改進上の一要務

須崎默堂

我憲政をして獨逸式ならしめ、帝室内閣の下に政黨を操縱して施治するは、明治の政權に與れる多數政治家の理想にして、之に對して民間政治家は盡く英國式立憲制を理想とし、内閣は國民多數の意志を基礎として組織すべきものなりと主張したり。憲法發布せられてより今日に至る二十三年は、此兩理想の對戰時期なりしが、一桂公の官僚城を出てゝ自から政黨の組織に着手したるは、即ち對戰の民間政治家の勝利に歸したるを想定して可なるべく、現内閣が官僚、朋黨の聯合に成る如きは、大戰闘の餘沫に過ぎずと解すべきものならん。

我國にては内閣制度の創設以後、盡く連帶責任を以て進退し、閣僚の一二が帝室に對する責任を以て單獨に處決したるは未だ前例なき所なり。時として内閣を改造したることあり、或は意見の分裂に由りて自から處決したる事はあるも、其は皆首相の意見に發し、或は首相の同意を經て行へるものにして、一も帝室の意向より來りたるものあるなし。此は山縣、伊藤等の先輩政治家が超然内閣を云々せし頃にも同樣にして、則ち我内閣制は始めより英國式に行はれ、獨逸式は一回も事實に發現したることなきなり。近年に至りては此制度益々發達し、内閣の組織は或一人の有力政治家に命ぜられ、其政治家は自から閣僚を撰擇し、親任式を經て内閣は成立するなり。從つて閣僚は首相と進退を共にし、内閣の更迭は首相の更迭と同一意味に解せらる。是れ純然たる英國式にして、其異なる所は英國に於ては主として政黨勢力の消長に由りて進退すれども、我國にては政黨の外に複雜の關係ある一事のみ。

此は當時の實權を握れる者が、盡く獨逸式を好めるに對し、異樣の發達とも見るべく、憲法學者は力を極めて大權說を敷衍し居る間に、事實は着々として英國式に進みつゝありたるなり。然る所以は我帝室と獨逸の帝室との間に絶大の差違あり、カイゼルは親から經國の大計を立てゝ之が實行を國務大臣に期待するに反し、天皇は國家の責を大臣に委任し

給ひ、單に裁可權を實行するに滿足せられたるに由れり。明治天皇が統を垂れ給ひたる所は、蓋し皇子皇孫之を百世に遵由せらるゝなるべく、我皇室の政治に對する關係は、ホーヘンツオルレルン家の政治に對する關係に異なる。是れ憲政を論ずる者の忘るべからざる要點にして、憲政發達の道筋の學說の左右し得る所にあらず、又利害の打算以外に不可抗的の事實あり。我內閣制が學說と有力政治家の期待とを排し、不知不識の間に英國式に進みつゝあるは其實證にして、桂公が進みて政黨の組織に着手したるは、不可抗力的事實の敎訓に屈從したるものと謂はざるべからず。

然らば我憲政は今後如何の變遷を經るにせよ、結局は英國式に進むに相違なく、政界權力の中樞は國會に歸するものたるは疑なし。是に於て我憲政を改良する一大要務は、國會を改良するより急なるは莫く、國會をして眞に國民の意向を代表せしむるは、愛國の志士が此際に於て努力すべき要道なり。現在存する如き國會をして政界權力の中樞たらしむるは、啻に國民の幸福を增進せざるのみか、或は國家の基礎を危うする虞なきを保し難かるべし。

英國式憲政とは議會政治の謂なり、議會政治とは議會を以て政界の最大勢力とするの謂なり。從つて議會の良否が直に國政の良否となるは、自明の理なり。專制の國に於て國民の明君賢相を欲すること、猶ほ大旱の雲霓を望むが如き所以は、君主の一顰一笑が直に國民の利害に關すればなり。議會政治の國に於ては、議會の一言一行は、盡く國民の利害に影響すべし。乃ち議會政治の國に於て、議會の高尙なる氣品を備へ、淸廉にして達識ならんを望むは、專制の國に於て明君賢相を渴望すると同樣ならざるべからず。然るに現狀に於ては、國會議員とは破廉恥なる人物の代名の如く、常に世人の嗤笑裡に在り。此の如くして議會の氣品あり達識あるを望むは不可能にして、其威信は全く地を拂ひ、議會政治の議會として望む所のものと天地懸隔す。

此は今日までの議會に對する待遇も其一原因を爲すものにして、官僚の徒は議會と政治を硏鑽するの意志なく、之を操縱して政治上には已れに盲從せしめんと擬したり。是に於て買收起り、好餌の誘惑來り、個人的利害を以て政治意見を沒却せしめたるもの、則ち議會墮落の大原因なり。此くて識見あり、恆產ある者は此徒に伍して世の嗤笑を受くるに忍びず、漸次に議會と關係を絕つに至りて、政治は破廉恥漢の跳梁に委し議會は益々墮落したり。若し此の如き議會に授くるに政界の最大權力を以てすれば、政治は墮落し、財政は紊亂し、紀綱は弛緩して、一國の危機或は此間に胚胎するも未だ知るべからず。故に余は制度の上には英國式憲政の氣運大に進めるを認むれども、國民には未だ之を實行するの準備なきを注意せざるを得ず。

渠成りて水至り、責任議會に歸して國會の面目一新せば、國家の幸慶之に過ぐるもの莫しと雖、誰か今日の議會が國家の責に堪ふるを信じ得んや。不幸にして議員の破廉恥は容易に改悛せず、單に議會の權力のみ增大せば、國家は恐るべき境遇に立つに至るべく、タイムス記者の所謂

日本は下り阪に向ふなるもの、此時に發現することなきを得る乎。勿論權力の增大は責任の觀念を生ずべく、議會改良の刺戟之れより可なるものはなかるべけれど、改良の効果未だ顯著ならざるに、國家は早く厄運に遭遇することなきや。是れ實にデリケートの問題にして、余は之を内にしては財政問題、之を外にしては國際關係の岌々乎たる國家の現狀に鑑みて、衷心の沖々を禁じ能はざるなり。議者は或は之を以て井底の痴蛙憂慮に失するものと爲すも知るべからざれど、未だ必らずしも樂觀すべからず。

此の如きは英國式憲政を行ふ上に於ての憂患にして、國家何の處に政黨政治を行ふに堪ふる政黨あるか。政黨の事を云へば必らず第一に政友會に指目すべけんも、政友會は主義もなく政見もなき一個の朋黨に過ぎず。國民黨の如き政友俱樂部の如き、其意氣は壯とするに足れとも、眇たる小黨のみ、前途多少發展の餘地ありとしても、國家の責に當るべきものにあらず。他に新政黨立憲同志會あれども、是れ未製品なり。桂公が如何なる鍛錬の手腕を振ふかは將來の見るべき所なれども、其材料は餘り頼もしきものにもあらざるなり。此の如き狀況の下に、假に英國式政黨政治を行はんとす、之を國民に其準備なしと云ふ、誰か之を不當なりと謂はん。而して此等よりも一層憂ふべきは、國民の政治思想甚だ乏しく、選擧の少しも信頼するに足らざる一事にして、憲政施行以來既に二十餘年を經、總選擧の行はれたるもの七八回の多きに及びたれども、未だ一回も選擧の結果として黨派勢力の消長を生じたる前例あらず。此間政界の動搖頗る大に、政策の變遷亦驚くべきものありたる事情を顧みれば、我國の選擧が如何に無意味なるかを知るに足るべし。此の如きは直角的に政黨政治の原則に撞着するものにして、政策の判斷を有せざる國民を基礎として政黨政治を行はんとするは、山に狩りして鯨を獲んとするが如し。

斯る事情より判斷すれば、我國に政黨政治は尙早なりとも結論することを得べし、或は少しく其期を緩にし、漸を以て進むを得策とするやも知れず。然れども余は此の如く結論するを好まず、氣運既に今日の如きに至れる以上は、如何なる困難を排しても之が實行の緒を開かざるべからずと思ふ。同時に上下官民共に事業の容易ならざるを知悉し、熟慮と勇斷とを以て之に臨むは最も必要の事にして、或は黨派心に囚はれ、或は感情に驅使せられて、輕卒の擧動を敢てする如きあらば、政黨政治は國家を傷害する所以なるを覺悟すべし。

國會の改良と云ふは、政黨の改良と云ふと略ぼ同一なり、政黨の改良は國民の政治的覺醒に待たざるべからず。既に立憲政治と云ふ以上は、如何なる制度を設けても、根本問題の國民の良否に歸するは自明の理なり。故に完全なる政黨政治の基礎は國民の教育に在りて、此點よりして我教育に改良を要する點多し。然れども此の如き長久の經綸は暫く別問題とし、即今の急務としては選擧權を擴張して、一方には金錢的候補運動を不可能ならしむると共に、他方には利害にのみ動かされざる少壯者に選擧權を與ふるを善しとす。此關係より云へば、中學校以上の卒業者

並に兵役義務を終へたる者に選擧權を與ふるは適當の案にして、余の賛成せんと欲する所なり。

此他にも手段は多かるべし、其等は余の茲に詳論することを企圖する所にあらず。余が本文に於て讀者の注意を喚起せんと欲するは、政黨政治實行の準備甚だ不完全にして、斯る狀態を以てしては、假令現制を破壞しても、善政を擧ぐるの望甚だ乏しき一點に在り。閥族打破は政黨改善の必然の結果として伴隨すべきも、政黨改善は閥族打破に直接して起ると必すべからず。之に代はる準備なくして現制を破壞する倒行逆施は急進國の常態として寬假すべく、明治維新の大業は則ち此の如くして遂行せられたるものにして、大正の維新も亦此の如く行はるゝを厭ふべからざれど、現制破壞は既に山が見へたり。今後に於て志士の大に努力すべきは、議會の改善、政黨の改善に在り、國民にして十分に之を成功せざれば、帝國の將來はケーオスなるべし、世人の明治の志士が國家に盡くせると同一の熱心を以て、事に之に從はんを希望す。

知識と共に國民の立憲的感情を養成すべし

法學博士　高田早苗

專制政治の國に於てすら、書を焚いて黔首を愚にするといふことは最も忌むべきことになつてをる。依らしむべし知らしむべからずと言ふことは、結局國家衰頽の原因と認められてをる次第である。況してや立憲政治に於て、敎へざるの民を率ゐて憲政の美果を收めんなどといふは、樹に緣つて魚を求むるが如き事である。故に苟くも立憲國に於て、政治敎育、憲政敎育、立憲思想の普及は一日も之を忽せにすることの出來ないものである。廣く國民をして憲政擁護の觀念を有たしむるに努め、君主に對する忠愛の念を盛にすると同時に、君主から賜つた憲法に對しての崇敬の心を厚くするやうに敎育をしてゆかねばならぬのである。

ところで其方法は何うかと言ふことになつて來ると、文部省あたりの從來の考、若しくば文部省の政府委員が議會などで答辯してゐる所に就いて見ると、それが爲めに所謂法制經濟といふ學科を中學の課程に置き以て法律的知識を普及せんとしてをるといふのであるが、法制經濟といふ課目は今日に到る迄、事實に於ては附隨意科であつて、實際に之を敎へてゐる學校は尠い。よしんば各中學に强制して、之を實際に敎ゆることにしたところで、それのみで憲政敎育が行屆くとか、健全なる政治思想が普及されるとかいふ所までは決して行くものではないのである。

何故といふに、立憲思想を普及させるといふには、憲法に對する法律的知識を與へるのみでは決して足れりとしない。是れに對する感情を養成することを力めねばならぬのである。言ふ迄もなく、英國の國民が世界に先立つて憲法政治を始めて以來、數百年の永きに亘つて、之を發達せしめ、成長せしめたと言ふのは、奈何なる事が根本に成つてゐるかと

云へば、憲法に對する感情が英國の民間に行き渡つてゐる爲めである。英國民が眞先以來憲政擁護の爲めに努力したといふことが溯つて國民的感情と成つてゐるからである。中學で法制經濟の講釋を教授した爲めに今日英國の憲法的國民が出來たわけでは決して無いのである。

謂ふ迄もなく、日本の憲法政治といふものは日尚淺い。之に關して國民の努力した事も亦極めて尠い。まだ今日までの所は、要するに附燒刄たるに過ぎないのである。斯る國民をして眞の立憲的國民たらしめるといふには、教育方面に於て大に盡す所無ければならぬ。啻に法制的知識を與へるといふ以外に、倫理的にも、歷史的にも、種々なる方面から此立憲的思想の涵養を力めて行つても、尙且足らざるを虞れるくらゐである。

又此の政治教育、立憲教育といふものは、之を中等教育以上の程度の學校に於て與ふれば宜しいといふ性質のものでは無い。元來參政の權は國民の階級を限つて與ふべき筈のものでは無い。今日に於て制限選擧の行はれてをるのは、已むを得ざる一時の便宜たるに過ぎない。或程度の財產を有つてをる者には與へ、夫れ以下の者には與へないといふが如きは、道理の上で辯護する事の出來ない制度である。故に日本に於ても、早晚普通選擧の行はれるやうになるといふことは瞭として火を覩るが如くである。然らば小學教育にも亦其程度相應の政治教育、立憲教育を施して行かねばならぬ。之を施して他日普通選擧を行ふ場合の準備を爲さねばならぬ。少くとも、何が故に憲法は尊いものであるか。何故に選擧權は貴重なものであるか。又選擧といふ事には奈何なる重大なる意義を含んでゐるものであるかといふ位の事は、之を敎へておかねばならぬ筈である。

而して其第一の手段としては、教育勅語を捧讀すると同じく、又戊申詔書を拜讀させると同じやうに、明治二十二年の紀元節に、先帝陛下から下し賜つた憲法發布の詔勅を、機會有る毎に捧讀させ、又機會ある毎に教育者が之を說明して、憲法の貴重なる所以、立憲政治の難有き所以を懇切に敎へて行くといふやうな事から、始めて行かなければならぬと思ふ。

吾輩の管理してゐる早稻田大學は、夙に憲政教育を以て任じてゐるわけであつて、專門教育を授けるといふ事と同時に、模範的國民の養成といふことを以て教育上の主義としてゐる。即早稻田學園は高等なる教育を施す所であるから、高等なる立憲的國民即模範的國民の養成を以て任じてゐるのであるが、程度の是れより低いところの學校では、勿論官公私立の區別無く、中學は中學、小學は小學、各其程度相應に種々の手段を以て立憲思想の普及と言ふことを圖るは、實に焦眉の急であると深く信ずるのである。

憲法發布の勅語を捧讀せしむべし

文學博士　井上哲次郎

昨年十二月以來の政變に伴うて實際社會に表れて來た處の現象を觀ると、確に政治的覺醒が一般に昂つて來たのは否定されぬのであります。然しながら夫れであるからとて直に立憲的思想が、社會の各方面に普及してをるとは素より言へないのであつて、さういふ事に對しては依然として前途遼遠と云ふの外無いのであります。成程政治的覺醒といふことは疑はれぬやうであるが、どうも是れに伴ふ活動に至つては、甚た立憲的國民の理想と矛盾した事が多いので遺憾に堪へない感じがするのであります。

何分日露戰爭以來、社會一般が生活難に襲はれて來たやうであるから是れが餘程政治的覺醒を促す原因と成つて來たやうに思はれます。無論それ計りては無いが、それが隨分原因として有力なるものと見るべきでありませう。其政治的覺醒と共に根底から打破する必要を感じて來たのは、何者か憲政の實現を阻害してをるものが蟠つてをるといふことであります。夫れを閥族に於て發見したと考へて討閥を絶叫し、屢々騷動を起したナ次第であらうと考へられる。

果して何れ程迄に閥族が憲政の實現を阻害してをるか、夫れは能く研究して明にすべきでありませう。唯能く事情を研究しないで、想像に依つて無謀の擧を企てることは識者の採らざる所である。又人がさう言ふからとて乘ずべき事では無い。餘程能く事の眞相を明にして、非なる事を非とし、是なる事を是として、その採るべき方針を確定することは必要であるが、能くも解らぬ事に附和雷同して、社會の秩序を亂り、法律を破ると言ふやうな事は却つて憲政の實現を妨げる所以であつて、さうなると矛盾も甚だしいことに成るのであります。

かの閥族打破を絶叫しながら、新聞社を襲ひ、交番を燒打し、電車を燒打するといふやうな事は、公明正大なる手段とは何うしても言へないのであります。新聞社を攻撃するには暴力に訴へないでも他の方法があらうと思はれる。又交番に至つては迷惑する者は市民一般である。近頃屢々火事をしてかすやうな事も、或は警察の不行屆から來るのかも知れないが、どうも交番を燒打したり、警察を攻撃したりして市内を無警察に陥れたからとて、只市民を困らせるだけで、其目的と矛盾した結果を來すの外無いのであります。電車燒打に至つては討閥と何の關係も無く見當違ひの暴擧といふの外ありません。憲政の實現といふ事は、何所までも權利の有る處には、正當の手段に依つて、進んで之を獲得する事を努力せねばならぬのであります。苟且にも暴力に依つて反對者を撲滅しやうといふことになると、反對者にとつても暴力に訴へても可いといふ事になり、憲政の主意と少しも一致する點を發見する事が出來ないのであります。何所までも理性に依つて進み、暴力に訴へてはならないので

あります。我日本國民は中々感情的で、怒り易い國民であるから、之を煽動し教唆して、理性に反したる暴動を働かしむべきではない。是れは指導者の地位に立つ者が餘程巧く梶を取る事を心懸けねばならぬ點であります。

眞正なる立憲的國民を作らうといふには、色々手段もあらうけれど、最も有效なる手段は、今回の議會に石橋氏之助氏に依つて建議せられた、かの立憲思想養成の主意を以て適切と考へるのであります。即今後は毎年二月十一日即憲法發布の日を以て、各學校に於て憲法發布の大典を紀念し、且憲政の實現を圖る爲めに憲法發布の勅語を捧讀せしめて、而して其主意の有る所を説明し、學生生徒に之を能く飲込ましめるやうにする事である。これまでは教育勅語、戊申詔書の此二つを捧讀して學生々徒に説き聽かしたものであるが、是れは素より今後もさうするは言ふ迄もないことであるが、これと共に憲法發布の勅語をも捧讀致させるといふ事は、廣く適當な手段方法であらうと考へる次第であります。

憲法發布の勅語は一向是れまで各學校で捧讀する事になつてをらぬ。尤も教育勅語は教育社會に賜つたものであつて、特に諸學校に關係がありますが、戊申詔書は國民一般に賜つたもので、それをも今日諸學校で捧讀し、又は教科書の中でも説明してゐるのであります、さういふ所を考へると、憲法發布の勅語も國民一般に大切なものでありますから、之を石橋氏の建議されたやうに、二月十一日といふ紀元節の佳節に於て説き聞かせるといふ事は、今後必ず實行すべき事と考へられます。そして教科書の中に於ても亦憲法の大意、其他憲政の實現に必要な事柄を説き示すといふは缺く可からざる事と思ひます。

是れまでも多少法制經濟といふ科目の中に於て説いた所もあらうが、甚だ一般に不充分のやうに思はれます。故に學校に於て其手段を採ることにすると、世の中に出て來る者は皆立憲思想を有つてをる事に成り、獨り政治界の者のみに止らず、あらゆる方面に活動する者が總てさういふ思想を有つてをるといふ事になれば、結果は是れ迄とは餘程違つて來るに相違ないと思はれるのであります。それならばと言つて、學校教育を單に法律上の權利義務のみでゆくといふやうな考ではゆかれない。教育といふ此廣い範圍に於ては道徳を教へねばならぬのであつて、道徳は一層廣いのであります。個人道徳といふやうなものは中々憲法の個條などで盡きるものではないのであります。憲法國法は國民としての骨質であつて、此骨質がシツカリ出來てゐないと國民たるの體格が具らぬといふとになるのであります。であるから憲法國法などは、國民の存續發展の上には非常に重大な關係を有つわけである。然し骨質だけではまだ物足らぬので、血肉といふものが無ければならぬのであります。道徳は即血肉の如きものである。骨質と血肉と相俟つて、國民の存續發展が期せられたのであります。教育勅語、戊申詔書其他學校に於て施す教育は、此血肉の養成の爲めに重要である。但し血肉有つても骨格が壞れて來ると又如何ともすること出來ない。兩者相俟たねばならぬ。此考へで今後の教育の方針を立つべきであらうと思ふのであります。

尙一歩進んで、さういふ立憲思想の教育上に必要なる事は言ふまでもないが、各學校の學生々徒が其政黨に入るやうなことは中々重大なことであらうと思ひます。學生生徒はまだ修養時代、學修時代であつて、其時代には修學を全うせればならぬのであつて、是れ將來世に出て、活動の準備をなすのであります。然るに其全からざる中に、或政黨に捲込まれるといふと、不完全なる素養を以て世に出ることになる。約り政黨熱に浮かされると、公平なる考を以て勉強することが出來なくなり、又其精神を政黨の爲めに攪亂するのみならず、其公平なる精神を失ふに至るのであります。物事が正しく精神に寫る爲めには、精神は鏡の如く靜でなくてはならぬ。若し荒波の爲めに動搖してをる湖のやうであると、正しく物の形などを寫すことが出來なくなるのである。政黨熱に浮かされてゐる徒は、公平に物事を判斷することを妨げられる。少くとも黨派心の爲めに攪亂される虞があります。故に學生々徒は政黨などに關らぬが可い。概ね政黨は何れも黨派的偏頗なもので、黨人は自ら正とするも、局外から見れば正しくないことが往々有るのであつて、學校の科目に宗敎を入れぬのも、宗派心の爲めに攪亂される事、それが害になるといふので、何宗派にも、各派の上に超然としてゐるのであります。是れ長所であらうと思ふ。短所もあるかも知れぬが、總てに超然としてをることは敎授の爲めに宜しい。故に學生々徒を政黨に捲込むのは人の子を賊ふ所以であると思ふのであります。

一時土佐には立志社といふものありて、青年を卷込んだが爲めに、青年は充分に發達することが出來ず、永い間土佐からは人才が出てならぬのであります。又福岡縣は玄洋社が卷込んだが爲め、これも永らく人才のあとを絕つてをる。今後は知らぬが、あの爲めに出て來べき人才を葬つて了つたやうに思はれるであります。

惟ふに眞に政治家として見識のある者は極めて少數であつて、大多數は犧牲に終つて了ふ。一將功成つて萬骨枯るといふことがあるが、此れに似た形跡は政治界にもあるのであります。故に學生々徒は政治界の渦卷の中に捲込まれるやうなことは避けなければならぬ。但しさうはいふものゝ憲法は何ういふものか、立憲政體とは何ういふものか、權利義務とは何ういふものか、一般の國民としては國家社會に何ういふやうにすべきであるか、斯ういふことは素より明かに知るを要する。又夫れのみならず、世の變遷推移に伴うて、絕えず起る政治界の動搖などに對しては冷淡であるべきではない。即能く其變動の原因結果又は其眞相などと言ふことは、知り得られるだけは知るを要するのでありきす。

簡單に言へば、即政治運動の渦卷には卷かれてはならないが、又全く政治を度外視すると言ふことは可くない思ふのであります。況して政治界の變動が急激となる時は、尙更注意を要するのである。そして本當に政治の刷新を斷行するは、實に青年の任務であらうと思ふ。將來の政治の刷新は、學生々徒が世に出て斷行すべきであつて、それより外に囑望すべき道は無いのである。此明治維新は老成の人も關係したが、最も活きのあつたのは、當時の青年にあつたのであります。吉田松蔭も三十歲

末滿の人であつた。橋本左内なども無論青年であつた。高杉東行も當時の青年であつた。随分青年が活動して、維新の大業を遣り遂げたかの如き形勢を見るのであります。夫れに學生々徒などが政治の事に少しも注意せぬことになると、妙な風になつて、淫猥な小說などに耽溺して、へナヘナした意氣地無しに成り、氣力精神を喪つて厭世自殺するやうになる虞がある。矢張り此國家の事、社會の事に冷淡であるべきではないのであります。政治の成行、政界の變動には絶えず注意して趨勢を察するといふのは、是れ活學問の一であります。

斯ういふ風に遣つてゆけば立憲的國民は養成されることと思ふ。今迄は努めてゐない。手段方法が備つてをらなかつた。政治と敎育は別々に無關係のやうであつた。それならばと言つて、政治と敎育とを混同しては不可んが、或意味に於ては、相互の關係を絶つべきではないのである。已に憲法を制定し、立憲を採用した以上は、其實を顯して當初の目的に副ふやうにせねばならぬことは言ふを俟たない。但し世には誤解者も有るやうで、憲政實現の結果餘程帝室を疎外するやうなもの、即實權を人民の方に取つて了つて根本的に國體を變更するやうな不祥な考を有つてゐる國民もあるではなからうか。若し斯る者が有つて之と一所に附和雷同するならば、忠良なる國民は甚だ迷惑を蒙る次第であります。

憲法の第一條に在る「大日本帝國は萬世一系の天皇之を統治す」の精神を何處までも實現するやうに力めてゆかなければ、世は暗黒となる虞あるからして、立憲的國民を養成するには先つ此精神を標榜して、そして不朽の大典を社會の隅々まで實行せしむるやうに努力すべきであると考へるのであります。

△曰く政治にあり

文部次官 福原鐐二郎

眞の立憲的國民を作る方法は、一言にして盡す。曰く政治に在りだと思ふ。今日小學校に於ても、或は修身に、或は歷史に、或は讀本に、憲法に關する知識は敎へてをるのである。敎育勅語は暗誦的に「國憲を重んじ國法に遵ひ」と言ひ、憲政に關する條項を敎へてゐることと今日決して尠くはないのである。中學では法制經濟を課して、憲政の大本に關する知識を與ふることに力めてゐる。又一方では普通一般の國民的道德の鼓吹を計つてゐる。私は今一層努力して、之を國民の上に充分効果を奏するやうにするより外に道が無いと思ふ。

然しながら、廣い意味の敎育とは、學校の中で學校敎員が授ける所のもののみを指すのではない。凡て社會の耳目に觸れる所のものは何等かの意味で、吾々に敎育を與ふるものである。吾々は日常あらゆる方面から此種の敎育を受けてゐる。であるから今日政治界の大舞臺で活動してゐる大小政治家の一言一行は、六千萬民衆の均しく見物する所で、其行動が國民の精神に及ぼす影響は甚だしいものがある。此等の政治家を崇拜してゐる青年が、其先輩の言行によりて受ける所の影響は又殊に著し

いものがある。殊に政治家の行動は華かで、其刺戟を受けることが多い。而して之を傳へる新聞の勢力といふものが亦偉大であつて、今日多數の若い者に與ふる政治的知識は、恐らく書物に依つて與へられるよりは分量が多いであらう。故に若し憲政上の功果がまだ多少缺點有りとするならば、此際教育者自らが反省して改善の道を講ずるは勿論であるが、社會の耳目と成り木鐸となつて、之を指導する先達たる者が、獨り其缺點を教室内の教授にのみ之を責めて、自らを省みないならば蓋し誤れるものと謂ふべきであらう。

△先づ議會よりして改良せよ

田川大吉郎

◎問題が大きいだけ、どつからでも議論が出來る、從つて、意見は必らず區々になるだらう、他人の意見とのみ謂はない、僕の意見ですら、右からも、左りからも、前からも、後ろからも、その立てる向々に依つて或は其趣が一様で無いやうに察せられるかも知れない、

◎先づ全帝國に漲れる政治的覺醒といはれるが、僕には、それからが疑問である、有體にいへば、僕は、昨秋以來の政治的動搖を、左程、意義のある政治的覺醒とは見て居ない、反つて、こんな様子では、前途いよいよ遠い、果して立憲濟美の域に漕ぎ着け得るか、どうかと疑つて居る位ゐ、僕は、我國民の、立憲政治に、全く矇昧無頓着なることを思ふて、竊に傷心に堪へない者である。

◎だが、立憲的國民を作るの策如何といへば、多少は考へねばならず、又考へたこともある、その中議會に關した事のみを申上げる、僕は、先づ、今の議場の作り方を換へたい、今の議場は、御承知の如く、議長席の前に、演壇があつて、演說する者は、議長を背にし、大臣席を背にし、議員に面して論議することに爲つて居る、僕は、此工合を頗る惡いと思ふ、議員は概して云へば同志である、たとへ、全然同志で無いにしても、同志が混じて居る、演說者は、その同志に向つては何も言ふことは無い、演說者は、只、議長に向ひ、若くは大臣に向つて言ひたいのだ、而して同志に對しては、その議長に向ひ、大臣に向つて言ふ所に聲援を與へて貰ひたいのだ、故に、同志の席は、演說者の後ろに在るべく、議長大臣の席は、演說者の前に在るべし、演說者と、大臣の席は、面と面と相向つて在るべし、これが人間の相對談する時の普通の態度である、而して我議場の作り方は之に反して居る。

◎僕は、此狀體を、今日の議院の演說が、眞率を缺ぎ、生氣を缺ぎ、研究を缺ぐ所以の一原因だと考へる、英國の議會は、略ぼ、僕の言ふ通りに出來て居る、僕はどうか、一日も早く、我が議場を、そのやうに換へたいと祈願する。

◎然し、それは末かも知れない、精神、氣合の領分に入つて言へば、僕は、當局者が、モツト、打ち明けて、何もかも說明するやうにしたいと思ふ、兎角、今日の當局者は、何も言はないやうにして居る、何も言は

ずに、出來るだけ口數を少くし、質問者を煙に捲くこと、即ち、質問者に一點の要領を得させぬことを說明の上乘と心得て居る、政府委員は、質問者の繰返しての說明を、質問者の不明愚痴に歸して冷笑して居るやうであるが、元來、政府としては、質問を受けることが旣に恥辱である、政府の仕事は、國民をして知らしむるのである、由らしむるので無い、國民の眼に、常に明々火を看るが如くに無くてはならぬ、さうなつて居れば質問は起らないのである、然るに質問を受ける、第一次の質問にして尙足らず、第二次の質問を受くるに至つて、質問者の不明よりも、政府者の恥辱が更に甚しいのである、而して今の政府者は、此恥辱の恥辱たる所以を解せずに笑つて居るやうである、不德義の至りである、

◎僕は、以上の主旨に基づき、每議會開くるの始めに、政府に、過去一年間の政府の爲したことと爲しつゝあることとの、その一切の工程を報告させたいと思ふ、即ち、その仕事の要領を、國民の前に公然披露させたいと思ふ、現在の仕組に於ては、政府はそれを決算の場合に爲して居るといふであらう、その目的に於て決算の審査を求めつゝありと謂ふであらう、然しながら、非、決算は必らずしもそんなもので無い、假に、そんなものであるとしても、國家が、その事業の工程、狀況を知るの要は、何も決算の期を待たねばならぬ事は無い、況や、所謂決算以外に、國民の知らねばならぬ、國情の趨勢、起伏、波瀾は極めて多いのである、僕は、必らず之を政府にさせたいと思ふ、然らば、國民の政治的感興が、今日よりも更に旺んに爲るに相違ないと思ふ、

◎但、今日に於ても、內務省は、內務省で國勢一班を發行し、文部省は文部省で、學事統計を發行し、遞信省は遞信省で、交通統計を發行して居る、僕は、それに飽き足らないといふ迄だ、それを、一層明白に、議會に演說すべしといふのだ、例へば、每期議會の始めに、總理大臣の演說中、國際の關係は例に依つて親密を加へたなどと、如何にも、枯淡無味では無いか、我國は微弱なりといへども、國際の關係は、そんな單調閑散では無い筈である、どうしても、政府者は、國民の前に更に委曲を盡さねばならぬ、

◎政府が此の如く說明に勉めるとして、議員は、その煩瑣な揚げ足取りを愼まねばならぬ、無禮なる厭味、皮肉、惡罵を愼まねばならぬ、要するに互に隔意なき國事の研究である、その誠實なる經綸の交換である、演說の上手下手は總て舍かねばならぬ、事の大體を捉へ、その眞趣意を捉へ、枝葉の言葉は、之れを不問に附せねばならぬ、而して議員は、總て事實に本づいたる議論をせねばならぬ、例へば尾崎君が、桂內閣不信任の決議案に際して、若し詔勅に間違ゐがあつたならばと述べたのは、時のはづみ、その場の勢ひ殆んど自然であつたとしても、あつたならばては、確に現實の問題で無い、現實の問題で無くては、議會の政治論では無い、從つて、それだけ力が乏しくなるのである、勿論、尾崎君のあの演說は有力であつたらう、そのために桂內閣は亡びたのであらう、力が乏しかつたとは謂へない筈である、けれども、あの議論に、理論の基礎を缺いて、幾何かその主張の眞意を離ぜらるゝ所以は、そのあつ

ならばに在る、あつたならばといふ未來の關係に在る、未來の事は明日あるかも知れないが、百年の後まで無いかも知れない、左すれば、議會の政治論としては、どうしても、强ゐ、確な現實の響きを發し兼ねる、現にその時そうであつた、有名なる尾崎君の演說然り、況や其他をや、議員は、どうしてもモット演說の資料を精練し、確乎たる事實の上に、その論議の基礎を置かればならぬ、そうなれば、國民は期せずして、議會の開閉に深き注意を拂ふやうに爲る、今日の議會政治の、未だ國民に注意されないのは、一つは議員自身が、あんまり自ら無頓着に過ぎて、議會が議會の用を爲して居ないからである、

◎のみならず、今日の議員は、議員の勤めを、議會開會中のたゞ三ケ月間の事とのみ心得て居る、西洋、例へば英國で言へば、議員は社交の中心である、例へば、某の地方に、公共的集會があるとする、その司會者は必らず議員である、某の慈善會があるとする、その世話人は必らず議員である、某の敎育會があるとする、某の青年會があるとする、その司會者、世話人、計畫者は必らず議員である、故に、議員たる者は、年から年中暇なしに、その地方の公事に心力を委ねて居る、これでこそ議員だ、人民の選良だ、而して日本の議員は然らず、國民の政治的思想の開發されざる所以である、我議員は、モット〳〵公事の爲に努めねばならぬ、

◎政黨內閣といふことも、自然に一言せねばならぬ、民衆の心を得た者が代議士に爲る、代議士の多數の心を得た者が大臣に爲る、これは、理かどうかは知らぬが、勢ひである、最も理に合したらしき勢ひである、之を必らず施行しなければならぬ、之を施行することと爲れば、國民の政治的雄心は、勃然として起るに相違ない、その原因か、結果か、國民は所謂立憲的國民に爲るに相違ない、我國をして立憲の大道を闊歩し、進歩せしむる捷徑は、確に政黨內閣の組織に在ることを疑はない、但、それには、前から言ふて來た通り、政治家の粗野、無責任なる言說、態度を、十分に戒愼せしめなければならぬ、

◎英國の政治家が、よく其の言責を重んずるといふ評判に就き、僕は、昨年の夏(?)一ケの適例を看出した、大佐シーレーが、陸軍次官より進んで大臣と爲つた、而して始めて議會に臨んだ時、種々の質問が出た、新しいこと、舊いこと、つまり陸軍に對して溜つて居た種々の問題に關し、一掃的質問が起つた、その際、保守黨の一議員が、シーレーが未だ少佐であつた十一年前の演說を援引し來つて、その責任を問ふた、シーレーは一寸當惑したけれど、之に對し、極めて詳細に答辯した、それに關しては、新聞紙上にも是非の議論があつた事である、僕は、その演說並に議論の可否をこゝに語るのでは無い、十一年前の事を問ふ者も問ふ者である、答へる者も答へる者である、政治家の一言句も發せざるの意が、こゝに明證さるゝでは無いか、之を日本の今日の狀に較べたら、どうだ殆んど話に爲らない程、おかしくもあり、腹立たしくもあり、又、耻かしさにも堪へない次第である、

◎英國の政治家が、此く言責を重んずるから、その議會に於る演說が、

いぢけて、窮屈で、無趣味であらうかと想像するのは、誤解の甚しき者である、最近に愛爾蘭自治案を、上院で否決する議事の時、曾て愛爾蘭に勤務したことのあるアシボーン卿は、愛爾蘭太守の位地に關して左の如く演説した、曰く、本法案の下に愛爾蘭太守たらんとするは難い哉、彼は時として盲目で、時としては聾耳で、而して屢々啞者で無くてはならぬ、彼はモーゼの如く柔和に、クロンウエルの如く嚴毅に、マキアベリーの如く鋭く、タレーランの如く外交的才幹なかるべからずと、洵に趣味の饒かな演説では無いか、肩の凝らない演説では無いか、而して意味の深い演説では無いか、彼等は此演説をする餘裕がある、此演説を聞く餘裕がある。英國の議會は、一面實務的なると共に、一面此綽々たる餘裕、氣韻があるのである、英國の議會は、決して所謂窮屈なる議會では無い、

○此樣な事を思ふにつけ、我議會の缺點弱所が知らるゝ、要するに彼も努めねばならぬ、我も努めねばならぬ、政府も努めねばならぬ、政黨も努めねばならぬ、議會が今日のやうなザマで、國民に不足を言ふては罰が當る、僕は我國民の立憲的資格を思ふにつけ、先づ、政府と議會との立憲的資格を思ふ者である、而してたゞ〳〵前途の太だ遼遠なることを思ふ者である、然しながら決して絶望はしない、駑馬百駕すれば又千里生涯倦まずに此途を辿るゝと期して居る者である。

△新教育！新道徳！新宗教！

文學博士　谷本富

○アモスの憲法論といふ名前は稍々年取りたる英學者、英法學者諸君は今猶ほ記憶せらるゝところであらう。其の中に憲法政治と謂ふ事は東洋人には到底駄目だらうと麗々と書いてある。自分は書生時代にこれを讀んで痛く憤慨した。併し不幸にして我が國憲法欽定發布以來約四分一世紀間の事跡は、此のアモスの言葉に裏書したやうに思はれて、竊に殘念千萬として居た。今や乾坤一轉大正の新天地となつて、劈頭第一に政治的覺醒の聲を聞くことを得たるは、大に嬉しい。然かもそれで以て實際果して急に眞正なる立憲的國民たるべき見込あるかどうかは尙ほ疑はしい樣だ。必ずや今後官民共に幾多の鍛錬を經ねばならぬ。

○近頃世の中何となく騷しく、人心頗る洶々たる有樣は、寧ろ識者をして國家の前途を深く憂慮せしむる所がありはせぬかと思はれる。之れを海外の近狀に徵して見ると、葡萄牙や墨其西や土耳其などの紛亂はどうだ、素より彼れと此れとは自ら別あること論を待たざる次第ながら、亂暴狼藉が昂ずると動すれば似た樣な事に成行きはすまいかと、杞憂に堪へざるものがないでもない。凡そ何事に就けても餘弊や惡影響は務めて戒めなければならぬもので、若し斯の際天下の耳目たり木鐸たるべき記者や論客にして、一時の醉興から、面白半分に煽動がましく教唆がまし

き雄舌を弄する者がありでもしては、隨分困つた事に成りはしまいかと思つて居る。眞の政治的覺醒なるものは恐らくそんな事では出來まい。暗示と自覺とは固より儼然別つ所がなくてはならぬ。由來モップ的騷擾は多くは自覺に由らずして暗示に由る發動である。此の事は自分が先年他に先んじて世に問ふたる『群衆心理の新研究』中に夙に明言して置いた。覺醒でなく酩醒であるならばそれは毎時寧ろ戒飭すべきである。

○アモスの言の當否は敢て言はぬ。併し總じて我が同胞國民の氣質は南歐ラテン民族のそれに似た所が多い。是れが英國流の上品な議院政治などを行ふにはむつかしい所で、倘ほ又英國では近時數々大仕掛の同盟罷工があつたけれども、モップ的騷擾はなく、旗幟鮮明、規律整然として居る。唯だ夫の女子參政權運動は少々亂暴の樣だが、それでも自分が曾て彼地で親しく目撃した示威運動などは頗る堂々たるもので、決してモップ的騷擾は見なかつた樣だ。

○我が同胞國民の氣質が兎角ラテン的たる上に、又多年國民教養の典型となつて居た漢籍、支那流の書物に悲憤慷慨な調子の頗る多いのも或は眞正なる立憲的國民の養成には寧ろ妨碍となりはすまいかと想ふ。今猶ほ動すれば他を目して輕々しく逆賊よ非國民よと罵詈し、斬れ！　滅れ！　葬れ！　などゝ血眼　文字を口にし筆にして恥らざるは、眞正なる立憲國民の苟くもすべき所ではあるまい。萬一こんなセンセーショナルの文字に動かさるゝ者あらば暗示に由る盲動で、眞正の自覺ではなからう。而して其の弊は往々私憤的となる恐れがある。

○これから考へると憚りながら明治政府の教育には隨分間違つた遣り口があつた樣に思はれる。畏くも　教育勅語には國憲を重んずべきことが屢々と仰せられてあるに拘らず小學校の國民教育に於ては兎角に此の立憲的國民の養成を蔑にしたる跡が掩はれない。眞成の權利尊重を教へずして、徒に時代後れの服從的義務を課して居た。これは修身や讀方の教科書を見ても直ぐ別かる。語を變じて云へば兎角西洋立憲自由國の新風を學ぶことを避けて、東洋專制君主國の古俗を保存することを力めた樣だ。宛も清國の老政治家が早く西洋の新學問を輸入しながら、修身倫理は獨り中華先聖の道を以て足れりとしたと同じ謬謬である。流石に新民國では其處に氣が附いて、或は孔教廢止を絶叫する者さへあるさうな。但し斯く言へばとて自分は固より決して儒教を悉く非難せんとする者ではない。否現に自分は嘗て『東亞之光』誌上に聖人とは民主的思想の最豐富なる者を謂ふと書いたこともある。拙著『孟子と新教育』は特に一讀を煩はしたい。例の儒教復古論等と同一視せられては困る。

○往年內閣御雇の顧問に獨逸人リヨウスレルといふがあつた。此の人が曾て『佛國革命論』といふ一小册子を著はして、其の中に暗に法律政治を學ぶ學校生徒などの增加するは危險だと書いてあつた樣に覺えて居る。それかあらぬか、明治政府は頻に實業教育を獎勵して、由つて以て又政治思想の興起を未萠に防がうとした樣だ。實業教育は固より大切であるが、併し政治思想も亦決して禁遏すべきものでない。否眞正の政治思想の啓發は實に國民をして立憲的たらしめ自治的たらしむるに最も大切

であらう。眞正の權利思想なく政治的社會的理想なく、而して立憲自治の美果を收めんとするは、到底空想たるを免かれない。個々慷慨悲憤を得意とするデマゴーグ輩の寸鐵殺人などいふ幼稚な場當り文句に暗示せられて盲動する憂があるのも、畢竟牢乎たる根柢がないからだ。

○されば自分は將來立派な立憲國民を作るには、先づ國民上下一般に民族氣質の弊蚕を脫却せんと心掛け、徒に舊史を談じて神經を興奮せず。德育なども勝負よりはフェイヤプレーを主眼とし學校に於ける修身倫理の講話も強ち古風故俗の卑屈服從を事とせず、寧ろ西洋特に英米の進步したる個人主義と社會生活との調和を模範とし、封建殺伐の言行を愼み、立憲自治の權利思想と平和々樂の幸福的氣象を培養すれば、庶幾くは多少の効あらんかと想つて居る。即ち從來の教育方針に根本的一大革新を施すを刻下の急務とするので、自分が不肖を顧みず夙に所謂新教育の倡導に力む所以も亦其處に在る。曲學阿世の倫理談や教育說やさては憲法論などは此の際斷然一掃すべきである。殷鑑遠からずエリオット博士の女子教育論をさへ故意に變造する利口者のある世だから油斷はならぬ。人皆眉に唾して眞に國を憂ふる者の言ふ所を聽かねばなるまい。

○これについて自分は一種の啓蒙的大學擴張運動の勃興せんことを切望する。夫の所謂ユニヴアルシチー、エキステンションはそれで、而して特に啓蒙的と謂ふは由つて以て眞正の立憲自治的思想を發揮したいからだ。通俗講談會などは名は美なれども、告朔の餼羊たるに過ぎない。夏期講習會などもどうか眞に啓蒙的のものにしたい。即ち新式の社會學や經濟學さては世界觀、人生觀などを主講とすべきでたとへ政治學を說くにしても從來官學に行はれた曲學流の憲法論や、一般教育界に瀰漫せる舊史回顧主義などは固より一刻も早く排斥すべきであらう。

○尙ほ又宗教の力も藉らなければならぬ。但し從來の佛教などは兎角に黴臭くて、何等生氣の無いには困る。是れで以て日新月步の國民を覺醒さすなどは思ひも寄らない樣だ。さればとて基督教徒の先驅と謂はるゝ人にも往々面白からざる風聞のあるは困る。神道は暫く措いて言はぬ。自分が曾て三教合同に批評を敢てしたのを觀ても分からう。新教育！新道德！新宗教！此の三者と相待つて始めて眞の憲政擁護も藩閥打破も出來やう。民を自由的にして而かも立憲自治を望むは難しと謂はざるべからず。從來の教育乃至政治向は一種の獨逸流で、民を悉く不自由的にした跡あるを免れない。今や折角國民の元氣未だ餒えざることを認めたれば、何卒善導したいものだ。拙著『新教育の主張と生命』などは參考して欲しい。

△答案六條

文學博士　建部遯吾

一　予は近時の時局に對する觀察に於いて記者足下と聊か所見を異に

するを遺憾とす。目下全帝國に瀰れるは政治的覺醒に非ずして實に野心的競進なり。元老が優詔を拜して何等恐懼惶恐の態なき、桂公が忽に宮中に入りて復た忽ち府中に出でたる、山本伯が何等の經綸を有せずと公言するの身を以て敢て政局の中樞を擔當せる、憲政擁護閥族打破の聲が諒闇新元の今日今更めき事更めきて聞ゆる、殊に政友會が長閥を排して薩閥を迎へ白晝公然警鐘を亂打して人騒がせを演じつゝ其混亂に乘して偃鼠河に飲ひ而も腹に滿つるに過ぎざる區々些々の小利慾に飽かむとするの陋態を演ぜる、孰れか諒闇の大故より繼いで至れる世局の變動に乘して野心的競進を逞うするものにあらざる。誰か敢て之を目して政治的覺醒といふ。眞個に政治的覺醒あるの士は、常に世界の大勢を達觀して邦家百世の長計を劃するに惟れ日も足らざる者ぞ。政治的覺醒ある國民とはかゝる識者の議論を傾聽し批評する毎に大なる興趣を以てする者ぞ。

二　然れども我國民も亦固より「眞正なる立憲的國民」にあらず。我國民平時の政治的作業は現下見る所の如き低級代議士の選出なり、我國民變時の政治的作業の一端は退院途上に於ける代議士の要擊なり、新聞社警察署の燒打なり、燒打に於ける怪我人の慰問なり。誰か斯かる國民を呼びて「眞正なる立憲的國民」といふ。

三　是故に現下の問題は記者足下の提出せる所と半は相同しうして半は相異なるものならざるへからず。即ち(一)全帝國に瀰れる野心的競進を撲滅し且(二)眞正なる立憲的國民を作るの方策如何、是なり。

四　全帝國、上と下、官僚と政黨、薩長、陸軍と海軍、代議士と操觚者、私學教師と官學教員、私學生徒と阿世政商、大凡そ是等全國に瀰れる野心的競進を撲滅し杜絕するの方策、亦他なし、唯眞正なる立憲的國民を作るに在るのみ夫れ唯眞正なる、健全なる立憲的國民なし、是を以て眞正なる、健全なる代議士なし、是を以て藩閥官僚亦以て、跋扈を保つへく、曲學阿官若くは阿民の學士論客皆其店を張るべく、輕薄賣文の操觚者亦其生存繁昌を遂ぐへく、私學書生に至るまで亦之を時として野次馬的に汚濁せる「先輩」の猿似を試むるを得べし。

五　是故に問題は再轉して更に簡單となる、即ち「眞正なる立憲的國民を作るの方策如何」、是なり、唯是なり。

六　眞正なる立憲的國民の養成は「經國の第一義」なり、予は曾て、又每に、詳に之を言ふ。予が當路に進言せる所の諸封事、文部省の爲に報告せる數篇の書冊、太陽教育諸雜誌に掲載せる論策、竝此に編著せざるなし。今其直に世人の注意を惹くに足るへきものを摘錄せむか、

(甲)　文部省の一旦廢止若くは改造。

(乙)　國家經濟財政の整理、殊に教育經濟の根本的整理。

(丙)　教員殊に小學教員中等教員養成の根本的改良。小學教員は現今の本科正教員の約二倍の年月を費して入念の養成を期し、中等教員は帝國大學卒業以上更に二年を費して入念の養成を率とす。

(丁)　教員殊に小學教員中等教員の待遇の根本的改良。教員俸給は一大中央金庫より支出するを原則とす。

(戊)　佛耶回僧及寺院の根本的整理及其資格の根本的改良。

（ヒ）新聞雜誌記者の資格待遇の根本的設定。中等敎員辯護士醫師以上に之を藝術にするを期す。

（寅）拜金主義を基礎とする現行選擧法の根本的改正。

――（以上三月十日記）――

△自治制度と陪審制度

法學博士　江木衷

日本では憲法は制定せられてをるが、其基礎となる制度がまだ出來てゐない。憲法政治に成つて、人民が立法權に參與し、財政を議する以前に、國民を敎養せねばならぬことは自治制度、陪審制度である。人民をして之に馴らして行かねば眞の憲法政治は實行出來ない。此二つの制度に依つて、國政は人民自らが行ふのであるといふことを深く知らしめなければならぬのである。

成程今日自治制度は設けられてあるけれども、其本分を誤つてをる。政友會内閣の時に、三大臣連署の郡制廢止、縣廢合論が提出されたが、是れは只眼の前に見える弊害であつて、實は自治制度の根本が誤つてをるのである。二十五年に拵へた自治制度を根本的に改良したならば、經費を今日の半分に、負擔を今日の三分の一に減ずることが出來るのである。二十年に出來た自治制は碁盤の目のやうなもので、下人民は發達する。それを碁盤の網の目に劃さうとするのは壓迫制度であつて、全く反對の現象、反對の結果を生ずることになるのである。私は數十年來此研究に從事してをるが、まだ實地の調査が出來ない。地方の習慣人情風俗に通しなければならないから半年や一年の机上の論では到底不可能である。私は他日を期して大に改革を圖らふと思ふ。

次に陪審制度であるが、これは地方の行政に關係しない所の國家事務であるから、却つて容易であらうと思ふ。人民が直接に裁判權に與るといふことは、政治は人民が自らするのであるといふ考が發ふに最も有力なものである。直接に國家の事務に當つて有罪無罪を決する陪審制度は立憲的思想の基礎を養成するに最も有効なる方法である。

此陪審制度は憲法制定の時に何故出來なかつたかといふに、それは治外法權であつたからである。時の元老院まで通過したが、伊藤公が土耳古の狀態に鑑みて、實行の覺束ないを察し、遂に廢するに至つたらしい。好い加減な口實の下に、命令的に案を變へて了つた。此時分佛蘭西學者は大低却けられて、ボアソナルドなども二年間の月給を遣つて解雇して了つた。陪審制度は到底治外法權とは兩立しないからである。

斯らいふ風で地方制度は壓迫、裁判制度が亦壓迫といふ風では道德的でないのは勿論、國民自ら國政に參與し自ら政治を行ふといふ考を養ふことが出來ない。從つて眞の立憲思想的が國民に起らない理由である。

△眞正なる立憲國民を作る方策

山本良吉

此る問題に對し意見を立てるものとしては、自分は甚だ不適當な一人だと思ふ。第一自分が果して「立憲的」であるかどうか疑はしい。自分は嘗て人に京都市の所得税附加税率を問はれ、答が出來なくて赤面した事がある。而し今も依然之を知らず、又知らうとも思はない。京都の樣な名譽職といふと大抵不名譽の何たるを知らぬ土地で、一人や二人騒いでも何の効もない、所得税率の高い低いを知つたつて何になるかといふ思想が頭の奥に潜んで居て、まじめに市政の改良などを考へるよりも、もつと有効な仕事の爲に盡したいといふ極めて非立憲的な思想で、自分は日々仕事をして居る。此る自分が國民に立憲的思想をどうする、かうするなどゝ申すのは甚だ恥かしい次第である。

特に自分の過去の生涯は教育界で過された。教育は常に永遠を目的とする。此機會をどう捕へるかといふよりも、絶えずもつと根本的な方法に注意する。從つて此際どうした方が最も有効かなどは、自分の頭に起りもせず、又眞實さる小細工で國家の大事が動くものだゝ考へてゐない。だから自分の答はどうしても當面の要求には合はず、從つて御尋の趣意には背く事と自ら危ぶむ。

立憲的思想とは政治的自覺の事であらう、言ひかへれば國家と自分との關係を明確に知る事に外なるまい。國家とか政治とか云ふが、國民が最も切實に感ずるのは經濟的方面である。もつと手取早くいへば自分の生活の方面である。國民に立憲的思想を與へるには、先づ現時の經濟的諸問題の眞相を知らせ、生活難の起つた原因、物價騰貴の原因を知らしむるのが必要である。誰が夫をするか。之は別によい方法はない、たゞ新聞雜誌の良心に一任するより外はないと思ふ。一體過般來の憲政擁護運動といふものは、八分通りは新聞紙の功である。新聞紙の力も、あれを見ると實に怖しいものである事がよく明る。たゞあの際新聞紙も今一層純潔な良心があつたらば、今少し其結果も有功に擧つたらうが、營利業の悲しさは、往々其勢力が及ばなくてもよい處まで及ぶのを防ぎ得なかつた跡が見える。憲政擁護とか立憲思想鼓吹などの重大事件に際しては一分も營利などいふ穢い動機を許さない、純に國民の爲を思ひ、國家の進歩の爲に盡さねばならぬ。各自が自分の營利とか損得とかを忘れ、一圖に國家社會の爲に計る、其處に眞の「立憲的」は存在する。眞の立憲的は聲高々と「立憲的」「立憲的」と叫ぶ所に存在するとは限らない。もし新聞雜誌に此良心があり、そして誠實に前述の事に力を用ひられるならば、急とは行かずとも、立憲思想の興起には必ず貢献し得る事と思ふ。

しかし問題の眞の解決は、此る一時的發作に俟つべきものではない。政治上の事はすべて社會上の現象の一方面に過ぎない。社會生活上の政

良さへ出來れば政治上の改良はすぐ出來る。從つて實際は教育の力を假るより外はない。學校で法制經濟の智識を少し深く入れたいとは久しい注文であり、今既に一部は實行てきて居る。併し其效力は實際に怪しいのみならず、反つて反對な有害な結果を生ぜぬとも限らない、大體明治時代の立法は國民性を無視し國民の歷史を忘れた遣方であつた。維新前後の狼狽の有樣が明に明治を通じて其額に燒印つけられた。國民性を忘れなくては學者でない、我國の歷史や事實や自家心胸に注意しては曲學阿世とといふものだと、白皙公に考へる專門家が陸續として居る。此る時代の法制經濟といふものを不注意に教へると、教育其物の目的と矛盾する事となる恐がある。困つた事ではあるが、事實は事實で是非もない。法制經濟の教授には非常な斟酌が要る。教育上立憲的思想を與へるには寧ろ他の方法の方が遙に有効である。夫は學校其物を立憲的にする事である。

學校の立憲的といふのは生徒をして或形式に於て學校の政治に干與せしめる事である、更に穩當に言へば、各生徒をして學校の構成要素の一である事を自覺せしめる事である。其方法は年齡程度て違はればならぬ兎に角或問題については生徒は自分の意見をきめて、夫を公然發表し、學校の裁決を仰ぐ事としたい。勿論生徒は年齡も若く、是非の判別も明ならぬものであるから、其意見其物も發表の方法も共に必ずしも當を得るわけには行くまい。當を得ぬ所が面白い所である。當を得ぬ事を申出す、故に學校は夫に對して適當の說明をして聽かせ生徒に熟考の機會を與へる。中には生徒の程度では、何程說明しても夫を解し兼れる事もあらう。夫は仕方がない、學校の精神的威嚴で以て生徒を服從さす。もし生徒の心中教師を敬して居るならば、此の場合には必ず解らぬのは自分の至らぬ故と思ひ、自ら諦めるに相違ない。威嚴で服從せしむるといふのは、權力で威壓する事では決してない。が、此く何程說明してもどうしても生徒の解り得ぬ事は、其實の深いに比して撰が左程多いものではない。誠實深切に說明すれば大抵は解るものである。又生徒の意見が存外に實際的であつて、何等學校の正當な方針と違はぬのみならず、反つて學校の理想を實行するに都合よい事も隨分あるに相違ない。時によつては學校の思違を生徒の意見で以て訂正し得る事もあらう。此る場合には生徒の意見を十分に採用し實行し、生徒をして學校の事業については學校と共同者であるとの意識を强めしめる。此る訓練の方針を取ると始めて生徒は自分を學校の主要な一部分と感じ、常に學校の利害と自分等のとを同一視する。かくて學校が立憲的になつたと言はれる。生徒は全然壓へつけるならば取扱は存外樂であるが、少し自由を與へ、そして夫を正徑を失はしめないのは、學校の方に於て可なりの力が要る、しかし其處に教育の面白味がある。

中學校の卒業生の中には隨分まづい意見を抱き、又其發表の方法に於て隨分間違つた事をして夫を敢て怪まぬものもある。夫は生徒自身の罪といふよりも寧ろ學校訓練の方針の罪と思はれる。實際的に意見を立てる機會も、又其意見を實行せられる機會もなかつた、從つて穩當切實な意見を立てる習慣はついて居ない、自分の責任を感じない。發表の機會

もない、從つて發表の時機、方法、體法に至つては何等考がない。夫等の實が意見を發表するには、小言の形式を取るか、罵詈の體裁となるか不平の語調を帶びるか、此三の外には出ない。いづれにして公明な仕方では無い。自分が眞に服さない事に服從せしめられた、從つて服從の美德を知らぬ。自由とか、權利とか、夢の樣な妄想に耽り、自分の自由にすべからざる事までも我儘勝手にせやうとする、是等がすべて非立憲の種子である。學者の中には學校で服從の道德のみを敎へろから立憲的にならぬなど說く人もあるが、夫は全く謬說である。立憲政體は各人に最大服從を要求する。法令に服從し、權威に服從し、良心に服從しなければ立憲政體は一日も成立し得ぬ。我國の憲政の甘く行かぬのは服從し過ぎるからではない、服從の美德を知らぬからである。間違つた權利思想が消化されずに國民の頭に入つたからである。今日の世の中では、眞の服從は學校で立憲的訓練法を取られるによつて始めて敎へられる。之國家は百年最も安全な立憲思想養成法である。

併し之だけでは尙不十分である。眞の立憲思想養成法は我國にあつては更に深い基礎の上に置かれねばならぬ。先づ人々自己存在の眞原因に考へ至り、何の功德により何の價値があれば自分が此世に存在し得るかを考へねばならぬ。人發狂でない以上は、誰も自分の功德で此世に生れ出て又存在するとは考へ得ない。自づから宇宙自然の大恩に考へ至り、恩寵の靈光に浴し、謝恩感恩の念油然として心胸を洗ふに至つて、一切義務は悉く謝恩の發動と氣が附く。かくて宇宙の存在物一として目的なきはなく、一として其目的を遂せしめるを要せぬものゝない事が明り、一物でも其所を得ぬはこれ我罪だと感じ、一切の物に對して出來るだけ其本然の性を發展せしめねばならぬ氣持になる。國家社會に對する義務始めて明瞭に心の中に解つて來る。此氣持を古は忠と稱へ、今は立憲思想と名をつける。眞の立憲思想は國民の心の奧の又奧に橫つて居る此宗敎心から出發せねばならぬ。眞に國を愛るつものは、かの上調子な法律權利思想に捕はれず、まづ歸つて自家心胸の聲に聽き、我國に特有な立憲思想の意味と深さとを能く味つて欲しい。(三、八)

△立憲的知識の缺乏を滿すにあり

伯爵 大隈重信

總て物は必要に依つて生ずる。必要は卽缺乏を意味する。世の中で最も必要なるものは食物である。腹が空いたら麥飯でも何でも構はず喰ふ。卽缺乏してをるが故に必要とするのである。

かの專制政治、階級制度の時代に在つては、人心が靡して、奴隷的に卑屈に成り、政治に關しては一切關與する所なかつたのである。

その時先づ第一に要求した所のものは何であるかといふに、封建的階級を廢するといふとであつた。貴族も無く武士も無く、貴賤の別を除い

て、萬民平等の實を擧ぐることであつた。次ぎに教育の平等を叫んで與へられ、誰でも一般に教育を受くることを得るやうに成つた。茲に於て萬民自由の權利を要求して、專制政治は廢せられ、地方の自治は許され裁判の獨立は保障され、憲法は制定せられて、茲に立憲的國家は作られたのである。萬民齊しく自治と自由とを得ることになつたのである。

昔は國家の政治に對して批評がましい事を言へば極刑に處せられたものだ。それが今日は斯くの如き法律は有害であるとか、斯くの如きは惡税であるとか言つて自由に批評することが出來る。國民の生命財産名譽は保護せられ、國民の要求は滿されたのである。

然るに今日尙警察は法律の範圍を冒して、國民の權利を蹂躙して怪まず。自治は少數の惡る賢い人が專有して、一般國民の意志を代表すべき議會も必ずしも之を代表せず。裁判、言論、出版の自由も保障されてあるに拘らず、事實は果して有功に之を働かしてゐるか何うか、國民の要求に依つて、上先帝の下賜された所を果して何れ程迄に働かしてをるか。國民の安寧幸福繁榮を圖る爲めに法律は制定せられたに拘らず、事實は實現されてゐない。國民に與へられた所のものを適當に行ふことを誤つてをる。

是れ何に原因するか。知識の缺乏に因るのである。共に協力して盡すといふ公の德義が缺けてをる爲めである。憲法的知識の缺乏、政治的道德觀念の缺乏、國民に對する立憲的教育の缺乏の爲めである。折角賜つた所の臣民の權利を充分に使用することの出來ないのは即ち此等の知識の缺乏に因するのである。

即ち今や國民は此等の知識に飢えてをるのである。此等の知識を與へさへすれば可いのである。由來日本の國民は教へられさへすれば、如何なる事をも成し遂ぐる能力を有する。思想界、藝術界、科學界、あらゆる方面に亘つて如何なる事をも成すことが出來るのである。であるから今日眞の立憲的國民を作る爲めには、彼等に此教育を與ふるのが最も急務である。それが爲めには師範教育、政治教育を必要とする。殊に三つ子の心百までと言つて、子供の時から教へ込まれた思想は容易に拔けるものではないから、一般國民に現日本の國家組織に當嵌めて忠君愛國の精神を說き、充分其教養を努むべきであるのである。

△固陋な考を棄てよ

慶應義塾々長　鎌田榮吉

眞の立憲的國民を作るには、今の儘の教育では不可ない。讀本などの中に於ても、其思想を養ふやうに心懸けなければならぬ。いづれは忠君愛國の道を教へるのであるが、唯是れまでのやうに古い考で遣つてては到底發達の見込が無い。固陋な考を棄てゝ、廣く深く忠君愛國の精神を養ふことに努めなければならぬ。そこで高等教育は勿論であるが、小學中學の中等教育以下の普通教育に於て、總て國民は憲法に依つて支配さ

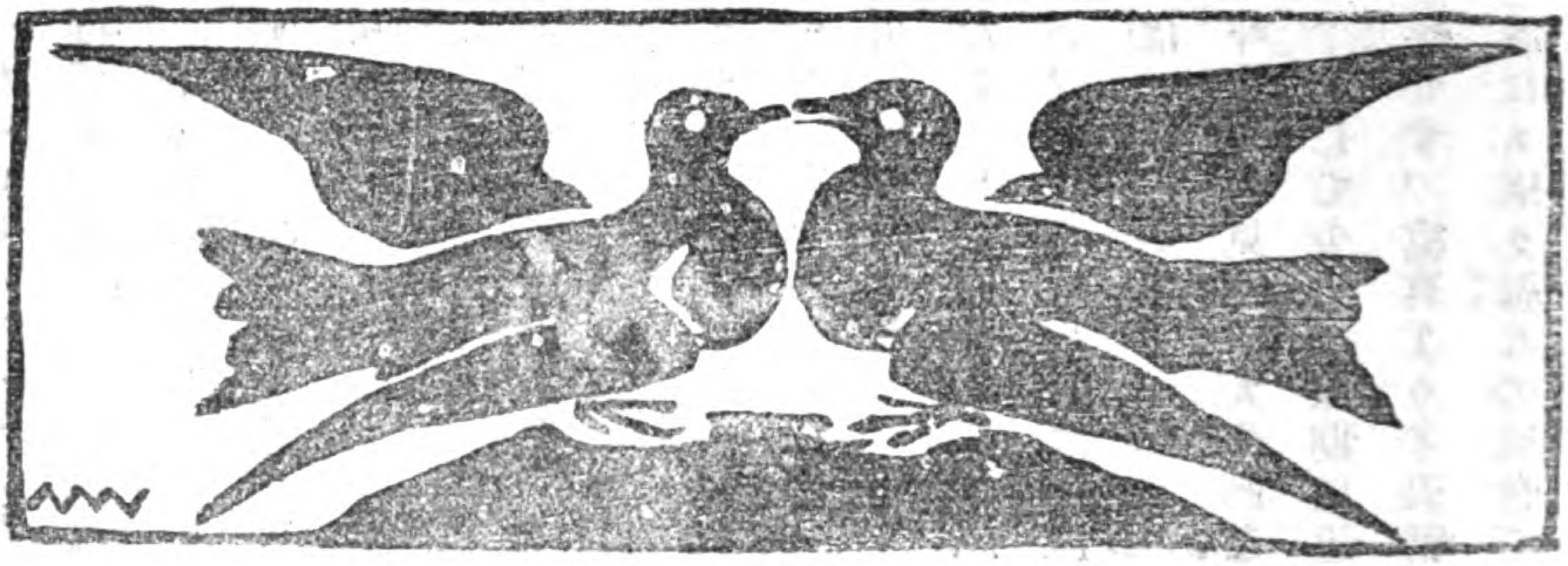
れ、憲法に對しては君主も國民も齊しく準由するといふ思想を養はなければならぬ。是れ即上は帝室の尊嚴を增し、下は國民の福利を增進する唯一の道である。即君に忠、國を愛するの所以である。

然しながら、是れは學校教育のみに依つて得られるものではない。一般の社會的教育をして此方面に發達せしめねばならぬ。例へば新聞雜誌演說等、筆を揃へ、口を揃へて之を唱導しなければならぬ。殊に帝國議會は國民全體を代表するものであるから、此處に於ける出來事は國民一般に充分知れ渡るやうにしなければならぬ。議會に於ける演說は啻に議員にのみ對つてするものではない。議員が聽いて居やうと聽いてゐないとを問はず、之を國民一般に對つて爲るのであるから、新聞又は官報に依つて國民に報じ、如何なる理由に基いて可否又は贊否を決したるかの事情を知らしめ、決して譯の解らぬ中に大切な議案を成立させたり或は葬つたりしてはならぬのである。

又學校であるが、官立私立を問はず、總て大學は根本的原理を研究する所であつて、特に憲法に就いて言ふと、憲法の性質、帝室と憲法及國民と憲法との關係等を眞面目に研究して、其成立の所以、其大關係ある所以を明にし之を學修せしめて正當なる解釋者を作り出さねばならぬのである。然るに曲學阿世の徒は、憲法を解釋するのではなく、之を曲解し、之を抹殺して憚らない。此くの如き輩を、國費を以て建てる大學から出すといふのには甚だ怪しからぬ次第であつて、之を國賊と呼んで差支ないのである。素より時勢は進歩し發展して來たから、何時までも斯かる輩の存在を容してはおかない。必ず近く絕滅せらるべきものであらうと思ふ。

又大學の任務は、決して教室内に限られた少數者にのみ教育すべきではない。大學内で研究した結果を廣く民間に普及せしむるを以て任務としなければならぬ。是れが爲めにはユニバーシチー・エキステンションを遣つて、學校といふ溫室の中で發育した木の種を廣く民間に蒔き散らさなければならぬ。延いて外國に對しても、我立憲政治の精神を知らしめるやうにすべきである。それから文學者も亦戀愛小說ばかりが文學ではないのであるから、立憲思想を養ふ主意からして小說も作り、文章も書くといふやうにするのが文學者の任務であらうと思ふ。立憲思想の養成は單に政治家や法律家のみの任務ではない。無味乾燥な政治論よりも、趣味津々たる文學の方が――高尚な點からも、通俗な點からも――之に貢獻する所は多いと思ふ。

惟ふに我々國民が誇る所の、皇統連綿として、帝室と國民との間常に疎隔するとなく、國民を愛撫し給ふこと赤子の如く、帝室を敬愛すること父母の如くであるのは、我日本は已に大昔から立憲的の關係になつてをるのであつて、西洋から輸入されたものでは決して無いのである。天皇は神聖にして侵すべからずといふ事が我邦ほど實現された所はない。随分中世には武門が跋扈して武斷專制は行はれたが、それでも政治の專制は權力と共に自ら責任をも以て、帝室の尊嚴は兎に角維持せられて來た。王朝時代、鎌倉時代及此文明の時代を通じて、帝室を尊敬することは少しも變らない。憲法の冒頭たる天皇は神聖にして侵すべからずといふことは、歷史的に確立せられた事實であつて、之を我邦以外には求められないのである。此國體をして益光輝を放たしめるといふのが、憲政有終の美を濟す所以であらうと信ずる。



女八人

松崎天民

「女八人」は、「板新道の一隅」、「最後の牛肉鍋」、「稲舟の四疊半」、「名代部屋の客」、「紫の風呂敷包」、「十萬圓の奥様」、「廊下の曲り角」、「荒物屋の二階」等、總て八篇より成る。中年の藝妓あり、流轉の妾あり凄艶の女將あり、煩悶の娼妓あり、老孃の女教師あり、悲慘の狂婦人あり、可憐の看護婦あり、妙齡の新女傑あり。何れも、明治三十六年より四十五年まで、大阪、京都、東京に於て、著者が新聞記者生活の十年間に接觸したる婦人にして、其の個々の上に潜める運命を讀まんとするのが、「女八人」の使命なり。小說に非ず、雜話に非ず、これを空想と事實の中間を辿つて觀たる、「人生探訪の報告書」と見るも宜く、また著者が「自叙傳」の一節と云ふも妨げず。要するに、くだらないものにして、又つまらないものなれども、著者はこれを公にするに就いて、多少の自信無きに非ず。——三、一二夜——

三、稲舟の四疊半

「上」蝶々に爲る前

今晩は御馳走様でした、鰻飯も美味かつたが、チエリー、ブランデーも美味かつた、久し振に若やいた氣持になつて不遠慮な事ばかり申上げ、何とも失禮でした、今夜の樣な好い心持になつた事は、最近二三年に無い事です、未だ一時間も二時間もお話いたしたかつたが、初めての事てはあり、あれても遠慮して

歸つたのてす、ほんとに今夜の樣な心持は、二十歳の心持てす、あれから家に歸つて、妻や子供の顏を見ても、心はあなたの方にのみ奪はれて居る、即ち机の前に座して、此手紙を書きます。

隨分不遠慮な男と思つたてせう、何も彼も露骨な事を云ふ男と思つたてせう、取止めの無い事ばかり云ふ男と思つたてせう、失敬な事を構はずに云ふ男と思つたてせう、相接しても少しも印象を殘さない男と思つたてせう、世間に有りふれた平凡極る一俗人と思つたてせう、何所やら落着きのない、何となくソワ〱した男と思つたてせう、何うにてもゴマかし得る男と思つたてせう、何うもさう思はれた樣な氣持がしてならない、あれても少しは遠慮的態度だつたのてす、笑つてはいけない——

今夜の會見て、大分あなたと云ふ方を知る事が出來た、そして少しも豫期に違はなかつたのが、頗る大に愉快てす、寫眞よりも表情の強い眼、皮膚の色、雨にも風にも堪え難なの風情てありながら、何うやら犯し難い所もある、熱い情味がある上に、氣を負つて立つて居る雄々しさも見えて、實に氣の勝つた方だと思つた、あなたの今日までの境遇が、あなたをして今の氣性にならしめた事は無論と思ふが、そんな人、そんな女に限つて、何所やら暗い陰影を見るものてすが、あなたには少しもそれが無い、無い樣に見える、少くとも私一人は左樣に信じたい、確信したい、何うてす、知己の言てせう、相語ること一度にして、能くあなたの一面を識つたてせう、成る程と感心なさい。

繭から脫け出た虫が、蝶となつて花々しく飛ぶのを見て居て下さい——それも判りました、料理屋結構、待合更に結構、女優大に結構、何ても宜い、花々しく大に遣るに限る、好きな人があるなら、大膽露骨の戀もすべし、美味美衣、出來得る限りの事をして、この生を終るのが、謂ふ所の眞の歡樂てはないか、私等に若し倫理があるなら、それは快樂派の倫理てある、私等に若し道德があるなら、それは享樂を主とした道德てある、俗世間の羈絆から脫出し超越した邊に、生の

眞價が味ひたい——なんて、大分理窟に落ちて來ましたが、今夜の心持は、これが嘘も僞も無い所である、これだけの事は友人の義務として、一應申上げて置きます、私は最う一生涯、あなたと云ふ人を記臆の外へ放り出す事が出來なくなつた、備忘錄の外へ打捨る事が出來なくなりました、あなたは御迷惑でも、仕方がありません。

あなたは或る意味に於て、昔から私の好きな人であつた、戀人(?)の一人であつた、今も然り、行末も同じであらうと思ふ。あなたの身境が、今後何う變遷しやうとも、私の心持は變るまいと思ふ、但し少しも邪念を交へぬ片思だから安心なさい、邪念の有無は、此の場合、問題になりませんが、私は勝手に一人で思ふ相手が何と思つて居やうが居まいが、それは問題にしたくない、唯私は、一人でさう思ふ心持の上に、私自らの若い血汐を湧かせて、一人で樂んで居たのである、何うぞお構ひなく、笑ふべし、憫むべし、罵るべし、嘲るべし。

雑報でも書く樣に、思ふ事が思ふ樣に書けました、新聞なら一段を超過した位の長さになつたから最うこれで止めます、あなたは此の手紙に對して、別に返事を書かうなど丶思つてはいけません、私は返事など、何でも宜い……

A君、俺の樣な男にでも、一度はこんな手紙を書くほどの、一種の氣持を起させた女である。

それは恰度、去年の五月二十九日、雨催いの生暖かい夕暮、芝××町にあつた女の家を訪ねて歸つた夜、興に乘じて書いた手紙である。其の前の日、女から自分で働いて生きて行く女と、一人身の年増女の氣分は、毛虫よりも嫌だと思ひながら、私もそろ〳〵境遇に支配された、厭な心持になりはしまいかと思ひます、けれども私は先を樂んで居ます、殼を破つて出た虫か蝶々になつて飛で行く先を、あなたも見て居らしやつて下さいましね。

それはさうと、あなたは割合に御氣が長い、御都合がお宜しければ、二十九日の夕方より御越し下さいませんか、六時前に宅に戻つて、御待ち申上げて居ますから、けれど雨でしたらおよし遊ばせ、翌る日も宅に居るつもりですから……

と云ふ手紙が來たので、俺は新橋際の青柳で、ちよいとした菓子折を買つて、それを手土産にして、久し振に女の家を訪ねた。

女は其の當時、未だ東京××新報の記者を勤めて居た。上村清子と云へば、君も知つて居やう。今の社會部に屬する婦人記者だもの、月給と云つた所で、四五十圓を出る樣な事は無い。それでも女の家は、二階建の五六室ある廣さで、家賃だつて十五六圓から、十七八圓は拂つて居さうに見える構へであつた。

昔氣質の氣丈夫らしい老母が一人と、十五六の色の白い娘が一人、他には五六歳の可愛らしい女の子が居るばかり。女ばかりの家には、普通の家と違つた、一種の空氣が漲つて居るものだが、清子の家にも、女の香は漲つて居た。俺は二階の六疊に通されて、何の裝飾もない乏しい室内を見渡しながら、此の女と俺と相知るに至つた因縁に就いて、過ぎた昔の事をいろ〳〵と思ひ起して見た。――

俺が上村清子を初めて見たのは、大阪は西横堀通りの黄昏であつた。今から九年前、清子も俺も大阪で、新聞記者を勤めて居た頃だから、女も若かつたが、俺もまだ二十歳代の血氣であつた。大阪の新聞界に、婦人記者が居ると云ふことさへ、世間の好奇心を惹いて居た時代だもの、若くて美しい上村清子の姿を、大阪××新報記者として見た俺等は、一種の反感と揶揄する樣な態度で、清子の一擧一動を遠くの方から眺めて居た。然し女の方は何時も取すまして居たから、大阪××新聞に俺が居る事などは、眼中に無かつたも知れない。無論、言葉など交した事も無かつた。

全體、女が新聞記者になるなどは、身の程知らずの生意氣な事である。女は人の女房になつて、飯を炊き洗濯をして、子を産み子を育て、亭主が安心して働き得

る様に、世帯を持つて行きさへすればそれで澤山だ。日本の新聞界、如何に其の人に乏しいとは云へ、まだまだ女なんかの痩腕を煩はさなくても宜い。それも男の才能を凌駕し得る天分、男の手腕に卓越し得る伎倆を有つて居る女なら、時と場合とに依つては、御相談にも乗りませうが、まア當分女の記者なんか、御免を蒙つた方が宜い。と斯う思つて、多少冷嘲の氣分を含んで、上村清子の新聞記者としての言動に注目して居た。

高等女學校も卒業して居ない、十七や八の彼の若さで、競爭の激しい新聞界、殊に最も骨の折れる社會部に婦人記者として出現した上村清子は、實に氣の毒な人である。流行記事を書いたり、家庭方面の訪問記事を書いて、其の日〳〵のお茶を濁して行くことが、何の「天職」であり、何の「無冠の帝王」であらう。あゝ彼の女も亦「新聞記者熱」に罹つた、憫れむべき一人だと思つて居る內、清子はどえらい一仕事をして、男の記者連中を驚嘆させた。

大阪××新報に、上村清子ありと云ふことを知らせたのは、實に其の以後の事である。

A君、其の一仕事と云ふのは、他でも無い。清子は十八九の世間知らず、人の前に出ても顏を紅め勝な齡でありながら、婦人記者としては、日本に新聞史あつて以來、未だ何人も試みなかつた「化込み」に從事して、先づ男の同業者と讀者との荒膽を奪つた。

俺なんかは、明治三十四年、初めて社會記者になつた時から、浮浪人に扮して「木賃宿」に泊り込んだり田舍者に化けて「賣春窟」に入込んだりして、盛に社會裏面の觀察記事を書いたものだが、續物に書いてこそ面白ければ、實際の仕事に從事する場合には、氣味も惡いし恐くもあるし、不安の氣のみ先に立つて、決して心持の好いものではない。當時の同僚Kなんかは、新俳優の抱へ車夫になつたり、料理屋の出前持に化けたり、二輪加師の弟子に扮したり、紡績の職工に落ちたりして、興味を中心とした面白い記事を書いたが、そ

れでも最初の間は怯々して、何うしても思ふ存分の仕事が出來ない、と云つて笑つて居た位である。

男の記者でも左樣だもの、若い女記者の上村清子が兵庫の割烹店常盤花壇に、女中と化けて入込んだ續物が、大阪新報に出初めた時には、俺等は實際眼を丸くして驚いた。婦人記者なんかは、警察事故の探訪が出來ないのみならず、少し複雜した事件になると、觀察も誤るし判斷にも苦んで、もの丶役に立つべくも無い。とたかを括つて居た時とて、俺等は當然自分の爲すべき仕事を、女記者に奪はれた樣な、輕い嫉妬的の氣持にもなつて、且つ驚き且つ口惜しがりもした。其の書き振りなんかは、平心坦々として、何の奇趣も無く、何の風情も無かつた樣だが、誇大で無く煽動的で無いだけに、反つてそれだけ憎い樣な氣持がした。記事の終に（婦人記者）とのみ、六號活字で匿名してあつたが、それが上村清子であるのは、第一回が出初めた其の日から、直ぐ仲間の大評判になつた。

清子は其の何十回かの記事を書き終へると、何時の間にか大阪に居なくなつた。カシミヤか何かの紫色の袴を長く穿いて、始終その社の社會部長と一所に歩いて居たが、何時とはなく其の姿を見受けない樣になつた。新聞記者が厭になつたから、最う廢めたんだらうと云ふ者もあれば、何等の新妻になるさうだと取沙汰する者もあつて、一時は清子の行方と云ふ事が、若い記者仲間の話題になつて居たが、清子は四五十日を經ると、又ハイカラに結つた白い顏を、突然大阪の町に現した。新聞記者も廢めず、嫁にも行かず、相變らず大阪××新報記者として、芝居の招待席などへ、其の姿を現す樣になつた。

それから間もなく大阪××新報には、一つの新しい續物が揭げられた。「中京の家庭」とか何とか題して、老いたる母と若くて美しい娘とが、櫛、簪、笄などの小間物箱を背負つて、名古屋市中の紳士紳商の家に出沒し、其の日〳〵に目擊した事柄を、自敍體に記述したものである。「常盤花壇」ほどにまとまつたものでは無いが、より大膽に、より露骨に、より世間的の材料

てあるだけに、同業者と讀者とは、益々其の行動の非凡なのに驚嘆した。云ふまでもなく、これも上村清子が、母人と共にした婦人記者の記錄破りてあつた。

新聞記者としての清子の才能は、此二つの記事に依つて十分に認められた。珍しい女だ、不思議な女だ、何んな經歷のある女だらう、と評判は前よりも一層高くなつた。「婦人記者も使ひ樣に依つては、良い材料を探知する事が出來る、一概に馬鹿にしたものでも無い」、と記者仲間で評判すれば、讀者の方でも「女記者やかて、馬鹿に出來まへんな」と、寄ると集ると取沙汰する樣になつた。

これだけの仕事を大阪の新聞史に印して、清子は間もなく東京へ上つた。清子が上京する二三ヶ月前に、俺も大阪の××新聞を辭して、十年振に懷しい東京の土を踏んだ。――

A君、清子の二階で、俺がこんな思ひ出に耽つて居る時、階下では幼い娘のむづかる聲や、近所の格子戸を開閉する音が聞えて居たが、やがて微な衣摺の氣配がして、白い清子の顏が現れた。

實を云ふと、俺が清子と差向ひになつて、話をするのは、これが三回目である。其の最初は四十二年の夏も早や朝夕涼しい頃、俺の從事して居る新聞に、「東京の女」を書いて居た時で、其の二度目は、華族會館の二階の大廣間で、戊申婦人倶樂部の發會式があつた時であつた。二度目の時は、二人とも人目を避けるといふ調子で、「其の後は御無沙汰を……」、「いゝえ、妾こそ……」位の挨拶に過ぎなかつたが、最初訪問した時には、新聞の材料にする積であつたから、清子の訪問記者としての經歷などを、大分聞いた樣に覺えて居る。

斯う云ふ風に、二人は勤めて居る新聞社も異るし、受持の方面も違つて居たので、訪問先とか出張先とかで、一所になる樣な事は絕えて無かつた。唯、新聞記者としてお互に存在して居ると云ふ事だけを、お互の記憶の何所かに藏つて置いただけの事で、二人は同業

者としての、友人としても、路傍の人に等しい間柄を以て、其の日まで過して來た。清子だつて自負心の强い女だから、俺なんかは昔から眼中に無かつたかも知れないが、俺も東京に來てからの後の訪問記者としての清子などは殆ど其の存在をすら認めずして、相逢ふ三度目の夜まで過して居たのである。

　そんなに打絶えて居た間柄の俺が、何うして俄に訪ねる樣になつたかと云ふと、それには女の方から與へた機會があつた。他でも無いが、最初清子を訪問した時に、「東京の女」に出すのだからと云つて、清子が名古屋で女行商人に化けた時、記念のため撮影した寫眞を一枚借りて來た儘、他用に紛れて返却せずに居た。四年前の事ではあり、俺も忘れて居たし、清子も忘れて居たと見えるが、それは何う思ひ出したものか、五月十日附の手紙と共に、一枚の新しい寫眞を送つて來た。其の手紙は薄墨の跡美しく、

　拜啓、その後は久々御めもじも不仕候へども、相變らず御機嫌よく御居らせの事とぞんじ上居り候、さてまた眞に昔の事を申上げ恐れ入り候へども、いづぞや御手元にさし上參らせ候わたくしの寫眞、もし御取すてもなく御持ち下被候はゞ、是非御返し與へ被下たく特に〳〵御願ひ申上候

一番新しき寫眞御笑草までに、身がわりとして同封致し置き申候、たゞし御宅に御歸り遊ばされて後御開封被下たく、あなた樣を信じ申上げ、くれ〴〵も御願申上參らせ候、此頃は××樣のおとなりに住ひ居り申候へば、御詣りの折ちと御立寄り被下たくぞんじ候、かしく

と、書いてあつた。一年前の事ではあるが、恰度「淪落の女」を書いて、戀を戀する氣持になつて居た時だから、俺は此の手紙を讀み、其の新しい寫眞を見ると俄に清子が戀しくなつて、馬鹿な事だが人知れず頰を紅めた。行商人風の方は意氣な姉さん姿で、黑襟の掛つた縞物の袷衣を着て、髮を櫛卷にして居たが、新しい方の寫眞は、兩鬢を上へキユッと引結めた、類の稀なハイカラ髮で、乳の邊まで張手な模樣を染出した縞

緬物の袷衣を着て居る。それに恐しくヒステリー的の表情て、可愛氣も無いし色氣も無い、貴婦人化した態度が、何となく厭てあつた。俺は前の寫眞は今一寸見當らないが、捜して其の内に御返却すると云ふ事や、其の新しい寫眞に對する感想などを、俺一流の無遠慮に露骨に書いて、清子の許へ返書した。無論、久しくお目にかゝらないが、お變りは無いか、一度逢ひたいなア位の事は書き添えたと思ふ。

清子からは、其の月の二十四日附て、また次の樣な罫紙に書いた手紙が來た。

拜復、先達は御忙しい所をわざ〳〵の御手紙、ひとしほ有がたく拜見いたしました
寫眞の事は決してさう御案じ下されずとも、けれどももしか紙屑籠の中にても、身投げいたしたことゝ決まりましたら、どうしてお怨をはらさうかと、夜も寢ずに考へて居ります、女の一念てすから、あらかじめ御油斷なきやう御斷り申上て置きます
ことに折角さし上げた寫眞に對し、お婆さんになつたとはまことに御挨拶さまの至り、尤もあゝお書きになつた後て、少し氣の毒に思召したものやら、僕も老人になつたとの御言葉、たゞしこれは前言に對する御義理合と御心中御察し申上げました
ても折角の御好意なれば、一寸此の處老人同想と相成り、幸ひ先祖の國元より今年の新茶が參りましたから、近日中宅にて粗茶さし上げたく存じます、來週早々御社よりの御かえり途、御來訪御待ち申上げて居ります、宅は××樣の裏門の手前の横町を、右に折れたる細き道の左り手の家にて、無地の四角な燈火のついた家て御座います

A君、女を愛し得る資格も無ければ、女に愛せらるゝ資格も無い俺だけれど、こんな手紙を讀では、何となく心をそゝられる樣て、俺は最うジッとして居る事が出來なくなつた。變な奴だと笑ふかも知れないが、俺は一大勇猛心を起して、柄に無い手土産なんか買つ

て、三度目に清子の家を訪ねたのである。
其の日も清子は、新しい寫眞と同じ髮に結つて、大柄の派手な模樣のある縮緬物を着て居た。これと云ふ用事が無いのに、親しくも無い女の許を訪ねたのだから、多年訪問に馴れて居る俺も、少しは極りが惡かつた。敷島ばかりポカ〳〵吹いて居ると、
「何うも暫く、能くおいて下さいました」
と、女は案外平氣なものである。俺は
「種々お手紙を、何だか變てすなア」
と、考へて見ると、何が變だか判らない樣な事を云つて、先づ額の汗を拭いた。
茶が出て、菓子が出て、チエリー、ブランデーが出て、鰻飯が出て、それを二人て飲んだり食つたりする間、二人は絶えず世間話をした。新聞界の事、婦人雜誌の事、文壇の事、新女優の事、料理屋の事、待合の事、流行界の事などを、二人は相應の興味を以て、語りもし聞きもした。殊に新女優の話と、新聞界の問題とは、二人の間に共通した興味を以て、あれからこれへと話に花が咲き實が入つた。俺は
「社會記者なんて、何時までも爲るもんぢやありませんね。多少の虛名は知られても、何時までも雜兵で、理想も主義もあつた譯のものぢやない。それに五年經つても、十年經つても、出來るものは子供と借金ばかりて、考へて見れば實につまらない」
と云ふと、清子は案外なと云ふ調子で、
「へえ、驚きましたわね、貴郞がそんなことと仰つて……。貴所は新聞記者、殊に社會記者を生涯の事業として、目的通りの地位に居らッしやるのてせう。妾なんか女てすもの、考へなくちやなりませんけれど……、そんな心細いことと仰つちや厭てすね」
と云つて、甘い酒を注いてくれた。
「繭を破つて出た毛虫が、蝶々になつて飛んで行く先……、とありましたが、あなたも新聞記者は厭になつたと見えますね。何んな事を爲るんてす、××新報を退社して、え、新女優？料理店？待合？宿屋？何うせ爲るんなら、思ひ切つた事が面白い」

と、俺は斯う云つて、相手の顔色を見た。

「女優も面白いでせうが、何だか厭ですね、厭な様に思つてよ。それよりか料理店か待合の女將になつて思ふ存分に切廻して見たら、どんなに面白いでせう。妾、何でも宜い華やかな一生を送りたい。人の妻なんかになつて、子供を生むなんて、考へて見れば、おう厭、厭な事ではありませんか」

と、多少はチエリー、ブランの勢もあつたらうが、斯う云つた淸子の眼は、何だか異様にかゞやいて居た。俺は最う談話の材料も盡きたので、快い氣持になつて、フラ〳〵と外へ出た。實は最少し居たかつたのかも知れないが、出る時には何うした譯か、逃げる様にして、碌に挨拶などもしなかつたらしい。

其の夜、宅に歸つてから、妻や子の寢て居る枕頭で、書いて送つたのが彼の長い手紙である。

A君、月が變つて六月七日になると、また淸子から六日附で一通の手紙が來た。俺が久し振に訪問して歸つた其の夜、妻子の枕頭で書いた彼の長い手紙に對する返書で、今度は一枚の原稿紙に、細い美しい筆跡で書いてあるのが、何だか心憎い様な氣持がした。

私の心は今どういふのか、自分にも分りません、けれども貴郎のあの御手紙を讀んで、私はどうしてもほゝえまずには居られませんでした

何の微笑みか、恐らくはあなたにも分らないでせう、私のこの心持がいつまでも〳〵貴郎に分らないで過ぎてしまうことを私は喜びもし祈つても居ります。そして貴郎との御附合は、いろ〳〵な世間の人に知られないで居りたいと思ひます

戀ではないけれども、私と貴郎はさういふ妙な仲になる運命を持つて居るのでせう――

新聞記者としての淸子と、俺との手紙の往復は、これで大團圓を告げた譯である。五月十日に初つて、六月六日に終つた二人の文通は、其の間に一回の相見る機會を得ただけに、割合に急速力に進んで居る。俺の

彼の手紙を見て、清子が薄氣味惡く微笑むだ様に、俺も女の此の手紙を見ては、何とも云へぬ一種の微笑を、禁ずることが出來なかつた。

これて手紙の交際が終ると共に、新聞記者としての清子と相語る舞臺も、大詰の幕を閉めて了つた。文通四五回、相逢ふこと僅に三回に過ぎないのに、俺は何うして斯んな心持になつたのだらう。「お前は清子に戀したのか」と聞かれるなら、「俺は戀したのでは無い」と答へ得るが、「お前は清子を何とも思つて居ないとか」と問はれるなら、「いや何とも思つて居ないことは無い」と云はねばならぬ様な、戀人とも友人ともつかぬ心持になつたのは、何う云ふ譯てあらう。

東京に來てからの清子は、××新報の婦人記者としても、僅に狹い一部分に其の存在を認められたのみて、餘り大きな働きもせねば、餘り世間にも顏を出さなかつた。從つて彼が記者としての存在と否とは、殆ど東京の新聞界と沒交渉て、清子一人の身境が何う變轉しやうと、そんな事は少しも問題にならなんだ。彼の所謂「繭を破つて出た毛蟲が、蝶々に爲つて飛んて行く先……」を、一種の興味と好奇心と、或る意味の同情を以て見て居た者も、十指に餘るほどは無かつたらう。清子のために、あんな手紙を書いた俺てさへ、見て居る筈の其の「行末」を、忘れる白晝が多かつた。

白晝の電車中ては忘れても、夏の初の朝な夕な、さすがに思ひ起すことはあつた。——自ら許す東洋一の××新報に、婦人記者たる清子の境涯は、文筆に志望ある齡若い女達の、胸に波打たせて羨み仰ぐ所てある。嫁して人の妻となるを弱しと爲し、進んて新女優と爲るを淺間しと思ひ、落ちて藝妓と爲るを墮落と斷じ、入つて貯金局に事務員となるを腑甲斐無しとする輩は、何んなに婦人記者たる清子の境遇に憧憬れたてあらう。婦人記者たらんと志望する女性は、日本女子大學にもあつた、女子英學塾にもあつた、女子學院にもあつた、佛英和女學校にもあつた。婦人の自覺、女子の覺醒、婦人開放、女子參政權運動、男女同權、獨立自營など云ふ文字は、女同志の間にも物語られ、雜

誌や書籍の活字にも組まれて、今や一世の思潮を動かさうとする時である。誰か婦人記者の位置を「繭」となし、婦人記者その人を「毛蟲」と見やうぞ。——などゝ、眞面目に考へたこともあつた。

唯こゝに一人の變な女があつて、記者たる多年の境涯に安んぜず、蝶々となつて思ふ存分、華やかに、舞ひつ狂ひつしやうと云ふ。其の女が姓を上村名を清子と云つて齢二十三、捨難い才貌の双美を有つて居る彼れかと思ふと、俺は一種名狀し難い變な感に打たれた。一人の清子を失ふことは、新聞界の損失でも何でも無いが、彼の女が婦人記者を廢めて、待合か料理店の女將に爲ると云ふ一事は、婦人記者の位置に對して、大なる侮蔑を加ふるものだと、一時は腹立しい氣持になつて、其の淺間しい思慮の上に、冷嘲を浴びせかけ、熱罵を加へて遣らうかとまで考へもした。

然し、女は終に女である。世に誇り得る美貌を有ち、多少の文字を知つて居ても、落ちて行く先は極つて居る。蝶々に爲つて飛んだ所で、菜の花の榮は哀れにもまた果敢いてはないか。——

A君、「上村清子」の行末を、君は何と思ふ？……

「下」　飛んで行く先

其の年も、やがて暑い夏になつた。

兩國の川開きのあるべき日、國を擧げて痛哭せねばならぬ大事が起つた。俺の仕事は其の日から忙しくなつて二人曳や自動車で、晝となく夜となく、瀧山町と坂下御門との間を、往復せねばならぬやうな幾日かが續いた。其の幾日も、夜を徹することが多かつた。

號外は、毎日の樣に出た。新聞は其の事のみで、一欄二欄を費して、尙ほ足らざるを憂ふと云ふ有樣であつた。世間は俄に靜寂として、新聞社に近い遊里にもさんざめきの聲が、聞えぬ樣になつた。日比谷から三宅坂、半藏門、和田倉門を往復する電車は、其の音響を遠慮して、徐行する樣になつた。二重橋の前には朝未だ明け渡らぬ頃から、夜は露深い一時二時頃まで多くの老若男女が參集して、口々に祈願を籠め、祈禱

をさゝげる様になつた。男と云ふ男、女と云ふ女の顔には、苦しい沈默と深い憂愁の色が漾つた。

七月も末の暑い夜半、待ち設けもせぬ其の時が、一國萬衆の上に來た。坂下御門に參內の馬車、自動車、人力車は、刻一刻多きを加へた。軋る轍の音も淋しう出ては入り、入つては出づる人々の中に、高貴の方々をも仰ぎ見た。午前一時、二時と云ふに、燈影も侘びし氣に去來して、大內山の常盤樹も、そよとの聲さへ立てぬ寂しさ。沈默より沈默へ、靜思より靜思へ落ちた群集は、悲しく痛ましい刹那の捕虜になつて、咳一つの氣配だに聞えぬ。力無い號外の鈴の音が、都の大路小路に渡つた時、一國の首都は、更に深い沈默の底に落ちた。泣いても叫いても、最う取返しの付かぬ不幸が、この國の領する全土の上に知れ渡つた時、人々は更に激しい憂愁の色に掩はれた。音曲歌舞の聲絶えて、人々の左腕には黑布が卷かれ、家々の國旗には、又とあるまじき長い黑布が、曇天の風に飜つた。

新聞社の任務は、それから五十日餘を過ぐるまで忙しかつたが、人々は皆敬虔の念を抱いて、殘りの暑い夏を送つた。節涼秋に入つて、大神靈を常世の國に送り參らすべき時、任に御陵地に赴いた俺は初めて新聞記者の榮ある經驗を嘗めた。文武大官の後列に陪して、悲しみの雨の夕暮、遙に御靈轜を送り奉つた時、無官の燕尾服にも、大官と等しい涙があつた。挽歌の絶え〴〵なる、哀の極の痛ましさ、松明の光も冥途を照すかと仰がれて、心自ら重かつた。あゝ秋の雨身に沁みた其の夕の狀は俺は一生涯忘れる事が出來ない。

其の前夜、京は鴨川畔の旅宿の二階で、功勳一世に高い武人の典型が、其の夫人と諸共に、刃に伏した飛報を得た時にも、俺は臥床の上に起上つて、ハラ〳〵と落涙した。人生の悲痛事に遭遇すること、職として日夜相次ぐがために、社會記者の感受性は年を經るに從つて遲鈍になるを常とするが、時あつて異常の大事件に會すると、其の反比例になつた神經を驚駭するものである。武人夫妻の自刃の件に依つて、平衡を失つて居た俺の感受性は、雨に悲しい御陵地の夕を拜して

深い痛みと惱みを覺えた。

月日はまた喪に暮れ喪に明けて、冷たい秋風の吹く頃となつた。國民としても、新聞記者としても、一生涯の間に復とあるまじき大事件を終へて、俺は初めてホット一息した。雜誌に書かねばならぬ「倫落の女」、新聞に書ねばならぬ「新女優」に就いて、考へねばならぬ様になつた、働かねばならぬ様になつた。氣分と生活とが、漸く前の平靜に復つた時、俺は久し振に、「上村清子」の上を想ひ起した。

俺が清子の「其の後」を想ひ浮かべた時、彼は最う繭に巣ふ毛虫てはなかつた。思ひ出の多い新聞記者生活から脱けて、蝶々となつた上村清子は、築地に新しい割烹店、「稻舟」の女將として、朝な夕なの化粧鏡に、人知れず微笑む様な境涯になつて居た。

女にとつては、これが豫定の行動てあつたが、世間は今更の様に驚異の眼をかがやかした。

A君、世間は清子の一件を目して、何と思つたか知らないが、俺は清子の様な女の當然落ちて行くべき徑路として、別に悲しみもせず、怪みもしなかつた。唯、或る種の女の運命が、此所から彼所に暗遷し、默移して行く様な、繪卷物ても見る氣て眺めて居た。

上方風の料理を主として、貸席をも兼ねると云ふ「稻舟」の名は、夕刊新聞の廣告欄に、「近火御見舞を謝す」として現れた。其の横手に小さく「上村清子」としてあつたのを見た時には、何とも思はない筈の俺も、何とも思はぬ譯には行かなんだ。昨日までは小形の名刺に「東京××新報記者」として居た一女性が、今は最う「料理店稻舟」の下に其の名を書かねばならぬ様になつて居る。自ら進み自ら勇み自ら奮つて、新しく開拓した道とは云ひながら、思へば上村清子と云ふ女も、云ひ知れぬ陷し穴の前に立つた譯てある。

其の頃から俺は、不思議に、また清子に逢ひたくて堪らなくなつた。婦人記者として彼を過してこそ、其の交際も相對的なれ、一割烹店の女將となつた後は、行

いて清子と共に語り、共に食ふに、何の憚る所があらう。若干の金と無爲の時間とさへあれば、彼の女の自ら負ふ所のあるらしい態度、人の心をそゝる樣な物の言ひ振り、表面は冷たい樣でも、其の實情熱の烈しさうな表情に、相接する事は何でもない。毛蟲から蝶々になつた姿の中に、彼の女の心の底を讀まうとするのは、强ち俺一人のみの興味でもなく、亦、好奇心でもあるまい。逢ひたい、逢つて見やう、逢つて何んな事を云ふか、何んな事を考へて居るか、何んな樣子をして居るか。俺はそれが聞きたくて堪らかつた、それが見たくて堪らなくなつた。それを見て、笑ひもしやう泣きもしやう、罵りもしやう。

俺が斯う思つて居る間に、新しい「稻舟」の存在は、割合に早く人々の間に知れ渡つた。或る者は其の入口に自動車が停つて居たと云ひ、或る者は其の座敷で、名ある政治家や實業家を見たと云ひ、或る者は其の廣間て、新女優の群を見たと取沙汰する樣になつた。新店にしては料理が美味い、と云ふ者があれば、酒は櫻か菊か何か、兎に角灘物の正宗らしいと云ふ者もあり藝妓も二流どころは來るだらう、などと評判する者もあつた。カフエーやバーに夜を更かす若い人達の間には其の女將が上村清子であるために、「稻舟」は種々の意味て是非された。果は清子の身境が、こんなに急轉直下した裏面には、面白い情話が潜んで居るに違ひないと、眞面目になつて說く者さへ現れた。中には、彼んな傾向を有つて居る女が、彼んな風に爲つて行くのは面白い一種の社會現象ぢやないか、新聞紙は何故これを書かないのだらう、と不思議がる新聞讀者もあつた。俺は斯うした世間の取沙汰を聞きながら、一日も早く逢つて見たいと思ひ、一日も早く其の姿を見たいと思ひ、一日も早く其の聲を聞いて見たいと思ひ、一日も早く一所に醉つて見たいと思つた。

種々な世間の取沙汰を聞いた時、清子は何う思つたてあらう。婦人記者たる毛虫の時代には、何とも云つてくれなかつた世間より、善かれ惡かれ彼是と評判される事は彼の女の最初の所期であつたに違ひない。少

數の識者からは、邪道に墜ちた女として、忌み嫌はれても、多數の男女から斯う云ふ風に、興味と好奇と羨望と揶揄とて眺められることは、彼の女の願つた所かも知れない。異性を艶殺し得る彼の眼に笑を含んで、「だから、蝶々になつたのですよ」と云ふ樣子が、逢はぬ先から明かに見える心地がする。

俺は何うしても、一夜を「稻舟」のお客樣として飮まねばならぬ。思ふ存分に飮んで、思ふ存分に醉つて、淸子を怒らして見たい、淸子を泣かして見たい。そして彼の女の口から、彼の女の胸に秘した「個性」の眞實を暴露させたい。これが、俺の仕事である。

A君、秋も早や夕暮れて、南へ急ぐ雲の行方に、故鄕の空を思ふ頃が、しんみりとして語るに宜く、落着いて飮むに宜い。天地孤獨の感、何となく胸に迫つて友の面影を偲び、別れた女の睦言を憶ふ時、人は切に異性を戀し、異性を懷しむことがある。

其の時の俺が、恰度、それであつたかも知れない。料理屋て飮食するのに、一人て行くほど詰らないものは無いと知りながら、俺は一人て、初めて「稻舟」の格子戶を開けた。其の日、世界の隅々には何んな大事件があつたか、其の日、新聞社て何んな仕事をしたか、俺は最う何も彼も忘れて居るけれど、「稻舟」の其の夜の心持だけは、明瞭と未だに覺えてゐる。銀杏返しの女中が出て、「何うぞ、此方へ」と案內された時には、未だ「上村淸子の家」と云ふ感じがしたが、二階の一室に入つた時には、料理屋らしい氣持がした。

二階の奧まつた四疊半は、疊も障子も天井も、壁も柱掛も未だ新しかつた。餘り高價でもなさうな材木を使つた、何ちらかと云へば粗末な建物だけれど、座敷には次の間が附いてゐた。食べ物の香は少しも漾はず障らば凹みさうな壁土の軟かさに、反つて脂粉の氣が漲つて居た。襖の腰張にも、電燈の笠にも、四角な小火鉢にも、薄茶色した座蒲團にも、持つて出た盃にも、「貴郎お一つ」のお銚子にも、皆、紅葉の模樣を現し

てあつた。俺は其の座敷で唯一人、年増の女中に酌させながら、默つて飲みもし食ひもした。目前の戯談口一つ叩きもせず、さうして飲食して居る間には、何んだか氣が押詰まる樣になつて、烈しい酒精分のみ、血肉の間を暴れ廻る。お銚子は最う三本空になつて、莨の味は稀薄になるばかり、俺の横顔を偸み見ては笑ふ女中の面付が、馬鹿に氣になり初めた。

其の時、ほゝゝゝと艶な笑ひ聲が聞えて、絶えて久しや上村清子が入つて來た。

「まあ、能く入つしやいましたわね。妾、お側に座つても好いてせう、お友達……」

と、ちよいと女中の顔を見て、俺の右手に火鉢を挾んで、兩手を膝に正しく座つた。

「お目出度う、とまあ云ふ所でせうなア。愈々遂に本物になつたんですね、何も彼も……」

俺が斯う云つて、盃を献すと、清子は默つて受けて波々注いだのを一呼吸に飲んだ。

「えゝ、本物ですとも、それは〳〵大變でしたのよ。二月三月と云ふもの、妾もうがつかりして、何うしやうかと思つた位……」

今度は其の盃を俺が受けて、半分飲て捲莨を吹いた。清子は、莨だけは吸はぬらしい。

「毛蟲が蝶々に爲つたのに、ウンともスンとも云はないのはヒドイ、甚だ友達甲斐が無いと思ふ。私は近火御見舞の廣告で、初めて知つたのですよ、開業と云ふ新事實を……」

「あら、二度も三度も、さうね、五度位は電話をお掛けしてよ。初の日は京都へ出張中、次の時は未だ出社がない、三度目は夜でしたが、貴郎、何時でも御不在ですわね」

「さうですか、兎に角面白いなア。婦人記者上村清子、割烹店の女將となる……。あなたなら、女將にもなり得る、藝妓にもなり得ると思つて居たが、遂になつたよおかみさんか。何う暮しても一生です、我儘氣儘に暮すのも、或は理想的かも知れん……」

「えゝ、えゝ、厭になつたら廢めて了つて、妾、洋行

ても何でもして見たい。それでもねお蔭様で、此の分なら何うやら斯うやら、遣つて行けさうに思つてよ。そんなに、心配する程の事はないわねえ。妾、未だこれで何か仕事をして見たいと思ふわ。」

こんな對話をしながら、思はず盃の數を過した。俺は最う大分醉つて居たが、終には清子も醉つたと見えて、言葉つきがぞんざいになりはじめた。言葉の調子は亂れても、醉つた時の清子の顏には、其の平生に見られない美しさと、艶めかしさとが漂つて居た。

一口に云へば、「凄艶」な女であらう。

A君、何とも思はないと云つても、俺は其の夜まで清子の事を、何とか思つて居たに違ひ無い。終には大醉して了つて、盃を嚙み割つて、唇から血を流したり拳を堅めて女の膝を撲つたりして、互に捨臺詞か何かを云ひあつた末、前後不覺の體で稻舟の門を出た。

君も滑稽に思ふだらうが、俺も笑はずには居られない。彼の女の善い所も惡い所も、俺にはチヤンと判つてゐる筈だのに、其の夜まで一種の好奇心に驅られて、憧憬る樣な氣持になつて居たのが、俺はなんだか馬鹿〳〵しくつて堪らない。人は常に第三者たる事にのみ滿足する能はず、時あつて當事者の地位を羨むものだ。清子に對する俺の考へが、たとへ僅の一時でもさうした風に傾いて居た事だけは、何人の前にも否定する事が出來ない。俺はそれを恥かしいと思ふよりも馬鹿〳〵しいと見て、先づ一人で苦笑した。

清子に向つて、俺の樣な態度、俺に似た態度、或は俺以上の態度に出た男は、これまでに隨分少からずあつた。清子が未だ大阪に居た時分、名もない一新聞社の給仕を勤めて居た頃から、彼の女は多くの男から、さうした眼付き素振りで見らるべき、危い運命の瀨戸際に立つて居た。其の頃は十五六の齡も未だ幼く、女としても成熟して居なかつたが、それでも人知れず言ひ寄つたり、思のたけを艶文にしたりする男が、稀ならずあつたと云ふ。それが、大阪××新報の婦人記者に

なつて、才貌の双美、齡と共に加り、「上村清子」の名を馳せるに至つてからは、更に一層其の身邊に迫つて來た。遂には、清子の姿を新聞社の應接室に垣間見て、思慕の情綿々として容易に盡きず、遙に東京より長文の電報を寄せて、二世の契を申込んだ青年さへも、一人ならず現れるに至つた、と云ふ事である。

東京に來てからも、××新報の婦人記者として、清子の出沒する所には、必ず男の鋭い視線を惹いた。何者だらう、何所の女だらうと、雪の日を尾行した青年もあつた。娘か、細君か、圍い者か、頼まれもせぬに御苦勞な、わざ／＼區役所に出頭して、要領を得なかつた紳士もあつた。東京××新報社記者と判つてからも事に託して訪れ行く者や、所謂「これ小生が滿腔の熱情なり」を籠めた、長い艶書を送る者が多かつた。中には密に手を廻して、女の生活程度を取調べさせ、何時まで婦人記者をして居るでもあるまい、母人と共に引取つて、一生涯氣樂に暮せるやう、お世話申しても宜いと云ふ事を、それとなく廻りくどく、人傳に言ひ寄つた實業家もあつたらしい。清子に優つた容色、清子に勝れた表情を有つて居る女は、廣い東京に掃き捨る程あるものを、男は何と云ふ好事か、十人十種の手を換へ品を代へて、春の花にも言ひ寄つた、秋の月にも口說きかけた。斯うした取沙汰を何人の口からともなく傳へ聞いて、俺は一層馬鹿なと思つたが、考へて見れば無理でもない、清子の位地と清子の才貌とは、男の心を惹くのに十分な素質と資格とを有つて居た。

清子にして若し、心中平かなる能はずとて、奮つてそれ等の舊事を自白したならば、一部の男仲間に、何んな影響を傳へるであらう。清子のためには、失戀に泣いた才人もあつた。清子のためには、其の結婚期を過つた俊秀もあつた。清子を得ないがために、花柳の巷に惑耽した者もあれば、清子を失つたが爲めに、墜落した青年もあつた。それ等の人々が一人の清子を中心として脚色した幾幕かの悲喜劇は、永久に清子の胸に秘められて居る。中には清子自らも知らぬ間に、隨時隨處に演ぜられた、大阪二輪加の茶番もあつた。

若し夫れ俺と清子のに至つては、看客の喝采にも償せねば、欠伸にも償ひ得ぬ幕間の茶番劇、曾我の家兄弟の材料にもなり得ぬ果敢さは、俺一人で苦笑し冷笑するばかりである。彼の女を眺めるには、第三者の立脚地に居るのが、最も賢い安全な策である。

A君、一人前の女として、未だ成熟せぬ十五六歳の幼少から其の周圍に居る男達に、斯うしてチヤホヤされながら、母の手一つに育つた女だもの、清子には男を男と思はぬ反抗心と、男を嘲弄する冷笑の態度とが其の一顰一笑の間にも、明かに見えて居た。

男の刺戟と誘惑との間に育てられても、それに打勝つて人となるを得た女は、幸福であると共に、また大なる不幸である。上村清子は大阪でも東京でも、幾度か危い瀬戸際に立ちながら、何うやら此うやら事無きを得て、今は此の廣い世界の中に、唯一人のS様を仰ぐばかり。築地は稲舟の帳場格子に、其の日の安きを微笑み得るは、世に謂ふ幸福であるかも知れない。けれども清子は其の精神の上に、計り知られぬ不幸を受けて己れを知り、人を眺め、世を觀る眼を開かうとはせず唯底知れぬ自我の壺中に没頭した。

清子の自負、清子の自我を養つたのは、世の男達にも責が重い。一つは其の境遇も助けたらうが、有體に實を言へば、言ひ寄つた男が先づ惡かつた。「お前は美しい、好い女だ」と、四方八方から迫つた時、女としての清子の自覺は、「妾は美人だわ」に出發した。女齢若うして、己れの美貌を自覺する時、一代運命の危機は、關つて其の刹那にある。美人だと賞め稱へられ嬉しくてならない所へ、多くの男から情を籠めた贊美の歌を聞かされては、誰か微笑せぬ者があらうぞ。何でも無い「自覺」の種子は、やがて「自我」の若草を發生して、淺間しい「虚榮」の花と咲き、恐ろしい「慾望」の實と結ぶ。清子の過ぎ來し方を、さうだとのみ斷ずる譯ではないが、美人に生れた彼の女は、決して幸福ではなかつた。自分の美貌を自覺した彼の女は、先づ美

貌そのものに捉はれて、女の初一歩を踏み迷つた。

娶らず嫁がず、日蔭の花と咲いた今、其の花の盛りや短く、其の花の生命や果敢い。「短くても果敢くても、花と咲き蝶と飛んで、若い生涯を終るのが、妾の願、妾の希望ですわ」と云つて、ほゝと笑つた口許に、一脈の淋しさが漾つて居たことを、清子自身は氣付かずに虚榮の夢を追うて居る。「人の女房になるなんて、考へただけても厭なことです、妾、子を生むのが大嫌ひ……」と、平氣て云ふ心の底に、人知れぬ煩悶のあることを、清子自身は氣付かずに、自我の根抵に構へてゐる。「男なんて何んてす、女の前に平伏して、意氣地が無いぢやありませんか」と、憤る氣に云ひながら、其の男の保護に生きて居るのを、清子自身は氣付かずに、女の艶麗さを誇つて居る。たとへ何事も氣付いて居り仔細も消理も判つて居ても、判らぬ氣の様子をして、氣儘に振舞つて行かうとするのが、「自覺」に出發した自我の到着點てある。男の自我の前には敵がなく、女の自我の前には男が無い、有つてもそれを見向きもせず、知らん顔て行かうとするのが、女將にならぬ前の清子てあつた。女將になつてからの清子も亦、この手を唯一の武器にして進むらしい。

婦人記者から一轉して、割烹店の女將となり、自らそれを經營して行かうとする女てある。たとへ「自覺」の初一歩は美貌にあつても、「自我」の强さと鋭さが助けなければ、何うして長い歳月が渡られやう。「妾は自分の一生を、長い繪卷物ても見る樣に、美しく眺めて居たい」と、清子は其の雜誌上に、一種の氣分を告白したが、さう言つた言葉の中にも、清子の性格は躍動して居る。眞面目てあるべき實生活の上に、華やかな藝術趣味を加へて、其の實行者にもなり、傍觀者にもならうとするのが、清子の辿る新しい道てある。

其の日〳〵の氣分を主にして、世の中を渡つてゐる多くの群の中に、上村清子も在籍者の一人てある。料理屋の女將に倦いたら、今度は沖の鷗にてもなつて、何所を何う飛ぶか判らない所に、清子の戀があり、清子の哲學があり、清子の人生觀があらう。

A君、稲舟へは其の後、五六回位行つたらう。行けば必ず奥二階の四疊半に案内されて、其所で飲み其所て食つた。何も彼も紅葉の模様があるので、女中等は紅葉の室と呼んでゐた。女將としての清子は、大抵姿を現して居たが、顔も見せぬ事も度々あつた。

料理も酒も、相應に食へるけれど、稲舟が繁昌するのは、決して割烹の爲めてはない。「上村清子」と云ふ特異の一女性が、女將として見參するために、それて客を引いて居るのだとも云ひ、新女優の群が酒席に侍べるために、それて繁昌するのだとも云ふ。繁昌してもしなくても、女將としての清子の姿は、其所へ出入する多くの女達の中に交つても、更に其の凄艶の致を失ふ樣な事が無かつた。

「皆さん、女將さんに何して入らつしやるのてすよ。男の方、ほんとうに助平……」

と女中の一人は笑つて居た。

「代議士さんても、男爵樣ても、重役さんても、それは〳〵大變なんてすよ。女將さんの樣な方、ほんとに仕合せと思ひますわ」

と、他の女中も笑つて居た。

「こゝの女將さん、一日に衣服を三四度も着換へるのてすつてね、裾模樣ぢやなくて、胸模樣のちよいとした好い柄ね、てだわ」

と、藝妓の一人は美しがつて居た。

「大抵の藝妓は敵はないわ。學問はお有んなさるし、見識はお高くて居らつしやるし、それに新聞屋さんだつたッてぢやありませんか」

と、他の藝妓は舌を出して居た。

男の仲間にも、種々の取沙汰を聞いた。

「一度子を生んだと見えて、幼いのが居るね。それに本人、大の子嫌ひだつてね」

「子を生むことを恐れて、それて割合に品行方正だと云ふことだ、まさかねえ」

「然し美人だね、帝劇に出しても、第一流の美貌だと

思ふ、少くとも初瀬浪子以上……」

「好き不好きだけれど、男に突かゝると云つた調子の所が、面白い女ぢやないか」

「巴里に行つて居た文士の話に縁ると、清子は理想的の巴里女だと云ふ事だ」

「妖艶に非ず、凄艶と云ふ方だね。あんな女を藝妓にすると乾度非凡だぜ」

「冷たい様に見えるけれど、あれて案外、燃える様な熱情を有つて居る風が見える」

「要するに、謎の女だねえ、過去も、現在も、行末も……、其の總ての點に於て……」

こんな話を聞き、こんな評判を聞いても、俺は最う心を動かさない。唯この後三年五年を經るに從つて、何う云ふ風に變化するか、俺は清子の長い行末を、小說でも讀む氣になつて、眺めて居るつもりである。チヤホヤ云はれて居る今が花か、何とも云はれなくなつて、初めて充實した實を結ぶか。清子の前途には、唯一の？がある。

A君、機會があつたら、一度、稻舟の四疊半で飮んで見給へ。何となく落着かない家だけれど、何もさう惡くは無い。淸子と話でもしながら、俺の事でも罵つてくれ給へ。序に、俺が「宜しく」云つた、——とね。

次號の誌上には「女八人」其四として

「名代部屋の客」

を掲載すべし

史上に於ける陸主主義と海主主義

慶應義塾教授　阿部秀助

陸主海從か、將た、海主陸從か。

大敵、我が前に迫つて、祖國の運命、眞に風前の燈火に似たる時、或は國家の財力、正に枯渇せんとするも、歴史の惰力は尙ほ依然として軍備の擴張を必要とする際、人は屢々、今般の問題に逢着す、而して我邦の現狀も亦た略ぼ後者に似たり、陸か、海か、不知、歴史の吾人に敎ふる處如何。

試に史を繙きて、過去の歐洲を見るに、吾人は先づ希臘に於て海主陸從の顯著なる史實に接す、蓋、希臘の地たる狹小なる上に、氣候と地質との影響をうけて山河殆んど靑色なく、住民の由て衣食の資を供する土地の如きは僅かに全面積の一割強に過ぎず、故に此國に於ける人口の增加は勢ひ海外殖民地の經營を必要するど共に、母國は住民の主食物たる穀物の供給を他の地方に仰かざる可からず、彼の「アチカ」の如きは希臘國内に於て最も多く穀物を產せしに不拘、既に「ソロン」の時代には生油を除く外、一切の農產物の輸出を嚴禁せしに徵するも、明かに穀物の欠乏を感ぜしを知るを得可し、尙ほ史家「ヘロドトス」の記する處によれば、波斯王「クセルクス」が「ヘレスポント」を通過する際、王は黑海沿岸の穀物を「エギナ」及「ペロポンネッス」地方に輸送する希臘の船舶に出會せりと、而して「アテネ」が黑海沿岸の穀物を輸入して、其港「ピレース」を之れが集散地となせしことは、既に一世紀前にあり、（エッアルト、マイヤー、「古代の經濟的發展」頁二〇―二一）斯くて海外より巨額の穀物が輸入せらるゝに至りしことは、內地に於ける之れが價格の低落となり、延いて農業の衰微となりて、母國は多々益々殖民地に負ふ處多く、兩者の連絡は實

に希臘にとりて死活問題の存する處たり、加ふるに、當時にありて一大强國たる波斯は熾んに帝國主義の焰に煽られて多島海畔に現はれ、其が優勢の戰艦隊を以て希臘本國を席捲せんとせり、之れ實に希臘にとりて危急存亡の秋たるのみならず、彼、亡びんか、西方文化の萌芽は東方文明に壓せられて、凋落の不幸に遇ひしやも知る可からず、此際、此時、「アテネ」に達見の士「テミストクレス」現はれ、海主陸從論の爲めに萬丈の氣焔を吐けり、彼は史家「ランケ」の所謂世界史を飾れる初期の人傑にして、又、偉大なる史的地位を「アテネ」に齎らしたる人物たり、(レオポルト、フォン、ランケ世界史第一卷一三三頁)而して、此英傑は當時に於ける陸主海從論者たる「アリスチヂス」の説を排して、「アテネ」の勢力を悉く海上に集中し、即ち「アチカ」の南端にある「ラウリオン」銀鑛の銀を以て百餘の新式戰艦を建造し、進んて「サラミス」灣頭の一戰に、物の見事に波斯の艦隊を粉碎して、後の海主陸從論者の爲めに最も有力なる證左を遺すに至れり。

之れに反して、羅馬の歷史は陸主海從主義の好典型たり、勿論、彼が千有餘年の歷史を通じて、一、二、海上政策として見る可きものなきにしもあらず、例者、「ポエニ」戰爭の初期、其敵「カルタゴ」に抗せんが爲め「ペンテレ」型戰艦を建造せしが如き、或は「アウグスッス」の時代に埃及より穀物を輸送する艦隊(Classis Alexandrina)を新設せしか如きあり、遮莫、此國に於ける主要なる軍事的活動が陸主的なりしことは、「スキピオ」の如き、「スルラ」の如き「ポンペイウス」の如き「ケーザル」の如き、羅馬史上を飾れる幾多の英傑が、何れも、陸主的武辯たりしに就きて見ることを得可し蓋、天下の精兵と稱せられし羅馬人が多く寡慾にして體力强壯なる農民階級より輩出せしことは、帝政時代に於ける有名なる軍學者「フラビウス、ベゲチウス」の古書の吾人に示す處にして、加ふるに羅馬の陸軍は單純なる團集にあらずして、寧ろ組織的團體たり、更に詳言すれば、其軍勢は常に多面的活動的の有機體にして、彼等は單に歩、騎兩兵よりなるにあらずして、他

に之れを補助する幾多の機關あり、況んや之れを統率するに眞に將たるの器を以てす、彼の「ケーザル」の如きは實に之れが好個の例證たり（エシル、ダニエルス戰爭史第一卷頁一三七）斯くて羅馬の歷史は此精鋭の陸兵を有せしが爲めに、絕えず陸主的となるに至れり。

轉じて中世を見るに、海主陸從主義を發揮せるものに南に伊太利の諸市あり、北に「ハンザ」同盟あり、殊に前者にありて最も有名なる「ベネチア」が如何に海主的なりしかは此市府にて新任の大統領は其就任の際必ず指環を海中に投じて海と結婚することを約すると共に、又、彼が頭に戴きし寶冠は其昔、漁夫の被物を摸せしものなるによりても知るを得可し、而して此市府は單に「アドリア」の海上權を掌握するを以て足れりとせず、更に「ノルマン」、「ランゴバルト」、「アラブス」等と戰ふて「ビザンチン」帝國を援け、殊に十二世紀に於て同帝國の海軍著しく衰微するや、「ベネチア」は其優勢なる艦隊を以て之れを補充し、よりて以て幾多の利權を獲得せり、即ち「コンスタンチノプル」の「ペラ」に「ベネチア」專屬の居留地を設置せしめしが如き、又、同市民の貨物の輸出入は、帝國內何れの港にありても、總て無稅にて通過せしが如き、如何に海主陸從の政策が此「水の都」をして「富の都」たらしめしかを知るを得可し。（マックス、シュミット世界商業史頁四四）更に北歐の商權を掌握せし「ハンザ」同盟を見るに、彼の勢力範圍は一時、南は西班牙に、北は芬蘭に達せしことあり、殊に「バルト」海にありては瑞典も、露國も、英國も遙かに彼の下風にありき、世には此事實を以て、「ハンザ」の優勢なる武力に歸するものありと雖、庶幾んぞ知らん此同盟は寧ろ戰爭を咒ひたるものなりき、只だ彼は其が生命の泉たる「バルト」海に於て自己の地位を奪はれんとせし際のみ、劍を拔きたりき、蓋彼をして大なる勢力を確保せしめし所以は「食は我が欲する處にあらず航海こそ我が生命なれ」と云へる海主的努力主義と、巧妙なる外交的商業政策にあり、其が武裝せる戰艦の如きは彼にとりては只だ自己の經濟的利益を求むる手段たるに過ぎざりしものなりとす。（デェトツリヒ、シェフアー「ハンザト」と其

（商議政策頁一六、一七）

降て近世に入りて、海主陸從主義をとらんとせしものに瑞典王「グスタフ、アドルフ」あり、陸主海從主義を實行せしものに蓋世の英雄「ナポレオン」あり、而して更に海主陸從主義を以て自己の生命とするものに英國あり、抑も「グスタフ、アドルフ」をして海主陸從主義をとらしめんとせし所以は、彼が君臨せる國家の地位と國情とに基けり、即ち瑞典の地たる北方に僻在して、農牧の事業に適せずと雖、然かも地下に無限の寶庫あり、而して此寶庫は當時にありては悉く王宮の有たり、若夫れ王にして此寶庫なる銅鑛を利用せんと欲せば勢ひ獨逸の資本と同國市場の力を借らざる可からず、然るに一方に舊教を代表する墺太利も亦、匈牙利に大銅山を有し、「エルベ」河と「ハンブルグ」の市場とを利用して、熾んに獨逸に於ける、瑞典の勢力範圍を攪亂し、更に手を南方に延ばさんとせし爲め、千六百二十六年、瑞典王が自國産の銅を、西班牙に輸入するの計畫は水泡に歸するに至れり、故に王にして自己の利權を確保するには益々「バルト」海に優勢なる海軍を設けて「エルベ」其他の河口を封鎖し敵墺太利をして一歩と云へど此方面に出てしめざるとを務めざる可からず、現に王は此計畫によりて「ハンザ」同盟と獨逸諸侯の或者とを自己の藥籠中のものとなさんせり、王が三十六歳を一期として「リウッエン」の露と消えし動機には、少くとも以上の意義の伏在せしものなりとす。（マックス、レンツ、グスタフ、アドルフ普魯西公報第四十八巻頁五一三及クロンホルム、「獨逸に於けるグスタフ、アドルフ」第一巻頁九三）次ぎに「ナポレオン」が如何に陸主主義の人なりしかは、彼によりて當時の陸軍が一新方面を開きしを以て知るを得可し、試に「ナポレオン」の兵術を以て「フリドリッヒ」大王のそれに比較するに、先づ兩者の間には兵數に於て著しき相違あり、「フリドリッヒ」大王が七年戰爭中「プラーグ」附近にて統帥せし兵數は十萬を出でず、尙ほ實際、其戰に參加せしは、六萬四千のみ、然るに「ナポレオン」が、「エーナ」戰役の場合に率しもの十六萬、千八百十二年、彼と共に露國に入りしものは百十二萬以上に達せり、第二は兵種の相違にして、「フリドリッ

ヒ」大王が千七百六十八年に認めし備忘錄によるに、當時王の下にある兵數は合して十六萬、其中內地に籍を有するものは七萬に對して外國人は九萬の多數に上れり、然るに「ナポレオン」の兵は多く內國兵なりき、又、彼は「フリドリッヒ」大王の如く單に將校團のみに信任を拂ふことなくして普ねく各兵士に及び、軍隊の精神は全く以前と異なり、尙ほ彼は「フリドリッヒ」の如く威嚇や懲罰を以て軍隊敎育の秘訣となさざりき、蓋佛國の大革命は階級別、殊に貴族の社會的地位を奪しを以て、四民平等となり、誰人も共に力を合せて君主の爲めに、祖國の爲めに戰ひたりき、然かも亦、一方には一般の兵士に至る迄、武功を重んずる念に富み、「ナポレオン」は此點に向て最も多くの注意を拂へり、加ふるに彼は撤兵の新式を兵術上に加えて、從來の密集的戰術をして顏色なからしむるに至れり。(ハンス、デルブリユク、歷史政治論文集頁二二三―三〇一)斯くて、彼の陸主々義は更に印度遠征の大計畫を生むるに至れり、之れより先き、印度「マイソレー」の王「チプ」英人を蛇蝎視し、密かに好を佛國に通ずるや、「ナポレオン」は書を王に送りて曰く「余は無數の全勝軍を率ひて紅海の沿岸に達せり、汝が英人の壓迫を脫するの日、近きにあらむ」と、然かも「アブキール」の一戰は其計畫を水泡に歸せしめしも、彼は尙ほ其初志を捨てずして、更に波斯と通じ、露帝歷山一世と墺太利とを自己の同盟者たらしめて此遠征を決行せんとすり、即ち「ナポレオン」は之れが爲めに、先づ「ダルマチア」の兵備を嚴重にして、土耳其に備へ且つ、「コルフー」を以て此計畫の兵站基地となし、更に「ダルマチア」の總督をして土耳其國內の道路を調査せしめ、又、此遠征軍の通過す可き地方の地誌等をも蒐集せり、然かも此再度の計畫も亦た西班牙の內亂に妨げられて實現すること能はざるに至れり。(グスタフ、ロロフ「奈翁の千八百八年に於ける印度遠征の計畫」一普魯西公報第七十八卷頁四八一―四九六)而して彼の陸軍が彼れによりて、非常なる進歩發達をなせしに不拘、其海軍に至りては依然として、佛國革命當時の狀態と異ならず、史家「ロ、フ」が「ナポレオン」の殖民政策を論ぜる中に「佛蘭西殖民地の滅亡は「ナポレオン」と其閣臣

の責任に歸す可きものにあらず、又、各殖民地の有司の罪にもあらざるなり、其が直接の源因は實に佛國海軍の微弱なりしにあり（グスタフ、ロ、フ、奈翁の殖民政策二三〇頁）と、此點より見るも、彼の政策が主として陸主的なりしことを知るを得、轉じて英國を見るに、彼の海主陸從主義は極めて古く、既に「プランタゼネット」朝の時代に於て、「海軍は英王國の城壁なり」の語あり、又、以上と略ぼ時代を同ふしたる議會の決議事項の中にも「國家の富强は主として海軍にもとづく」とあり、蓋、此國の海上政策を最も直截に述べしものは「ウオルター、ロリー」にして、彼の言に「海上を支配するものは、又商業を支配す、而して商業を支配するものに世界の富と世界其者とは屬す」と、勿論、英國に於ても今日迄、此政策に反對する思想及政策の出現せしことなきにしもあらず、嘗て自由黨の領袖「コブデン」は宣言して曰く「英國は最早、一の艦隊を要せず、其輸出額の增加は、吾人が世界的商業と、世界に於ける商業上の主權者たるによりて確實なり、海軍を擴張するが如きは、徒らに列國の嫉妬を招くのみにして却て危險なり」と、而して此の如き見解は獨り千八百四十年より千八百七十年の間に於ける英國のみならず、歐洲諸國の商業及殖民政策に向て大なる影響を與へたり、當時、戰艦を以て商業上有害と宣言せしは、單に英國のみならず、「ビスマーク」の如きも、其內閣を組織せし初期に於ては、專ら此見地によりしも、後ち其非なるを悟りて、專ら海軍の擴張と、殖民地の獲得とに意を向くるに至れり、若、英國にして事實、「コブデン」の要求せしが如くならんには、其海軍は年々縮少せられしならむ、然かも事實は之れに反するを如何せん、殊に英國が海軍擴張に向て非常なる努力をなすに至りしは、千八百八十九年以後にして、同國海軍に對する支出額は千八百九十四年より千九百四年の間に於て、一億七千萬圓より四億二千八百萬圓に達せり、（同時期間に獨逸は三千九百萬圓より一億七百萬圓に、北米合衆國は六千萬圓より二億四千萬圓に增加せり）殊に千九百四年三月には、時の總理「バルフォア」は英國海軍の二國標準主

義を宣言するに至れり、抑も英國をして、以上の如き政策を行はしめし所以は、單に同國が四面環海の國たるによるにあらずして、更に重且大なる問題の伏在するによる、即ち國民の主食物と工業上の原料とを海外に仰ぐこと即ち之れなり、今日の英國は穀物は勿論肉類其他の日用生活に就きて自足の地位にあらざるのみならず、一朝、海外より輸入せらるゝ原料品にして杜絕せんか、爲めに工場は閉鎖せられ、勞働者は自己の衣食の資を得ること能はずして飢死するの外なかる可し、此事實は、今を去る約五十年前米國に於ける南北戰爭が「ランカシャイヤー」の紡績業に與ひし影響に就きても察するを得可し、故に敵艦隊の侵入を防止することは英國海軍の最も主要なる任務たり、同國に於ける現海相「チャーチル」が獨逸の海軍を以て奢侈品と罵りしにも不拘、然かも自國の海軍を以て最も必要なりとなすは、此見地に基けり、加ふるに英國は海外に於て幾多の大殖民地を有す、若、此娘國と母國との間に、之れを連絡する鐵鎖たる海軍なからんか、是等の娘國は漸次母國より引き離さるゝに至る可し、彼の北米の獨立は、實に當時に於ける英海軍の不充分なりしに基くとは今日迄英國人の忘るゝ能はざる處なりとす（ラフトン、英國の海軍政策（十九世紀史總話頁七九一九五ハウル、デーン、世界的政治組織頁九七―一二八）若、夫れ獨逸に至りては、最近、同國政府が議會に於て英獨の造艦率を十六對十の訓令として宣言せしが如く、此國は依然として陸主海從主義の國なりとす、蓋、過去に於て屢々論ぜられし獨逸の海軍擴張なるものは、世人の信ずるが如き高遠なる理想を有するものにあらず、其實現海相「チルピッツ」の個人的信仰と「クルップ」の企業的慾望に基くものなりとす、「チルピッツ」は獨帝の親任極めて厚く、彼は一個の武辯にあらずして、又、政治上の才に富み、一方には獨逸の人心に向て英國に對する恐怖心と憎惡心とを惹起さしむる海軍協會を指導すると共に、又、一方には保守黨を以て自己の藥籠中のものとなせり、彼の同國に於ける排英雜誌として最も有名なる「イーベルアール」の昨年三月號が悉く海軍當局者によりて其材料の供給せられしが如き、此間の

消息を知るに足らむ、加ふる同雜誌經營の資金は主として同紙上の廣告によると稱せられ、而して同誌の廣告面約十六頁が悉く「フリードリッヒ、クルップ」によりて占められしことも、又、此間の消息を語れるものなりとす。要するに獨逸海軍の背後には一海相一企業家の影の存することを忘る可からず。

吾人は以上、二千五百年の歷史を通じて陸主海從主義と海主陸從主義との發展を述べたり、想ふに現代文明諸國の不安は洵に「ロイド、ジョーヂ」が云へるが如く「ミリタリズム」に存するや明かなり、遮莫、過去は現在に生きるの點に於て、我等は又、或點迄、歷史の惰力を奉ぜざる可からず、之れ吾人にとりて、よぎなくせらるゝ必要なり、今此見地に立ちて、我邦の現狀に於て陸海軍何れを主とす可きやに就きては、吾人は次の如く結論せんと欲す。

我邦が四面環海の國たる點に於て、元より海軍の存在を必要とす、遮莫、我邦の獲得せる殖民地が英及獨と異なりて、理想的に母國の附近に散在せると、我邦が尙ほ農業國の地位を有して國民の主食物を國內に仰ぐを得ることは、我邦刻下の海軍力をして、必ずしも歐米諸國の例に倣ふの必要なしと信ず、世には米國の海軍擴張を以て我邦海軍力增加の口實となすものありと雖、此の如きは只だ海軍力の數的發達のみを見て、性的方面の觀察を欠ける皮相論なりとす、轉じて陸軍方面を見るに、現時に於ける露國の陸軍は又た日露戰役以前のものにあらず、最近、露國の參謀本部の發表せる報告を見るに、軍政、軍制、其他の方面に亘りて著しく改良の實を擧ぐるに至れり、即ち軍政機關の統一として陸軍大臣は單獨に皇帝に奏聞するの權利を得たるが如き、將官の平均年齡五十八年三ヶ月を短縮して、老朽陶汰の實を擧げたるが如き、養老金を著しく增加したるが如き、其他、軍隊の武器、被服の如き著しく進步發達し、殊に千九百九年より實行せられし、露國の軍制組織は今や全く完成するに至り、又、第三回の「ヂュマ」は國防問題に對して委員會を設け、最も有力なる補助を與ふるに至れり、想ふに、蒔きし種子

は葬られざる可からず、日露戰爭は「露國の陸軍革新」なる種子を蒔けり、吾人は今日に於て尚ほ陸主海從主義を改むるの必要なしと信ず。（三月十六日）

歐米婦人界の新傾向

日本女子大學校長　成瀨仁藏

私は歐米各國を歴遊して各大學を訪ひ、教育界の名士と互に教育の根本に關する意見を交換して、女子高等教育を視察する傍ら、所謂婦人參政權論者の實際に就いても目擊し、其事情をも些か知ることを得たやうに思ふ。

此問題の因つて起る所は深く、一言にして盡すことは出來ないが、要するに婦人が男子から自由を要求する運動である。從來の女子は男子に比して一般に劣る者と考へられてをつたが、近來女子教育の發達は必ずしも女子が男子に比して劣る者ではないといふ事を證據立てるやうになつて來た。そこで女子の理想、女子の希望といふやうなものも之を社會に實現し度い。例へば家庭といふものに對しても斯うあり度い、斯うあらねばならぬといふ女子の要求を滿足さし度い。然しながらさうした要求を滿足さす爲めには女子も男子と同等の權利を有つて社會的に働く必要がある。婦人の能力が男子に比して必ずしも劣つてはゐないのに、婦人の理想、社會に對する婦人の要求が少しも容れられないのは不公平である。此自由を獲ん爲めに——即ち彼等婦人の理想とする社會の進歩發達、家庭の改善等それらの目的を達せんとする謂はゞ手段として參政權運動は起つたのである。婦人も男子と同じく參政權を得

男子と同じく意見を發表して社會人類の貢献に資する所があり度いといふ主旨に外ならない。社會に對して男子の思ひ及ばぬ女子の理想なり要求なりをも容れて、お互に協力して以て社會の進歩改善を圖らうといふのが彼等一派の願である。

然しながら一般には私の歐米に滯在してをつた間にも見たやうな、諸官衙大商店の破壞燒打の如き暴亂を行ふ一群の婦人のみを目して參政權運動者と見做してをるやうである。がこれは大なる誤であつて、何れの國に於ても斯る常規を逸した一派の手合を出すは免れざる所であつて、これが爲めに穩健な眞實な論のあることを忘れてはならない。寧ろそれらの人は斯る暴擧に對して自分らの正當な穩健な主張運動の爲めに密に憂慮し、顰蹙さへしゐる。この參政權運動も歐米の婦人大多數の贊成を受けてゐるといふ譯ではないのである。

現今日本に起りつゝある所謂新しい女の一派は果して如何なる根柢の上に立つて、如何なる方向に進まんとするものであるかは能く知るを得ない。殊に暫らく日本の事情に遠ざかつてゐた私には近頃那邊まで進行して來てゐるかは解らぬが、唯種々傳へられるやうなことは、是れは要するに一種の病的な狂的な現象であらうと思ふ。それが果して彼等の眞相であるか否かを詳にせぬから、立ち入つた批評は出來ぬが、中には頭が相應に出來てゐても、いかにも常識が缺けてをる。自分の事以外親の事も家の事も教師の事も乃至社會の事もそれらは總て顧みないといふやうな人がある。私はそんなのは生理的に缺陷を有つてをるのであらうと思つてゐる。徒らに皮相の雷同をして、個人主義を我儘主義と誤解し、保護監督を束縛干渉と混同して、妄に奇矯を衒つてゐる者も固より少くあるまいと思はれる。

事實に於て日本の女子が自由といふものに就いて得て居る所が歐米に比して少いのであるから、此間に改良改善の餘地は存してゐると思ふが、一時の病的發作的行動に因つてそれが得られるものではない。又個

人主義と言ふけれど、西洋に於て家庭を重んじてゐるとは驚くべき程であつて、決して家庭を外にしてゐるのではない。自分を尊重することは可いが家庭を外にし社會を外にして自分の存在は保たれないといふことを知らねばならぬ。

一時的病的の發作ならば須臾にして舊に復するてあらうし、これが爲めに健全な發達を遂げた女子が動かされるやうなことのあるべき筈もないから、さして憂ふるに足らないと思ふ。私は日本の女子が十分に實力を養ひ、深い根柢の上に立つて眞摯なる努力を致すことによつて、自らその占むべき婦人相當の地歩を占めるやうになることを希望するのである。

最近人物の動靜

覆面冠者

△加藤高明男は一月十三日に倫敦を出發し、同月二十八日に東京へ着し、翌二十九日に外務大臣に就任して、二月十日に辭表を呈出した、大臣たること僅かに十三日で有ッたが、此の十三日間に桂公と政友會との間に奔走して、妥協の相談を進めたから、いよ〳〵山本内閣成立と云ふ時に、政友會からは留任を勸告したと云ふことだ。

△然るに西園寺侯へ、勅諚降下と云ふ段取りは、加藤君が奔走の結果で、彼れは桂公と共に參内して、此の事を奏請した責任が有るので、政友會の留任勸告には應ぜずして、桂公と情死を遂ぐる事となッた。

△政友會は一方に國民黨と提携して、閥族打破、憲政擁護を唱へつゝ、他方には桂公に妥協を勸めて居た、望月右内君が桂公を訪問すると、木村政次郎君が後藤

男を訪問する、吉植庄一郎君が加藤男を訪問して、それ〳〵妥協談を持ち出し、議會を解散せずして、時局を收拾し得ることを相談したので、桂公は二月五日に停會を奏請したと云ふことだ。

△吉植君は同縣の友人なる木內重四郎君を介して、加藤男に接近し、時局收拾に關して、加藤男と原敬君との間に奔走し、加藤男をして閣議に於て勅諚降下說を主張せしむる迄にやッたさうだ。

△農商務大臣山本達雄君は就任後間もなく、農商務省から徒歩で、其の横の木挽町の森村組に、森村市左衞門君を訪問して「今度御近所の農商務省へ移轉して來たので、一寸御挨拶に罷り出でた、全體蕎麥を配ばる所だが、行政整理、經費節減の際だから、お許るしを願ひたい、然かし通商貿易上に關する御高見は、ドウか伺ひたい」と言ッたさうだ。

△新任日銀總裁三島彌太郎子は、駒場農學校の出身で米國に於ても、アムハースト農學校を卒業し、學理に於て精通せるのみならず、那須野や北海道でも、實地の開墾をやッた人だから、同じ銀行でも勸業銀行か、北海拓殖銀行の方が適任だ、然かしながら頭腦は良い人で、五六年前から未來の大藏大臣として、世人に注意されて居る。

△後藤新平男は內閣交迭後、足痛で湯河原や熱海へ轉地療養をして居るが、客に語て曰く、我輩は足でも痛くないとヂッとして居ない方だが、活動して却て良くない場合が有るから、今日の場合では、足が痛いのは我輩に取て却て幸ひかも知れない、マア當分寢て居る積りだ、其內には又我輩を要する時節も到來するだらふよ。

△內務大臣の交迭する每に、地方官の交迭を行ふのは良い習慣でない、大浦子が內相になッて、首を斬ッた安藤、川島、森の三君を原敬君が內相になるや、直ちに之を登用し、北海道、愛知、新潟の如きは、新任長官が二ヶ月に滿たざる中に交迭となッた、地方官の如き事務官を、政爭の渦中に引込み、內閣交迭每に動搖せしむるは、良くない事と思ふ。

△今回の交迭中、一寸異様の感を人に與へるのは、寺田祐之君が廣島縣知事となッたことだ、彼れは日清戰爭當時、廣島縣警部長を務めて居る中、有名なる光菊を伊藤公へ周旋したる功勞に依て、東京府書記官へ榮轉した男だ、それが十七八年振りに廣島へ知事となッて、戻ッたのだから、今度は誰れにドンなことをするかと、廣島人士は注意して居るさうだ。

△新潟縣知事になッた安藤謙介君は、今日では全く原系の人となッたが、本來芳川系の人だ。

△彼れが芳川顯正伯の知遇を得たのは、日清戰役後の事で、彼の駐韓公使三浦梧樓子が王妃殺害事件をやッた時の事だ、當時の伊藤總理は、三浦公使の非行を聞くと同時に、大に怒り、司法大臣たる芳川伯に向て、彼等の捕縛方を命じた。

△然るに其の犯罪嫌疑者は、三浦公使、杉村書記官の外、岡本柳之助、柴四郎、國友重章、安達謙藏を初め豪傑の連名四十八人と云ふのだから、通常の人間を送ても、能く其の功を奏するや否や分らない、大學を卒業したばかりの青二才の法學士などでは、如何に屁理屈をコネ廻はしても、此等の豪傑を捕縛すると云ふ任を全ふすることは覺束ない、ソコで芳川司法大臣は種々其の人物を物色したる結局、當時横濱地方裁判所の檢事正をして居た安藤君を得たので有る。

△彼れは露國通で、人物も露國式の無鉄砲だから、確かに其の任を全ふするを得るだらう、との評定一決して、彼れを差遣すると、果して其の功を全ふしたので以來芳川伯の信任を得て、芳川伯が内務大臣となッた時は、必ず知事となッた者だ。

△それが今日では熱心なる原系の人となッたのは、日比谷焼討事件以來、芳川伯は政界に脈が無くなり、伊藤公は殺され、三浦子が山縣公と接近して、樞密院に入り込み、柴四郎、安達謙藏の諸君は、大浦子に接近して居て、山縣桂の系統には、彼れの伸ぶべき餘地がないので、此の方面に見切りを附けて、原君に接近した者と見える、何でも愛媛縣知事の頃から、政友會に忠勤を勵むの人となッたらしい。

△新任警保局長の岡喜七郎君は岡山縣出身て、明治二十四年卒業の法學士だ、此の年岡山から四人の俊秀が法學士となッた、窪田靜太郎、村木正憲、河村彌三郎の三君と此の岡君だが、此の四人の中では、學業の成績は岡君が一番劣等て有ッた、然るに社會へ現はれてからは成績が一番良い樣だ。

△彼れは朝鮮ては內務次官迄やッたが、木內重四郎君と喧嘩をして、兩成敗に逢ふて、內地の地方官に轉じた、窪田君は永い間衞生局長を務めて、今ては行政裁判所評定官と云ふ隱居役となり、村木君は大藏、遞信の書記官から一轉して、今ては宇治川水力電氣の專務取締をして居り、河村君は宮崎縣事務官だから、先づ今の所ては四人の中、岡君が一番良い樣だ。

△松居松葉君、自由講座に於て進化論を反駁して曰く「適者生存、不適者死滅と云ふは、眞理と思はれぬ。人間にも臍と云ふ無用の者か、永く存在して居る」と、彼れは臍が茶を沸かすと云ふ緊要の任務あるを知らない者と見える。

△山路愛山君は桂公が議會を解散して、大に奮鬪を試みざりしを遺憾とし(「アンな腰の弱いことて、政治が出來る者か」と罵倒して居るさうだ。

△福澤桃介君が議會に於て、日本郵船會社の非行を攻擊しながら、忽ち之を取消したのは遺憾だ、郵船會社の腐敗した金に衣食して居る政治家も多い事だから、彼れの記錄は、是非發表させたかッた。

△桂公の新政黨員て、堂々と議會解散論を主張した者は、大石正己君一人て、外の者は解散を恐れ、一人も之を主張した者が無かッたさうだ、ソコに往くと流石に大石君は大局を見て、一身の利害などは、眼中に置て居ないからエラいとの評判だ。

「最近人物の動靜」今後每月掲載せらるべし

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

!!最新刊!!

■ダンヌンツィオ氏作・矢口達氏譯■

巖の處女

全一冊

四六判洋裝
總布金文字入
特製美本箱入
紙數四百餘頁
價金壹圓拾錢
小包料 內地八錢

空しく幽く荒れ果てたる庭園には、しづかな泉がとこしへの諧調をかなでゝ居た。美しくも儚ない三人の處女は、こゝに咲いてこゝに散つたのである。同じ鬱憂と悲哀とを呼吸しつゝ、いたましい靈の織物を相共に織りなした三人の處女を、運命はいかに愛し、いかに弄んだであらうか！アネモネの花と水松の影とに彩られた墓地のやうな築山のほとりに、悲しくも熱き呼吸を交はしたるあはれな乙女よ！

睡蓮の白い花に蔽はれた川づらに、巖のかなたへ沈む夕陽の光につゝまれて、一しづくの乳の流れにも崩されむとする完美の輪廓を示した儚ない乙女よ！

兜の如き巖の幽寂な山巓に、鬼氣を吐く噴火口を眺めながら、うち顫ふ心に犧牲の悲哀を秘めて、濫るゝ悲を葬つたいたましい乙女よ！

『巖の處女』一篇は、詩の國夢の鄕たるイタリヤの地に編まれた、艶美と悲哀との極を竭す匹いもないロマンスである。譯文の流麗、裝禎の優美と相待つて、文學愛好者は勿論紳士淑女の淨几上缺くべからざるの好著である敢て諸賢の愛讀を俟つ。

好評たちまち三版

トルストイ作 矢口達氏譯

コサック

四六版洋裝
頗美本箱入
正價金壹圓
小包料八錢

好評たちまち三版

ビョルンソン著 矢口達氏譯

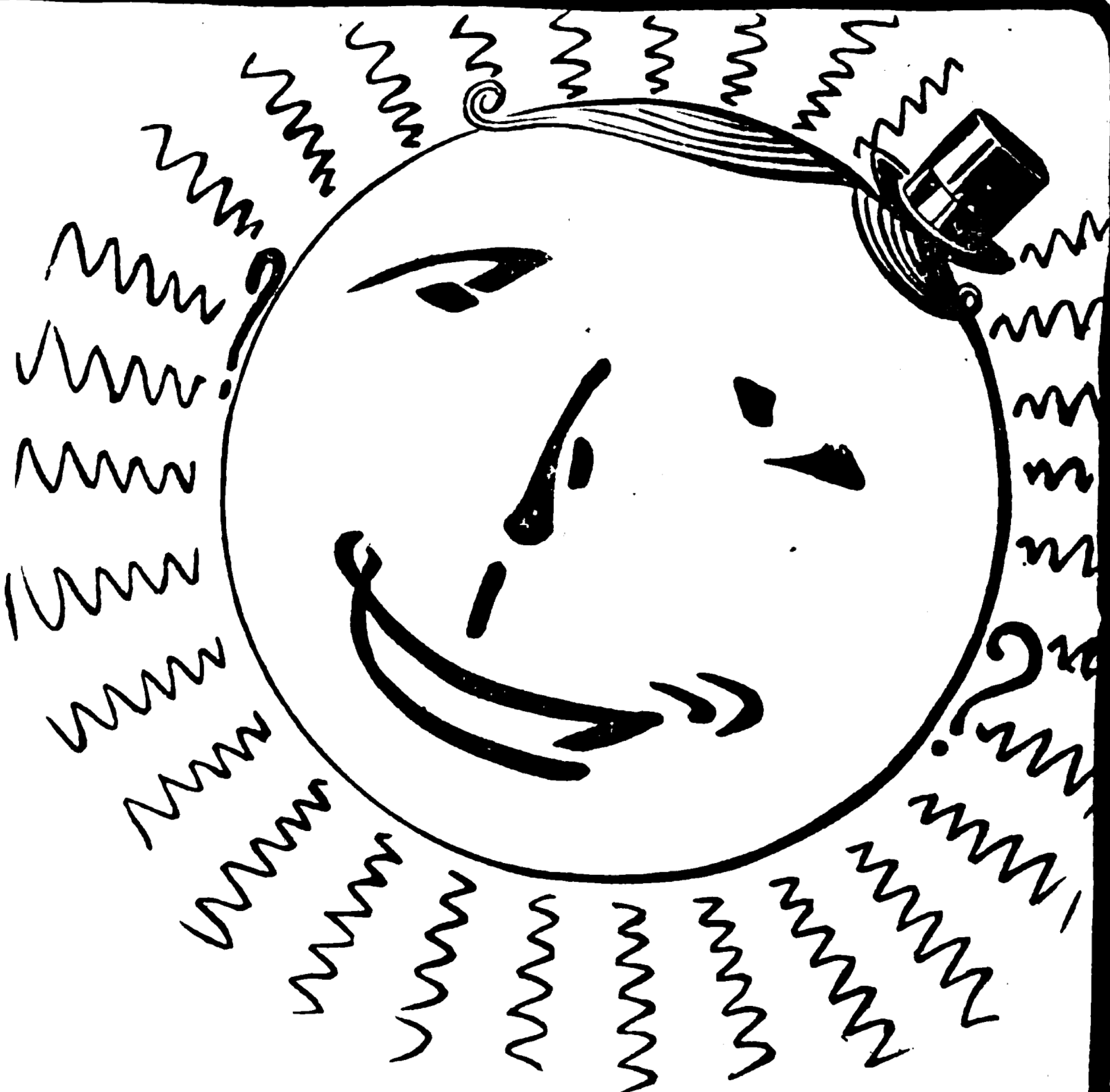
アルネ

四六版洋裝
正價六十五錢
小包料八錢

東京市小石川區高田豐川町
發行所 新陽堂
振替口座東京一[illegible]
賣捌 全國各書店にあり

(中付一の二)

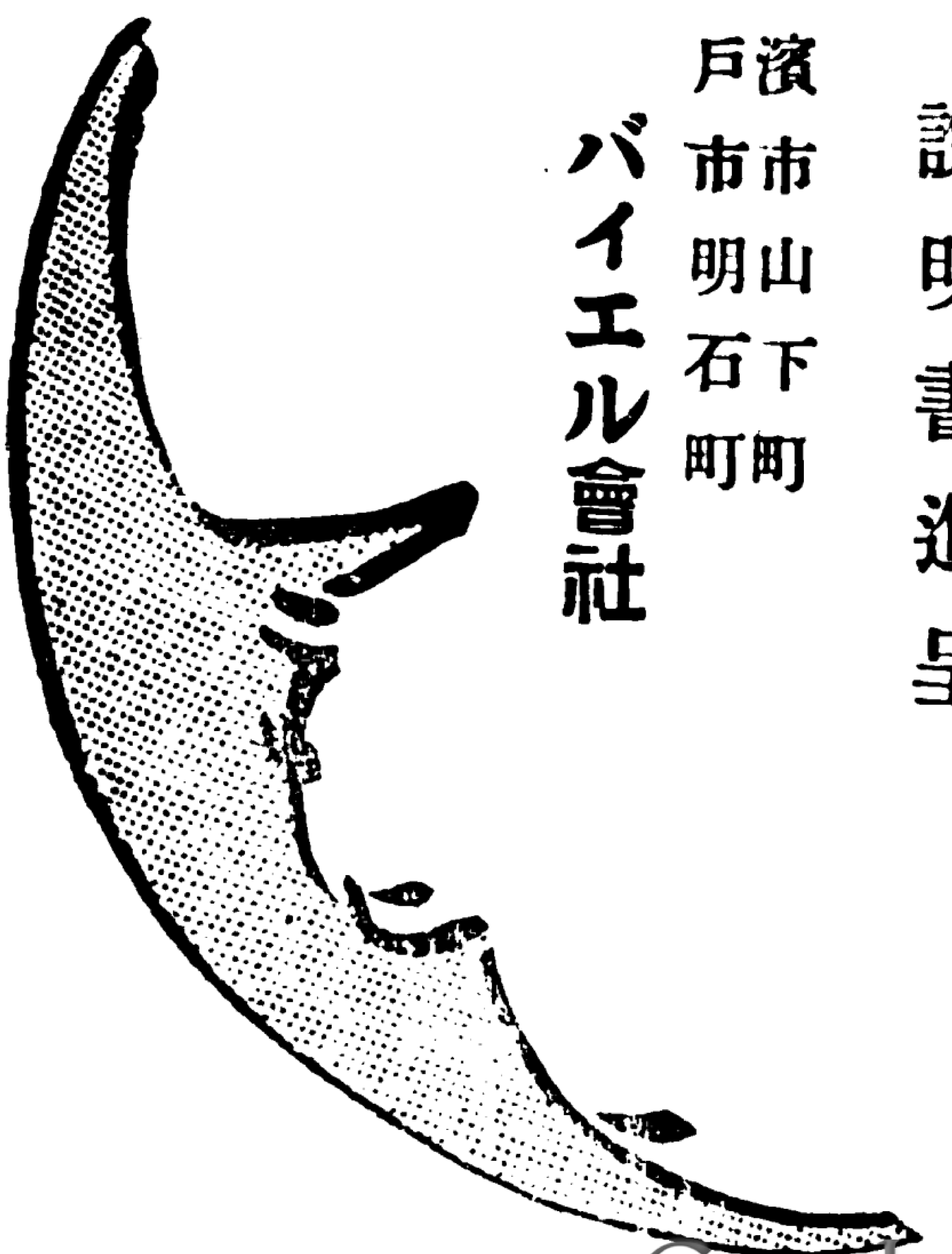
此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



虚弱なる人は
全世界に名聲嘖々
たる滋養強壯劑
ソマトーゼを試みよ。

説明書進呈

横濱市山下町
神戸市明石町
バイエル會社



女優の內幕を暴露せる 獨逸女優の日記（二）

山本迷羊

七、怖しい初經驗

ヘレーネはコンラードからズーデルマンの『故鄕』の一齣の試驗をされた結果優れた才能を認められ、母親にも內證で、學校へ勤めるかたはらコンラードに稽古をして貰ふことになッた。聞けば從來コンラードの扱つた女優の卵の五分の四は小學校か日曜學校の生徒て、學力の低いことはお話にならないのだとのことだが、ヘレーネは、何を言つても教育がある上に死者狂になッて勉强するから進歩が恐ろしく早い。

て、少しも早く舞臺へ立ちたいといふ希望て、ベルリンにゐる各劇場の代理者を訪ねた。勿論ギョッツやコンラードの紹介狀を持參したのだけれど、一人の代理者からはすげなく撥ねつけられ、もう一人からは、危なく强姦に遇はうとした。花の如き女優志願者は玆に生れてはじめての怖しい經驗をしたのである。

代理者といふのは、一口に云へば各劇場に連絡のついてる俳優周旋人て、自分の口入をした役者からは其の給料の何分といふ口錢を取るのだが、これは十中の九人までは金次第でどうともなる卑劣極まる奴て、俳優を商品扱にする。若しこの周旋屋の手を經て、スルスルと甘い口にありつかうと思へば、此奴の頰桁を少くて五百マルク（二百五十圓位）、もちッと奮めば千マルク（五百圓位）ぐらゐの紙幣束て叩かなくッちや駄目だとは、かねてギョッツから聞かされて居たけれど、眞逆こんな獸のやうな奴が帝都の眞中に居ようとは夢にも思はなかつた。（稿者曰。周旋人は自分の契約を取扱つた俳優から、その契約の繼續期間中は給料の五分を手數料として取ることになッてる。その期間が濟ん

でも、同一劇場に再出勤の契約が成立つと、その際件の周旋人は何も關係しなくても年收の三分宛を貰ふ規約がある。又、周旋人から資本でも借りてる座頭は、惡くすると此奴から無能の俳優を高い給料で押付けられる事なんかもある)

歸ッてから師匠のコンラードに、怖しかつた出來事の一伍一什を物語つて、無禮にも程がある、迚も此儘では我慢が出來ないと敦圉くのをコンラードは平然と聞き流して、代理者に反抗するのは大變な不利益だ。若し貴女がそんなことをしようものなら、彼奴等はその腹癒に各劇場の座頭にあなたのことを惡しざまに言觸らす。この女は容貌も醜く藝も拙いと、かう彼奴等に言はれると、座頭はそッちの方を信用する。こんなことは屢々あることだ。こんなことになるのも、兎角女優の中には、彼等の手でちッとでも好い口にありつかうと思つて彼等の獸慾を滿足させてやる者が多いので、先方は益増長するのである。が、この次若しそんなことがあつたら、此方からも挑發的に、觸らば靡くといふ風に嬌笑を浴せかけて、兎も角契約を濟ませてからと言つてやれ、但し契約書には出勤の期間を明記させなくッちやいけない。この契約さへ濟ませりや後は野となれ山となれ、この位圖太く構へなくッちや迚もこの社會で出來ぬと入智惠をして吳れた。

八、新生涯

ヘレーネを女優にするのは元よりギヨッツの本意ではなかッたが、肝心の當人がどうしても初一念を飜へさないので、今は彼も思切つて彼女のために及ぶ限りの盡力をすることに決心し、自ら周旋の勞をとつて同市の市立劇場へ出勤させることにした。母親を說きつけるにも彼は與ッて力があつた。座頭はヘレーネの『故鄕』の試演(女主人公マグダに扮す)を觀て非凡な才幹を認め、差當り七十五マルク(三十六圓許)の手當で即座に傭入れる契約を結んだのである(無論試補だから無給でもかまはないと思つてた位なので、七十五マルク與ると言はれた時には吃驚した。座頭は七十五マル

クが老過ぎるなんて言つてるうちはお芽出たいものだと笑つてる。

ヘレーネがこの土地で女優になることに就いては、ヘレーネの後見をしてゐる例の牧師の叔父さんが大不承知であッたが、運よくヘレーネはその時丁年に達したものだから、もう何とも嘴を容れることが出來ず、ヘレーネから直接談判をされてとう／＼泣寢入になッてしまッた。ここでヘレーネは父の遺產を自由にする權利をも得た譯である。

牧師の娘が女敎師となり、女敎師が一足飛びに女優となッた。この新生涯は美しい人を樂園へ導くか穢土へ伴ふか？

ヘレーネは老練なコンラードを師匠として一心不亂に舞臺稽古をする傍、ギヨッツの豐富な文庫を獵ッて、文學哲學心理學歷史美學等、その他すべて演劇に必要な諸般の智識を得ることに全力を注いだ。これでは敎師時代よりも餘程忙しい。

ところが、他を見ると合點の行かぬことばかりだ。このやうな高尙な藝術にたづさはつてる者も、自分の職業に對する態度は、他の職業に從事してゐる者と毫も變りはない、たゞ自分達の割當てられた義務さへ果せば用は濟むと云ッた風で、謂はゞ何でも板の一番薄い處を覘つて穴を明けよう／＼と心掛けてる、死に身になッて藝術といふ神樣に仕へる樣子はちッとも見えない。それから又、俳優同士の交際といふものが、思切つて自由なものである、試演中でも本舞臺でも、樂屋裏でも衣裳部屋の前の廊下でも、乃至談話室と試演の大廣間とを問はず、お互に他を憚るといふ風は藥にしたくも見當らず、男優と女優との間に既に忌はしい關係がある上に男優は觀客中の婦人と女優は鼻下長と關係をつけてゐて、胸糞の惡くなる淫猥なことを、聾者にも聞えよがしの大聲で話し合つてゐる。關係といふのは無論肉臭紛々たるやつて、ヘレーネは樂屋生活をすること僅に二週間ですッかり此間の消息通になッてしまッた。

かういふ空氣の中へ女敎師上りの牧師の娘が不意に

這入つたのだから、迚も朋輩としッくり合ふ筈が無い。他の女優達は已むを得ない用てもなければへレーネとは口もきかないのを、初は變だと思つて居たが、段々樣子がわかッて見れば、へレーネは道樂に樂屋這入をしたものと誤解されてゐたのてあつた。

開闢このかた切ッても切れぬ腐れ緣の虛榮心といふ奴に附纏はれて、獨逸の女は娯樂半分に女優になるものが尠くない。七面倒くさい社會上道德上の束縛を超越してゐる不羈奔放な樂屋生活の面白さを一二年も味はう、眼の覺めるやうな贅澤な衣裳を着けて、極骨の折れない下廻りの役を勤めて、觀客の喝采を博して見たい、これがその連中の當の目的て、別に藝術を好むからてもなければ、高い給料が欲しいのてもない。黑幕には所謂金の棄場に困る檀那（大抵座頭の知己か芝居の定連）が居るのだから、衣裳は贅澤の爲放題てある。給料はほんのお印ばかりに貰ふのもあるが、大抵は無給、惡くすると數ならぬ身を一座へ加へていたゞく御禮に此方から金を出すのもある。元よりこれは表沙汰には出來ないことだが實は公然の秘密て、かういふ劇界の寄生動物が眞劍にパンのために働く專門の女優の邪魔をすること一通てない所から、藝は巧からうが惡からうが、彼等は樂屋ては蛇蝎視されてゐる。但し座頭は、無給て衣裳の立派な女優が使へるのだからホク／＼喜んてゐる。へレーネは、この種の金に困らない女優と間違へられたために、朋輩から仲間はづれにされたのてあつた。

その中にへレーネは『テル』（シルレル作）のベルタを演じて最初の好評を得、次いて『ヱニスの商人』（沙翁作）のポーシャに扮して破れるやうな喝采を博した。全體觀客は何處の劇場ても男より女の方が多い。そしてこの女客なるものは、女優の藝よりも衣裳に重きを置かうといふ度し難いもので、座頭も彼等の御意を迎へるに汲々としてゐるから、段々いゝ役にありついて成功の階段を登るには勢立派な着物を着なければならぬ、女優が美しい舞臺衣をこしらへるのは學生が書物を買ふのと同じてある。是に於てかへレーネもポーシ

ヤの衣裳には、大形の花模様の間にベタ一面金絲で刺繍をした猩々緋の紋緞子だの、銀絲の縫箔を置いた紺碧のリップス(織物の名)だのといふ、後腹のやめる位素晴らしいのを張りこんだ。尤も第四幕目につかふ判官の服には、亡父が在世の頃神壇の前の勤行や善男善女へお説教をするときに着馴れた牧師の法服を引ずり出し、舊弊な母親をやつとこさ納得させて、自分の身體に合ふやうに仕立直したといふ珍妙な話もある。

こんな調子でヘレーネの評判は益好く、母も娘の成功を共に喜ぶまでに開けて來たが、訝しいのは朋輩の態度である。抑も女優なるものは利己と嫉妬の化身で、公共心なんてものは爪垢程もなく、よしや自分の勤めてる劇場の評判は惡くても自分さへ給料を澤山貰へば好いと考へてる代物だから、今新參の朋輩が一躍同市劇界の寵兒になつたのを見て、小癪な推參者とばかりに罵詈嘲弄を浴せかけたのも無理はない。彼等に言はせれば、これが正當防衛である。

その後『新聞記者』(フライターク作)のアーデルハイドを演じ、『シラノ・ド・ベルジラック』(ロスタン作)のロザーヌを演じ、一役毎に沸さかへるやうな喝采を博した。アーデルハイドをやつたときには土地の新聞が筆を揃へてヘレーネの妙技を褒めそやした中に、特に或る劇評家からは過大の讃辭を貰つた。師匠のコンラードはヘレーネに入智惠をして、その劇評家に禮狀を出させた。彼は自分の眞價を認めて彼の職務を爲しただけだから禮には及ぶまいと拗ねて見たけれど、これも芝居道の慣例とあつて、萬事何事も仰せの通り。

九、役爭ひ

(何だッてお前さんはまた妾の役を奪らうッてンだい! いえさ、何の遺恨でこの妾を苛めるんだよ、一體妾を誰だと思ッてるンだい。ヘン、あんまり人を馬鹿にしてお呉れでない。憚り乍ら此方なンざこの小屋に五年も居て、誰一人名を知らない者あないこの妾だ。お前さんは何だい、え、よく御覽、新參も新參も出てのホヤ〳〵の、まだお尻に殻が粘着いてるぢやないか、色男の一匹や二匹居やがッたッてちッとも怖かね

え。戸惑をした藝無し猿が後から割込んで來て、お客様だらうが新聞だらうがちやあんと腕を知りぬいてるこの妾を追ひてくらうッてのは、それが厚顔しいと云ふもンだよ。妾に今度の役を譲つて呉れなきやア市長様へ訴へるが好いか。ナニ、あなたの役を奪るつもりぢやありませんッ…？　座頭さんが妾の方が嵌り役だと思つてロザーヌの役を呉れたンだらうッて？　ヘン、笑はかしやがる、そンな人を喰ッた言ア芝居の風をもう二三年も吸つてから言ひなよ。何でも好いから、文句を言はずにロザーヌの役は座頭さんへ返してお仕まひなさいよウ、あれは妾がやるに極ッてらアね」

古手の女優は口汚く罵つた。これは例のアーデルハイドに成功したヘレーネが更にロザーヌの役を割當てられたとき、「タンホイゼル」の幕間に樂屋で起つた出來事である。その女は、この劇場から「妾が退くかお前さんが出るか」とか、「何でもお前さんの邪魔をしてやる」とか嚇しつけたが、ヘレーネに座頭へ訴けると言はれて、歔欷し乍ら愚痴をこぼしはじめた。お前さんは食べるに困る風もなし淫賣をする様子も見えないが、何だッて芝居へ入ッてるンだ、といふ名言もこの女優の口から聞かされた。

何を目的に女優にならうと大きにお世話だ、一旦女優になつたからには、朋輩の世迷言なんかを聞く耳は持たない、自分一人が水平以上へ浮き上りさへすれば他人の困るのは百年でも堪忍する、これが當世の役者氣質といふものである。て、かうやつて傍目もふらず勉强してゐるうちに、ヘレーネの技倆はぐん／＼進むばかり。その後に演じた『マリア・マグダレーナ』（ヘッベル作）のクララと、例の十八番の『故郷』のマグダとに至つては技いよ／＼圓熟し、竟にこの劇場の座頭として向一年間傭用の契約を結ばせ、月給二百五十マルク（百二十圓程）を給與されることになつた。樂屋へ這入つてからやつと五個月半ばかりてある。それに例の周旋人の手にかからないのだから、手數料を奪られる心配もない。

師匠のコンラードは愈墺都ヸインの劇場へ出勤する

契約が纏ッた。幸運兒なる哉。

ベルリンか井イン！ この二大都、殊に伯林の檜舞臺へ上ることは、獨逸全國の俳優の理想である。ヘレーネと雖この例に洩れぬ。

十、蛇の道

春が來る、春が來る、野にも山にも春が來て前裁の樹々が角芽だち、鷽や鶉が嫁取の歌を歌はうといふ頗る景氣の好い時節になると、絢爛眼を奪ふ人爲の春は凋落の委傷ましく、哀れや劇界は霜枯れて來る。興行季節の終となれば、役者も座頭も舞臺監督も乃至は觀客までも懈れて來る。けれどもその「懈れ」がハタと止んだときは、役者の口の乾上る時である。已むを得ず一座は分散して、『彼』は何處かの夏興行にありついたが、『彼女』は傭ひ手がない、さもなければ『彼』は南へ『彼女』は北へといふことになッて、會者必離の悲劇は到る處に演ぜられる。

何をするにも、先立つものは金である。ヘレーネの朋輩達は何れも、「冬の興行季節の短いのを嘲してゐる。獨逸全國の劇場の少くとも十分の九は、六個月か七個月か、一番長いのでも八個月を超えぬ制度を採つてゐる。俳優社會に籍を置く者で、この季節に入る自分の所得の幾分を夏季の生活費に貯蓄し得る位の高給を貰つてるのは、第一流の歌劇役者だけである。總じて歌劇役者は我々正劇の役者より迥に割が好い。第一あの連中は身邊の装飾が我々よりも少くて濟む、歌劇の女優は十五種か二十種も衣裳をもつてゐれば福々である、だから若し最初に上等物を買つて置いて、それを仕立直しては着る手際があれば、四五年は安閑として暮せる。男優にしても、歌劇の方は正劇の連中よりも氣樂だ、歌劇役者の衣裳は殘らず劇場負擔だけれども、我々の方の男優は、當世流行の服裝を自分で調へなきやならない、それに演る劇が九分九厘まで時代を現代にとつてあるから、この費用も中々少いことではない。

夏興行に傭はれない俳優は、五六個月の間は食ふや食はずの情ない生活を送らなければならないのだが、

夏季に蓋を明ける芝居は極少數なところへ持つて來て、そのやつてる芝居も一座の人數をずッと減らすから、遊ぶ者がうようよ出來るわけである。三四萬マルク(一萬五千圓乃至二萬圓位)の金儲をした座頭殿は湯治と洒落込んで贅澤三昧に日を送るのに、彼のために金儲をしてやつた藝術家は懐に三文の貯もなく、パンと馬鈴薯でカツ〲露命を繋がなきやならないやうなことがよくある」

全體、市の當局者が劇場に對して風馬牛だから、座頭が跋扈するのである。市は座頭に交渉して一年の興行期間を少くとも十個月ぐらゐにさせたらよからう。て若し座頭の財力が乏しくつて十個月興行することが出來ない場合には、市から劇場へ補助金を下附したらよからう。劇場は或る意味に於て立派な國民教育の機關である以上、市は學校へ下附すると同じ性質の補助金を劇場へも給與するのが至當である。尤も興行期間ばかりが長くなつても、現在のやうに座頭が三四萬マルク乃至それ以上もある純益を獨占にし、俳優を冷遇逆待して加之自分勝手のときに解雇するなんぞは不屆だ、これも是非どうかしなきやならない。が先づ俳優保護の一案としては、市立劇場は市が直接に經營し、市の役人に事務を執らせ、俳優を市の職員扱にするのもよからう。元來市の所有權の下にある劇場を民間の企業家に借與するといふのが抑の間違で、市の品格にもかかはる事ではないか。けれども市長達が現在の俳優の境遇の悲慘なことを知るの明なく、演劇を國民教育機關として尊重するの識なく、又俳優そのものが愚劣な觀客の眼に依然として社會以外に立つて普通人以下の懶惰不品行な生活を送つてゐる浮浪者と映じてゐる間は、此要求は中々聽かれさうもない。と敦圉いては見るものの、實際今日の俳優なるものには情ない人間が多い。彼等は、自分の榮達といふことの外には何も考へない、團體精神の全然缺けてゐる人間であつて、俳優なる一階級の社會的地位を高める爲めに或る一致の行動を採るなどといふ事は決して出來ない。自分一人が好い役にありつき高い給料を貰はうために

は、あらゆる卑劣な手段を弄して、現に同じ劇場に出勤してゐる朋輩を陷れるのを當然の事と考へてる。座頭に無名の手紙を送るぐらゐは愚なこと、劇評家に面(めん)と對つて何の某は貴殿の惡口を言つてをりますなんて根も葉もない讒言までする。嗚呼、いつの世になつたら俳優が共同生活の美風を感得するであらうか。

十一、女優と私娼

萬葉集に貧窮問答歌なるものがあつて、色々哀れつぽいことを並べ立ててゐるが、結局「世の中をうしとやさしと思へども飛立ちかねつ鳥にしあらねば」で收まつてるのは、どうしても櫻かざして遊び暮した大宮人の貧乏である。飛行機の發明された今日、空へ舞上る位は朝飯前(あさめしまへ)だが、飛べて飛ばないところに現代人の悲哀がある。芝居のない間、貧に驅られた男女の俳優は、鐵火を呑む苦みでどんな事でもしようとする。ヘレーネは幸に七十五マルク(八十四圓許)の給料で夏興行に出勤する契約が出來たから好いやうなものの、若しこの口がなく、又僅ではあるが兎に角親讓りの財産を有つてゐなかつたら、胃袋を膨ませる爲めにどんなことを押始める(おつぱじめる)やうな境遇(はめ)になつたかも知れないと日記へ書いてある。

同じく貧に苦しむにしても俳優社會ほど遁途(にげみち)の明いてないとこはあるまい。けれども窮すれば通ずとやら、女優は自分の操を金に代へることを惡いこととも恥いこととも思つて居らぬ。ヘレーネの出勤してゐる市立劇場の俳優は一般に風儀が良いといふ評判なのだが、それでも裡へ這入つて見れば、醜態女優の見本は箒で掃く程轉(ころが)つてる。

「妾の劇場の舞手連中は、風儀にかけては一人殘らず滅茶々々な無政府的生活を送つてゐる。彼等の給料が廉過ぎてコンマ以下の生活を支へるにも足りない事がその原因であるのは勿論だが、放埒な生活を送つて見たいといふ內心の烈しい慾望も慥にこれを扶けてゐる。市長等は、給料の少い事も又それんばかりの金で人間一匹の命のつなげない事も百も承知してゐる。從つてその連中が飢餓を脫れたい一念で已むを得ず淫を

騷ぐに至こ自然の經行を先刻御承知て居乍ら、それを救濟する何等の方法をも講じてゐない。數ヶ月以前、自分は出勤後間もない頃であつたが、他の部屋が皆塞つて居たので、仕方なしに舞手連中の衣裳部屋でその連中と一緒に衣裳替をしたことがあつた。「猶太女」の最後の幕て、猫も杓子も一人殘らず舞臺へ狩出された時てある。自分は初め衣裳を着けるときに三十分、後て衣裳を脱いて舞臺顏を直すのに三十分ばかり、都合二度この部屋に居たのだが、周圍は女の子の話と情事の話とて持切だッた。加之それが別に艶曲な言廻をするてもなく、いけ洒々として話して居た。丁度世間の人が寒暖の挨拶てもするやうな態てある。女の子達はお互に自分の情事を露骨に語つたり、報酬に貰つた物品が善かつたとか惡かつたとか、そんな事ばかりべちやくちや喋つて居た。どれを聞いても胸の惡くなるやうなことばかりてある。その中にはやつと十四位の小娘も居るのだが、子供を芝居へ入れて置くのは險呑千萬なことだ。

こんな猥な話をして喜んてるのは、上に述べた舞手連中や無言役を勤める下廻の役者ばかりてはなく、プリマドンナとかテニヨールとか言はれる屈指の俳優が大抵かうなのだから始末にをへない。多年樂屋の空氣を吸つてる或る女優は、「妾は芝居は隨分澤山渡り歩いた方てすが、こればかりは何處ても同じてすよ、役者には品の良い話は出來ないのてせう、穢い事を言はずにや居られないのだわね。それにまだ皆の話といつたら役の話もよく出ますがね、何處其處を何を演つた時にや大變な評判を取つたなんて、お互に嘘の川乘合船。てなきや座頭や批評家先生の惡口を扱きおろしたり朋輩の陰口を叩いたりして囃し立てる位のものてすよ」と物識顏をしてゐる。

女優の旦那取り、これは珍らしくも何ともない日常茶飯の事實だが、中にはランケ孃のやうな振つたのもある。ランケ孃は元來亭主から三行半を貰つて女優になつた放埓底無しの女て、或る年の冬興行には傭主がなく、同氣相求めるこれも非役の朋輩と下等な合宿所

に轉がつゝ居たが、二人寄つて上衣を一着帽子を一個しか持つて居ないので、一人が外出する時には一人は下着一枚て禁足といふ滑稽を演じてゐた。勿論宿料が拂へる譯のものでもないので、合宿所の主婦からあはや追立を喰はうとした危急存亡の秋に、金の棄場に困らうといふ銀行の頭取に拾上げられ、その蔓でこの市立劇場へ百五十マルクの給料て住みこんだばかりか、早速五百マルク許の衣裳を頭取から捲上げた。かういふ手合は、コツ〳〵正道に働いてる女優の大敵である。女の瘦腕一本では、一升の飯を一度に喰つたとて、銀行の頭取やビール會社の社長の財布の口を握つてる連中と、迚も衣裳の競爭は出來つこ無い。そこへ持つて來て、自分の劇場へ出る女優の衣裳の質素なことを希望する座頭は、どう間違つても居る筈がないから、折角風儀の良い女優の中にも、苦しまぎれに淫賣をする者が出て來るのである。

衣裳！　衣裳！　衣裳は女優の味方でもあり又女優の敵でもある。艶麗人を魅する千金二千金の衣裳は、女優をして劇界の女神たらしむると同時に、彼等をして强制的に私娼を營ましめねば已まぬ。

次號には「衣裳の罪」「金が敵」「女優の浮世」「操が大切なら」「實習？」「火と煙」「鼻持ならぬ女客」「女優と結婚」「二千五百マルク」「迫害」「恩人」等の諸項を掲げて完結し、益々女優生活の内幕を暴露すべし

人物評論（三十六）

鐵道院總裁
床次竹二郎論



△床次鐵道院總裁

文學博士　三宅雪嶺

床次氏の鐵道院總裁となつたのは强ち鐵道院に適當といふのでなく、内閣へ入れやうとしても入れにくい、仕方なしの結果であるが、全く鐵道院に不向でない許りでなく、現内閣として選擇の宜しきを得たといふべきである。

床次氏は牧野男と共に山本首相の股肱であつて、原、松田等諸氏は外様である。山本首相は牧野男に信頼しても、男は之まで種々の先輩と共にし、子養ひのやうに取扱ふことの出來ん所がある。床次氏に至ては、首相は何の憚る所なく、言ひたい事を言ひ、聞きたい事を聞く。首相となるまでは容易に人に會ひもせず、會ふ會はんは床次氏の計らひ次第ともいふべき程であつて、其深く信ぜられて居る事を察すべきである。首相は海軍の事を心得て居つても行政の事は先づ此邊を頼みとするのであつて、もつとよい位置を與へたくもあらうが、閣員に限あつてさうも行かぬ。閣員とするに經歴は不足して居らぬ。法科大學では柴田前文相と同年であつて、柴田は法律、床次は政治であつた。若槻前藏相は更らに二年も遅れて居る。然し役の割り振りからして、何分にも入閣させることが出來ぬので、親任待遇で鐵道院總裁とすることになつた。

總裁として何程の事をするかは分らぬが、前に後藤男が總裁を兼ね、次いで原氏が總裁を兼ね、又更らに後藤男が總裁を兼ね、總裁職は政爭の一の焼點となつて居つた。此二人は所謂辣腕家である。辛辣の事を敢てする。断行力ある丈けよい事もあらうが、わるい事も少くない。彼等は總裁として畢竟何をするか。鐵道に關することは一々平井副總裁以下に聽かねば分らぬ。是非得失は多年鐵道事務に當つて居るものが熟知して居る。處て、時々總裁より特別に命令することあるが、多くは或事情を伴つた事である。即ち關係者の利害より割り出した事である。よく調べて必らず斯く斯くの線にせねばならんとなつて居るのを、何かの名義の下に之を變ぜさせる。鐵道政策に害を與へても利になる事あるかないか分らぬ。後藤がすれば原もしやうとし、原が交ぜつ返せば後藤も交ぜつ返さうとする。迷惑するものは眞に鐵道の爲めに骨折つて居る者である。今回原氏が何故に總裁を兼ねなんだか。いろ〳〵の事情があらう。表面に出てずとも相當の事を爲し得ると認めた所もあらう。が床次氏を總裁たらしめたのは些か人に安心を與へた所がある。氏は政友會とか又

は特別の郷黨關係よりして鐵道を私するやうな事はないと信じられて居る。他から彼此注文せられても、總裁の信ずる所、總裁の權を以て守り、敢て動かさうとせぬてあらう。若し豫期せられて居る通りならば、別段褒むべき事のない現内閣て、氏を總裁とした事を最もよい出來榮とすべきてある。今後、後藤男が入閣するとも、再び自ら總裁とならうとはすまい。滿鐵に中村氏を總裁としたやうに、或乾兒を据え付けるかも知れんが、床次氏ほど信用あるものを得るに六つかしからう。何にしても鐵道院を稍、政爭より遠ざけたかの觀あるのは先づ結構てある。實は鐵道院の組織は後藤流て大袈裟過ぎ、無駄な費用がかかる。組織を改むべきてあるが、其邊の事まて氏に望むことは出來まい。惡るい事さへせねば澤山てある。

官僚中にも時として賞すべき人物がある。床次氏は其一人てある。朱に交れば赤くなり、氏も全く官僚臭味を受けぬてはないが、杓子定規に汲々たるわるい癖はさうない。官僚は兎角人間を器械扱ひにし、沒趣味て、殺風景て、鼻持ならん狀態てあるが、氏は之と選を異にして居る。誠に薩摩出身として有望てあり、將來重きに任ずるに堪ふるとせられて居る。

薩摩人は何處か鷹揚て迫らぬ所があり、見掛け丈けても人に長たり易いのてあるが、己れ自らの考に乏しく、政務の簡單なる間はそれて差支なくても、其複雜を加ふると共に無能視せらるゝ嫌ひがある。松方侯は後入齋と綽名され、薩摩人は總じて後入齋たる形がある。よく人を容るるといはゞいはれるが、後入に過ぎて人の惑ふことも少くない。長州人に押し退けられたのは幾分か此事も與つて居る。床次氏は此邊は確かてあるらしい。敢て人と爭はなくても何んでも御最もとするのと違ふ。確かに一見識を備へて居らう。山本伯も後入齋たるを好まぬ方てある。此のところ少しく普通の芋と違ふ。且つ薩摩人の缺點として蓄財に餘念なき事てある。薩摩人といへば金に汚いものとなつて居る。老西郷が我家遺法人知否、不爲兒孫買美田といつたのに、美田を買ふに汲々たらぬものはない。明治十年の

戰役後、薩摩の風習は著しく變つた。嘗て薩摩人は强いとなつて居つたのに、近頃徵兵檢査て體格の最も劣等なのは沖繩縣に次いて鹿兒島縣てある。强いものは戰役に死んだ爲めてあるともいはるゝ。そればかりてもなからうが何程か與つて居らう。之と同樣に老西鄕のやうな氣風もなくなつた。かの暴動に與したものも生き長らへて居れば蓄財に餘念なくなつたかも知れんが、其當時ては頗る愉快なる所があつた。一身一家は如何樣てもよい。國家の爲めに面白い事をしやうといふ調子てあつた。處が鎭壓と共に殘つた連中は、揃ひも揃つて金に汚ない。流石大久保氏はさうてなかつたやうてあるが、後になるほどいよ／＼汚ない。他の點に申分ない人ても金にかけては啻に灰吹たるのみてない。長州人はよくない事をするが薩摩人より金の切れ離れがよい。薩摩人とて何時ても美田を買はずに居れず、世が治れば治つたやうにすべきてあるが、儉約と吝嗇とを差別する位の事は無くてはならぬ。さしもに勢力のあつた薩摩が、自然（ひとりて）に勢力を失つたやうになつたのは、吝嗇に由來すること少くない。別段政治運動に金を出すといふやうな必要はないが、餘り吝嗇ては人間が如何にも見苦しい。根性がさもしく感ぜらるゝ。而かも見掛けが吝嗇てないやうて吝嗇てあるので堪らぬ。之が何とかならねば、如何に工夫しても薩摩の勢力の盛り返しはつかぬ。勢力は盛り返すに及ばず、又到底盛り返し得ぬのてあるが、それにしても嘗て人材彬々たりし薩摩よりして何程かの人物の出るやうありたい。老西鄕一人のなくなると共に薩摩の人物がなくなつたとあつては如何にも殘惜しい。誰か出て欲しいのてあるが、床次氏は其一人てあり得ないてあらうか。

何にせよ氏は評判がよい。然し評判がよいと思ひ切つた事が出來なくなる。比較的年が若いのてあるから、何程か失敗しても取返しがつく。今の所毀譽褒貶を顧みなくてよい。自分ても顧みやうとせぬてあらうが、評判がよいと何か少しの事て忽ち評判が變ることがある。思ひ切つて仕事して今の儘評判が續さ、尙益々よくなれば頂上てある。少しの波瀾はある方がよい。今

の儘に老成せずに玆五年十年思ひ切つて働いては如何であるか。働くの資格あると見えて居る。三教會同なんか隨分變なものであつたが、思附き丈けは面白い。若いといつても大久保の死んだ年より上である。薩摩の勢力、薩摩の名聲はどうでもよいが、折角目指された人物の伸びぬといふのが惜しいからして、奮發して出て來るのを希ふのである。評判倒れにならぬことを希て置く。

△第四代鐵道院總裁

鷺城學人

明治二十三年に東京大學を出たもの丶中で、伊集院彥吉・床次竹二郎・山之内一次は孰れも薩摩人で、其後も若手の役人仲間で薩摩の三人男といはれ、略ぼ轡を駢べて進んだ。伊集院は長い間、外交官を勤め領事時代にはなかく評判が好かつた。支那公使としては今まで大した働を見せぬけれども評判の惡い方でない。山之内は人物も手腕も餘りゾットせぬ、どちらかといへばボンクラに近い、鐵道院理事としても、知事としても無能であつた。其ボンクラが何故山本内閣の書記官長といふ儲役になつたかといふと、これは無論薩摩人であるのと、一つは高橋新吉の女婿といふ關係から權兵衛が引立てたものらしい。處か此大役が滿足に勤まるか怪しいものだ。伊集院も牧野伸顯が居なければ或は外務大臣になつたかも知れぬ、若し内閣が長く續くなら權兵衛は其中彼を何かにする腹で居るに相違ない。此三人の中では何といつても床次が一番抽んで丶居る、今の少壯官僚中の中でもヤハリ好い方であらう。今度權兵衛が内閣を組織するについて初めから取卷になつたのは、牧野・床次・山之内・安樂兼道等である。世間では此三人を謀士のようにいつたが、それは聊か買被つたので、實際は權兵衛の使ひ走りに過ぎぬ。

薩摩人は閥觀念の强い人種で、眼中自國人あるのみである。これは今まで薩摩人のしたことに依ても分る。長州人は悧巧であるから他國人を案山子に置いて世間

體を胡魔化すが、薩人にはそんな智惠がない、其遣口が如何にも無遠慮である。から世間の目に立ち易い。、權兵衞は閥観念が薄いといふが、ヤハリ薩摩人であるから薯畑に闘ひをしたがる。海軍が薩摩の海軍と稱せられ、實權の權兵衞系にあるのを見ても分る。今度の内閣組織でも露骨に其根性をサラケ出して居るてないか。内閣の實質からいへば薩摩が主で、政友會は從の形である、原なり松田なり元田なりは伴食の位置であるから、これ迄のやうに他の大臣に對しても威張つたことはいへぬ、我黨の内閣といつても世間が承知せぬ。權兵衞の連子が幅を利かして居るから連子内閣といはれるのも無理てない。薩摩は長い間逆境であつたから、此一機に薯の不作を回復しやうと焦つて居る。其證據には政府の要路のみならず、三島彌太郎を日本銀行總裁にする、果ては滿鐵までも勢力範圍に引入れる工夫をして居るてないか。

床次は内務省の地方局長をして居る時分から近く將來の大臣を以て目せられた。手腕派といふよりも人物派の方であつて、役人に有勝ちな嫌忌らしい風がない、何處やらに器が大きく見える、吏臭がない。内務省時代にも少壯官僚の首領に推された形があつた。内務省には一種役人とも附かず、浪人とも附かぬ中間性のものが地方局の仕事をして居る。これは朦朧組といつて内務省の寄生虫であるが、床次は此連中のオンタイたる形があつた、又た彼等も床次を心から崇拜して居る。床次が地方の書記官・參事官を勤めて居た頃は圭角があつて縣會などて盛んに喧嘩をしたものてあるが、座禪を始めてから人物が一變したらしい。最初禪を勸めたものは其の當時新潟縣知事であつた勝間田稔てあつたように聽て居る。床次も大に自覺する處があつて兵庫に轉じてから京都大德寺の和尚に參禪して段々精神を修養した。

一體薩摩人は鈍重なようてナカ／＼喰えぬ處がある、小刀細工をやらぬてもない。床次とても表面茫洋としてコセ／＼しない風をして居るが、さりとて牧野・安樂・山之内のような薄ボンヤリてない、アレてなかな

か要領を得て居る、人を見るの明もある、對人術も心得て居る。殊に人好きのされる譯は無頓着て、面倒嫌ひて極めて書生流の點にある。

鐵道院總裁としてはこれまて關係のない島に突然天降つたのてあるから後藤新平のやうに勢力を得ることは難かしい、又た原敬のやうに黨勢擴張に鐵道を利用するやうな惡智惠もなからう。いづれかといへば無難な總裁てある、無難なだけに部下に嫌がられるやうな心配はなからう。

△役人中での遣手

伯爵 大隈重信

三月十二日關西演說中德島の客舍に於て認む。

床次總裁か、あの人とはお父さん以來の知合じや。神戸あたりの書記官をしてゐたともあるが、役人中ての遣り手だらう。輕薄な所のない、計略氣の無い人て、何を遣らせても遣れる人だと思ふ。總裁にも無論宜からう。大臣を遣らせても可い。或は黨派などから入つた大臣よりは可いかも知れぬ。小役人から成上つた者には官僚息味が附くが、其弊は少い。空威張りもせず、品の善い、あの側の人ては最も性の良い人てある。

△床次竹二郎君

田川大吉郎

◎床次君は、今日の官場中て、目立つて綺麗な人と思ふ、容貌が綺麗なのては無い、容貌も綺麗な方だけれど、その心情が綺麗な人だと思ふ、即ち、一言にて蔽へば、床次君は、美くしい人てある、直な人てある、淡泊な人てある、天眞爛熳な人てある、何等の包み隱しの無い、まる〳〵打ち明けた明つ放しの人てある、僕は、此點に於て、床次君に十分の敬意を拂つて居る。

◎一體、官場の人は、概してこせついて居る、理窟じみて居る、事務の才を衒ひがちてある、而して床次君は、前のやうな氣質の人だけ、質を以て勝たうとして

居る、若し誇らんとすれば、質の美を、誇らうとして居る人だけ、左樣な風が殆んど無い、その官場に在ること既に二十年を超ゆ、能く此樣な風習に染らずに通れたものだ、別段、毅然たる本領のある人とも思へない割合に、よく滔々たる官場一般の氣風以外に立ち得たものだと、僕は、此點を推稱する、從つて、世に彼は、俗吏で無いとの評が高い。

◎鐵道院は、總裁といへども、事務を視ねばならぬ筈だ、事務を視るの才幹が、その總裁たる資格の一要素であらねばならぬ、此點から考へて、僕は、床次君の鐵道院の總裁たることを、適處を得たとは思はない、勿論、既に總裁である、人を御するの働きが大切であらう、その點に於ては、君の、こせつかざる、茫然たる薩摩人的態度は、原君よりも、後藤男よりも、面白がらるゝ所のあるには相違ない、けれども、君に於て、その紛々の鐵道事務を、一刀截然たる痛快の處理を期せんとするは、恐らくは、君の性質を打算の外に置くものであらう、たとへ君の性質を打算の内に置いたとしても、鐵道の性質と、及び、特に紛然たる我國目下の鐵道事務を、打算の外に置いたものであらう。

◎君は、薩閥の寵兒である、薩閥は、君を以て、その將來を託すべきの才と認めて居る、特に、君は山本伯とも近しき間である、若し、內閣成るの際、拓殖總裁の位地を望んだら、易しく、棚の物を取るやうに取れたであらう、而してその方が、君の才情、志趣に適して居る、君若し自ら知るの明あらば、その方を擇むべきであつた、多分、君はその方を擇むだのであらう、而して取れなかつた譯は、取れないのでは無い、政府がその拓殖局を廢止する成案を抱いて居たのであらう、即ち、廢止するから與へなかつたのだ、鐵道院總裁は、そこで、割合に不似合の君の手に落ちて來たのだ、と、僕は、略ぼ此樣に觀測して居る。

◎君は曾て東京市長に擬されたことがある、その時の噂に依ると、當に市長に擧げらるべきであつた、市會の有力者は、翕然として君を推すとの噂であつた、而して成らなかつた理由は、內相原氏が、君の退任を許

さぬからだと傳へられた、現に、内相に逢つて、直接にそのやうに聞いた人があるといふ消息もあつた、然しながら、東京市會が、未た正式の議決を爲さない前に、内相の之を認諾せざるは自然てある、これは内相の細心の致す所、適當の辭令てある、惜むらくば、原君に、それだけ細心の用意があつて、原君に逢つた人に、その十分の一の細心が無つた、若くばその細心を讀み破る機轉が無つた、若くば讀み破るを欲しない一種の術略があつた、これが、床次君の、當に市長に擧げらるべくして、而して一跌した理由てある、當時、若し東京市長に爲つて居たら、今日の鐵道院總裁には義理にも爲れない、而して鐵道院總裁と、東京市長と、君のために孰れが是か非かは、別個の問題として人生の遭際、眞に測るべからざるものがある。

◎西園寺内閣倒るゝの日、内務省からは、君より一段下の水野錬太郎君が勅選議員に擧げられた、これは君の謙退の結果てあるといふ噂てあつた、眞僞は勿論知らないが、君の性情に察するに、此様な事は、十分あり得べきだと思ふ、果して然らば、擧世滔々、只、自家の利名を謀るに急なるの際、確に一種の超高の氣品を見らるべしと思ふ。

◎君の家には客が多い、割合に多い、君の客に接するや、所謂平民主義てある、そこに何等の城府も無く邊幅も無い、奥さんが、玄關脇の電話に取りついて居らるゝことは、よく人の見受くる所、曾て其母上が、庭の落葉を掃ふて居られた、而してその掃きよせを、櫻の根にかきよせられた、その有様を見て居た一人が、床次の家庭には、流石に昔の武家の教育法が傳はつて居る、落葉を掃き棄てておいて、櫻の根こやしに用うる所、その注意を見るべしだと、多勢の間に高唱して居た、それが、大變な事か、否かは、知らぬが、何にせよ、その家風が質朴に出來て居て、主人もその通り、細君も、御隱居も、書生も、下女も、皆そのやうに、身なり構はず、一切行儀ぶらない所が、一寸目に着く、僕は、内務次官や、鐵道院總裁を、えら相な位地と思はぬだけ、そのやうな位地の人の玄關に、折々、いや

な感じを懐かさるゝことがある、その割合に、床次君の門庭に、そのやうな習氣の無いことを愉快に思ふものである。

◎君は、禪を修めたりといふ、三教會同など、宗教の事にも意なきにあらず、去り乍ら、その幾何まで宗教を理解し、宗教に信依して居るやは、疑問である、或はその質太美、自ら持すること寛なるため、遂に本心からの歸向は出來得ないかも知れぬと、僕は、遠方から眺めて居る。

△一言も惡口の云へぬ人

法學博士　井上辰九郎

床次君とは同窓であつたから無論知つてゐるが、殊に君と私とは非常に親しくしてゐる。あの當時大學は寄宿する者が多かつたが、二人は實家が傍に在つたものだから、始終一緒に通學してゐた。お互の家をも訪問し合つて、一所に遊んだり、一所に研究したりしたものだ。

あの人は實に立派な人で、何處から見ても缺點が無い。居常極めて質素で、些の浮ついた所が無い。手堅い人である。學問に趣味を有つて、研究心の深い、從つて學問の出來る人である。無口の方で厖然として不得要領のやうにも見えるが、中々要領を得てゐる。一口に言へば古武士の典型。善い意味に於ける鹿兒島的の長所を具へ、美質を有つてゐる。厭やなハイカラでなく、眞個の紳士とはあゝいふ人を言ふのであらう。

私の畏敬する友人の一人で、君に就いて惡口と言ふものは云ひ度くても云へない。同じく友人の中で、世に時めいてゐる人の中にも、あの奴は陰險だとか、卑劣だとか、出來もしないくせにとか何とかいふあらもあるものだが、床次君に就いてだけは全くそんな事が無い。一言も惡口を言ふ人は出來ない。

餘り多く饒舌らない方ではあるが、話してゐていかにも氣持の良い人で、和氣靄々として春風の中に居るやうである。

大學を出てから、暫く專修學校の講師をして、財政學の講義をしてゐたこともあるが、學者の素質は十分に有つてゐる。政界に出てからは忙しい爲めに多讀はしてゐないだらうが、學者として十分立つて行く人と思ふ。凡てが大きく、區々たる小事に拘泥せず、衆を容れる度量を有つてゐるから、何處に置いても申分のない人てあらう。今度の總裁なども素より適當だらうと思ふ。之を薩閥の庇護と見るのは甚だしい見當違と謂はねばならぬ。

△薩摩出の人物

警視總監　安樂兼道

床次さんは、久しく交際つて能く知つてゐるが、極めて磊落な、自然て、有りの儘な、虚飾といふことの微塵も無い。生活などもお宅へ行つて見ると直ぐ解るが極めて質素なものです。

床次さんに較べると、同郷て、同窓て、同年の山之內さんは餘り世間に知られないが、此人も矢張り堅實な思想を有つた人て、性質も虚心坦懷な精神家です。何方も國家的觀念の爲めには一歩も讓らないといつたやうな人て、薩摩から出た者の中ては最も將來有望な働き手てせう。是れからは學問と經驗と兩方を兼ね備ねた人て無いと駄目です。時勢が變つて來てるのだから。

床次さんが鐵道院總裁になられたは矢張り適任てせう。實際の鐵道事務には通じて居ないが、內務次官を爲てゐた時分から、大改革を遣らねばならぬといふ非常な抱負を有つてゐた人てすから、乾度目醒ましい仕事を仕出來すだらうと思ひます。

△床次竹二郎君

文學博士　姉崎正治

僕は敢て床次君を評論するといふ事は出來ない。何となれば今日の官吏社會並びに政治界といふものは我

々の頭とは餘程變つた事情の存在して居るのであるから、斯くの如き意味ての官吏として或は政治界の人としての床次君を知りもしなければ又從つて評論することも勿論出來ない。然しながら何事をするにも其事業の性質、又現在の情實、狀態が如何にあるに拘らず、其根本は人格の力にある。時の事情の爲めに人格の力があらはれず、其人の志が遂げない事は世間に多くあるにしても、成敗共に其人物によつて異つて來る。所謂成功の人にも成功の意味が人によつて異り、失敗にしても或は過失あるにしても其人によつて我々の見方は違つて來る。所謂過を見て仁を知るといふ位て、同じ過失あつても其人物によつて意味の違ふ點がある。さういふ見方から見れば官吏として或は政治界の人として床次君の過去將來が如何にならうとも、其人物に對する判斷が異るものてないと思ふ。

僕が床次君を知つたのは僅かに三年來てあつて、又其人の種々の方面に於ける事業や活動を知つて居るのてもなく、地方官から地方局長になつて働かれた狀態なども知らない。けれども其人が熱誠と共に潔白の人てあるといふ一事に至つては、何處までも之を斷言し、又何處までも其人に對して推服せざるを得ない。其人の境遇出處の如何に拘らず、此點は其人の天性ともいふべきものであつて、之に加へて修養と境遇とが多少の變化を與へ或は又彩色をつけて來て居るには違ひない。即ち其經歷からいへば薩摩の生れてある。他の一般の行政官と同じく大學を出て、官吏になつて來た人てある。又其修養をいへばずつと前はイザ知らず、官吏生活の間にも禪學を修め、地方政治上にも常に人心思想の傾向に對して深く注意し且つ其郷黨に對して熱誠の人てある。

僕が床次君を知つたのは宗教協會の談話會の會合以來てある。其後去年の春の所謂三教會同の場合にも前後に亘つていろ／＼意見を交換し議論をした事がある。其後歸一教會や其他の方面て接する事もあれば意見を交換することもある。それらの場合に何時も感ずるのは、複雜な法律政治の中に成長し、面倒な行政に關

係しながら其腦髓の割合に單純であるといふ事である。今日の世の中の人は、腦髓が單純だといふと、わるい意味に取るであらうが、僕の考では此點が即ち床次君の長所であると思ふ。熱誠があるから何事についても冷淡な觀察をしない。其事の爲めに計り、人の爲めに盡すといふ精神が充ちて居る。さうして人を御し、事を處する上に於て情實關係などを考へたならば複雜な腦髓も必要になるかも知れぬが、僕の考では之を貫く誠が無かつたなれば、如何に悧巧な政策でも遂に事實を動かし得るものでない。床次君は今日の政治家風からいへば單純過ぎるかも知れない。が其處が即ち殊に政治界に床次君の如き人物を必要とする所以であると思ふ。

今度の内閣變動について政府と政友會の間に立つて周旋もしたといふ事を聞いて居るが、どういふ事だか自分は勿論知らない。又聞かうともしない。然しながら僕の信ずる處では斯の如き際に處しても床次君の遣り方は他の一般の政治家と必らず異る處があつたに違ひないと信じて居る。兎に角單純なやうであるが、腦髓が極めて明瞭で徹底し、さうして根本に熱誠を以て貫いて居るのであるから、其點が總ての行動の上にあらはれたに違ひないと思ふ。

斯くいへば或は人によつては姉崎の床次觀は、思想の方面から來た丈けの接觸でのみ其人を知り、又自分は書物の虫として世間や政治界の人物を觀察するから、單に單純だと思ふのであるといふかも知れないが、僕の考では、今日政治界に要するものは——少くとも今日以後本當に政治の廓淸を行ひ、意味のある政治をなすには、今までのやうな政策、韜略乃至八方美人十六方美人でなく、熱誠一つにあると思ふ。即ち床次君の單純な點が、今日の政治界に少くとも防腐劑となることを希望して居るのである。單純といへば何でもないやうであるが、一體政治を以て政略の仕事と思ふのは寡頭政治或は閥族官僚などいふ狀態即ち情實の關係だとか或は組織、鹽梅、制度などを貴ぶ政治の時代では必要であらうが、今日以後の政治は獨り日本のみなら

ず、世界全體を通じて多數人民の意志を發揚し彼等の志をなさしめるといふ維新の御誓文の意味を本當に行ふにある。人民の爲めの政治てあるのみならず、人民自らの政治となるのは近世文明の特色てあり、又壓抑すべからざる傾向てある。さうして人民を基礎とする場合には人心を動かすものは政策てなくて、公共の心即ち熱誠一つにあると思ふ。斯くの如き意味て床次君の單純なのを殊に尊敬する所以てある。

但し人物としての單純と社會の狀勢を觀察し人民と共に事をする爲めに其狀態意氣込を察し、社會を指導するといふ上に於ては玆に研究的態度が必要てあると思ふ。即ち今後の政治家には人物としての單純熱誠に合せて、學者としての複雜なる研究を要する。今現在日本に來て居るヘンダーソンの如きは、學者にして濟世家の事業をやつて居る人てある。又合衆國の內閣は政治學者たる大統領を中心にして內閣員は各々其方面に於けるインヴェスチゲーター（研究家）たる職務を盡して居る。此點に於ては床次君が確に研究家たる資格のある人てあり、且つ其官吏生活の間に調査などをした結果を見ても其力量のあることを示して居る。然しながら其研究調査が我々の標準から見て充分であるとはいへない。勿論社會政策、地方政治の事柄について、僕自らが床次君以上の知識を持つて居るといふ意味てなく、世界の學術界の標準から見て、例へば今言つたヘンダーソンの如き人を標準としていへば、床次君よ今後非常に研究の方に力を盡すべきてあると思ふ。さうなつて來れば其知識が人格を助けて本當の意味の政治家を作り上ぐるに違ひない。

鐵道院總裁としての仕事については希望もあるが、それは今略して置く。兎に角根本に於て玉の如き人格が備つて居るのてあるから、之を一層磨き上げたなれば其將來は必らず大いなるものがあると信じて居る。

僕は今日の官吏並びに政治界の人については知る所は極めて少い。然しながら知つて居る範圍ていへば官吏の中て床次君と共に江木翼君に最も推服して居る。さうして此二人の對照が甚だ趣味があると思ふ。江木

君は此間の内閣で重要な位置に据り、今日は桂公の新政黨の爲めに盡して居るが、實は黨内の人すら自ら磯多村と稱して居る政黨の膽煎として江木君が働くのは甚だ惜しいと思つて居る。それは暫らく別問題として、江木君は腦髓の綿密で殊に研究の精神に富み、さうして根本に人物の確固たる點のあるのは、自分の知つて居る範圍での官吏中の異數である。此二人の對照については一々述べないが、要するに床次君の充分に備へて居る點は江木君が多少之を缺き、江木君の備へて居る點は床次君に尚遺憾があるかと思ふ。僕自らの知つて居る範圍についていへば此二人を合して一團としたなれば實に理想の政治家が出來やうと思ふ。之を鎌倉時代の人物でいへば江木君は大江廣元に似て居り、床次君は最明寺時頼に似て居ると思ふ。

次號の本欄には松崎天民の『女八人』其四「名代部屋の客」山本迷羊の「獨逸女優の日記」黑頭巾の「明治政局の十幕」の外『團體評論』の一として

交詢社論……鵜崎鷺城

の長編掲げらるべし。右は今次の政變の原動力なりと噂せられたる交詢社を社に關係ある人物を中心として論究せるものにして、近時出色の讀物たるを疑はず

和歌

尾上柴舟選

○ 村上夕人

君ひとり紅友染の衣縫ひてものを思へる花ぐもりかな

ほの／＼と野のうすみどり化粧間の鏡にうつる春の朝かな

桃すもゝうちまじりちるなかにして春のなやみをおぼるゆふべ

ぽつねんと菅原寺の金堂の立てるをめぐり下萠えにけり

○ 安井竹美

かたこひのうすき吐息にしみ／＼と蘇枋の花のちれるかはたれ

ひとしきり蘇枋の花のくらくちるそのかげ見つめひとのなやめる

しなやかに汗もつ髪に柳の芽光るまひるはひとのこひしき

○ 大眉朝果

遠きひとよ、あはれと思へみづからの戀ふるこころは火と燃ゆるぞも

君泣いてあるがやうにもおもはれて寢ねなむとして枕をかへす

われのみか、いな／＼君もおそらくはもの思ふ子となりてあるなむ

啼く蟲の身じろぐさまに似やすらむ語らむとしてわれの默せる

○ 高桑朝雨

黄昏の空に殘れるあかるみのなかにかなしき遠山の雪

流れ木をひきよせてみる氣まぐれのかなしかりけりたそがれの濱

何事もさだめなければとかへりゆく街のゆふべにちるやなぎかな

○ 福山杜鵑花

春の山わがうしなひし若き愛のひそめるごとし心さそはる

三月はむつかる心乳母のきてあやかす如しうと
うととする

さすらひのわれの生命のすべてをばあづかるご
とき小さき行李よ

靜愛のおもき氣分に立木ども白きかひなをなげ
だす夕やみ

○　素木しづ

うつくしき絹ぎぬをたちてしまふごと逢ふとい
ふ事我にかなしき

てりかげる午後の日のごと君なりぬ夕のごとく
我の殘れる

一人なりとたゞひたすらに悲しみしその日とい
まといづれよろしき

○　村山放羊

生くことを思はざる日の早く來ようら若きまに
吾は死なまし

何故に君は生れし何故に我は生れしさびしや二
人

歸り來て宿の女の延べ置ける冷き床に入るが哀
しや

筆立の筆に交りてペン先の微かに光る夜の靜け
さ

○　飯尾春醉

笑みつくる君のこゝろぞいとほしきいましがた
まで泣けるひとみに

夜ごと日ごとかくもかなしきものがたりつくら
んとしてことしにあらねど

たのむべからぬ人をたよりてなにかせん云ひつ
ゝなほもたよるあはれさ

○　實吉波矢雄

湯にひたりぢつと眼とづる冬の夜の心の底に横
たはるもの

湯疲れの朝の瞳にうつる山少し雪のせ靜まれる
山

湯を透きてわがふともゝに落つる陽はゆら〳〵
として朝は淋しき

○　白石金太郎

君去にしての寂しさよふところの時計も石のご
とくとまれり

わきかへる血潮をいかにとゞむべきああ呪はし
きわが若さかな

ゆらゆらと木蓮のはなさゆらげりあを〳〵ひろ

き大空のもと

○　　　柳家吉之助

うつくしき思のまゝに水すめる池の畔に君をまつとき

砂のごと月夜の露のちゝ色にふれはさびしきさふらんの花

桐の葉の雲母夕日の中を落つもんどりうつてまたひとつをつ

○　　　前田黄昏

あきたらぬ妻の言葉にすげなくも言ひはなちたるあとの淋しさ

○　　　金春菊千代

噴水のきりのかゝるも淋しかり水鳥のなく青き月の夜

夕陽のみ空のもとにみなしごてふ悲しきこゝろみいだしにけり

○　　　小林茂子

たゞ二人のれるばかりに謀反のやからの舟のやうに惡まる

激語せしのちのこゝろのあはれさを人づてにだに傳へてしがな

○　　　溝口哀歩

歌思ふ心の隅に必ずや君のまぼろしほと息をつく

別るとて罵りしこと今更に悔ゆるひとつとなりにけらしな

○　　　須賀米男

三味ひくをいつとはなしに覺えたるはれ心のさびし如月

つゝましく君が衣縫ふ針にさへぬくみのあるがうれしきまひる

○　　　大眉かずゑ

悲しめるわがまなざしのゆくところさらにかなしきものゝありけり

掌を締めなば鳥のいのちはをはるべしわれのいのちはいかにころさむ

○　　　島の流人

つゝましく羅紗の前掛締むるこそ冬の心の冷めたかりける

前掛に包みおほせぬ心をば身をばなげたる冷めたきベッド

○　　　黒田たつを

庭を掃く箒の音のわが胸に線ひくがごと覺ゆる朝

心臟はひとつ躍りぬ今ひとつをどるかとまつ心のおそれ

○　　犬喜多喜男

柚の實の熟れしにほひにしみ〴〵といたましきこと思ひし朝かな

ものなべて眼になつかしく見ゆる夜の遠くうるめる街のともしび

○　　福井定雄

石垣の薄日させるに手を觸れておぼえしごとき冷けき君

灰色のみち歩みゆくわれなりと日毎思へど悔心なし

○　　津田蘆風

旅にいでてむしばし他郷のあけくれの冷たさ愛でむ値なき日を

きさらぎの野にたつ煙青々と動くともなき窓のかはたれ

○　　松岡友孝

枯れ芝にそゝぐ日をあび岡にたつたゞひとりなる心よろしさ

路のべの梅の莟みのかたきなど見つゝ歩めり冬の郊外

ほんのりと眼ばたを染めしわが少女うつむいて居るさまのよろしさ

やわらかうウドの匂ひの流れける春の夕べの明るき厨

○　　狩野鏊村

柔順にも鋤を手にして畑に立てりかなしく春の初風吹く日

冷やかの土にすわりて月光に白う輝やく鋤をながむる

○　　加藤葩谿

進み行け明るき國へわが心足拍子とりマアチうたひて

○　　柳よしを

鳶色のふくらみのある土の色アネモネの芽の靑さなつかし

○　　清水白花

冷えはてし瀬戸の火鉢にたてかけしコテの光りの悲しき夕べ

○　　　　　　　　　　小川流葉

しんとして身にひたり來る雪明り冬の人とて涙わきいづ

○　　　　　　　　　　中村藻花

慰めむ言葉も出てず泣き止むをひたすらにまつ悲しき心

○　　　　　　　　　　山下源吉

故郷にそむき都にゐたたまずわれいづくにか家を得べきや

あさなあさな寐床にをりてかにかくと物思ふ癖のつきにけるかな

○　　　　　　　　　　白川茂吉

水差がからとなるまでさしつぐを喫み〳〵てかへる冬の夜半かな

○　　　　　　　　　　辻　蓉光

あかし持ち冷たき廊下歩みゆくうしろにせまる重きくらやみ

○　　　　　　　　　　高木曉星

寐ながらに障子のなかの眞四角の玻瑠戸より見るちさき冬ぞら

○　　　　　　　　　　坂部弘吉

人込みの明るき街を逃れ來て冬の夜空の星をみるかな

○　　　　　　　　　　森　珂月

さびしさの忍びて來る音さへもきこゆるほどの夜の靜けさ

ぢゞと鳴るランプの火影見つめつゝ靜かに思ふ生命の不思議

○　　　　　　　　　　一柳忍月

君が病む黒髪長くやはらかき床になんだの果てなかるらむ

○　　　　　　　　　　三宅　勇

泣きぬれし君が片頬にほの白う月のしたゝる春の夜の道

○　　　　　　　　　　衣川秀美

かなしみが胸いつぱいに搖れてあり灯ともしころを人なかたりそ

○　　　　　　　　　　八木ひで子

いまさらにゆくさき〳〵をおもふかなはかなめばとてせんなきものを

○　　　　　　　　　　安達紫津子

ストーブのかたへに集ふひとむれをはなれて一

人窓ぎわに立つ

○　　　伊藤閑逸

二月の垣根のもとの黒土に蕗　薹出て、出づる宵さよ

○　　　加藤秋村

枳殻の黄なる細葉のほろ〳〵と石にこぼれて冬の日暮れぬ

○　　　倉山晴石

木がらしにふきさらされて野邊の石羊とならむけはひだになし

○　　　小山芳翠

雨垂れの音もかすかに夜となればこゝろよきまて冬はもだしぬ

○　　　木村隆吉郎

かごしまの海の静けさたゞれたる心を容れずもの足らぬかな

○　　　伊香鶯涙

いよゝ消く別れにしてふさびしさをじつとこらふるかなしさを知らずや

○　　　齋藤塘花

黄昏の霞をこめて二つあるみづうみのごときまなこもつ君

○　　　稲田雲城

ちかひ言ありしならねど相共になはひとり身の君はなつかし

○　　　妹尾夢笛

かい抱きて樂む日あり悲しびを戀しき人の小さき手とも

○　　　梶山菊

春若きをとゞひあまた此の夕べあかるき家に歌かるたよむ

○　　　梅野美草

いましわが心を窺きいたましく春の小鳥の梢に鳴ける

○　　　伊香鶯涙

バルコニーの水仙の花散り終へぬ君に別れて幾日を經し

○　　　草見迷人

逢はざるに久しき人のパラソルのしろがねの柄もくもりやすらむ

○　　　叶ちはる

あかつきの消えなんとする燭のごと日に色褪め

てゆく身悲しや

○　奥村敎介

狂へるに似ていとかなしはかなくも生の充實を願ふこの頃

○　佐藤圓夢

たそがれの雪どけ路に靴下のしめり來るなどやるせなきかな

○　須賀米男

麻睡よりさめたる朝の病院の黄の窓かけぞうれしかりける

○　加藤則紡

黄昏を倦れしまゝにかへり來て制服の塵拂ふわびしさ

○　花村勘六

いつしかにわが靈感のほのめきも吐息も春となりにけらしな

○　實吉波矢雄

さみしめば戀しき君がゑりあしのほのうかびくる春の夕闇

○　中村勝治

叫ばむかはた泣きなむかわが戀のくだらなさにも嘆かるゝかな

○　市川紅友

君なくば何悲なしみのあるべしや君あればこそ悲しとも云へ

○　山田一雄

見上ぐれば若草山の頂きに白き雲浮く春の晝すぎ

○　松村憲郎

壞れたる玉を合する愚さを男のわれがなすぞ悲しき

○　往田湖村

ある筈の熱のなき日はなかなかにものやすからぬわが心かな

○　小間よしを

この愁ひまぎらはさんと又しても一としづくづゝ酒を味ふ

歌稿東京小石川區原町百十五番地尾上柴舟宛中央公論歌稿と明記の事

俳句

櫻　高田蝶衣選

花未だ雨朝な法鼓冷たうす　月精
花頃を障子明き庫裡の一間あり　同
僻論悔ひし今是を花に訪はれたり　同
昨約を訪ふ書庫や花に背き來て　同
朝櫻弓師禮射の範を垂る　楊杷子
掃くに寄せて花を仕丁の果報かな　同
攀ぢつめば神苑や花間湖見えて　同
花に奉納の諸仕合や宮へこむ渡舟　杜桑子
筏組塲の奥櫻鮎も飛び初めて　同
蚕筵洗ふ晴溪や花の岨風　同
陸橋の下畳丘の櫻かな　逗子王
陣の調度掛けゝん大手櫻かな　同
櫻植ゑて易樂めば訪へる人　同
上京委員の任解けぬ櫻散らずあり　葵雨郎改浮碧樓
八重櫻のかゞやきや御物藏を出て　同

お上り衆の踊郷日取や遲櫻　同
後園の落花にうづむ昨夜の歩　鶉衣子
案内記にいふ溪峰の花遲速　同
廊出てゝ船にあり花煙る雨　明兮
月に白き書窓や落花漂へり　同
花吹雪月宮の蓋舞へるかな　筑樓
疎ら松間の花蔭や磯邊餅賣れる　同
　自註、つけ燒に海苔捲けるを磯邊餅と云
御成待つ間を曲譜調ぶや庭櫻　哭碁哉
先發追ふ舟行に置酒す花見客　同
一夜屯す兵馬に櫻月夜なる　愛香
媚を賣る身をあはれみつ花に連る　同
磯山櫻船人が蒲團破ぎ來る　三光鳥
叔母に伴の花一と日君に詰られし　同
僧徒の陣物々しさの櫻かな　朱雀
渡來佛の開帳を花に觸るゝ里　同
櫻散らす風溫し酣睡の鳥　銀竹
戀はれ居るを羨まる櫻散る夕　同
枝垂櫻に日永かり心中唄賣の　柳子
大調練の賜宴櫻の垣內に　同
佗住の泣く夕もあり山さくら　芳葩

散る花や末黒野焚洗ふ塀　同
忌を同うす友の宿櫻雨に垂る　國郎
醉兵を送るあり花の里外れ　北斗青
船搖れを落ち着く花の里なりし　茶の門
峽中逗留延ぶ沙汰や巖に咲く櫻　黎白
あらぬ里の旅愁も花に賜暇經ぬる　竹梅
歸郷見舞の客うるさ雨に櫻散り　柾江
錢壺を埋けて植ゑたるさくら哉　雨春草
舊居訪へば尼住みぬ櫻ちる夕　珊春
夕照りに背向け地藏やさくら散る　恩案
花の餓鬼さんざめく四山暮れ靄　鬼四
山神の出遊ぶ一夜ちる櫻　藍一星
花の宿女の癖に醒めにけり　平凡子
裾雜木にまじる櫻や製材所　飛雪

琴平宮

花の皺樓くゞれば清少納言塚　雲洞
丘に上りて和ぐ心櫻夕照りて　秋灘子
土產繪圖櫻名所を朱入れせる　碧疑滴
鵜馴らすも櫻の雨後の舟だまり　星溢樓
炎上を逃げし鳩花に朧鳴く　合歡朗
矢場新た組む垣や花雨側に　滿峰
歌主を追ふ騎や櫻かざしつゝ　銀杏庵
椽芽晴一重櫻の降る簷　天行子
旭に映えて花は高根の雲に入る　鬼水
連歌崩れぬ戀の座に花の散るほどに　蝸牛
見えて遠き大棗屋根や花ほのと　蓮湖
積雨櫻の膨らみや寶茶屋橋に來て　紅矢比
酌むよき亭花散る岩に吐ける水　鬼寄子

新題

○　但馬　谷岡杜桑子

婆燒祭（はゞやきまつり）（春）　三月十五日但馬國城崎郡松岡に於て行ふ。昔雅成親王但馬高屋村へ遷され給ひしが御愛姫にや只獨り御後を慕はせられ遙々松岡へ着かれしが永き日も暮れて宿さへ無ら路傍のむさき茶屋に立寄り親王坐ます高屋迄の道程を聞かせ給ひしに茶店の婆姫の餘りの美しさに見とれて惡心を起し姫を留め置かんと思ひて言ふやう問はせ給ふ處までは七日通る納屋村あり八日通る八鹿村あり九日通る九日市あり十日通る豐岡あり其うへに人を取る一日市を越えざればと答ふ姫には餘りの遠さゝ獨旅の御疲れに身こもらせ給ふ身の最早旅を續け難くや思はれけむ遂に圓山川に投じて終らせ給ひしが村人之を發見し姫の亡骸を葬りしが婆の惡事露顯し遂に村人集りて婆を磧松に生きながら縛し薪と共に燒きたり因之年々の祭藥人形の婆を作りて燒くなり。姫の御髮美しかりしに因てか「髮長さま」とて若き女の詣

づる者多し。（選者附記、兵庫縣名勝誌曰「雅成親王墓、豐岡町の西一里五ノ莊村内高屋村に在り雅成親王は後鳥羽天皇皇子にして六條宮無位親王と稱す承久の亂後但馬國に遷し城崎郡に幽す親王謫の身の置き所さへなかりけり野にも山にも秋風ぞ吹くと詠じ嘉祿年中光行寺に遁り薙髮して佛門に入り建長二年竟に薨ず」但馬國は即ち親王寵姫の所生なり」大日本人名辭書「承久三年七月但馬國に移され嘉祿二年十二月出家す年二十七建長七年（或曰二年）二月十日配所に於て薨ず」）

婆子を燒く社頭なる春寒き水
御魂なぐさむ婆燒祭春寒き
婆燒きし松枯れぬ磧草萠えて
婆燒くや遠山雪の殘る見て

御尻拊り（新年） 水祝によく似たれど藁にて尻拊りを作る形棍棒の如く大小あり下端の周圍に色紙を細く切りて付け一月十四日の朝村の子供等新嫁の尻を祝ひに廻るなり「男三人女三人合せて六人祝ひマショー」と尻を其藁の棒にて叩く祝はれし家より子供へ祝儀とて密柑串柿餅など呉れるなり新嫁は之を厭ひて隱れ廻る但馬城崎郡三方村の風習。

衣桁陰にひそめる妻よお尻はり
ふとあけし朝戸口尻祝はれて

○　廣島市　長尾精

年越相場（冬） 嚴島神社にて節分に當り年越祭と併せて豫想相場が行はれる是は古來有名な神社行事の一として廣く知られて居る地方にて年中穀類の取引をする者には之が標準となつて居る當日は百八廻廊總燈明が點せられ大神樂がある其後で紅白の襷を懸けた世話係が社頭の高櫓に現はれるするとお神酒の利いた數萬の立會人が高櫓を取り圍んで空相場を爭ふのである其後で一同古風の大福引を行つて翌年の運氣を試す一名宮島相場又は宮相場ともいふ。

舟の灯も廻廊の眺め宮相場　翠郭
相場立つ宮詣いち早き舟
夜船戻る年越や米の値もきいて
相場市に渡るや宮の灯も海に
嶽山颪に船も出ず宮は相場の日　茶の門
宮の相場も靜まれり汐の引く頃を
宮相場の家苞の箸も配りけり　逸鯉居

○　在島根縣　上野愛香

公魚（春） 形諸子魚に似て稍細小頭小にして骨柔かなり味甚美にして甚佳湖魚にして宍道湖の一部に產し二三月の候を良しとす。

公魚を賣りに紙付け草履かな
公魚を名產に湖畔町なせる

○　豐後日田豆田町　清源天行子

水かぶり（冬） 大寒の頃山法師と稱する者法螺貝を吹きながら家々を巡る之を合圖に各戸より一桶の冷水を往來に置けば裸體跣足の者頭に白布を纏ひ褌を着けたるが御幣を持つ先導者に尾しつゝ桶の水を頭上より浴びながら走り行く浴びたる水にて

手を洗へば霜焼け雪やけなど無しといふ。

炬燵籠る頃水かぶり法螺鳴りて

霙れ町の寺門閉すや水かぶり行く

耶馬の蟹汁（春）　三月頃耶馬溪流の岩間に籠を沈め蟹の入るを待ちて捕ふ而して捕へし數十の蟹を生き乍ら臼にて碎き滓を漉して肉のみ吸物に煮る美味也。

薔師やとひて蟹汁も膳に上すかな

〇　在大阪　福山三光鳥

畦燒（春）　畦の雜草の根莖に籠りて一冬を棲息せる害蟲を春暖と共に燒盡すなり燒野より部分的に制限あり且因之所期も異るあり。

畦燒の明りに母家風呂たける

聽法戻り夜となりし畦のまだ燒けて

畦燒きし星夕背戸の烟りたる

垣除（春）　冬季農家などの寒風を避けん爲め家の周圍に高き防風垣（藁莚板などの）を設けしを春暖と共に除くを云ひたり。

垣除けて草靑む井尻墓堀りし

〇　東京芝　久保田芳葩

落し牙（春）　北の國の春になると獵虎膃肭臍などの海獸の牙が生え代ると見えて磯際を歩いて居るとよく牙が落つて居るのが發見されるといふ樺太歸りの人にその小さな牙を貰つたが極めて滑かな美麗なもので假に春季として試みた。

高浪の轟く島や落し牙

汐ひきて攀づ岩や落し牙なんど

〇　神戸中山手通　朝田春山生

樫鳥喰ひ（春）　獵期末の頃に到れば此鳥不斷不味きに似ず脂肪附して味殊に佳し仙台地方にては此季節群れ引く米筋に霞を張り囮にて無數捕獲すと云俗に樫鳥喰とて酒鍋等を携へ行き山にて賭ひて稱味すとぞ

樫鳥喰の山麗ら蛾も飛び來る

石伏魚捕り（春）　桃の花の咲き初むる頃より土佐にては石伏魚捕てふ川獵あり石伏魚多き瀨を撰びて四手網など沈め置き螺螄鮑等の貝殼を綱に珠數付けにしたるを上流より下流へ引き廻し石伏魚を追ひ込みて捕ふ此魚初路十大根などと玉子とぢにせば殊に美味にて下戶上戶共に嗜好せらる。

石伏魚捕りの瀨々の賑ひ水溫む

初凧揚（新年）　土佐にては各家初めて男子出生すれば正月に親戚近隣より初凧とて紙鳶を贈り飛揚して其子を祝福する習慣あり贈られし家にては欣びて之を受け凧揚げ日には一同に酒肴を饗して數日間賑はしく飛揚し每夕酒宴をなす凧の大さは十二疊に及ぶ物ありて多く鍾馗に鶴など描きあり飛揚の際半紙四つ切巾長數十丈の紙尾を無數に附し夫れをカケ凧とて小さき凧に奪はせて一興とす飛揚には數十人を要し中々の盛催なり。

初凧や荒風はやす醉へる衆

〇　肥前　松尾巽二

つぶらかし（春）　長崎に於ける大凧の勝負競ひ即ち凧合戰である凧の名は長崎三大名物と稱せられ盛大なるもので大凧小

風の混合戰であるが「つぶらかし」は大凧に限られ大方夕暮に行はれる東京などの競馬の如に大金を懸けて勝負する供人は常に二十人以上に上り一里も二里も飛ばすのである凧の大さは大方五十文以上で百文にも上るのである長崎にては凧の大小を何文といふ百文は五尺五寸位あり一凧の價一圓を超ゆ「つぶらかし」は「財産を潰す」といふ意味ださうだ又大凧の事もつぶらかしといふ其れはツブラカシの凧の略である近來は電線の爲め昔の如く盛でない。

　つぶらかし月光浴びつ空高に

ねんがら（春）他國にては地杭とて木で造る長崎にて鐵工場の職工が内密に造つて賣り或は小さな工場では造つて賣る鐵で造つたもので子供の遊戯具で地杭に方法も勝負も同じ正月から春になりて盛だが今は衰て居る。

　僧は閑にねんがらの窪地埋め歩く

　ねんがらを寺は禁ぜり札新

長崎(ながさき)アゲハ（春）長崎固有の蝶にて學名を「長崎アゲハ」といふ。

　瀞の原に長崎アゲハ見る麗

和蘭草(おらんださう)（春）春の野山に四五寸位の高さにて紫の花のさく俗に和蘭草といふものがある長崎の固有といふ事である。

　野の一徑和蘭草より三岐せり

剗龍(ペーロン)（夏）長崎にて五月九日和船に二三十人の若者乗りて競漕を行ふ太鼓や銅鑼を鳴らして勢をつけ勝ては酒樽や勝旗を得る競渡に似て居る或先輩は競渡が變じたのだと言つて居る今も猶盛である。

　剗龍や水煙の中を競ひ來る

　剗龍や突鼻岩に人黒う

長崎の精靈流(しやうれうながし)（秋）精靈船。盆十五日夜各戸に精靈船を造り大波止より流すのである普通は三四尺で町内の共同精靈船は五間以上もある凧の會と同じく長崎三大名物の一つである然し今は警察署から大船を禁ずるから次第に小さくなつて居る一夜に渡す船數萬に上る今も盛である精靈船の事を西方丸ともいひ帆に西方丸と書く。

　夜の海を精靈船の灯明らせり

七高山巡(ひちかうさんめぐり)（冬）ナヽタカヤマメグリ。長崎寒行の一である此地の四圍は山で七つの高山あり其七山には各神社があり開運を祈りに老弱寒中に詣でる朝行きて夜歸る參詣のしるしに社前に「七高山巡伺某」といふ札を貼りて歸る。

　朝日より夕日に七高山巡り

課題
- 暖（十五句）春雜吟（十五句）　四月五日〆切
- 若葉（十五句）螢　蚊（十五句）　五月五日〆切

注意　各題別紙、淡路國釜口村高田蝶衣宛
中央公論句稿と表記の事

正誤（前號）　○葵雨郎　○雨春草　○雨舞人

評論

比律賓獨立の障害

一

今春比律賓代議員(デレゲート)クエソンなるもの、米國下院に於て演說し、民主黨勝利の結果、比島の獨立近かる可きを言明せり、又十五年前、比島獨立黨首領として頑固に米國に抵抗したるアギナルドの如き、最近其所見を述べて曰く、予は米國新大統領ウヰルソンがジヨン氏の比島獨立法案を裁可し、本邦を獨立せしめんことを確信して疑はずと、

知らず比律賓獨立は、比島愛國者流が想像する如く實現の境に近しと言ふを得可き乎、

此點に對し有利なる回答を與ふるもの固より二三之無きにあらず、第一を米國海軍擴張中止となす、抑も米國は之迄毎年戰艦二隻を建造したりしが、昨年度に至り、民主黨多數の議會は、之を一隻に減少し、本年又々海軍卿メイヤー氏の極力盡瘁せるをも無視して再び一隻建造を定めたりき、此軍備縮小策が非帝國主義の反映なるを思はゞ、誰か亦た之を有利の現象となさゞらん哉、第二をブライアン氏の國務卿の選任となす、三月四日新選大統領ウヰルソン氏、就任の式を擧ぐるや、氏はウヰリアム、ジエ、ブライアン氏を國務卿(首相兼外相の如きものに)に擧げたると、誰か之を知らざらん、然かもブライアン氏はウヰルソン氏以上の非帝國主義者にして、一九〇〇年及一九〇八年の兩回、大統領候補者として比律賓獨立を旗幟となしたる人物なり、世人が氏の任命を以て新政府が非帝國主義に關して背水の陣を布けるものとなすも、何の怪む可き所ぞや、第三を新政府の中南米政策、穩和化す可しと言ふの報道となす、中南米は共和黨政府が最も之に野心を寄せたる所なるのみならず、モンロー宣言以來、常に勢力扶植を怠らざりし所也、然るに米國政府、自ら顧みて、拉丁(ラテン)亞米利加に於てすら、妄りに發展策を執

らざらんとす、其東洋に於ける政治的野心を放棄するが如きは、何んぞ自然の理にあらざらん哉

二

然らば則ち比律賓獨立は容易に至る可き乎、否々、然らざる可し、傳ふる如くんば大統領ウヰルソン氏は就任後、自ら比律賓を訪問し、實情を調査するの意ありと、此説の眞僞は姑らく問はず、唯だウ氏が比律賓獨立を希望するに係らず、未だ其實行に關する成案無きは疑ふ可からざる所にあらずや、

加ふるにウ氏にして比島の實狀を研究せん乎、之が獨立の一朝にして成り難きを看取せん、蓋し同島民八百萬人の多數は無知にして文明的政治を解せず、常に内訌是れ事とし、軋轢寧日無し、果して直ちに獨立邦國として坤輿に卓立するや疑しきの極み也、故にジョンス氏の比島獨立案の如きも、八年後の獨立を規定したるに過ぎず、然かも八年後の獨立も猶急速に過ぐとする民主黨員尠少ならざるは、同黨名士チェムバレーン以下が猛烈にジョンス案反對を聲明せるに徴して知る可きにあらずや、

若し斯くの如くにして比島獨立遷延せん乎、其或は遂に獨立の期を失ふ無きを保す可からず、何ぞや米國大統領選擧は四年毎に行はるゝものなるが故に、民主黨の執政敗れて、帝國主義の共和黨其勢力を回復せんも亦知る可からざるを以て也、

況んや近年米國資本の比律賓に投下せらるゝもの多大となり、且つ米比貿易額の如き一九〇八年には二千萬圓に過ぎざりしに昨年に於ては五千萬圓即ち二倍以上に增加したり、是亦米國人をして未練を感ぜしむるものなるに於てをや、

然かも之等の事情を離れて、更らに一箇の障害あり、他無し、比島中立問題是也、

蓋し比島の位置や、玖巴が米國の勢力範圍に在るが如きと異り、列强對峙の中間に在り、從つて日本始め列强に依りて其中立を承認せらるゝにあらざる限り、米國は比律賓を手離すことをなさゞる可し、然かも中立承認には幾多の條件あり、軍備、關稅諸問題是也、若し比律賓にして米國に特惠的待遇を與ふるに於ては、此中立承認も困難ならん、左れど米國は幸か不幸か、何等の特惠をも取得せずして比島を手離す程、浩量にあらざるを奈何

見來れば、比島獨立の障害や紛々たり、若しアギナルド、クエゾンの徒は如何なる妙略を用ゐて、急速に

永年の希望を貫徹せんと欲する乎、

米國新内閣

米國大統領ウキルソン氏、三月五日内閣員を選定し之を上院に送りて贊同を望む、蓋し米國憲法に依れば重要官吏の任命は、上院の同意を經ざる可からざる規定なれば也、其人員は下記の如し、

國務卿ブライアン、大藏卿ウキリアム、マカドー陸軍卿リンドレー、ガリゾン、檢事總長ジエムス、マクレイノルヅ、遞信總監バールソン、海軍卿ジエ、ダニエルス、内務卿フランクリン、ケ、レーン農務卿デビッド、ハウストン、商務卿レッドフキルド勞働卿ウキルソン（ウ大統領とは別人、勞働同盟出身者）

右の内ブライアン氏の人物は、事新らしく贅するの要無し、大藏卿マクドオ氏は先きに國會議員、海軍次官として名あり紐育州民主黨の一領袖たり、頭腦緻密、必らずや好箇の財政家たるを得ん、檢事總長レイノルヅ氏は獨身者にして曾つて一大學の法學教授たり、最近辯護士としてツラスト征伐に功ありたる人、新大統領の富豪征伐は君に依りて成功を見る可きや疑ふ可からず、内務卿レーン氏は人格の人たり、但し排日の本家たるカリフオルニヤ州出身たるを記し置かざる可からず、海軍卿ダニエル氏は新聞記者出身（陸海軍大臣を現役軍人に限れる我が制度と比せば何等の差異ぞや）、商務卿レッドフキルド氏は下院議員、爾餘の諸氏に至ては一々紹介せざるも、皆な民主黨の名流たるを失はざるは、欣ぶ可しと言はざる可からず、

佛國陸軍の危機

獨逸帝國は譎詐權變、是れ欣ぶの邦國也、頃日海軍擴張中止の聲を放つて、英國政事家を慰撫しながら、他方に陸軍大擴張計畫を定めて、佛國民を驚倒せるが如きは、人をして轉た獨帝平和宣言の眞意を疑はしめずんはあらず、

（獨逸陸軍案は、新たに五億圓の新支出を規定せり其中四億圓は一時支出にして非常特別財産税を賦課して之が財源とす可く、一億圓は今後毎年の增加額なりと傳ふ）

是に於て乎佛國政府が、益々對獨軍備の充實を期するの必要を感じ、二年兵役制を變更して三年兵役制を復

活せんとするに至れるも亦何の怪む可き所ぞや、

然りと雖も、吾人を以て之を見る、佛國陸軍今日の急務は、兵役制の變更にあらずして、寧ろ軍隊的氣象の發揮にあり、何ぞや今日の佛國軍隊は精神的墮落の淵に沈めるものなるを以て也、

試みに見よ、佛國民の徵兵を忌避するもの、一何んぞ多きや、脫營兵、亦何ぞ頻々、踵を接するや、殊に佛國政府が其數餘りに多きを見て、之を嚴刑に處する勇氣も無く、却て脫營兵、徵兵忌避者に讓步して大赦令を發したることあるが如きは、洵に是れ百年の憾事にあらずや、知らず、當局者は、之を以て能く士氣を振作する所以と信ずる乎、

遮莫、佛國の士氣振作は容易の業にあらざる可し、蓋し方今同國には社會主義と非軍國主義（社會主義に反對すれども、非軍國主義に熱心なるもの少からず）と共に民心を侵蝕し、就中小學校敎師連、之等の主義に迷はされて、愛國敎育行はれず、脫營兵の續出も亦自然の勢なる而已、此材料を以て氣銳の獨逸兵に對せんとす、三年兵役制復活も、遂に何の甲斐あらんや、

賢明なる三帝王

今春那威國王ハアコン、丁抹新王クリスチトン、瑞典國王グスタウス、ストックホルム府に於て一條約に調印せらる、其內容に曰く三國は共に歐洲に於ける他の列國間の紛議に對して嚴正中立を守り、如何なる事あるにせよ、紛爭の相手の孰れに對しても好意若くは同情を表するが如き態度を執らざる可しと

賢明なるかな、三帝王や、是れより先き那威、丁抹、瑞典の政事家間、或は獨墺伊三國同盟に味方し、或は英佛露三國協商と結托し、以て自ら利す可しとの議論紛々たりしが、三王能く己を知り、彼を知り、嚴正中立主義の最善政策なることを斷定し、殊に三隣國共同して中立主義を執るに至る、思ふに那瑞丁三邦は之に依りて超然歐洲政事の襯を脫却するのみならず、又た三邦相互間の衝突をも豫防するを得たりと言ふ可き也、何そや、三國如何に親和なればとて、一同袖を連ねて、三國同盟若くは三國協商に奔るを得ざる可く、若し敵味方に分るゝが如きあらん乎、平和なりし三國の關係も、紛擾を釀成したる可きを以て也、

巴爾幹同盟如何

巴爾幹再度の戰爭は沼澤多き地形(チャダルヂャ地方)と降雨と寒氣に妨げられて、進捗遲々たり、今や列强は此間に乘じて居中調停を試みんとするに似たり

是時に當つて勃希塞黑四國は、内訌紛々、戰勝獲得領地の分配を爭はんとす、希臘勃牙利が互ひにサロニカに垂涎し、最近ニグリタの同士討を演じたる如き、抑何等の醜態ぞや、

吾人を以て之を觀る、巴爾幹諸邦は寧ろ今日に於て斷乎永久的聯邦を形成す可きのみ、相互間の紛爭を惹起す可き一部領土の如きは、之を一邦を屬せしめずして、聯邦附屬の領土たらしむ可きのみ、然らずして猶相爭はん乎、西北の雄邦、墺地利必らずや隙に乘じて畫策せん、而して巴爾幹スラブ民族の運命やがて危險に陷る可きを疑はざる也、

英國婦人運動者暴行

英國婦人選擧權運動者の暴行、一何ぞ甚しきや、一九〇三年組織の「ウヰメンス、ソシアル、エント、ポリチカル、ユニオン」が普通手段の功果少きを見、過激の手段を執る可く決議したる以來、種々暴行を見たりと雖も、未だ今日の如く放火、爆裂藥使用等を見たることとあらざりき、

三月十二日、首相アスキス氏議會に於て聲明して曰く政府は婦人運動者取締の爲め新法律案を提出す可しと、是止むを得ざる所のみ、然かも事茲に至れるは、由來着實を以て名ある英國人(殊に婦人)の名譽にあらざる也、

批評と紹介

△哲學綱要

桑木嚴翼著
東亞堂發行

前章を哲學綱要、後篇を現代の哲學の二篇に別ち、前篇を初學者の爲めに、後篇を先進同學の士の爲めに稿したものである。前篇は只見方を變へた一種の哲學概論で、氏の蘊蓄ある頭腦の中に了解され組織立てられたものを解し易く說明されたものである。後篇は現代の哲學を理解し同情して、而も形而上學の眞義に喰入らうとする眞摯なる氏が現代哲學に對する批評である。純粹理論上の論文である。哲學に志す者は勿論、否らざる者にも此書の一讀を薦める。(定價壹圓八十錢)

△邦譯近代文學

野上臼川著
尙文堂發行

オスカー・ワイルド、ウエデキント、モオパツサン、アンドレーフ、等英獨佛露及白瑞に亘つて十三文人の劇と小說とを譯したものである。譯文至つて明快にして雄澁のあとなし。(定價壹圓二十錢)

△蝙蝠の如く

有島生馬著
洛陽堂發行

畵家にして詩人を兼ねたる氏の作品、『蝙蝠の如く』外五篇を蒐めたるものである。有繫に畵家だけあつて、挿畵から裝幀から氏の好尙を遺憾なく表して趣味がある。近頃珍らしい藝術的氣品に滿ちた書である。(定價壹圓)

△繪の具箱

岡田八千代著
籾山書店發行

家庭の人となつても、尙傍ら文壇の人として步んで行かうといふ女史の近業を纒めたものである。繪の具箱の外十二篇を集む。(定價壹圓)

△大日本神祇史

佐伯有義著
國晃館發行

本書は我邦國體と關係深き神道を學術的に硏究したるものにして、神社祭祀及神道等、神祇に關する事項を其時代に區別して說明したるもの也。之に依つて敬神の意義を明に了解せしめんとしたるもの、眞面目なる硏究たるを疑はず。(定價三圓八十錢)

△哲學通論

元田作之進譯
警醒社發行

本書はフラートン博士の原著を譯したるものである。哲學の意義より說起して、外界に關する問題、心に關する問題を擧げ、最後に諸種の哲學說と、哲學硏究の價値に論及してをる。(定價壹圓三十錢)

△趣味と修養

八波則吉著
敬文館發行

氏の講話集である。各地に於ける講話の中より文學趣味、精神修養を說いたものを集めて一冊にしたものである。(定價壹圓三十錢)

△銃後

櫻井忠溫著
丁未出版社發行

「肉彈」を書いた著者が、其後をうけて書いたのが本書である。氏は七年目に旅順を訪うて、往時の追懷に泪を啜つて書いたものが本書「銃後」である。身躬ら從軍した戰鬪員としては極めて公平に、極めて素質に、極めて客觀的に、飾らず虛らずに戰爭の悲壯を物語つてゐる。「肉彈」と共に必ず江湖の一讀を促す。(定價壹圓五十錢)

△閑人と窮人

鶴崎鷺城著
東亞堂發行

驚城氏の解譯は今更喋々するを俟たず。此書「問題の人、問題外の人」「議會波瀾史上の人物」「民權紛擾史論」等、各目を別つて論ずる所、政局の紛擾と戰士を其舞臺に活躍せしむ。(定價壹圓)

△拙者は大藏內藏助ぢや　司馬偕正著　帝國軍人後援會發行

題を見ると奇拔だが、非常な抱負を以て書いたらしい。文章も中々きび〳〵して面白い。浪花節の義士傳とは自ら其選を異にする。殊に一人冊て書かうとしただけあつて、內藏助の性格に立入つて、些の虛飾をも混へない所確に萬人の愛讀に値す。(定價壹圓)

△戀愛三昧　森鷗外著　現代社發行

近代脚本叢書の第一篇として、シュニッツレルのリイベライを譯したものである。其譯文の靈妙なるは今更言ふを要せぬ。(定價四十錢)

△前夜　山本湖城著　覺醒社發行

文章はたど〳〵しいが、著者は非常な努力と眞勢とを以て文壇に立たんとする第一作であるさうな。

△新文學初步　相馬御風著　新潮社發行

一種の文學入門である。初學者の手引草である。然しながら從來の娛樂的文學の原理を抽象的に說いたり、文章法を機械的に述べたりした有觸た入門書とは違つて、目醒めたる新興文學の根本生命を披瀝せんとしてものせられたるものである。「藝術と人生」「藝術と人格」「藝術と藝術觀」等二十餘項、親切に例の情味のある筆で書かれてある。文學に志す者の一讀を薦める。(定價三十五錢)

△復活の日　中島清譯　上田屋發行

原作はイブセンの最終の作であつて、あらゆる意味に於て必讀すべきものである。譯本は原文に忠實ではあるが、今一步原著の味ひを傳ふるに乏しい遺憾がある。(定價八十錢)

△地人論　菅原華山著　[illegible]堂發行

著者は最高文明批評家を以て過渡の現代に臨んでゐる。氏獨自の新唯心論の立脚地から社會文明を批判し、民衆の覺醒を促してゐる。時に奇警獨斷に陷る處あるも、そこが變て青年渴仰の的となる所以でもあらう。本書には地人論の外に新唯心論をも附してある。(定價九十錢)

△明治思想小史　三宅雪嶺著　丙午出版社發行

丙午出版社が七周年の創立紀念に出版した大正文庫の第一編である。何者の權威にも屈せず、一段高い見地から公平に明治思想の變遷を概說したものである。(定價五十錢)

△高臺より　本間久雄著　春陽堂發行

現代文藝叢書第二十一編にして、オスカア・ワイルド論、白鳥論、三重吉論及文壇時評數編を收む。氏のワイルド研究は已に定評あり。(定價三十五錢)

△政治教育論　尾崎行雄著　東京堂發行

今回の政變と共に再び昔時の面目を新たにして民黨の首領、國民の味方として天下に愛敬せらるゝ尾崎氏の演說集である。此際全國民の必讀

すべきものであらう。

△"THE PILGRIMAGE"　野口米次郎著　東雲堂發行

ヨネ・ノグチ氏の英詩集である。日本人で是れくらゐの英詩を作る人はあるまい。端歌の飜譯に至つては必ずしも感心すべきもののみではないが、氏の詩才は確に一唱三嘆すべきものがある。(定價一圓)

△支那國債と列强　大山嘉藏著　文影堂發行

支那の將來は偏へに財政問題に繫る。此書支那の國債の過去と現在とを明かにし、列國との關係を說く。(定價七十錢)

△新譯梅こよみ (定價五十錢)　熊谷爲蝶譯　東雲堂書店

△逗子物語 (定價五十錢)　湘南生著　紅葉堂發行

△お鯉の方 (定價五十錢)　富小路春洋著　明文館發行

△眞義 (定價四十五錢)　野口紫治著　警醒社發行

△プリュターク英雄傳 (定價五十錢)　大山千代雄著　大日本雄辯會發行

△遊女物語 (定價八十錢)　和田芳子著　文明堂發行

△五十一年 (定價六十錢)　辻井亭著　警醒社發行

△廿世紀の男女 (定價三十錢)　坂本正雄著　警醒社發行

△近世畸人傳 (上裝三十錢 並二十三錢)　饗庭篁村校訂　富山房發行

△歌双紙第一篇からさねたみ　岡本かの子著　靑鞜社發行

△終篇不如歸 (定價五十錢)　永代靜雄著　紅葉堂發行

△朝日句鈔 (定價金六十錢)　神戸毬子會編　船井新聞店發行

△塙保己一言行錄 (定價金卅錢)　下中彌三郎著　內外出版協會發行

△三敎會同の未來 (定價金十錢)　齋木仙醉著　道の友發行

△新案當用日記 (定價金六十錢)　柳川春葉 齋藤松洲 編　春陽堂發行

寄贈せられたる新刊書は尙數十册あれど頁數超過の爲め其紹介は次號に讓ることとせり。

四月號出來

文章世界

四月號　一日發行　正價廿錢　郵税二錢　前金　郵税共十六冊一年分三圓十二錢

◉作を貫きたい一線（評論）……田山花袋

小說

□赤い肩掛……田山花袋
□獨りぼっち……水野葉舟
□新聞記者……岩野泡鳴

▲春の描寫の研究（研究）……吉江孤雁
▲文學者の生活（評論）……中村星湖
▲現代詩人月旦（月旦）……甲乙子
□泉筆日記（感想）……長谷川天溪
▲武者小路實篤論（評論）……野上臼川
▲復讐（小品）……吉井勇
▲今人の涅槃會の句（評釋）……内藤鳴雪

▲日常の山路愛山氏（雜錄）……杵島山
▲女の歌（長詩）……加藤介春
▲文壇時評（評論）……千葉龜雄
□新人の生活（評論）……西村渚山
▲春冬雜詠（俳句）……高田蝶衣選
▲『靜』の述懷（長詩）……福田夕咲
▲支那小品二篇（釋解）……名倉雪巖

◉新片町を去る（感想）……島崎藤村

東京本町　博文館

（中附二の一）

●大阪毎日新聞記者 平野秋來氏著◎結城素明畫伯裝幀

好評再版

長州の天下

菊版上製三百廿頁箱入
美本寫眞版十數葉挿入

定價 金壹圓三十錢
送料 八錢

僻阿の小天地より英雄俊傑雲の如く起りてよく明治維新の功業に與り光榮ある先帝陛下の御治世に燦爛たる星と耀き今や大正の御代に國家の元勳として陛下の殊遇を蒙る山縣、桂の二公を始め文武の要路に立ちて名聲嘖々たる寺内伯、井上侯渡邊中將、田中少將故乃木大將、藤田男等皆之れ長防二州の出身者にあらずや、如斯は東西古今稀に見る處、著者曩きに筆を載せて防長の山河に歴遊し親しく自然の風物に接し彼等が呱々の聲を擧げたる郷閭に就き之を古老の閑話に聞き近親舊友の清話に探り其自然と其天地が如何にして斯かる偉人を生みたるかを著者が得意の才筆を揮ひて最も明快に描寫せるもの一讀興味津々として盡きず、特に篇中桂公が位人臣を極むる榮達の得意に反し公の妹婿吉村少佐が不測の論難を受けて悶々失意の極狂して遂に二十有餘年を柵室に送れる慘風、悲雨の物語は約三十頁に亘りて同情の筆、轉た人の腸を斷つ人生の最大恨事たり、蓋し涙なくして讀む能はず、必讀すべき好著也。

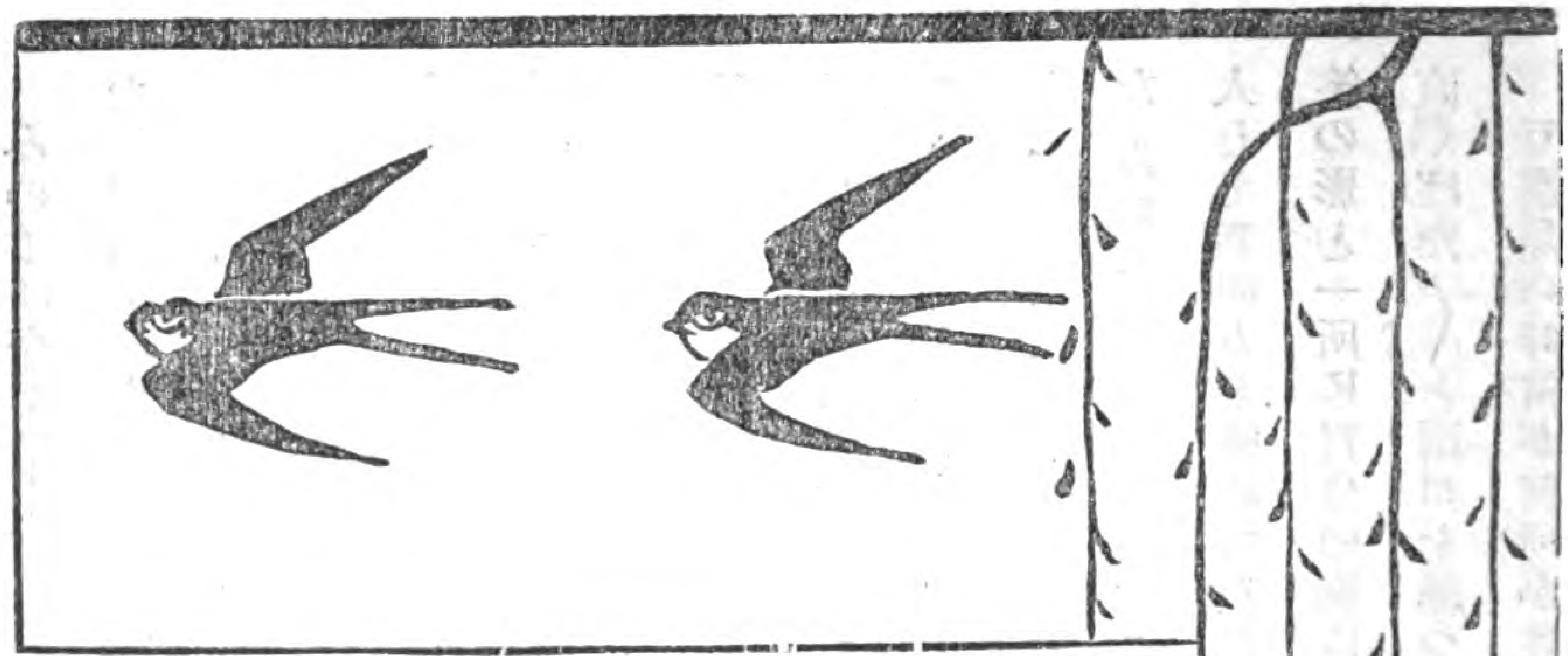
發兌元 東京本郷一丁目九番地 日東堂 電話下谷四三六二 振替東京一二五五八

(中付二の三)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

中央公論春期大附録

木乃伊の口紅……田村俊子
袈裟御前……森田草平
電報……正宗白鳥
京極……長田幹彦
樂園……田山花袋
佐橋甚五郎……森鷗外
足袋の底……德田秋聲




木乃伊の口紅

田村俊子

一

淋しい風が吹いて來て、一本圖抜けて背の高い冠のやうな檜葉の突先がひよろ／＼と風に搖られた。一月初めの夕暮れの空は薄黄色を含んだ濁つた色に曇つて、ペンで描いたやうな裸の梢の間から青磁色をした五重の塔の屋根が現はれてゐた。

みのるは今朝早く何所と云ふ當てもなく仕事を探しに出た良人の行先を思ひながら、ふところ手をした儘、二階の窓に立つて空を眺めてゐた。横手の壁に汚點のやうな長方形の薄ひ夕日がぼうと射してゐたが、何時の間にかそれも失くなつて、外は薄暗の力が端から端へと物を消していつた。みのるは夕飯に豆腐を買ふ事を忘れまいと思ひながら下へおりて行くのが物憂くつて、豆腐屋の呼笛の音を聞きながら、二三人家の前を通つて行つた事に氣が付いてゐたけれども下りて行かなかつた。さうして夕暮の空を眺めてゐた。

晴れた日ならば上野の森には今頃は紫いろの靄が棚引くのであつた。一日森の梢に親しんでゐた其の日の空が別れる際にいたづらをして、紫いろの息を其所等一面に吹つかけるのであらうと、みのるは然う思つて眺めてゐた。今日の夕方は木も屋根も乾いた色に一とつ／＼凝結して、さうして靜に絡み付いてくる薄暗の影にかくれて行つた。みのるは其れを淋しい景色に思ひしみながら、目を下に向けると、丁度裏の琴の師匠の家の格子戸から外へ出て來た娘が、みのるの顏を見上げながら微笑をして頭を下げた。みのるはこの娘の顏を見る度に、去年の夏、夕立のした日の暮れ方に自分が良人の肩に手をかけて二人して森の方を眺めてゐたところを、この娘に見られた時の羞恥を思ひ出した。今もその追憶が娘の微笑の影と一所に自分の胸に閃いたので、みのるは何所となく小娘らしい所作で辭儀を返した。さうして直ぐばた／＼と雨戸を繰つて下へおりて來た。

豆腐屋の呼笛が何所か往來の方で聞こえてはゐたけれども、もう此邊までは來なくなつた。みのるは

下の座敷の雨戸もすつかりと閉めて、茶の間の電氣をひねつてから門のところへ出て見た。
眼の前の共同墓地に新らしい墓標が二三本殖えてゐた。墓地を片側にして角の銀杏の木まで一と筋の銀紙をはりふさげたやうな白々とした小路には人の影もなかつた。肋骨の見える痩せた飼犬が夕暮れのおぼろな影に石膏のやうな色を見せて、小枝を咬へながら驅け廻つて遊んでゐた。さうして良人の歸つて來る方をぢつと見詰めてゐるみのるの足の下に寄つてくると、犬はみのると同じやうな向きに座つて、地面の上に微に尻尾の先きを振りながら遠い銀杏の木の方を見守つた。

「メエイ。」

みのるは袖の下になつてゐる犬の頭を見下しながら低い聲で呼んだ。呼ばれた犬は凝つとした儘でその顔だけを仰向かせてみのるを見詰めたが、直ぐその顔を斜にして、生きたるものゝ物音は一切立消えてゆく靜まり返つた周圍から何か神秘な物音に觸れやうとする樣にその小さい耳を動かした。無數の死を築く墓地の方からは、人間の毛髮の一本々々を根元から吹きほぢつて行くやうな冷めたい風が吹いて來た。自分の前に横たはつてゐる小路の右を眺め左を見返つてゐたみのるは、二三軒先きの下宿屋の軒燈が蒼白い世界にたつた一とつ光りを縮めてゐるやうな淋しい灯影ばかりを心に殘して内へ入つた。

義男が歸つて來た時はばら〳〵した小雨が降り初めてゐた。普通よりも小さい義男の頭と、釣合ひの

とれない西洋で仕立てた肩幅の大きな洋服の肩をみのるの方に向けて、義男は濡れた靴を脱いだ。垂れた毛を撫で上げながら明るい茶の間へはいつて來た義男は、その儘奥の座敷まで通つてしまつて、其所で抱へてゐた風呂敷包みと一所に自分の身體も抛り出すやうに横になつた。

「駄目。駄目。何所へ行つても原稿も賣れなかつた。」

「いゝわ。仕方がないわ。」

みのるは義男が風呂敷包みを持つて歸つて來たので、きつと駄目だつたのだと思つてゐた。何時までも歩きまわつてゐた事が、みのるには雨に迷つた小雀のやうに可愛想に思はれた。

「お腹は?」

「何も食べないんだ。何軒本屋を歩いたらう。」

義男は腹這になつて疊に顔を押付けてゐるので、その聲が物に包まれてゐる樣にみのるに聞こえた。

義男が居ない間に、みのるは一人して箸を取る氣になれないので、今日も外に出てゐた義男と同じやうに何も食べずにゐた。それで義男の言葉を聞くと急にみのるは食事と云ふ事にいつぱいの樂しみをつながれて臺所へ出て行つて働き初めた。膳の支度が出來るまで義男は今の樣子の儘で動かなかつた。

二

「僕は到底駄目な人間だね。僕にやとても君を養つてゆく力はないよ。」
默つて食事を濟ましてしまつた義男は、箸をおくと然う云つて又横になつた。其れに返事をしなかつたみのるは、膳を片付けてしまふと簞笥の前に行つて抽斗から考へ〳〵いろ〳〵なものを引出して其所に重ねた。
「おい。行つてくるの。」
「え〻。だつて何うする事も出來ないもの。」
みのるは包みを拵へてから、平常着の上へコートを着て義男の枕許で膝の紐ヶ結んだ。
「ぢや行つてきます。一人だつていゝてせう。淋しかないてせう。」
みのるは膝を突いて義男の額を撫てた。義男の狹い額は冷めたかつた。
「僕も一所に行く。」
「ぢや着物を着代へなくちや。洋服ぢやおかしいから。」
義男が洋服を脫いでゐる間、みのるは鏡の前へ行つて、頸卷をしてくると大きい包を抱へて立つてゐた。そうして自分一人なら車て行つて來てしまふのに、この人と一所だと雨の中を步かねばならないと思つたが、口に出しては何も云はなかつた。
みのるは重い包みを片手に抱へたまゝ戶締りをしたり、棚から傘を下したりした。包が邪魔になると其れを座敷の眞中に置き放しにして來て、在所を忘れて又彼方此方を探したりした。

二人は一本づゝ傘を手にして庭の木戸から表に廻つた。

「留守番をしてゐるんだよ。お土産を買つて來て上げるからね。」

雨のぴしよ〳〵と雫を切らしてゐる暗い庭の隅に、犬の白い姿を見付けるとみのるは聲をかけた。犬は二人して外に出る時はいつも家の中に閉ぢ籠められておくことに馴らされてゐた。怜悧な小犬は二人の出て行く物音に樣子を覺つて逐ひ籠められないうちに自分から緣の下にもぐり込まふとしてゐるのであつた。

門をしめて外に出てからも、みのるはひつそりとしてゐる犬の樣子がいつまでも氣に掛つて忘れなかつた。少し步いてくると義男は氣が付いたやうにみのるの手から包みを取らうとした。

「持つてつてやるよ。」

雨の停車場は遲れた電車を待合せる人が多かつた。つい今しがた降り出した雨だけれども、土も木も人の着物も一樣に濕々した濡れた匂ひを含んで、冷めたい空氣の底にひそかに響きを打つてゐた。みのるは包みを外套の下に抱へてゐる義男を遠くに放して、その傍に寄らずにゐた。電車に乘つてからも二人は落魄した境涯にあるやうな自分々々を絕へず心の中で眺め合ひながら、多くの他人の眼の集つた灯の明るい電車の中でこの夫婦といふ緣のある顏と顏を殊更合はせる事を避けてゐた。みのるは時々義男の外套の下から風呂敷包みの頭が食み出てゐるのを見た。前の狹い外套の裾は膝の前で窮屈さうに割れてゐた。みのるは顏を背向けるとその見窄らしい義男の姿を心に描いて電車の外の雨に濡れてゐる灯を見

詰めてゐた。

自分を憫れんでゐるやうな睫毛の瞬きが、ふるえて落ちる傘の雫の蔭にちら〳〵しながら、みのるは仲町のある横丁から出て來た。角の商店の明りの前に洋傘を眞つ直ぐにして立つて待つてゐた義男の傍に來た時、みのるの顏は何處となく晴き笑ひをしてゐた。

「うまくいつた？」

「大丈夫よ。」

嵩張つた包みが二人の間から取れて、輕い紙幣が女のコートの衣嚢に殘つたと云ふ事が、二人を浮世の人間並みらしい感じに戻らせた。つい眼の前をのろ〳〵と横切つて行く雫を垂らした馬鹿氣て大きな電車を遣り過ごす間、今まで何所かへ押やられてゐた二人の間の親しみの義務を、この間にお互の中に取り戻しておかなくてはならないと云ふ樣な顏付きで、みのるは男の顏を見詰めてわざと笑つた。

「なんでもいゝや。」

義男も腮の先きを片手で擦りながら笑つて云つた。けれども義男の眼にはみのるの笑顏が底を含んでゐるやうな鋭い影を走らしてゐたと思つていやな氣がしたのであつた。

「寒くつて。何か飮まなくちや堪らないわ。」

みのるは義男の先きになつて歩いた。向側を見ると何の店先も雨に曇つて灯が濡れしほたれてゐた。番傘が通りの灯影を遮つてゆく——泥濘の路に人の下駄の跡や、車の轍の跡をぽち〳〵と光りを帶んだはねが飛んでゐた。

二人は區役所の前の小さい洋食屋へ入つて行つた。

室には一人も客はなかつた。鏡の前に行つて顏を映して見たみのるは、義男に呼ばれて暖爐の前に肩を突き合せながら手をあぶつた。みのるはこんな時義男がいぢけきつて、自分の貧しさをどん底の零落において情なく眺める癖のある事を知つてゐた。義男がからつぽの樣な瞼を皺つかして、頰の肉にだらりとした曲線を描きながらぼんやりと暖爐の火を見詰めてゐる義男の身體を、みのるは自分の肩でわざと押し轉がす樣に突いた。さうして義男の顏を横に見ながら、

「見つともない風をするもんぢやないわ。」

と云つて笑つた。義男は自分の見窄らしさをからかつてゐる樣な女の態度に反感を持つて默つてゐた。こんな場合にも自分だけは見窄らしい風はしまいと云ふ樣に白粉くさい張り氣を作つて、自分の情緒を臙脂のやうに彩らせやうとしてゐる女の心持がいやであつた。義男はふと、みのると一所になる前まで僅かの間同棲して暮らした商賣上りのある女の事を思ひだした。その女は毎晩男の爲めに酌の相手こそはしたけれども、貧しい時には同じ樣に二人の上を悲しんて、そうして仕事に疲れた義男を殆んど自分の涙で拭つてくれるやうな優しみを持つてゐた。浮いた稼業をしてゐた女だけども、みのるの樣に直き

と、
「何うにかなるわ。」
と云ふ樣な捨て鉢な事は云つた事がなかつた。
「どうしたの。默つて。」
みのるは自分の身體をゆら〳〵と搖らつかせながら、其の動搖のあほりを義男の肩に打つ突けては笑つた。
「僕は今日不愉快な事があるんだ。」
義男は暖爐の前に脊を屈めながら斯う云つた。
「なんなの。」
義男の言葉に皭した調子を交ぜてゐたのに反對して、みのるの返事は何處までも紅の付いた色氣を持つて浮いてゐた。
「××にね。僕の作の評が出てゐたんだ。」
「なんだつて。」
「陳腐て今頃こんなものを持ち出す氣が知れないつて云ふのだ。」
みのるは聲を出して笑つた。
「仕方がないわね。」

「仕方がない？」

義男は場所も思はずに大きい聲を出してみのるの顔を睨んだ。みのるは默つて後を振返つたが、人のゐない室には斜に見渡したみのるの眼に食卓の白いきれが靡いて見えたばかりであつた。そうして、それ〳〵に食卓の上に位置を守つてゐる玻璃器にうつつた灯の光りが、みのるの今何か考へてゐる心の奥に潜かに意を寄せてゐる微笑の影のやうにみのるに見えた。みのるは顔を眞正面に返すと一人で又笑つた。

「君も然う思つてるんだ。」

「然うだわ。」

義男の腫れぼつたい瞼を一層縮まらした眼と、みのるの薄い瞼をぴんと張つた眼とが長い間見合つてゐた。

みのるがその作を原稿で讀んだ時、

「おもしろいわ。結構だわ。」

と云つて義男の手に返したのであつた。義男が自分の仕事に自分だけの價値を感じてるだけ、みのるも相應に自分の仕事に心を寄せてゐるものと思つてゐた。それが急に冷淡な調子で、世間の侮蔑とその心の中を鳴り合せてゐる樣な餘所々々しい態度を、みのるが見せたと云ふ事が義男には思いがけなかつた。經濟の苦しみに對する義男への輕蔑な女の侮蔑が、こんなところにもその迸しりを見せたものとし

きや義男には解されなかつた。
「君は隨分同情のない事を云ふ人だね。」
しばらくして斯う云つた義男の眼は眞つ赤になつてゐた。給仕が持つて來た皿のものをみのるは身體を返して受取りながら何にも云はなかつた。

三

「君はそんなに僕を下らない人間だと思つてゐるんだね。」
二人は停車場から出ると、眞つ闇な坂を何か云ひ合ひながら歩いてゐた。硝子に雨の雫を傳はらしてゐる街燈の灯はまるで暗い人世の隅つこに泣きそべつてゐる二人の影のやうに見えてゐた。
二人が生活の爲の職業も見付からず、文學者としての自分の小さい權威も、何年か間の世間との約束からだん〳〵紛れて了つた事が義男にはいくら考へても情けなかつた。そうして自分の多年の仕事に背向いてゆく世間が憎いと一所に、その背向いた中の一人がみのるだつたと云ふ事にも腹が立つた。一人が一人に向つて石を抛てば相手の女は抛つた方へその心を媚びさせて行くのだと思ふと、義男はあらゆる言葉て目の前の女を罵り盡しても足りない氣がした。義男はさつきのみのるの冷笑がその胸の眞中を鋭い歯と歯の間にしつかりと咬へ込んでる樣に離れなかつた。
「君はよくそんな下らない人間と一所にゐられるね。價値のない男をよく自分の良人だなんて云つてゐ

られるね。馬鹿にしてる男のまへでよく笑つた顔をして濟ましてゐられる。君は賣女より輕薄な女だ。」

義男は斯う云ひ續けてずん〳〵歩いて行つた。みのるは默つて後から隨いて行つた。みのるの着物の裾はすつかり濡れて、足袋と下駄の臺のうしろにぴつたり密着いては歩行のあがきを惡るくしてゐた。早い足の義男には兎ても追ひ付く事が出來なかつた。

漸くみのるが家内にはいつて行つた時は、もう義男は小さい長火鉢の前に横になつてゐた。みのるは買つてきた小さいパンを袋から出して、土間の中まで追つて來たメエイに毟つて投げてやりながら、態といつまでも明りのついた義男の方を向かずにゐた。

「おい。」

義男は鋭い聲てみのるを呼んだ。

「なに。」

然う云つてからみのるは小犬を撫てたり、

「一人ぼつちで淋しかつたかい。」と話をしたりして其所から入つてこなかつた。義男はいきなり立つてくると足を上げてみのるの膝の上に頭を撘せてゐた犬の横腹を蹴つた。

「外へ出してしまへ。」

義男はさも命令の力を顏の筋肉にでも集めてるやうに、「出せ」と云ふ意味を示すやうな腮の突き出しかたをすると、その儘其所に突つ立つてゐた。小犬は蹴られた義男の足の下まで直ぐ這ひ寄つてきて、

そうして足袋の先きに歯を當てながらじやれ付かうとした。
「あつちへお出て。」
みのるは小犬の頸輪を掴むと、自分の手許まで一度引寄せてから、雨の降つてる格子の外へ抛り付ける様に引つ張りだした。そうして戸を締めて内へ入つてくると舊のやうに火鉢の前に寐轉んでゐた義男の前に坐つて、涙と一所に突き上つてくる呼吸を唇を堅く結んで押へてゐる様な表情をしてその顔を仰向かしてゐた。
「別れてしまうぢやないか。」
義男は然う云つて仰になつた。
放縱な血を盛つた重いこの女の身體が、この先き何十年と云ふ長い間を自分の脆弱な腕の先きに纏繞つて暮らすのかと思ふと、義男はたまらなかつた。結婚してからの一年近くのたど〱しい生活の中を女の眞實をもつた優しい言葉に彩られた事は一度もなかつたと思つた。振返つて見ると、その貧しい生活の中心には、いつもみだらな血で印を刻した女のだらけた笑ひ顔ばかりが色を鮮明にしてゐた。そうして柔かい肉をもつた女の身體がいつも自分の眼の前にある匂ひを含んでのそ〱してゐた。
「僕見たいなものにくつついてゐたつて、君は何うする事も出來やしないよ。僕には女房を養つてゆくだけの力はない。自分だけを養ふ力もないんだから。」
「知つてるわ。」

みのるは、はつきりと斯う云つた。唇を開くとその眼から涙があふれた。

「ぢや別れやうぢやないか。今の内に別れてしまつた方がお互ひの爲だ。」

「私は私で働きます。その内に。」

二人は暫時だまつた。

この家の前の共同墓地の中から、夜るになると人の生を呪ひ初める怨念のさゝやきが、雨を通して傳はつてくる樣な神經的のおびえがふと默つた二人の間に通つた。

「働くつて何をするんだ。君はもう駄目ぢやないか。君こそ僕よりも脈がない。」

義男は斯う云つてから、みのると同じ時代に同じやうな文藝の仕事を初めた他の女たちを擧げて、さうして現在の藝術の世界を今も花やかに飾つてるその女たちを賞めた。

「君は出來ないのさ。僕が陳ければ君だつて陳いんだから。」

みのるは默つて泣いてゐた。不仕合せに藝術の世界に生れ合はせてきた天分のない一人の男と女が、それにも見捨てられて、さうして窮迫した生活の底に疲れた心と心を脊中合せに凭れあつてゐる樣な自分たちを思ふと泣かずにはゐられなかつた。

「君は何を泣いてるんだ。」

「だつて悲しくなるぢやありませんか。復讐をするわ。あなたの爲に私は世間に復讐するわ。きつとだから。」

みのるは泣きながら斯う云つた。

「そんな事が當てになんぞなるもんか。働くなら今から働きたまへ。こんな意氣地のない良人の手で遊んでるのは第一君の估劵が下る。君が出來ると云ふ自信があるなら、君の爲に働いた方がいゝ。」

「今は働けないわ。時機がこなけりや。そりや無理ぢやありませんか。」

みのるは涙に光つてる眼を上げて義男の顏を見た。義男の見定められない深い奥にいつかしら一人で突き入つて行く時があるのだと云ふ樣な氣勢が、その眼の底に現はれてゐるのを見て取ると、義男の胸には又反感が起つた。

「生意氣を云つたつて駄目だよ。何を云つたつて實際になつて現はれてこないぢやないか。これよりや別れてしまつた方がいゝ。」

義男は打ち切るやうに斯う云ふと奥の座敷へ自分で寢床をこしらへに立つて行つた。

みのるは男の動く樣子を此方から默つて見てゐた。義男は片手で戸棚から夜着を引き下すと、それを斜つかけに摺り延ばして、着た儘の服裝でその中にもぐり込んで了つた。その冷めたさうな夜着の裾を眺めてゐたみのるは、自分たちが火の氣もないところで長い間云ひ爭つてゐた事にふと氣が付いて急に寒くなつたけれども、やつぱり懷ろ手をした儘で冷えてきた足の先きを着物の裾にくるみながら、いつまでも唐紙のところに寄つかゝつてゐた。そうして兎もすると、男が自分一人の力だけでは到底持ちきれない生活の苦しさから、女をその手から彈きだそう彈きだそうと考へてゐる中を、かうして縋り付い

てゐなければならない自分と云ふものを考へた時、みのるの眼には又新らしい涙が浮んだ。

義男の力が、みのるの今まで考へてゐた男と云ふものゝ力の、層にしたならその一と層にも足りない事をみのるは知つてゐた。その頼りない男の力にいつまでも取り縋つてはゐたくなかつた。自分も何かしなければならないと云ふ取りつめた考へによく迫られた。けれどもみのるは何も働く事が出來なかつた。義男が今みのるに云つた樣に、義男の前にみのるは何も爲て見せるだけの力量を持つてゐなかつた。自分の内臓を嚙み挫いてもやり度いほどの口惜しさばかりはあつても、みのるは何を爲る事も出來なかつた。みのるは矢つ張りこの力のない男の手で養つてもらはなければならなかつた。

みのるは溜息をしながら立上ると義男の寢床の方へづか〳〵と歩いて行つた。そうして其の夜着を右の手を出して刎ね退けた。

「私も寢るんですから。夜具を下さい。」

二人の仲には一と組の夜のものしきや無かつた。義男はその聲を聞くと直ぐに起きて枕許の眼鏡を探してゐたが、寢床を離れる時に、

「寢たまへ。」

と云つて又茶の間の方へ出て行つた。その男の後を少時見てゐたみのるは丸まつてゐる樣な蒲團を丁寧に引き直してから、自分の枕を持つて來てその中にはいつた。

みのるは床に入つてから、粘りのない生一本の男の心と、細工に富んだねつちりした女の心とがいつ

も食ひ違つて、さうして毎日お互を突つ突き合ふ樣な爭ひの絕へた事のない日を振返つて見た。そこには、自分の紅房のやうに亂れる時々の感情を、その上にも綾してくれるなつかしい男の心と云ふものを見付け出す事が出來なかつた。

四

義男がやつとある職業に就いたのは櫻の咲く頃であつた。自分たちの生活の資料を得る爲に痩せた力のない身體を都會の眞中まで運んでゆく義男の姿を、みのるは小犬を連れて每朝停車場まで送つて行つた。時にはその電車の窓へ向けて、戀人のやうに女の唇からキスを送る白い手先きが、溫い日光の影を遮る事もあつた。みのるは小犬に話をしかけながら墓地を拔けて歸つてくるのが常だつた。そうして二階の窓を開け放つて、小供の爪の先きが人の肉體をこそ〳〵と搔きおろしてくる樣なきつい溫さを含んだ日光に額をさらしながら、みのるは一日本を讀んで暮らした。讀書からみのるの思想の上に流れ込んでくる新らしい文字も、みのるは自分一人して味はふ時が多かつた。さうして頁から頁への藝術の匂ひの滴つた種々な場景が、とりとめのない憧憬の爲に揉み絹のやうに萎えしぼんだみのるの心を靜に遠く幻影の世界に導いてゆく時、みのるは興奮して、その頰を一寸傷づけても血の流れさうな逆上した額をして、さうして墓地の中を步き廻つた。袖にさわつた茨の小枝の先きにも心を惹かれるほど、みのるの心は何も彼も懷しくなつて淚が溢れた。無暗と騷ぎ立つ感情の抑へやうもなくなつて、誰とも知らない

墓場の石にその額を押し付けた事もあつた。ぬきんでた様な青い松と、むらがつてる様な咲き亂れた櫻と、夕暮れの空の濃い限をいろどつてゐる天王寺のあたりを、みのるは涙を溜めながら行つたり來たりした。

ある晩二人は上野の山をぶら／＼と歩いてゐた。櫻の白い夜の空は淺黄色に晴れてゐた。森の中の灯は醉ひにかすんだ美しい女の眼のやうに、おぼろな花の間に華やかな光りと光りを目交ぜしてゐた。

「いゝ晩だわね。」

みのるは然う云つて、思ふさま身振りをして見せると云ふ様な身體付きをしてはしやいで歩いてゐた。この山の森の中にそつくり秘められてゐた幾千人の戀のさゝやきが春になつて櫻が咲くと、靜な山の彼方此方から櫻の花片の一とつ／＼にその優しい餘韻を傳はらせ初めるのだと思つた時に、みのるの胸は微かに鳴つた。みのるは天蓋のやうに枝を低く差し延べた櫻の木の下に、わざ／＼兩袖をひろげて立つて見たりした。そうして花の匂ひに交ぢつたコートの古るい香水の匂ひを、みのるはなつかしいものゝ息に觸れるやうに思ひながら、兎もすると捉みどころもなく消えそうになる香りを一と足一と足と追つてゐた。

義男は義男で、堅い腕組みをして素つ氣のない顏をしながらみのると離れて、ぽつ／＼と歩るいてゐ

た。義男の頭について廻つてゐる貧乏と云ふ觀念が、櫻の花の蔭を逍遙しても何の興味も起らせなかつた。長い間の窮迫が外に出る着物の融通もつかなかつたみのるは、平生着の上にコートだけを引つかけて歩いてゐた。その貧しいみのるの姿を後から眺めた時の義男の眼には、かうした舞臺ですべてを忘れてはしやいてゐるみのるの様子は、醜さを背景にした馬鹿々々しさであつた。

「もう歸らうぢやないか。」

義男は斯う云つては足をとめた。

二人は環のやうに取りめぐつてゐる池の向ふの灯を、山の上から眺めながら少しの間立つてゐた。その灯がさゞめいてるのかと思はれる様な遠い三味線の響きが、二人の胸をそはつかした。みのるは不圖、久し振りな柔らかい着物の裾の重みの事を思つて戀ひしかつた。みのるの東下駄の先きでさばいてゐた裾はさば〳〵として寒かつた。

「吉原で懇親會をやるんださうだ。」

義男は斯う云つて歩きだした。明りの色が空を薄赤く染めてゐる廣小路の方を後にして、二人は谷中の奥へ足を向け直した。遠い町で奏てゝゐる樂隊の騒々しい音が山の冷えた空氣に統一されて、二人の耳許を觀世水のやうにゆるく繞つては櫻の中に流れて行つた。みのるの胸には春と云ふ陽氣さがいつぱいに溢れた。さうしてこの山の外に、春の晩に醉ひ浮かれた賑やかな人々のどよめきの世界があるのだと思つた。その中に踏み入つて行く事の出來ない自分の足許を見た時にみのるは何とも云へず寂しくな

った。

「どうかして一日人間らしくなつて遊びまわつて見たいもんだわね。」

みのるは斯う云はうとして義男の方を見た時に、丁度二人の傍を三保の松原を走らせた天の羽車のやうな靜さで、一臺の車が通つて行つた。薄暗い壁に貼りつけた錦繪を覗いて見るやうに、幌の横から紅の濃い友禪模樣の美しい色が二人の眼を遮つていつた。そうして春の驕りを包んだ車の幌は、唯ゆらゆらと何時までも二人の眼の前から消えなかつた。

みのるは其れ限り何も云はずにゐた。默つてゐる男が今どんな夢の中にその心のすべてを解かしてゐるのだらうかと云ふ事を考へながら、みのるはいつまでも默つて歩いてゐた。

五

義男にもみのるにも恩の深い師匠の夫人が遂に亡くなつたと云ふ知らせが二人の許にとゞいたのは、四月の末のある朝だつた。

義男が一張羅の洋服て出てしまふと、仲町から自分だちの衣服を取り出してくるだけの豫算を立てゝゐたみのるは、何うにもその融通の出來ない見極めをつけると小石川の友達のところへでも行つてくるより外仕方がないと思つた。みのるは好い口實を作る事を考へながら出て行つた。

友達の家の塀際には咲き揃つた櫻か何本か並んで家の富裕を誇るやうに往來の方に枝を垂れてゐた。

みのるは其家の主人の應接室で久し振りな顔を友達と合はせた。みのるには自分が借りるのだと云ふ事が何うしても云へなかつた。一人身ならば自分が借りると云へるのだけれども、一家を持つてるものが主人の面目を考へてもそんな貧しい事は云はれるものではないと云ふ考へがみのるの頭の中を行つたり來たりしてゐた。

利口な友達は人の惡るい臆測は女の嗜みではないと云ふ様なおとなしい笑顔を作つて、みのるの手から他の知人へ貸すと云ふのを眞に受けたらしい様子を示しながら、一と襲ねの紋付を出して來た。

「お葬式には黑でなくちやいけないけれど、生憎私には黑がないから。」

友達の出した紋付は薄い小豆色だつた。裾には小蝶の繡ひがあつた。

その日は雨が降つてゐた。みのるは白木蓮の花を持つて、吾妻橋の渡船場から船に乘つた。船が岸を離れた時のゆるやかな心の辷りの感じと一所に、みのるの胸には六七年前の追懷の影が射してゐた。船の中からみのるは思ひ出の多い堤を見た。櫻時分の雨の土堤にはなくてならない背景の一とつの様に、茶屋の葭簀が濡れしよぼれた淋しい姿を曝してゐた。そうして梳つたやうな細い雨の足が土堤から川水の上を平面にさつと掠つてゐた。みのるは又、船が迂曲りを打つてはひた〳〵と走つてゆく川水の上に眞つ直ぐに眼を落した。自分の靑春はこの川水のさゝなみに何時ともなくちり〳〵と流し消されてしま

つた樣な悲しみがそこに映つてゐた。深い思ひを抱いてうつら〳〵と逍遙つた若いみのるの顏の上に雫を散らした堤の櫻の花は、今もあゝして咲いてゐた。それがみのるには又誰かの若い思ひを欺かうとする無殘な微笑の影のやうに思はれてそこにも恨みがあつた。

言問から上にあがると、昔の涙の名殘りのやうに、櫻の雫がみのるの傘の上に音を立てゝ振りこぼれた。土堤の中途でみのると同じ行先きへ落合はうとする舊い知人の二三人に出逢ひながら、師匠の門を潜つた時は、義男と約束した時間よりもおくれてゐた。

中に入ると人々の混雜が、雨の軒端に陰にしめつたどよみを響かしてゐた。表から差覗かれる障子は何所も彼所も開け放されて、人の着物の黑や縞が塊まり合つて椽の外にその端を垂らしてゐた。裏手の格子戸の內は泥のついた下駄がいつぱいに脫ぎ散らしてあつた。みのるは臺所で見付けた昔馴染の老婢に木蓮を渡してから上り端の座敷の隅にそつと入つて坐つた。そこでは母親に殘された小さい小供たちが多勢の女の手に、悲しさうな言葉で可愛しまれながら抱かれてゐた。總領の娘が其所に交ぢつて、障子の外へ出たり入つたりする人々を眺めてゐた。昔みのるがお手玉を取つたり鞠を突いたりして遊び相手になつた總領の娘は、何年も親しく逢つた事のないみのるの顏を見ると、その眼を赤く腫らした蒼い顏に笑みを作つて挨拶した。みのるの眼はいつまでもこの娘の姿から離れなかつた。

「この子はあなたの眞似が上手。」

みのるに然う云つて師匠が笑つた時は、まだ四才ぐらゐの子であつた。みのるの例もするやうに風呂

袱包みを持つて、氣取つたお辭儀をしてから、

「これはみのるたんだよ。」

と云つてみんなを笑はせた。幼さい時から高い鼻の上の方の兩端へ幾つも筋が出る様な笑ひかたをする子であつた。みのるはこの娘のこゝまで成長して來たその背丈の蔭に、自分の幾つた短い月日を繰り返して見て果敢ない思ひをしずにはゐられなかつた。

「おい。」

みのるは斯う呼ばれて振返ると、椽側に立つた義男が腮てみのるを招いてゐた。傍へ行くと義男は、

「これから社へ行つて香奠を借りてくるからね。」

と小さい聲で云つた。

「いくらなの。」

「五圓。」

二人は笑ひながら斯う云ひ交はすと直ぐ別れた。みのるは其室を出て彼方此方と師匠の姿を求めてゐるうちに、中途の薄暗い內廊下で初めて師匠に出逢つた。顏もはつきりとは見得ないその暗い中を通して、みのるは師匠の涙に濕つた聲を聞いたのであつた。

「あなたの身體はこの頃丈夫てすか。」

師匠はみのるが別れて立たうとする時に斯う云つて尋ねた。みのるは昔の脆い師匠のおもかげを見た

樣に思つてその返事が涙でふさがつてゐた。

六

その晩みのるは眠れなかつた。いつまでもその胸に思ひ出の綾が色を亂してこんがらかつてゐた。そうしてある春の日に師匠から送られた西洋すみれの花の匂ひが、みのるのその思ひ出に甘くまつはつて懷かしい思ひの血の鳴りを響かしてゐた。

あのなつかしい師匠に離れてからもう何年になるだらうかと思つてみのるは數へて見た。師匠の手をはなれてからもう五年になつた。そうして師匠の慈愛に甘へて一途にその人を慕ひ騷いだ時からはもう八年の月日が經つてゐた。その頃のみのるの生命は、あの師匠の世態に研ぎ澄まされたやうな鋭い光りを含んだ小さい眼のうちにすつかりと包まれてゐたのであつた。その師匠の手をはなれてはみのるの心は何方へも向けどころのないものと思ひ込んでゐた。そうして船で毎日の樣に向島まで通つたみのるは行くにも歸るにも渡しの棧橋に立つて、滑かな川水の上に一と滴の思ひの血潮を落し〳〵した。

それほどに慕ひ仰いだ師匠の心に背向いて了はねばならない時がみのるの上にも來たのであつた。其れはみのるが實際に生きなければならないと云ふほんとうの生活の上に、その眼が知らず〳〵開けて來た時であつた。毎日師匠の書齋にはいつて書物の古るい樟腦の匂ひを嗅ぎながら、いゝ氣になつて遊んでばかりはゐられない時が來たからであつた。そうして師匠の慈愛が、自分のほんとうに生きやうとす

る心の活らきを一時でも痲痺らしてゐた事にあさましい呪ひを持つやうな時さへ來た。この師匠の手をはなれなければ自分の前には新らしい途が開けないもの丶様に思つて、みのるはこの慈愛の深い師匠の傍を長い間離れた。けれどもその後のみのるの手に、目覺めたと云ふ證徴を持つた様な新らしい仕事は一とつとして出來上つてはゐなかつた。みのるはその頃の自分を圍ふやうな師匠の慈愛を思ひ出して、いたづらな涙にその胸を潤ほす日が多かつた。そうして唯一人の人へ對する堅い信念に繋がれて傍目もふらなかつた幼ない昔を、世間と云ふものから常に打ち叩かれてゐる様なこの頃のみのるの心に、戀ひしく思ひ出さない日と云つてはないくらゐであつた。

今夜は殊にその思ひが深かつた。みのるは今日の、夫人の棺前の讀經を聞きながら泣き崩れる様にして右の手でその顏を掩ふてゐた師匠の姿を、いつまでも思つてゐた。義男はその晩通夜に行つて歸つてこなかつた。

「その紋付は何うしたの。」

一と足先きに葬式から歸つてゐた義男は、みのるが歸つてくるのを待つてゐて直ぐ斯う聞いた。みのるは今日の式場で義男の縞の洋服がたつた一人目立つてゐた事を考へながら默つて笑つた。

「借りたの。」

ちなづいたみのるも、うなづかれた義男も、同じ樣に極りの惡るさうな顏をした。こんな時にお互に禮服の一とつも手許にないと云ふ事がれい〳〵とした多くの人の集まつた後では殊に强く感じられてゐた。

「あなたの服裝は困つたわね。」

「まあいゝさ、君さへちやんとしてゐれば。」

義男は然う云つてから、もう一度みのるの借着の姿を見守つた。義男はそれを何所から借りたのかと聞いたけれども、みのるは小石川から借りたとは云はなかつた。舊の學校の友達から然うした外見ない事を爲たと云つたなら、義男は猶厭な思ひがするであらうと思つたからであつた。みのるは自分の許へ親類の樣に出入りしてゐる商人の家の名を云つて、其所から都合して貰つたのだと云つた。そうして、何時も困つてゐると云ふ噂のある義男の友人の妻君が、ちやんとしてゐた事をみのるは思ひ出して感心した顏をして義男に話した。

「私たち見たいに困つてゐる人はお友達の中にもないと見えるわ。」

「然うだらう。」

義男は然う云つて着てゐた洋服を脫いだ。そうして少時ズボンの裾を引つくり返して見てから、

「これもこんなに成つてしまつた。」

と云ひながらその擂り切れたところをみのるに見せた。秋か春に着ると云ふ洋服を義男は若い時も雪

の降る時も着なければならなかつた。そうして何か事のある度にこの肩幅の廣い洋服を着てゆく義男の事を思つた時、今日のみのるは例の癖のやうに自分どもの貧しさを一種の冷嘲で打消して了ふ譯にはいかなかつた。さん〴〵悲しみの光景に馴らされてきた其の心から、眞から哀れつぽく自分たちの貧しさを味はふやうな涙がみのるの眼にあふれてきた。

「可哀想に。」

みのるは彼方を向いて、自分も着物を着代へながら然う云つた。世間を相手にして自分たちの窮乏を曝さなければならない樣な羽目になると、二人は斯うしていつか知らず其の手と手を堅く握り合ふやうな親しさを見せ合ふのだとみのるは考へてゐた。

「何うかして君のものだけでも手許へ置かなけりや。」

義男は然う云ひながら入湯に出て行つた。一人になるとみのるは今日の葬列の模樣などが其の眼の前に浮んで來た。花の土堤をその列が長く續いて行く途中で、面かづらを被つて泥濘の中を踊りながら歩いてゐる花見の群れに幾度か出つ會した。そうして醉漢の一人がその列を見送りながら、丁度みのるの乘つてゐた車の傍で

「皆さんお賑やかな事で。」

と小聲で云つてゐた事などが思ひ出された。みのるは義男が歸つて來たらばこれを話して聞かそうと思つた。柩の前に集つた母親を失つた小さい人々を見て、みのるもさん〴〵に泣かされた一人であつた

けれ共、その悲しみはもう何所かへ消えてゐた。

七

みのるの好きな白百合の花が、座敷の床の間や本箱の上などに絶へず挿されてゐる樣な日になつた。義男の休み日には小犬を連れて二人は王子まで青い畑を眺めながら遠足する事もあつた。紅葉寺の裏手の流れへ犬を抛り入れて二人は石鹸の泡に汚れながらその身體を洗つてやつたりした。流れには川の岩楓の蒼さと日光とが交ぢつて寒天のやうな色をしてゐた。その濡れた小犬を山の上の掛茶屋の柱に鎖で繫いておいて、二人は踏んでも歩けそうな目の下一面の若楓を眺めて半日暮らしたりした。その往き道にある別宅らしい人の家の前に立つと、その檜葉の立木に包まれた薄鼠塗りの洋館の建物の二階が横向きに見えるのを見上げながら義男は「何も要らないからせめて理想の家だけは建てたい。」といつも云つた。みのるが頻りに髮を弄り初めたのもその頃であつた。みのるは一日置きのやうに池の端の髮結のところまで髮を結ひにゆく癖がついた。みのるの用箪笥の小抽斗には油に染んだ緋絞りのてがらの切れが幾つも溜つてゐた。

こんな日の間にも粘りのない生一本な男の心の調子と、細工に富んだねつちりした女の心の調子とはいつも食ひ違つて、お互同士を突つ突き合ふやうな爭ひの絕えた事はなかつた。女の前にだけ負けまいとする男の見得と、男の前にだけ負けまいとする女の意地とは、僅の袖の擦り合ひにも縺れだして、お

互を打擲し合ふまで罵り交はさなければ止まないやうな日はこの二人の間には珍らしくなかつた。みのるの讀んだ書物の上の理解がこの二人に異つた味ひを持たせる時などには、二人は表の通りにまで響ける樣な聲を出して、それが夜の二時であつても三時であつても構はず云ひ爭つた。そうして、終ひに口を閉ぢたみのるが、憫れむやうな冷嘲ける樣な光りをその眼に漲らして義男の狹い額をぢろ／＼と見初めると、義男は直ぐにその眼を眞つ赤にして、

「生意氣云ふない。君なんぞに何が出來るもんか。」

斯う云つて土方人足が相手を惡口する時の樣な、人に唾でも吐きかけそうな表情をした。斯うした言葉が時によるとみのるの感情を亢ぶらせずにはおかない事があつた。智識の上でこの男が自分の前に負けてゐると云ふ事を誰の手によつて證明をして貰ふ事が出來やうかと思ふと、みのるは味方のない自分が唯情けなかつた。そうして、

「もう一度云つてごらんなさい。」

と云つてみのるは直ぐに手を出して義男の肩を突いた。

「幾度でも云ふさ。君なんぞは駄目だつて云ふんだ。君なんぞに何が分る。」

「何故。どうして。」

こゝまでくると、みのるは自分の身體の動けなくなるまで男に打擲されなければ默らなかつた。

「あなたが惡るいのに何故あやまらない。何故あやまらない。」

みのるは義男の頭に手を上げて、强ひてもその頭を下げさせやうとしては、男の手で酷い目に逢はされた。

「君はしまひに不具者になつてしまふよ。」

翌る日になると、義男はみのるの身體に殘つた所々の傷を眺めて斯う云つた。女の軟弱な肉を振り掠るやうに摑み占める時の無殘さが、後になると義男の心に夢の樣に繰り返された。

それは晝の間に輕い雨の落ちた日であつた。朝早く澤山の洗濯をしたみのるはその身體が疲れて、肉の上に板でも張つてある樣な心持でゐた。軒の近くを煙りの樣な優しい白い雲がみのるの心を覗く樣にしては幾度も通つて行つた。初夏の水分を含んだ空氣を透す日光は、椽に立つてるみのるの眼の前に色硝子の破片を降り落してゐる樣な美しさを漲らしてゐた。何となく蒸し暑い朝であつた。みのるのセルを着てゐたその肌觸りが汗の中をちく〳〵してゐた。

それが午後になつて雨になつた。みのるは干し物を椽に取り入れてから、又椽に立つて雨の降る小さな庭を眺めた。この三坪ばかりの庭には、去年の夏義男が植えた紫陽花が眞中に位置を取つてゐるだけだつた。黃楊の木の二三本に霰のやうなこまかい白い花がいつぱいに咲いてゐるのが、隅の方に貧しくしほらしい裝ひを見せてゐたけれ共、一年の內に延びてひろがつた紫陽花の蔭がこの庭の土の上には一番に大きかつた。その外には何もなかつた。輕い雨の音はその紫陽花の葉に時々音を立てた。みのるはその音を聞き付けるとふと懷しくなつて其所に降る雨をいつまでも見詰めてゐた。

義男がいつもの時間に歸つて來た時はもうその雨は止んでゐた。みのるは義男の歸つてからの樣子を見て、その心の奧に何か底を持つてゐる事に氣が付いてゐた。

みのるが夜るの膳を平氣で片付けやうとした時に義男は斯う聲をかけた。

「おい。君は何うするんだ。」

「何故君は例の仕事をいつまでも初めないんだね。止すつもりなのか。」

其れを聞くとみのるは直ぐに思ひ當つた。

一週間ばかり前に義男は勤め先きから歸つてくると、「君の働く事が出來た。」と云つて新聞の切り拔きをみのるに見せた事があつた。それは地方のある新聞で其れに懸賞の募集の廣告があつた。みのるが其れ迄に少しづゝ書き溜めておいた作のある事を知つてゐた義男は、それにこの規程の分だけを書き足して送つた方が好いと云つてみのるに勸めたのであつた。

「もし當れば一と息つける。」

義男は斯う云つた。けれどもみのるは生返事をして今日まで手を付けなかつた。それに義男がその仕事を見出した時はもう締めきりの期日に迫つてしまつた時であつた。その僅の間にみのるには兎ても思ふ樣なものは書けないと思つたからであつた。

「何故書かないんだ。」

義男はその口を神經的に尖らかしてゐるのに斯う云ひ詰めた。

「そんな賭け見たいな事を爲るのはいやだから、だから書かないんです。」
みのるの例の高慢な氣振りがその頰に射したのを義男は見たのであつた。
みのるはその萬一の僥倖によつて、義男が自分の經濟の苦しみを免れ樣と考へてゐる事に不快を持つてゐた。この男は女を藝術に遊ばせる事は知らないけれ共、女の藝術を賭博の樣な方へ導いて行つて働かせる事だけは知つてゐるのだと思ふと、みのるは腹が立つた。
「そんな事に使ふやうな荒れた筆は持つてゐませんから。」
みのるは又斯う云つた。
「生意氣云ふな。」
斯う義男は怒罵りつけた。女の高慢に對する時の義男の侮蔑は、いつもこの「生意氣云ふな。」であつた。みのるはこの言葉が嫌ひであつた。義男を見詰めてゐたみのるの顏は眞つ蒼になつた。
「君は何と云つた。働くと云つたぢやないか。僕の爲に働くと云つたぢやないか。それは何うしたんだ。」
「働かないとは云ひませんよ。けれども私が今まで含蓄しておいた筆はこんなところに使はうと思つたんぢやないんですからね。あなたが何でも働けつて云ふなら電話の交換局へでも出ませうよ。けれどもそんな賭け見たいな事に私の筆を使ふのはいやですから。」
義男は突然、手の傍にあつた煙草盆をみのるに投げ付けた。

一少しも君は我々の生活を愛するつて事を知らないんだ。いやなら止せ。その云ひ草はなんだ。亭主に向つてその云ひ草はなんだ。」

義男は然う云ひながら立上つた。

「そんな生活なら何も彼も壞しちまへ。」

義男は自分の足に觸つた膳をその儘蹴返すと、みのるの傍へ寄つて來た。みのるは其の時ほど男の亂暴を恐しく豫覺した事はなかつた。「何をするんです。」と云つた金を張つたやうな細い透明なみのるの聲が、義男の慟悸の高い胸の中に食ひ込む樣に近くなつた時に、みのるは有りだけの力をその兩腕に入れて義男の胸を向ふへ突き返した。そうしてから、初めてこの男の恐しさから逃れると云ふ樣な心持て、みのるは勝手口の方から表へ駈けて出た。

外はまだ薄暮の光りが全く消えきらずに洋銀の色を流してゐた。殊更な闇がこれから墓場全體を取り繞らうとするその逢魔の蔭にみのるは何時までも佇んでゐた、ぢいんとした淋しさが何所からともなくみのるの耳の傍に集つてくる中に、障子や襖を蹴破つてゐる樣な氣魂しい物の響きが神經的に傳つてゐた。

然うして絹針のやうに細く鋭い女の叫喚の聲がその中に交ぢつゐる樣な氣もした。それが自分の聲のやうてあつた。みのるの身體中の血は動いた儘にまだゆら〱としてゐた。何所かの血管の一部までそ

の血が時々どんと烈しい波を打つてゐた。けれどもみのるは自分の心の脈を一とつ〳〵調べて見る樣なはつきりした氣分で、自分の頭の上に乘しかゝつてくる闇の力の下に俯向いてしばらく考へてゐた。そうして、その淸水に浸つてゐる樣な明らかな頭腦の中に、

「自分どもの生活を愛する事を知らない。」

と云つた義男の言葉がさま〴〵な意味を含んでいつまでも響いてゐた。

みのるは全く男の生活を愛さない女だつた。

その代り義男はちつとも女の藝術を愛する事を知らなかつた。

みのるはまだ〳〵、男と一所の窮乏な生活の爲に厭な思ひをして質店の軒さへ潜るけれども、義男は女の好む藝術の爲に新らしい書物一とつ供給ふ事を知らなかつた。義男は小さな自分だけの尊大を女によつて傷づけられまい爲に、女が新らしい知識を得ようと勉める傍でわざとそれに辱ぢを與へる樣な事さへした。新らしい藝術にあこがれてゐる女の心の上へ、猶その上にも滴るやうな艶味を持たせてやる事を知らない義男は、たゞ自分の不足な力だけを女の手で物質的に補はせさへすればそれで滿足してゐられる樣な男なのだと云ふ事が、みのるの心に執念く繰り返された。

「私があなたの生活を愛さないと云ふなら、あなたは私の藝術を愛さないと云はなけりやならない。」

先刻義男に斯う云つてやるのだつたと思つた時に、みのるの眼には血がにじんで來るやうに思つた。

男の生活を愛する事を知らない女と、女の藝術を愛する事を知らない男と、其れは到底一所のもので

はなかつた。義男の身にしたら、自分の生活を愛してくれない女では張合のない事かも知れない。毎日出てゆく義男の蟇口の中に、小さい銀貨が二つ三つより以上にはいつてゐた事もなかつた。それを目の前に見て上の空な顔をしてゐる事の出來るみのるは、義男に取つては一生を手を繋いでゆく相手の女とは思ひやうも無い事かも知れなかつた。――

「二人は矢つ張り別れなければいけないのだ。」

みのるは然う思ひながら歩き出した。初めて、凝結してゐた瞳子の底から解けて流れてくる樣な涙がみのるの頰にしみ〴〵と傳はつてきた。

みのるの歩いてゆく前後には、もう動きのとれない樣な暗闇がいつぱひに押寄せてゐた　その顏のまわりには蚊の群れが弱い聲を集めて取り卷いてゐた。振返ると、その闇の中に其方此方と突つ立てゐる石頭の頭が、うよ〳〵とみのるの方へ居膝り寄つてくる樣な幽な幻影を搖がしてゐた。みのるは自分一人この暗い寂しい中に取殘されてゐた氣がして早足に墓地を繞つてゐる茨垣の外に出て來た。其邊をうろついてゐたメエイが其所へ現はれたみのるの姿を見附けると飛んで來てみのるの前に其の顏を仰向かしながら、身體ぐるみに尾を振つて立つた。突然この小犬の姿を見たみのるは、この世界に自分を思つてくれるたつた一とつの物の影を捉へたやうに思つて、その犬の體を抱いてやらずにはゐられなかつた。

「有難うよ。」

小犬に向つてから云つて了ふとみのるの眼から又涙がみなぎつて落ちてきた。みのるは生れて初めて泣

き〳〵外を歩くと云ふ様な思ひを味ひながら、右の袂て顔を拭きながら家の方へ歩いて行つた。

八

みのるは外に立つて暫時家の中の様子を伺つてから入つて行つた。茶の間の電氣を點けて其邊を見まわすと、其處には先刻義男が投げ付けた煙草盆の灰のこぼれと、蹴散らされた膳の上のものとが、汚らしく狼籍をしてゐるばかりて義男はゐなかつた。しばらくしてみのるが座敷の汚れを掃除してゐる時に、二階て人の寐返りを打つた様などしりとした響きが聞こえたのて、義男は二階に寐てゐるのだとみのるは思つた。腮の骨の痩せこけた、頸筋の小供の様に細い顔と頭を、上の方て組んだ兩肱の中に埋め込んて直かな疊の上に寐轉んてゐる義男の姿がこの時のみのるの胸に浮んてゐた。

そうして、みのるの心は其の義男の前にもう脆く負けてゐた。自分が筆を付けると云ふ事が、義男の望む「働き」と云ふ意味になつて、そうして義男を喜ばせる一とつになるならそれは何の造作もない仕事だと云ふ様な、女らしい氣安さに其の心持が返つてゐた。

長い間世間の上に喘ぎながら今日まで何も摑み得なかつたみのるの心は、いつともなく憶病になつてゐて、然うしてその心の上にもう疲勞の影が射してゐた。みのるは如何程强い張りを持ち初めても、直ぐ曉の星の様にかうして消へていつた。そうして矢つ張り唯一人の義男の情に縋つて行かなければ生きられない様な自らの果敢ない悲しみを、みのる自身が傍から眺めてゐる様な心の態度て自分の身體を男

の前に投げ出して了ふのが結局だつた。

みのるは其の翌る日から毎日机に向つて、半分草しかけてあつた或る物語の續きを書き初めた。兎もすると厭になつてみのるは幾度止そうとしたか知れなかつた。少しもそれに氣乘りがしてこなかつた。

今日まで書きかけて机の中に仕舞つておいた作と云ふのは、みのるの氣に入つたものではなかつた。自分の藝が一度踏み入つた境から何うしても脱れる事の出來ない一とつの臭味を持つてゐる事をつく〴〵感じながら、とう〳〵筆を投げてしまつた其の書きかけなのであつた。だからみのるは後半を直ぐに續けて行かうとする前に、もつと其前半を直して見なければならなかつた。みのるの自分の藝に對する正直な心が、自から打捨つた作を其の儘明るい場所へ持ち出すと云ふ様な人を食つた考へに中々陷らせなかつた。みのるは何時までもその前半を弄つてゐた。

「君はいつまで何をしてゐるんだ。」

それを見付けた義男は直ぐに斯う云つてみのるの傍に寄つて來た。

「到底駄目だから止すわ。」

「駄目でもいゝからやりたまへ。」

「私は矢つ張り駄目なんだ。」

みのるは然う云つて自分の前の原稿を滅茶苦茶にした。

「こんな事はね。作の好い悪るいには由らないんだよ。それは唯君の運一とつなんだ。作が駄目でも運さへ好ければうまく行くんだからやつて終ひ給へ。ぐづ〳〵してゐると間に會やしないよ。」

義男はみのるの手から弄り直してる前半を取り上げてしまつた。それを見たみのるは、

「書きさへすればいゝ？」

斯う云ふ意味をその眼にあり〳〵と含まして、義男の顏を眺めた。其の心の底には何となく自暴な氣分が浮いてゐた。唯義男の强ひるだけのものを書き上げて、そうして其れを義男の前に投げ付けてやりさへすれば好いんだと云ふ樣な自暴な氣分だつた。

「私が若し何うしても書かなければあなたは何うするの。」

「書けない事はないから書きたまへ。」

「書けないんです。氣に入らないんです。」

「そんな事はないからさら〳〵と書き流してしまひたまへ。」

「氣に入らないからいやなの。」

「悪るい癖だ。そんな事を云つてる暇に二枚でも三枚でも書けるぢやないか。」

義男は日數を數へて見た。規程の紙數までにはまだ二百餘枚もありながら日は僅に二十日にも足りなかつた。義男は何事も一氣に遣つ付ける事の出來ない口ばかり巧者なこの女が、煮り豆の豆が顏にぴん

と痛く彈きかゝつた樣に癪にさわつて小憎らしくなつた。
「成程君は駄目な女だ。よし給へ。よし給へ。」
義男は然う云ふと一旦取り上げた原稿を本箱から出してきて、みのるの前にはら〳〵と抛り出した。
其の俯向いた眼にいつにもない冷めたい蔭が射してゐた。
「止せば何うするの。」
みのるは机に寄つかゝつて頭を右の手て押へながら男の顏を斜に見てゐた。義男の顏は、眼の瞬きと、蒼い顏の筋肉の動きと、唇のおのゝきと、其れがちやんぽんになつて電光をはしらしてゐた。
「別れてしまうばかりさ。」
義男はぽんと女を突き放す樣に斯う云つた。みのるが何も爲得ないと云ふ見極めを付けると一所に、義男には直ぐ明かな重荷を感じずにはゐられなかつた。義男にしては二人の間を繫いてるものは愛着てはなかつた。力てあつた。自分に持てない力を相手の女が持ち得るものてなければ一所には居たくなかつた。女の重荷を、殊にみのるの樣な我が儘の多い女の重荷ヶ引摺つてゐては、自分の身體がだん〳〵に人世の泥沼の中に沈み込んで行くばかりだと思つた。義男はもうこの女を切り放さなければならなかつた。——斯う云ふ時には例も手强い抵抗をみのるに對して見せ得る男てあつた。直ぐにその場からても何方かゝこの家を離れゆくと云ふ氣勢をはつきりと見せ得る男てあつた。そこには男が特にみのる一人に對して考へてゐる樣な愛なぞは微塵も挾まれなかつた。

「書くわ。仕方がないもの。」

みのるの眼にはもう涙が浮いてゐた。そうして其邊に取り散らかつた原稿を纏めてゐた。

九

みのるは唯眞驀に物を書いて行つた。自分を鞭打つやうな男の眼が多くの時間みのるの机の前に光つてゐた。みのるは其れを恐れながら無暗と書いて行つた。蚊帳の中にランプと机とを持ち込んで暫時死んだ樣に仰向に仆れてゐてから、急に起き上つて書く事もあつた。朝から夕まで家の中に射し込んでゐる夏の日光を、みのるは彼方此方と逃げ廻りながら隅の壁のところに行つて其の頭をさん〲打ち突けてから又書き出す事もあつた。

そうして出來上つたのが締切りの最後の日の午後であつた。義男はそれにみのるの名を書き入れてやつて、小包にしてから自分で郵便局へ持つて行つた。みのるは其の汗になつた薄藍地の浴衣の袂で顏を拭ひながらこの十餘日の間の自分を振返つて見た。男の姿に追ひ使はれた筆(ペン)の先きには、自分の考へてゐる樣な美しい藝術の影なぞは少しも見られなかつた。唯男の處刑を恐れた暗雲(やみくも)の力ばかりであつた。そのやみくもな非藝術な力ばかりで自分の手には何が出來たらう。然う云ふとみのるは失望しずにはゐられなかつた。

それは八月の半ばを過ぎてからであつた。ある朝其の日の新聞の上に、ふとみのるの、心にとまつた記事があつた。

みのるは義男が勤めに出て行つてから。家の入り口の方へ釘を差しておいて自分も外に出た、そうして廣小路へ來ると其所から江戸川行の電車に乘つた。

色の褪めた明石の單衣を着て、これも色の褪めた紫紺の洋傘を翳したみのるの姿が、しばらくすると、炎天の光りに射られて一帶に白茶けて見える牛込の或る狹い町を迷つてゐた。敷き詰めた小砂利の一と つ〳〵に兩抉りの下駄が挾まるのでみのるは歩き惽くて堪らなかつた。其の度に動悸が打つて汗が腋の下を傳はつた。地面から裾の中へ蒸し込んでくる熱氣と、上から照りつける日光の炎熱とが、みのるの薄い皮膚をぢり〳〵と刺戟した。みのるの顏は燃えるやうに眞つ赤になつてゐた。

みのるは橋の角の交番で「清月」と云ふ貸席をたづねると、其所から江戸川縁の方へ曲がつて行つた。清月はその通りの右側にあつた。舊は旗本の邸でもあつたかと思ふ樣な構造をした古るい家であつた。みのるはその敷臺のところに立つて、取次に出た女中に小山と云ふ人をたづねた。

みのるは直ぐに奧へ通された。がらんとした廣い座敷に、みのるは庭の方を後にしてこれから逢はうといふ人の出てくるのを待つてゐた。何所も開け放してありながら風が少しも通つてこなかつた。そうして日中の暑熱に何も彼もぢつと息を凝らしてる樣な暑苦しさと靜さが、その赤くなつた疊の隅々に影

を潜めてゐた。みのるは半巾て顔を抑へながら、せつせと扇子を使つてゐた。

煙草盆を提げながら小作りな男が奥の方から出て來てみのるの前に座つた。瞳子の黒い睫毛の長い眼が晝寢ても爲てゐた樣にぼつとりと腫れてゐた。よく大坂人に見るやうに物を云ふ時其の口尻に唾を溜る癖があつた。笑ふと女の樣な愛嬌がその小さな顏いつぱいに溢れた。

小山はみのるの名前は知らなかつたけれども義男の名前は知つてゐた。手に持つてるのみのる名刺を弄りながら、小山はみのると話をした。

小山は自分たちの拵へてる劇團に就いて口を切つた。それからこの前の一回の興行はある興行師の手て組織された爲に世間から面白くない誤解を受けたりしたけれ共、今度の第二回は酒井や行田と云ふ人の助力のもとに極く藝術的に組織すると云ふ事を長く述べ立てた。そうして、女優は品行の正しい身性のあまり卑しくないものばかりを選むつもりだと云つた。滑かな大坂辯が暑い空氣の中に濁りを帶びて、眠たい調子をうねくとひゞかしてゐた。

小山は話しをしてる間に、少しは分つた事を云ふ女だと云ふ樣な顏をして、時々みのるの言葉に調子を乘せて自分の話を進めて行つたりした。

「然う云ふ御熱心なら、一度よく酒井先生とも行田先生とも御相談をいたしまして、其の上て御返事を差上げると云ふことに。多方よろしからうとは思ひますが私一人の考へ通りにも參りませんによつて、あとから端書を差上げると云ふ事にいたしませう。」

みのるは其れて小山に別れを告げて外に出た。

誰もゐない家の軒に祭りの提燈がたつた一とつ暑い日蔭の外れに揺れてゐるのを見守りながら、みのるが漸つと家へはつた時は、もう庭の上にも半分ほど陰ができてゐた。みのるは汗になつた着物も脱がずに開けひろげた座敷の真中に坐つて何か考へてゐた。

夜るになつてみのるは義男と祭禮のある神社へ參詣に出かけた。墓場を片側にした裏町には赤い提燈の灯がところ〴〵に、表の賑やかさを少しちぎつて持つて來た様な色を浮べてぼんやりと滲染んでゐた。その明りの陰に白い浴衣の女の姿が媚いた袖の靡きを見せて立つてゐた門もあつた。通りに出るといつも寂びれた場末の町は夜店の灯と人混みの裾の縺れの目眩しさとて新たな世界が動いてゐた。

二人は人に押返されながら神社の中へ入つて行つた。赤い椀を山に盛つた汁粉の出店の前から横に入ると四十位の色の黒い女が腕捲りをして大きな聲で人を呼んでる見世物小屋の前に出た。幕が垂れたり上つたりしてゐる前に立つて中を覗くと肩衣をつけた若い女が二人して浄瑠璃でも語つてゐる様な風をしてゐる半身が見えた。その片々の女は目の覺めるほど美しい女であつた。薄暗い小屋の中から群集の方へ時々投げる眼に、瞳子の流れるやうなたつぷりした表情が動いてゐた。艶もなく胡粉のやうに真つ白に塗りつけたおしろいが、派出な友禪の着物の胸元に惡毒い色彩を調和させて、猶一層この女を奇麗に見せてゐた。鼻が眞つ直ぐに高くて口許がぽつつりと小さかつた。

「まあ美い女だわね。」

みのるは義男の袖を引つ張つた。

「あれが轆轤つ首だらう。」

義男も笑ひながら覗いて見た。上の看板に、肩衣をつけた女の身體からによろ〳〵と抜け出した島田の女の首が人の群集を見下してゐる樣な繪がかいてあつた。義男はかうした下等な女藝人の白粉が好きてあつた。其の女の眼に義男は心を惹かれながら又歩きだした。

二人は三河島の方を見晴らした崖の掛茶屋の前に廻つて來た。葭簀を張りまわした軒並びに鬼灯提燈が下がつて、サイダーの瓶の硝子や掻きかけの氷の上に其の灯の色をうつしてゐた。そこて燒栗を買つた義男は其れを食べながら崖の下り口に立つて海のやうに闇い三河島の方を眺めてゐた。この祭禮の境内へ入つてくる人々が絶へず下の方から二人の立つてる前を過つて行つた。

「あなたに相談があるわ。」

みのるは云ひながら、境内の混雜を見捨てゝ崖から下へおりやうとした。

「何だい。」

「もう一度芝居をやらうと思ふの。」

「君が？　へえゝ。」

二人は崖をおりて踏切りを越すと日暮里の方へ歩いて出た。みのるは歩きながら酒井や行田のやらうとしてゐる新劇團へ入るつもりの事を話した。行田は義男の知つてゐる人だつた。まだ外國から歸つて

來たばかりの新らしい脚本家であつた。その人の手に作られた一と幕物の脚本を上場する事に定まつてゐるのだが、そのむづかしい女主人公を演る女優がなくつて困つてゐると、貴間小山の云つた事にみのるは望みを繋いでゐた。けれども其所までは話さずに舞臺に出ても好いか惡るいかを義男に聞いて見た。

義男は默つて燒栗を食べながら歩いてゐた。

義男はまだ結婚しない前にみのるが女優になると云つて騷いだ事のあるのは知つてゐた。けれどもどんな技量がこの女にあるのかは知らなかつた。その頃みのるがある劇團に入つて何か演つた時に一向噂のなかつたところから考へても、舞臺の上の技巧はあんまり無ささうに思はれた。それにみのるの容貌では舞臺へ出ても引つ立つ筈がないと義男は思つてゐた。外國の美しい女優を見馴れた義男は、この平面な普通よりも顏立の惡るいみのるが舞臺に立つと云ふ事だけでも恐しい無謀だとしきや思はれなかつた。

「今になつて何故そんな事を考へたんだね。」

義男は燒栗を嚙みながら斯う聞いた。

「先から考へてゐたわ。唯好い機會がないから我慢してゐたんだわ。」

義男は舞臺の上のみのるを疑つて中々其れに承知を與へなかつた。

「何故いけないの。」

みのるはもう突つかゝり調子になつてゐた。

裸になつた義男は椽側に寐そべつて煙草を呑んでゐた。みのるは其の前にぶつつりと坐つて養え切らない義男の容體を眺めてゐた。

「そんな悠長な生活ぢやないからな。」

義男は然う云つて考へてゐた。みのるが演劇に手腕を持つてゐて、それで澤山な報酬が得られる仕事とても云ふのなら宜いけれ共、海とも山とも付かない不安な界へ又踏み込んで行つて、結局は何方へ何う向き變つて行くか分らないと云ふ始末を思ふと、義男には却つてお荷物であつた。それに自分が毎日出てゆくある小社會の群れに對しても、それ等の人の惡るい仲間たちに舞臺の上の美しくない然かも拔藝の拙い女房を見られる事は義男に取つては屈辱であつた。そんな事をみのるが考へてる暇に常收入のある職業を見付けて自分に助力をしてくれる方が義男には滿足だつた。

生活の事も思はずに、斯うして藝術に遊ばう遊ばうとする女の心持が、又何日のやうに憎まれだした。

「君はだまつて書いてゐればいゝぢないか。」

「何を書くの。」

「書く樣な仕事を見付けるさ。」

「文藝の方ぢやいくら私が考へても世間で認めてくれないぢやありませんか。今度はいゝ時機だからもう一度演藝の方から出て行くわ。私には自信があるんですもの。それに酒井さんや行田さんがステージヤネヂヤならきつとやれるわ。」

みのるは眼を輝かして斯う云つた。みのるは實は筆の方に自分ながら愛想を盡かしてゐたのであつた。それはこの間の仕事によつて自分で分つたのであつた。ひそかに筆の上に新らしい生命を養ひつゝあるとばかり自負してゐたみのるは、この間の仕事に其れがちつとも現はれてこなかつた事を省みると、自分ながら厭になつてゐた。けれ共義男には然う云はなかつた。何故ならあの時にみのるは義男に向つて自分の大切な筆をそんな賭け見たいな事に使はない」と云つて罵り返したのであつた。其の自分の言葉に對してもみのるには其樣おめ〳〵した事は義男の前で云へなかつた。

自分ながら筆の上に思ひを斷つ以上、もう一度舞臺の方で苦勞がして見たかつた。新聞で見た新劇團の女優募集の記事はこの場合のみのるには渡りに船であつた。

「僕は君は書ける人だと思つてゐる。だからその方で生活を助けたらいゝぢやないか。第一そんな事をするとしても君の年齢はもうおそいぢやないか。」

「藝術に年齢がありますか。」

「そりや藝術の人の云ふ事だ。君はこれからやるんぢやないか。」

「それならよござんす。私は私でやりますから。あなたの爲の藝術でもなければあなたの爲の仕事でも

ないんですから。私の藝術なんですから。私のする仕事なんですから。然う云ふ事であなたが私を支へる權利がどこにあります。あなたがいけないと云つたつて私はやるばかりですから。」

斯う云ひきるとみのるの胸には久し振な欲望の炎がむやみと燃え立つた。そうして自分を見縊るこの男を舞臺の上の技藝で、何でも屈服さしてやらなければならないと思つた。

「そんな準備の金は何所から算段するんだ。」

「自分で借金をします。」

十

みのるを加入ると云ふ意味のはがきが小山の許から來てから、間もなく本讀みの日の通知があつた。みのるの前に斯うして一日々々と新たな仕事の手順が捗つて行くのを見てゐると、義男は氣が氣ではなかつた。平氣な顔をして、何所か遠いところに引つ掛つてゐる望みの影を目をはつきりと開いて見据へてる樣なみのるの樣子を、義男は傍で見てゐるに堪へられない日があつた。

「舞臺の上が拙くつてみつともなければ、僕はもう決して社へは出ないからな、君の遣りかた一とつで何も彼も失つてしまうんだからそのつもりでゐたまへ。」

其れを聞くとみのるは義男の小さな世間への虚榮をはつきりと見せられた樣になつて不快な氣がした。何故この男は斯う信實がないのだらうと思つた。少しも自分の藝術に向つての熱を一所になつて汲

んでくれる事を知らないのだと思つて腹が立つた。さうして其の小さな深みのない男の顔をわざと冷淡に眺めたりした。

「ぢや別れたらいゝぢやありませんか。然うすりやあなたが私の爲に恥ぢを掻かなくつても濟むでせう。」

こんな言葉が今度は女の方から出たけれども今の義男はそれ程の角を持つてゐなかつた。女が派出な舞臺へ出ると云ふ事に、女へ對するある淺薄な興味をつないで見る氣にもなつてゐた。

「君に其れだけの自信があればいゝさ。」

義男は然う云つて默つた。

清月でみのるは酒井にも行田にも逢つた。何方もみのるの見知り越しの人であつた。酒井と云ふのは、一方では、これから理想の演劇を起そうとして多くの生徒をごく內容的に養成してゐる或る博士のもとに働いてゐる人であつた。みのるはこの酒井のハムレットを見て、その新らしい技藝に醉つた事があつた。

眼と鼻のあたりに西洋人らしい俤はあつたが丈の小さい人であつた。行田は圖拔けて背の高い人であつた。いつも眼の中に思想を蓄へてると云ふ樣な顔付をしてゐた。笑つても頭の奧で笑つてる樣なぬつとした容態があつた。

銳くしやんとした酒井と、重く屈み加減になつてる行田とはいつも兩人ながら膝前をきちりと合はせ

て稽古の座敷の片隅に並んで座つてゐた。

其の中を例の小山は睫毛の長い愛敬に富んだ眼を隅から隅へ動かしながら、その小さな身體をちよこ〳〵と彈ましてゐた。

みのるの外に女優が三四人ゐた。どれも若くて美しかつた。早子と云ふのは顔は瘦せてゐたけれ共目を瞑つたりすると印象の强い暗い蔭が漂つた。そうして口豆な女だつた。艶子と云ふのがゐた。顔の輪廓の貞奴に似た高貴な美しさを持つてゐた。その中にゐて、みのるは矢つ張り行田の手で作られた戯曲の女主人公をやる事に定まつてゐた。

その女主人公は音樂家の老孃であつた。それが不圖戀を感じてから、今まで冷めたく自分を取卷いてゐた藝術境から脱けて出てその戀人と温い家庭を持たうとした。その時に其の戀人の夫人であつた女から嫉妬半分の家庭觀を聞いて、又淋しくもとの藝術の世界に一人して住み終らうと決心する。と云ふのであつた。

他の俳優たちは誰も其の脚本を笑つてゐた。他の俳優と云ふのは壯士俳優の三流ぐらゐなところから、手腕のあるのをすぐつて來た群れであつた。其の中からこの脚本に現はれた人物に扮する様に定められた男が二人ほどあつた。其の頭では解釋のしきれないむづかしい言葉が續々と出てくるので閉口して笑つてゐた。

みのるが詰めて稽古に通ふ樣になつた時はもう冷めたい雨の降りつゞく秋口になつてゐた。雨の降り込む淸月の椽に立つて、べろ／＼した單衣一枚の俳優たちが秋の薄寒さをかこつ樣な日もあつた。朝早く淸月に行つてみのるが一人で臺詞をやつてる時などに、濡れた外套を着た酒井が頸元の寒そうな風をして入つてくる事もあつた。お互の挨拶の息が冷めたい空氣にかぢかんでる樣な朝が多くなつてゐた。

行田も酒井もいつも朝早く定めた時刻までには出て來てゐた。そうして怠けた俳優たちがぞろ／＼集つてくるまで、二人は無駄な時間を空に費してゐる事が毎日の樣であつた。藝術的の氣分に緊張してゐるこの二人と、旅藝人のやうに荒んだ、統一のない不貞た俳優たちとの間にはいつもこぢれた紛雜が流れてゐた。酒井は殊にぼん／＼と怒つて、藝人根性の主張をやめないその俳優たちを表面から責めたりした。酒井の譯したピネロの喜劇は全部この不統一な俳優たちの手で演じられる事になつてゐた。その稽古が少しもつまないと云つて、酒井は「ちつとも藝術品になつてゐない。然うてん／＼ばら／＼では仕方がない。」と云つて一人でぢり／＼してゐた。

けれども演劇で飯を食べてるこの連中は、酒井などから一々臺詞にまで口を入れられる事に就いて明らかな惡感を持つてゐた。俳優たちは沈默の反抗をそのふところ手の袖に見せて、酒井の小言の前で氣まづい顏をしてゐる事が多かつた。

「初めからのお約束ですから、少々氣に入らない事があつても一致してやつて頂かなけりや困ります。どうてせう皆さん。もう日もない事ですから一とつ一生懸命になつて臺詞を覺えて頂く譯には行きませ

んか。」

酒井の傍に坐つた小山が、こんな事を云つて口に皺を寄せながら向ふに集まつた俳優たちを眺めてゐる事もあつた。

その中で女優ばかりは誰も彼も評判がよかつた。皆が舞臺監督の云ふ事をよく聞いて稽古を勵んでゐた。

「こんなに女優が重い役をやると云ふのは今度が初めだから、一とつ思ひ切つた立派な藝を見せていただき度い。女優の技藝によつてこの新劇團の運命が定まるやうなものだと思つて充分に演つて頂きたい。女優と云ふものも馬鹿に出來ないものだと云ふ事を今度の興行によつて世間へ見せて頂きたい。」酒井は斯う云つて女優たちを上手におだてた。

その中にゐて、みのるには例の惡るい癖がもう初まつてゐた。自分の氣分がこの俳優の群れに染まないと云ふ事がすつかりみのるを演劇の執着からはなしてしまつた事であつた。みのるは芝居をする事がもう厭になつてゐた。さうして、何時もこの俳優たちの低級な趣味の中に自分を輕く落して突き交ぜやうとする努めの爲にだん〳〵疲れてきた。淸月にゐる間の自分を省みると、そこには蓮葉な無敎育な女が自分になつて現れてゐた。

もう一とつ厭な事があつた。

みのるの役のワキ役になる女優に鎵子といふのがゐた。みのるよりも年嵩で舊俳優の中から出てきて

人だつた。目の大きな鼻の高い役者顔の美くしい女であつた。みのるはこの錄子と一所にゐる間は始終この女の極く世間摺れした心から妙に自分と云ふものを壓し付けられる樣な自分の感情の沮喪の苦しみがつゞくのであつた。錄子は女役者にもなれば藝妓にもなると云ふ樣に世間を渡り歩いてきた氣の强い意地つ張りが、誰に向つても自分の心持に反りを打たして、相手をぐいと押退ける樣な態度を見せた。みのるはそれにちり〱して、この錄子を恐れた。そうしてワキの錄子がみのるの仕科の上につけ〱と注文をつけたりしても、みのるは自分の藝術の權威を感じながらこの錄子に向つては言葉を返す事が出來なかつた。

みのるは小供の頃小學校へ通ふ樣になつてから、何年生になつてもその全じ級のうちにきつと自分を苛める生徒が一人二人ゐた。みのるは每朝何かしら持つて行つてその生徒に與へてはお世辭をつかつた事があつた。そうして學校へ行くのがいやで堪らない時代があつた。丁度今度の錄子に對するのがそれによく似た感じであつた。

錄子は女主人公の戀人の夫人をする事になつてゐた。行田も酒井も「あれでは困る。」と云つて、その古い芝居に馴らされてしまつたそうして頭腦のない錄子に手古摺つてゐたけれ共、錄子はそんな事には平氣であつた。そうして演劇をするについては一生懸命だつた。みのるは遂々この錄子に負けてしまつた。そうして其役を捨てると云ふ事を行田に話した。みのるはその時泣いてゐた。

「然うセンチメンタルになつては困る。今あなたに廢められては困る。」

口重な行田は一とつことを繰返しながら酒井を連れて來た。酒井は社のところに中腰になつて、
「今あなたがそんな事を云つては芝居がやれなくなりますから何卒我慢してやつて頂きたい。あなたの技藝は我々の始終賞めてゐるのですから、我々の爲にと思つて一とつ是非奮發して頂きたい。私の方の學校で今ヘッダを演つてる女生がありますが、それにもあなたの今度の技藝に就いて話をしてゐる位です。是非それは思ひ返してやつて頂き度い。」

酒井は如才なくみのるをなだめた。

けれどもみのるは何うしても厭になつてゐた。

この劇團の權威をみとめる事が出來なくなつたのと同時に、みのるは自分の最高の藝術の氣分をかうした境で揉み苦茶にされる事は、何うしても厭だといふ高慢さがあくまで募つてきて、誰の云ふ事にも從ふ氣などはなかつた。明日から稽古に出ないと云ふ決心でみのるは歸つて來てしまつた。

けれどもみのるの眼の前には直ぐ義男と云ふ突支棒が現はれてゐた。この話をしたなら義男はきつと自分に向つて、口ばかり巧者で何も遣り得ない意氣地のない女と云ふ批判を一層強くして、自分を侮るに違ひないとみのるは思つた。けれ共矢つ張り義男にこの事を話すより他なかつた。

「よした方がいゝだらう。」

義男は簡單にかう云つた。さうしてみのるが想像した通りを義男はみのるに對して考へてゐた。

「私はもう何所へもゆきどころがなくなつて終つた。」

みのるは然う云つて俯向きながら淋しさうな顏をした。

十一

みのるの爲した事は、他から考へると唯安つぽい人困らせに過ぎなかつた。つまりは矢つ張り出なければならなかつた。

初め義男はみのるに斯う云つた。

「自分から加入を申込んでおいて、又勝手によすなんてそれは義理がわるい。何うしても君がいやだといふなら僕が君の出勤を拒んだ事にしておいてやらう。」

義男は然うして劇團の事務所へ斷りを出した。劇團の理事も行田もその爲めに義男を取り卷いてみのるの出勤をせがんで來た。

劇團の方ではみのるに代へる女優を見附ける事は造作のないことであつたかも知れないが、あれだけのむづかしい役の稽古を積み直させるだけの日數い餘裕がなかつた。開演の日はもう迫つてゐた。經營の上の損失を思ふと、小山は何うしてもみのるに出勤して貰はねばならなかつた。行田も義男にあて、長い手紙をよこした。

「みつともないから好い加減にして出た方がいゝね。僕も面倒臭いから。」

義男は斯う云つて、いつも生きものを半分弄り殺しにして其の儘抛つておく樣なこのみのるの、ぬら

ぬらした感情を厭はしく思つた。然うしてこの女から離れやうとする心の定めがこの時でもその眼の底に閃いてゐた。二三日してからみのるは再び濟月へ通ひ出した。

演劇の上でみのるの評判は惡るくはなかつた。誰もこの新しい技藝を賞めた。けれども又、同時に誰が見てもみのるの容貌は舞臺の人となるだけの資格がないと云ふことも明らかに思はせた。

藝術本位の劇評はみのるの技藝を、初めて女優の生命を開拓したものとまで賞めたものもあつたけれども、單に芝居と云ふ方から標準を取つて行つた劇評は、みのるを惡るく云つた。その態度が下品で矢場女のやうだと譏つたものもあつた。みのるの容貌はほんとうに醜いものであつた。無理に拾へば眼だけであつた。外の點では唯普通の女としても見られないやうな容貌であつた。

みのるは自分の容貌の醜いのをよく知つてゐた。其れにも由らず舞臺へ上り度いと云ふのは唯藝術に對する熱のほかにはなかつた。そこから火のやうに燃えてくる力がみのるを大膽に導いて行くばかりであつた。けれども女優は――舞臺に立つ女はある程度まで美しくなければならなかつた。

女は、そこに金剛のやうな藝術の力はあつても、花のやうな容貌がなければ魅力の均衡(つりあひ)は保たれる筈がなかつた。みのるの舞臺は、ある一面からは泥土を投げ付けられる様な譏笑を受けたのであつた。

みのるはそこにも失望の淵が横つてゐるのを、はつきりと見出した。みのるはある日演劇が濟んでか

ら、雨の降り止んだ池の端を雨傘を提げて歩いて來た。今夜も棧敷からみのるの舞臺を見てゐた義男が一所であつた。

みのるはこの時ほど義男に對して氣の毒な感じを持つた事はなかつた。義男はこの演劇が初まつてから每晩芝居へ通つて來た。然うしてその小さな眼のうちは、他の批評を一句も聞き漏らすまいといつもおど〳〵と慄へてゐた。義男の友達も多勢見に來た。これ等の人の前で舞臺の美しくない女を見ながら平氣な顏をしてゐなければならないと云ふのは、この男にしては非常な苦痛であつた。技藝は拙くとも舞臺の上で人々を驚かせるほどの美を持つた女を有してゐる事の方が、この男の理想であつた。義男は其の爲に每日出て行くある群れの場所にゐても、絶へず苦笑を浮べてゐなければならない樣な、苦い刺戟に出つ會すのであつた。

義男も疲れてゐた。二人の神經はある悲しみの際に臨みながら、その悲しみを嘲笑の空の中にお互に突つ放そうとする樣な興奮を持つてゐた。

「今夜はどんなだつたかしら、少しはうまく行つて。」

「今夜は非常によかつた。」

二人はかう一と言づゝを言ひ合つたぎりで歩いて行つた。每夜舞臺の上で一滴の生命を絞り〳〵してゐる樣な技藝に對する執着の疲れが、かうして歩いて行くみのるを渦卷くやうに遠く悲しい境へ引き寄せていつた。その美しい憧憬の惱みを通して、譏笑の聲が錐のやうにみのるの燃える感情を突き刺して

ゐた。池の端の灯を眺めながら行くみのるの眼はいつの間にか涙含んでゐた。

「全く君は演劇の方では技量を持つてゐるね。僕も今度はほんとうに感心した。けれども顔の惡るいと云ふのは何割もの損だね。君は容貌の爲めに大變な損をするよ。」

義男はしみ〴〵と斯う云つた。義男は自分の女房を前において、その顔を批判するやうな機會に出逢つた事がいやであつた。同時に、みのるがそのすべてを公衆に曝すやうな機會を作り出した事に不滿があつた。

「よせばいゝのに。」

義男は斯う云ふ言葉を繰り返さずにはゐられなかつた。

十二

僅な日數で芝居は濟んでしまつた。みのるが鏡臺を車に乘せて家へ歸つた最後の晩は雨が降つてゐた。一座した俳優たちが又長く別れやうとする終りの夜には、誰も彼も淡い悲しみをその心の上に浮べてゐた。男の俳優は樂屋で使つたいろ〳〵の道具を風呂敷に包んだり、鞄に入れたりして、これを片手に下げながら帽の庇に片手をかけて挨拶し合つてゐた。この劇團が解散すれば、又何所へ稼ぎに行くか分らないと云ふ放浪の悲しみが其のてんてんの蒼白い頰に漂つてゐた。しつかりした基のないこの新しい劇團は、最うこれて凡てが滅びてしまふ運命を持つてゐた。何か機運に乘じるつもりで、斯うして集

まつた俳優たちは、又この手から放れて、然うして矢つ張り明日からの生活の糧をそれ〴〵に考へなければならなかつた。みのるは車の上からかうして別れて行つてしまつた俳優たちの後を見送つた。

芝居の間みのるが一番親しんだ女優は早子であつた。新派の下つ端の女形をしてゐると云ふ可愛らしい早子の亭主が、みのると合部屋の早子のところへ能く來てゐた。早子には病氣があつた。昨晩血を吐いたと云ふ樣な翌る日は、傍から見てゐても其の身體がほそ〴〵と消えていつて了うかと思ふ樣な、力のないぐつたりした樣子をしてゐた。毎日喧嘩ばかりしてゐるといひながら、矢張り亭主がくると髮を直してやつたり、扮つた顏を見直してやつたりしてゐた。今度の給金の事でよく小山と紛れあつてゐたのもこの早子だつた。みのるはこの早子が忘られなかつた。別れる時其の内に遊びに行くと云つた早子は何日になつてもみのるの許へ來なかつた。

また、小さな長火鉢の前に向ひ合つて、お互の腹の底から二人の姿を眺め合ふやうな日に戾つてきた。何時の間にか秋が深くなつて、椽の日射しの色が水つぽく褪めかけてきた。さうして秋の淋しさは人の前髮を吹く風にばかり籠めてともおく樣に谷中の森はいつも隱者のやうな靜な體を備へてぢつとしてゐた。その森のおもてから目に見えぬほどづゝ何所からともなく青い色が次第に剝げていつた。

二人の生計は益々苦しくなつてゐた。寒くなつてからの着料なぞは兎ても算段の見込みが立たなかつ

た。家の持ちたてには二人の愛情が濃い色彩を塗つてゐた爲に貧弱な家財道具にもさして淋しさを感じなかつたものが、別々なところにその心を据へて自分々々をしつかりと見守つてゐる樣なこの頃になつては、寒さのとつつきのこの空虚な座敷の中は唯お互の心を一層荒涼しくさせるばかりだつた。それを厭がつてみのるは自分で本などを賣つて來てから、高價い西洋花を買つて來て彼方此方へ挿し散らしたりした。然うしたみのるの不經濟がこの頃の義男には決して默つてゐられる事でなかつた。

まるで情人と遊びながら暮らしてゐる樣な生活は、どうしても思ひ切つて了はねばならないと義男は思ひつゞけた。七十を過ぎながら小使ひ取りにまだ町長を勤めてゐる故鄕の父親の事を思ふと義男はほんとに涙が出た。只の一度でも義男は父親の許へ菓子料一とつ送つた事はなかつた。義男だといつても自分の力相應なものだけは働いてゐるに違ひなかつた。それが何時も斯うして身慘めな窮迫な思ひをしなければならないと云ふのは、唯みのるの放縱がさせる業であつた。

義男は又、昔の商賣人上りの女と同棲した頃の事が繰り返された。その頃は今程の收入がなくつてさへ、何うやら人並みな生活をしてゐた。――義男はつくづくみのるの放縱を呪つた。

この女と離れさへすれば、一度失つた文界の仕事ももう一度得られるやうな氣もした。みのるが自分の腕に纒繞つてゐる爲に、大膽に世間を踏み躙れないと云ふ事が自分に禍ひをしてゐるのだと思ふと、義男はこの女を追ひ出すやうにしてゝも別にならなければならないと思ひ詰める事があつた。

「何か仕事を見付けて僕を助けてくれる譯にはいかないかね。」

義男は毎日の樣にこれをくり返した。

遂に男の手から捨てられる時が來たとみのるは意識してゐた。十何年の間、みのるは唯ある一とつを求める爲めに殆んど憧れ盡した。何か知らず自分の眼の前から遠い空との間に一とつの光るものがあつて、その光りがいつもみのるの心を手操り寄せやうとしては希望の色を棚引かして見せた。けれども其の光りはなか〳〵みのるの上に火の輝きとなつて落ちてこなかつた。みのるは義男の心の影を通して、自分にばかり意地の惡るい人生をしみ〴〵と眺めた。

「何も彼も思ひ切つてしまひたまへ。君には運がないんだから。そうして君はあんまり意氣地がなさ過ぎる。君は平凡な生活に甘んじて行かなけりやならない樣に生れ付いてるんだ。」

斯う云ふ義男の言葉をみのるは思ひ出した。けれども、みのるは矢つ張りその一縷の光りをいつまでも追つてゐたかつた。遂に自分の手には落ちないものと定まつてゐても、生涯その一縷の光りを追ひ詰めてゐたかつた。然うしてその追ひ詰めつゝゆく間に矢張り自分の生の意味を含ませて見たかつた。

二人はある晩酉の市から歸つて來てから、別れると云ふ事を眞面目に話し合つた。

「第一君にも氣の毒だ。僕の働きなんてものは、普通の男の以下なんだから。僕はたしかに君一人養ふ力もないんだから一時別になつてくれたまへ。其の代り君を贅澤に過ごさせる事が出來る樣になつたら又一所になつてもいゝ。」

これが別れると定まつた時の義男の言葉であつた。

「義男と離れたなら自分は何うしやう。何うして行かう。」

みのるは直ぐに斯う思つた。さうして自分の傍から急に道連(みちづ)れの影を失ふのが、心細くて堪らなかつた。今まで長く凭れてゐた自分の肌の温みを持つた柱から、辷り落されるやうな頼りなさが、みのるの心を容易に定まらせなかつた。

「メエイとも別れるんだわね。」

みのるは庭で遊んでゐた小犬を見ながら斯う云つた。この小犬は二人の長い月日を叙景的に繋ぎ合せる深い因縁をもつてゐた。二人をよく慰めたものはこの小犬であつた。みのるは思はず涙がこぼれた。

「あなたに別れるよりもメエイに別れる方が悲しい。妙だわね。」

みのるは戯談らしい口吻を見せてから、いつまでも泣いてゐた。

十三

みのるは一旦母親の手許へ歸る事になつた。義男はあるだけの物を賣り拂つて一時下宿屋生活をする事に定めてしまつた。

こゝまで引つ張つて來てから、ふとこの二人を揶揄ふやうな運命の手が思ひがけない幸福をすとんと二人の頭上に落してきた。それは、この夏の始めに義男が無理に書かしたみのるの原稿が、選の上で當つたのであつた。

それは、十一月の半ばであつた。外は晴れてゐた。みのるが朝の臺所の用事を爲てゐる時に、この幸福の知らせをもたらした人が來た。

その人は二階でみのるに話をした。その人が歸つてしまつてから二人は奧の座敷で少時顏を見合せながら坐つてゐた。

「本當にあたつたのかしら。」

義男は力のない調子で斯う云つた。

みのるの手に百圓の紙幣が十枚載せられたのはそれから五日と經たないうちであつた。二人の上に腐爛の腫物の樣に祟つてゐた經濟の苦しみが初めてこれで救はれた。

「誰の爲た事でもない僕のお蔭だよ。僕があの時どんなに怒つたか覺えてゐるだらう。君がとう〳〵云ふ事を聞かなけりやこんな幸福は來やしないんだ。」

義男自身がみのるに幸福を與へたかのやうに義男は云ひ聞かせた。

「誰のお蔭でもない。」

みのるも全く然うだと思つた。みのるはある時義男が生活を愛する事を知らないと云つて怒つた時、みのる自身は自分の藝術の愛護の爲めには、それを泣き悲んだりした。そんな事に自分の筆を荒ませるくらゐなら、もつと他の筆の仕事で金錢と云ふ事を考へて見る。とさへ思つた。

けれども義男に鞭打たれながらあゝして書き上げた仕事が、こんな好い結果を作つた事を思ふと、た

のるは義男に感謝せずにはゐられなかつた。
「全くあなたのお陰だわ。」
みのるは然う云つた。この結果が自分に一とつの新規の途を開いてくれる發端になるかも知れないと思ふと、みのるは生れ變つた樣な喜びを感じた。
「これて別れなくつても濟むんだわね。」
「それどころぢやない。これから君も僕も一生懸命に働くんだ。」

選をした内の一人に向島の師匠もゐた。その人の點の少なかつた爲に、みのるの仕事は危ふく崩れさうな形になつてゐた。義男は口を極めて向島の師匠を呪つたりした。さうして却つてこの人に捨てられた事を義男はみのるの爲めに祝福した。他に二人の選者がゐた。その人たちはみのるの作を高點にしておいた。義男はこの人たちを尋ねることをみのるに勸めた。一人は現代の小說の大家であつた。この人は病氣で自宅にはゐなかつた。一人は早稻田大學の講師をしてゐる人て、現代の文壇に權威をもつた評論家であつた。みのるは其の人を訪ねた。義男はみのるが出て行く時に、みのるが嘗て作して大事に仕舞つておいた短篇を其の人の手許へ持つて行く樣に云ひ付けた。その人の手から發行されてる今の文壇の勢力を持つた雜誌に、掲載して貰ふ樣に賴んで來た方がいゝと云ふのであつた。

みのるは義男の云ひ付けを守つてその短篇を持つて出て行つた。今までのみのるなら、こんな場合には小さくとも自分の權威と云ふ事を感じて、初對面の人の許へ突然に自作を突き付けると云ふやうな事は爲ないに違ひなかつた。けれどもみのるの心はふと痲痺してゐた。

みのるが訪ねた時、丁度その人は家にゐた。さうしてみのるに面會してくれた。「あれは確に藝術品になつてゐます。いゝ作です。」

其の人は痩せた顏を俯向かしながら腕組みをして然う云つた。みのるの出した短篇の原稿もこの人は「拜見しておく。」と云つて受取つた。

その人は女の書くものは枝葉が多くていけないと云つた。根を堀る事を知らないと云つた。それが女の作の缺點だと云つた。みのるは然うした言葉を繰り返しながら歸つて來た。そうして逢つてる間に其の人の口から出た多くの學術的な言葉を一とつ／＼何時までも噛んでゐた。

十四

「あの仕事にはちつとも權威がない。」

みのるは直きに斯う云ふことを感じ初めた。片手に握つてしまへば切れ端も現はれない樣な百圓札の十枚ばかりは直ぐに消えてしまつた。けれどもそんな小さな金ばかりの問題ではない筈であつた。

義男に强ひられて出來た仕事の結果は、思ひがけない幸福をこの家庭に注ぎ入れたけれども、そのみ

のるの仕事には少しも權威はなかつた。社會的の權威がなかつた。仕事の上の權威から云つたらまだ一面から譏笑を受けた演劇の方に、熱い血が通つた樣な印象があるとみのるは思つた。

　みのるの心は又だん／＼に後退りして行つた。義男がさも幸運の手に二人が胴上げでもされてる樣な喜びを見せつけてゐる事にも不足があつた。二人の頭上に突然に落ちたものは幸運ではなくつて、唯二人の緣をもう一度繫がせる爲めの運命の神のいたづらばかりであつた。二人の生活はもう直ぐに今までの通りを繰り返さなければならないに定まつてゐた。

　みのるははつきりと「何うかしなければならない。」と云ふ事を考へた。もう一度出直さなければならないと考へた。空間を突く自分の力をもつと强くしなければならないと考へた。みのるの權威のない仕事は何所にも響きを打たなかつたけれ共、その一端が風の吹きまわして世間に形を表しかけたと云ふ事が、みのるの心を初めて激しく世間的に搖ぶつた功果のあつたのはほんとうであつた。

　その後みのるは神經的に勉强を初めた。今まで兎もすると眠りかけさうになつたその目がはつきりと開いてきた。それと同時に義男と云ふものは自分の心からまるで遠くなつていつた。義男を相手にしない時が多くなつた。義男が何を云つても自分は自分で彼方を向いてる時が多くなつた。みのるを支配するものは義男ではなくなつた。みのるを支配するものは初めてみのる自身の力になつてきた。よく義男の憎んだみのるの高慢は、この頃になつて義男からは見えないところに隱されてしまつた。そうして其の隱された場所でみのるの高慢は一層强く働いてゐた。

―僕のお蔭と云つてもいゝんだ。僕が無理にも勸めなければ。」

かう云ふ義男の言葉を、みのるはこの頃になつて意地の惡るい微笑で受けるやうになつた。義男の驕つた女の仕事は義男の望む金と云ふものになつて報いられた。そこから受ける男の恩義はない筈だつた。又新しく自分は自分で途を開かねばならないと云ふみのるの新しい努力に就いては、男はもう何も與へるものを持つてゐなかつた。

少しづゝ義男の心に女の態度が染み込んでいつた。男を心から切り放して自分だけせつせとある階段を上つて行かうとする女の後姿を、義男は時々眺めた。あの弱い女がかうしてだん／＼强くなつてゆく――その振ぢ切つた樣に强くなつた一とつの動機は矢つ張り發表された例の仕事の結果だとしきや思はれなかつた。然うした自覺の强みを與へたものは矢つ張り自分だと思つた。

けれども義男は何も云はなかつた。みのるの爲た仕事は何うしてもみのるの仕事であつた。みのるの藝術は何うしてもみのるの藝術であつた。みのるは自分の力を自分で見付けて動きだしたのだ。義男はそれに口を挿むことは出來なかつた。義男は然う思つた時、この女から一と足一と足に取り殘されてゆくやうな不安な感じを味はつた。

ある時この二人の許へ訪ねて來た男があつた。これは義男と同郷の男で帝國大學の文科生であつた。

この男の口からみのるは何日の自分の作を選した眞實のもう一人を知つた。それは蓑村と云ふ新らしい作家であつた。新聞に發表されてゐた選者の一人は病氣であつた爲、その人の門下のやうになつてゐる蓑村文學士が代選したのだと云ふ事がこの男を通じて分つた。この大學生は蓑村文學士に私淑してゐる男であつた。

みのるはそれから間もなくこの大學生に連れられて蓑村文學士をたづねた。その人の家は神樂坂の上にあつた。

其の家へ入つた時、みのるは上り口の薄暗い座敷の中で簞笥の前に向ふむきに立つてゐる男を見た。初めて來た客を奥へ通すまで其所に隱れて待つてゐる樣な容態があつた。其の障子が開いてゐたのでみのるの方からすつかり見えた。

昔はどんなに美しかつたかと思はれるいゝ年輩の女に奥へ通されて待つてゐると、今向ふむきに立つつてゐた人が入つて來た。それが蓑村文學士だつた。言葉の調子も、身體も重さうな人であつた。

この文學士は作を選する時の苦心を話した。その原稿が文學士の手許にあつた時、夏の暴風雨と大水に出逢つてすつかり濡らして了ふところだつたのを、文學士の夫人が氣にかけて持ち出したと云ふ事だつた。その時崖くづれて家が破壞された爲この家へ移つたのだそうであつた。

「あれを讀んだ初めはそんなに好いとも思ひませんでしたが中頃から面白いと思ひだした。けれどもね、百點をつけると云ふ事には[illegible]

ぢや折角の此方の主意が通らないといけないから百二十點もつけておけと云ふんでせう。有野は自分に責任がないからそんな無茶な事を云ふけれども私にはまさか然うもゆかない。それで思ひ切つてあなたの點と他の人の點を二三十も違はしておいた。他の選者の點の盛りかたを見るとあなたは危ない方でしたね。」

文學士は、この女の機運は全く自分の手にあつたのだと云ふ樣な今更な顏をしてみのるを眺めた。さうしてその作の中からいゝと思つた所を拾ひ出して賞めた。

みのるにはこの文學士のどこか藝術趣味の多い言葉に醉はされながら聞いてゐた。そうしてこゝにも自分に運を與へたと云ふ樣な顏をする人が一人居ると思つた。

今噂した有野といふ文學士が丁度來合せた。その人は痩せた膝を窄める樣に小さく座つて、片手で顏を擦りながら物を云ひ〳〵した。

「けれどもね。けれどもね。」と云ふ口癖があつた。その「ね」と云ふ響きと、だん〳〵に顏の底から笑ひを染み出させて來る樣な表情とに、人を惹きつける可愛らしさがあつた。

みのるはこの中にゐて、久し振りに自分の感情が華やかに踊つてゐる樣な氣がした。義村と有野は、各自に頭の中で考へてゐる事を、とんちんかんに口先で話し合つては、又自分の勝手な話題の方へ相手を引き張つてゆかうとしてゐた。みのるは其の兩人が一人合點の話を打突け合つてゐるのを聞いてゐると面白かつた。

その内に蓑村の夫人が歸つて來た。昔の女形にあるやうな堅い感じの美しい人であつた。又其所へ若い露國人が來てこの夫人に踊りの稽古をして貰つたりした。

みのるは逆上きつた顏をして、夜るおそくまで引き留められてゐた。そうして又大學生に連れられてこの家を出た。歸る時一所に出て來た有野文學士と、みのるは暗い路次の外れて挨拶して別れた。

家へ歸つた時義男は二階にゐた。其所に坐つたみのるを見た義男は、その逆上の殘つた眼の端にこの女が亂れた感情をほのめかしてゐる事に氣が付いた。義男はこの頃にない女に對する嫉妬を感じながらみのるが何と云つても默つて居た。

「私が入つて行つた時にね、蓑村と云ふ人は上り端の座敷の隅に向ふを向いて立つてゐたの。それがすつかり私の方から見えてしまつたの。」

みのるはこればかりをくり返して一人て笑つてゐた。

その晩みのるは不思議な夢を見た。それは木乃伊の夢てあつた。

男の木乃伊と女の木乃伊が、お精靈樣の茄子の馬の樣な格好をして、上と下とに重なり合つてゐた。その色が鼠色だつた。そうして木偶見たいな、眼ばかりの女の顏が上に向いてゐた。その唇がまざ／＼と眞つ紅な色をしてゐた。それが大きな硝子箱の中に入つてゐるのを傍に立つてみのるが眺めてゐた夢てあつた。自分はそれが何なのか知らなかつたのだが、誰だか木乃伊だと敎へた樣な氣がした。

朝起きるとみのるはおもしろい夢だと思つた。自分が畫を描く人ならあの色をすつかり描き現して見

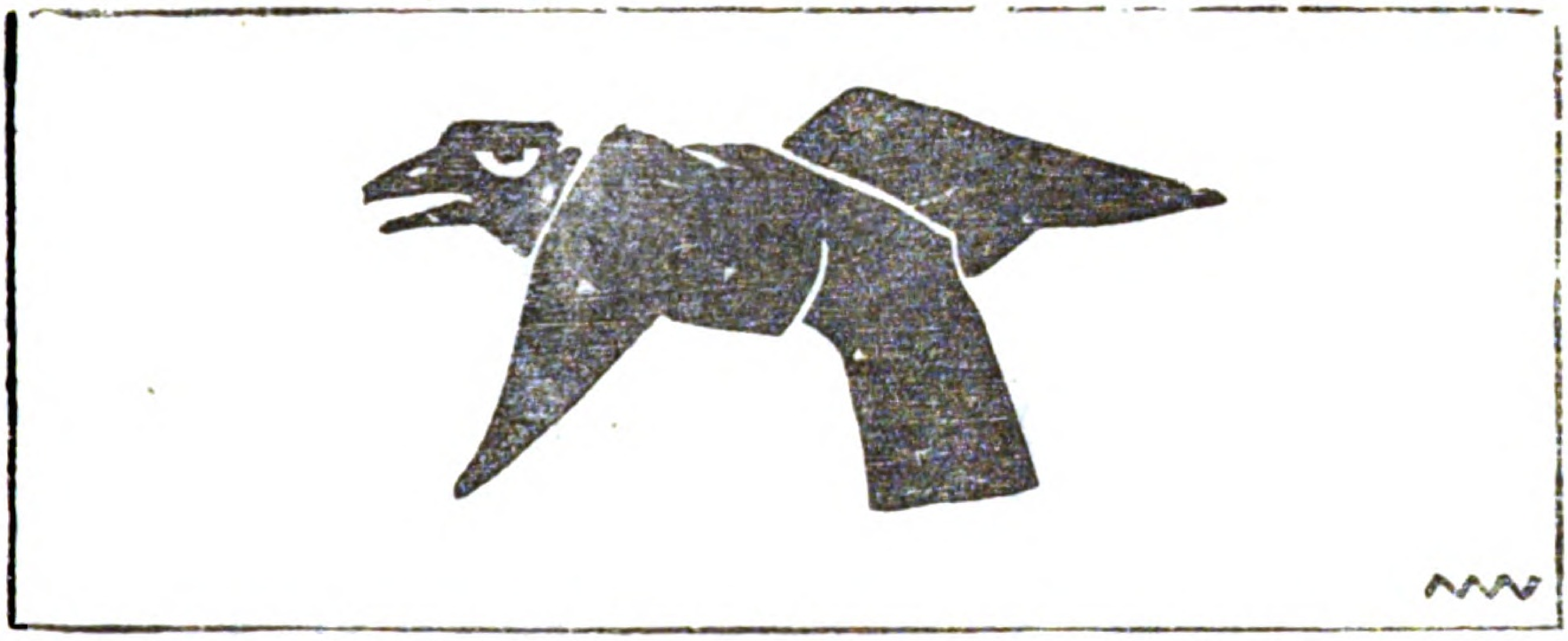
ふのだがと思つた。そうしてあれは木乃伊だと云ふ意識がはつきりと纏つてゐたのが不思議であつた。

「私はこんな夢を見た。」

みのるは義男の傍に行つて話をした。そうして「これは何かの暗示にちがひない。」と云ひながら、その形だけを描かうとして机の前へ行つた。

「夢の話は大嫌ひだ。」

然う云つた義男は寒い日向で痩せた犬の身體を櫛て掻いてゐた。（終）



袈裟御前

森田草平

人物

袈裟御前、　又の名阿とま。

衣川、　袈裟の母。

遠藤武者盛遠、　北面の武士。

渡邊左衞門尉亘、　袈裟の良人。

松ヶ枝、　袈裟の侍女。

楓、　衣川の召仕。

兵吾、　盛遠の郎黨。

杢作、　老たる番匠。

其他に番匠、仕丁、侍女など數人。

第一場

渡邊橋供養の場

正面に太鼓形の橋、橋の袂に渡邊橋普請場とした標示杭立つ。それに柳の樹をあしらふ。舞臺上手と下手に假屋立ち並び、幔幕を張渡してある。假屋の前に櫻の二本三本。

時は春の末、夕まぐれ。凡て橋供養終へて人散じたる光景。櫻の花間を置いてひら〳〵と散る。下手の普請小屋の中に大釜を据え、其下に火燃ゆ。番匠ども五六人打興じて居る。そこへ仕丁三人下手より來る。

仕丁一　やれ〳〵濟んだぞ。これて今日の役目も首尾好く濟んどと云ふものぢや。

仕丁二　左様とも〳〵、幸ひ風もなく日も暖かに、結構な渡り初めておぢやつたわい。

仕丁三　これから悠りと骨休めの振舞ひに有附くのぢや。(小屋の中を見て、)や、お主達は早や始めて居るな。

番匠一　いや最う行列の長さに待ち勞びれて、内密てちよつぴり始めた所ぢや。お前方も此處へわせられい。

番匠ども　さアわせられい〳〵。

仕丁一　偖も早い奴等ぢや。

仕丁二三　それでは仲間へ這入ろか。

番匠ども　さア〳〵。

大釜の周りに圓座して、釜の中の白丁を取出し、皆々酒を酌む。盃順々に廻る。

仕丁一　さて〳〵今日の賑ひは厳いことぢやつたの。近年橋供養もつゞく中に、此様な人出は見ぬことぢやい。

仕丁二　加茂の祭も斯程では有るまい。何さま禁裏からの勅使は立つ、仁和寺の御坊が導師で、緋の衣を着た大衆が渡り初めをすると云ふからに、京洛中の男女が擧つて出たのぢや。それにしてはいかう諍ひもなく、負傷人も出ず、無事に濟んで何よりぢや。

仕丁一　俺は又餘りな人出に、折角架けた橋が今にも如何ぞ成りやせぬかと、大抵心配したことぢやないかな。

番匠一　何を言ふぞい。津の國の番匠が腕に撚をかけて仕上げた仕事ぢや。間違ひが有つて堪ろかい。

仕丁一　何ぢやと。

番匠二　まア〳〵、埒もない喧合は止めぬかやい。お奉行様の耳へでも入つたら事ぢや、したが、今日のお奉行様、お歳は若いが物の裁きもてきぱきして行届いた方ぢや。

仕丁二　おうさ、あれはの遠藤武者盛遠とて、高い聲では言はれぬが、院の侍の中でも暴れ者と評判の

方ぢや。彼の大きな眼玉で四邊ぎろ〳〵見廻しながら、大薙刀を搔込んで、のそり〳〵歩く姿を見ては毛も立つて慄からぞ。

仕丁三　ちよと手を明けてても居やうなら、直樣あの怖い眼を怒らして、大音聲に喚かれる。ほんに氣も魂も身に添はぬわ。

番匠二　したが、其のお陰で今日の供養も無事に濟んだ。

仕丁二　そんな物かい、はゝゝゝ

仕丁三　さア一杯飲め、〳〵。

番匠三　時に杢作の姿が見えぬが、何處へ行た。あの酒好きの爺が見えぬぞ。

番匠二　今迄此處に居た筈ぢやが。

番匠一　あれ〳〵彼處にぼんやり立つて居るわ、憑物が落ちでもした樣に呆げて立つて居るわ。

一人白髮の老番匠仲間を離れて假屋の外へ出で、腕組みをしながら、ぼんやり橋の上を見詰めて居る、

番匠三　こりや杢作、主や其處に何してぢや。些と此處へ來て祝ひの酒を飲まぬかやい。

老番匠　（背を向けたまゝ、呟く樣に。）いや、解せぬ事が有るぢや。

番匠三　何が解せぬのぢや。

老番匠答へず。

番匠三　（假屋の外へ出て、）はて、今日はお主如何かして居るな。あれ程好きな酒も飲まず、何ぼ聲を掛けて

も返辭をせぬ。

老番匠　（一人言の樣に言ふ。）はて、不思議な事が有るものぢや。今日渡り初めの導師がお通りの前、塵も殘さず淸潔に掃いた橋板の上を、二尺に七寸餘りの母子の蛇が、ちよろ〳〵、ちよ〳〵と渡つて行く。誰も氣が附かぬ樣ぢやつたが、俺の眼にはちやんと見えたわい。

皆々少時沈默する。

仕丁一　（一人嘲笑ふて、）何を言ふのぢや。そりやお主の眼の迷ひぢやろ。

老番匠　眼の迷ひなら眼の迷ひにして置け。此橋には女の執念が祟つて居るに違ひない。此橋にも橋を建てた者の身の上にも、何ぞ間違ひがなければ可いがな。

番匠一　何を言つてるのぢや。此のぽか〳〵とした陽氣なら、蛇も出よ、蟇も出よ、彼の年中土の中を潛つて居る土龍も春と知つて踊り出さうわ。それに何の不思議が有ろかい。

番匠二　いや〳〵待てよ。それに就いては俺も聽き込んだことが有る。今迄緣起でもないと控いて居たが、此橋が出來上ると左樣ぢや一昨日の朝ぢや、歲の頃は廿四五の女房が此の橋から身を投げて死んだといの。

仕丁二　あゝ、其女なら昨日の日暮れ、川下の村から死骸に成つて上つたさうな。何ても腹に五月ばかりの子を抱えて居たと云ふ話ぢや。

仕丁一　して又、其女子が何て死んだ。

仕丁二　俺は知らぬ。

番匠二　俺も知らぬ。

皆々　いや最う鶴龜々々。

仕丁三　こんな話がお奉行様に聞えて見ろ、又何んな目に遭はうも知れぬわ。

仕丁一　あれ〳〵、噂をすれば影とやら、彼處へ見えるはお奉行様ぢや。

遠藤武者盛遠、今年十九歳、紺村紺の直垂に黒絲縅しの腹卷して、折烏帽子、銀の蛭卷したる薙刀左の脇に挾み、舞臺上手より後ろを顧み勝ちに出で來る。橋の前迄來て、物に躓きたる心持にて振向り、普請小屋の中をぐつと見込む。仕丁番匠ども盛遠の姿を見て屏風を倒す樣に鎭まりたるが、此時假屋の前に並んで、ぴよこ〳〵と頭を下げる。盛遠はそれを見たるまゝ、殆ど心にも留らぬ樣子にて、二たび後ろを振返り、一心に上手を見詰めて居る。

それとも知らず袈裟御前、十六歳、下髮に被衣、みやびたる女房の風俗にて、同じ上手より出づ。頭重く惱ましげな風情。

侍女松ケ枝　（手に市女笠を持ち、つか〳〵と後を追うて來たが、）もし上樣へ、お前の氣合ひが惡いとて、假屋に休んで御座つた暇に、參詣の衆も大方散つて仕舞つたさうな。いつそ輿に召しますか、それとも最少しお拾ひ遊ばすかえ。

袈裟御前　さア慣れぬ外出に人に醉うて、お前にもいかい苦勞を掛けました。したが、暮れ行く春の野の寂けさ、あれ〳〵櫻の花が散つて居る、いぶせき輿に搖られうより、最些と歩いて見やうわいな。（又そろ〳〵と舞臺前面へかゝる。）

松ヶ枝　（其後に隨ひて、）成程、一日一夜垂れ籠めて、坐すお方の偶の外出、ほんに野末の景色も面白かろ
それでは左樣遊ばせや。

盛遠舞臺後方に突立つたまゝ、眼もて袈裟御前の行く方へ從つた。やがて段々後ろへ退つて、二人の女と入れ代る。

老番匠　（盛遠の傍へ近寄つて、小腰を屈め、）お奉行樣、もし若いお奉行樣へ。何を其樣に見てお坐て遊ばす。
見るのは惡い、其樣にして一つ所を見るのは惡い。

盛遠の耳には入らぬ體。

老番匠　な、其樣にして女子を見るものではない。屹度好からぬ事が起りますぞへ、貴方の身にも、女
子の身にも。

夕ぐれ塒へ舞ひ下りんとする雲雀の音空に聞ゆ。袈裟御前思はず足を止めて、空を仰ぎながら靜に踵を廻らしたが、松ヶ枝
と顏見合せて、

袈裟御前　ほゝ。

松ヶ枝　ほゝゝ、ほゝゝゝゝ。

袈裟御前、不圖、盛遠が火の如き眼に自分を見詰めて居るのに氣が附いて、急に笑ひ止む。何か物に怖ぢたる樣に花道の附
根迄逃げ行き、わな〳〵と顫へて居る。松ヶ枝も振向いて、盛遠を見附け、走り寄つて、片手に主を庇ばうとする。

袈裟御前　早う輿を、早う。（物言はんとすれど、聲出でず、手を動かすのみ。）

松ヶ枝　輿丁の衆、早う〳〵

輿丁白木造りの輿を舁ぎ据ゆ。袈裟御前其輿に乗らうとして簾を上げたが、又盛遠の眼に引かれる様にして、二三歩戻る。

其儘うつとりと成る。

松ヶ枝　もし、お上様へ。如何(どう)なされました。(と、袖を引く。)

袈裟御前　あいなア。(氣が附いて、二たび輿に乗る。)

輿丁輿を舁いて揚幕に入る。松ヶ枝も引添うて走せ行く。

盛遠　(たぢ／＼と舞臺眞中へ脱けて來て、一里先きの物でも見詰める様に、凝乎と揚幕の方を見込む。)

老番匠　(傍へついて來て、)あゝ、危(あぶ)ない事ぢや。お止め成されませ、／＼。其様にして見詰めて居たら、乾度惡い事が起りますぞへ――もし、お願ひて御座りまする。何卒あの方は見ずに置いて下さりませ。爺のお願ひて御座りまする。

盛遠　(不圖、振向いたが、袖を振りちぎつて、からりと薙刀を捨てる。爺轉ぶ。)兵吾々々。

雜兵一人　(下手より出て跪く。)はゝア。

盛遠　(腹卷をかなぐり捨て、)これを其方に預けたぞ。

よろ／＼と袈裟の後を追うて入る。

老番匠一旦尻持をついたが、起上つて、其後を見詰む。日の暮れる心持にて舞臺面次第に暗く成る。幕。

第二場

衣川住家の場

鳥羽の里、衣川住家の體。藁葺の軒朽ちて、上手に障子を閉め切つた佛間。正面二重には、白地の襖、其前に二枚折の屏風を立てゝ、爐の釜に湯沸ぎる。下手に網代門。

母衣川。四十八九歳、切下髪、未だ殘んの色香失せやらぬ姥櫻、昔の美しさを思はせる風情。後ろ向きに坐つて、釜の湯加減を見て居る。門前には、一人の托鉢僧口の中で讀經せる所にて、幕開く。

衣川　（讀經の聲に聞耳を立てゝ、向直りながら、）あゝ、又毎も托鉢の御出家さうな。どれ、お布施を進ぜませう。（と言ひつゝ、立上つて納戸へ入り、再び初穗を盆に載せて出て來たが、沓脱石の上の庭下駄を穿いて、門の傍へ近寄つた。手頸に數珠を掛けて居る。）さ、心ばかりのお布施ぢやぞえ。

托鉢僧　歸命頂禮、南無阿彌陀佛。（と唱し終つて、初穗を頭陀袋に受け、鉢の中から衣川の顏を覗き込む樣にしながら、）今日も白河から四條の邊り迄參りまする。何か京へお言傳ても御座らぬかな。

衣川　さいなア、此中娘の便りも聞かぬが、便りのないのは無事な證據。其間文でも認めて置いて、又賴むことに爲ますわいな。

托鉢僧　ほんにお前樣は有德な仁ぢや。當時渡邊黨の中でも美男の聞え高い亘殿を婿に取つて、此方の娘御と二人並べて置いたら、定めて雛の樣てあろ。何事も前の世て善根を積まれた應報ぢや、南無阿彌陀佛、々々々々々々。（花道へかゝつて退場。）

衣川　（凝手と其後姿を見送つて居たが、つと身を引いて、）今日は九月十三日、月こそ違へ、亡く成られた阿とまが父御の待夜、わが身が彼の子を抱えて奥州から戻つてからも十三年、あゝ思へば早いものぢやなア。どれ、花でも手折つて佛に進ぜましよ。

と、片手に剪刀を執つて、口の中で稱名を唱へながら、庭前の桔梗女郎花など切つて居たが、再び二重へ上り、障子を開けて佛間に入る。其時金色をした佛壇が見えて、又障子に隠れる。靜に鉦の音ひゞく。

遠藤武者盛遠　（狩衣を着て素足に草履の扮装、顔色憔悴して顋髭少々伸び、思ひ切つたる面持にてばた〳〵と花道を駈けて來たが突然門の扉も破れよとばかり打叩く。）物もう、案内もう。

鉦の音止む。

盛遠　誰ぞ有らぬか。盛遠が參つた。早く出て門を開けられい。

衣川　（佛間を出て、怪かしげに四邊を見廻しながら、）楓、〳〵、楓は居やらぬか。誰やら門に案内が有るぞ。

返辭なしっ首を傾げながら庭に降りて門の中より聲を掛く。

衣川　誰ぢや、氣立ましい、何人ぢや。（盛遠應へず。そつと扉を細目に開けて、）何人にて坐すぞ。

盛遠物をも言はず、其扉に手を掛けて押開け、衣川を突除ける様にして、ぬつと入る。衣川は其扉と一緒に倒れんとして、漸く踏み留まり、此の無法な闖入者を眺めて居たが、

衣川　やゝ、其方は盛遠――まア、珍らしい、好うおじやつたな。（と、いそ〳〵近寄らうとして、相手の血相變へた容子に氣が附き、急に怖氣が差して立縮む。）

盛遠　いかにも盛遠ぢや、久し振に伯母御前を見舞ひに參つた。（凝乎と衣川の様子を見返したが、俄に憤怒の聲荒く。）伯母御前、何故其様に俺の顏を見詰めてぢや。

衣川　（たぢ〳〵として、）さ、何もわざ〳〵和殿の顏を見ると云ふてはないが、お丶、それ〳〵、和殿も子供の折には毎日の様に此處へ來やつて、阿とまとも一緒に遊び暮したものぢやが、おひ〳〵男に成るに附け、院の北面へ出仕する様に成つては、お宮仕への暇なさ、ふつつり足も途絶えたのに、何と思うて今日のお出て――と思うての事ぢやいな。ま丶、其方へ上らつしやいのう。

盛遠　（阿とまの話を聞いて顏色を變へたが、さ有らぬ體に沓脱石の上に登つて、椽に腰打掛く。）併し伯母御前には御息災にて何より重疊。

衣川　（遠くから廻る様にして、二示へ上つて、）和殿も健固で嬉しいわいの。それに此春は又渡邊橋の橋供養に奉行の役を勤めて、いかい名譽の事さうな。阿兄持遠殿にも、草葉の陰から嘸お喜び――

盛遠　（ぢり〳〵と向直つて、）渡邊橋の供養のこと、誰から何と聞かれた。

衣川　さ、誰から聞いたとなけれども、それは最う此邊り迄大層な評判ぢやわいな。（二たび盛遠の容子に眼を附けて、）其方、何故其様に震えてぢや。まア怖らしい眼をして此伯母を如何する氣ぢや。

盛遠　お丶、一期の敵、伯母御前の命を貰ふのぢや。（と言ひさま、伯母の小腕取つて捩ぢ伏せ、片手にすらりと腰の刀を拔放つ。）

衣川　（悲鳴を上げて、身を藻掻きながら、）何とし玉ふ、盛遠殿。妾のためには和殿は甥、和殿のためには妾は

伯母、殊に母御の沒かられてからは、此伯母が手鹽に掛けて育てた和殿、親とも子とも思はれやう、恨みを受ける覺えはない。誰が何の樣な讒言して、斯く憂目をば見せたまふぞ。

盛遠　いゝや、他人の讒言でない。今も和御寮の言はれし通り、幼きより阿とまとわれ、野邊に蝶追ひ川に漁りして、共に睦びしことを忘れ玉はずば、折に觸れての戲れにも行末は二人を娶合せんずと、伯母御前の口づから宣ひしこと、よも忘れじ。さるに何日の間にやら我を差措き、一門の亘に袈裟をたまひしことぞ心得ね。現在の伯母に欺かれ、可惜女子を人に奪られた。此恨み伯母なりとて親なりとて容赦が成らうや。

衣川　そ、そりや無體ぢや、其恨みは餘りに無體ぢや。和殿が左程熱心なりや、何故早う沙汰はしてたもらぬ。老先短かい親の身は、一日も早う娘に好い聟取つて、初孫の顏も見たいものと、そればッかりに憂身を窶すぞや。少しは子を持つた親の心も酌んでたもいのう。

盛遠　えゝ、親の心おのれが知らうや。盛遠こそは三年が間、われから此家へも遠ざかつて、人知れず心の痛手を包んでは來たもの丶、先つ頃渡邊橋の供養の日に、久しや、袈裟の姿を見掛けてより、妄執の念二たび燃え立つて、晝とも夜とも分たねば、身は空蟬の脫殼の如く、命は草葉の露も同然、戀には人の死なぬものかは。斯く成り果つるも元はと言へば誰がためぞ。同じ命を取らるゝなら、伯母御前、和御寮を殺してわれも死ぬわ。（と、衣川の頸髮とつて捩起しながら刃を胸元に擬す。）

衣川　まア／＼待つて、少時待つてたも。

盛遠　待てとは未練な。

衣川　未練とも言へ、卑怯とも言へ、一親人子一人の袈裟を置いては死にともない。宥してたべ、盛遠殿。（と、手を摺合せて伏拝む。）

盛遠　（凝乎とそれを見て居たが、）すりや、左程に命が惜しいか。

衣川合點々々する。

盛遠　命惜しくば、亘が手から袈裟を取戻して、われに返せ。

衣川　ま、其樣なことが。

盛遠　出來ぬと有らば、それも可い、盛遠一人やみ／＼と見殺しには爲れまいぞ。

衣川　いゑ／＼、待つてたも。今は是非に及ばぬ、其方の心の晴れる樣に爲やうわいな。

盛遠　なに、阿とまをわれに返さうとな。

衣川　今宵袈裟を此家へ喚んで、和殿に會はさう程に、其後は二人で兎に角——兎に角此處を離してたもいの。

盛遠　屹度さうか。（思はず、衣川を捕えた手を放つ。）が、併し後に至つて亘が方へ返り忠など爲さば、和御寮を始め袈裟、亘、一門殘らず鏖殺しにして、思ひを晴らずが心得たか。

衣川　（身を戦はせながら、）あいなア。

盛遠　うむ、それたに間違へ玉はずば、一命にも及ぶまい。では又夕方に御意得申すぞ。（わざと慇懃なし

眼に睨み廻して、舞台下手より退場。)

衣川 (少時其後を見送つて居たが、) 如何せう、〱、如何せうぞいなア。

と、泣き沈む。やがて佛間から料紙と硯箱を持つて來て、一字々々考へては書く。やつと認め終ると、も一度讀み直して、吐息を吐きながら、文箱に入れた。手を叩いて侍女を喚ぶ。

衣川 楓、々。

女の童 (襖を開けて出て、) 召しましたか。

衣川 退儀ながら此文箱を持つて、並(ならび)の里の亘か邸へ行き、袈裟に手渡ししてたもいのう。構へて何事も言ふまいぞや。

女の童 はアい。(元の襖から退場。)

衣川 (凝乎と一つ所を見詰めて居たが、はら〱と落涙して、顏を上ぐ。) あゝ、ひよんな事に成つたわいな。いつそ楓を喚び戻さうか――したが、今の盛遠が有樣、よも其儘には差措くまい。親の身として、わが子に道ならぬ道の手引をする。一定來世は地獄に墮ちやう。あゝ、如何したら可からうぞいな。(と、身を悶へて泣き伏す。)

稍長き沈默。舞臺次第々々に暗く成る、黄昏の心持。)

袈裟御前 (楓と共に急ぎ足で登場、花道の中程に、息切れのする體にて停まる。) あゝ、何とやら氣がゝりな、心細い文の御消息。母様の身に大事ないかえ。

女の童　いえ〳〵、御案じなさる樣では御座りませぬ。

二人網代門の前迄來る。女の童門の扉を開けて置いて、裏口へ廻る。

袈裟　（門の中に入つて、）母樣、々々、阿とまが參りました。（と言へど、答へなし。）まア日も暮れたに燈火も點けず、如何なされたことやら。（と、だん〳〵椽鼻に近づく。）

女の童奥より燈火を持つて出づ。

袈裟　（母の倒れて居るのを見て、）まア母樣、そこにお坐遊ばしたか。風邪のお心地と承はりましたが、何の樣で御座りまするぞえ。

衣川　（半ば身を起して、つく〴〵袈裟の顏を眺めて居たが、はら〳〵と落涙して、）娘か、好う來てたもつた。此母はな、犯せる罪とてなけれども、身に振かゝる大難に、所詮生きては居られぬわいの。

袈裟　えゝ。（飛び立つ。）

衣川　さ、何も言はずに此刀で、（と、傍への手箱の中から小刀を取出して、わが子の前に置く。）さ、和女の手に懸け此母を思ひ切つて殺してたもいの。

袈裟　（後ろへ下りながら、）まア何としてぞ。母樣。お氣でも狂ひしか。阿とまに何で其樣な――さゝ、心を落着けて樣子を話して下され、譯を聞かせて下されいなア。

衣川　（袖で顏を蔽ふて居たが、）樣子と言ふは今朝のこと、何日になく彼の盛遠が訪ねて來て、子どもの折の事を言立て、是非なく袈裟をわれに返せ、去らずば母の命を取ると、刃を胸へ突つけてのつ引させぬ無

理難題。

袈裟　(思はず知らず、)あの遠藤盛遠どの――

衣川　和女、何とか爲やつたか。

袈裟　いゝえ、何とも致しませぬ。(と言へど、心の中には何時ぞやの邂逅ひが浮んで來る心持。短き間。)それから何と爲されましたえ。

衣川　さ、それぢやに依つて、盛遠の思ひを晴らさせずば、無慈悲な刃に殺されるは一定、さりとて亘が心を破らうてはない。いろ〳〵思ひ惱んだ上、人手に係つて憂目を見むより、切めて和女の手にかゝつて果てやうと、思ひ定めて居るのぢやわいなア。(と、袈裟の膝に取縋つて、さめ〴〵と泣く。)

袈裟も暫くは言葉なく、折重なつてよゝと泣く。

袈裟　(やう〳〵涙を拂ひ、)母樣、最う泣いて下さりますな。阿と妾は心を決めました。親のためには、さらぬ孝養もする習ひ、お命に代りまする。緣を結びの神樣も、哀れと思し下されませう。

衣川　なに、何と言やる。

袈裟　盛遠殿に會ひますわいな。

衣川　いや〳〵、和女に其樣な憂目を見せては、此母が亘殿に面目ない。何卒妾を手に懸けて――

袈裟　えゝ最う、何も何も言ふて下さりますな。(と、疊の上に伏沈む。)

ほと〳〵と網代門に案内の音聞ゆ。衣川そつと頭を擧ぐ。

盛遠（門の扉を開けて入りながら、）先刻の約束によつて盛遠が參つた。

衣川　おゝ。（と、飛び上つたが、後ろに袈裟を隱しながら、わな〳〵と戰へて居る。）

盛遠　伯母御前、何と爲された。（つか〳〵と椽の前迄進んで、）なに、そこに居やるは袈裟御前ではないか。（と、二重へ上つて、）幼な馴染の遠盛なるわ。なにも、其樣に怖がることはない。これへ出ませ、さ、これへ出ませい。（と、矢庭に傍へ寄らうとする。）

衣川　あの、それは――（と、兩手に盛遠を支へやうとする。袈裟袖屏風をして、小鳥の樣に戰へて居る。）

盛遠　えゝ、邪魔ひろぐな。（と、拳を上げて打たんず氣勢。）

袈裟　もし――（と、二人の中へ割つて這入つた。）遠盛どの――（兩膝をとんと突いて、片手に衣川を庇ふ樣にしながら、凝乎と盛遠の顔を見上げたが、其眼には決心の色見えて、男に對する恐怖と憎惡とが闘つて居る。とは云へ、其憎惡は物狂ほしい愛着と壁一重隣りのものである。）

盛遠　おゝ、阿とまか――（と、傍へ寄らうとしたが、女の顔を見ると、何となく其威に打たるやうな心持がして寄添ひ得ない。）

袈裟（眼もて盛遠の後を追つたが、見る〳〵緊張した眉のまはりの筋肉が弛む。）おゝおゝお――（と、聲を上げて泣伏した。直ぐに又屹と顔を上げて、）阿とまぢや、阿とまで御座んす。其の阿とまをお前は何と爲されますぞえ。

盛遠　おゝ知れたこと。此戀かなはずば生きて詮ない盛遠、武士と生れて、弓矢に死ぬるも一定、戀に死ぬるも一定。世の心なしが笑はゞ笑へ、和御前を殺してわれも死なうと、疾くより覺悟を定めて來た

わ。

袈裟　えゝ。（と、思はず顏を上げたが、又しほ〳〵と差俯向く。）

衣川　（後ろではら〳〵と氣を揉んで居たが、前へ乘出して、）そ、そりや其方何を言ふのぢや。

袈裟　母樣、もしッ――（と、衣川を制して、）お前は彼方に居て下されませ。阿とまが好い樣に致しまするな、な。（母を宥めて、佛間へ連れて行く。やがて又懷へ手を差入れたまゝ、しほ〳〵と出て來て、やゝ離れた所へ座る。）

盛遠は始終眼を離さず袈裟の擧動を見詰めたまゝ、何とも言はない。

袈裟　（顏を上げて見ては、又言出し兼ねたが、やつと、）もし、遠盛どの。小さい時からお前の氣性、言出しては利かぬ人と知らぬではなけれども、昔の事を思つたりや、阿とまを哀れとはおぼさぬか。思ひ返して、宥してはたもらぬかいの。

盛遠　なに、哀れと思へ――それは此方で言ふこと。宥せとは、此盛遠に一人死ねと言ふのぢやな。

袈裟　いえ〳〵、左樣ではなけれど、何を言ふにも、われは人妻。

盛遠　えゝ、言ふも無益。其の人妻には誰が成つた。斯く成る上は命くらべ、誰彼の容赦が成らうや。和御前が不祥、盛遠が不祥、加へては亘が不祥、三人の不祥が一度に來るとも、宿業なれば是非もなやいづれにしても、三人に一人、所詮生きては居られまい。袈裟御前、心を据えて返答召されよ。（むつくと立上つた。）

袈裟　えゝ、三人に一人――（と言ひさしたまゝ、差俯いて物を案ずるさま。やゝ暫くして、）盛遠さま――（間）お前の

お心やう〳〵合點が行きしました。

盛遠　合點が行つたとは。

袈裟　かう成り行くも、皆宿世の因果、繋がる縁て御座りませう。阿とまはお心に隨ひまする――したが妾は未だ良人のある身、重さが上の小夜衣、人目を耻づる棲褄ねはよも爲まい。盛遠どの、まこと妾を思ふてなら、一思ひにわ――亘を殺して下されいのう。

盛遠　なに、亘を殺せ――とな。

袈裟　今更お前は後れてか。それては先刻仰有つたのも――

盛遠　おゝ、和御前さへ其心なら、何とて盛遠が後れを取らうや。して、其の手段は。

袈裟　其の手段は――おゝ、左樣ぢや、妾はこれより家へ戻つて、左衞門尉に髮を洗はせ、酒に醉はせて高殿にそつと寢させて置きませう程に、其の濡れた髮を搜つて打つて下さりませ。

盛遠　（踊り上つて、）大願成就。それては、明日の夜九ッの鐘を合圖に――

袈裟　えゝ――屹度。

盛遠　屹度言葉を番へたぞよ。

袈裟袂を啣へたまゝ、僅に點頭く。盛遠沓脱石の上へ飛び下りて、網代門より出て行く。

衣川　（佛間より出て、）盛遠は歸つたかえ。ま、能う彼の暴れ者が歸つたのう。（と、袈裟の後ろから寄添ひて、心配相に其顏を見上げる。）

袈裟立上つたまゝ、盛遠の後影を見送つて居たが、母と顔を見合せて、上から見下しながら、物に言はず、せぐり来る涙にぶる〳〵と身を戰はす體。だん〳〵崩折れやうとして、途中から急に衣川へ背を向け靡なく下に伏沈む。其間、家の裏にある背景の立樹の梢に、夜明けの心持にて、茜色の光射す。幕。

第三場

亘の邸宅

舞臺やゝ下手寄りにまはり椽を廻した殿造りの座敷、庭を距てゝ、上手に障子を閉切つた高殿が見え、渡廊が兩方を繋ぐ恰度その渡廊の上邊りに十四夜の月が出て居る。庭前の泉石、すべて中古武家の好み。

渡邊左衞門尉亘、二十三歳、名古屋山三に似たやうな美男子、練絹の小袖に袴を着けたばかりで、椽に近い座敷の脇息に凭れ、打寛いだる體にて盃を擧ぐ。袈裟御前瓶子を取つて、つゝましやかに酌をして居る。火皿の燈火ゆらいて、微かに二人の面を掠む。

亘　（盃を下に置いて、）あゝ、先刻より、何とやら氣がゝりな和女の容子、氣分でも勝れぬか、それとも何か心に係る——

袈裟　いえ〳〵、左樣な事は御座りませぬ。

亘　それなら最そつと浮立つて、一つ酒でも過しては如何ぢや。母御の病氣も、案じたよりは事なく

濟んで、それも重疊。見やれ、今宵の圓かな月を、夫婦の中も彼の樣に缺けたることもないてはないか。

袈裟　はい――お心を煩はして濟みませぬ。只――親のいたづきとは云へ、女の身て斷りもなく一夜を外に明した。それさへお咎めもなく、お優しい言葉を聞くに附け、何や彼や案じ過して、つい――

亘　はて、何を詰らぬ。それより如何ぢや、これを一つ和女に上げよ。（と、盃を献す。）

袈裟　（叩頭をして、それを受けた。）妾も今宵は醉ひまする。

盃の献酬がつゞく。

亘　（やゝ酒のまはりたる心持。）それは希代な事ぢや。では、如何てあろ。月を肴に、一曲所望は出來まいかな。

袈裟　（笑顏を見せて點頭きながら、）拙い調べも、時の興――

亘　（はたはたと手を打つて、侍女を喚び寄せ、）奥の間から筑紫琴を取つておぢや。

侍女　はアい。（退場。）

亘　和女が我家へ來てから、早や三年、和女と一緒に琴も來たのぢやな。

袈裟　琴も手馴れる、妻も古びる――

亘　はゝゝゝゝ。

袈裟　ほゝゝ。

侍女二人一面の琴を擁して出て、それを袈裟御前の前に置く。袈裟それに見入りたるまゝ、急に眞面目な表情と成る。一つ

つゝ琴爪をはめながら、物を案ずる體。やがて絲の音に伴れて、しめやかな唄に成る。

露深き淺茅が原に迷ふ身の
いとゞ闇路に入るぞ悲しき

袈裟　（急に琴の手を止めて、）もし、人に斬られて死ぬ時は、佛に成らぬと云ふことぢやが、ほんの事で御坐りませうか。

亘　はて、異な事を訊くものぢや。佛に成るか成らぬか、其樣なことは女子(をなご)の云ふものでない。したが、琴の音色も沈み、何うやら手許も惰るさうな。最早や琴は止めにしやれさ。

袈裟　いえ〳〵、妾は夜すがらでも。

二たび朗詠に伴れて、琴を掻鳴らす。物靜かな夜の氣合。其間、亘は脇息に凭れたまゝ、うと〳〵と成る。袈裟は不圖琴の手を止めて、亘の顏を見遣つたが、いよ〳〵寢入つた樣子に、つと琴を押除け膝で擦寄つて、凝乎と五分間餘りも良人の寢顏を見詰めて居る。顏面の筋肉次第に痙攣する樣に震えて、怺え切れずに、わつと聲を出さうとして袂を咬ひ緊めながら伏沈む。

亘　うゝ、其方(そち)や如何かしやつたか。（むづ〳〵と動く。）

袈裟ぎくりとして頭を上げたが、二たびすや〳〵と寢附く樣子を見て、胸撫下しながら立つて襖の前へ行く。はた〳〵と手を打つ。

侍女　（襖の中にて、）はア——

袈裟　（二たび亘の傍へ取つて返して、手を掛けて搖起しながら、）もしツ、夜風も寒う成りました。彼方(あちら)へ御座つて

御寢成されませぬか。

耳　（むつくり起上つて、）あゝ、何時の間にやらうと〳〵寢入つたと見える。夜も深けたか。和女も來やれ彼方へ參つて寢ると致さう。

袈裟　はい、妾は後から――

耳足許やゝ危き心持にて、侍女に伴れられて次の間に入る。袈裟は立上つて其後を見送つて居たが、良人の姿が襖の外に隠れると、思はずたぢん〳〵として振回り、べつたり耳の座つて居た茵の上に座つた。そして、いや〳〵をする様に立上げながら二たび脇息の上に顔を伏せる。

侍女二人　（襖を開けて這入つて、）上様には、未だ御臥み成されませぬか。

袈裟　（急に顔を振上げて、）殿様は最う御寢成つたかえ。

侍女　最うお臥み遊ばしました。

袈裟　あゝ、左様か。妾は未だ彼方に用事も有る。それでは後を頼んだぞえ。（椽側へ出て、突當りの渡廊へ通ふ開き戸を入る。）

侍女二人其後にて、脇息、茵、其他酒宴の器を取片け、最後にばた〳〵と雨戸を閉めて行く。それと同時に、上手の高殿にぱつと灯火が點つて、障子に二人の女の影法師が映る。

袈裟　（障子の中にて、）あゝこれ、松ヶ枝や、一寸待つてたも。又あの蛾が火皿の灯を奪りに來た。左様して置いたら、今に燒死ぬてあろ。危ない、〳〵。早う其障子を開けて逃して遣りやいのう。

松ヶ枝　はい〳〵畏まりました。（障子を閉けて、蝶を追出さうとする。）

袈裟片手に垂髪を支へ[illegible]、鏡臺に向つて坐つて居る。傍に金蒔繪の櫛笥を置いて、すべて髪を洗つた後の體。

袈裟　（松ヶ枝の方を見遣つて、）最う好いわいなア。

松ヶ枝　え丶煩さい蟲め。（と、二たび袈裟の後ろへ廻つて、あるじの髪を櫛もて梳き上げながら、）ほんに、上樣のお髪は好いお髪ぢや。天笠に有るといふ、蘭奢の香りを焚きこめて、中宮樣の黄金の冠を被せても、屹度好う似合ひませうぞえ。

袈裟　（暫時默したる後、）其方にも好いと見えるかえ。

松ヶ枝　好い段かいな。したが、夜に入つて、不意に髪をお洗ひなされたのは、如何いふ譯で御座いますぞえ。松ヶ枝には何うも合點が參りませぬ。

袈裟　え丶。（稍ぎくりしたが、直ぐに又心を落附けて、）お丶、それ〳〵、今宵は菊月望の夜。此夜若い女子が髪を洗ひ、薄化粧して臥せる時は、一生男に捨られぬと、昔の譬話にも有るさうぢやわいな。

松ヶ枝　まア左樣かいな。私は又好い歳をして、ついぞ其樣な話も聞きませなんだ。左樣云ふ事なら、紅も白粉も好うつけて、たんと可惜がつてお貰ひ遊ばせや。さア〳〵、お髪も最う出來ました。つい一寸下へ行て、盥の水を明けて參りまするぞえ。

袈裟　いろ〳〵退儀であつた。したが、其水を明けやつたら、最う此處へは來んでも可い程に、ゆつくり臥んでたもいの。

松ケ枝　いえ〳〵、最一度參りまする。

袈裟　いゝやいの、和女の來てたもらぬ方が、却て妾の都合が可い、な、な。

松ケ枝　ま、左樣で御座りましたか。それなれば、最う參じませぬ。御機嫌好うお臥み遊ばせや。（何やら呑込み顔に、襖を開けて降りて行く。）

袈裟　（襖の閉つた後を稍久しく眺めて居たが、又もや後ろ向きに吸り上ぐる體。やがて正面を向くと共に、片袖づゝ互みがはりに涙を抑へて。）あゝ、幾たび泣いても返らぬことと――涙に顔を汚しては死顔を見られるのも耻かしい。切めて化粧を仕直して置かうわいな。

二たび鏡立に向つて、紅皿、白粉刷毛など取出して、顔をつくる。其間不図顔を上げて仰上つたが、物に襲はれる樣にわな〳〵身を戰はして思はず手に持つた紅皿を取落す。紅皿鏡の椽に當りて二つに割る。氣が附いて、屹とそれを見遣つたが、だん〳〵其眼を鏡の中に移して、自分の顔が映るのを見ると、又急に飛び立つ。

おゝ、妾は誰に見しよとて顔を粧るのぢや、死顔に化粧して――誰に見せやうと云ふのぢや。（稍長き間。）誰でもない、遠藤武者盛遠どの、お前に見せるのぢや。お前でなくて誰が有らう。わしやお前に――身體は上げられぬ。それて――それて、此首を上げるのぢや。お前に殺されるのぢや。（にた〳〵と笑つて。）あゝ、可哀いか、可哀かろ。妾もお前を可惜しう思ふて居る――お前を此處に待つて居る、一人寐て待つて居る。お前の足音が次第に此部屋へ近づいて、枕元に立つ迄待つて居る。闇の中に白刃が閃く迄凝平と眼を開いて待つて居る――

きり〳〵と齒を咬ひしばつて、當度もなく宙宇を見詰めて居たが、ばつたりと疊の上に伏し轉んだ。月の前を怪しげな雲が走つて、草叢に蟲の音すだく。

（やがて又そろ〳〵と頭を擡げた。一時興奮した感情も二たび鎭靜したらしい。）あゝ、妾は矢張良人のために死ぬのぢや。母樣、亘どの、宥して下され。妾故に數多の人の命にも係はる難儀、それが悲しさに、わが身一つを失ひまする。袈裟をあはれと思召さば、後の世の御廻向を一重に賴みますわなア。

鐘の音微かに響いて來る。

おゝ、あれは——妾を死出に迎ひの鐘——

障子の枠に縋つてよろ〳〵と立上つたまゝ、物音に耳でも欹てる樣に、凝乎と庭前を見透して居る。月雲に隱れて庭の面次第に暗く成る。やがて袈裟御前、そろ〳〵と障子を閉めて、五寸程に成つてから、ぱつたり閉切つたまゝ、姿を部屋の中に隱す。少時して、ふつと燈火を吹消したる體。

月光再び水の樣に輝く。家の中は何處にも燈火の影射さねば、月の光の當らぬ所は、黑々として物凄い。下手の座敷の檐に釣つた鐵燈籠が急に光を増して、大きな宮守のへばり着いたのが、はつきりと見える。

遠藤武者盛遠、狩衣の上に襷をして、素足下手屋臺の裏の植込の中から、のつそりと出る。四邊を窺ひ〳〵、力足を踏み堅めて、舞臺中央迄忍び寄つたが、家の蔭を出外れると、全身に眩いばかりの月光を浴びて、驚いて一足退く。今度は椽の上へ這ひ上つたが、角の柱を曲ると、月光の當つて居る椽側を一目散に駈けて、渡廊へつゞく開き戸の陰へ隱れる。事なく其戸を開けて內側へ這入つた樣子。

小時の間、舞臺の上に動くものなし。宮守も依然として動かない。

やがて高殿の中に、「やッ」と云ふ掛聲。と、突然障子を開けて、盛遠の姿が高殿に現はれた。右の手に白刃、左の脇に何やら抱へて居る。一瞬間右視左視して躊らつたが、思ひ切つたさまで、高殿の欄干を越えて庭へ飛び降りた。直ぐに立上つて元來た方へ駈出した。が、下手迄駈けて行つて、何と思つたか急に足を留めた、二三歩立戻つて、左の脇に抱へたものを、燈籠の灯影に透して見る。盛遠の顏には驚きの表情が有つた。又、突然駈け戻つて、月光に透して見た。

やッ、こりや袈裟が――

盛遠は白刃を取落して、兩手に袈裟の首を抱いたまゝ、大息を吐いた。其儘、地上に尻持を付いた。足摺りをして、自分で自分の腕を敲いた。聲を上げて呻いた。

亘の聲　（家の中にて。）やア曲者が這入つたと見えるぞ、者ども出會へ〳〵。

家の中一時に騷然と成る。

盛遠はそれにも氣が附かぬ樣に、身を悶へながら、遣瀬なげに袈裟の死顏へ頰擦をした。

高殿を開き戸から、ばら〳〵ッと物具を着けて、獲物を執つた郎黨が現れた。盛遠はやつと氣が附いた樣に振回つた。急に片膝立てゝ立上らうとしたが、思ひ返して、袈裟の首を胸に抱いたまゝ、地上に平逭つて仕舞つた。

月黑雲に掩れて、舞臺面だん〳〵暗く成る。眞の闇と成つた頃、幕靜かに下る。

――大正二年三月十六日――

電報

正宗白鳥

今まで炬燵の側で姦しく戲れてゐた弟妹は、寢床に就くべく揃つて母屋の方へ歸つてしまつた。置ランプの油を吸ふ音が寂しく耳に染出した。おまきは炬燵に額を當てゝ取留めのない考へに耽つてゐた。夫の故郷へ着いてから日々に數へてゐる日數はまた一つを加へた。實家の兩親に會ふ時の話の種はます〳〵胸に溜つてゐる。……もう十日もう二十日とその時を待兼ねて身悶えされるほどになつてゐる。

誰れだか荒々しい高い聲で話をしながら塀の外を通つて、磯の方へ行つた。おまきはふと面も上げて、耳を澄まして、次第に消えて行く話聲を追うた。後ては幽かな呟くやうな松風が響いてゐるばかりである。「誰れも濱にゐなけ

れば、埠頭場へ出て海を見て來るんだけど」と、漁火の煤めく穩かな繪のやうな海を心に描いてゐた。

すると、今まで寢ころんで古い書物を讀んでゐた夫の信吉は、ふと身を起して欠伸をしながら、「珈琲でも飮みたいな」と云つて、周圍を見廻して、「土瓶も持つて行つたんだね、喉が乾いた」

「彼方ぢやもう寢てるてせう、先つき潛戸を締める音がしてたから」おまきはかう云つたが、夫の唇の乾いてゐて、如何にも飮物の欲しさうに舌を動かしてゐるのを見ると、「ぢや、水を汲んで來ませう」と、目を据えて勢ひよく云つた。

そして、夫のはつきりした返事を聞く間もなく立上つて、机の上の湯呑を持つて戶の外へ出た。石段の下の井戶端へ行く間にも、暫し足を留めて冴えた星の光を珍らしさうに見上げた。「まあ奇麗だ」と獨言を云つた。

母屋の二階には登美雄さんがまだ起きてゐるらしく、燈火が雨戶の隙間から洩れてゐる。……默つて鬱込んだ顏をして書物ばかり讀んでゐるあの人を見ると可愛相でならない。痛々しいほど頰が憔けてゐるのに、毎晚夜更かしをして、と、思遣を籠めた目をその方へ向けた。

井戶には水の滴が落ちてゐる。おまきは重い釣瓶を手繰り上げて、自分も二三口水を呑んで快く息を吐いてから、湯呑へ溢れるばかり注いだ。危なさうな手付をして夫の側へ持つて行つて、「冷たくつてよ、隨分」と、晴々しい聲て云つた。

そして、夫がガブ〳〵と勢ひよく呑むのを面白さうに見ながら、

「登美雄さんはよく勉强してるわね」と、話の糸口を解かうとした。

「あれも役に立たん勉强ばかりしてるんさ。英語なんか獨習して何にするつもりか知らん、どうせ一生田舍にゐなくちやならんのに」

「氣の毒だわねえ。……でも、私には時々話をしてよ。ヴァイオリンも譜を買つて獨りで稽古したんですつて」

「さうかい。あんな人間は案外音樂なんかに才を持つてるんかも知れないがね。しかし今からはもう仕方がないだらう」

「樂みと云つて何もなささうだわね。此間私がお菓子を奢つて上げたの。よく食べるのよ。食べるのが何よりも樂みですつて。……もうお嫁さんを取る年頃になつてるのに、あんなにすつ込んで悄平してゐちや可愛さうだわね」

「むん……」と、夫は何か考へてゐた。上目で鴨居の方を見て、暫く默つてゐたが、ふと、

「此處にゐる間に祖母さんが死んだら、お前はどうする？」

「どうするつて、私困るわ」おまきは出拔けの夫の問ひに驚いた。

おまきの祖母は八十近い年齢で、去年の秋頃からは寢起も自由にならぬほどに衰えてゐる。「祖母さんは何時危ないか分らない」と、折々の母の音信の端にも書かれてゐて、東京を立つ前から心に掛つてゐたのである。

「まだ大丈夫でせう。今月一杯ぐらゐは屹度大丈夫だわ」と、おまきは言葉に力を籠めた。
「人間は死にさうでも中々死なゝいからね」と、夫はだるい聲で云つた。
「私祖母さんのお形見にはコートを貰うことになつてるの。そりやいゝコートよ」
「祖母さんはいろんな衣服を持つてるぢやないか。お金もどつさり持つてるんだらう」
「そりや持つてるさ」
おまきは調子づいて、祖母の持物について話出したが、そんな話は夫に取つてはあまり興がなかつた。て、寢床を敷かせて枕に就いたが、すると間もなく、母屋の方から下駄の音がして、離れ座敷の入口の戸の前に留まつた。
「十能が此方に御座いませんか」それは下女の聲であつた。
耳敏い夫は直ぐに聞取つて、妻を呼起した。おまきは手燭を點して座敷から縁側を捜したが何處にも見當らなかつた。
「此方にはありませんよ」と下女に答へて、下女が得心して立去るのを待つて、彼方ではまだ起きてるんだわね、もう餘程遲いだらうのに」と、小聲で云ひながら寢床へ這入つた。枕を直して頭を乘せるが早いか、再びスヤ〳〵と眠入つた。
と、間もなく、また母屋の潜戸がガラ〳〵音を立てゝ、下駄の音が近づいて來た。夫は變な氣がして頭を持上げてゐると、

「おまきさん電報てすぞな」と、母が聲を掛けた。

屹度さうだなと、夫は跳起きて戸口へ出た。電報を受取ると、母の持つてゐる手燭の光で直ぐにそれを讀んだ。豫定の文句が只片假名で書かれてゐる。

寢室へ戻つて妻を搖起して、ランプを點けると、おまきは震へるやうな息を吐いて目を醒まして、キヨロ／＼周圍を見廻した。

「いよ／＼電報だ。……五時頃に死んだのらしいな」と、夫は枕元で發信時刻を見ながら、

「此處は電報ても暇がかゝる。もう十一時過ぎだらうのに」

「今來ましたの？。私何だか變だわ」おまきは夜具の上に座つた。顏は逆上せて紅くなつてゐる。

「どうするんだい。歸るんかい」

「えゝ……」夢に襲はれてゐるやうて聲に力はなかつた。

「おれはまだ用事も片付かないし、とても今直ぐお前と一緒に行かりやしない。……しかし一人だつて歸れないことはあるまい。明日の朝早く立てば明後日(あさつて)の晩には彼方へ着くだらう。汽車は夜行て東京へ廻つて乘換えた方が便利だよ」

「いゝえ、私中央線て歸つてよ」

「ぢや、さうするさ。……どうせ今夜は眠れないだらうから、よく考へて極めるさ」

「いゝえ、車さへあれば私今夜でも立ちたくつてよ」

おまきは重ねて反抗するやうに云つて、目叩きもしないで瞳を凝らしてゐた。が、やがて、肌寒いのに氣付いて、「風邪を引いちや大變だ」と呟いて、慌だしく衣服と羽織とを寢衣の上に重着した。

「明日立つにしても、今夜俥を頼んで置く方がいゝんだがね。車はこの村に一臺しかないんだから」夫はさう云つて、旅行案内を彼方此方飜へしてゐた。

「それどころぢやないわ。私ちやんと後片付をしとかなきやならない」

おまきは稍々心が落着くと共に、出立前にして置かねばならぬ事をいろ〳〵考へ出した。炬燵蒲團の綻びを縫つて置きたいし、鏡臺も奇麗にしておきよさんに返して置かばならぬ。取散してゐる押入を片付けて、座敷をも一度掃き出して置きたい。「氣の利かない遣りつ放しの女だ」と、後で卑まれぬやうにしなければならぬ。……と、さう思つてゐると、徒らに氣が急かれて、何から手を着けていゝか分らなくなつた。

「お前も、もう京都が見られないな。折角此處まで來たのに、京都を素通りしなければならないぜ」夫は旅行案内を投出して、振向いた。

京都が見られないと云ふ言葉は、おまきの耳にはまたとない無慈悲な言葉として響いた。花の京都は寒さに震へて東京を立つた時から、思出す度に胸の躍るほどに戀しかつたものを。……今度寄らなければ、もう一生京見物なんかに來る時節はないかも知れない。本當に祖母さんは惡い時に死んで呉れた。成べくならもう一月、せめてもう二十日ぐらゐても生延びてゐて呉れゝばいゝのに。……

「ぼんやりしてゐないで、彼方へ行つてお母さんにも早く話をしといたらいゝだらう」

から夫に云はれると、おまきは彈機で彈かれたやうに、矢庭に座敷を出て行つた。聲を掛けて母屋の潜戸を開けて貰つて這入ると、兩親はまだ起きてゐて、炬燵の側には古風な行燈が點つてゐる。

「私、明日歸らうと思ひますの」と、悲しさうな聲で云ふと、

「一人で？」と、父は目を竪めて顧みた。

「えゝ」

「しかし、遠方だから女一人ぢや行かれまい。信吉はどう云ふとる？」

「あの人は用事があるからまだ歸へられないさうです」

「ふん。……何しろ途中に二三日は掛るんだから、女一人で向うへ無事に着くかどうか心配じや、それにどうせ葬式の間にや合ふまいしな」

「貴女はまた此方へ來ることは六ヶ敷しいから、次手にもつと逗留しとられるとえゝと思ふけどな。直ぐ歸つて來いと電報で云うて來たんですかな」と、母も傍から言葉を添へて、引留めたさうにした。

引留められるのが、おまきは恍しかつた。それを力にして、「歸つて來いとも何とも云つてゐないんですわ」

「おや、譯を云つてやつて、もつと緩くりしなされ。信吉にも私からよく話して見るから」

父はさう云つて、信吉を呼寄せやうとした。おまきは使に立つて離れ座敷へ歸つて、夫にその旨を傳

へた。「貴下だけ行つて入らつしやい」と云つて、自分は炬燵の火を搔起して當つてゐた。歸へらないでも濟みさうだと思ふと、急に廣々とした氣持になつた。一時間ほど前までは一日も早く實家の兩親に會ひたいのだつたが、今は出立の延びるのが悅しかつた。此處で賴まれてゐる縫物を仕上げて、ゆつくり方々へ道寄りして、中央線で歸ると云ふ初めからの豫定を、どうしても狂はせまいと念じてゐた。

すると、ふと怪しい姿が目に映つたのでギョッとした。氣を付けて見ると、それは柱に掛けた三味線で、その上に濕手拭がぶら下つてゐるのであつた。が、次の間から洩れるランプの薄明りで、ぼんやり異樣な形に見られて、ともするとそれが動いてゐるやうに思はれてならなかつた。松風が微かな音をしてゐるのも薄氣味惡く聞えた。で、一刻も早く夫が歸つて呉れるやうにと待ちながら、額を炬燵に當てゝ目を瞑つてゐた。

そこへ夫は煙草を銜へて這入つて來た。

「親爺が手紙でよく譯を云つてやるさうだよ。一人で歸すことを大變心配してるから、それでいゝだらう」

「一人だつて歸へれなかないさ」おまきは强くさう云つて微笑した。

「西洋へ一人で行く女さへあるんだもの」

「さうですとも……」

「しかし、今時分騷いてるだらうな。皆んなお前を待つてるぜ」

「だけど仕方がないわね」と、おまきは心て夫の同意を求めながら顏を曇らせた。が、夫はそれには答へないて、

「おれは六七年前に祖母さんの死んだ時に歸つて來たが、家へ這入ると、親爺が葬式から歸つて白い喪服を脫いてるところだつた。此處でも葬式だと、大勢やつて來て飲んだり食つたりして賑かだよ」

「私の家てもさうよ。お葬式には白い衣服を着るんでせう。私も揃へて持つてるけど、皆んな東京に置いてるんだから、歸るにしても、衣服のことが心配だつたのてすよ」

「しかし、これが祖母さんだからいゝやうなもの〻、若し外の人が死んだのなら、吞氣な事は云つてられないぜ」

「本當にさうだわね。祖母さんには隨分手が掛つてゐたんですよ」おまきはさう云つて、ふと自分は死んで惜まれぬ人になりたくない氣がしたので、「死ぬなら二十か六十とよく云ふわね。私その時分に死にたくつてよ」

「おや、六十まで生きてゐなくちやならんね」

「六十まで生きるのは大變だわ。私此間お墓詣りをした時、お千代さんのお墓を見て羨ましくなつたのよ。行年十九と彫つてあるわね。十九ぐらゐて死んだらいゝだらうにな。……私、歯が抜けたり皺が出來たりするまで生きてるのは嫌ひさ」

こんな話をしてゐると、おまきは自から興に乘つた。この土地へ來てから、今夜ほど退屈をしない生々した夜はなかつたのである。で、想像に浮ぶ實家の混雜した有様などを話の種にして、何時までも話に耽つてゐたかつたが、炬燵は次第に冷たくなるし、夫は睡氣さして先へ寢床に這入つてしまつた。

おまきは一人で起きてもゐられなくて、襖を堅く締めて、ランプを點したまゝ枕に就た。‥‥兄や姉や叔父や叔母がお通夜に來てゐる樣子がまざ〳〵と目に浮んだ。店先には簾を垂れて忌中と書いてある。お母さんが忙しさうに動いてゐる。線香の煙が舞上つてゐる中に白木の位牌が見える。‥‥湯タンポの湯で顏を洗つてゐるお祖母さんの顏が夢のやうに現はれた。

「こりや大變なことが出來た。私の金庫を誰れが隱したのだらう。まき、お前は知つてゐないのかい」

と、ふと、祖母さんが側へ寄つて來て云つた。

「厭な祖母さんね。誰れが貴女の金庫を隱したりするものですか」

「いゝえ、隱したに違ひない」

祖母はまだ何か云つて、おまき自身も何か答へてゐた。が、暫くすると、耳元で二三度自分の名を呼ばれたので、驚いて目を醒ました。何時の間にかランプは消されて暗闇だつた。

「酷い鼾を搔くね」それは夫の聲だつた。

「私が?」と、おまきは極りの惡い思ひをして、

「だつて今夜は心配したから、疲れてるんですもの」

「おれは今いゝ夢を見てゐたのに。近松座で大隅太夫の壺坂を聴いてると、側にゐる奴が大きな鼾を搔出したから、邪魔だ〳〵と思つてゐたら、ふつと目が醒めちやつた」

「さうか」と、おまきは氣のない返事をして、寢返つて再び睡りに落ちた。

翌朝、東が白むと夫は寢床を離れて雨戸を開けて、爽かな海の風を吸つてゐたが、おまきの目醒めるのを待つて、

「兎に角これから郵便局へ電報を打ちに行かう。お前は後で手紙を書いて出して置け」と云つた。

「手紙に何と書いたらいゝか知らん。別に書くことはないんだけど」と、おまきは空々しい口調で云つた。

そして、直ぐに身仕度して裏木戸から出掛ける夫を見送りがてら、自分も海岸へ出た。まだどの家も寢てゐるので、顔を見られる苦痛を免がれて、心置きなく美しい海の朝景色を眺めることが出來た。

暫く石に腰掛けて、足許に匍ひ寄る小波の音を聞いてゐたが、夜漁の舟は沖から二艘三艘と續いて歸つて來た。直ぐ側に繋いだ舟の中から苫を跳上げて、若い漁夫が寢呆けた顔を出して欠伸をした。朝日は山の端を離れてその漁夫の顔を照らした。

おまきは「こんな景色を一度お母さんにも見せて上げたい。話して聞かせたつてとても分りやしないから」と、自分一人で見るのが惜いやうに思はれた。

ふと、向うから海岸を傳つて來る郵便配達夫が目に付いた。油紙包を二つも肩に掛けてゐる。あれは

屹度家から寄越した小包だと、おまきは直ぐに氣付いて、「今度はどんなお菓子が入つてゐるだらう」と想像しながら、小走りに家へ歸つた。

投出された小包には、母の手紙も添つてゐた。披いて見ると、弟や妹や親戚の近況が長々と書いてあつた。祖母さんは寢間から一足も出られなくなつて、食事や大小便のお世話も私がしてゐますと書いてあつた。

おまきはその手紙を側へ置いて、返事やら弔詞やらを書かうとした。筆を採ると、あれもこれもと思ひのみ先走つて、相應しい文句は自由に浮んで來なかつた。

「……祖母さんには最早この世でお目に掛れませんのですわね……」と書いて、その文字を讀下すと、急に胸が迫つて、涙が流れた。

「もう祖母さんに會へないんだ」と、自分の心で繰返して、机に首伏して、暫くひた泣きに泣いてゐた。

京極

長田幹彦

神戸から大阪、奈良、堺と處さだめず流れ歩いてゐた牧野も、十一月へ入ると宿屋から宿屋へ移つて歩く旅烏のやうな憐れなその生活にさへ堪え兼ねて、到頭また再び京都へ舞ひ戻つて來た。………

初め住馴れた京都に別れる時彼の胸底には立派な計劃がたつてゐた。他郷へ出てゐながら、その年の春から秋へかけて彼自身にとつては生れてから初めてといつてもいゝやうな放埒な生活を營み續けた結果として、彼の眼の前にはその時身に餘るほどな負債と、不義理が嵩んでゐた。茶屋小屋の借金はもとより、宿屋の支拂ひから友人に對する債務まで殆んど二箇月の餘も放置（うつちや）らかしてあつたので、それを一時に整理するといふことは到底彼にとつては

不可能なことだつた。て、彼はすべての人から餘り信用を失しない前に何とか方法を講じて、幾分なりとも當面の負擔を輕くしたうへて、更らに善後の策を立てやうと計つた。

いろ〳〵思ひあぐむだ末、彼は到頭最後の手段として一時京都を離れることに心を決した。彼の周圍をとりかこむ知己の人々や、舞妓や、その他さまざまの關係者から脫れて、譬へ十日でも二十日でもたつた一人になつてしまはうと思つた。そして全く孤獨の寂しさのなかに自分を置いて、みつちり仕事をしたうへて充分の金と、安念とを持つて再び京都の土を踏まうと思つた。彼はかうした覺悟と自信をもつて、丁度九月の末、加茂の河原に薄絹のやうな冷たい霧が降りてゐる晩、誰れにも知らさず、人目を忍ぶやうにこつそりと京都の町を遁れ出たのであつた。

その後、彼の漂泊は四十日の餘も續いた。その間に彼はまるて自分の豫期に反して、たつたひとつの仕事をも仕上げることが出來なかつた。自分ては常に何かしなければならぬと火がつくやうに踠いてゐながら、いざとなるとどうしても仕事が手につかなかつた。いつも妙に慌たゞしい氣持ちに追はれてゐて、たつたひとりで宿屋の一間に閉ぢ籠つてゐる時てさへ彼はどうしても靜かな、落着いた心を持つことが出來なかつた。

殊に大阪て暮らした二十日ばかりは彼にとつて何とも云へないほど不安な日の連續てあつた。彼にとつては先輩に當る人々や、新たに得た知己の誰れ彼は彼を毎夜のやうに燈火の美しい街へ誘つて行つて呉れる程、好意を持ち過ぎてゐた。京都て營んてゐたやうな生活は再び新たなる色彩をもつて彼の眼の

に踊つて前來た。酒と女は日夜彼の周圍をとり圍んでゐて、漸次と自暴自棄に陷つてゆかうとする彼を極めて殘虐な仕方で散々に飜弄した。

　廢市のやうな寂れた堺の町に隱家を求めて行つた頃には、さすがの彼ももう全く荒んだ生活に疲れはてゝ、病窶れた人のやうな心持ちになつてゐた。地の底に沈んでゆくやうな低い家並、泊り船の姿も稀れな寂しい港、さうした境地に身を置いて、今度こそ腹をきめて仕事にとり懸からうとしみじみ心に誓つてはみたが、五日六日と日を經るうちにそれも空なる希望に過ぎないことが漸次と分つて來た。大阪から殆んど日毎に訪ねて來て呉れる人達は賑やかな都市の空氣を體と一緒に運んで來て、折角平靜な心になりかけやうとしてゐる彼を焦だゝせた。そして孤獨の悲しみに浸りながら、夕凪ぎに暮れてゆく夜を港口の燈臺の下に立ちつくしてゐる時でも、遙か北西の空を染めてゐる大阪の燈火の殘映が彼の心に堪え難い情緒の動搖を惹き起させるまで立至つた。

　堺から彼は奈良へ遁れた。奈良もまた前と同じやうな理由で失敗に了つたので、彼は再び大阪へ歸つて來た。そこで愈我れと我が心に絕望して、今度は自分から進んですべての境遇を態と打破るやうな散々な生活をやりはじめた。その揚句、到頭また京都に於て經驗したと同じやうな悲慘な羽目に陷つて、大阪に愚圖愚圖してゐることも出來なくなつたので、已むを得ず彼は更らに新たな境地を見出すために再び京都へ歸つて來たのであつた。

　月の美しい或晩、彼は飄然として明るい京阪電車の五條停留場へその姿を現はした。押し合ひながら

どやどやと吐き出されてくる乘客の群のなかでも、彼の姿は何處となく際立つてみえた。濕みをもつてゐた明るい眼眸のなかにはいつかどんよりした陰影が出來て、肉の薄くなつた蒼白い頰には手入れをしないので疎らな鬚が醜く、しよぼ〱延びてゐた。そして京都を出る時には仕立卸のやうに折目だつてゐた高貴織りの羽織も大阪や神戸の風塵を被つたり、奈良で雨に打たれたりしたので、いかにも見すぼらしく縮みはてゝ、下に着た袷も胸から膝へかけて目にたつほど汚れめがみえてゐた。それのみかまた彼が京都の下駄屋を漁つて五圓近い金を拂つて買ひ求めた自慢の下駄ももう雪駄のやうに薄く穿きへらされて、乾ききつた街路の土を踏む度にほの白い砂塵がその後からぽつぽつと立ちあがるまでになつてゐた。そしてもう根も精もつきはてたやうに首を垂れて、肩寒げにとぼとぼ停留場の外の暗に消えてゆく彼の姿は見知らぬ他人の眼にもどんなに憐れに映つたことであらう。

彼は五條の大橋の中程まで歩いて來て、ふと立留つた。そして季節に合はぬ薄着の肌を冷たい河風に曝らしながらその儘橋欄へ身を倚せかけた。

一箇月餘りも前に見捨てた京都の山河は再び彼の眼の前にあつた。加茂川の水はいつに變らぬ優しいせゝらぎをたてゝ、兩岸の家々に點る灯も常に見馴れたやうに美しく濕んでゐた。そして東山の柔らかな頂線の上から斜に圓山公園の方へ射し渡すほの白い月光は大阪や神戸の動搖に充ちた空氣に馴らされた彼の眼に何とも云へぬ沈靜な氣持ちを甦へらせて、じつと見入つてゐるうちに胸がぞくぞくするやうな歡びを覺えて來た。

俺は何故こんな靜かな、懐かしい町を捨てゝ、態と身を苦しめるやうな物好きな旅へ出たのだらう。彼は心のなかで今更自分の所業を悔恨するやうな調子で呟いた。そして振顧つてこの四十日の間の萍のやうな取留めのない旅程を思ふと、彼はその愚かさが我れながら腹立たしく思はれて、思はず下唇を嚙みしめずにはゐられなかつた。

懐かしい舞妓達の住んでゐる町！　こんな考へがやがて彼の心の底に何等の所期もなくふと浮んで來た。忘れてゐたといふのではないが、餘りに生活が窮迫してゐたために彼はこの十日ほどまるで祇園といふものを思ひ出さなかつた。おゝ、さうだ　あの美しい舞妓達はあの森の彼方に住んでゐるのだと思ふと、彼はその刹那、胸をそゝられるやうな嬉れしさを覺えて、遠く月光に煙つた圓山の樹立の方を飽かず打眺めたが、それと同時に彼は現在眼の前に迫つてゐる負債と明日はどうなるか分らぬ昨今の憐れな境遇を今また改めて思ひ起さずにはゐられなかつた。彼は古創を搔き裂かれたやうにひやりとして俄かに暗らい氣持に襲はれてしまつた。

事實、彼は此場合一時のしのぎをつけるだけの金を持つて歸らなければ到底京都の町へ入れない筈であつた。それに今彼の懐に殘つてゐる金はどうだらう、大阪で知己の人から一時融通して貰つた分が僅か十圓ばかり殘つてゐるきりなのである。……大阪を出る時から散々に思ひ惱んだことでありながら、彼は又もう一度その問題をくよくよ考へはじめた。今更どうもならないとは諦めてゐながら、どうにかしなければならぬといふいらいらした願望だけが先へ立つた。しまひには到頭ゐても立つても耐ら

ないやうな情けない氣になつて、彼は何處へ行かうといふ當てもなくぶらぶら歩きだした。

足に任せて歩いてゆくうちにいつか寺町の通りへ出た。そして人通りの多い處へは出まいと思ひながら、つい足は自づと京極の方へ向つて行つた。

京極は人の出盛る時刻なので、眞黑な群衆が眩るしい光のなかを織るやうに流れてゐた。彼は態と人込みを避けて、まるで人目を恐れる日蔭者のやうに帽子を眼深く被つて、薄暗い寺町の通りを三條の方へ上つて行つた。そして東へきれる小路へ來かゝる度に京極の賑やかな光のなかゝら曲つて來る人顏をさも恐ろしげに見廻はしながら道を避けて歩いて行つたが、そのうちに三條通に近い廣い横町の角まで辿りつくと、彼は急に足を留めて、とある小店の陰から斜に見える向側の家をそつと伺つた。

自働電話のボックスの向ふには丁度蛸藥師の入口の方へ向けて店口を開いた一軒の煙草屋があつた。明るい白熱瓦斯の光は丸瓶に入れた西洋煙草や、棚に並べた敷島や不二やその他くさぐさの小間物類を美しく照らし出して店に坐つた二人の女と、禿頭の氣の良さうな親爺まで鮮やかに浮き出させてゐた。

二人の女なかのひとりは面長な、鼻の高い何處かに阿姐風のある年増だつた。粋な黑襟のかゝつた着物を少し拔衣紋に着て、横鬢のふつくら垂れさがつた銀杏返へしに結つてゐる。それは京之助といつて京極に席を持つてゐる義太夫語りだつた。二年ばかり前に東京から師匠と一緒に下つて來て、その儘京極に居坐つてゐる女で、東京にゐる時分にはよく高坐の上で顏だけは見かけたが、併し牧野にとつては京都へ來て初めて口をきゝ合つた新らしい知己の一人なのであつた。

もう半年餘りも隔てなく交際つてゐたのでお互に氣心も知り合つてゐたし、それに人一倍氣のさばさばした女なので、牧野にとつては誰よりも一番口のきゝいゝ間柄てはあつたが、今の場合さすがの彼にも京都を立去る以前のやうな馴々しい態度で逢ふことが出來ないやうに思はれた。何だかかうなつた今の身の上が恥かしいやうな、情けないやうな氣が頻りにして、幾度かその前を素通りにしてしまはうと思つたが、到頭懷かしさに打負かされて彼は思ひ切つてつかつかとその店口の方へ歩み寄つた。そして明るい光のなかへ立つと、強ゐて氣持ちにそぐはない笑顏をつくつて、

「京之助さん、暫らく。……」と、臆病らしい聲で呼びかけた。

火鉢をなかに相弟子の團糸と內密話しをしてゐた京之助はその聲に驚ろかされて、ふと振顧へつたが、彼の顏を見ると突如太い頓狂な聲を出して、

「あら、牧野さん。……」と、さも呆れたやうにまじまじと彼の顏を見つめてゐたが、「まあ、あなた隨分暫らくぢやないの。一體何處へ雲隱れしてゐたの?」

「いや、雲隱れしたつて云ふ譯ぢやないけど……實は此方にゐても仕事が運ばないから一月ばかし神戸から大阪の方へ行つてゐたんだ。」牧野はもじもじしながら外方をむいて答へた。

「ほんとに貴方の呑氣にも呆れつちまうねえ。行くんなら行くつて一寸誰れかに斷つていけばいゝのに、ふいと姿を消しちやつたもんだから此方ぢや皆さんが大變心配して隨分な騷ぎだつたわ。向井さんや金田さんなんか毎日のやうに新聞社へ行つたり、お友達のとこへ行つたりして貴方の行衞を探してゐたけ

ど、どうしても知れないもんだから此頃ぢやもう的切り東京へ歸つたものと諦めて、逢ふたんびに貴方の仕打を恨んてゐるよ。」と京之助は彼を威嚇すやうに眉根を寄せて口早に云つた。

「大方そんなことだらうと思つた。」彼は口だけて元氣よく云つて、「だつて僕がゐなくなつたつて何も彼の人達から恨まれる道理はないぢやないか。」

「ところがさうぢやないわ。」と、京之助は押被せるやうに一膝のり出して、「貴方はどう思つてるか知れないけど、何にしろ貴方が姿を隱しちやつたもんたから、そら例の口ね、分つたてせう。あれが貴方、みんな向井さんや、金田さんのとこへ押しかけて來るんだつて。上方ものと來たらそこいらは實に薄情なもんだからねえ。」

「例の口つて借金かい？」彼は人前も構はず妙に興奮しながら云つた。

「まあ、そんなことを大きな聲て云ふ人がありますか。」と、京之助は剛糸や、氣のよさゝうな顏つきをして笑つてゐる親爺の方を顧みながら云つて、今度は急に聲の調子を落として、「中でも木屋町の宿屋と、先斗町のお茶屋が一番やかましいんだつて。何でも訴へるの何のつて云つて騷いてるさうてすよ。」

彼はそれを聞くと登りかけてゐた高い階段から眞逆樣に突き落とされたやうな氣がした。何の惡意もなく、唯一時を糊塗するために姿を隱してゐたのに、さうまて激しい報復が彼の留守のまに京都て待設けてゐやうとは思はなかつた。春から夏にかけての生活から推しても、僅か一ヶ月ばかりの間にそんな醜い破綻か來やうとはどうしても信ぜられなかつた。

「まあいゝさ。どうせ此方が惡いんだからなるやうになるさ。」と、牧野は自棄になつたやうにじりじりした聲で云つて、急に話題を變へて「時にお師匠さんはまだ席かい？」

「いゝえ、お師匠さんはね、貴方のゐない間に春ちやんを連れて東京へ行つたわ。今度春ちやんも愈々彼地で看板をあげることになつたもんですからね。」と、京之助は簪をぬいて自棄に頭を掻きながら、「何しろ屋臺骨がゐないもんだから寄席だけ大阪から來てゐる一座へスケに出て、晩はかうして毎晩遊んでるの。氣樂でいゝわ。」

話はそれつきりふつりと途絶えてしまつた。云ひ度いことも云へず、聞き度いことも一寸聞き憎いやうなその場のきつかけが牧野の心をひどく焦だゝせた。て、彼は店の奥に懸つてゐる柱時計をのぞき込みながら、

「まだ十時なんだね？」

「一體貴方いつ歸つて來たの？」と、京之助は別なことでも考へてゐるのか、戸外に流れてゐる賑やかな雜踏をうつとり瞻めながら他事のやうに聞いた。

「今さ。今五條へ着いたばかりなんだ。」辯解するやうな氣忙はしい調子で云つたが、その時彼はふと好い考へが浮んで、「僕はまだ夕飯も喰べちやゐないんだが、どうだい京之助さん、何處か近邊で一杯つき合はないか？」

「さうねえ。久し振りだから是非つき合はして頂き度いね。今日は幸ひ小父さんも糸ちやんも家にゐる

から留守番の心配はなしさ、……」
「それに僕もまだ聞き度いことも澤山あるし、頼まなくつちやならないこともあるから、……」と、牧野は急に勢ひづいたやうな聲で云つて京之助の顔を思惑ありげにじつとみた。
京之助はそのまゝ後を向いて親爺と何かひそひそ話をしてゐたが、やがて上框から片足おろして、
「こんな姿でもいゝでせう。着換へるのは面倒臭いからこれで勘辨して貰ふわ。」と、云つてついと素足の爪先へ日和下駄を突懸けて立上つた。
「あら、姐さん羽織だけ着て被往いよ。それぢや餘りだわ。」と、園糸が後からとめるのを耳にもかけず、聲高に笑つて、
「そんなに粧して行くと、牧野さんに口說かれるもの。ほゝゝゝ。」と、一人で先へ立つて男のやうに肩を動かしながらずんずん蛸藥師の方へ歩いて行つた。牧野は江戸ッ子まるだしのその姿をみると、何とも云へないほど懷かしくなつて、騷々しい雜踏のなかをすぐ後から引添つて行つた。

それから二時間ばかり經つた後、牧野と京之助は京極の裏路次にある小ぢんまりした鳥屋の二階座敷で、ぐつぐつ煮えるすき燒きの鍋を眞中に對向ひに坐つて、頻りに盃を汲みかはしてゐた。
餘り强くない京之助はもう眼のまわりをぽうつと紅く熱らせて、云ふ言葉にも何處となく埒がなか

つた。そして醉ふとすぐ妙に感傷的な心の生地を出して、矢鱈と氣前をみせたがる癖のある彼女はその晩も萎れ返つたやうな憐れな牧野の姿をみるとひどく身につまされて、先刻から幾度となく相手をほろりとさせるやうな言葉を云ひ續けてゐた。……

「そりや私がもう少しどうにかなつてゐりや百や二百のお金はどうにでも融通してあげるんだけど、何にしろ御存知のとほり東京にゐた時分と違つて師匠持ちの分際なんだからねえ、そりやほんとに可哀相なんですよ。」と、京之助は餉臺の上で盃を弄びながらしんみりした調子で云つた。

「さうだらうとも。僕だつてどうせ身から出た錆なんだから今更お前さん達からどうかして貰はうとはもとより思つちやゐないけれど、全く今度は手も足も出なくなつちやつたよ。」と、牧野は頼りなさゝうに眼をしよぼ／＼させながら云つて、ヤケに酒を呷りながら、「併し今更愚痴をこぼす譯ぢやないが、此地の人間ぐらゐ腹の小さい奴はないね。景氣のいゝ時にやわいわい云つて一緒になつて歩いてゐながら、いざ自分に責任がかゝつて來るとなるとびくびくしてゐやがるんだからねえ。……」

「そりや當りまへの話さ。東京ものと違つてそこいらは細かく出來てゐますさあね。何しろ五十錢の御祝儀をとほしや、大きな面をして樂屋へ出入りの出來る土地なんだもの、そんなことで腹を立てゝゐるやうぢや貴方もまだ甘いわ。」と、京之助はひどく氣負つて云つたが、今度は又調子を變へて、「じたい初めを云やあ貴方が惡いんだもの。貴方が餘り氣をよくしてゐるからこんなことになるんだわ。仕事も何にもしずに毎日毎日あんな駄々雜遊びばつかりしてゐりや、どんなお金の廻る人だつてとても世帶が張り

されるもんぢやないもの。」

「だつてそりや仕方がないさ。あゝしなければあの頃は暮らして行かれなかつたんだもの。」

「笑談云つてるよ。何が暮らしていけない事があるもんか。」と、京之助は嘲るやうに歯をみせて、「貴方はまだ若いからさう思ふんだけど、あの時もう少し引き締めてゐりや決してこんなにまで苦勞することはなかつたんだわ。一人いゝのでも作つて、人に知らさないやうにしてこつそり娯んでゐりやいゝのに、やれ舞妓の、やれ宇治ゆきのつて見えばかり張つて遊んでゐたからこんな事になつちやつたのさ。」

「併し僕はいくら貧乏したつて、そんなしみつたれ遊びをするのは厭だからな。たつた一人の女を相手にして惚れたの惚れないのつて云つてるのは大嫌ひだ。それ位ならすつぱり思ひきつて遊びを止めらあ。」

牧野は頻りに盃を重ねながら駄々をこねるやうに云つた。

「それがいけないんだよ。まだほんとに苦勞が足りないねえ。」京之助は少しつゝ蒼ざめて來る牧野の顏をじつと見つめながら云つたが、その頰にはいつにない眞實さが輝いてゐた。

下座敷では醉ひ痴れた客の聲も靜まつて、板場の方から器を洗ふ音や、婢衆達の喋いだ聲がひそひそと聞えて來る。すぐ脊なか合はせになつた活動寫眞の小屋もいつかはねてしまつたと見えて、今しがたまで聞えた慵い太鼓の音もはたと止んでしまつた。そして表通りをゆく人の足音ばかりがざわざわと落着きのない雜音をつくつてゐる。

京之助は何か大事なことでも思ひ出したのか暫らくの間、顏を伏せて考へ込んで居たが、やがて喫のか

らむやうな低い聲で、
「一體貴方は今夜つから何うするの。」
「何うつて別に仕樣もないぢやないか。何處か寺の貸し間でも探して、まるつきり人に知れないやうにして仕事をするばかりさ。」
「お寺？　相變らず呑氣なことを云つてるねえ。貴方の氣性でお寺なんぞへ入つて何が出來るもんですか。それよりも何處か町中で人目に立たないやうな間借りでもしたらどう？」
「それが出來れば結構だが。」まるつきり人に賴るやうな弱々しい心持は自然とその言葉尻にあらはれて來た。
「そんなら私がいゝ處を周旋して上げるわ。私達の紋の呂幸さんね、知つてるでせう。あの人が二階を貸したいつて云つてたから彼處を借りたら何う。穢いにや穢いけど却つてその方が氣が置けなくつていゝでせう。」
「そりやよさゝうだね。だが落樂て身が持てなくなつて、女藝人の二階へ燻ぶつてゐるなんざあ、餘り芝居が出來過ぎてらあ。」と、牧野は盃を啣みながら半分は眞面目な、半分は自棄なやうな調子で云ひ放つたが、その時ふと何か冷たい球のやうなものが彼の心にひやり觸つたやうに思はれて、彼は思はず淚ぐむでしまつた。「笑談はよしてさうなさいな。呂幸さんはほんとに好い人だからきつと親切に面倒みて臭れるわ。今夜はもう駄目だから、明日私が行つてよく賴んで來ませう。」と、京之助はもうひとりで

決めて、そろそろ歸り支度をしはじめた。

三圓ばかりの勘定を濟まして、牧野は京之助の後について細路次へ出た。

「どうぞ又お近いうちにお越しやしてお見えやす。」と、眠むさうな聲で送る婢の聲を聞き捨てゝ、裏寺町の通りへ出ると、そこらはもうすつかり更け靜まつて、人の往來も殆んど途絶えてゐた。とびとびにほの暗い光をみせてゐる盆屋の軒行燈も寂しげにしよんぼりとして、片側の寺々の練塀には西へ傾いた月光が露氣を含んだ冷たい光をくつきりと淀ませてゐる。

「隨分寒くなつたわねえ。」と、京之助は襟をかき合せながら、牧野の方へ肩を寄せて云つたが、底の底まで沈みきつた牧野は首垂れて嘆息をつくばかりで返事もしなかつた。

「貴方今夜は何處へ泊るの？」京之助はほんのりした月明りで牧野の顏を覗き込みながらもう一度答へを迫るやうに云つた。

「何處つて別に當てはないけど、仕方がなけりや膳所裏か宮川町へでも行つて寐るさ。」その聲は心細さゝうに慄へてゐた。

「遊ぶだけのお金は殘つてるの？」

牧野は何か答へやうとしてつッと顏を上げたが、たゞまじまじと京之助の顏を瞻めたゞけて、その儘

口を噤んでしまつた。そして袷着の寒さに肩まで慄はせながら前よりも稍は頼りなさゝうに俛首れてとぼとぼと寺町通を歩いて行つた。京之助は一足遅れて、彼の後姿を見失はないやうに歩いて行つた。四條の角まで來ると急に立止つて、

「ぢや牧野さん、私こゝで別れますよ。餘り遅くなるとまた小父さんの手前がよくないから。」と、云つて懐をもぐもぐさせてゐたが、やがて袖口から小さく疊んだ紙包みをとり出して、「ねえ、貴方、これを持つてお出てなさいよ。又明日の朝になつてお金が足りなかつたりなんかすると見つともないから。そして明日はずぼらをやらずにお午までにきつと京極へ來て下さいよ。呂幸さんの方は私がちやんと話をきめて置きますから。」

京之助はそのまゝ紙包みを牧野の袂へ押し込んで、彼が何か云はうとするのも待たず、挨拶もそこそこに、もと來た道の方へ引返へして行つた。そして曲り角に近くなると足を早めてすたすたと京極の方へ曲つて行つてしまつた。

牧野はいつまでもいつまでもその後姿を見送つてゐた。さういふ仕打をした女の心がそのうちに漸次に分つて來た。と、急にたつた一人になつた寂しさが犇々と胸に迫つて來て、この廣い夜の世界に自分ひとり取殘されたやうな心細さが激しく胸を嚙みはじめた。

暫らくすると、彼は漸う心をとり直して、蒼白い月光のなかを唯ひとりしよんぼり祇園の方へ歩み出した。人氣のない、がらんとした四條の假橋を渡つて、縄手から足は向くともなく自然と末吉町の方へ

彼を導いた。

狹い小路に軒を並べた妓樓はもう大方戸を閉ぢて眼盲ゐたやうな小格子を月光の前に連ねてゐた。そして更け靜まつた辻には燒栗賣りが二番目もの丶仕出しに出て來るやうな小さな荷を卸ろして、薄暗い蠟燭の火影にぱちぱち紅い火の粉を走らせてゐた。彼がその前を通りすがると、訴へるやうな憐れつぽい聲を出して、

「栗は宜しいか。栗買うとくれやすな。」と、云ふ。

彼はそのうちにふと彼が春から行きつけてゐた大利といふ妓樓の前へ來かゝつた。今宵はまだ客があるとみえて、格子には明るい燈の光が映つて、店口には三臺の人力車が死んだやうになつて乘り捨て丶あつた。耳をとめて聞くと夜の靜けさのなかに奧座敷の方からかすかに妓達の騷ぐ聲が洩れて來る。彼は何とも知れぬ懷かしさを覺えて、引き寄せられるやうにふらふらと店口の方へ歩み寄つたが、その時上框のすぐそばて聞き覺えのある婢衆の聲が何やら聲高に叫んだ。それを聞くと、彼はひやりとして冷汗の浸むやうな驚きに打たれながら、足音を盜んで急にはたはたかけ出した。

次の街へ曲ると、彼はほつと吐息をついて又歩みを緩めた。そして寐靜まつた妓樓々々の軒先を一々眺めながら歩いた。ほの暗い軒燈の點つた入口の上には紅いつなぎ團子の紋と舞妓や藝妓の藝名を記した小さな木札が幾枚となく懸けつらねてある。彼はその中に知つた舞妓の名を見出すと、さながらその妓達の美しい振袖やだらりの帶の匂ひをまざまざと嗅がせられるやうな氣がして、云ひ知れぬ懷かしさ

が胸に滲んで來た。そして丁度十七八の時代に戀人の家のほとりをわくわくしながらさまよひ歩いた頃のやうな甘い心地に返つて、彼は菊勇、小菊、春榮などゝ書かれた懐かしい名を探して歩いてゐたが、そのうちにこんな夜更けに當てもなく色街をうろついて廻らなければならぬ自分の身の落ちめがこの上もなく愚かしく思はれて來て、淺猿ましい蕩兒の悲しみが強く強く胸の底に喰ひ入つて來た。

彼は到頭ひけ過ぎになつて祇園から宮川町へ下つて來て、呼びこまれるまゝに見も知らぬ貧しい一軒の妓樓へ上つた。そしてしみじみ落魄した人のやうな氣持になつて醉ひざめの重苦しい頭を垢染みた枕のうへへ横たへた。

翌朝、騷々しい塵拂(はたき)の音に夢を破られて眼を覺ますと、彼の寐てゐる部屋は昨夜みたのとまるで違つて、物置のやうな穢らしい四疊だつた。薄暗い天井のかゝりから煤けた張壁までどうみても遊びをする家とは思はれなかつた。建附けの惡い障子の隙間からは絶えず冷たい風が吹き込んで來る。

腰硝子から覗くと小さく劃られた大空には灰だむだ雨雲が煙のやうに去來して、すぐ彼方に廣がつた加茂の河原には丁度狹霧でもかけ渡したやうに時雨がしとしとゝ音もなく降りしきつてゐる。團栗橋の上をゆく傘も灰色に霞んで、す枯れた河原の草叢にも何處となく悲しげな色彩が漂つてゐた。彼は牛のやうにだらしなく寐そべつた儘宿醉に痛む蟀谷を抑へながら、丁度その空模樣にふさはしい滅入るやう

な氣持ちていつまでも戸外の景色を眺めゐた。

丁度そこから眞向ふに當る彼岸は席貸しの軒を連ねた木屋町だつた。低い岸に沿ふて架けだされた床（ゆか）ももう悉くとり拂はれて、夏の頃からみると、その圓みをもつた家々の屋根から椽端の小さな欄干に至るまでまるで似てもつかぬ別な世界のやうな寂しさをみせてゐる。そして戸を閉めた家の多いのをみても、客のつかない此頃の町の寂れかたがありありと思ひ起された。

彼が眞夏の頃から二月ほど宿をとつてゐた清月樓といふ席貸しは其町の中程の處にあつた。一軒一軒見知つた家々から數へてゆくと、ぼんやり煙つた雨の脚の彼方にその宿の二階がみえてゐる。客もないとみえて、彼が借りてゐた二階座敷の雨戸は閉めきられて引き殘された日蓋ひだけが白くみえてゐる。

その時、彼の心には抑へつけられてゐた彈機（ばね）が俄にはぢけてゆくやうに眞夏の頃の華やかな生活の斷片が次々と浮び上つて來た。ほんのりと暮れてゆく黄昏どきに若い藝妓や舞妓と河原へ出て夕涼みをしたことや、月のいゝ晩ごの淺い河瀨に船を浮べて時の過ぎてゆくのも知らずに遊び暮らしたことや、また夏の短夜を床（ゆか）に點もした雪灯の火影で飲みあかしたことなどがまるで昨日のことのやうに思ひ起された。と、その頃しげしげ出入りしてゐた美しいかつ子や、舞妓の富榮などの顏がふつと眼の前に立現はれて來て、その時折々の場景を飾る言葉の末々や、髮のかゝりや、着物の柄に至るまで鮮やかに映つてきた。……彼は次々と移つてゆく果敢ない幻影をみつめながら、いつまでも我を忘れてうつとりしてゐた。

昨夜ひと夜添ひ寢をした妓がやがて眼を覺ますと彼はすぐそれを追ひ歸へして、たつた一人になつた。そして酒を命じて雨の降り止むまで手酌てちびちびやりながら、變り果てた今の身の上を思ひつくした。限りない寂しさと悔恨の念が漸次々彼の心を暗くしていつた。

時は知らぬ間に過ぎ去つた。四時頃になると漸う西空に晴れまがみえて、雨もすつかり降り止んだので、彼は輕くなつた財布を懷にしてそこそこにその家を出た。そしてこの先どんな身の上に落ちていつてもいゝやうな捨て鉢な氣になりながら、京之助との約束を果たすために凹凸の激しい泥濘路を四條から京極の方へ行つた。

さすがの京極も天氣に押されその日ばかりはひどく寂しかつた。活動寫眞館も入りがないので、紅くインキの滲んだ繪看板の陰ては女給仕達が疲れたやうに欠びをしてゐた。物を賣る家々の軒にも妙なくすんだ色が浮んて、何處をみても常とはまるて違つて生氣がなかつた。

京之助の店を訪ねると、店先には親爺がまるまると褞袍を着込んて、陶器の火鉢を抱へながら眠さうな眼を据ゑて講談本を讀み耽つてゐた。牧野が入つてゆくと通りすがりの客と間違へて、冷たい「入らしやい。」を浴びせかけたが、ふと氣付くと急に極まりが惡さうににたにた笑つて、

「今日は。どうも可けませんお天氣て。さ、ずつとお入りなすつて下さい。」と、愛想よく彼を迎へた。

「有難う。京之助さんは?」と、牧野は奧の間を覗きながら訊いた。

「まだ席から歸つちや來ませんが、……あゝ、さうさう、出掛けにもし貴方がお見えになつた樂屋の方

へお出て下さるやうにつて云ひ置いて行きやしたが、何ぞ急な御用ても？」
「あゝ、一寸頼んて置いたことがあるもんだから。」と、牧野は態とらしい重々しい調子て云つて、灰だらけになつた火鉢の火て煙草をつけて、「ぢやこれから席へ行つてみやうかしら。樂屋口から默つて入つて行けばいゝんだね。」
「えゝ、てすがお分りにならねえと可けませんから一寸娘に送らせませう。」と、親爺はその儘奥の方を振顧つて、「おい、お安、お安ッ」
奥の間の暖簾の陰からは十才ばかり穢らしい小娘が焼芋を噛りながらぬつと出て來た。それをみると親爺は急に苦笑ひをして、
「また食つてやがるな、仕様のねえ野郎だな。一日何かぴちやぴちややつてゐやがる。食ふならさつさと食つて、一寸旦那を席まて連れてつてあげな。」
娘はさすがに恥かしさうな顔をして奥へかけ込んてしまつた。そして暫らくするとまた一杯頬張つた口をもぐもぐさせながら何喰はぬ顔をして出て來て店口からこつそり土間へ下りた。
「どうも御苦勞だね。」と牧野は氣の毒さうに云つて一足先へ出た。
「いゝえ、いつもお構ひもしませんて。又お歸りにお寄んなすつて下さい。」と、親爺は愛嬌をみせながら低く頭をさげたが、今度は娘の方を振顧つて、「裏から入るんだぞ。そして鼻をかんて行かなくつちや見つともねえぢやねえか。」と、口やかましく小言を云つた。

娘は素直に懐から汚い廣告紙を出して鼻汁を拭きながら、默つて彼を導いた。

廣い横町をきれて、大きな活動寫眞の小舍の前を曲ると、席はすぐその近くにあつた。家と家との庇間のやうな細い路次を入つてゆくと、その突き當りに格子戸づくりの樂屋口がみえて來た。娘はそこからひとりで先へ入つて、薄暗い階子を上つて行つた。階上からは若い女の笑ふ聲や、調子を合せる冴えた撥の音などが縺れ合つて聞えて來た、

暫らく待つてゐると、やがて京之助が娘の後から荒つぽい足音を立てながらどたばた驅け降りて來た。

「おや、お早う御坐い。昨晩はお樂しみッ」と例の太い、あけつぱなしな聲で云つて、笑ひながら、「あれほど約束して置いたのに、今迄なにしてゐたの？ またぶん流して遊んでゐたんでしせう、仕樣のないデレちやんだねえ。」

「だつてこの雨ぢや戸外へも出られないぢやないか。」牧野は仕方なしに苦笑をした。

「まあ、一寸上へおあがんなさいよ。幸ひ呂幸さんも今手がすいたとこだから。」京之助は懷手をしたまゝ顎で二階を示した。

「まあ遠慮しやう。皆集まつてるなかへ入るのは恥かしいからな。」と、牧野は又笑ひながら云つた。

「チエッ、恥かしい柄かい。昨夜氣で人の顏が三ッにみえるつて格ぢやないの。そんならいゝさ、呂幸さんを此處へ呼ぶから」と、京之助は階子の口へ寄つて、

「呂幸はん。一寸階下まで降りとくれやす。」と、調子の變な京都言葉で呼んだ。

「は、今いきますわ。」と、その聲に應じて鼻へぬけるやうな若い聲がして、やがて階上から棒縞の袴を約(つゞ)ましやかに踏みしだきながら、柿色の地に市松格子を染め出した肩衣をつけた呂幸が下りて來た。の聲割りに老けてみえる女て、厚く化粧つてゐながらいつも何處か寂しさうな顏容をしてゐた。

　京之助は呂幸が降りきるのを待たないで、

「これが昨夜のえゝ男はんどつせ。」

「あゝさうどつか。」と、呂幸は口紅を塗つた唇を少し綻ばして、「せんどはおほきに。大阪へとかお行きやしたて、ほんまに長いことゝしたえなあ。」

「しばらく。」彼は僅か一二度京之助の店て出逢つたことのある位な間柄ながら、その調子が餘り人懐こいのてつい釣り込まれて、「また今度は大變御迷惑を願つて濟みません。」

「まあまあ、えらいことゝ。私の方からお願ひしてもさうして欲しいのどつけど、何せえ穢い／＼家どすさかいなあ、とてもお氣に入るまい思うて居りますのどつせ。」

「いや穢くつても唯靜かでありさへすりやいゝんだから。」

「そら靜かなことは靜かどすえなあ。京之助はんもよう來て知つとゐやすとほり、すぐ前は裏寺町どすさかいなあ。それに家のものかて、私とお父はんと二人ほかゐやしまへんさかい。……」

「鬼に角一度みたらいゝぢやないの。私も一緒に行つてあげるからこれから歸りに廻つて御覧なさいな。」

京之助は呂幸の顏と牧野の顏を交互にみながら云つた。

「さうおしやす。その方が話が早うて宜しうおすわ……。」と、云つて、呂幸はその儘着換へをして階上へのぼつて行つた。

書席ももうはねると見えて、下足場の方では騒々しい人聲が聞えてゐる。階子の裏を小さな婢衆が茶盆やら、小火鉢やらを運びながら忙はしさうに通つて行く。

「間代のことなんかがどうしやう。」牧野はふと氣がついて、京之助に耳打ちした。

「そんなことは萬事私が心得てゐるから安心なさいよ。それよりや早く氣を落ちつけて仕事をする分別をしなけりや駄目だわ。」

暫らくすると、呂幸は襟のかゝつた地味な銘仙かなにかの平常着に着かへていそ〳〵しながら降りて來た。今迄は何處か藝人らしいところが見えてゐたが、急に風が變つたので妓樓の仲居のやうな氣がされた。京之助は鼻をほぢりながらぼんやり傍に突立つてゐる娘に何事か云ひ置いて、その儘三人ひとかたまりになつて樂屋口から通りへ出た。

戸外はいつの間にかもうほの暗い黄昏になつてゐた。一時に點された白熱瓦斯や、イルミネーションの眩ろしい輝きのなかには白い絲のやうな雨がまた降りだして、人の往來は晝間よりも賑やかにはなつてゐたが、宵の口には毎夜眼の覺めるやうに景氣たつて來る活動小屋や、芝居の前には大きな傘ばかりが動いて、妙に客足が薄かつた。

牧野は人に顔をみられるのが厭さに京之助の傘のなかへ入つて、肩を丸くすくめながら俯向いて歩い

た。三人とも殆んど口をきかなかつた。新京極から興行物の軒を連ねた前々通つて、やがて寂しい裏寺町へ入つた。

呂幸の家は小さな肉屋と、飯屋との細路次を入つたなかにあつた。午でも薄暗いやうな狹い庇間をぬけてゆくと、石炭殼を敷きつめた泥濘路の奥に同じやうな紅殼塗りの格子のはまつた長家が五軒ほど續いてゐて、そのとつゝきの家がそれだつた。呂幸は先づ小さな覗り戸をあけて中へ入つて、

「さあ、どうぞお入りやしてお呉れやす。穢い處でえらい濟んまへんけど……」と、彼女は傘をそつとつぼめながら後に立つた牧野の顏を覗いた。

なかは狹い土間だつた。奥には三つ切りの暖簾が下つてゐて、黄いぼやけたやうな洋燈の光のさし渡すなかに土竈や、水桶などがちらちらみえてゐた。そして上り端の次の間からは釣洋燈の火影に照らされた頭の長い人の黑影が斜に洩れて、煤けた壁の面に大きな映像を寫してゐる。

「小父さん、今晩は。」京之助はだしぬけに笑談らしく大きな聲で叫んだ。と、その黑影は訝しむやうにふらふらと右左に動いたが、返事がない。

「ほゝゝ。聞えないんだよ。」と、彼女は呂幸の後に續いて上つて、中仕切りの戸をあけると、奥は六疊ばかりの穢ろしい室だつた。天井から五分心の釣洋燈が下つてゐて、その影に六十近い白髮鬚を垂らした貧相な老爺が長火鉢と、小机とを角なりに据えて忙然と坐つてゐた。賃仕事の木細工でもすると見えて、その傍には小さな道具箱や、木片や、鋸屑がごちやごちやに置き散らかしてあつた。

京之助が姿を現はすと、その老爺はやつと懶さうに顔をあげて、水鼻汁を啜りながら、

「お出てやす。」と氣のない聲で呟いた。

「小父さん。今日はなんぼほど仕事をしたの？」京之助は揶揄ふやうに云つたが、老爺は唯默つて口をあけたまゝ彫像のやうな顔をして京之助の方を見あげるばかりであつた。

呂幸はその様子をみるとクスクス笑ひだして、「ほんまに耳の遠いものはあきまへんなあ。」と云ひながら手早く鐵瓶に湯をさして置いて、押入れのなかゝら小さな臺洋燈をとり出した。そしてそれに火を點すと、

「なあ、京之助さん、此處では餘り失禮どすさかい、二階へ上りまへう。」と、彼女はそのまゝ先へ立つて、上り端のすぐ突當りにある階子段を上つた。

階上はこれも矢張り穢い六疊だつた。天井が船底のやうに斜に傾いてゐて、壁といふ壁はみんな腰から下を銅版畫やら、壁紙やらで張りつぶしてあつた。窓は路次に面した方に一つと、後に一つ、殊に後の方のは室一杯にとつた肱掛け窓だつた。平常は呂幸の居間にしてゐるらしく、壁際に置いた小棚の上には稽古本や、針箱や、見すぼらしい鏡臺などがのせてあつた。そしてその側には大きな三味線箱と、平たい柳行李が置いてあつて、柳行李のなかには丁寧に疊んだ肩衣が入れてあつた。

「こりや結構な間だ。靜かだねえ。」牧野は赤黄ろくなつた疊の上へ腰をおろしながら、京之助の方を向いてお世辭らしく云つた。

「穢いにや穢いけど、仕事は出來さうな部屋でせう。」と彼女も初めてみるやうに四邊をみまはしながら、「もう此處ときめて、明日つからみつちりおかせぎなさいよ。貴方なんざあい丶腕をもつてるんだから仕事さへすりやいくらだつてお金になるんぢやないの。そして又木屋町へでも引越して、もう一度夏のやうな景況におなりなさいよ。貴方がさうやつて貧乏つたらしい格好をしてゐると、同じ東京者の私までが肩身が狹いわ。」京之助は急に眞顏になつて云つた。

「ほんまにさうどすわなあ。こんな處へ住んどみやすのもまた後でためになりますかも知れまへんけど、……」呂幸は洋燈を小棚の上に置いて京之助の後から牧野の顏を偸視ながら云つた。

牧野は暫らく默つて考へてゐたがやがて、

「今夜から來てもい丶かしら。何にしろ早く落着き度いんだが、……」

「どうぞさうおしやしてお呉れやす。」と、呂幸はやつと安心したやうに云つて、京之助の方を向きながら、「姐さん。夜具なんかどないにしまへう。」

「さうねえ、借りに行くつたつて今夜の間には合ふまいから。」と、思案してゐたが、やがて、「い丶わ、席に君千代さんのがあるからあれを二三日使つてゐて下さいな。女のだから氣が惡からうけど、君千代さんのなら滿更でもないでせう。牧野さんはあの人が好きなんだからねえ。」

「まあ、やゝこしい、……………耐りまへんえなあ。」と、呂幸は袖で口を掩ひながら笑つた。その刹那、彼女の眼元には顏だちに似合はぬ肉感的な表情が浮んできた。

兎に角夜具は席から借りる、食事は近邊の仕出屋から入れさせることにして、一先づ話をきめてしまつた。牧野は體のきまりがつくと、急に力ぬけがしたやうになつて、心細げに聞うちを照らす洋燈の光をみつめながら妙に言葉少なになつてしまつた。餘りに見すぼらしい四邊のさまが、漸次と彼の心の底に慘ましい切なさを滲ませるのであつた。

呂幸はやがて階下から澁茶を持つて來て、二人にすゝめた。京之助は話の繼穗がないので、呂幸とふたりて席て起つた噂話しなどをやつてゐたが、やがて氣をかへてぼんやりしてゐる牧野の顏をつくづく眺めながら、

「何を考へ込んでゐるの。詰まらないことをくよくよ思つたつて始まらないわ。」と、云つて思ひやりの深さうな眼眸をしたが、今度は何と思つたか、「だけど貴方の香氣にもほんとに呆れるねえ。ちよいと逢つた位ぢや分らないけどたしかに人とは變つてるわ。大抵な人間ならこんなにまでならない前にどうにか身の締まりをつけるのにねえ。貴方のは道樂に遊ぶんぢやなくつて、もうほんとに遊びが體についてるんだねえ。」

「さうでもないけど、全く此頃ぢや我れながら愛想が盡きてるんだ。」牧野はいらいらした聲で吐き出すやうに云つて、「かうして旅の空へ出てゐながら、身についたものと云つちや手拭ひと筋持つちやゐないんだからねえ。呑氣なんだか、狂人なんだかさつぱり分りやしない。どうせこんな事をして流れ歩いてるうちに、何處かて死んてしまうのさ。ほんとにもう此頃ぢやどんなに身を落としてもいゝやうな氣が

してならないんだ。」

「それも一生かも知れないけど、それぢや餘り情けないねえ。」と、京之助は低い聲で呟いた。そして自分が今迄に女藝人として踏んで來た苦勞の多い道をいま眼のあたりにまざまざとみつめてゐるやうな顏つきになつた。

呂幸も二人のしんみりした容子につまされて、

「そやけど、男はんはほんまに宜しいえなあ。何處へおいきやしたかて、たつた一人で立派に暮しといてやすこともお出來やすけど、私らのやうな女子ではなあ。自分では三味線ひとつ持つとりさへすりや、どないにでもなるやうに思ふてまつけど、それがなかなか思ふたやうにはいかんものどすさかいなあ。……」と、云つて、深い嘆息をついた。そして問はず語りに、大阪で生れて、京都で育つて、女藝人として此の年まで過ごして來た身の上ばなしを斷れぎれに語つた。その物語りによるとさまで面白い閱歷をもつてゐる女とも思はれなかつたが、たゞその物語の底を流れてゐる彼女の熱つこい性質が妙に牧野の興味をそゝつた。

三人はそれから長いこと濕つぽい話をしながら夜を更かした。十時を打つと、京之助はぶしつけな欠びをしながらやつと歸り支度をしはじめた。呂幸は席まで夜具を取りにゆくからといつて、京之助と一緒に外へ出て行つた。

牧野は一人になると穴のなかへでも引き込まれるやうな寂しさに浸つてゐたが、餘り心持ちがさつぱ

りしないので、傘もさゝずに戸外へとび出した。そしてすぐ近くの錢湯で一風呂浴びて、歸りに更科へ寄つて殘り少ない財布のなかゝらしたゝか酒を呷つた。

快い心地になつて歸つてみると、呂幸はもう寐仕度をして待つてゐた。濡れしほつた彼の姿をみると呆れたやうな顏をして笑つたが、やがて水を持つて二階へ上つて來て、人懷こい調子で、

「あんたはんの御氣象は京之助はんから聞いてよう知つてますさかいな、お氣に入らんやうなことがおしたら、どうぞ御遠慮なしに云ふとくれやす。そして私もかうしてたつた獨りて寂しうおすさかい、どうぞ長う居とくれやすやうにお賴ん申します。」と、云つた。

牧野は幾度か合點いた。

その晩彼は旅かせぎに出てゐる君千代のだといふ黄縞の固い蒲團にくるまつて寐た。襟垢のひやひやする襟から匂ふ髮油や、安白粉の匂ひは彼の心に遣り場のない悲しみを湧かせて、咽ぶやうな時雨の音に紛れながらかすかに響いて來る芝居の追出し太皷のどよみや、拍子木の音を聞いてゐるうちに酒に熱てつた彼の頰にはいつとも知れず涙が流れ落ちて來た。そして眠りを呼ばうとすればするほど眼が冴えて行くので、彼は間うちに廣がつた眞暗な闇を當てもなくまじまじと瞻めながらつい夜を更かしてしまつた。

その翌日から牧野は呂幸の家の穢い二階で寂しく起臥しゝた。風呂へ行くほかは殆んど外へ出やうともしなかつた。そして京都へ歸つてゐながら、數多い京都の知己の誰にも出會はず、すべての人から知られずにゐることが彼にとつては尠ず快かつた。

階下で日がな一日短册かけや、香函の細工をやつてゐる老爺とも漸次とちかづきになつた。細かい事に氣のつく呂幸は日に幾度となく上つて來て、穢い部屋を少しでも美しく見せやうとするのか、頻りに拭掃除をやつたり、障子紙を張りかへたりした。そして席から歸つて來て夕飯を濟ますと、毎夜毎夜上つて來て、二時間でも三時間でも坐り込んで話して行つた。話せば話すほど彼女の正直な人柄が明らかに分つて來て、時折りは藝人にしては餘りに持ち過ぎてゐるその親切が彼を感動させることもあつた。そしてそれと同時に毎日仕出屋から運ばれる貧しい食事も少しづゝ口に馴れてきて、漸次と境遇に順應してゆく斷念とともに比較的安靜な氣持ちが返つて來た。そして終には旅で經驗したどの生活よりもかうした京極の陋巷に熕ぶつてゐる方が彼の今の氣持ちにふさはしいやうにさへ思はれて來た。

仕事の方は相變らず手につかなかつた。原稿用紙からペンからインキまで一切京之助の手で買ひとゝのへて貰ふし、机がはりに餉臺まで置いて貰つてゐながら、彼はどうしても仕事をする氣になれなかつた。京之助は毎日のやうにやつて來て、彼のする事には少しの理解も持つてゐない癖に、唯仕事をしろしろと云ひつゞけた。その都度彼は云ひ譯でもするやうに今夜からする、明日からすると一時遁れを云つて苦笑してゐたが、偶にはひどく厭な顏をみせることもあつた。そしてたつた一人になると、肱掛窓

をあけてそこからすぐ眞下にみえる狹い墓地や、氷屋の裏口や、高い活動小屋の窓などをぼんやり眺め暮らした。

そこにはその狹い天地の間にさまざまの人生が尖端を現はしてゐた。墓參に來る人や、破れ障子のはまつた氷屋の窓に隱見する女の姿は彼にさまざまの空想の緒を與へた。殊に毎日、時をきめて活動小屋の窓から顏を出す女給仕達はひどく彼の好奇心を惹いた。時折大聲で唄などをうたひながら四五人で巫山戲け散らしてゐることでもあると、彼は何か不可思議でもみるやうに息を凝らして覗きみた。

さうかと思ふとまた或時はすべての興味がなくなつたやうに生欠びをしつゞけながら一日うつらうつら寢そべつて暮らしてしまふこともあつた。そしてそんな日には大抵夕暮になると窓に倚つて、黄昏の寂しい光のなかにほろほろと散り落ちてゆく銀杏樹の枯葉や、輝かしいイルミネーションの餘光や、遠い空の彼方に瞬く星の光などをみつめながら涙ぐんでゐるやうなことが多かつた。そして夕餐の時には必ず酒を買つて貰つて、ほの暗い洋燈の光を浴びながら手酌で寂しさうに飲んだ。

さうした慵い、取留めのない日は幾日となく續いた。

或晩のことであつた。

牧野はひとり寂しく夕餐を濟ますと、いつものやうに肱懸け窓に凭れて、寒い風に吹かれながら漸次

と暮れてゆく京極の夜を打眺めてゐた。橙黄色の黄昏は消えなんとして消えざる果敢ない薄明を漂はせて、そのなかにほの白い墓石の群や、盆屋の暗い燈がたゆたふやうにかすかにほのめいてゐる。見馴れた活動寫眞の小屋の窓からは明るい白熱瓦斯の光が溢れて、白堊塗りの庇にうつるイルミネーションも刻々に光を得て來る。そして二三日前から京之助達の一座は夜の席が開いて、呂幸も宵の口からそつちへ行つてしまうので、家のなかはまるで死んだやうにひつそりしてゐて、老爺が鐵槌を使ふ音だけが時々僅かに靜けさを破るばかりなのである。

彼は朧ろげな四邊の色彩をみつめながらいつものやうに遣る瀨ない心持ちで過去の美しい生活を追慕してゐたが、夜が全く天にも地にも浸潤しつくしてしまうと、到頭耐らなくなつて思ひ切つて帽子も被らずに戸外へとび出した。そして何處へ行かうと云ふ當てもなく、ぶらりと久振りで賑やかな表通の方へ出て行つた。

裏寺町から新京極の通りへ入ると、眼の覺めるやうな明るい光が彼の眼の前に波うつて來た。さまざまの興行物は丁度客を吸ひ込むさかりで、青や紅の彩旗や、強い繪具で描きなぐつた看板で飾られた入口には物見だかな群衆が列をなして群がつてゐる。そして珍らしさうに四邊を見上げながらぞろぞろ流れてゆく人々の顏は飾電燈や、喘ぐやうな瓦斯の光の反映に染められて薄紅く美しい色に輝いてゐる。拍子木の音や、囃しのどよみは騷々しい人の足音に縺れて、かうした歡樂の巷に特有な一種の重々しい律をつくつてゐる。そして本通りへ曲ると、そこも同じやうに、小間物屋や、繪葉書屋や、その他さま

ざまの食物などを賣る店から溢れて來る明るい光が引殘された日蓋の下て織るやうな雜踏と一緒に眩ろしく旋轉してゐる。

彼は人々に肩を押されながら歩いた。久しぶりてかうした賑やかな町の光景をみることが彼にとつては云ひ知れず嬉れしかつた。殊に東京の淺草や、大阪の道頓堀にくらべて、譬へ規模は小さくてもしつとりした情趣を含んだ點と、古風といふものをより多く持つた點てこの京極は以前から彼の深い興味を繋いてゐたので、店々の飾窓や、芝居の表看板などをぼんやり眺めながら歩いてゆくうちに彼は今までの濃い鬱憂から遁れ出て、大膽な、自由な、そして何處かに唆られるやうな歡びを持つた氣持ちになつた。そして三條通まて行き詰めると再び後戻りをして、濕氣を含んだ護謨のやうな道の上を肩を張つて歩いた。

京之助の店には好きな碁ても打ちに行つたのか、親爺の姿も見えなかつた。小娘がたつた一人てしよんぼり店番をしてゐるきりなので、彼は立寄る氣にもなれずその儘傍を素通りにして四條の方へ歩いて行つた。

と、ある化粧品や、袋物を賣る大きな店の前まで來かゝると、彼はふと、

「ほ、牧野はんがお行きやすえ。」と、凉しい女の聲が叫ぶのを聞いた。何氣なく振顧へると、蒼白い瓦斯の光の漲つた店先には一人の若い藝妓と、三人の可愛い舞妓が派手な風俗をして零れ出るやうに押重なりながら品物を見はんてゐた。

「ほ、ほんまに牧野はんえ。」そのなかの舞妓のひとりがまた重ねて叫ぶと、皆はその聲に應じて吃驚し

たやうに一齊に此方を振り向いて、突如どやどやと店から出て來た。そして耳の附根まで眞紅にしながらどきまぎしてゐる彼の周圍を取圍んでさも懷かしさうに笑み崩れながら賑やかに挨拶の言葉をかけた。
「ほんまに長いことどしたえなあ。どないにしとゐやしたんどす?、お體でも惡かつたんどつか?」なかでも藝妓のかつ子は牧野の胸に縋るやうに寄添つて驚きと喜びとを眼に輝やかしながら云つた。そして帽子も被つてゐない彼の姿を怪訝さうにつくづくみながら、「何やしら怪體な風をしとゐやすえなあ。」といふやうにじつと眼を据ゑてゐたが、やがて調子をかへて、
「私なあ、餘り知らしとくれやしまへんさかいどないにしとゐやすのやろ思ふてな、菊路はんやら、秀勇はんやらに聞いてみたんどつせ。ほしたらな、誰れも此頃は知らして貰うたことはないちやはるもんやて、ほんまにどないに心配したか知れまへんえ。よんべも私、松むらはんの姐はんとあんたはんのお噂をしてな、ふたりでお宿へ電話をかけてみたんどつせ……。」
　流れるやうに滑つてゆく人懷こい言葉は忽ちにして彼の心に夏の頃の思ひ出を湧かせながら神經の節々まで酒のやうに燃えひろがつて行つた。彼は益々度を失ひながら、やつと口をきつて、
「いや、少し用があつたもんだから大阪へ行つてゐたんだ。」と、辯解するやうに云つたが、その言葉尻は力なくふるへてゐた。と、ひとりの舞妓はそれを聞くといきなり頓狂な聲で、
「ようそんなこつちへる。そないにお隱しやはんかて宜しいやないか。私、ちやんと知つてますえ。」と、美しく微笑みながら、「せんどな、大榮はんのおかあはんに聞きましたらな、この頃牧野はんは先斗町へば

つかりお行きやすよつてに、うちへはちよいとも來とくれやしまへん云ふてやはりましたえ。」

「まあ、ほんまにさうどつか。いけずやなあ。」と、かつ子は眞顏で牧野をみあげながら、「先斗町で誰ぞ好きな人でもお出來やしたんどつかいな。」

「ふん、さうどすて。ほんでにもう祇園へいくのは難義や云ふてやはりますさうにおつせ。」牧野が默つてゐるので今ひとりの舞妓は傍から笑談らしく口をいれた。と、かつ子は態と睨むやうな眼つきになつて、甘えるやうに、

「好かんとこ。私、あんたはんそんな與太はんやないと思ふてましたえ。そんなんやつたら私もう厭やわ。」

その時、店の奥からまた三人の人影が現れて來た。と、みるとそれは思ひもかけぬ向井と今一人立派な風姿をした見知らぬ男と、それに大利の仲居まで一緒に引添うてゐた。

向井は醉ひの出た眼を据ゑて妓達に圍まれた彼の姿を吃驚したやうにみてゐたが、やがてつかつかと歩み寄つて來て、

「や、牧野君ですか。しばらく。一體何處へ隱れてゐたんです。」以前とはまるで違つた冷たい調子で傲然と云ひ放つた。小さな利己といふことより外に何も知らないやうなその心が薄い唇の何處かにありありと浮んでゐた。

牧野はそれをみるとひどく不愉快な氣になつたが、默つてゐる譯にも行かないので言葉少なに大阪へ行つてゐたことを語つた。と、彼は疑り深い眼眸をして薄笑ひを洩らしながら、

「さうてしたか。私はまた東京へてもお歸りやしたんかと思ふてゐました。」と、かつ子の方を顧みて、
「なあ、此の間誰れやつたかそんな事を云ふてゐたなあ。」
「誰やつたかて、あんたはんがおいひやしたんどすやないか。」かつ子は抗ふやうな聲て云つて、「牧野はんはもう東京へ逃げて歸らはつたちはゝつて、惡う惡う云ふとゐやしたやないか。」
「阿呆らしい。私がなんてそんなこと云ふもんか。そらきつと金田や、そや、そや、金田や。」と、向井はしらじらしい顏をして傍を向いてしまつた。そこへ又先刻の舞妓が無邪氣な聲て口を入れて、
「向井はんもよう嘘をお云ひやすえなあ。今日もあんたの好きな好きな牧野はんが東京へ歸らはつたさかい悲しいやろなんかてお云ひやして、私をきついめに嬲らはつたにやわ。」
「さうどす、さうどす。私も聞いてましたえ。」と、もう一人の舞妓はそれに合槌を打つて、「向井はんのやうないけずなお方、私、知らんわ。ほんまに一遍きついめに云ふて上げんならん。」
　群衆は眼を峙てゝ彼等の一團を見返へりながら絕えず左右に流れて行つた。彼等もいつかその流れに押されて、歩むともなく少しづゝ動き出した。牧野はそれをみると、その儘別れを告げて彼等の華やかな群から遁れてしまはうと思つたが、その時今迄後の方に控へて口を禁んてゐた仲居が買物の大きな紙包みを持ちかへながらつゝと步み寄つて來て、
「牧野はん、一寸お顏をお貸しやしてお呉れやす。」と、云ひながら、粘ばりつこい調子て少しばかり殘つてゐる勘定のことをくどくどと訴へはじめた。

牧野は盛んに遊んでゐた時分とはまるで似てもつかぬその露骨な薄情な言葉を聞いてゐるうちに、到頭胸がむかむかして耐らなくなつて來たので、

「そんなに恥をかゝせなくつたつていゝぢやないか。一月や二月遲れたつてお前の家の商買にさわる譯ぢやあるまいし、もし待てないといふんならどうでもお前の方で勝手にしたらいゝぢやないか。どうせ旅の者だもの、苛めやうと思へばいくらだつて苛められらあ。」と、投げ出すやうに云つた。

「そなことお云ひやすけど、私かてほんまに辛いのどすさかいなあ。」その言葉に勢を折られて仲居は聲を和らげながら「帳場からは私が惡いいふて責められますし、ほんまに板挾みになつて困つてるのどつせ。そらあんたはんをそんな事おしやすお方とは思ふてやしまへんけど、長いこと何處にお居やすかお宿も分りまへんやうては一寸信用も出來まへんさかいなあ、こないにきつい事も云ふのどつせ。兎に角明日誰れぞお宿へ伺はせますさかいに、どうぞ分るやうにお話しをきめとくれやす。」と、云ひ捨てゝ仲居はそのまゝ先へ行つた向井や舞妓の後を追つて行つた。

それと引違へに今度は三四間先の人込みのなかに紛れてゐたかつ子が、探すやうな眼眸をしながら後戻りをして來て、

「ほ、何しとゐやすのえ。一緒に歩きまへういな。」と、云つて袂をとらんばかりに寄添つて來た。

途々彼女は逢へなかつたこの五十日ばかりの間の出來事をそれからそれと物語つた。彼がこんなみじめな身の上に落ちてゐることは少しも知らないらしいその口調が、彼にとつては何よりも辛かつた。そ

して飽くまで彼を信じきつてゐるやうな女の心がひどく彼を感動させると同時に、しよんぼり肩を並べて歩いてゆく自分の憐れな姿が一倍みすぼらしく思はれ、垢じみた着物や指の摺りきれた足袋までがひどく氣になつた。數多い祇園町の藝妓のなかでも最も顏の賣れた彼女と、京極の明るい光のなかを歩く男にしては事實、彼の姿が餘りにみじめだつた。

と、ある活動寫眞館の前まで來ると、彼は先へ立つた一連が札賣場の前へかたまつて、後から來るかつ子を探してゐるのにはたと出會はした。舞妓達はかつ子の姿をみつけるとばたばたと走り寄つて來て、

「かつ子はん姐はん。私達これから活動をみせて貰ふのどつせ。早うお出てやはい。」と、嬉しさうな聲で叫んだ。そして牧野の袂にも縋りついて、

「あんたはんもお出てやはい。そらほんまに面白い面白い寫眞があるさうにおつせ。」

「そないに考へとゐやはんかて宜しいやないか。一緒に見まへうな。」

と、彼等は口々にせがんだ。

そこへ向井と、仲居がやつて來て、なかでも仲居は冷たい顏つきをしながら、

「そないに喧ましう云はんとおゝきやす。牧野はんはお忙がしいお體どすさかいな、この次の時におしやす。」

「そやかて、そやかて……」と、彼等は拗ねるやうに云つたが、仲居はまたそれを眼顏で抑へて、

「そないに云ふたら牧野はんお困りやすえ。なあ、あんたはん、さうどすわなあ。」と、向井の顏をみな

から云つた。

「そや、そや、ほんなら牧野君、今日は連れがありますさかい、又明日でも。」向井は場合が惡いとみてとると、何喰はぬ顏容をしながら云つて、後を向いて連れの男と一緒に入口の方へ歩いて行つた。

舞妓達も、仕方がなしそのあとに隨いて行つた。そして各自に後を振顧へりながら、

「さいなら。」

「さいなら。」と、可愛いゝ別れの言葉を殘して、燃えるやうなだらりの絹模様を眩ろしい瓦斯の光のなかに揺がせながら、入口からニス塗りの階子をのぼつて行つた。一番の後に殘つたかつ子も、

「ほんなら明日電話かけますさかいな、どうぞきつと知らしとくれやす。ほんまどつせ。」と、氣を殘すやうに云つて、媚びのある流眸をそつと投げながらその儕輩の後を追つて行つた。格子縞の派手な座敷着の裾もやがて階段の上に消えてしまつた。

たつたひとり跡にとり殘された彼は、眼の前に搖蕩してゐた華やかな影をあらぬ人の手にそつくり奪ひ去られてしまつたやうな何とも云へぬ寂しさを覺えて、暫らくの間、入口の内部を見送りながらぼんやり突立つてゐた。そのうちにふと譯もない腹立たしさが勃發して來て、じりじり焙きつくやうに胸に喰ひ入つて來る口惜しさとゝもに双眼にはいつか熱い涙が滲んで來た。彼はそのまゝ歯をくひしばりながら其處を立去つて、群衆なかを急ぎ足に四條の方へ驅けぬけた。そして漸次と細かく縺れついてくるさまざまな感情の波に心を浸しながら足に任せてそこらを歩き廻つた。亂酔を欲する心は舌の先まで込

みあげてゐながら、彼の財布のなかにはもうそれをするだけの金すら殘つてはゐなかつた。

九時すぎになつて、彼は再び京極の明るい光のなかへ歸つて來た。顔色は鉛のやうに蒼ざめて、怪しい光をもつた眼の底には弱々しい悲しみが喘いでゐるやうにみえた。

席の前まで來ると、彼は何氣なく歩調をゆるめてその晩の解題書きを眺めた。紅提灯の影には疋田の枠のはまつた看板が幾枚となく懸けつらねてあつて、そのなかには京之助や、呂幸の名も筆太に書いてあつた。それをみると彼は急に彼等に逢つて、今の心持をどうにかして紛らかしてしまひ度いやうな氣になつたので、到頭薄暗い細路次をぬけて樂屋口の方へ廻つた。

路次のなかほどで彼は席から歸つてゆく三人の女にはたと出會はした。袖もすれすれな細道なので、彼は片側の板羽目にぴたりと體を押しつけて女連をやりすごした。その格好が可笑しかつたのか、彼等は怪訝な顔容をしながらじつと眼を据えてみていつたが、行過ぎる弊を忍ぶやうにクスクス笑ひ出して、

「怪體な男はんだつせなあ。」と、そのなかの誰れかゞ男のやうな太い聲で揶揄ふやうに呟いた。

それを聞くと、彼は何といふ譯もなく氣恥かしくなつて、その儘引返へしてしまはうかと思つたが、やつと氣をとりなほして樂屋口へ歩み寄つた。そして格子戸をあけておづおづなかへ入ると、薄暗い電燈のともつた階段の下には子供を負ぶつた穢らしい老婆が、十四五のまるまると肥つた娘と何ごとかひ

そひそ立話しをしてゐた。娘は廓うちのおちよぼとみえて、口早に語る大阪辯はもう既に聲が太く破れてゐた。

「京之助さんゐますか。」と、彼はそわそわした聲で訊いた。と、二人のものは急に話をやめてじろじろ彼の姿を眺めたが、やがて娘は、

「ゐやはりまんが、今高座だつせ。」と、襟にかけた手拭をはづして嬌態をしながら答へた。

「ぢや、呂幸さんは？」

「呂幸はんは拔て出てやはりまんがな。」と、笑ひながら知れきつたことをいふやうな顔をしたが、「そやけどもうぢつきに濟んますさかい、急な御用があるのやつたら、上つて待つとゐやしたらどうだんね。」

「さうだなあ。」彼は何となく氣臆れはしたが、「そんなら待たして貰はうかな。」

「さうおしやす。」と、娘は老婆をそのまゝに殘して置いて、彼を階段の上へ案内した。

階上は八疊を二間打ち拔いた樂屋だつた。煤けた破れ障子をあけると、なかゝらは生溫い空氣とゝもに女の匂ひが面をうつやうにさつと匂つて來て、二つの電燈に照らされた間内の混雜が先づ彼の心を驚かした。鏡臺やら、三味線箱やら、道具箱をごちやごちやに取散らしたなかに大きな角火鉢が置いてあつて、その周圍にはコートを着たまゝ女や、黑襟のかゝつた着物に縮緬の羽織をぞろりと引かけた女がだらしなく居座ひを崩して、喧ましい大阪辯で何ごとか笑談を云ひ合つてゐた。そして正面には眞打(とり)の師匠らしい四十格好の痩せた女が、祝儀のビラや大入のビラを張り連ねた壁の前に座つて、古びた鏡臺

のうへ〻のしかかるやうな姿態をしながら胸を披げて頻りに顔を扮つてゐた。その傍には弟子らしい若い女が着るばかりに襲ねた高座着の黒紋付を行火で温めながらしよんぼり座つてゐた。

牧野が敷居際に顔を出すのをみると、師匠は紅筆ヶ唇からはなして、こつてり扮つた顔を電燈の光のなかへつき出しながら、

「誰方はんだす？」と、さびた皺嗄れ聲で訊ねた。

案内して行つたおちよぼは足元に散つた風呂敷やら、稽古本やらを片寄せながら、

「京之助はんのお客はんだす。」

「あ〻、さうだつか。えらい風をしてまあ御免やす。」と、師匠は鷹揚に笑ひながら云つて、「さあ、づッとお通りやしてお呉れやす。これ、お菊。お蒲團を早う敷いて上げなはれ。」

彼は入口でもぢもぢしてゐたが、漸う度胸をきめてなかへ入つた。妙にてれたやうな取り澄ました顔をしながら火鉢の前に敷かれた薄い木綿蒲團の上へつかつか腰を卸ろして、愛想よく話しかける師匠に二言三言挨拶を返へすと、袂からそ〻くさ煙草をとり出して火を點けた。そして絶えず濃い煙を吐きながら、話をやめて彼の方をぢろぢろ偷み〻る周圍の女達の視線をさけた。

高座はすぐ板壁の彼方なので、語つてゐる京之助の聲と、呂幸の絃の音が手にとるやうに聞えて來る。その時、京之助は丁度「酒屋」のお園の口説きを語つてゐた。何處か澁味をもつた太い聲がおそのゝ胸に燻ぶつてゐる限りない悲しみをひとつひとつに解きほぐしてゆくやうに徐かに抑揚して、優しい感情の

波が層一層に壓し重なつてくる一節であるにも拘らず、彼女はいかにも迫らぬ巧妙な語り口をみせてゐるのである。

彼は高座で明るい瓦斯の光を浴びながら見臺の上へ延びあがるやうにして語りつゞけてゐる京之助の顏や、俯向き加減に腰を落として撥を動かしてゐる呂幸の姿を心に描きながらうつとり聞き惚れてゐた。

「……一年前にこのそのが、死ぬる心が、えゝ、ま、つかんだ……」のところになつて、甲にひき締つた絃の音が泣き崩れてゆく聲を逐つて激しく歔欷くやうに打慄へてくると、すぐ傍に座つてゐた女の一人は頓狂な聲を出して、

「ほ、呂幸はんまた躓かはつたえ。何てだつしやろ。今日は餘程怪體だんな。」

「ほんまにいな、」コートを着たひとりは笑ひながら答へて、「また何ぞ苦勞ごとでも出來たんか知れえへん。あの人は私らと違うてきつい苦勞性だすさかいなあ。」

やがて、拍子木が入ると賑やかな拍手の聲が聞えて、簾の落ちる音がきりきりと響いた。三味線はそれとゝもにふつりと消えて、今度は何處かすぐ近邊の席でやつてゐる浪花節の甲高な唄聲と、荒々しく刻む拍子木の音がざわめいた四邊の空氣のなかに浮き上つて聞えて來た。

そこへ階子口の方から、

「いゝぢやないの、そんなに氣にしなくつたつて。今日はどうせツケが惡いんだもの。」と、投げ出すやうな聲がして、やがて京之助と、呂幸が藍染め小紋の肩衣を斜めにゆがめながら入つて來た。

「おや、お師匠さん。お出てやす。」と、先へ入つた京之助は出逢ひがしらに腰を折つて調子よく挨拶したが、すぐ牧野の姿を見つけて、言葉の調子まで變へて、

「まあ、御來い。いつ來たの？」

「つい今しがたさ。」と、牧野は見違へるほど奇麗に扮つた彼女の顔をみながら嬉れしさうに云つた。

「まあ、さう。今日は大變顔色がよくないねえ、何處か體でも惡いんぢやなくつて？」

「格別何處つて惡いとこはないんだが……。」

「そんならいゝけど、なにしろ眞蒼だわ。」と彼女はそのまゝ彼の隣へ割込んで、立膝をしながら兩手で肩衣の前下を平帶の間から引拔いて肩越しにすつと後へはねた。そして有り合ふ長煙管をとりあげて、さも甘さうに二三服たてつゞけに煙を吐いて、「そして何う？、仕事はちつたあ運んで？」

「いや、まだあの儘さ。」彼は責められてゞもゐるやうに頭を掻きながら答へた。

「仕樣がないねえ。そんなに怠けてばかしゐてどうするのさ。」

師匠が肩衣をつけてゐる傍で何ごとかくどくど訴へてゐた呂幸は、その時、漸う火鉢の方へやつて來た。牧野と眼を合はせると例の寂しい笑顔をみせて、小さな聲で、

「お越しやす。」と、挨拶したが、その眼は涙ぐむだやうに濡れてゐた。それをみると、今迄意地の惡さうな顔をしながら牧野と、京之助の會話を聞いてゐたコートの女は突如、聲をかけて、

「呂幸はん。今夜はどないにおしやしたんえ？、えらう調子がつきまへなんだえなあ。」

一ぽん女に聞き辛うおしたらうなあ。」と、彼女は恥かしさうに云つて、右の腕をそつと着物の上から抑へながら、「また持病のリヨウマチが起りましてな、どうしても撥が捌けまへんの。」

「さうだつか。そら難義だんなあ。」

「あんでも精一杯調子をしめてみたんどつけど、何せえ、この指がてんと利かんもんどすさかいなあ。」と、呂幸は首を傾けながら嘆息をついて、「京之助はんがどないに氣を惡うしとゐやすやろ思ふてな、それが氣になつて氣になつて叶はんのどつせ。」

「阿呆らしい、何んで私がそれで氣を惡うしまんねえ。怪體な呂幸はんやなあ。」と、京之助はいつもの氣さくな笑ひ方をしながら、舌についてゐない上方言葉で戯れるやうに云つた。そしてふと氣付いたやうに牧野の耳へ口を寄せて、

「これから何處かへお酒を飲みに行かうか。」と、四邊には聞えない程な小聲で呼いた。

牧野はそれを聞くと俄かに眼を輝かして、

「だけど……」と、云ひながら膝の傍でそつと指を曲げて輪をつくつてみせたが、京之助はそれを下眼でちらりとみると急に噴笑して、

「いゝよ、私が席亭から借りてくから。」

やがて彼女は煙管をぽんと置いて、投げ節のやうな鼻唄をうたひながら立上つた。そして呂幸にもすゝめて一緒に着換へをしはじめた。電燈を脊なかにして、色の褪めたメリンスの腰卷や、胴着をちらちら

みせながら暫らくの間不遠慮に體を扱つてゐたが、やがて晝夜帶をひつかけに締めてしまうと今度は脱ぎすてた高座着や肩衣を亂暴にたゝみつけて、棚の上の行李のなかへ藏つてしまつた。
「お露はん。えらい濟んまへんが、あんたがお歸りやすときに、私の道具をちよいと家へ投り込んどいて下さいな。」と、彼女は隅の方で師匠の着物を疊んでゐるおちよぼに賴んで、自分はそのまゝ羽織りを引かけながら又火鉢の方へ歸つて、
「ぢや牧野さん、一足先へ出て待つてゝ下さいな。」と云つた。
牧野はそれをいゝしほに立上つた。そしてまだ鏡臺の前へ腰を据ゑて、徐かに煙草を吸ひながら仲入りのあくのを待つてゐる師匠に挨拶をして階下へ降りた。
溫い家のなかゝらついと戶外へ出ると、路次口の風は頰をさすやうに冷たかつた。通りまで眞直ぐに出て、角のところで暫らくの間待つてゐると、やがて京之助は呂幸を連れて、
「おゝ寒む、おゝ寒む。」と、云ひながら溝板を上をかたかたと小走りに走り出て來た。

薄暗い寺町の通りを歩きながら何處にしやう此處にしやうと思ひ惑つた揚句、到頭懷合の都合で東京蕎麥といふことになつて、彼等は裏寺町の横町にある更科の暖簾をくゞつた。そしてそこの奧まつた二階座敷で、貧しい誂へものを肴に酒を汲みかはした。

牧野は熱いやつを四五杯たてつゞけに呷はると、さも胸がすいたやうに深い息をついて、

「京之助さん。今夜僕は向井に逢つたよ。」と、云ひながら、今迄云はずに置いたさつきのいちまきを話しだした。そして向井がかつ子や、舞妓達を連れて活動をみに入つたことまですつかり話したあとで、急に自分を嘲るやうな語調になりながら、

「もう彼奴に目付かつたら往生だよ。近いうちに手が廻つて、まごまごすると警察へ突き出されるかも知れない。」

「まさか。」と、京之助は彼の顏をみながら、「だけど惡い人にめつかつちやつたもんだね。でもあんたが呂幸さんの家にゐることは知らないんだらう。」

「そりや知らないさ、また木屋町へ歸つてゐるものと思つて、明日の朝電話をかけるの、使ひをやるのつて皆して騷いてゐやがつたよ。」

「いゝ氣なもんだねえ。明日の朝電話がかゝる、宿屋であんたが京都へ歸つて來たことをさとる。ほいゝ。こりやどうしても一騷動ゝちあがるねえ。」と、京之助は面白さうに笑つて、「だけど、まあ、いゝさ。私と呂幸さんさへ默つてりや當分は安心さ。そしてそのうちに仕事さへ出來上りや此方が強味なんだからねえ。」

「だが、一旦知れたとなると、おちおち仕事も出來ないからなあ。」と、牧野は急に心細さうな聲で云つた。

「そんな度胸のないことてどうするの。むかふが薄情て來りやこつちだつて薄情て受けるまでの話さ。」と、京之助は彼に盃をさしながら云つて、「そして今夜、向井さんは一人てそんな法樂をきめ込んてゐたの。」

「いや、連れがゐた。三十格好の立派の風をした人だつたよ。」

「さう。ぢやそれだね、此頃取卷いて遊んてるのは。」と、彼女はその人を思ひついたやうに云つて、「用心じないと今にその人もまた貴方みたいにされちまうんだねえ。」

酒がまわつて來るに從つて、牧野は漸次と感傷的な心持になつて行つた。京極の明るい光のなかてみたかつ子やそのほかの舞妓達の姿を思ひ起すと、さつきの嫉妬や憎惡が更らに倍加された力をもつて再び心に返つて來た。彼は蒼ざめた顏に妙に緊張した表情を現はしながら少しづゝ饒舌になつていつた。そして低く沈んだ聲て、夏の頃の生活を背景に、かつ子や、美しい舞妓達に對するしんみりした思慕の情をいろいろな言葉て訴へてゐると、その時、ふと、呼びもしないのに小婢が襖の陰から顏をだして、「こつちやに京之助はんちうお方おゐやすか?」、あこ來とゐやすお客はんがこれを。」と、云つて、小さく折つた紙片をさしだした。牧野の美しい抒情詩は䵷の出來たその小婢の手とゝもにふつりと斷れてしまつた。

京之助は煩さゝうにそれを受取つて、電燈の光にすかしながらひろげて讀んてゐたが、やがてぷすりと噴笑して、酒も飲まずにしよぼり坐つてゐる呂幸の方を顧みて、

「中川さん達のお連れよ。馬鹿にしてるねえ。」と、云つて、今度はそれを牧野の眼の前へ突き出して、
「ちよいと讀んで御覧なさい。活動の辯士だけあつて馬鹿に色男がつた文句ぢやないの。」
牧野はそれを受けとつて讀んでみた。粗末な卷紙に右あがりの拙い字で走り書きしてある。

先達は失禮。あのやうに遅くなつて、冴え渡る月夜をあなたと別れて歸つてゆく僕はどんなに淋しかつたでしよ。察して下さいナ、今夜は大正座の紫葉君と、八千代館の秋光君と三人で大いに飲んで居ます。チヨツトでもいゝから手がぬけるなら顔を見せて下さいナ。逢ひ度い人に逢はせずに歸すのはアンマリぢやないですか。紫葉君は僕とあなたとに愛の盃をさゝげると云つてりきんでゐるのですモノ。

宛名は京之助にして、自分の名は綠水ヨリとしてある。さすがに彼も苦笑せずにはゐられなかつた。
京之助は盃を置いて醉つた眼を据ゑながら、
「だけどいゝ男よ。すらりと背の高い橘屋さんみたいな男なの。」と、眞顔で云つたが、やがて呂幸の方を向いて、急に好奇心が動いたやうに、
「ねえ、呂幸さん。ちよつと揶揄ひに行つて見やうぢやないの。この紫葉つてえ人はあんたに岡惚れしてるんだつてえからあんたもお出てやすな。」

阿呆らしい。私、厭どすわ。」と、呂幸は嬌態をしながら答へたが、京之助は到頭立ち譲る彼女を追ひ立てるやうにして、

「ぢつき歸つて來ますから、待つてゝ下さいよ。」と、云ひ殘して紙襖の外へ出て行つた。

たつた一人になると、彼は俄かに何とも云へぬ寂しさを感じて、唯手酌で酒ばかりちびちび飲んでゐた。そのうちに酒の醉ひとゝもに漸次と滅入つてゆく心の底にはさまざまの果敢ない失望やら、苦悶やらがまた湧き起つて來て、すべてを暗い彩で塗りつぶしてゆかうとする氣持のなかに、

「好かんこと。あんたはんそんな與太はんやないと思うてゐましたえ。」と、怨むやうなかぼそいかつ子の聲だけがかすかに綿々と打慄えてゐるやうに思はれてきた。彼は到頭耐らなくなつて、障子をあけて椽端へ出た。そして冷たい夜のなかに佇みながら漸次と更けまさつてゆく京極を眺めた。

宵の口から少しづゝ動いてゐた風は全く落ちて、四邊には玻璃のやうな透明な夜氣が一面に瀰漫してゐた。高い芝居小屋の甍の上にかゝつた片破れ月は家々や、樹立の陰を斜めに倒して、賑やかな樂隊のどよみや、拍子木の音や、戯れた唄聲はかすかな一脈の音響に溶けあひながら、沈默と、朧ろげな薄明とに包まれたすぐ下の墓地の方へ漂つて來る。そしてそこは丁度呂幸の家とは向ひ合ひになつたやうな位置にあつたので、盆屋の灯の間にそれらしい家の棟だけがみえてゐる。

彼はこの不思議な對照をもつた京極のなかて、しかも徒らに尨大な甍をならべた歡樂の形骸の陰にみすぼらしく肩をすぼめながら蹲まつてゐるやうな零落れはてた彼の隱棲を思つた。輝やかしい光と、浮

いたものゝ音の陰に慘ましい姿をして趺坐してゐるやうな彼自身の生活を思つた。と、已み難い放蕩の慾念に憑き纏はれてゐるばかりにすべてのものから虐げられ、捨てられて、漸次と窮迫した境遇に墮ちてゆく身の上が心細く、情なく思はれて來て、心を壓しつぶすやうな重苦しい悲しみがじりじりと胸に迫つて來た。そして明日はどうなることかと思ふと、眼の前が眞暗になつてしまつた……。

少時して、

「どうも放つときましてえらい濟まんこと。」と、いふ聲が聞えたかと思ふと、すぐ彼の傍にはいつのまにか呂幸がたつたひとりて歸つて來てゐた。彼女は紅く醉ひの出た頰を兩手て抑へながら彼の顏をみあげて、

「京之助はんがあんまりきつう云うて吳れやはるさかい、私、けなりいて叶ひまへんわ。」

と、甘えるやうに呟いたが、返事がないのて更らに語をついて、

「京之助はんきつう醉うてな、あつちやの人達と矢尾政へ蠣をたべに行く云ふてやはりますが、あんたはんどないにおしやす？」と、云つたが、今度は何と思つたか彼の方へ顏をちかぢかと寄せて媚びるやうに、「もう遲うおすさかい、何處へも行かんとおいきやすな。ほして私らだけ一足先へ歸りまへうな。」

彼は乾きゝつたやうな眼眸をしてじつと彼女を見た。そして唯默つて合點いた。周圍をとりかこむすべての人の名がその瞬間彼にはもうさつきほど親しくなくなつてゐたのてある。

呂幸はそれをみると急にいそいそして襖の外へ出て行つたが、やがて歸つて來て、「ほんなら京之助はんに斷つて來ましたさかいすぐに往にまへう。」と、自分が先へ立つて歸り支度をはじめた。

門口の暖簾をくゞる時、彼はさすがに京之助のことが氣になつて一言挨拶だけはしていかうと思つたが何だか氣臆れがしてそれさへなし得なかつたので、到頭彼は呂幸と肩を並べてその儘薄暗い侘び住居の方へ歸つて行つた。

裏寺町の寂しい通りへ來懸かると、薄月はみえてゐながら、雲の多い空からはぽつりぽつりと冷たい雨が落として來た。呂幸はその時何を思ひ出してか嘆息をつくやうな調子で、「京之助はんのやうな氣象やつたらほんまに宜しうおすえなあ。男はんやつたら誰かてあんなすつぱりした人をお好きやすやろなあ。」と、頼りなげに呟いた。

それを聞くと牧野は今迄心の底に鬱してゐた感情が一時に勃發して來るのを覺えて、突如、冷えきつた呂幸の手を握りしめながら、

「呂幸さん。どうにかしてお呉れ、どうにかしてお呉れ。」と、聲を慄はせて呟いた。そして甘えるやうに彼女の肩へ頬を摺りつけながら頻りに女の心を唆るやうな言葉を云ひつゞけてゐたが、そのうちにふとその聲が途斷れると、彼は聲を呑んで小兒のやうにしくしく泣きはじめた……。（をわり）

樂園

田山花袋

私はいつも土曜日に出かけた。私に取つては、暫くの間は、其處は隱れた樂園のやうなものであつた。新築の家のところどころに立つてゐる郊外の畠の中を、電車は全速力を出して駛つて行つたが、それさへ、私には遲くまどろく感じられた。其間にある乘換の場所などでは、殊に待つてゐる時間が長く長く思はれた。車掌が控所で平氣で話をしてゐるのがいつも焦々と私の癪に觸つた。

『今日はすれ違ふ電車が來なくつて、三十分も待たされた。……歸つて了ひやしないかと思つて、氣が氣でなかつた。』

私はかう言ふと、

「歸りもしないけれど、隨分遲いと思つてゐたわ。」

女はかう言つて笑つた。

女は紋羽二重の被布を着てゐる時があつたり、お召の意氣な羽織を着てゐる時があつたりした。背の高い、すらりとした　何處か一種の女の衿持を持つてゐて、いかに自分の愛した男にも、それだけは自由にさせないといふやう處があつた。それでゐて、まあ、何といふ自由な、何といふ柔かな、何といふ男の心を奪ふことの巧みな女だらう！　かう思つて私はいつも凝と女の顏を見た。

女を離れて居る間の方が女に一緒にゐる間よりも一層私を樂ませた。それほど種々な隱れた心の抑揚を女は持つてゐた。

私は書齋にゐる時だの、野を散歩してる時だの、飯を食つてゐる時だのに、よくその女の隱れた心と隱れた態度とに邂逅して、喪心した人のやうにわれを忘れてその幻影に捉へられて了ふことがよくある。友達と話しをしてゐて、中途で、ゆくりなくそれに捉へられて、トンチンカンの挨拶をして、友達を驚かしたこともよくある。机に向つて、書籍を前に展けたまゝ一頁も讀まずに恍惚として一日を暮して了ふことなどする。何といふ惑溺だらう。何といふ女の力だらう。私は私の心も私の體も絶えず女に向つて傾いて偏つてゐるのを感ぜずには居られなかつた。

「これは何うするの？」

「知らない」

「知らないことなんかないでせう?」

「本當に知らない」

「さう、本當に……」

（女は笑つてゐる）

「ぢや敎へて上げませうか」

「あゝ」

其時、下座敷で、あの下ぶくれの、可愛い眼附をした娘の笑ひ聲がした。下からさした電燈の餘光が二階の階梯の上のところに微かに搖いてゐる。烈しい薔薇の匂ひが闇の中にした。

下ぶくれのその可愛い娘！　それを私はその時眼の前に明かなに浮べてゐた。不思議な心持だ。烈しい戀に捉へられながら三つにも四つにもわけられ得る不思議な心を私は見てゐた。娘の笑聲が絶えず聞えて來る……。「お戯談ばかり仰しやつて……」かう言つて顏を赤くして笑つてゐる顏が闇の中に……。

私は女と一緒に始めて此町に來た時のことを思ひ出してゐた。

「何處か好い處がないだらうか」女も私もさう思つてゐた。「誰れにも知れないやうな……靜かな隱れ家」私達は彼方此方をさがし廻つた。人目の餘り煩くないやうなところを私達は五日も六日も探した。

一週間に一度ならば、人に知れないやうに、何ういふことでも出來る。女はかう思つてゐるらしかつた。女に地位があり、名譽があり、幾人かのラバーがあり——曾て一度嫁いてそしてすぐ別れた夫があることを私は知つてゐた。思ひもかけない握手——それから無數の思ひもかけないやうなことが續いた。私は女が段々に開いて見せて吳れた世界を唯々驚いて見てゐるやうな人であつた。と、女は『何うかしたの？』かう言つて私を呼び覺した。

何處にもそれに相應したやうな好い家屋はなかつた。一度は郊外に行つて、新しい家を借りやうとして見たが、何うもそれてはすぐ人に知られさうに思はれた。寧ろ都會の雜沓の中の方が好いかも知れないと思つて、私は細い巷路や、溝に添つた新道や、三味線の音の聞える橫町などをさがし廻つた。私はふとある二階の一間をさがし當てた。これこそお誂通りだと思つた。これほど都會の眞中てそして世離れた家はないと思つた。それは細い通りを奧深く入つて、ずつと突當つたやうな位置にあつた。一緒に行かうと言ふのを、女は發見されるのを恐れて、獨りて見に其處に行つた。『あんな汚い處……二階から、下の溝を見て？』女はかう言つてすぐ否定して了つた。成程、其處には大きな堀割があつて、黑い汚い水には、猫の頭だの、犬の死んだのだの、たわしだのがぶよ／＼浮いてゐた。『それに、あんなに、じろ／＼人の顏を見るやうな男のゐる家は駄目ですよ』女はかう言つた。

ある秋の晴れた日だつた。私達は降りるともなくこの町の停車場て下りた。『此處等が一番好いんだけれど……電車があるから、すぐ來られるし、此處等まで來れば人の眼も惹かないし』私達は話し合ひな

から歩いた。

ふと『二階貸間』といふ白い札の眼に着いて胸は躍つた。私は其二階屋——小間物屋を間接に知つてゐた。其處には下膨れの可愛い娘がゐる筈だ。此前唯一度此町に來たことがあつたが、其時、娘は店頭に座つてゐて、恥しさうな顔をして、私の手に敷島を一つ渡した。……綺麗な娘がゐるな……から思つて通つたその二階家だ。

室も綺麗て、眺望もあつて、空氣の流通も好くつて、それに二間つゞけて貸して吳れるといふことも女の氣に入つたが、それよりも家内が母親と娘きりて、その母親がまた人の好い親切なそれてゐて何も彼も飲込んてゐるらしいので、それが一番女の決心を固くした。て、私達はその二階二間を借りることにした。

其時、女は何ういふ扮裝をしてたらう。さうだ。髮を束髮にして、ジミなお召か何かを着て、コートを着てゐた。娘は驚いたやうな顔をしてその指にはめたダイアのキラキラ光るのを見てゐた。

女は母親に言つた。

『家が少しゴタゴタしてますから、少し靜かに勉强したいと思ひまして』

『え、え、此處なら、靜かてすから、いくらてゝ御勉强が出來ます』

『ぢや、これからいろ〱お世話に』

『え、え、行屆きませんけれど、娘と二人きりてすから、それはもう靜かて御座いますから』

娘は母親の後に立つて見てゐた。

八疊に六疊の二間！　今まで工兵の若い士官夫婦のゐたその二間！　私達は段々そのかくれ家に種々なものを運んで來た。六疊には長火鉢を据ゑた。八疊には、卓、椅子、水彩畫。卓の上には洋書五六册インキ壺、ペン、薔薇の鉢植。西日の當る時には、カーテンを引くやうにした。

大きな女の肖像‥‥

その大なな肖像の眼が、微笑を含んで絶えず此方を見てゐた。女の冴えた艶な眼と肖像の女のその微笑を含んだ眼とは、常に二つ重り合つて、一方を思ひ浮べればすぐ一方がその後から續いた。何も彼も知つてゐるその二つの眼だ。

そればかりてはなかつた。その女の肖像畫は、女に取つては忘れられない紀念らしかつた。その肖像畫のかげにゐる男は誰？　前の夫か、それとも一度關係してそして切れたラバーが、それとも今も猶つゞいてゐる戀人か。その肖像畫の女は、何處かて、私と女とが今迄つてゐるやうな生活を見たことがあるに相違なかつた。‥‥その微笑は何を笑つてゐるのか。

ある日その話を私がすると、

「一生の私の友達よ、その額の女は！」

から女は笑ひながら言つた。

「かういふ生活を、また何處かで、——何處か違つた室で見るだらうね、この額の女は？」

「さうかも知れない」

女は笑つてゐた。

『僕に呉れませんか』

『何うして？』

『何うしても……』

『私の一生の友達だつて言ふのに……』

『だから下さいつて言ふんです』

『何故なの？』

『一生、貴女についてゐて、いろんなことを、あの微笑を含んだ眼で見てゐないやうに……』

女は默つて笑つてゐた。其時であつたか、それともそれから一月二月を經つてからだつたか忘れたが、女は、『男の嫉妬(やきもち)つておかしなものね』と言つて私の顏を見た。

その時の眼色(めつき)が今も眼の前にある。

私の眼の前には、赤と紫と白とをくゝつたくゝり目が際立つて見えてゐた。それは皆な縮緬の斷片を集めて縫つたやうなものであつた。

黑い髪が流るゝやうに、寧ろ湖の寄せて來るやうに……。

私は停車場を出ると、急いで、その突當りの二階屋に行つた。

娘が大抵は其處にゐた。にこにこ笑つてゐるその笑顔で、女は來てゐるか、まだ來てゐないかといふことがすぐ解つた。『待つてゐらつしてよ』など言ふこともあつた。ある日、遲くなつて、灯のつく頃行くと、店には、若い工兵の士官が三人ばかり、店で娘を取卷いて、いろいろなものを見せて貰つて買つてゐた。瓦斯の靑白い光が娘の襟首のところに流るゝやうに落ちてゐた。

何方かと言ふと、女の來てゐる方が多かつた。女は別の電車で來た。私が階梯に音を立てゝ上つて行くと、女は卓の上で、椅子に腰をかけて書など讀んでゐた。林檎やバナヽやオレンヂなどがその上に轉かつてゐた。

女はナイフでそれを剝いて、半分私にわけて與れた。

室には電氣と瓦斯と兩方に來てゐた。『何うも瓦斯は厭ですね。瓦斯をつけると、何處となく氣がふさいで來るんですもの』から言つて女は瓦斯を消して電氣をつけたりなどした。

一週間に土曜日一日、それ以外には、女の生活は廣い世の中のものであつた。私は段々それに飽足らなくなつて來た。

「あれから何うしました?」

「あれからッて？」

前の週間に――」

「何も變つたことはありませんよ」

「でも……少しは話して聞かしてくれても好いでせう？」

「何にもないんですもの」

かう言ひながらも、其週間に、自分の家に訪ねて來た男の友達のことだの、女の友達のことだのを話した。それを私は細かく手繰り寄せて考へた。

手繰り寄せて――實際さうだ。それに、女は熱い心を見せて居りながら、しかも、もう若い娘のやうに熱した態度を示さなかつた。『そんなことは何うでも好いぢやないの？』かう言つて笑つた。

私はいろいろな日と、日に由つて起つたいろいろな感じとを味つて來た。秋はもう暮れに近かつた。林の楢の葉や、柞や、漆などは紅葉して、路傍の草藪には赤い小さい實などが見えてゐた。北へ向ふ汽車は、日毎に停車場に來て、白い烟を颺げて通つて行つた。

西の窓に當る夕日の金色の中に、私と女と默つて座つてゐることなどもあつた。汽車の音は絶えず前を掠めて行つた。『何處か、遠くへ行つて見たい！』かう女が言つて、窓をかけて見た。

六疊の方の高窓からは、停車場がすぐ正面に見えてゐた。何を持つた旅客が入つて行つた。時には、車掌や助役が此方に向つて歩いて來た。夕飯を近所の官舍に食ひに行く驛長の姿なども見えた。

ついぞ泊つたことがなかつた。何んなに遲くなつても、最終の電車には、女は屹度歸つて行つた。私も大抵は一緒に歸つたが、何うかすると、『僕は泊つて行く』かう言つて一夜を其處に明かすことなどもある。柔かい、人の神經をそゝるやうな女の匂ひは、女が歸つた後でも、依然としてその一間に殘つて何とも言はれないなつかしい空氣を四邊に漲らした。

私は何故かその女の歸つた後の一間(ひとま)の空氣に段々捉へられて行つた。女を送り出して——夜の晴れた時には停車場まで送り出して、そして歸つて來て、一間の中に入つた時の心持は、何とも言はず靜かな落附いたものであつた。それに、私は大抵は疲れてゐた。女の肌の暖味の殘つてゐる床の中で、私は熟睡した。

私はよく泊つて行つた。

しかし、女に取つては、これが快くないらしかつた。泊つて行く理由を度々私にたづねた。思ひもかけない嫉妬を浴せかけられたこともあつた。

「あの娘は駄目ですよ」

こんなことを言つた。また、或時は、「あの娘は、もう處女ではないのね。軍人を相手にしてるのよ」などと言つた。始めは私には何故女がそんなことを言ふのか解らなかつたが、後には段々解つて來た。

「大丈夫だよ」

私はかう言つて笑つた。

一緒に歸る時には、私達は停車場からプラットフォムに出て、長い橋を渡つて、そして向ふ側の電車のゐる方へと行つた。明るい電車の車室！　くつきりと浮き出すやうな女の白い顏、それは何んなに私に明るい快よい印象を與へたてあろうか。私はその刹那ほどはつきりと女をつかんだやうな氣がすることはなかつた。しかし私達は他人のやうに筋違ひに腰をかけるのを例としてゐた。女は知つて居る人に逢ふことを非常に恐れてゐた。

他人のやうに──實際他人のやうにして、わざと知らん顏をして私達は腰をかけてゐた。電車は全速力て駛る……駛る……電線から火花を散して駛る……。その中で、明るい車室の中で、今少し前まで心と心とを合せた男女が、知らん顏をして互ひに向ひ合つて腰を掛けてゐるといふことは、私には實に何とも言はれない不思議な感を起させるに十分であつた。『俺の女だ！』かういふ男性の得意な矜持が私の體を動搖させた。

乘替の場所に來ると、私も女も一緒に下りた、女は向ふ側の電車に行つた。誰も見てるものがゐないやうな時には、女は傍に寄つて來て、ソッと握手をして行つたりした。女の方の電車の遲い時には、女の白い顏が此方の電車の中から見えてゐた。

『俺の女だ』

私はまた心に叫んだ。

月の明るい夜などもあつた。さういふ時には、私達は少し早く家を出て、田舍町をブラブラ歩いた。もう十三夜を過ぎた後なので、夜の空氣は寒く肌に泌みた。町でも大抵は戸をしめてゐた。コートに包れた女の影は濃く地上に落ちてゐた。

小さな祠見たやうなものがあつて、其處から太鼓の音が聞えて來た。私達はそれを目的に歩いて行つた。そこは子供達や若い衆などが集つてゐた。拙い繪を張つた燈籠などか一軒毎にかけてあつた。ドドンコ、ドドンコ――月は流るゝやうな光を四邊に漲らせた。

「もう歸りませう」

女はかう促した。

ある時は、またかういふことがあつた。電車に乘つて、筋違ひに腰をかけるとすぐ、紳士風の三十五六の男が不意に立つて此方に遣つて來た。

「何方へ？」

「まア――」私は女といふものの度胸のすぐれてゐるのを此時ほど感心したことはない。女は狼狽へもせず、顏の色をもかへず、全く自分一人であるやうな風をして、落附いた調子で、そのフロックコオトの紳士と話した。

「大層遲く！」

「え、ちよつと用事が御座いまして、……それに月が好いもんですから」かう言つて、「貴方は何方へ」

「川向へまゐりまして」
「何か演說へても……」
「相變らずごたごたしてゐます」
政治や教育の話を女は平氣でしてゐた。私は默つて隅の方に小さくなつてゐたが、何となくその紳士の顏が愚かに見られた。
その次の週間に逢ふと、『本當に困つた！　あの位困つたことはありませんよ。貴方は笑つてゐるんですもの』かう言つて、『でも、解なかつた。役者が上手ですからね』笑ひながら私の顏を見た。

もう冬が來てゐた。ある寒い朝、私は私をその二階の床の中に見出した。昨夜、十時過、女を停車場まで送つて、そして歸つて來て寢た。いつもの快よい疲勞を味ひながら、ぐつすり寢込んだ。それを私は思ひ出してゐた。女の肖像は私を見てゐた。
窓を明けると、外はよく晴れてゐた。霜が屋根に白い。――私は急いて空氣の沈滯した、女の匂ひの滿ち渡つた私の樂園から遁れ出た。私は新しい空氣を吸ひたいと思つた。
早い朝の町は靜かてあつた。黎明の光が微かに屋根を越して田圃の方からさして來てゐた。反古だの蜜柑い皮だの毛糸の屑だのの落ちた上に、霜が白く置いてゐた。
湯屋の細い烟突からは、黃い青い烟が薄く颺つてゐた。

汽車の踏切りの處に、白い旗が出てゐると思ふと、客車に荷車を連結した北國行の一番汽車が、凄しく地を撼かして通つて行つた。

私の心は不思議にもその朝の霜のやうに冴えてゐた。私はいろいろなことを考へながら歩いて行つた。『かうした朝は、自分の一生に取つて紀念とするに足りるものがあるんではないか。』かう思ふと、この町――今まで、一度か二度しか來なかつた町が、女の爲めにかういふ深い印象を殘すやうになつたといふことが不思議にも意味深くもあるやうに思はれ出した。

私は踏切を越えて向ふに行つた。そこには、町の外郭といふさうな場末の町があつて、八百屋の上さんが、赤い襷をかけてせつせと働いてゐた。朝早く、菜を荷車に載せて市場に運んで行く男などもあつた。

路傍には小さな綺麗な川が流れてゐた。岸には洗つた菜の莖だの葉だのが流れ寄つてゐた。

暫く經つた後には、私はとある高臺の寺の石階を登つてゐた。淡竹の藪には朝日が當つて、雀が寒さうにチユーチユー言つてゐた。下の菜畠の向うの家では、婆さんが手拭をかぶつて桔槔の水を汲んでゐた。

眼の前にはひろびろとして野が展けた。疎らな榛の林を隔てゝ、朝日が丸く赤く輾り出した。遠く製紙場の烟突の烟が見えた。

不思議な人間と不思議な天然とを考へながら私は歩いて行つた。自分の今まで遣つて來たことがすつ

かり眼の前に浮き出して來るやうに思はれる。かうした人間とかうして天然とか何の交渉もなしに、かうして存在して居るといふことが不思議である。昨夜のことを考へると、―― いや寧ろ私の樂園のことを考へると、戸外一歩を隔てゝかういふ天然があるといふことがいかにしても不思議である。‥‥しかし不思議で何でも仕方がない、何うにもならない。

私は此時不圖生存といふことを考へた。生存と快樂と‥‥生存と快樂と何故かう一致しないだらうか。生溫い、中ブラリンの快樂に妥協してゐられる人には、それは問題にはならないが、熱烈な不健全な快樂を受けなければ滿足が出來ない人には、快樂の爲めに生存が何故不可能になるだらうか。何故二つのものは一致するやうに作られてないだらうか。‥ 私は唯立つてゐた。唯じつとして寺の境内の垣の處に立つてゐた。本堂ではおつとめの朝の讀經が始つた。

冷たい空氣が私の熱い心に泌み透るやうに呼吸された。

ある夜、女は遲くまで來なかつた。

それは雨の盛に降り頻る夜であつた。私は其日は三時過ぎに來てゐた。私は横しぶきに降頻る雨の中を蝙蝠傘に凌いで、驅けるやうにして遣つて來た。外套を被てゐても、羽織の袖はしとゞに濡れた。それを店で見てゐた娘は、わざわざ二階に上つて來て、『羽織を乾かして上げませうか』と親切に言つて呉れた。

女が來ないので、いつもの料理を取つて貰つて、長火鉢の傍で、茶湯臺を出して、私は一人で食事をしてゐた。雨の夜の樂園、それも私には樂しかつた。停車場の灯が雨にチラチラしてゐるのを見てゐると、私は何だか遠い遠い旅にでも來てゐるやうな心持がして、思はず唄なぞが口から出た。――トタンの樋から落ちる雨水は、ザンザンと凄じい音を立てゝゐた。

十時頃になつても女は來なかつた。娘が上つて來て、『今日は入らしやらないでせうね、此雨では――』などと言つて、其處に坐つていろいろな話をし出した。

暫くしてから、

『戸を閉てましてよろしう御座いませうか』

かう母親は階下から聲をかけた。

今までにも來ないことはないではなかつた。電報を打つてよこしたこともあつた。豫め手紙でその都合を知らせて來ることなどもあつた。しかし斷りなしに來ないことはこれまでに一度もない。……私は寒いさびしい心持を抱いて、じつとして座つてゐた。飲んだ酒もすつかり冷めて了つた。

私と女との間に繋がれてゐる秘密の糸、それを私はまた手繰り始めた。それは細い細い丁度電球の中にある細い線のやうなものであつた。『だつて　私だツて』かう女がいつも言つた。でなければ、默つて私の顏を見てゐた。私にかうした樂園を容易にもう一つ他に想像することが出來た。女は何處かに、さうした樂園をつくつて、この雨の夜を樂しく送つてゐるかも知れなかつた。女の半生と女の肉體とは私

にそれを肯定させるに十分であつた。色の白い、綺麗な、年の若い、才のある男が、私の眼前を往來した。私に與へたやうな快樂を他の男に……。

……秘密の糸は震へた……

『或はもう自分に倦きて來たのかも知れない』こんな考が雨のザンザン降る音の中に無限に雜つて波を揚げてゐた。

『あの電車の中で見た紳士……いや、それではないだらうが、交際家のかの女にはあゝいふ男が澤山にゐるに相違ない……。これまでの話を女が決してして聞かせないのもその爲めだ。……女の本性を……さうだ、女の本性をすつかり看破してやらなければならない』

私は益々深い黑い淵に落ちて行つた。

……ふと、下で、『只今、只今、あけます』といふ聲が聞えた。私は耳を欹てた。しかし雨の烈しく降る音に遮られて、暫しは何も聞えなかつた。やがて『まアまア、濡れましたね、奧さん！』といふ母親の聲が聞えた。私は躍り上つた。

やがて、階梯を靜かに上つて來る女の足音が聞えた。私はそれを聞きながら、つとめて平氣を粧つてじつとして座つてゐた。襖がすうと明いて、女の白い顏が浮き出すやうに其處に現はれた。

『おゝ、寒い、すこし當らせて頂戴』

コートのまゝで、濡れたまゝで、火鉢の處に來て、手と顏を其處に出した。暖かい、むつとした、蒸す

やらな氣が、樂園のヒロインの來ると共に一間に滿ち渡つた。

『濡れたね』

『だッてひどい雨ですもの』かう言つて、コオトをぬくと、下から派手な長襦袢がチラチラと見えた。

『寢衣があつたわねえ‥‥濡れたから、着改へるわ。貴方取つて頂戴！』

その命令を男は拒む能力がなかつた。男は後の唐紙を明けて、押入の中から大島の着古した寢衣を出して女に渡した。

長押にかけた濡れた着物の紅い裏地が、電燈の灯に緋か何ぞのやうに見えてゐた。女は長襦袢の上に寢衣を着て、黑繻子の帶をして、火鉢の傍に坐つた。

『來ないかと思つただせう‥‥今日は泊つて行くのよ』

私の耳にはその『泊つて行くのよ』の一語は際立つて强く響いた。私は私の體の動搖するのを覺えた。

『好いのかえ？』

『だつて、歸れやしないわ。此雨ぢや――』

その言葉の中には、『もう構はないわ、何うなつても』といふやうを調子があつた。一間は俄かに暖かな春のやうな氣分で滿されて來た。女は藏つて置いたウヰスキーの罎を取り出した。

ウヰスキーの罎と、ペーパーと、女の長襦袢と、雨と、――明るい電燈と‥。

私達は話した。

『今日は何うしてもお聞かしてお呉れ』

『聞かすやうなことを持つてやしませんよ。』

『隱したッて駄目だ』

『だつて、ないんですもの』女は體を長く出して、卷烟草を吸つた。

『あの女の肖像の持主は？』

『……』

『あなたの家に出入りするあの若い役者のやうな男は？』

『……』

『あの髯の生えた男は？』

『……』

女は何を言つても默つて笑つてゐた。

私も終には疲れて默つて了つた。『そんなこと、何うだッて好いぢやありませんか。唯、かうしてゐさへすりや好いぢやありませんか』かうある時女が言つたことを私は思ひ出してゐた。『しかし、それは出來ることだらうか。唯かうしてそれで滿足してゐられるだらうか。力と力とかうまく平均して、即く時にも過不及なく、離れる時にも過不及なく、すつと靜かに寄つて來て、そしてすつと靜かに離れて行く

ことが出來るものだらうか……？……？出來るものだらう、出來なくつてはならないものだらう。いろいろな羈絆(きづな)や、いろいろな情實や、いろいろな過去の追憶や、さういふものを離れて了へば、唯、それだけで滿足することが出來るものだらう。』――此時私は女の強い力を總身に感じた。同時に私の心は重苦しい壓迫を受けた。

女は立つて瓦斯の線を引いた。と、室の中は柔かい靜かな光線になつて行つた。て、その靜かな光線の中で、女は長い間厚い西洋の小說本を讀んでゐた。それは面白い面白い一度讀み始めては到底最後の頁まで讀まなければ置けないといふやうな本だと女は話した。

私は眠つたり覺めたりしてゐた。夜中にも、女は依然として――愈々深くその興味に捉へられたといふやうにして、その本に讀耽つてゐた。私は寢恍けた眼で、それを上から覗いて見た。『また讀んでゐるのかえ？』かう言つてまた私は眠つた。

私は其夜は、尠くとも四度までは、さうやつて女の讀んでゐる本を上からのぞいた。女の眼はいつもパッチリと大きく明いてゐた。何かから他界の力にでも引摺られるやうな興昂した顏色をしてゐた。『あゝ――』などと長太息(ためいき)をついてゐた。

夜明近くなつてから、女は寢た。其時、女は立つてもう一度瓦斯の線を引いたのを私は知つてゐた。て、私が翌朝眼を覺した時には、女はぐつすり寢てゐた。繪に書いた女のやうな寢顏を、此方に見せて、何も知らずに熟睡してゐた。雨戶の隙間からは、朝の光がさして、通を行く人の足音が高く聞えて

ゐた。

昨夜、讀耽つた厚い本は、開いたまゝ、女の枕元に投り出してあつた。私はそッと起きて、雨戸を一枚明けて、新しい空氣を吸ひに下に下りて行つた。雨は拭つたやうに晴れた美しい朝だッた。

『私の樂園に比べたなら、まア何といふさびしい心細い世界だらう。塵埃、泥濘の中を人は蒼い顔をして歩いてゐる。車を曳くもの、朝早くから工場に通つて煤烟の中に一日を送るもの、出勤時間に後れてはと急いて停留場へかけつけるもの、人間は灰色の世界に生きて、灰色の空氣を吸つて、痩せて、汚ない衣を着て、そして働いて生きてゐる。何といふ慘な世界だらう。‥‥しかし私の樂園には、さうした空氣は入つて來ない。其處には、風が吹き、雨が降り、時には黒い雲が襲ひかゝることがあつても、それは灰色した世界の雨や風や黒い雲ではない。皆な強烈な色を持つたものばかりだ‥‥。苦悶、懊惱、さういふものでも、矢張その灰色の世界のものとは違つてゐる。紅い火の舌のやうな懊惱だ。――』

ある日の私の日記には、かういふ文句が書かれてあつた。それは三月十五日のところである。『赤い花、赤い血、赤い心』などいふ字が一面に書いてあつた。

『私の二階！　私の樂園！　それももう‥‥』ある日のところには唯かう書いてあつた。

秘密の細い糸が切れたと思つては、また續いた。

週間ことに、女に對する心持が絶えず變つてゐた。女に對する噂！ それが何うかするに、新聞などに出ることがある。虚僞であらうが何であらうが、それが私の心を種々に動がした。

私は私の心の細かい研究者であつた。一月以前と十日以前とそれと今とをよく較べて見た。私の心は前へ進んだり後へ退いたりしてゐた。それでも、私の心はいつの間にか女に方に偏つて行つてゐた。氣が附いて見ると、女の態度が此頃冷淡になつて行つたやうに思はれた。寧ろさういふ風に冷淡に見え出して來たことが私には苦痛であつた。時には女の方から偏つて來て、そして自分が離れて行つたりした。『好う御座んす。貴方ばかりが被要求者じやない。好う御座んす』かういふ表情を顏に表して女が歸つて行く頃は、また心丈夫なところがあつたが、今では、もうさうした表情を示すやうなこともなくなつて了つた。白い、冷めたい、大理石のやうな顏だ。『私について來られるから來て御覧なさい！ 貴方にはとてもそれは出來ない』此頃では、その白い顏は確かにさう言つてゐた。

不思議にも私の心はその冷めたい心に向つて震へた。それは冷めたいが爲めに震へたといふやうな震へ方であつた。女のかげにゐる男達に對して私の心が熱したのだ。

疲れた心だ。——氣が附くと、私はその電車に乘つてゐる。

電車は全速力で駛つてゐる。

花はもう散つて了つた。緑葉が到る處の林を包んで、麥の緑は長くなつてゐた。折れ曲つた細い川が銀線のやうに光つて見える。

郊外の家の縁側には、夜着だの着物だのが干してある。

日がキラキラする。それについて心がキラキラする。――二階の卓の上には、此前の週間に、ダリアを持つて行つて置いたが、娘は水をやつて呉れたらうか。主人のない室の中に暗く萎れ果てゝはゐないだらうか。『だつて、私、知らなかつたんですもの』かう言つて娘の笑つてゐる顔が見える。娘が若い士官を相手に面白さうに笑つてゐる聲が聞える。

……氣が附くと、娘と自分との間に段々醸されて來た空氣を私は頭に浮べてゐた。同じ顔を毎日十年見てゐても何の反應を起さないやうなのもあれば、見てゐる中に段々一種の氣分を醸して行くやうなのもある。そしてある機會が來て、その醸された氣分にぱつと火が點く。

私の前に丸髷の女がゐる。それが隣の男と話してゐる。

『さやうで御座います、……もうすぐ暑くなります』

『御宅では變りはありませんか。』

『難有う御座います。お陰様で……』

丸髷の女の顔に笑を帶びた一種の表情がある。男のあたらしい夏帽には、涼しい風が絶えず吹いて來る。……

『だッて、何うしたッて、貴方の言ふやうには出來ないんですもの』女がある時から言つたことがあつた。て、『ぢや、いつまでもかうしてゐるんですか』私はすぐ反問しかけて止した。其處が私達の越えることの出來ない最後の一階段だ。

電車は快よく駛つた。

毛氈を敷いたやうな綠の糾草地が眼の前を掠めて行つた。それは林の陰になつてゐた。日影が紅葉を篩してチラチラとその滑かな芝生の上に落ちてゐた。其處に若い男女がゐた。女の白いリボン、男の麥稈帽――電車はその傍を掠めて滑かに通つて行つた。

女の來なかつたことが三週間續いた。女が旅にも何處にも行つてゐないことは、新聞て知れた。女の家には交際社會の男だの女だのが行つたり來たりしてゐる。その交際室――大きな鏡のある、立派の毛氈を敷詰めた、蘇鐵や松の硝子窓越しに見えるその室、それを私は暗い私の樂園て想像してゐた。

大きな鏡に映つた女の淫蕩の顏と體とを私は想像した。その鏡はその時屹度女と並んだ男の顏を映したに相違なかつた。ハイカラに分けた髮、短かく刈つた口髭、女は派手な着物を着て、その男と手を組合せて、長い廊下をその大きな鏡の方へと歩いて行つた。鏡に映つた影は、鏡に近つくにつれて、段々大きくなつて行つた。

女の顏はもう少し前に飮んだリキウ酒に醉つて、派手な美しい薄紅色に染つてゐた。少しく醉つた時にのみ見ることの出來る柔かな自由な線は、女を五つも六つも年より若く見せるばかりではなかつた。其處からはあらゆる淫らな氣分が漲るやうに出て來た。——私はその氣分の快樂に醉ふために、寐る前にいつも女に酒を勸めたことを思ひ出した。

私は女から得たあらゆる快樂を他の男に移して想像した。幸福な男に。女のあの熱い心を、何處かで、何處かの樂園で得てゐる男に——。

私の受けた快樂は、皆な私に謀叛を企てた。それが一つ一つ嫉妬に燃えた私の心に反響して行つた。最初の快樂、それは何んなだつたらう。背の高い白い姿が影のやうに、靜かな、薄暗い、室の空氣の中に入つて來た時は、それは何んなだつたらう。頭はガンとして、心臟の鼓動のみが高く聞えたのを私は覺えてゐる。

初めて女がその意を示した時には、

『本當?』

かう言つて、顏に生々した色を呈して、そして傍に寄つて來た。私は喜悅と感謝と成功とで胸が一杯になつて、何ッて言つて好いかわからなかつた。私は唯堅く女の手を握つた。

全速力である世界からある世界へと飛んで入つて行つたその大きな快樂——それが今は皆な私の胸にはね反つて戻つて來た。

私は女の熱情の一回は一回毎に冷めてつめたくなつて行くのを知つてゐた。ある時こんな會話をした。

『何うしてからうでせう?』

『何が――?』

『私よ。ぢき氣が沈んで了つて仕方がないんですもの』

『面白いことがないんでせう』

『それも、さうかも知れない。私の性分でせうけど、私はぢき倦きるのね。何ても初めは面白いけど、ぢき灰色になつて了ふのね』

『始終、面白くなくつてはいけないんでせう? 平凡な境には生きてゐられないッていふ風なんでせう?』

『さうねえ』

『それに、物を知つて了ふと面白くなくなるッていふ處があるね。』

『さうねえ』

女が詰らなさうな顔をしてゐる時ほど氣分のジメジメする時はなかつた。何うかすると、卓に凭りかゝつて、いかにも詰らなさうに、女は物を考へてゐた。

『餘りつまらないから、何處か變つたところに私達の二階を移しませうか』

ある時、女はかう私に言つた。
「だッて、こゝて好いぢやないか。こゝより好い處などがちよつと探したッてありやしないと思ふがね」
「さうてせうか」
私の顏を見て、「だッて、この室にも厭きたやうな氣がするもの。停車場から下りて來ると、屹度あの色の白い車掌がゐて、顏の大きい車屋がゐて、いつも莞爾と愛嬌のある母さんと娘とがゐて、そして、この暗い二階に貴方が蒼い顏をして待つてるんぢやないの?」
「蒼い顏かえ? 僕は――」
「蒼い、元氣のない顏をしてることが多いよ、此頃は――。何うして、あの初めのやうな氣分になれないんてせう。私もさうだッたけれど、貴方も元氣てしたね。本當に面白かつたんてすもの」
「それはさうだね、あの時分の方が元氣て面白かつた」
「さうてせう、だから、私達の二階を變へる方が好いと思ふんだけど……」
「さうしたら、面白くなるだらうか」
私はかう言つて女の顏を見た。
「それは分らないけれど、もつと明るい快活な處に行つたら、また屹度面白くなりますよ。」
「さうかしら――本當にさうなら、さうしても好い」かう言つた私は、娘の無邪氣な顏を思ひ出してゐた。

しかしその話はそれ切りであつた。女は强いてさうしやうとも言はなかつた。忘れたやうになつてゐた。

三度目の日には、『ケウユカレヌ』といふ電報を打つてよこした。娘がそれを持つて來たが、覗き込んで、『何うなすつたんでせうね』と言つた。陰欝な雨が毎日毎日續いて降つてゐるといふやうな時節であつた。窓を明けると、人が高い足駄を穿いて、番傘などをさして通を歩いてゐた。

娘と私とはその時何か話した。

『軍人なんかきらひ！』

かう言つて笑つた娘の顏を、私は後まで記憶してゐた。

私は雨を衝いて歸る氣にもなれなかつた。て、私は一夜を其處に送ることにした。外では雨が容易に止まないと見えて、雨だれの樋をつたふ音が絕えず微かに聞えて來た。

電燈がほつちり點いて、それが西洋の草花の鉢植の置いてある空しい卓の上をさびしく照した。前の鏡には私のさびしさうに座つてゐる姿が電燈の白い笠と一緒になつて映つてゐた。私は自分で自分を憐むやうな心持て、凝とその鏡の中の私の姿を見てゐた。

簞笥の上には、女の鏡臺が載つてゐて、そこに白粉の小さな罎が並んで置いてあつた。私は靜かに思ひ廻してゐた。不思議にも、其夜は私の心は落ち附いてゐた。いつものやうな懊惱からは全く自由にされてゐた。

私は私達のこの二階に就いて、いろいろ思ひめぐらしてゐた。熱い人間の心が冷めたい自然に歸つて行く狀態がことに歷々と思ひ浮べられた。私達に初めて發見されたこの二階は、冷たい靜かな空氣から何んなに俄かに暖かい賑かな空氣に變つて行つたらう？ 貧しい單調な灰色の壁は、忽ちにして、いろいろな色彩に富んだ額やら寫眞やらで埋められ、佗しい暗い天井は明るい電燈や瓦斯で晝のやうに照され、古びた長押は、派手な長襦袢や燃え立つやうな紅い裏地などで絹のやうに彩られた。卓の上には、何んな時でも草花を絶やしたことはなかつた。そして私達はその明るい灯の中で、小さい杯にいろいろな色をした酒をついで飮んだ。

ほんのりと酒に醉つた女の薄紅色の顏は其處にも此處にも見えた。

此の一間では、女は何物をも隱さなかつた。總てを男に示した。私達は出來るだけの快樂を其處で耽じた。何たる飽滿だつたらう？ 何たる贅澤だつたらう？ 何たる豐富な色彩だつたらう？――然し、今はもう過去だ。私はそれを追憶する身になつてゐるのだ。

女の言葉、女の表情、それが總て靜かにしめやかに降る雨の音の中に細かに融けられてゐた。

熱い心が段々に冷めて行く狀態は、それは丁度妬みの神があつて微かに竊かに隙間を覗つてゐるやうなものであつた。その神は、二人が熱心に語り合つてゐる間に、いつともなくその力を働かして行つた。

私はその力のひそかに通つて行つた跡を眺めた。

塵埃に埋れて花瓣の白くなつてゐる草花の鉢を私は見てゐた。『ケウユカレヌ』といふ電報が卓の下に落ちて、はつきりと灯に照されてゐた。

朝、私は裏の窓を明けた。畑が細い雨の中に這ふやうに低く靡いてゐた。向ふには、物置があつて、薪だの、炭俵だのゝ置かれてあるのが半分見えてゐた。

井戸側には釣瓶の竿が見えてゐた。

ふと、娘の姿が其處に現はれた。白い手拭を姉さんかぶりにして、赤い襷を十文字にかけてゐた。物置の中にその姿を半分入れて、炭か何か出してゐたが、やがてそれがすむと、そこから雨を衝いて家に驅けて入つた。

暫くしてその姿はまた井戸端に現はれた。釣瓶の竹を持ち上げる白い腕が、梭のやうに行つたり來たりした。

私は聲をかけて見やうかと思つた。しかし私はこの朝の忘れられない感じを十分に味ひたいと思つて止した。『もう、あの娘も僕のものだ!』かう思つて私は得意な微笑を洩した。

娘は釣瓶から水を手桶に明けた。二つの手桶はやがて一杯になつた。

『何んなことを考へてゐるだらう! 昨夜のことを考へてゐるだらうか』かう思つた時、娘は何氣なしに此方を見上げた。

「まア――」

娘はかう言つて笑つた。

娘は暫らく立つてゐたが、内から母親に呼ばれて、そこそこに手桶を下げて入つて行つた。私はもう一度娘の姿の其處に現れるのを期待した。長い間、窓の處に立つてゐた。雨は細く降つてゐた。

娘の姿は容易に出て來なかつた。

「處女ではなかつた！」かう思つて私は微笑した。思ひもかけないことが突然地の中から湧いて出たやうな昨夜の事件を私は繰返して考へずには居られなかつた。「あなた、お邪魔してゝ好いの？」かういふ娘の聲がした。微かな小さな聲だッた。「ようござんすとも」私はかう答へた。娘はこれまでにもさういふ風にしてよく遊びに來た。母親もそれを許してゐた。

「其時、何を話したらう？」私はかう思つて昨夜の光景を眼の前に浮べて見た。さうだ、女優の話だッた。女優になりたい、何うかして女優になりたい、かう娘は言つてゐた。

「女優になつて、何うするんだえ？」

私が訊くと、

「だッて、私など、こんなにしてゐては、いつまで待つたつて、うだつがあがりませんもの。女優になりたいわ……女優になりたいわ」

「それより士官の細君の方が好いよ」

『いやアよ、軍人なんか』甘へるやうに言つて、『この二階に、前に若い士官の夫婦がゐましたけれど、いやアよ、あんな生活　慘めなもんよ、軍人の生活なんて』

「女優だッて、中に入つて見れや、そんなに面白いもんぢやないよ。」

「面白くなくつても好いの、女優なら。女優にして下さいよ」

「そんなになりたいかな」

「なりたいわ。何でも勝手なことが出來ますもの」

こんなことを言つてゐた。私が女優を知つてゐるので、それを賴みに來たのであつた。『それから何を話した？』私はかう自分で自分に訊いて見た。私はまた微笑した。　時私はふと私と娘との間に展開されつゝあつた心に誘はれて行つた。娘も笑つて此方を見てゐた。私のついてやつたウイスキーの小さな盃を、その時娘は嘗めるやうにして飮んでゐた。

娘は椅子に腰をかけてゐた。

女のいつも腰をかける椅子だ。私は……私は……私は……。

今朝見ると、椅子が倒れかゝつてゐた。

「處女ぢやない、處女ぢやない」私はもう一度言つて微笑した。

金の指環──波に千鳥の彫刻のある金の指環を、それから三日目に娘は左の手の藥指にはめてゐた。

綠の寶石の入つた指環をもはめた。

その次の週間に、女は遣つて來た。

女は細かな刺繡をした夏襟をして、透き通るやうな着物を着てゐた。「用があつたもんだから」などと

それても申譯らしい口の利き方をした。

「何うしてたの、矢張、來てたの？」

「あゝ來てた」

男は得意さうな顏をして言つた。

私は娘が店の一隅に小さくなつてゐるのを見た。

其夜は女は早く歸つて行つた。

呼んでも娘は容易に二階に上つて來なかつた。それをつれて來るのは一方ならぬ骨折てあつた。

「私、もう、怖い！」

「何が――」

「あの人が」

「そんなことがあるもんか。怖くなんかありやしないよ、平氣でゐる方が好いよ」

「でも、あの人怖いわ」私の顏を見て、「貴方も怖い……」

『何うして？』
『だッて私、イヤな氣がした。』
私は娘の心を讀むことが出來た。
『好いよ、そんなに心配しないても……もう段々來なくなるから……。それに、知らん顏をしてゐれば好いんだよ』
『だッて……』
娘はすぐ下りて行かうとした。

種々な物が娘には出來た。蝙蝠傘だの、エールだの、純金の帶留めだの、新しい一重の夏のコートだの――。此頃娘が女優か何ぞのやうな綺麗な扮裝をして、町の方へ出て行くのを、近所の上さん達は何の彼のと言つて噂をした。

娘の買つて來た草花の鉢が二階の卓の上に置かれてあつた。それを女が見てゐたりした。

『何うしたんだらう。あの娘は？』
かう言つて、女は娘の後姿を見送りながら、『ちよと來ない内に、あゝも變るものかねえ。本當に、

若い娘は一日と言はれないねえ……』

から言つて、不思議さうに、女から姿をかくさう――隱さうとしてゐる娘の方を見てゐた。

「それに、見違へるやうに綺麗になつた」こんなことも言つてゐた。

私の顏をじつと女が見てゐたりした。

「何か出來たんぢやないか？」

「さうだらう乾度、……中佐とか大佐とか言つたよ」

「さう？道理で……」

から女が言つた。『私は微笑した。

私の二階の空氣は不思議な色彩を著けて來た。今まで單純な心持と單純な調子と單純な色彩とて成立つてゐた二階の空氣は、此頃影だの日向だのを帶びて來た。光線が絕えず動搖した。

堪へ難い懊惱を女に渡して了つたやうな氣分で私はゐた。女が三週間來まいが、一ヶ月來まいが、恨みがましい言葉はついぞ私の口から出なかつた。女が望んでゐる熱い心持には何うしてもなれなかつた。手答へがないので、女が手持無沙汰でゐる樣子が私にはよく解つた。

私は女を送つていつものやうに停車場まで行つた。

「左樣なら」元氣な聲て私は別れを告げた。

今まで私はよく男の話をした。それを近頃はおくびにも出さなくなつた。女が何んな男と一緒に步かうが、何んな男と一緒に顏を鏡に映さうが、それを氣に留めやうとはしなくなつた。

ある日、こんな話をした。

「貴方も此頃變てすね」

「何うして？」

「丸て前のやうぢやない……」

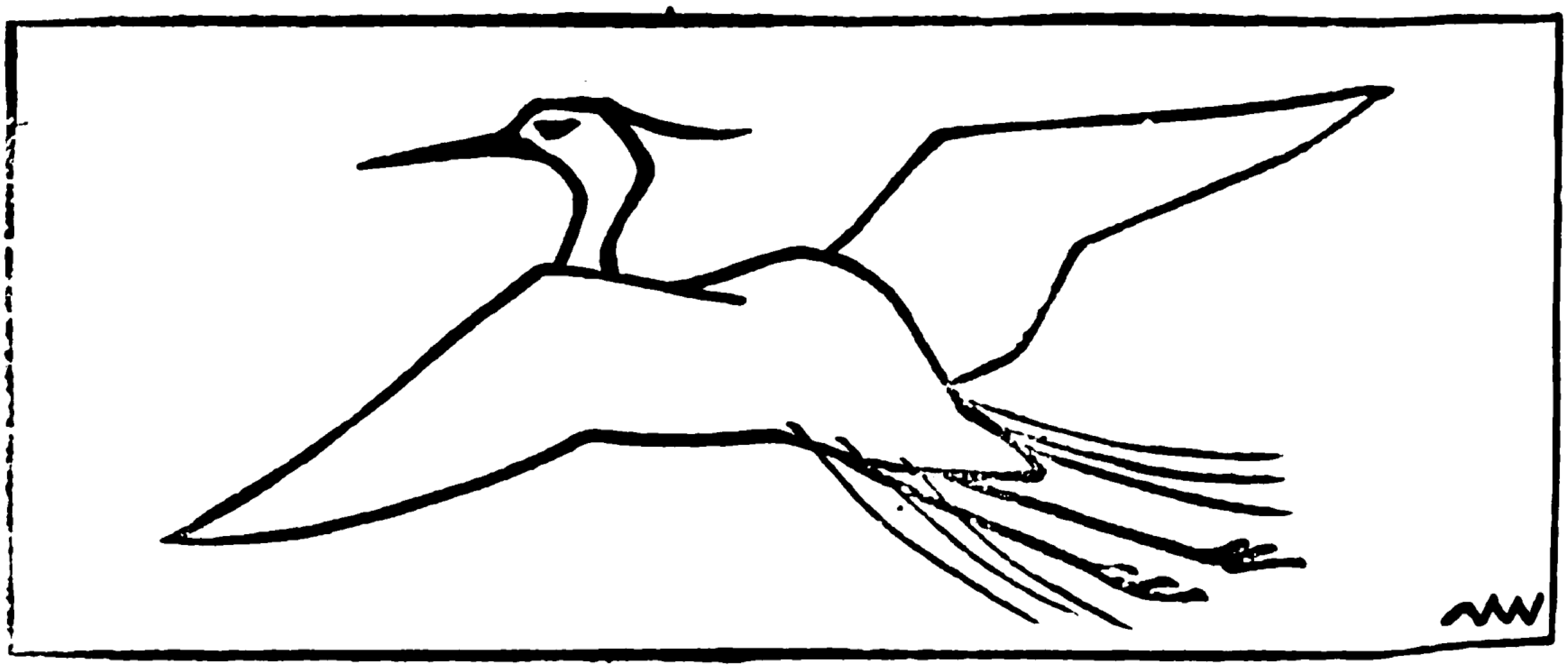
「何う？」

「元氣が好いんてすもの」考へて、「もう、私なぞ何うても好いのね」

「そんなことはないよ」

「さうかしら」

私は笑つてゐた。女はその時椅子に腰をかけてゐた。その朝、横に倒れてゐた同じ椅子に……。



佐橋甚五郎

鷗外

豊太閤が朝鮮を攻めてから、朝鮮と日本との間には往來が全く絶えてゐたのに、宗對馬守義智が徳川家の旨を承けて肝煎をして、慶長九年の春に、松雲孫、文彧、金孝舜と云ふ三人の僧が朝鮮から様子を見に來た。徳川家康は三人を紫野の大徳寺に泊らせて置いて、翌年の春秀忠と一しよに上洛した時に目見えをさせた。

中一年置いて慶長十二年四月に、朝鮮から始めての使が來た。もう家康は駿府に隱居して居たので、京都に着いた使は、最初に江戸へ往けと云ふ指圖を受けた。使は閏四月二十四日に江戸の本誓寺に着いた。五月六日に將軍に謁見した。十四日に江戸を立つて、十九日に駿府の

清見寺に着いた。家康は翌二十日の午の刻に使を府中の城に召した。使は一應老中本多上野介正純の邸に入つて、そこで衣服を改めて登城することになつた。

此度の使は通政大夫呂祐吉、通訓大夫慶暹、同丁好寛の三人である。本國から乗物を三つ弔らせて來た。呂祐吉の乗物には造花を持たせた人形が座の右に据ゑてあつた。捧げて來た朝鮮王李昖の國書は江戸へ差し出した。次は上々官金僉知、朴僉知、喬僉知の三人で、これは長崎で造らせた白木の乗物に乗つてゐた。次は上官二十六人、中官八十四人、下官百五十四人、總人數二百六十九人であつた。道中の驛々では鞍置馬百五十疋、小荷駄馬二百餘疋、人足三百餘人を續ぎ立てた。

駿府の城ではお目見えをする前に、先づ献上物が廣縁に並べられた。人參六十斤、白苧布三十疋、蜜百斤、蜜蠟百斤の四色である。江戸の將軍家への進物十一色に比べると、遙かに略儀になつてゐる。固より江戸と駿府とに分けて進上すると云ふ初からの爲組ではなかつたので、急に拔差をして調へたものであらう。江戸で出した國書の別幅に十一色の目錄があつたが、本書とは墨色が相違してゐたさうである。

此日に家康は翠色の裝束をして、上壇に疊を二帖敷かせた上に、暈繝の錦の茵を重ねて着座した。使は下段に進んで、二度半の拜をして、右から左へ三人並んだ。上々官金僉知、朴僉知、喬僉知の三人はいづれも廣縁に並んで拜をした。ここでは別に書類を捧呈することなどは無い。茶も酒も出されない。暫くして上の使三人が復た二度半の拜をすると、上々官三人も縁で復た拜をした。上々官の拜が濟んで

から、上の使三人は上々官を随へて退出した。

家康は六人の朝鮮人の後影を見送つて、すぐに左右を顧みて云つた。

「あの緣にゐた三人目の男を見知つたものは無いか。」

側には本多正純を始として、十餘人の近臣がゐた。案内して來た宗もまだ殘つてゐた。併し意味ありげな大御所の詞を聞いて、皆暫く詞を出さずにゐた。稍あつて宗が危ぶみながら口を開いた。

「三人目は喬僉知と申しまするもので。」

家康は宗を冷かに一目見た切りで、目を轉じて一座を見渡した。

「誰も覺えてはをらぬか。わしは六十六になるが、まだめつたに目くらがしは食はぬ。あれは天正十一年に濱松を逐電した時二十三歲であつたから、今年は四十七になつてをる。太い奴、好うも朝鮮人になりすましをつた。あれは佐橋甚五郎ぢやぞ。」

一座は互に目を合はせたが、今度は暫くの間誰一人詞を出すものがなかつた。本多は何か問ひたげに大御所の氣色を伺つてゐた。

家康は本多を顧みて、「もう好い、振舞の事を賴むぞ」と云つた。これは家康がこの府中の城に住むことに極めて沙汰をしたのが今年の正月二十五日で、城はまだ普請中であるので、朝鮮の使の饗應を本多が邸でするやうに言ひ附けて置いたからである。

「一應取り糺して見ることにいたしませうか」と、本多は矢張氣色を伺ひながら云つた。

「いや。それは知らぬと云ふぢやらう。上役のものは全く知らぬかも知れぬ。兎に角あの者共は早くこゝを立たせるが好い。土地のものと文通なとを致させぬやうにせい。」

「はっ」と云つて、本多は忙がしげに退出した。

饗應の用意は兼て調へてあつた。使は本多の邸へ引き取つて常の衣服に着換へた上て、振舞を受けることになつてゐたのてある。城内から歸つた本多は、丁度着換が濟んて休息してゐる呂祐吉に、宗を以てそれとなく問はせた。けふお目見えをした者の中に、大御所のお見知になつてゐる人はなかつたかと問はせたのてある。通事の取り次いだ返答は、一向に存ぜぬと云ふことてあつた。しかもさう云つた呂祐吉の顔は、いかにも思ひ掛けぬ事を問はれたらしく、どうも物を包み隠してゐるものとは見えなかつた。

饗應に相伴などはなかつた。膳部を引く頃に、大澤侍從、永井右近進、城織部の三人が、大御所のお使として出向いて來て、上の三人に具足三領、太刀三振、白銀三百枚、次の三人金僉知等に刀三腰、白銀百五十枚、上官二十六人に白銀二百枚、中官以下に鳥目五百貫を引物として贈つた。

本多の指圖て、使の一行は其日の内に立つて、藤枝まて上つた。京都紫野に着いたのが五月二十九日、大阪へ出たのが六月八日て、大阪て舟に乗り込んだのが六月十一日てある。朝鮮征伐の時の俘虜の男女千三百四十餘人も、江戸からの沙汰て、一しよに舟に載せて還された。

濱松の城が出來て、當時三河守と名告つた家康はそれに這入つて、嫡子信康を自分のこれまでゐた岡崎の城に住ませた。そこで信康は岡崎二郎三郎と名告ることになつた。この岡崎殿が十八歳ばかりの時、主人より年の二つ程若い小姓に、佐橋甚五郎と云ふものがあつた。口に出して言ひ附けられぬうちに、何の用事でも果すやうな、敏捷な若者で、武藝は同じ年頃の同輩に、傍へ寄り附く者も無い程であつた。それに遊藝が巧者で、殊に笛を上手に吹いた。

或る時信康は物詣に往つた歸りに、城下のはずれを通つた。丁度春の初で、水のぬるみ初めた頃である。とある廣い沼の遙か向うに鷺が一羽おりてゐた。銀色に光る水が一筋うねつてゐる側の黒ずんだ土の上に、鷺は綿を一撮み投げたやうに見えてゐる。ふと小姓の一人が、あれが撃てるだらうかと云ひ出したが、衆議は所詮撃てぬと云ふことに極まつた。甚五郎は最初默つて聞いてゐたが、皆が撃てぬと云ひ切つた跡で、獨語のやうに、「なに、撃てぬにも限らぬ」とつぶやいた。それを蜂谷と云ふ小姓が聞き咎めて、「おぬし一人がさう思ふなら、撃つて見るが好い」と云つた。「隨分撃つて見ても好いが、何か賭けるか」と甚五郎が云ふと、蜂谷が「今ここに持つてゐる物をなんでも賭けう」と云つた。「好し、そんなら撃つて見る」と云つて、甚五郎は信康の前に出て許を請うた。信康は興ある事と思つて、足輕に持たせてゐた鐵砲を取り寄せて甚五郎に渡した。

「中るも中らぬも運ぢや。はづれたら笑ふまいぞ。」甚五郎はかう云つて置いて、少しもためらはずに撃ち放した。上下擧つて息を屏めて見てゐた鷺は、羽を擴げて飛び立ちさうに見えたが、其儘黒ずんだ土

の上に、綿一撮み程の白い形をして殘つた。信康を始として、一同覺えず聲を揚げて褒めた。田舟を借りて鷹を取りに行く足輕を跡に殘して、一同は館へ歸つた。

翌日の朝思ひ掛けぬ出來事が城内の人々を驚かした。それは小姓蜂谷が、體中に疵もないのに死んでゐて、甚五郎は行方が知れなくなつたのである。小姓一人は鷹を擊つた跡て、お供をして歸る時、甚五郎が蜂谷に、「約束の事は跡て談合するぞ」と云ふのを聞いた。死んだ蜂谷の身のまはりを調べた役人は、兼て見知つてゐる蜂谷の金熨斗附の大小の代りに、甚五郎の物らしい大小の置いてあるのに氣が附いた。その外にはこの奇怪な出來事を判斷する種になりさうな事は格別無い。只小姓達の云ふのを聞けば、蜂谷は今度紛失した大小を平生由緒のある品だと云つて、大切にしてゐたさうである。又其大小を甚五郎が不斷褒めてゐたさうである。

甚五郎の行方は久しく知れずにゐて、とう／＼蜂谷の一週忌も過ぎた。或る日甚五郎の從兄佐橋源太夫が濱松の館に出頭して歎願した。それは遠くもない田舍に、甚五郎が隱れてゐるのが知れたので助命を願ひに出たのである。源太夫はかう云ふ話をした。甚五郎は鷹を擊つとき、蜂谷と賭をした。蜂谷は身に着けてゐる物を何なりとも賭けようと云つた。甚五郎は運好く鷹を擊つたので、不斷望を掛けてゐた蜂谷の大小を貰はうと云つた。それも只貰ふのでは無い。代りに自分の大小を遣らうと云ふのてある。併し蜂谷は、この金熨斗附の大小は蜂谷家て由緒のある品だから遣らぬと云つた。甚五郎は聽かなんだ。「武士は誓言をしたからは、一命をも棄てる。よしや由緒があらうとも、おぬしの身に着けてゐる

物の中で、わしが望むのは大小ばかりぢや。是非くれい」と云つた。「いや、さうはならぬ。命ならいかにも棄てう。家の重寶は命にも換へられぬ」と蜂谷は云つた。「誓言を反古にする犬侍奴」と甚五郎が罵ると、蜂谷は怒つて刀を拔かうとした。甚五郎は當身を食せた。それ切り蜂谷は息を吹き返さなかつた。平生何事か言ひ出すと跡へ引かぬ甚五郎は、とう〳〵蜂谷の大小を取つて、自分の大小を代りに殘して立ち退いたと云ふのである。源太夫は家康に此話をして、何を言ふにも年若の甚五郎であるから、上の思召で助命して戴ければ好し、若し慊はぬ事なら、人手に掛けず打ち果たしてお詫をしたいと云つた。

家康はこれを聞いて、暫く考へて云つた。「そちが話を聞けば、甚五郎の申分や所行も一應道理らしく聞えるが、所詮は間違うてをるぞよ。併しそちも云ふ通り、弱年の者の事ぢやから、何か一廉の奉公をいたしたら、それをしほに助命いたして遣はさう。」

「はつ」と云つて源太夫は姑く疊に顏を押し當ててゐた。稍あつて涙ぐんだ目を擧げて家康を見て、「甚五郎奴にいたさせまする御奉公は」と問うた。

「甚五郎は怜悧な若者で、武藝にも長けてゐるさうな。手に合ふなら、甘利を討たせい。」から言ひ放つた儘、家康は座を起つた。

望月の夜である。甲斐の武田勝賴が甘利四郎三郎を城番に籠めた遠江國榛原郡小山の城で、月見の宴が催されてゐる。大兵肥滿の甘利は大盃を續けざまに干して、若侍共にさま〳〵の藝をさせてゐる。

「三河の水の勢も
小山が堰けばつひ折れる。
凄まじいのは音ばかり。」

こんな歌を歌つて一座はとよめく。そのうち夜が更けたので、甘利は大勢に暇を遣つて、跡には新參の若衆一人を留めて置いた。

「あゝ。騷がしい奴等であつたぞ。月の面白さはこれからぢや。又笛でも吹いて聞せい。」から云つて、甘利は若衆の膝を枕にして横になつた。

若衆は笛を吹く。いつも不意に所望せられるので、身を放さずに持つてゐる笛である。夜は次第に更けて行く。燃え下がつた蠟燭の長く延びた心が、上の端は白くなり、その下は朱色になつて、氷柱のやうに垂れた蠟が下には堆く盛り上がつてゐる。澄み切つた月が、暗く濁つた燭の火に打ち勝つて、座敷は一面に靑み掛かつた光を浴びてゐる。どこか近くて鳴く蟋蟀の聲が、笛の音に交つて聞える。甘利は瞼が重くなつた。

忽ち笛の音がと切れた。「申し。お寒うはございませぬか。」笛を置いた若衆の左の手が、仰向になつてゐる甘利の左の胸を輕く押へた。丁度淺葱色の袷に紋の染め拔いてある邊である。

甘利は夢現の境に、寛いだ襟を直してくれるのだなと思つた。それと同時に氷のやうに冷たい物が、たつた今平手が障つたと思ふ處から、胸の底深く染み込んだ。何とも知れぬ温い物が逆に胸から咽へ升

つた。甘利は氣が遠くなつた。

三河勢の手に餘つた甘利を容易く討ち果して、髻をしるしに切り取つた甚五郎は、鼯鼠のやうに身輕に、小山の城を脱けて出て、從兄源太夫が濱松の邸に歸つた。家康は約束通り甚五郎を召し出したが、目見えの時一言も甘利の事を言はなんだ。蜂谷の一族は甚五郎の歸參を快くは思はぬが、大殿の思召を彼此云ふことは出來なかつた。

甘利は死んでも小山の城はまだ落ちずにゐた。そのうち世間には種々の事があつた。先に武田信玄が死んでから七年目に、上杉謙信が死んだ。三十六歳で右近衛權少將にせられた家康の一門は益榮えて、嫡子二郎三郎信康が二十一歳になり、二男於義丸(秀康)が五歳になつた時、世に謂ふ築山殿事件が起つて、信康は無慙にも信長の嫌疑のために生害した。後に將軍職を承け繼いだ三男長丸(秀忠)は丁度此年に生れ、四男福松丸(忠吉)は其翌年に生れた。それから中一年置いて、家康が多年目の上の瘤のやうに思つた小山の城が落ちたが、それはもう勝頼の滅びる悲壯劇の序幕であつた。

武田の滅びた天正十年程、徳川家の運命の秤が亂高下をした年はあるまい。明智光秀が不意に起つて信長を討ち取る。羽柴秀吉が毛利家と和睦して弔合戰に取つて返す。旅中の家康は茶屋四郎次郎の金と本多平八郎の鎗との力を藉りて、僅かに免れて岡崎へ歸つた。さて軍勢を催促して鳴海まで出ると、秀吉の使が來て、光秀の死を告げた。

家康が武田の舊臣を身方に招き寄せてゐる最中に、小田原の北條新九郎氏直が甲斐の一揆をかたらつて攻めて來た。家康は古府まで出張つて、八千足らずの勢を以て北條の五萬の兵と對陣した。此時佐橋甚五郎は若武者仲間の水野藤十郎勝成と一しよに、若御子で働いて手を負つた。年の莽に軍功のあつた侍に加增があつて、甚五郎も其數には漏れなんだが、藤十郎と甚五郎との二人には賞美の詞が無かつた。

天正十一年になつて、遠からず小田原へ二女督姫君の輿入があるために、濱松の館の忙がしい中で、大坂に還つた羽柴家へ祝の使が行くことになつた。近習の甚五郎がお居間の次て聞いてゐると、石川與七郎數正が御前に出て、大坂への使を承つてゐる。

「誰か心の利いた若い者を連れてまゐれ」と家康が云ふ。

「さやうなら佐橋ても」と石川が云ふ。

良久しい間家康の聲が聞えない。甚五郎はどうした事かと思つてゐると、やつと家康の聲がする。「あれは手放しては使ひたう無い。此頃身方に附いた甲州方の者に聞けば、甘利はあれを我子のやうに可哀がつてをつたげな。それにむごい奴が寐首を搔きをつた。」

甚五郎は此詞を聞いて、ふんと鼻から息を漏らして輕く頷いた。そしてつと座を起つて退出したが、兼て同居してゐた源太夫の邸へも立ち寄らずに、それ切り行方が知れなくなつた。源太夫が家内の者の話に、甚五郎は不斷小判を入れた胴卷を肌に着けてゐたさうである。

天正十一年に濱松を立ち退いた甚五郎が、果して慶長十二年に朝鮮から喬僉知と名告つて來たか。それともさう見えたのは家康の僻目であつたか。確かな事は誰にも分からなんだ。佐橋家のものは人に問はれても、一向知らぬと言ひ張つた。併し佐橋家で、根が人形のやうに育つた人參の上品を、非常に多く貯へてゐることが後に知れて、あれはどうして手に入れたものかと、訝しがるものがあつた。(終)

(著者云。此話は「續武家閑話」に據つたものである。佐橋家の家譜等には、夙く永祿六年一向宗徒に與して討死した甚五郎の外には同名の者が無い。「甲子夜話」には、慶長十二年の朝鮮の使に交つてゐた德川家の舊臣を、寛又藏だとしてある。林春齋の「韓使來聘記」等には、家康に謁した上々官を金、朴の二人だけにしてある。若し佐橋甚五郎が事に就いて異說を知つてゐる人があるなら、その出典と事蹟の大要とを書いて投寄して貰ひたい。大正二年三月記)



足袋の底

徳田秋聲

一

彦爺さんは、ちよい〳〵入りつけの一品料理の土間に置かれた硬いテーブルの前に座つて、今夜も鹽辛いハムなどを突つきながら、正宗の二合瓶を、をり〳〵爪や骨のごつ〳〵した無恰好な手に取あげては、ちび〳〵飲んでゐた。

蒼白い瓦斯に照された可也手廣な土間には、重い白木綿の幕の垂された入口から流れて來る風が、すうすと這込んで、底冷のする晩であつた。向のテイブルには、餘りこんな處へ入つけたことのないような、溫順しやかな學生が二人、こそ〳〵と話しながら、面皰の吹出た丸い顏をほてらして、サイダを飲んでゐた。隅の方には、袂のついた厚い羅紗の外套を着た、目のぐり〳〵した小肥りの男が、こゝの家には眞實不似合な、澁皮のむけた給仕女のきり〳〵と締のある

顔をじろ〳〵見ながら、生ビールのコップを幾箇となく、植木鉢の蔭に駢べてゐた。

義太夫語りの綾之助の若い時分の狐顔に酷く肖た、その給仕女は、時々手でお尻の方を撫でながら綠色のカアテンのかゝつた薄暗い料理場へ入つて行つて、註文の皿を持つて出て來たり、外套の男の傍へ、生ビールの替りを出したりすると、またばた〳〵とテーブルの間を通つて、酒瓶のづらりと並んだ前におかれた臺の傍の椅子に腰かけて、講談雜誌の口繪などをめくつてゐた。

彥爺さんは、善く高座のすぐ前の方に、火入を抱へながら、胡座をくんで、男髷などに結つた綾之助の綺麗な聲に聽惚れてゐた頃の記憶が、火の消えたやうな胸に憶出せて來た。それはもう二十年前の、爺さんが四十幾許かの頃であつた。

爺さんは、二合瓶を八分目ばかり飲むと、體のぬく〳〵溫まつて來るのが感ぜられた。赤い豚の肉も、强い胃の腑に直に消化されて行きさうであつた。

三十いくらかの勘定を拂つて、女に少許り祝儀をくれると、やがて日和下駄の音をたてながら、そこを出た。いつか周旋屋の手から、若い小綺麗な娘を一人世話してもらつて、手切をうんと取られて、婆さんに何時迄も小言を言はれたことなどが思出された。可愛い顏をしたその小娘の、男にかけては案外な擦ッからしてあるのに厭氣がさして來た。

處女だといふその娘を手に入れるまでには、爺さんはどのくらゐ口入屋のおこと婆さんに、勿體をつけられたか知れなかつた。

「おぢいさん、これならばと云ふ玉が見つかりましたよ。」

おこと婆さんは、途中で逢つたとき、往來なかでほく〳〵しながら、爺さんの肩を叩いた。それ迄に、爺さんは幾度となく、おこと婆さんに催促した。

金の入齒などした、越後出のその婆さんは、其度に當惑さうな顏に愛相笑を漂えた。

「私もね、工合のよささうなのをと、始終心かけてるんですがね、お爺さんの前だけれど、お互に年を取つちや駄目ですよ。」

娘は母親と一緒に、金助町の些とした家に住まつてゐた。口入屋で見合をしたときには、銘仙の小袖に、紫色の羽二重の羽織を着込んで、節のつまつた丸まつちい指に、ルビー入の指環などを篏めて、括れた頸や額に、白粉がまだらに塗られてあつた。桃割に結つた髮にも黑い色澤が乏しく、肉も硬さうであつた。

それから爺さんは、長い路次口の溝板をわたつて、その家へ時々通ふことになつた。

冬の暖かい日などに、爺さんは離房で婆さんと二人で晝飯をすましてから、綺麗に拭込まれた緣側へ蒲團を持出して、日向ぼつこをしながら、新聞などを見てゐると、年老いた目蓋が自然に懈い重さを感じて、心臟まで沁込むやうな日光の刺戟に、體中の血が微かに流動しはじめるのを覺えた。爺さんの心には長いあひだの生涯の記憶の斷片が、一纏めになつて思出されるのであつたが、觸れて來た女のことが、一層考へるられるやうになつて來た。繼母に反感を持つて、產故鄉の越中から東京へ飛出して來た小供

のをりの意地張な自分、日本橋の或木綿問屋に傭はれて、車を引いたり、それから少許の資本ができて、北海道あたりへ木綿もの丶行商に出かけたり、靈岸島で幾艘かの船持となつて間もなく、女に引かゝつて失敗してしまつてからも、また取りつくことの出來た根強い自分、それらの記憶はいつからか、頭腦の底に消え込んでしまひさうになつた。そして船も家も注込んでしまつた越前堀の或居酒屋の若後家、品川のある莫連女の事などが、時々胸に滲みひろがつて來た。そのをりの場合々々の女の動作、自分の心持などが、次第に頭腦に明白して來た。品川の女の淫蕩な血の荒みきつた蒼白い肉、切長な猥らな目、體の逞ましい勞働者あがりの居酒屋の後家の赭濁のした劍相な目、わんにりした肉厚の唇などが、亡靈のやうに執念づよく心に絡はりついてゐた。

爺さんは頭腦が、くら／＼しさうになつた。日光がきら／＼後の土藏の白壁に光つてゐた。

爺さんは、薄暗い部屋のなかへ引込むと、急に淋しげに四下を眺まはした。

婆さんは日當のいゝ次の室で、先刻爲かけておいた薄團の綿を入れてゐた。四五年前にもらつた嫁が、丸髷頭髪に手拭をかけて、それの手傳をしてゐた。子供を産んでから五ヶ月になる嫁の顏や體つきには、娘々したあの幼々しさが滅切ぬけて來た。白い頰や頸のあたりが、どこか女房らしく水氣をもつて來たのが、爺さんの目にも仇めいて見えた。

やがて爺さんは、店を讓つてから自分の小使取にしてゐる、貸金の催促に出て行つた。脹まつたその懷には、書類や眼鏡などの入つた大きな紙入があつた。

午後の二時頃の、薄い日影をあびながら、爺さんは、小金を貸しつけてある、資本の乏しい小商人の店頭などを一二軒見舞ふと、身裝も振もかまはぬその姿が、いつもの路次口へ入つて行つた。

書生とも職人ともつかぬ顔の蒼白い若い男が、母親や娘と一緒に、上口の長火鉢の側で、皮づゝみの蒸菓子などを摘みながら、茶を飲んでゐるのが目についた。五十ばかりの母親は、粗末な身裝をして、それでも結立ての頭髪だけを、てら〳〵させて、長煙管で莨を喫してゐた。その言葉には、どこか北の方の訛があつた。爺さんは直に暗い段梯子から二階へ送られた。

明のつく頃まで、二階も階下も、ひッそりして居た。

爺さんの空咳の聲が、ふと戸口に聞えると、間もなくその姿が賑やかな通りに見られた。小煩く物强請などをする娘の、天井などを見つめてぼつかりしてゐる羞恥心のない目が、爺さんの目にまだ殘つてゐた。

爺さんは遠い耳を傾げて、娘の聲を聽取らうとした。そして其度に合點々々をしてみせたが、干からびたような心は、狡猾く堅く鎖されてゐたのであつた。

二

一品料理を出ると、爺さんの曇んだ目の前に、燈籠の明い二層樓三層樓の白堊の建物が、高いところに、全然芝居の書割か何ぞのように浮いて見えだした。どの建物も〳〵、しつとりした夜靄の中にひつそり靜つてゐた。彦爺さんは、溝板の路次の奥の家から足を絶つてから、時々こゝを見舞ふようにな

つた。

日の暮れて間もない土堤のうへには、寒い風が吹いて、人影が疎であつたが、片側の肉屋や飯屋などから洩れる灯の光には、春の霽らしい軟かい色が微見えてゐた。

鈍い響を立てゝ偶に石疊を通つて行く俥や人の跫音には昔し見たような心を浮立たせる慌忙しさがなかつたが、兩端に剝落ちた榮華の夢を語つてゐるような鐵の門柱には、忘れかたい懷しみがあつた。引手茶屋の前道は、隙間だらけの建物のなかへても入つたように寂しかつた。

「あれは此先き、幾度この門をくゞる。」

彦爺さんは、此門を出て歸るとき、善くそんな恐怖が頭に閃めいた。家で案じてゐる婆さんの顏も目に浮んで來た。湯屋などで出逢ふ近所の老人連の身のうへも思出された。そのなかには、湯槽の縁に獅咬みついて、若い聲で端唄などを歌ふより他に、何の樂みもない八百屋の爺さんもあつた。丸い脊をした其爺さんは、流場に胡座をかいて、汚い湯で顏をべろ／＼やりながら、逸んだ調子で、下座の囃の講釋などを、熱心に述立てた。古い役者の噂などを、夢中でしやべり立てた。そんな道樂もない彦爺さんは、悄れた顏をして、木彫の面のような其顏を眺めるより外なかつた。

茶に浮かされた爺いさんは、夜なかに時々目が冴出した。有明の灯影が、ぼんやり古ぼけた天井や襖に映つてゐた。一日孫などにかまけて疲れた婆さんは、少し離れて、寢息も立てずに、靜かな眠に沈んでゐた。

彦爺さんは、莨盆を引寄せて、莨を喫しながら、ましく／＼してゐた。寢苦しい夜を獨りで悶えてゐる自分が、腹立しいようであつた。

婆さんの寢ほけた目が、魚の目のように、どんよりした目を光らせながら、自分を覗込んでゐる可恐しい爺さんの額に、ふと脅やかされた。少いをり夜道をして、田舍を出て來る途中の山のなかて、賊に追立てられて、深い崖へ陷ちたとき、木の枝に破られた目の縁の傷痕の引釣が、毛の薄いその顏を、一層凄く見せてゐた。赭い頭臚の地の白雲も、汚らしかつた。

「體に障ると惡いよお爺さん。早くお寢みなさいよ。」

長いあひだ情婦の尻を拭はされなどして來た婆さんは、窘めるように言つて、明を細めた。

「寢られないときは、お念佛が一番いゝんですよ。」

「むゝ。」耳の遠い爺さんは、のそりした體をまた夜具のなかへ潛込ませて、默つてしまつた。記臆から消えかゝつてゐる過去の婆さんの面影と、目の前に寢てゐる現在の婆さんの後姿とが、入まざりになつて頭に浮出した。嫉妬喧嘩をして、婆さんが荷物を提げて田舍の家へ歸つて行つたときの事や、初めに產れた子供を亡くしてから、二人一緒に、京都へお詣りをした時のしをらしい旅の樂しい憶出などが、爺さんの心を若いをりの自分に返らせた。

「この婆は、若い時分から愿うだつた。」

長いあひだ婆さんから、多く酬ひられてゐなかつたようなのが、一層安氣らしい婆さんの寢姿に、心

を焦だゝせた。

「どこへ行くんだね、お爺さん。」

また病氣が起つたと云ふように、婆さんは胡散くさい顔をして出て行く、爺さんに、時とすると聲かけた。

「好い處へ行つてくるよ。」

爺さんは、むくつけな口の利き方をして、出て行つた。

彦爺さんが、今の女の許へ通ひはじめたのは、暫く下痢て弱つてゐた體の健康が、漸と恢復しかけて來た、去年の秋の末頃であつた。爺さんの體には、前よりも一層色澤のいゝ肉をもつて來た。

手堅い店で、可也近所で名前の賣れてゐる呉服物の手狹な店の横の方にある勝手口の格子戸を開けて、爺さんは暫くぶりで表の空氣に當つて見た。店は以前木綿物から仕揚げて、段々絹物を揃へるやうになつた。

彦爺さんは物珍しげに、其處らをぶら／＼歩いてゐた。町にはまだ赤い夕陽が流れてゐた。水を吸込んだ往來には、もう今年の中折などを冠つた間服に赭靴の男が通つたり、結立の髮に流行の手絡をかけた素足に雪沓ばきの女が、裾をひら／＼させながら、蓮葉に電車の石疊を渉つて行つたりした。土の香が涼しい風に動いた。

健やかな飢を感ずる人のような、彦爺さんの目に、町のさまが新しく映つた。

「奥へ行て、婆さんに然う云つて、私の財布を持つて來てくれ。ちよッと其處まで夕御飯を食べに行くて。」

爺さんは、得意廻りをして來て、車から品物を出してゐる店の小僧に吩附けた。

婆さんが直に勝手口の方へ顏を出した。そして入口へお爺さんを呼込んだ。

「病氣前の體と異ひますよお爺さん。」

婆さんは大きい聲で二度ばかり繰返した。

爺さんは耳を傾げてゐた。

「解つたよ。大丈夫だよ。」

「それぢや羽織でも着かへたらいゝぢやないかい。」

「いゝてことよ。」

爺さんは財布のなかを些と調べると、こちゝゝ歩いて行つた。

廣小路の食物屋で、長いあひだ考へてゐた食物を取つたり、酒を通したりした爺さんは、直に頭腦まで醉がまはつて來た。

廣間には、色々の人が賑かな話聲を交へつゝ、飮食をしてゐた。爺さんは心持よげにそれを眺めながら、獨でちびくやつてゐたが、時々淋しい影が心に落ちて來た。

「五年でも十年でも生延びたのを、お爺さん有難いと思はなくちやならないよ。」

婆さんが然う言つて聴かしたことが憶出された。

「また甘味いものが食べられたり、面白いものが見られたりするなんて、お爺さんは餘程僥倖だよ。」

婆さんは然うも言つたのであつた。

「何が有難え。」

爺さんは猪口を下におきながら、獨て呟いた。

「己の體て、己が丈夫になるのに、誰のお陰が入るもんかい。」

病氣をする度に折れて來た爺さんの心には、子供の時分からの意地と我が、まだ根を張つてゐた。

「己が若い時分から拵へて來た身上を、皆て寄つて集つて捲上げておきやがつて、當然のような顔をしてやがる。倅の奴に何の伎倆がある。」

爺さんは、若いをりに能く妻に打突つたような調子で、誰かに打突つて行きたいような氣がした。いつの間にか、墓場まて押つけられてゐるのが、腹立しいようてあつた。熱の高いときに、傍へ來て顔を眺めてゐた子息や嫁の目色の意味も見えすくように考出された。爺さんは久しい前から、嫁などを貰つてからの我子に、親しみを感ずるようなこともなくなつてゐた。

それに子息の彦一は、その頃から商賣に可恐しい身を入れだして來た。そして爺さんの酒を飲んだり、女買をしたりするのを、陰て嘲つてゐた。子息は近所ての讃ものてあつた。

彦一は時々、彦爺さんに素直な調子て意見をした。

「……何も阿父さんに拵へて頂いた財産を、惜むつてわけぢやありませんよ。」
爺さんは皮肉らしい顔をして、默つてゐた。
「それよりは老人は老人らしく、寄席か芝居にしたら如何です。」
「おれは奴等の言つたり爲たりして見せることよりか、どのくらゐ苦勞してるか知れやしねえ。」
爺さんは肚のなかで、然う思つたのであつた。
醉ふほど醉ふと、爺さんの顏は、淵の底か何ぞを潜つて行くやうに、シンとして來た。そして誰れにも愛されず、誰をも愛することの出來なかつた、自分のいぢらしい姿が淋しく思へた。
そこへ見知の女が、ツケを持つて來た。
勘定をすまして外へ出ると、町はもう夜の色に裹まれてゐた。彦爺さんは、やがて隙のある車臺を覘つて、それに乘ると眞中の方へ腰かけた。
その晩爺さんは早く歸つた。
女はどんな客かを見定めるやうな目容をして、顏を紙白粉で拭き〳〵、物馴れた樣子で入つて來た。
そして桔梗色の襟のかゝつた袿の裾を、無造作に捌いて些と坐ると、
「お前さんはどッか見たやうなお爺さんだよ」
と言ひさうな顏をして、押出すやうな笑方をした。
女は直に廊下へ出て行つた。そして男衆を呼んで、何やらぐつ〳〵話してゐた。暫く揉めてゐたらし

かつたが、女は間もなく部屋の方へ歸つて行つた。

「では貴方さん此方へ。」

男衆は入口から、氣のない聲をかけた。

部屋には綺麗な夜具が、衣桁の前に高く重ねられ、總桐の簞笥が二棹も駢んで、上に人形や、招猫などがごて〳〵飾られてあつた。馴染をつけた客にでもくれるらしい手拭も、どつさり積んであつた。

爛みきつた顔をした五十二三の婆さんが、次の室の長火鉢の向に坐つて、白鳥から酒を銚子へ移してゐた。

「おや入らつしやい。」

婆さんは憐いやうな聲をかけた。

女は桂をぬぐと、御召の縞の羽織をはそつて、そこへ來て坐つた。

「家の花魁は、もう疾くに年があけてゐるんですけれどね、自前でからうやつて遣つてるんですよ。」

婆さんは餉臺などを持出しながら言つた。

「それに花魁は、今日初めて出たんですよ。一週間ばかり病院へ引取られてゐたのさ。それほどの事でもなかつたんだけれどもね。あゝ、丁度いゝところさ。」

「おれも今日は床揚げの祝ひよ。」爺さんは、ニヤリと笑つた。

「おや。何の病氣さ。」婆さんは答へた。

「それても、床揚に遊びに來るようなら確かだァね。」

立膝をして坐つてゐる女の姿は、先刻よりも一層美しく見られた。低い島田に結つた頸のあたりが細そりして、横顔が刻んだように調つてゐた。そして嫣然ともしないで、時々吭て笑つてゐた。

「小式部さんの花魁引つけ――。」

引附から尻揚りに呼はる新造の聲が、色々の聲音や物音のうちに高く聞取れた。客がどや／＼上つて來るらしかつた。女はいそ／＼と、桂に着かへると、些と鏡の前に跪坐んて、顔を直して出て行つた。

二人限りになると女は、彦爺さんの體を揉つたりなどした。

三

櫻の散る頃までに、彦爺さんは三四回もそこへ通つて行つた。

爺さんは薄暗い廻し部屋のなかて、ほと／＼する湯婆に温められながら、幾ど徹宵獨りで寢てゐるような事が、希らしくなかつた。爺さんは、奈何かすると河岸をかへて、新しい女を捜しなどしたが、矢張り元の女に還つて來ずにはゐられなかつた。

「あの爺イ、世話がやけて爲樣がないんだよ。」

その女達の私語く聲が、ぷり／＼して出て行く爺さんの耳にも感ぜられた。

「手前達とても、二度と再び來るもんけい。すべため。」

爺さんは肚のなかて呟いた。

うづくまつてゐる爺さんの姿が、また刳木の大きな火鉢などの据つた、元の家の引附のなかに見られた。

いつも腕組をして、むつちりしてゐる口元の苦味走つた男衆が、にやゝゝしながら新造の方へ知らしに行つた。蒼味をもつた顔の筋肉などに、動きの見えない婆さんが、やがて部屋から座蒲團や莨盆などを持つて來て、爺さんを別の部屋へ連れて行つた。

爺さんは槻の飼臺の前に丸くなつて、男衆が運んで來た誂へものを眺めながら、ましゝゝしてゐた。廣い建物のなかは、いつになく三味線の音一つ聞えなかつた。時々庭向の明い部屋々々から、女の燥いた笑聲や、男の話聲が洩聞えた。

「お瀧どん――。」

などゝ呼ぶ毛族の皮か何ぞに擦れて出るやうな、しや嗄れた鋭い聲が、つい近所の遣手部屋から傳つた。その聲は、爺さんの耳にも、くすがるやうに響いた。

ばたゝゝと草履の音が近づいて、障子に袖ずれの音が、爺さんの耳を鋭く引立せた。顔を出したのは婆さんてあつた。

「ほゝ」と婆さんは笑つた。

「お爺さん鼠に引かれちやいけないよ。」

爺さんは首を傾げた。

「また來たの。」
大分たつてから女はさう言ひながら、入つて來た。襟のかゝつた銘仙の縞の着物に、古いお召の羽織を着て、華車な腰に幅の狭い博多の帯をぐる〳〵捲きつけてゐた。
深みのある女の目には落着がなかつた。そして捲莨を喫しながら、
「どこを浮氣して歩いてゐたのさ。」
爺さんは獨て酒を注いで飲んだ。
「やッぱりお前んとこの酒が、一等うめえ。」
「ひ」と、女は笑つた。
「酒よりか花魁が好いのさ。」
「違ひねえ。そのつもりで、一つ酌をしてくれ。」
女は笑ひながら、お酌をした。
「老人の癖に贅澤おいひてないよ。」
「お前は感心だよ。私がもう二十年も早く生れてゐれァ放抛つちやおかねえんだが。」
「へへ」と、女はだらけた笑方をした。「然うひつてくれるのはお爺さんばかりだよ。」
爺さんは、能くも聽取れないような耳を傾げて、獨て頷きながら、にや〳〵してゐた。
「これでもな、私も一度は若い時があつたよ。お前なんざ其時分はまだ、この娑婆へも出てゐやしなか

つた。」
「若い時分のことを思出すと、どんな氣がするの。」
「どんな氣もしねえ。先づ夢のようなもんだ。それても痛い苦みをした時と、面白い目をした時の事は、ちやんと覺えてゐる。」
「お爺さんにも面白いことがあつたの。」
「まづ、矢張り女だな。其證據には、私は女にかゝつて二度も身上を潰した。」
「よかつたね。」
彥爺さんは、品川の女や居酒屋の後家時代の話がして聞せたかつた。新しい聽手さへあれば、爺さんは何時ても興奮した心持て、それが話せるのてあつた。
「おいらん――。」
爺さんを大嫌ひな、若い下新が、障子の外から聲かけた。
「あゝ。」
女は長いあひだの勤て、彈力と撓やかさとの亡くなつたような體を起して、だるい草履の音を立てながら、向側の廊下へ渉つて行つた。
「さ、お爺さん、何時までも飮んてないて、彼方へ行つてお寢みよ。餘り醉ばらつて世話をやかせると、花魁に厭がられるよ。」

下新は部屋へ入りもしないで、聲かけた。

懸離れた、靜かな部屋のなかに、彦爺さんは獨て寢てゐた。塗骨の障子に、薄暗い廊下の明がさして、前の小庭にぴちや〳〵水の流れる音がした。

爺さんはうと〳〵眠入つたかとおもふと、直に目がさめた。近所のどの部屋にも、人氣が絶えてゐた。遠い奥二階の廣間の方に、まだ起きてゐる客があると見えて、女の謳ふ聲が、夢のように聞えて來た。爺さんは目をぱち〳〵させながら、哀切なその唄の調子に耳を澄した。夜更の三味線の音も、不思議に硬い胸に泌みるようであつた。

唄が過むと、ぼそ〳〵話聲が聞えだした。「あはゝゝゝ」と、遊びに疲れた女の笑聲も、爺さんの耳に傳つた。がらんとした樓のうちは、闃寂と靜まりかへつてゐた。

「そんな場所て、若しか腦溢血ても起して仆れたら、お爺さん奈何しますよ。」

醉のさめた彦爺さんの頭腦に、ふと然云つた婆さんの言葉が不安の影を落した。誰にも氣づかれずに、獨りこゝに殘されてゐる寂さと安易さとが、澄みきつた心の底に擴がつた。ぱちゝゝ天井を瞶めてゐる、彦爺さんの目に、三十年前に、田舎て亡なつた父親や、子供の折に訣れた産みの母親の顏が閃めいたり、幼い時分の自分の姿が見えたりした。

しら〳〵と明けかゝつて來た、薄暗い部屋のなかに、目のさめた爺さんは、女と話しながら、まだ床を離れずにゐた。女は枕頭に莨をふかしながら、しよんぼりと坐つてゐた。目ざめた樓内には、草履の

音や、障子を開たてする音が其處此處に聞えだした。

「お目ざめてございい。」

廊下をふれてあるく遣手の聲も聞えた。

「あの婆さん、四十年もあゝやつて勤めてゐるのよ。」

女は話しかけた。

「それで旦那が店をわけてやるからと言ふんですけれど、いくら儲かつても、自分ぢやこの商賣をしようつて氣にはなれないんですつてさ。」

女は乾いた口に、莨をふかしながら、僻さうな聲を立てゝ笑つた。そして新造に、着物などの代の立替の借金の二百圓もあることや、庫敷をおいて、質屋にあづけてある、四季一ト通りの着物の揃つてゐることなど、自分の身のうへを話した。

「それぢやお前も、もう大抵行くところは決つてら。だがお前は肝心に締つてら。世帶氣があらなあ。」

女は「へ、へ」と笑つた。

「それでも好いた男はあるわな。」

「けど矢張義理てね。長いあひだ世話になつたお爺さんがあるの。根岸の隱居なの。私どうしようかと思つて。」

「それぢや慾の方だい。」

女はまた憎い笑聲を立てた。
「もう一人、濱町の方に、これはそんなに年とつた人ぢやないの。けど本妻に三人、子があるから、奈何したつて肩身が狹いでせう。子供の御機嫌まで取らなけァならないから、隨分つまらないわね。」
「もつと若いのがあらう。」
「若いのは駄目。」
女はうつとりしたやうな顏をしてゐた。
「わたいお前さんとこへ行かうかね。」女はゑへら〳〵と笑つた。
「お爺さんは七十二です。でもお神さんがゐちや矢張駄目ね。」
皮肉らしい目をぱち〳〵させて、爺さんは默つてゐた。爺さんは、しんみりしたやうな心持になつた。
「お前の出る時ア、身祝ひに私も何かおごつてやらうぜ。」
「何をくれるのさ。」
誰も厭がることでも、この女だけは別にそんな風も見せなかつた。
綺麗に掃除をした、本部屋の方で、爺さんは長火鉢に倚かゝつて、新造相手にちび〳〵朝酒を飲んだ。下新が側に拭掃除をしてゐた。朝日がきら〳〵と、障子に當つて、客を送出したあとの部屋々々から、ハタキの音やバケツの音が聞えてゐた。こゝから成田へ立つと云ふ、株屋連の一團が、ざわめく花魁や新造に送られて、どや〳〵と陽氣に立つて行つたあとは、樓は晝の寂しさに返つた。

女は美しい血の氣の立つた顏をして、そこへ來て坐つた。目や肉に深い疲勞と興奮とが見えた。
「金ちやんあれから奈何したの花魁。」
長火鉢に拭巾をかけたゐた下新が、猫板のうへに置かれた時計を、手に取上げながら言つた。
「憎らしいからさんざ窘めて、それを取上げてやつたのさ。」女は箪笥の前に立つてゐた。そして玉帳でもつけるらしく、手箪笥から出した小形の帳面に、鉛筆をなめては、何やら書きつけてゐた。
誰やら藝者と熱くなつてゐると云ふ、その男の名を、爺さんは時々耳に挿んだ。宵からの落着のなかつた女の樣子が、彥爺さんの心に蘇つて來た。髮などのほつれて、甘い疲れに醉つてゐるやうな女の横顏が、一層美しく見えた。二十四といつてゐる女の樣子には、二十六七の女盛りの肉の爛熟があつた。
仲の町では、もう夜櫻の植込みに取かゝつてゐた。土がそこにも此處にも掘返されて、繩で小枝を結へつけられた櫻が、幾十本となく持込まれた。
のどかな寂しい日影が、町を照してゐた。彥爺さんの、日和下駄ばきの姿が、そこを通つて行つた。

四

灯のついて間もない廓の通りを、彥爺さんは、懷で財布の錢を勘定をしながら、うそ〳〵と彷徨ひあるいてゐた。
薄暗い樓々には、緣起を取る妓夫の卑しい鼠啼の聲が聞えたり、板敷に下足札の束を振叩く音が、そつちからも此方からも聞えたりした。ちらほら女の、店へ出てゐる家もあつた。女は鏡を取出して、顏

を直したり、襟を揃へたりしてゐた。役者の出るのを待受けてゐる、幕のあかない間の芝居の道具立のように、火鉢ばかり光つてゐる廣い店もあつた。

物陰から走り出た、辻占賣の子供が、爺さんに絡はりついた。

「辻占買つてくんな。」

「人に縋つた覺えのない己を見ろ」と云ふように、彦爺さんは、狡い子供を振向きもしなかつた。そこ此處の法師や稻荷などに、金を惜しまない婆さんの、やくざな慈悲心が可笑しかつた。

二三日前に、天神の界隈で出逢つた、いつかの小ましやくれた小娘のことが、頭に浮んだ。その娘は、その時分から見ると、顔が大分展がつて來た。小じんまりした體にも媚態がついて來た。

娘は相變らず、手許が苦しいらしく、あの時分と同じような、粗末なけばゝゝした身裝をしてゐた。そして爺さんに出逢つても、顔を赧めることすらしずに、まし〳〵此方に眺めて行過ぎた。

いつもの入口を、彦爺さんは匆と入つて行つた。上り口の大きな長方形の下駄箱には、流連の客のらしい下駄が、三四足も並んでゐた。

部屋では、女が鏡臺に向つて、お化粧をしてゐた。毛筋立を持つて、合鏡をしてゐる後姿が、爺さんの目にも、みづ〳〵として見えた。

奥の箪笥の小陰で、幾箇もの枕紙を取替へてゐた下新は、「禿がまた來たよ」といひさうな目色をして、爺さんを見迎へた。

婆さんは隅の方に、小搔卷を被いて寢んでゐた。
張店時の樓のうちが、ざわめき立つてゐた。
女と下新は、樓の子供の、五月の內裝の噂をしてゐた。
「お爺さん見てくると可いよ、それは大したものさ。」
下新は言かけた。
「御內所のお座敷に、一杯あるよ。お爺さんに肖た鐘馗さまもゐるわ眞實だよ。」
「餘計なお世話だい。」
爺さんは呟いた。
「お爺さんにも、孫があるつて言つたぢやないの。」
「餓鬼は、己は大嫌ひだい。」
「お爺さんは、この頃吝になつたから、花魁が厭だとさ。」
爺さんは聞えなかつたと見えて、けろりとしてゐた。
「婆さんは奈何したい。」
「晝間寢られなかつたから、少し寢んでゐるのさ。」
「お爺さん、今夜は別莊の方だよ。」
女は鏡に、蔦模樣のある手拭をかけながら、そこを離れて來た。そして奥へ入つて、着替に取かゝつ

た。
「あゝ然うだよ。」
下新も女と顔を見合せながら、言つた。
「いの一番に來てゐて、何て別莊の方だい。𢌞し部屋は陰氣だから、己ら嫌ひだてこと。」
「でも、然は行かないのよ。今晩はもうついてゐるんですよ。」
「ついてる。」
「あ、さうさ。だから駄目よお爺さん。」
下新は、小枕の包紙をしまつてしまふと、氣忙しさうに、入口の神棚の前へ行つた。そしてカチ〻〻と火を燧りながら、燈明の一つ〻〻に灯を點した。そこらが急に明くなつた。
「その代り、成るたけ好ささうなとこへ入れてあげるわ。」
「さうかい。」
二人の押問答を聞きながら、女は奥の方から「えへ〻〻」と笑ひだした。
「ほんとに剛情つたらありやしないよ、この凸凹の禿頭は。」
下新は低聲で言つた。「長火鉢に咬りついてゝ離れやしないんだよ花魁。聟の剛情つて、能く言つたものさ。」
「なにが……。」

「聞えなくて仕合せ。」

如何でも好ささうに、女はまた奥の方で笑出した。

「大笑ひさしてるよ、お花どんは。」

支度が出來ると、女は長火鉢の側へ來て、些と跪坐んだ。そして煙管を取りあげて、一服ふかした。

「こゝの家は、仕舞のついてる女が、張店をするて規則かい。」

「それは勝手ぢやありませんか。」

下新が答へた。

「てゝ花魁は滅多に出やしない方なのさ。」

重ね草履の音が、上にも下にもバタ〳〵と聞えだした。蘇つたような樓のうちが、俄にざわめき出した。

彦爺さんは、然した空氣のなかに涵されながら、女達の浮いた笑聲や話聲を、耳に聽占めてゐた。

「阿父さん、些と行つてまゐります。」

女は笑ひながら氣輕に言つて、火鉢の側を離れた。

「私の歸るまで、喧嘩しないで遊んでゝ頂戴よ。」

さわ〳〵するような氣分で、出て行く女の背後から、下新が景氣よく切火をしかけた。女主のない家のように、部屋が急に寂しくなつた。

「まアお出花でもいれませうね。」

下新は、後片着をしてから、火鉢へ寄つて來た。そして茶簞笥から、ガラスの菓子器に入つた、甘納豆を取出して、猫板のうへに置いた。

「お茶よりか、酒の方にしてもらはう。」

「矢張酒がいるの。長くなるからお休しなさいよ。そして早く寢て、早くお歸んなさいよ。」

やがて爺さんは、獨てちびぐ飮んでゐた。そこへ新造が目をさまして、寄つて來た。

「おや、暫振だね。今日も花魁とさういつてゐたんだよ。お爺さん些と遣ひすぎて、伜に勘當されたんだらうつて。でも老人の勘當なんざ、餘りいゝもんぢやありませんからね。」

婆さんは、媚然ともしないで話しかけた。

「景氣はどうだな。」

半分聞はぐした爺さんは、猪口を干して婆さんに差した。

「餘りどつとした方ぢやありませんよ。以前と違つて、此節は藝者が安く轉ぶから、堪つたもんぢありやしないやね。」

婆さんは、昔し少い時分に見た、町藝者や里藝者のさまを話しだした。

「でも、自家の花魁ばかりは別さ。お蔭でお馴染ばかりだから。いゝ花魁でさ。素直て親切て……それに不思議と體に毒氣がありませんからね。」

時が段々流れて行つた。

「――どん、引つけイ。」

然う言つて呼ぶ聲が、引断なしに聞えた。客の上つて來る氣勢が、そこにも此處にもした。

さわ〳〵した顔をして、女が部屋へ歸つて來た。

「珍らしいお客が來たよ、お國どん。」

女は然う言つて、鏡の前へ來て顔を直しはじめた。「山田さがん來てよ。」

「あゝ。」

茛盆と座布團とを持出して行く下新の後に續いて、女も氣忙しさうに出て行つた。どの男も女には可懐かつた。

やがて爺さんは、奥の方に延べられた蒲團のなかに、按摩に揉ませた懈い手足を延して、うと〳〵してゐた。ぢやらん〳〵といふ金棒の音が聞えるかと思ふと、遠くから潮鳴のように寄せて來る、往來の人の足音が、微かに耳に傳つた。爺さんは、夢心地に、それを聞いてゐた。

大分たつてから、屏風の外て、ひそ〳〵した、女とおばさんとの話聲が洩れた。目ざめた彦爺さんの神經が、鋭く働きかけて來た。女は端鼻をうたひながら、枕頭へ姿を現した。そして袿を脱棄てると、務と傍へ寄つて來た。

「ちよいとお爺さん、お前さんお金が少しないこと、十圓ばかしていゝのよ。」

女は腹這になつて、白い腕ヶ伸べて、煙草を吹しながら言ひかけた。

「金かい。金は今夜はねえよ。」

女は暫く默つてゐた。

女は煙管を棄てると、頭を枕に持せて、まじ〳〵天井を眺めてゐた。そして何處かで彈いてゐる二上りの、唄の文句を微聲につけてゐた。

「ほんとに無いのお爺さん。」

「あるかないか財布を見ねえ。」

女は爺さんが何時もするように爲てあつた財布を、蒲團の下から掴出した。そして中へ手を突込て、札やバラ錢を取出した。ちやら〳〵と、銀貨や銅貨が、疊の上へ零れた。

「莫迦にしてゐないね。」

女は舌うちをしながら、金を仕舞込んで、元とほりに財布を蒲團の下へ押込んだ。そして、暫くじッとしてゐたが、相手が寢入つたと思つたらしい風をしながら、直にすうと床を脱出して行つた。

火鉢の側では新造同志三四人で、ひそ〳〵と花が初まつてゐた。どうかすると、ぴちりと云ふ札の音が、耳についた。

夜が段々更けて來た。

ふと床から起出して、歸支度をしてゐる爺さんの影が、衆の目に映つた。

「おや、此人は奈何したんだろ。」新造は呟いた。

「お爺さん、今から歸るの。」

爺さんは口のうちにぶつ〳〵云ひながら、帶をしめて蒲團の上に座つた。

「厄介な爺さんだね。ぢや花魁を呼んでおいで。」

下新がそゝくさと草履を突かけて出て行つた。皆はまた札の方へ氣を取られた。

「おや〳〵又負けの網かい。」などゝ、おばさん達が洒落てゐた。

女が來た時分に、爺さんは勘定をすまして、貰をふかしてゐた。女は懐手のまゝ、ぬつと其傍に立つて見てゐた。

彥爺さんは、床のそばに揃へてあつた白足袋を取上げると、片一方の底から、何やら捜出した。

「足袋のなかなぞへ何を入れてゐるのさ。」

「家が嚴しいから、いつでも悉してゐおくだい。」

彥爺さんは十圓札を二枚、目の前で擴げて見せると、それを財布の底へ仕舞込んだ。

「隨分だよ。」女は呟いた。

「お札もつてゝ出さないんだよ、お豐どん。」

段梯子を二三段降りかけた爺さんは、ふと後を振むいて、送つて出た女と下新の目の先て、財布を振つて見せた。手や顔の筋肉が、顫えてゐた。

（をわり）

島崎藤村氏の洋行と本誌

島崎藤村氏は三月廿五日東京を出發し、四月上旬神戸より佛國汽船に乘じて、巴里に向はんとす。彼地滯在の期間は凡そ滿三年の豫定なりといふ。何事にかけても研究と努力とを忘れざる氏は、巴里の下宿樓上にあるも、新片町の書齋にあると同じく、讀書と觀察と執筆とに專念すべしといへり。而して氏は外遊中、約貳百枚の長篇小說二篇を脫稿し、之を本誌に掲載すべきことを特約せられたり。氏の外遊の祝福多からんことを祈ると共に、此旨讀者諸君に一言し置く。

(編者しるす)

次號の小說欄には、

毒盃……谷崎潤一郎

國の男……水野仙子

題未定……小川未明

を掲載すべし。

關東大賣捌所

東京神田表神保町　東京堂
仝　神田裏神保町　上田屋
仝　京橋尾張町　東海堂
仝　京橋元數寄屋町　北隆館
仝　京橋西紺屋町　良明堂
仝　日本橋本石町　至誠堂

關西大賣捌所

大阪東梅田町　盛文館
仝　京町堀　太華堂
京都佛光寺　東枝書肆

○定價　金貳拾五錢郵税金貳錢（海外郵税拾貳錢但清國を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓五拾錢	金貳圓拾錢
十二冊	金參圓	金四圓貳拾錢
以上郵税共		

▲但　新年號春秋二期附錄號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十五册分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金參圓七拾五錢外國は金五圓貳拾五錢拂込まるべし

廣告一手取扱　神田三河町一丁目　博報堂

本號定價金五拾錢

郵税金四錢

送金注意

一郵便爲替　にて御送金の場合は本郷西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東片町局と指定あれば途中盜取の虞なし

一振替貯金　口座は東京三十四番なり、これにより御送金の方は外に登記料一錢を加えらるべし、然らざれば送金額より差引くにより殘金は端錢となりて却て面倒となるべし

一郵券代用　必ず一割增の事

一集金郵便　の便法を利用せらるゝ方は、座ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加えたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし弊社は直ちに其取扱をなすべし

一金一圓迄　金五錢
一金三圓迄　金六錢
一金五圓迄　金七錢
（集金委託料及送達料）

一受領證請求　は必ず返信料金を要す

大正二年三月廿八日印刷納本
大正二年四月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　藤本兼吉

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所　反省社
振替口座東京三十四番
電話下谷九一九
電信略號ハンセイ

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場

CHUO KORON (The Central Review.)
By The Hansei-sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 5.25; Single copy 37 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angels, Cal. U.S.A. as second-class mail matter

明治三十年一月二十九日第三種郵便物認可
大正二年三月廿八日印刷納本
中央公論春期大附錄號（第二十八年第五號）